

京都府遺跡調査報告書

第 32 冊

木津城山遺跡

2003

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



木津城山遺跡全景(木津城山遺跡から京都盆地をのぞむ)



(1)第1次調査地全景(東から)



(2)第4次調査地全景(北東から)



(1) B地区平坦面 S X 238~240全景(南から)



(2) 8 トレンチ片山 4 号墳全景(南東から)



(1) 9 トレンチ堅穴式住居跡 S B 32 出土素文鏡

(2) 2 トレンチ方形台状墓 2 埋葬施設 S X 09 出土破鏡



(3) 16 トレンチ土器供献遺構 S X 05 出土弥生土器

序

京都府相楽郡木津町大字木津小字片山に所在する木津城山遺跡に関する報告書を『京都府遺跡調査報告書』第32冊として、ここに刊行いたします。

木津城山遺跡の発掘調査は、関西文化学術研究都市建設に伴い、都市基盤整備公団関西支社の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって、平成9年度以降、継続して実施したものであります。

各年度の調査成果の概要については、逐次『京都府遺跡調査概報』に掲載してきたところであります。本書は、それら概要報告で果たせなかった詳細な事実報告を行ったものであり、これをもって記録保存の責務を果たしたものと考えます。

刊行にあたりましては、都市基盤整備公団には現地での発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、多大のご理解とご協力を賜りました。また、京都府教育委員会・木津町教育委員会をはじめ、関係各方面から、有益なご指導ならびに助言を頂くことができました。この場を借りまして厚く御礼申し上げる次第であります。

最後に、この仕事にかかわった担当職員諸君の労苦をねぎらうとともに、本書が京都府のみならず、わが国の考古学研究の進展に寄与することを、心から願ってやみません。

平成15年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口隆康

例 言

1. 本書は、京都府相楽郡木津町大字木津小字片山に所在する木津城山遺跡の発掘調査報告書である。本書には、木津城山遺跡のほか、調査の進展によって検出された片山3～5号墳についても収めている。
2. 木津城山遺跡の調査は、当初、住宅・都市整備公団関西支社関西文化学術研究都市整備局の依頼を受けて実施したが、平成11年10月に住宅・都市整備公団の解散に伴い、新たに設立された都市基盤整備公団に事業が移管された。以後の発掘調査については都市基盤整備公団からの依頼を受けて実施している。現地調査は、平成9年度から平成13年度までの5か年を要した。
3. 現地調査および本報告書に係る経費は、全額都市基盤整備公団(平成11年以前は住宅・都市整備公団)関西支社関西文化学術研究都市整備局が負担した。
4. 本書に掲載した遺構図は、国土座標第6系座標系(旧日本測地系)によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は真北をさす。
5. 本書で使用したトレンチ名・遺構番号などは、原則として調査当時のものである。ただし、異同のある場合は、その旨を本文または注に記載した。
6. 本遺跡については、すでに概報などによって、その調査成果の一部を公表しているが、本報告に向けての整理作業の過程で、いくつかの新しい所見を得ることとなった。本書の作成に当たって、これらを正すよう努めた。したがって、本書と既存概報との間に相違がある場合は、すべて本書が正しいものとする。なお、大幅な訂正箇所については本文または注に記載した。
7. 本書に掲載した土層断面図のうち、特に必要と思われるものを除いて土層名は省略した。
8. 本書の執筆は、調査第2課調査第2係長伊野近富・同第1係主任調査員戸原和人・同第2係調査員筒井崇史、調査第1課企画係主査調査員伊賀高弘、奈良大学大学院生山内基樹が行い、文末に文責を示した。
9. 本書に掲載した写真は、遺構・遺物の検出状況を各年度ごとの調査担当者が、また、遺物写真を調査第1課資料係主任調査員田中彰が撮影した。
10. 本書の編集は、各調査担当者ならびに調査第1課資料係の協力を得て筒井が行った。
11. 本書で報告した資料のうち、出土遺物については木津町教育委員会に移管している。調査・整理報告に関わる実測図・写真等の記録は当調査研究センターにおいて保管している。

本文目次

第1章 序説

第1節 調査に至る経過	1
1. はじめに	1
2. 調査に至る経過	2
3. 調査体制	3
第2節 木津城山遺跡周辺の歴史的環境	4
1. 弥生時代後期の遺跡分布とその展開	4
2. 古墳時代以降の歴史的環境	6
第3節 発掘調査の経過	8
1. 発掘調査の経過	8
2. 調査の方法	10
第2章 弥生時代の遺構	12
第1節 平成9年度の調査	12
1. 試掘調査(1～7トレンチ)	12
2. 8トレンチの調査	15
3. 9トレンチの調査	15
第2節 平成10年度の調査	18
1. 10トレンチの調査	18
2. 11トレンチの調査	19
3. 12トレンチの調査	20
4. 13トレンチの調査	21
第3節 平成11年度の調査	23
1. 北地区の試掘調査(14～21トレンチ)	23
2. 南地区の試掘調査(22～35トレンチ)	32
第4節 平成12年度の調査	35
1. A地区の調査	35
2. B地区の調査	37
3. C地区の調査	41
第5節 平成13年度の調査	42
1. D地区の調査	42
2. E地区の調査	43

3. F地区の調査	44
第3章 弥生時代の遺物	45
第1節 弥生土器	45
1. はじめに	45
2. 器種分類	45
3. 観察表について	50
4. 出土土器の概要	51
第2節 弥生土器の検討	65
1. 出土土器の器種構成について	65
2. 器形別の構成とその特徴	66
3. 高杯の細分について	70
4. 木津城山遺跡における弥生土器の変遷	71
5. 南山城地域における弥生時代後期の土器編年	74
第3節 その他の遺物	76
1. 鏡	76
2. 土製品	77
3. 石器	77
第4章 古墳時代以降の遺構・遺物	79
第1節 片山古墳群	79
1. 検出遺構	79
2. 出土遺物	80
第2節 その他	81
1. 検出遺構	81
2. 出土遺物	83
第5章 総括	85

挿 図 目 次

第1図	南山城地域とその周辺の主要遺跡	5
第2図	木津城跡地形実測図	7
第3図	調査次数別トレンチ配置図	9
第4図	3トレンチ平面・断面図	13

第5図	竪穴式住居跡 S B 12実測図-----	14
第6図	土器溜まり S X 37遺物出土状況図-----	17
第7図	竪穴式住居跡 S B 69遺物出土状況図-----	18
第8図	土坑 S K 73実測図-----	19
第9図	竪穴式住居跡 S B 140、土坑 S K 141実測図-----	23
第10図	14～18トレンチ土層断面図-----	25
第11図	19～28トレンチ土層断面図-----	27
第12図	29～35トレンチ土層断面図-----	29
第13図	土器供献遺構 S X 05遺物出土状況図-----	31
第14図	A 地区土層断面図-----	35
第15図	段状遺構 S X 248実測図-----	36
第16図	B 地区土層断面図-----	39
第17図	弥生土器器種分類図(1)-----	47
第18図	弥生土器器種分類図(2)-----	49
第19図	タタキ調整痕拓影-----	53
第20図	A 地区遺物取り上げ地区割り図-----	59
第21図	B 地区遺物取り上げ地区割り図-----	60
第22図	畿内弥生遺跡の器種構成グラフ-----	65
第23図	高杯 B 分類案図-----	70
第24図	木津城山遺跡出土土器変遷図-----	72
第25図	南山城地域弥生土器編年試案-----	75
第26図	鏡実測図-----	77
第27図	土製品実測図-----	78
第28図	石器実測図-----	78
第29図	礫充填土坑 S X 49、溝 S D 78実測図-----	82
第30図	出土遺物実測図(中世以降)-----	83
第31図	出土遺物実測図(近世以降)-----	84
第32図	南地区主要遺構配置図-----	86
第33図	集落範囲想定図-----	87

付表目次

付表 1	調査組織表-----	2
付表 2	調査一覧表-----	8
付表 3	第 1・2 次調査新旧トレンチ名称対照表-----	11
付表 4	主要遺跡器種構成表-----	65
付表 5	壺形土器個体数表-----	66
付表 6	甕形土器個体数表-----	67
付表 7	底部個体数表-----	67
付表 8	底部調整別個体数表-----	67
付表 9	高杯形土器個体数表-----	68
付表10	高杯脚部個体数表-----	68
付表11	高杯脚部接合方法個体数表-----	68
付表12	器台形土器個体数表-----	69
付表13	鉢形土器個体数表-----	69
付表14	出土遺物観察表-----	92

図版目次

図版第 1	南地区遺構配置図(1)
図版第 2	南地区遺構配置図(2)
図版第 3	南地区遺構配置図(3)
図版第 4	南地区遺構配置図(4)
図版第 5	2 トレンチ平面・断面図
図版第 6	4 トレンチ平面・断面図
図版第 7	竪穴式住居跡 S B 09・23 実測図
図版第 8	竪穴式住居跡 S B 32 実測図
図版第 9	竪穴式住居跡 S B 33～35 実測図
図版第10	竪穴式住居跡 S B 39・54・56、段状遺構 S X 40 実測図
図版第11	溝 S D 15 実測図

- 図版第12 段状遺構 S X 69、竪穴式住居跡 S B 69・82・83実測図
- 図版第13 竪穴式住居跡 S B 60・62実測図
- 図版第14 竪穴式住居跡 S B 61・71、段状遺構 S X 70実測図
- 図版第15 竪穴式住居跡 S B 75・76・124実測図
- 図版第16 竪穴式住居跡 S B 121・123実測図
- 図版第17 段状遺構 S X 108~110、土坑 S K 115実測図
- 図版第18 段状遺構 S X 112実測図
- 図版第19 段状遺構 S X 126実測図
- 図版第20 竪穴式住居跡 S B 36・51・52・68・122・130・151実測図
- 図版第21 段状遺構 S X 12、溝 S D 21実測図
- 図版第22 竪穴式住居跡 S H 03・06・07実測図
- 図版第23 14・18・19トレンチ平面図
- 図版第24 15・16・21トレンチ平面図
- 図版第25 17・20トレンチ平面図
- 図版第26 22・23・27・28トレンチ平面図
- 図版第27 24~26・31・32トレンチ平面図
- 図版第28 33~35トレンチ平面図
- 図版第29 竪穴式住居跡 S B 201・202、段状遺構 S X 207実測図
- 図版第30 段状遺構 S X 205・208・209実測図
- 図版第31 竪穴式住居跡 S B 211・213・215、溝 S D 212・223・231・244実測図
- 図版第32 平坦面 S X 238~240実測図
- 図版第33 竪穴式住居跡 S B 79・80・235・236実測図
- 図版第34 段状遺構 S X 251~253実測図
- 図版第35 土坑 S K 18、溝状遺構 S X 262実測図
- 図版第36 片山 3 号墳実測図
- 図版第37 片山 4 号墳実測図
- 図版第38 片山 5 号墳墳丘測量図
- 図版第39 片山 5 号墳主体部実測図
- 図版第40 出土遺物実測図(1)
- 図版第41 出土遺物実測図(2)
- 図版第42 出土遺物実測図(3)
- 図版第43 出土遺物実測図(4)
- 図版第44 出土遺物実測図(5)
- 図版第45 出土遺物実測図(6)
- 図版第46 出土遺物実測図(7)

図版第47	出土遺物実測図(8)	
図版第48	出土遺物実測図(9)	
図版第49	出土遺物実測図(10)	
図版第50	出土遺物実測図(11)	
図版第51	出土遺物実測図(12)	
図版第52	出土遺物実測図(13)	
図版第53	出土遺物実測図(14)	
図版第54	出土遺物実測図(15)	
図版第55	出土遺物実測図(16)	
図版第56	出土遺物実測図(17)	
図版第57	出土遺物実測図(18)	
図版第58	出土遺物実測図(19)	
図版第59	出土遺物実測図(20)	
図版第60	出土遺物実測図(21)	
図版第61	出土遺物実測図(22)	
図版第62	出土遺物実測図(23)	
図版第63	出土遺物実測図(24)	
図版第64	出土遺物実測図(25)	
図版第65	出土遺物実測図(26)	
図版第66	出土遺物実測図(27)	
図版第67	出土遺物実測図(28)	
図版第68	出土遺物実測図(29)	
図版第69	出土遺物実測図(30)	
図版第70	出土遺物実測図(31)	
図版第71	出土遺物実測図(32)	
図版第72	出土遺物実測図(33)	
図版第73	出土遺物実測図(34)	
図版第74	出土遺物実測図(35)	
図版第75	(1) 調査地遠景(北西から)	(2) 調査地遠景(西から)
	(3) 調査地遠景(北西から)	
図版第76	(1) 第1次調査 調査地遠景(南東から)	(2) 第1次調査 調査地全景(南から)
図版第77	(1) 第2次調査 調査地全景(東から)	(2) 第2次調査 調査地全景(南東から)
図版第78	(1) 第4次調査 調査地全景(東から)	(2) 第4次調査 調査地全景(北から)
図版第79	(1) 第5次調査 調査地全景(西から)	(2) 第5次調査 調査地全景(北西から)
図版第80	(1) 1トレンチ全景(西から)	(2) 1トレンチ全景(南西から)

- (3) 1 トレンチ東端遺構検出状況(南から)
- 図版第81 (1) 2 トレンチ全景(北西から)
(2) 2 トレンチ方形台状墓 2 検出状況(南東から)
- 図版第82 (1) 2 トレンチ区画溝 S D03検出状況(北東から)
(2) 2 トレンチ埋葬施設 S X04・07検出状況(北西から)
(3) 2 トレンチ埋葬施設 S X08・09検出状況(南から)
- 図版第83 (1) 3 トレンチ全景(南から)
(2) 4 トレンチ北半部全景(南東から)
(3) 4 トレンチ南半部全景(北東から)
- 図版第84 (1) 8 トレンチ竪穴式住居跡 S B09検出状況(東から)
(2) 8 トレンチ竪穴式住居跡 S B09上層立石検出状況(南から)
(3) 5 トレンチ竪穴式住居跡 S B12検出状況(北から)
- 図版第85 (1) 9 トレンチ竪穴式住居跡 S B23、段状遺構 S X53検出状況(南東から)
(2) 9 トレンチ竪穴式住居跡 S B36検出状況(東から)
(3) 9 トレンチ土器溜まり S X37遺物出土状況(南から)
- 図版第86 (1) 9 トレンチ竪穴式住居跡 S B32検出状況(中央ピット掘削前、北から)
(2) 9 トレンチ竪穴式住居跡 S B32検出状況(中央ピット掘削後、北から)
(3) 9 トレンチ竪穴式住居跡 S B32中央ピット検出状況(北から)
- 図版第87 (1) 9 トレンチ竪穴式住居跡 S B32素文鏡出土位置(北から)
(2) 9 トレンチ竪穴式住居跡 S B32素文鏡出土状況(上が北)
(3) 9 トレンチ竪穴式住居跡 S B33~35検出状況(北から)
- 図版第88 (1) 9 トレンチ段状遺構 S X40ほか検出状況(南東から)
(2) 9 トレンチ段状遺構 S X40遺物出土状況(南東から)
(3) 9 トレンチ竪穴式住居跡 S B52検出状況(北東から)
- 図版第89 (1) 9 トレンチ溝 S D15検出状況(東から)
(2) 9 トレンチ溝 S D15遺物出土状況(南から)
(3) 13 トレンチ溝 S D15遺物出土状況(南から)
- 図版第90 (1) 10 トレンチ全景(北東から)
(2) 10 トレンチ段状遺構 S X69ほか検出状況(南から)
(3) 10 トレンチ段状遺構 S X69ほか検出状況(東から)
- 図版第91 (1) 10 トレンチ竪穴式住居跡 S B69遺物出土状況(東から)
(2) 10 トレンチ竪穴式住居跡 S B69遺物出土状況(東から)
(3) 10 トレンチ竪穴式住居跡 S B68検出状況(東から)
- 図版第92 (1) 11 トレンチ竪穴式住居跡 S B60検出状況(南から)
(2) 11 トレンチ竪穴式住居跡 S B62検出状況(北から)

- (3) 11トレンチ段状遺構 S X90検出状況(南東から)
- 図版第93 (1) 11トレンチ竪穴式住居跡 S B61・71検出状況(東から)
 (2) 11トレンチ竪穴式住居跡 S B61・71検出状況(南から)
 (3) 11トレンチ段状遺構 S X70検出状況(東から)
- 図版第94 (1) 12トレンチ全景(北から)
 (2) 12トレンチ竪穴式住居跡 S B75検出状況(北から)
 (3) 12トレンチ竪穴式住居跡 S B76検出状況(西から)
- 図版第95 (1) 13トレンチ竪穴式住居跡 S B121検出状況(西から)
 (2) 13トレンチ竪穴式住居跡 S B123・124検出状況(南東から)
 (3) 13トレンチ段状遺構 S X126検出状況(北から)
- 図版第96 (1) 13トレンチ段状遺構 S X108～110検出状況(南西から)
 (2) 13トレンチ段状遺構 S X112検出状況(西から)
 (3) 13トレンチ西端遺構検出状況(東から)
- 図版第97 (1) 14トレンチ溝 S D01検出状況(南東から)
 (2) 14トレンチ拡張区全景(北東から) (3) 15トレンチ溝 S D21検出状況(北から)
- 図版第98 (1) 15トレンチ竪穴式住居跡 S H03検出状況(北東から)
 (2) 15トレンチ竪穴式住居跡 S H06・07検出状況(南から)
 (3) 15・16トレンチ分岐点付近遺物出土状況(東から)
- 図版第99 (1) 16トレンチ土器供献遺構 S X05遺物出土状況(北から)
 (2) 16トレンチ土器供献遺構 S X05遺物出土状況(北西から)
 (3) 16トレンチ土器溜まり S X04遺物出土状況(東から)
- 図版第100 (1) 14トレンチ作業風景(南東から) (2) 15トレンチ調査前全景(南から)
 (3) 17トレンチ調査前全景(南から) (4) 20トレンチカンテキ出土状況(南から)
 (5) 22トレンチ土坑 S K18検出状況(北から)
 (6) 22トレンチ西側崖状地形検出状況(北から)
 (7) 25・26トレンチ全景(東から) (8) 24トレンチ全景(南から)
- 図版第101 (1) 23トレンチ全景(南から) (2) 29トレンチ全景(東から)
 (3) 30トレンチ全景(東から) (4) 31トレンチ全景(南東から)
 (5) 32トレンチ全景(南東から) (6) 33トレンチ全景(北東から)
 (7) 34トレンチ全景(北西から) (8) 35トレンチ全景(北東から)
- 図版第102 (1) A地区全景(上が北)
 (2) A地区竪穴式住居跡 S B201検出状況(北から)
 (3) A地区竪穴式住居跡 S B201・202検出状況(東から)
- 図版第103 (1) A地区土器溜まり S X242遺物出土状況(北から)
 (2) A地区段状遺構 S X205・207・244検出状況(南から)

- (3) A地区段状遺構 S X248検出状況(北東から)
- 図版第104 (1) B地区全景(上が西)
 (2) B地区平坦面 S X240ほか検出状況(北から)
 (3) B地区竪穴式住居跡 S B213・215検出状況(北から)
- 図版第105 (1) B地区平坦面 S X238~240全景(南西から)
 (2) B地区平坦面 S X238検出状況(南から)
 (3) B地区平坦面 S X238(セクションA)遺物出土状況(南西から)
- 図版第106 (1) B地区平坦面 S X238~240全景(東から)
 (2) B地区セクションA土層断面(北東から)
 (3) B地区セクションB土層断面(南西から)
 (4) B地区セクションB平坦面 S X238土層断面(南西から)
 (5) B地区セクションC平坦面 S X239土層断面(南から)
 (6) B地区平坦面 S X239掘り込み上端(南西から)
 (7) B地区セクションD土層断面(北から)
 (8) B地区セクションE土層断面(北から)
- 図版第107 (1) C地区全景(上が東) (2) C地区全景(北から)
 (3) C地区竪穴式住居跡 S B235検出状況(北から)
- 図版第108 (1) C地区竪穴式住居跡 S B236遠景(北から)
 (2) C地区竪穴式住居跡 S B236検出状況(北東から)
 (3) C地区竪穴式住居跡 S B236遺物出土状況(北から)
- 図版第109 (1) D地区全景(上が東) (2) D地区全景(南西から)
 (3) D地区溝状遺構 S X262検出状況(南西から)
- 図版第110 (1) E地区全景(上が東)
 (2) E地区段状遺構 S X252検出状況(東から)
 (3) E地区段状遺構 S X253検出状況(東から)
- 図版第111 (1) E地区段状遺構 S X256検出状況(北西から)
 (2) F地区全景(北から)
 (3) F地区作業風景(西から)
- 図版第112 (1) 片山3号墳全景(北西から) (2) 片山3号墳主体部検出状況(南東から)
 (3) 片山3号墳主体部完掘状況(南東から)
- 図版第113 (1) 片山4号墳全景(東から) (2) 片山4号墳主体部礫床断面(西から)
 (3) 片山1号墳トレンチ全景(南から)
- 図版第114 (1) 片山5号墳全景(南から) (2) 片山5号墳主体部全景(南から)
 (3) 片山5号墳礫床検出状況(西から)
- 図版第115 (1) 片山3号墳周溝土層断面(南から) (2) 片山3号墳周溝土層断面(北東から)

- (3)片山4号墳周溝土層断面(南西から) (4)片山4号墳周溝土層断面(南から)
 (5)片山5号墳周溝土層断面(東から)
 (6)片山5号墳主体部石材散乱状況(西から)
 (7)片山5号墳攪乱土中炭層検出状況(西から)
 (8)片山5号墳遺物出土状況(西から)
- 図版第116 (1)谷状地形S X20検出状況(東から) (2)礫充填土坑S X49検出状況(北から)
 (3)礫充填土坑S X49土層断面(北から)
- 図版第117 (1)11トレンチ焼土S X91検出状況(北から)
 (2)2トレンチ陣地遺構S X02検出状況(北西から)
 (3)2トレンチ陣地遺構S X06検出状況(南東から)
- 図版第118 出土遺物(1)
 図版第119 出土遺物(2)
 図版第120 出土遺物(3)
 図版第121 出土遺物(4)
 図版第122 出土遺物(5)
 図版第123 出土遺物(6)
 図版第124 出土遺物(7)
 図版第125 出土遺物(8)
 図版第126 出土遺物(9)
 図版第127 出土遺物(10)
 図版第128 出土遺物(11)
 図版第129 出土遺物(12)
 図版第130 出土遺物(13)

第1章 序 説

第1節 調査に至る経過

1. はじめに

京都府・大阪府・奈良県の3府県にまたがる丘陵地帯に都市基盤整備公団(旧住宅・都市整備公団)が整備を進める関西文化学術研究都市が計画された。とりわけ木津町東部の開発区域内において、多数の埋蔵文化財の存在が確認された。このため、当調査研究センターが昭和59年度から埋蔵文化財の調査を継続して実施している。各年度ごとの調査成果については「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡発掘調査概要」として概要を報告している。また、特に注目される遺跡については整理作業が終了した段階で発掘調査報告書を刊行している。

関西文化学術研究都市の発掘調査は、事前の京都府教育委員会による分布調査をふまえ、まず、遺物散布地・古墳推定地の試掘調査を実施して、遺跡の概要の把握に努めた。そして、その成果を受けて、昭和63年度から木津南地区に所在する遺跡を対象として本調査を実施した。

木津南地区における調査成果としては、前方後円墳1基、小規模な方・円墳9基と多数の埴輪棺群などが検出された瓦谷古墳群、造り出し付き円墳を中心として多数の小規模な方墳が分布する上人ヶ平古墳群、これらの古墳群に付随する瓦谷埴輪窯や上人ヶ平埴輪窯、流路から多量の古式土師器が出土した瓦谷遺跡、大規模な瓦工房跡が検出された上人ヶ平遺跡、平城宮や興福寺に供給された瓦を焼いた瓦窯群(梅谷瓦窯・瀬後谷瓦窯・市坂瓦窯・五領池東瓦窯)などがある。

木津南地区の調査がおおむね終了した平成7年度以降は木津中央地区の調査に着手した。本書に収めた木津城山遺跡は、木津中央地区に所在する遺跡であるが、当初、その存在は周知されていなかった。しかし、本文に詳しく述べるような経過と調査の結果、弥生時代後期の高地性集落であることが明らかになった。また、木津城山遺跡の調査によって新たに確認された片山3～5号墳についても合わせて報告する。本書は、関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡の報告書としては『上人ヶ平遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第15冊 1992)、『瓦谷古墳群』(『京都府遺跡調査報告書』第23冊 1997)、『奈良山瓦窯跡群』(『京都府遺跡調査報告書』第27冊 1999)に続く第4冊目に当たる。これまでの報告書と同様、本書が今後の研究の一助となれば幸いである。

最後になりましたが、調査期間中から整理作業をはじめ本書の刊行まであたたかく見守っていただいた都市基盤整備公団関西支社、現地や室内の作業でご協力をいただいた方々、有益なご助言をいただいた方々にお礼を申し上げます。

(筒井崇史)

2. 調査に至る経過

木津城山遺跡の調査は、関西文化学術研究都市の整備事業に伴い、J R 木津駅の東南に位置する丘陵上に、住宅地への水道水の供給を目的とした配水池の建設が計画されたことを受けて、調査に至ったものである。

配水池の建設が計画された丘陵の最高所(標高約106m)には、城郭遺構が良好に遺存する木津城跡が存在した。この遺跡については、事前に緑地帯として保存されることが決定されていたが、周辺部についてはこれまで調査が行われたことがなく、状況は不明であった。このため、周辺部における木津城跡の広がりを確認する目的で試掘調査を実施したところ、後述するように弥生時代後期の遺構・遺物が確認された。これらは、その内容と立地条件から弥生時代後期の典型的な「高地性集落」と判断された。遺跡の上では重複するが、「木津城跡」と区別するため、関係諸機関と協議の結果、新たに「木津城山遺跡」と命名することにした。

発掘調査の経過とその成果については、以下に詳しく述べる通りである。

なお、木津城山遺跡の調査は、平成13年度の調査を終えた時点で、当面の開発予定がないこと、遺跡の主要部と判断される丘陵頂部と直下の斜面の大半を調査し終えたことなどから、都市基盤整備公団のご理解をいただき本報告書の刊行に至ったものである。^(注1)

(伊野近富)

付表1 調査組織表

調査年度	調査主体者 (理事長)	調査責任者 (事務局長)	事務局 (総務課長)	調査担当責任者 (調査第2課長)	調査担当者
平成9 (第1次)	樋口隆康	木村英男	福島利範	安藤信策	課長補佐兼 調査第3係長 奥村清一郎 主査調査員 古瀬誠三 調査員 伊賀高弘 有井広幸
平成10 (第2次)	同上	同上	同上	同上	調査第2課主幹 調査第3係長事務取扱 平良泰久 主査調査員 古瀬誠三 調査員 伊賀高弘
平成11 (第3次)	同上	同上	同上	平良泰久	調査第2課主幹 調査第2係長事務取扱 久保哲正 主任調査員 戸原和人
平成12 (第4次)	同上	同上	同上	同上	調査第2課主幹 調査第2係長事務取扱 久保哲正 主任調査員 戸原和人 第4係調査員 伊賀高弘 第2係調査員 筒井崇史
平成13 (第5次)	同上	中谷雅治	同上	同上	調査第2係長 伊野近富 調査員 筒井崇史

3. 調査体制

発掘調査は、平成9年度から平成13年度にかけて実施した。この間における調査組織は付表1の通りである。

整理作業は、各調査年度のほか、平成13・14年度に報告書作成のための土器実測、図版作成、製図、遺物写真撮影などの作業を行った。報告書作成作業は筒井崇史を担当とし、各年度の調査担当者がこれを助けた。

現地調査および報告書の作成にあたっては、多くの作業員・調査補助員・整理員の方々にご協力いただいた。調査参加者は以下の通りである。

秋本哲治・飯塚里繪・井上綾子・井上聡・井上達平・井ノ口雄三・井本敬子・岩戸晶子・上野剛明・榎本威信・大山慶子・大坪由美香・岡野奈知子・萩野富沙子・奥出裕也・奥村茂輝・小野彰子・小原志奈子・勝山紀子・金子真理子・兼田一成・金松誠・黄瀬桂子・木本昌英・久田亨・陸田初代・櫻谷綾子・小出純子・古賀友佳子・五島梨恵・小西千春・小牧健太郎・小松厚子・坂手華子・迫越佐登己・佐々木公平・佐藤美穂・下間寿浦・城本愛美・須田千代・清木寛史・関野雅子・高木克彦・高橋純子・滝下勝久・田中香織・田中美恵子・田中美和子・田淵二郎・塚田高史・筒井由香・土井司・長井謙治・中島恵美子・中村美紀・榎本順子・西根正弘・西村香代子・萩谷良太・林益美・原田美友紀・播磨尚子・福井紘子・福島緑・藤田徹也・古川良子・堀大輔・前山華苗子・松浦弘太郎・松尾洋次郎・松田早映子・松田洋介・南憲和・宮崎敦・宮本香織・室林由香・森川敦子・安田裕貴子・山内基樹・山岡匠平・山口良太・山田三喜子・山名郁代・山中道代・山本弥生・吉永清美・和田明日香

また、現地調査および報告書の作成にあたっては、京都府教育委員会、木津町教育委員会からご指導・ご協力いただくとともに、下記の方々、機関から有益なご助言をいただいた。記して感謝の意を表したい(敬称略、順不同)。

和田晴吾(立命館大学)・寺澤薫(奈良県教育委員会)・森岡秀人(芦屋市教育委員会)・岡村秀典(京都大学)・森下章司(大手前大学)・高橋克壽(独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)・青木勘時(天理市教育委員会)・小池香津江(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)・池田保信(埋蔵文化財天理教調査団)・小畑佳子(桜井市教育委員会)・京都府立山城郷土資料館・木津の緑と文化財を守る会

第2節 木津城山遺跡周辺の歴史的環境

1. 弥生時代後期の遺跡分布とその展開(第1図)

木津城山遺跡は、調査の結果、弥生時代後期の高地性集落であることが明らかになった。ここでは、木津城山遺跡の所在する南山城地域^(注2)とその周辺の主要な遺跡について概観する^(注3)。

さて、南山城地域における弥生時代後期の遺跡については、これまでまとめられることが少なかったように思われる。そうした中で、弥生土器の研究であるが、2つの代表的な研究成果を取り上げたい。その1つは当調査研究センターが刊行した『京都府弥生土器集成』(1989)であり、今一つは森岡秀人氏による山城地域の土器編年に関する研究成果(『弥生土器の様式と編年』畿内編Ⅱ 1990)である。

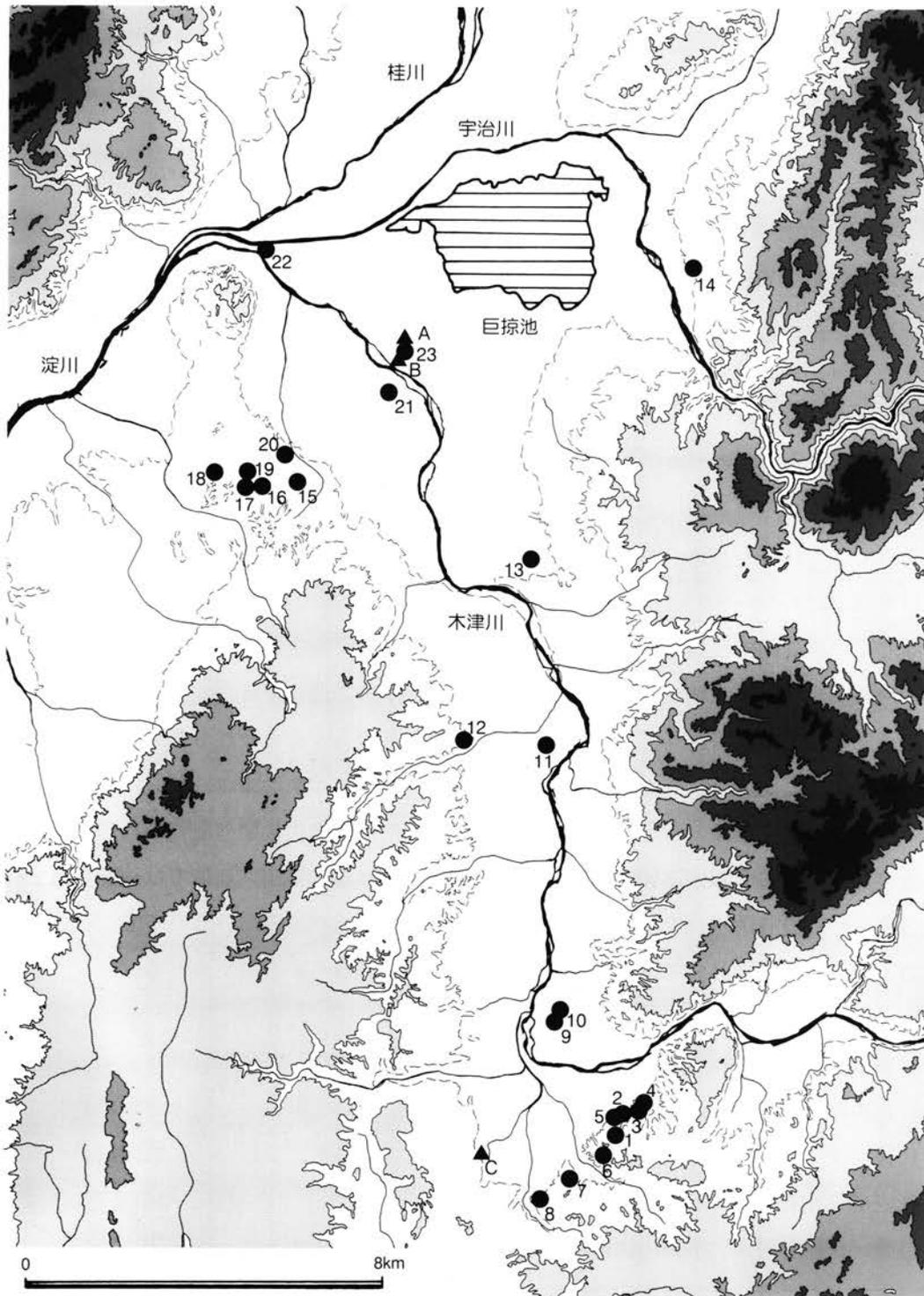
森岡氏が後期の編年において取り上げられた南山城地域の遺跡は宇治市羽戸山遺跡(14)、八幡市幣原遺跡(18)・狐谷横穴群下層遺跡(20)にすぎなかった。このうち、羽戸山遺跡は南山城地域(木津川流域)というよりは、京都盆地の東辺、宇治川流域に位置する。また、狐谷横穴群下層遺跡も良好な遺構・遺物に乏しかった。森岡氏の編年案や、『京都府弥生土器集成』などの発表当時(1989～1990年)に知られていた主要な遺跡には、八幡市南山遺跡(19)・美濃山廃寺下層遺跡(15)・木津川河床遺跡(22)、京田辺市天神山遺跡(12)、城陽市森山遺跡(13)などがある。これらの多くは小規模な発掘調査しか行われておらず、全容は不明であった。検出遺構・出土遺物とも充実していたのは、天神山遺跡と木津川河床遺跡である。前者からは後期後半を中心とする土器資料が、また後者からは後期末から庄内式にかけての土器資料が出土していた。

このように1980年代中頃までに知られていた南山城地域の弥生時代後期の遺跡は必ずしも充実した内容をもっていただけではなかった。しかし、1980年代後半以降に開発に伴う発掘調査が相次いで行われ、弥生時代後期の遺跡の調査例も急増し、それに伴って土器資料も大幅に充実することとなった。近年、南山城地域で調査されたおもな遺跡としては、久御山町佐山遺跡(23)、八幡市内里八丁遺跡(21)・備前遺跡(17)・宮ノ背遺跡(16)、京田辺市飯岡遺跡(11)、山城町堂ノ上遺跡(10)・椿井天上山古墳下層遺跡(9)などがある。

また、木津城山遺跡の周辺にも弥生時代後期の遺跡が多く分布することが知られている。

まず、木津城山遺跡と同じ丘陵の北側には燈籠寺遺跡(2)・内田山遺跡(5)、南側には天神山遺跡(6)が所在する。燈籠寺遺跡では竪穴式住居跡が検出され、内田山遺跡・天神山遺跡では弥生土器が出土している。また、小さな谷地形を挟んだ東側の丘陵には赤ヶ平遺跡(3)・白口遺跡(4)がある。白口遺跡では竪穴式住居跡が検出され、赤ヶ平遺跡は前期・中期を中心とする遺跡であるが後期の資料もわずかに存在する。これらは、それぞれが単独で存在するようであるが、出土土器をみると、時期ごとに中心となる遺跡を異にしながらも、この丘陵上を転々と移動しながら、連続的に営まれている可能性が高い。

この木津城山遺跡の所在する丘陵の南に位置する別の丘陵には、西山遺跡(7)や上人ヶ平遺跡(8)などが所在する。これらの遺跡でも後期の竪穴式住居跡が検出されているが、当該期の資料はそれほど多くない。また、木津町西部に位置する丘陵上でも当該期の遺構・遺物が少数である



第1図 南山城地域とその周辺の主要遺跡(弥生時代後期)

- | | | | | |
|---------------|------------|-------------|----------------|-----------|
| 1. 木津城山遺跡 | 2. 燈籠寺遺跡 | 3. 赤ヶ平遺跡 | 4. 白口遺跡 | 5. 内田山遺跡 |
| 6. 天神山遺跡 | 7. 西山遺跡 | 8. 上人ヶ平遺跡 | 9. 椿井天上山古墳下層遺跡 | |
| 10. 堂ノ上遺跡 | 11. 飯岡遺跡 | 12. 天神山遺跡 | 13. 森山遺跡 | 14. 羽戸山遺跡 |
| 15. 美濃山廃寺下層 | 16. 宮ノ背遺跡 | 17. 備前遺跡 | 18. 幣原遺跡 | 19. 南山遺跡 |
| 20. 狐谷横穴群下層遺跡 | 21. 内里八丁遺跡 | 22. 木津川河床遺跡 | | |
| 23. 佐山遺跡 | A. 市田齊当坊遺跡 | B. 佐山尼垣外遺跡 | C. 大畠遺跡 | |

が見つかっている。

以上の遺跡について、おおよその時期を示すと、佐山遺跡・内里八丁遺跡・木津川河床遺跡は後期から古墳時代前期、あるいはそれ以降にかけて、木津城山遺跡を除くその他の遺跡は後期中頃から後半に、そして木津城山遺跡は後期前半に位置づけられる。

こうした状況について、近年、山城地域の弥生遺跡の動向をまとめられた伊藤淳史氏は、後期「前半期に遺跡数が減少、後半期に激増」していることを指摘され、「この点で周辺他地域の動向と歩調を同じくしている」とされる。同氏が作成された表からも、たとえば、八幡市域では、後半期に遺跡数が前半期の約3倍となっている様子が読みとれる。また、木津川右岸の遺跡でも、後半期の資料が確認されているものが圧倒的に多い。伊藤氏の指摘を土器資料の点からみると、南山城地域では弥生時代後期初頭から前半にかけての良好な資料に乏しかったことを意味する。しかし、木津城山遺跡の調査により、南山城地域においてもこの時期の資料が充実されることになった。

ところで、これらの遺跡の多くが中期に遡らないことや、2、3の例外を除いて、近隣に中期の遺跡を見いだせないことは、後期の遺跡の多くが、その出自を中期の遺跡に求められないことを意味している。例外としては、佐山遺跡は近接して市田齊当坊遺跡(A)や佐山尼垣外遺跡(B)などがある。また、木津城山遺跡に近接する赤ヶ平遺跡や燈籠寺遺跡では弥生時代前期・中期の遺構・遺物が検出されており、木津城山遺跡以前の集落であった可能性もある。特に赤ヶ平遺跡では、前期の土器が出土しており、この時期にまで遡って集落が形成されていた可能性もある。

以上、最近の研究成果とともに、南山城地域における弥生時代後期の遺跡の様子について概観してきた。今回報告する木津城山遺跡の調査成果は、これまで南山城地域では確認されていなかった後期前半の資料的空白を埋めるものである。また、高地性集落という点でも、その所在地や時間軸上の位置づけにおいて、さまざまな問題点を提起するものと考えられる。

2. 古墳時代以降の歴史的環境

次に古墳時代以降の木津城山遺跡周辺の歴史的環境について概観^(注4)する。木津城山遺跡では、弥生時代後期後半から古墳時代後期までの遺構・遺物は確認されていない。この時期の木津町における代表的な遺跡としては上人ヶ遺跡・同古墳群、瓦谷遺跡・同古墳群、相楽遺跡、弓田遺跡、大島遺跡、燈籠寺遺跡、内田山古墳群などがある。このうち上人ヶ平・瓦谷両古墳群については巻頭にも述べたように、関西文化学術研究都市の整備事業に伴う発掘調査を行い、多数の古墳とともに多量の埴輪を検出した。その他の遺跡でも集落跡や古墳が見つかっている。相楽遺跡を除いていずれも標高40～60mの段丘上に分布している。

飛鳥時代の遺跡は少ないが、木津城山遺跡の調査に伴って確認された片山3～5号墳はこの時期と考えられる。また、石のカラト古墳と呼ばれる上円下方墳が木津町西部の丘陵に造営される。

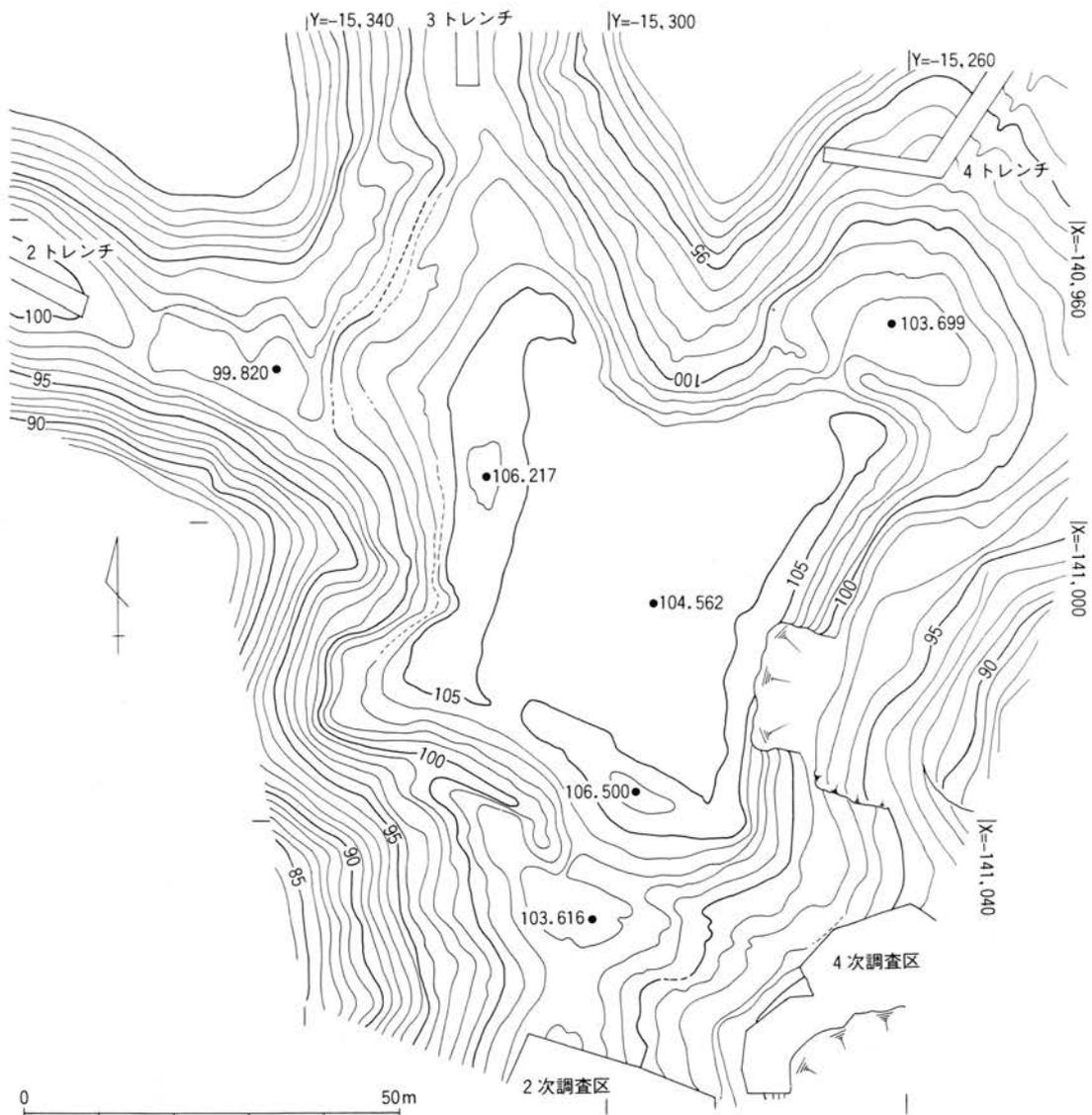
奈良時代になると、隣接する平城宮・京との関わりで多くの遺跡が所在する。代表的な遺跡としては、上人ヶ平遺跡、奈良山瓦窯群(梅谷瓦窯・市坂瓦窯・瀬後谷瓦窯・五領池東瓦窯・中山

瓦窯・歌姫瓦窯・音如ヶ谷瓦窯など)、大島遺跡、上津遺跡などがある。特に、奈良山瓦窯群は平城宮・京や興福寺へ供給していた瓦を焼いていた窯跡群であり、上人ヶ平遺跡は、そうした瓦を生産していた工房の一つであることが明らかになった。また、上津遺跡は平城京へ物資運搬にかかわる遺跡と考えられる。

平安時代から中世にかけての遺跡で発掘調査されたものは少ない。

中世後半になると木津城が造成されるようだが、本城は文献(『大乘院日記目録』など)に若干の記載があり、城主は木津氏と伝えられる。木津城はこれまでにいくつかの縄張り図が発表されているが、今回は地形測量図を図示した(第2図)。

(筒井崇史)



第2図 木津城跡地形実測図

第3節 発掘調査の経過

1. 発掘調査の経過(第3図・付表2)

平成9年度の調査(第1次) まず、木津城跡の周辺における城域の広がりを確認することを目的に、周囲に派生する尾根の稜線上に7か所の試掘トレンチを設定した(1～7トレンチ)。試掘調査の結果、いずれの調査区においても木津城跡に関連する遺構・遺物は検出されず、弥生時代後期の遺構・遺物を広い範囲で確認した。また、木津城跡とともに調査対象であった片山1号墳について調査を実施したが、顕著な遺構は検出しなかった。

以上の試掘調査の成果を受けて、防災対策などの条件の整った木津城跡から南にのびる主尾根の東側斜面に、新たに2か所の調査区(8・9トレンチ)を設定した。調査の結果、弥生時代の遺構としては、竪穴式住居跡12基、段状遺構1基、溝1条などを検出した。また、古墳2基を検出した。調査成果の全容が明らかになった平成10年2月26日には現地説明会を実施した。

平成10年度の調査(第2次) 新たに防災対策の整った前年度調査地の周囲に、4か所の調査区(10～13トレンチ)を設定した。調査の結果、弥生時代の遺構としては竪穴式住居跡17基、段状遺構7基、崖状地形1か所などを検出した。また、古墳1基を検出した。調査成果の全容が明らかになった平成11年2月23日には現地説明会を実施した。

平成11年度の調査(第3次) これまでの調査の結果、遺跡の範囲がさらに広がることが予想されたため、範囲確認を目的とした試掘調査を実施した。木津城跡の北側(以下、北地区と呼ぶ)に試掘トレンチを8か所(14～21トレンチ)、南側(以下、南地区と呼ぶ)に14か所(22～35トレンチ)を設定した。調査の結果、北地区では、竪穴式住居跡3基、段状遺構1基、溝2条、崖状地形3か所などを検出した。南地区では土坑1基、段状遺構2基、崖状地形7か所などを検出した。本年度は、試掘調査であったため、現地説明会などは実施していない。

平成12年度の調査(第4次) 主尾根の東側斜面を調査対象とした。調査にあたっては、1～3次調査の調査成果にもとづいて、3か所の調査区(A・B・C地区)を設定した。調査の結果、A地区では、竪穴式住居跡2基、段状遺構6基、平坦面1か所を検出した。B地区では、竪穴式住居跡3基、溝3条、平坦面3か所を検出した。C地区では、竪穴式住居跡2基、溝1条を検出し

付表2 調査一覧表

調査回数	調査期間	調査面積
第1次 試掘調査 発掘調査	平成9年6月17日～10月16日	3,100㎡
	平成9年12月1日～平成10年3月6日	
第2次	平成10年4月13日～6月29日	2,000㎡
	平成10年11月11日～平成11年2月25日	
第3次	平成11年4月12日～9月20日	2,300㎡
	平成11年11月17日～12年2月28日	
第4次	平成12年5月8日～平成13年2月27日	2,000㎡
第5次	平成13年6月1日～9月25日	1,000㎡
(合計)		10,400㎡



第3図 調査次数別トレンチ配置図

た。調査成果の全容が明らかになった平成13年2月9日には現地説明会を実施した。

平成13年度の調査(第5次) 主尾根の西側斜面および西へのびる支尾根の南側斜面を調査対象とした。調査にあたっては、第4次調査と同様、第1～3次調査の調査成果にもとづいて、3か所の調査区(D・E・F地区)を設定した。調査の結果、D地区・F地区では弥生土器を包含する堆積層を確認したものの、顕著な遺構は検出されなかった。E地区では、段状遺構2基を検出した。調査成果の全容が明らかになった平成13年9月18日には関係者説明会を実施した。

2. 調査の方法

(1) 調査・整理作業の方法

調査は、まず表土ならびに堆積土を重機によって除去した後、人力による精査を行って遺構の検出を行った。遺構の検出後、その位置を平板などで記録しながら、遺構の掘削を行った。検出した遺構には、原則として通し番号を付けたが、試掘調査では個別に遺構番号を付けている。また、遺構番号には、遺構の性格を示す略号を付けた。略号は、調査の進展に伴って変更することもあったが、番号は変更しないようにした。使用した略号は、竪穴式住居跡：SB・SH^(注5)、溝：SD、土坑：SK、段状遺構・平坦面・崖状地形・土器溜まり・埋葬施設・不明遺構：SXである。なお、本書に掲載した遺構番号・略号は原則として調査時のものをそのまま使用した。ただし、調査時に番号のなかった遺構については新たに付与した。遺構の掘削を終えると、必要に応じて、1/10または1/20の平面図・断面図の作成と写真撮影を行った。また、第3次調査を除く各調査で、調査のほぼ終了した時点で空中写真撮影を実施した。なお、木津城山遺跡の一連の調査では、国土座標にもとづく地区割は行っていない。

遺物整理作業は、まず出土遺物を洗浄して、台帳に登録した。土器片へのネーミング作業と併行して接合を行った。接合などの作業の終えた遺物については、原則として口縁部、底部、脚部などの端部が残るものについてはすべて、また、端部がなくても特徴的な器形を有するものや文様があるものについても可能な限り実測した。実測できた遺物は最終的に1,600点余りであるが、このうち約1,400点について、調査年次や出土遺構ごとレイアウトし、製図した。

実測できた遺物のうち、復原可能なものについては石膏復原を行った。また、復原できた遺物や小片でも特徴的な破片については写真撮影を行った。

(2) トレンチ名称について(付表3)

第1・2次調査では、トレンチの名称については、若干の混乱がある。この点は記録保存として作成された各種図面類や遺物へのネーミングなどにおいて、未整理のまま実施されている。本報告に当たってはこの点を以下のように整理した。

第1次調査では9つの調査区を設定したが、調査中は10トレンチとした調査区がある。また、調査時と概要報告時とでは、6トレンチと7トレンチが入れ替わっている。第2次調査では、第1次調査の7トレンチを6トレンチとして調査を引き続き行っており、本報告でも6トレンチとした。10トレンチについては、概要報告時に1トレンチに含めて報告しており、本報告書でもな

らうこととした。

第2次調査では、調査区の名称として、当初、SEトレンチ・Nトレンチ・Eトレンチという名称が使用されており、ネーミングなどもこれで行っているが、概要報告時には10～12トレンチという名称に変更した。なお、第1次調査地の南西に設けられた調査区は、当初から13トレンチと呼称している。なお、第1・2次調査の概要報告時には、トレンチ番号をローマ数字によって表記したが、本報告にあたって、トレンチ名称を算用数字で表記することとした。

第3次調査では、引き続き14トレンチから35トレンチまでの名称を使用した。第4・5次調査では、面的な調査を実施する場合、調査区の呼称を従前の数字からアルファベットに改めた。なお、第3次調査以降では、トレンチ名称の変更などはない。

(3)遺構番号について

各遺構の略号・番号については、本調査の場合、上述したように、略号は調査の進展に伴って変更した場合もあったが、番号は原則として変更したり重複したりしないようにしていた。しかし、実際には、重複があって変更したり、調査の進展に伴って最終的に遺構ではないと判断して欠番となってしまうなど、変更が少なからずある。また、明らかに同一遺構であるにもかかわらず調査年度ごとに別の番号を付与している場合があるので、これは原則として最初の遺構番号を採った。一方、試掘の場合は個別に番号を付与しているが、試掘から本調査に至った場合、本調査の遺構番号の付与の方法に従って、新しい番号を与えている。以上のような遺構番号の変更などについては、ネーミングを旧番号で行っている場合もあるので、変更内容について本文または注に記載するようにした。

(筒井崇史)

付表3 第1・2次調査新旧トレンチ名称対照表

	調査時	概要報告時	本報告書
第1次調査	Iトレンチ	Iトレンチ	1トレンチ
	IIトレンチ	IIトレンチ	2トレンチ
	IIIトレンチ	IIIトレンチ	3トレンチ
	IVトレンチ	IVトレンチ	4トレンチ
	Vトレンチ	Vトレンチ	5トレンチ
	VIトレンチ	VIトレンチ	6トレンチ
	VIIトレンチ	VIIトレンチ	7トレンチ
	VIIIトレンチ	VIIIトレンチ	8トレンチ
	IXトレンチ	IXトレンチ	9トレンチ
	Xトレンチ*	—	—

	調査時	概要報告時	本報告書
第2次調査	SEトレンチ	Xトレンチ	10トレンチ
	Nトレンチ	XIトレンチ	11トレンチ
	Eトレンチ	XIIトレンチ	12トレンチ
	XIIIトレンチ	XIIIトレンチ	13トレンチ

* 第1次調査 Xトレンチは概要報告時に 1トレンチに含める

第2章 弥生時代の遺構

第1節 平成9年度の調査

1. 試掘調査(1～7トレンチ)

(1) 1トレンチ

片山1号墳が所在するとされていた丘陵最高点から西にのびる支尾根の稜線上に設定した。幅3m、総延長85mを測る。古墳周溝1条、土坑1基、崖状地形^(註6)1か所などを検出した。

片山5号墳周溝SD01(図版第38) 当初は弥生時代の環壕の可能性を考えたが、第2次調査で、終末期古墳(片山5号墳)の周溝であることを確認した。詳細は後述する。

崖状地形SX02 支尾根の稜線よりやや南側、1トレンチ内で断続的に検出した。その主軸は稜線と平行するが、狭い試掘トレンチのため断続的に確認したのみである。そこで、南側の斜面に計4本の小規模な試掘トレンチを設定し、その状況を確認するとともに、第2・5次調査で面的な調査を実施したが、SX02が人為的な掘削であることを示す痕跡は認められなかった。南側斜面の小規模な試掘トレンチの1つから、ほぼ完形に復原しうる甕B^(註7)(253)のほか、わずかな小片が出土したのみである。なお、253は第2次調査の結果、段状遺構SX112の埋土から出土していた可能性が高い。

土坑SK42 周溝SD01と重複し、東西方向に主軸をもつ長楕円形の土坑である。長軸長1.6m、短軸長1.0m、深さ0.15mを測る。遺構内から、高杯B、底部が出土した(29～32)。

(2) 2トレンチ(図版第5)

木津城跡から北西にのびる尾根の稜線上に設定した。長さ60m、幅3mを測り、太平洋戦争中に構築されたと思われる陣地遺構^(註8)の部分で拡張した。2トレンチでは、ほぼ20m間隔で尾根の主軸に直交する3条の溝(SD01・03・05)を検出した。溝は当初、木津城跡に伴う堀切と考えたが、弥生土器しか出土しないことや、溝に挟まれた空間で多数の埋葬施設を検出したことから、方形台状墓の区画溝と判断した。以下、SD01とSD03によって区画されたものを方形台状墓1、SD03とSD05で区画されたものを方形台状墓2とする。方形台状墓1・2は、SD03を共有して尾根の稜線上に造営されたと考えられる。なお、SD05および埋葬施設の多くについては試掘調査であるため、その存在を確認したのみで調査は実施していない。

方形台状墓1 区画溝SD01は、幅2.6～3.5m、深さ1.1mを測り、横断面形はやや丸みを帯びた「V」字形を呈する。区画溝SD03は、幅2.5～3.0m、深さ0.75mを測る。横断面形は両斜面が比較的ゆるい勾配で降り、その中央付近で傾斜を強めて溝底に至る。埋葬施設は、SX10をはじめ、陣地遺構SX02の内壁面で複数の埋葬施設の断面を確認した。SD03の溝底から10cmほど浮いて広口壺C(1)が正立した状態で出土した。

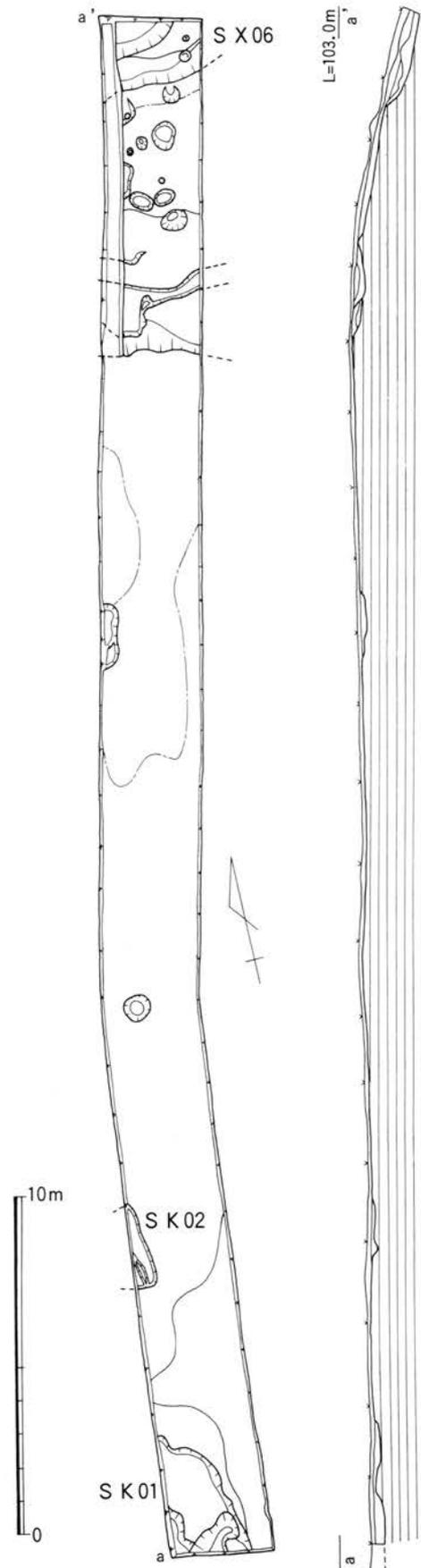
方形台状墓 2 区画溝 S D05は、陣地遺構 S X06とほぼ重複しており、その内壁面で断面として確認した。掘削していないが、その規模や形状は区画溝 S D01・03に類似すると考えられる。台状部で合計7基の埋葬施設を確認した。そのうち、東寄りの周辺埋葬施設の調査を行った。埋葬施設 S X04の墓壙は長さ3.5m、幅1.2m、深さ0.45mを測り、平面形は長方形を呈する。平坦な墓壙底には墓壙下縁から10cmほど内側に寄った範囲に小礫が敷き詰められていた。埋葬施設 S X07は、S X04の北東側に主軸方位を揃えて営まれている。墓壙は、長さ3.2m、幅1.2m、深さ0.6mを測る。墓壙底の内側寄りを浅く掘り窪めて小礫を乱雑に敷き詰めている。埋葬施設 S X08・09は、検出面が西に向かって傾斜しているため遺存状態は良好とは言えない。墓壙の平面形はともに長方形を呈し、長さ3.0m前後、幅1.0m前後を測る。両埋葬施設とも完掘していない。ただ、埋葬施設 S X09と重複する南北方向の溝 S D15を掘削したところ、その溝底が部分的に墓壙底に達し、獸帯鏡破鏡(1360)が出土した。

(3) 3 トレンチ(第4図)

木津城跡から北にのびる尾根の稜線上に設定した。長さ45m、幅3mを測る。2トレンチほど顕著でないが、浅い皿状土坑や遺物を包含する落ち込みなどを検出した。なお、第3次調査の試掘トレンチは、本トレンチの調査成果を受けて設定したものである。

落ち込み S X06 調査区北端で検出した。北に向かって傾斜する落ち込みで、深さは現地表下0.3~0.6mを測る。堆積土から広口壺C、高杯C、壺体部、底部などが出土した(5~11)。S X06は、第3次調査の結果、竪穴式住居跡 S H07の一部であることを確認した。

土坑 S K01・02 いずれも調査区外にのびるため、遺構の規模は部分的にしか知ることはできない。S K01は検出長3.5m、検出幅2.5m、深さ0.2~0.3m前後を測る。S K02は検出長2.5m、幅0.7m、深さ0.15~0.3mを測る。いずれも出土遺物はない。



第4図 3 トレンチ平面・断面図

(4) 4 トレンチ (図版第 6)

木津城跡の北東隅から北東にのびる尾根の稜線上に設定した。総延長約100m、幅3mを測り、北端でやや拡張した。4 トレンチは2・3 トレンチとは異なり、比較的急な斜面である。南端屈折部において、時期不明の2条の溝を検出した(S D01・02)ほかは、遺構・遺物ともに検出しなかった。標高92m付近の緩勾配を示す部分は、硬い岩脈が露呈しており、人為的な造作に伴うものではない。

(5) 5 トレンチ

木津城跡から南にのびる主尾根上に設定した。長さ33m、幅2mを測る。弥生時代の遺構として^(注9) 竪穴式住居跡 S B12を検出したほか、近世以降の溝 S D07などを検出した。

竪穴式住居跡 S B12 (第 6 図) 5 トレンチのほぼ中央部で検出した。主尾根のほぼ頂部に位置するが、溝 S D07などの攪乱が激しいため住居跡の深さはほとんどなく周壁溝を検出したのみで北西辺長4.9m、北東辺検出長0.8mを測る。平面形は周壁溝のコーナーがほぼ直角であることから方形と考えられる。周壁溝は幅0.4~0.5m、深さ0.3~0.4mを測る。支柱穴は攪乱のため検出できなかった。出土遺物はない。

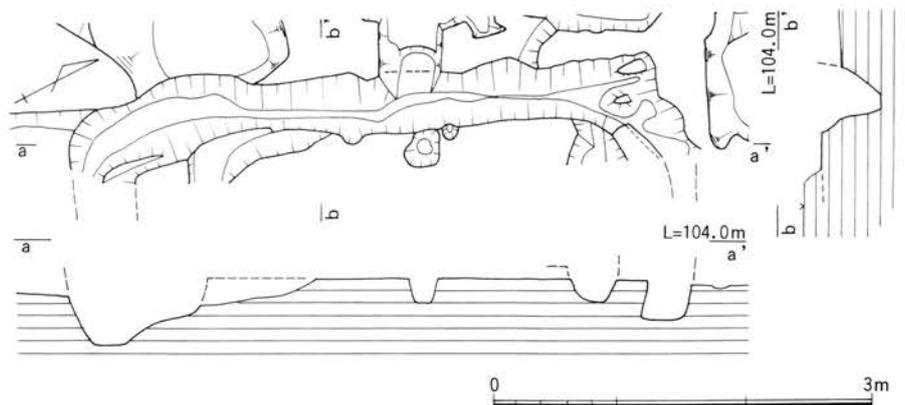
(6) 6 トレンチ

5 トレンチの南端付近から北西に向かつてのびる小規模な尾根上に設定した。長さ13m、幅2mを測る。6 トレンチでは、崖状地形 S X10を検出し、その堆積土から弥生土器が出土した。6 トレンチは第2次調査の際にもさらにトレンチを延長し、遺物の包含状況などを確認した。

崖状地形 S X10 第1・2次両調査合わせると、検出上端長4mを測る。上端部の標高は101m付近である。S X10の堆積土から両調査を通じて、広口壺 A・B、長頸壺、甕、鉢 B、高杯 A・B・D、脚部、底部などが出土した(90~104)。第5次調査ではこの周囲を全面的に調査し、S X10と連続する崖状地形が広がることを確認した。

(7) 7 トレンチ

5 トレンチの南端から東に向かつて、主尾根の東側斜面に設定した。5 トレンチ南端から約20mのところできく屈折し、「く」の字状を呈する。総延長40m、幅2mを測る。7 トレンチでは、竪穴式住居跡 S B09などを検出した。S B09については、8 トレンチとして全面的に調査を



第 5 図 竪穴式住居跡 S B12 実測図

実施した。また、トレンチの南拡張部を試掘したところ、岩盤層を人為的に加工したものとみられる切岸状の急斜面と、その下縁に形成された平坦面を確認した。ただし、調査中に崩落の危険が生じたため、最低限の記録の後、埋め戻した。

2. 8 トレンチの調査

前述の試掘調査の結果を受けて、丘陵尾根の東側斜面で面的な調査を実施した。7 トレンチを挟んでその北側と南側にそれぞれ調査区を設定した。8 トレンチは、7 トレンチの北側に設定した調査区で、竪穴式住居跡2基を検出した。

竪穴式住居跡 S B09(図版第7上段) 7 トレンチで一部を検出した住居跡である。主尾根の東側斜面の頂部付近に位置する。丘陵高位側を「コ」の字状に掘り下げて、東側の低い部分に掘削土を置いて平坦な床面を造成したと考えられる。ただし、東側はすでに流失して遺存しない。西辺長6.0m、北辺残存長5.0m、深さ0.7mを測る。平面形は周壁の形状などから方形と考えられる。周壁は西辺が良く遺存する。周壁溝は東辺を除く三方に遺存し、2～3回の掘り直しが確認できる。周壁溝は幅0.25m、深さ0.05～0.15mを測る。柱穴の配置を検討すると、6主柱配列が3重に重なっている状況が判読できる(P-1～6)。床面のほぼ中央に土坑2基(P-7・8)が接して存在する。P-7は長軸長1.5m、短軸長1.0m、深さ0.4mを測り、土坑底は複雑に起伏する。P-8は、径0.7m、深さ0.56mを測り、円形で断面形は掘り鉢状を呈する。両土坑は貯蔵穴と考えられる。2基の土坑の東側に地床炉と思われる炭の薄い堆積を確認した。住居埋土から広口壺B、甕D、鉢A、脚部などが出土した(12～23)。

また、住居廃絶後、その埋土上面から土坑を掘り込み、中央に高さ0.3mの柱状の丸みをもった自然石を据えて焼土で埋め戻した遺構を検出した(図版第84(2))。時期は不明である。

竪穴式住居跡 S B51(図版第20右最上段) 調査区の北寄りで検出した。片山4号墳の埋葬施設 S X19と重複するため、西側の一部のみが遺存する。北西辺残存長2.0m、南西辺残存長0.8m、深さ0.05mを測る。周壁溝の深さは床面から0.05mを測る。周壁溝が「く」の字形に屈曲することから、平面形は方形と考えられる。床面で支柱穴と思われる柱穴1基を検出した。周壁溝から広口壺Bが出土した(26)。

3. 9 トレンチの調査

7 トレンチの南側に設定した。竪穴式住居跡10基、^(注10)段状遺構1基、溝1条を検出した。

竪穴式住居跡 S B23(図版第7下段) 片山3号墳に重複して検出した。住居跡の東側を片山3号墳の周溝 S D17に、南側を崖状遺構 S X53にそれぞれ削平されているため、北側の一部を検出したのみである。北西辺残存長3.8m、西辺残存長1.2m、深さ0.5mを測る。平面形は、周壁が直線的であることから方形と考えられるが、コーナーがやや鈍角に開くことから多角形の可能性もある。幅0.15～0.3m、深さ0.05～0.15mを測る周壁溝がめぐる。支柱穴は2.0mの間隔で2基検出した。その主軸は周壁に平行する。また、支柱穴の間に直径0.6m、深さ0.4mの円形を呈す

る土坑がある。床面には炭化した木材がみられることから、当住居跡は焼失したと考えられる。遺物は出土しなかった。

竪穴式住居跡 S B 32(図版第 8) 調査区南端、主尾根の稜線上に位置する。第 1 次調査で確認し、第 2 次調査では可能な限り調査区を広げて、その全容を明らかにするように努めた。周壁の遺存度は良好とは言えず、北西部分は削平されて遺存しない。平面形は、各コーナーが弧を描き、各辺がいくぶん直線的な隅丸方形と考えられる。規模は、南辺が調査区外にあるため不明であるが、東西辺間長 5.7m、深さ 0.15m を測る。周壁溝は幅 0.15~0.35m、床面からの深さ 0.02~0.07m を測る。柱穴は直径 0.2~0.3m の円形掘形をもち、住居内に多数存在する。住居跡のほぼ中央に中央土坑(P-1)がある。P-1 は、傾斜を違えて 2 段に掘り込まれており、上段には拳大の自然石が人為的に配置されたものと思われる(図版第 8 下)。また、自然石直下の堆積土には、炭が少量混入していた。下段の側壁はほぼ垂直に掘り込まれており、底部が平坦な円筒形を呈する。上段長軸長 1.1m、下段径 0.5m、床面からの深さ 1.2m を測る。その機能として、灰穴炉、柱穴、貯水土坑などの可能性が指摘できる。P-1 から東北東方向に 1 条の直線的な溝を検出した。溝は幅 0.2~0.3m、深さ 0.1m 前後を測るが、溝底は住居中心方向に向かってゆるく傾斜しており、排水溝とは考えられない。また、住居東寄りに長辺 0.9m、短辺 0.8m、深さ 0.24m を測る土坑(P-2)を検出した。貯蔵穴と考えられる。周壁溝の掘り直しや柱穴の配列から複数回の建て替えが想定できる。住居埋土から弥生土器や素文鏡が出土した。弥生土器には、広口壺 B、高杯 A・B、底部、高杯脚部などがある(33~52)。また、素文鏡(1359)は住居跡の北西の周壁溝に近い地点で、床面から 3.5cm ほど浮いた層位から鏡背を上に向けた状態で出土した。

竪穴式住居跡 S B 33(図版第 9 下段) 竪穴式住居跡 S B 32 の北約 1.5m に位置する。平面形は平行四辺形と考えられるが、住居跡の遺存状態は良好と言えない。東西辺間長 5.0m、南北辺間長 4.0m、深さ 0.05~0.1m を測る。周壁溝は幅 0.2m、深さ 0.02~0.04m を測るが、西辺と東辺に部分的に存在するのみである。柱穴は掘り込みの浅いものが多く、主柱穴の抽出は困難である。住居跡中央やや北寄りに浅く掘り窪めた皿状の土坑があり、炭が薄く堆積する。炉の痕跡と考えられる。住居跡底面は平坦でなく、凹凸に富んでおり、貼り床が想定される。特に北西部は浅く掘り残されている。住居埋土から無頸壺 C、底部(24・25)が出土した。

竪穴式住居跡 S B 34(図版第 9 上段) 竪穴式住居跡 S B 33 の北に接して検出した。平面形は、各辺の長さが不揃いで、いびつな台形を呈すると考えられる。遺存状態は S B 33 よりさらに悪く、周壁溝を断続的に検出したにすぎない。東西辺間長 3.5m、東辺推定長 4.5m、西辺推定長 3.3m を測る。深く掘り込まれた 2 基の柱穴(P-1・2)が主柱穴と考えられる。住居跡中央やや北寄りに、長軸長 0.8m、短軸長 0.7m、深さ 0.15m を測る隅丸方形の浅い土坑がある。土坑内には炭が堆積しており、地床炉の痕跡と考えられる。住居跡底面は、この地床炉跡を境に北半分が 5cm 深く掘り込まれている。遺物は出土しなかった。

竪穴式住居跡 S B 35(図版第 9 下段) 竪穴式住居跡 S B 33 の南東側で、これと重複するかたちで検出した。S B 33 によって削平されているため、住居跡の南西隅を検出したのみである。西辺

に幅0.2m、深さ0.02mを測る周壁溝が遺存する。周壁のコーナーが直角であることから、平面形は方形と考えられる。西辺残存長2.8mを測る。深さが0.1mを越える柱穴は1基のみである(P-1)。遺物は出土しなかった。

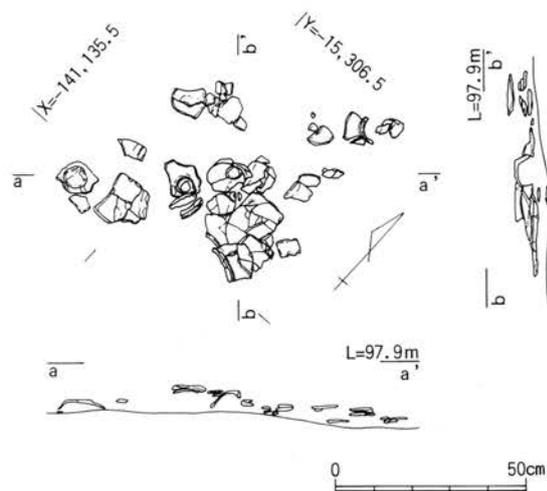
竪穴式住居跡 S B 36(図版第20左上段) 片山3号墳の東約8mで検出した竪穴式住居跡の残欠である。遺存状態は極めて悪く、丘陵高位側の周壁がわずかに遺存する。幅0.1~0.4m、深さ0.15mを測る周壁溝がゆるく弧状を呈することから、平面形は円形の可能性が高い。復原径3.8m、深さ0.35mを測る。柱穴を1基検出した。遺物は出土しなかった。

竪穴式住居跡 S B 39・54・56(図版第10) 片山3号墳の下層で検出した。いずれも限られた範囲に重複しており、住居の建て替え、または住居などの敷地を確保するための造成地形と考えられる。このうち、S B 39・56は周壁溝を伴っており、平面形はS B 39が方形、S B 56が円形と考えられる。S B 39には2基の柱穴がみられる。S B 54は周壁溝を伴わないが、周壁が直角に屈曲することから平面形は方形と考えられる。各住居跡の規模は、S B 39が北西辺残存長2.5m、深さ0.2m、S B 54が北辺残存長1.5m、西辺残存長2.1m、深さ0.2mを測る。S B 56は検出長4.8m、復原径7.4m、深さ0.25mを測る。いずれの住居跡からも遺物は出土しなかった。

竪穴式住居跡 S B 52(図版第20左中段) 竪穴式住居跡 S B 09の南東約12mに位置する。丘陵斜面で検出したため、周壁溝を検出したにとどまる。幅0.35~0.5m、深さ0.1~0.15mを測る周壁溝がゆるく屈曲することから、平面形は隅丸方形と考えられる。床面上で柱穴を複数検出したほか、周壁溝内にも小規模な柱穴を検出したが住居跡に伴うものかどうか不明である。周壁溝から広口壺B、高杯が出土した(27・28)。

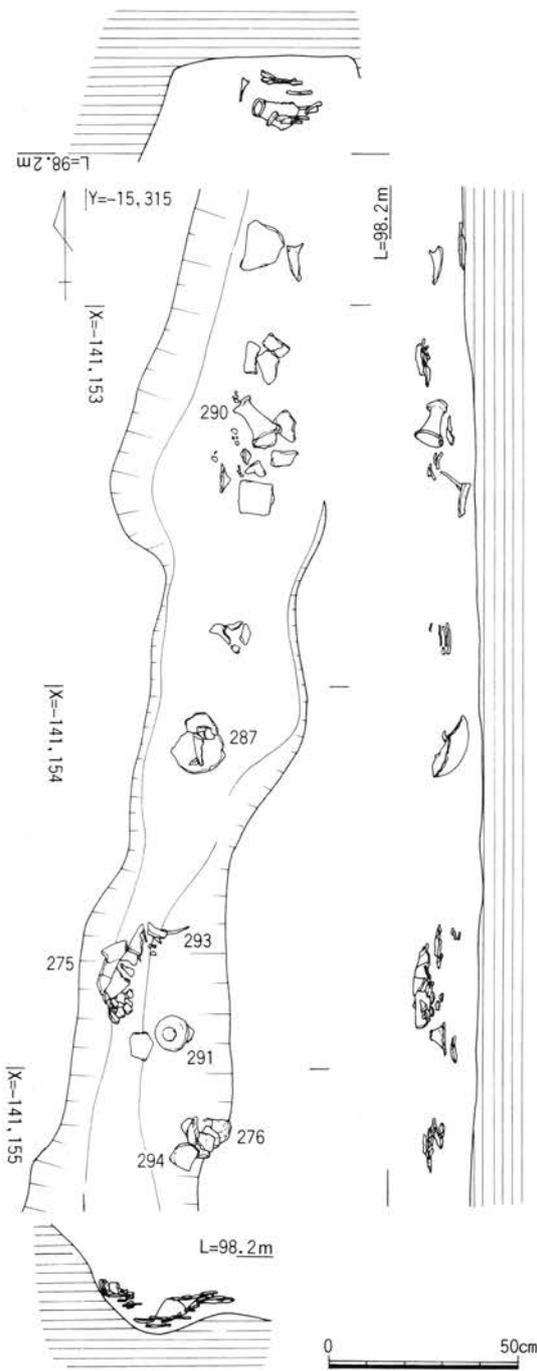
段状遺構 S X 40(図版第10) 竪穴式住居跡 S B 39・54・56と重複して検出した。壁面の傾斜がゆるく、底面も傾斜していて末端を確認できない。また、柱穴や周壁溝も確認できない。このような特徴は、後述する段状遺構 S X 69や S X 112などと比べても、特異な形態である。ただ、自然地形の傾斜とは異なるので人為的な造成と考えられる。検出長7.3mを測る。遺構の性格や用途は不明である。遺構埋土から直口壺、甕A・C、高杯A、鉢B、器台、有孔鉢、底部などが出土した(55~74)。

溝 S D 15(図版第11) 調査区の南寄りで検出した。陸橋部も含めた総検出長は17.3mを測る。東側約3/4を第1次調査で、西側約1/4を第2次調査で検出した。なお、第2次調査検出分は、概報では溝 S D 128として報告した。東西方向に主軸をもち、主尾根の軸線と直交する方向に掘削されている。また、主尾根の稜線に平行して、幅1.6m前後を測る陸橋状の掘り残し部分があり、南北方向の通路状を呈する。陸橋部の西側辺に沿って径0.2~0.3mを測る、やや深めの柱



第6図 土器溜まり S X 37遺物出土状況図

穴が南北に並んで柵列状を呈する。S D15は、北側の崖状遺構S X53の大規模な造成によって削平されており、遺存する深さは0.1~0.3mと浅い。横断面形は、幅の広い平坦な底面から斜面が急角度でやや内湾気味に立ち上がる。幅2.7~3.3m、最大の深さ0.5mを測る。S D15の南側に位置する住居跡の遺存状況や、北側のS X53から想定される後世の大規模な削平を考慮すると、本来は深さが2mを越える箱堀のような壕状遺構であったと考えられる。溝の底面に貼り付くようにして多量の弥生土器が出土した(105~243)。なお、第2次調査で検出した溝S D74も一連のものとする、総延長は約28mを測る(陸橋部を含む)。



第7図 竪穴式住居跡S B69遺物出土状況図

土器溜まりS X37(第6図) 段状遺構S X40と竪穴式住居跡S B36に挟まれた空間で検出した。径2m程度の礫敷面があり、弥生土器がややまとまって出土した。弥生土器には、無頸壺A、甕A、底部、高杯脚部などがある(75~86)。ただし、出土土器はいずれも細片が多く、完形品ではないことから意図的な土器供献を示すものではないと考えられる。また、これらの土器とともに鐸形土製品(1361)も出土した。

(伊賀高弘・筒井崇史)

第2節 平成10年度の調査

1. 10トレンチの調査

9トレンチの南側に設定した。10トレンチでは、竪穴式住居跡6基、段状遺構1基、溝1条、土坑2基などを検出した。

竪穴式住居跡S B68(図版第20左下段) 10トレンチの南端に位置する。第2次調査で北半部を、第4次調査で南半部を検出した。周壁のコーナーがほぼ直角であることから、平面形は方形と考えられる。西辺長3.1m、北辺残存長1.6m、深さ0.3mを測る。比較的小規模な遺構で、周壁溝や主柱穴は検出されなかった。埋土から広口壺Bが出土した(297)。

段状遺構S X69、竪穴式住居跡S B69・82・83(図版第12) 竪穴式住居跡S B32の東側斜面で検出した段状遺構S X69と、その内部に営まれた竪穴式住居跡群である。S X69の周壁は等高線

と平行して掘削されている。全長は約10mを測る。S X69の造成面の残存幅は2.5m前後で、丘陵低位側はすでに流失している。住居跡は、造成面に3基分の周壁溝を検出した。重複関係から、S B69→S B82→S B83の構築順を確認した。各住居跡の南北辺間長は、S B69が4.4m、S B83が5.5mを測るが、S B82は南辺を確認できなかつたので不明である。床面には、直径0.2～0.25mの柱穴が周壁溝に沿うように掘削されている。これらの柱穴は、補助支柱と考えられるが、支柱穴と思われる柱穴は確認できなかつた。周壁溝から弥生土器がややまとまって出土した(第7図)。これには甕A、底部、脚部などがある(275・276・287・290・291・293・294)。また、埋土から広口壺C、甕A、高杯A、底部、脚部などが出土した(271～274・277・286・288・289・292・295・296)。

また、S X69の南東に接して浅い掘り込みがある。平面形が南西辺長3.0m、南東辺残存長0.8m、深さ0.2mを測る方形を呈することから、小規模な竪穴式住居跡の可能性はある。

竪穴式住居跡 S B79・80(図版第33下段) 段状遺構 S X69の南東約5mに位置する。どちらも丘陵低位側は流出しており、住居跡の床面がわずかに遺存するにすぎないが、S B79・80ともに周壁溝を伴う。S B80は南東側をより深く掘り込まれた竪穴式住居跡 S B236によって切られている。周壁溝がゆるやかに弧状を呈することから、平面形は円形の可能性がある。S B79は周壁溝が南端付近でゆるやかに屈曲することから、平面形は隅丸方形と考えられる。S B79の埋土から甕破片、高杯Cなどが出土した(298・299)が、S B80の出土遺物はない。

溝 S D74 10トレンチの北端部で検出した。等高線と直交する方向に掘削されているが、若干蛇行している。横断面形は「V」字形で東にいくほど検出面からの深さは増す。埋土から甕が出土した(344)。西側に溝 S D15があり、S D74はS D15の東延長部分と考えられる。

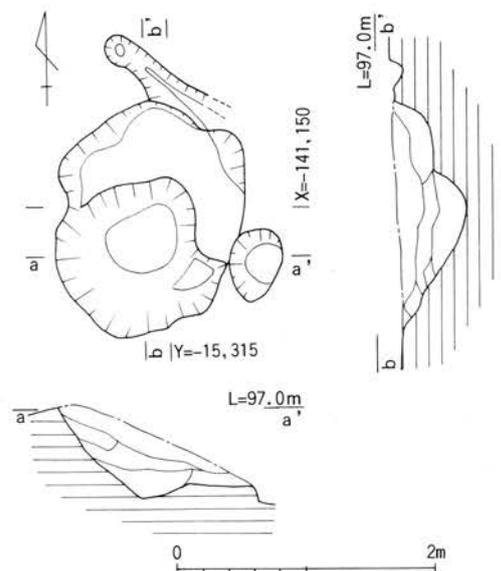
土坑 S K73(第8図) 段状遺構 S X69の北西に接して検出した。平面形はややいびつな円形を呈する。長軸長1.8m、短軸長1.3m、深さ0.6mを測る。埋土から甕C、器台A、壺体部、底部、高杯脚部などが出土した(300～307)。

土坑 S K81 S B82・83の東側で検出した。平面形は東西方向に主軸をもつ楕円形を呈する。長軸長3.2m、短軸長2.4m、深さ0.2～0.3mを測る。出土遺物はない。

2. 11トレンチの調査

8トレンチの北側に面的に広げた部分と丘陵頂部のやや細長い部分である。なお、丘陵西側斜面の一部に実施した試掘トレンチも11トレンチに含める。11トレンチでは竪穴式住居跡4基、段状遺構1基、崖状地形1か所などを検出した。

竪穴式住居跡 S B60(図版第13下段) 木津城跡



第8図 土坑 S K73実測図

から南へ延びる主尾根の稜線上で検出した。周壁や周壁溝が部分的に残るにすぎず、遺存状態は良好と言えない。住居跡の中央に近世以降の地境溝S D07が丘陵稜線上に沿って深く掘り込まれている。断続的に遺存する周壁や周壁溝から、少なくとも1回の建て替えがあったと考えられる(S B60A・60B)。両住居跡の平面形は南北方向に長いびつな隅丸長方形と考えられる。S B60Aは、南北辺間長5.0m、東西辺間長3.7m、深さ0.15mを測る。S B60Bは南北辺間長4.0m、東西辺間長3.7m、深さ0.05~0.1mを測る。両住居跡はほとんど重複しており、床面には大小の柱穴や小溝を検出したが、それぞれの住居跡に伴う主柱穴などを区別することは困難であった。埋土から、甕体部、底部、高杯脚部などが出土した(345~351)。ただし、それぞれの遺物がどちらに属するのかわからない。

竪穴式住居跡S B62(図版第13上段) 竪穴式住居跡S B60の北約5mに位置する。11トレンチ北端で検出したが、住居跡の大部分は調査区外に広がる。S B60同様、地境溝S D07で削平されており、西辺と南辺の一部を検出したのみである。平面形は周壁の形状から隅丸方形と考えられる。南辺残存長3.1m、深さ0.15mを測る。しかし、周溝溝・柱穴は検出できなかった。また、出土遺物もない。

竪穴式住居跡S B61・71(図版第14上段) 竪穴式住居跡S B60の東、標高差にして約7m下方に位置する。両住居跡は重複しており、下位のS B71が新しい。平面形は、丘陵低位側が流失しているが、残存する周壁の形状から、S B61は円形、S B71は隅丸方形と考えられる。S B61は復原径5.6m、深さ0.6mを測る。幅0.2~0.3m、深さ0.1~0.15mを測る周壁溝を伴う。主柱穴はP-1のみ確認した。S B71は西辺残存長2.8m、北辺残存長1.9m、深さ0.3mを測る。S B71も幅0.15~0.3m、深さ0.1mを測る周壁溝を伴うが、明確な主柱穴を検出することはできなかった。ただし、床面には大小の柱穴が複数認められる。S B61では、埋土から甕C、器台A、底部、高杯脚部などが出土した(357~363)。また、S B71でも、埋土から器台A、底部、高杯杯部などが出土した(352~356)。

段状遺構S X70(図版第14下段) 竪穴式住居跡S B61の北西約2mに位置する。丘陵高位側を掘削して造成される。周壁は等高線とほぼ平行する。遺構の北辺は調査区外までのびる。検出長5.2m、造成面残存幅1.3m前後を測る。造成面には、周壁に沿って住居跡の周壁溝とみられる小規模な溝が掘削されている。検出状況から複数の住居跡が営まれていたと思われる。また、造成面で若干の柱穴を検出した。埋土から器台Aが出土した(364)。

崖状地形S X90(図版第26左上段) 主尾根の西側斜面に設定した試掘トレンチで検出した。S X90は現地表面の傾斜よりも急角度で約45°を測る。上端の標高は102m付近である。斜面下方ではやや傾斜がゆるくなるものの下端を確認できなかったため、第3次調査では、この試掘トレンチを西へ延長して、さらに崖状地形の検出に努めた。

3. 12トレンチの調査

8トレンチの東側に設定した。竪穴式住居跡2基、溝1条、土坑1基などを検出した。

竪穴式住居跡 S B 75(図版第15上段) 12トレンチ西壁際、やや北寄りで検出した。丘陵高位側だけが残存し、低位側はすでに流失している。周壁が直線的で、コーナーがゆるく屈曲することから、平面形は隅丸方形と考えられる。西辺残存長2.3m、北辺残存長1.3m、深さ0.2mを測る。周壁溝は幅0.1~0.3m、深さ0.05~0.1mを測る。明らかに支柱穴といえるものは確認できなかった。周壁溝ないし、床面直上から広口壺A、甕A、高杯A、高杯脚部、器台などが出土した(308~315)。

竪穴式住居跡 S B 76(図版第15中段) 竪穴式住居跡 S B 75の北に接して検出した。S B 75と一部重複しており、新しく位置づけられる。第2次調査で、その西辺と南辺の一部を検出し、第4次調査で残余の部分を検出した^(註12)。遺存するのは丘陵高位側のみで、低位側は流失している。平面形は、周壁が直線的でコーナーがゆるく屈曲することから隅丸方形と考えられる。周壁は等高線と平行する。南北両辺間長4.5m、北辺残存長2.7m、最大の深さ0.6mを測る。周壁溝は幅0.25m前後、床面からの深さ0.04~0.1mを測り、途切れることなくめぐる。ただ、周壁は外方に向かってゆるやかに立ち上がっており、とくにコーナーでその傾向が顕著である。周壁溝は南辺の周壁から若干離れてやや鈍角に折れ曲がる。支柱穴と思われる柱穴1基(P-1)と中央ピットと思われる土坑の残欠1基(P-2)を検出した。埋土から広口壺E、甕A・E、高杯Aなどが出土した(316~342)。ただし、317・334はトレンチ西壁際を試掘中に出土したもので、必ずしもS B 76出土とは言い切れない。

土坑 S K 77(図版第15上段) 竪穴式住居跡 S B 75の西壁に重複して検出した。南北長0.8m、深さ0.15mを測るが、西辺は第1次調査の際にも未検出である。平面形は隅丸長方形である。土坑内から甕ないし壺の体部片が出土した(343)。

4. 13トレンチの調査

9トレンチの東側に設定した。竪穴式住居跡5基、段状遺構5基、土坑1基などを検出した。

竪穴式住居跡 S B 121(図版第16上段) 13トレンチのほぼ中央で検出した。崖状遺構 S X 53によって削平されているため、遺存状態は良好とは言えないが、丘陵高位側の周壁が残存する。幅0.15~0.25m、深さ0.1~0.2mを測る周壁溝が弧状を呈することから、平面形は円形と考えられる。復原径5.5m、深さ0.45mを測る。床面は、西からのびる浅い溝状遺構によって攪乱されているため、ほとんど遺存しない。柱穴の配列から、支柱配列は、多角形から4支柱へ変遷していることが確認できる。住居のほぼ中心に直径0.25mを測る円形の小規模な土坑(P-1)があり、炭が混入していた。住居の埋土から甕破片、ミニチュア土器などが出土した(365~368)。

竪穴式住居跡 S B 122(図版第20右3段目) 竪穴式住居跡 S B 121の南約5mに位置する。周壁溝のみが遺存する。周壁溝は検出長2.0m、深さ0.05mを測る。柱穴などは遺存していなかった。また、住居に伴う床面もわずかししか遺存していなかった。周壁溝から平面形や規模を復原することは困難であるが、円形の可能性が高い。周壁溝から甕または壺の底部が出土した(375)。

竪穴式住居跡 S B 123(図版第16下段) 竪穴式住居跡 S B 121の南約7mに位置する。住居跡の

周壁溝のみが遺存する。周壁溝は等高線に平行して掘られており、検出長4.7m、幅0.2～0.5m、深さ0.15～0.3mを測る。平面形は、周壁溝が直線的であることや、コーナーがゆるやかに屈曲することから隅丸方形と考えられる。周壁溝から、いずれも細片であるが、甕、底部、高杯接合部などが出土した(371～374)。

竪穴式住居跡 S B 124(図版第15下段) 竪穴式住居跡 S B 123の西に位置する。第5次調査では、さらに南側の調査を実施した(F地区)が、すでに削平されており、続きを検出することはできなかった。幅0.25～0.4m、深さ0.1～0.2mを測る周壁溝が弧状にめぐることから、平面形は円形と考えられる。復原径6m前後、深さ0.5mを測る。床面は最大0.5mほどが遺存していたが、柱穴などは確認できなかった。住居埋土から広口壺、器台、土玉が出土した(376～378・1362)。

竪穴式住居跡 S B 130(図版第20右最下段) 13トレンチの西端近くに位置する。南西側を崖状遺構 S X 53によって削平されている。北東辺長1.9m、北西辺残存長0.5m、深さ0.25mを測る。小規模な溝が周壁に沿って部分的に存在することから、竪穴式住居跡の残欠と考えられる。遺物は出土しなかった。

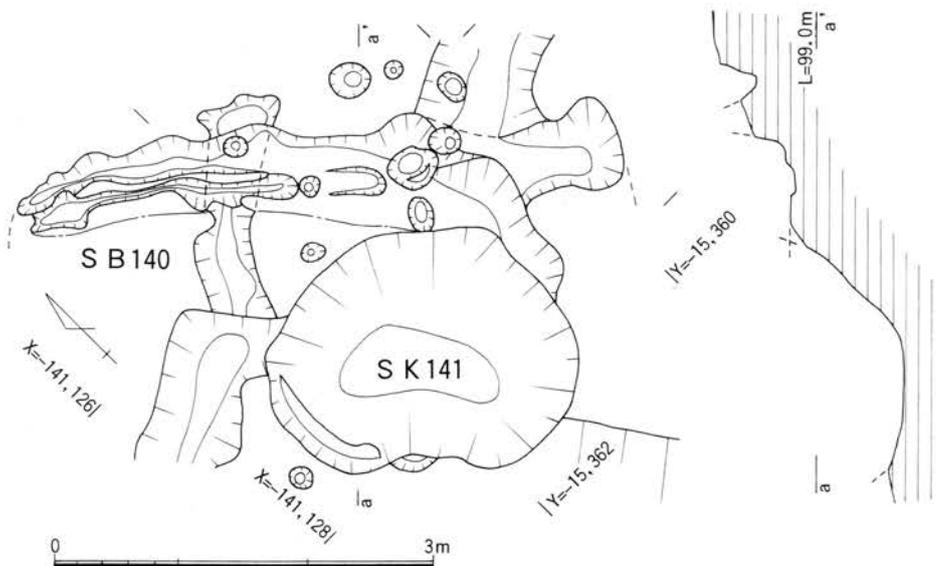
竪穴式住居跡 S B 140(第9図) 竪穴式住居跡 S B 121の北西約10mに位置する。周壁溝のみが遺存し、床面はほとんど認められない。周壁溝は、直線的に掘削されており、検出長4.8m、深さ0.25mを測る。周壁溝の幅は東半でやや広いが、西半は2条の溝に分岐する。同一地点での建て替えに伴うものである可能性がある。周壁溝から小型壺、長頸壺などが出土した(369・370)。

竪穴式住居跡 S B 151(図版第20右2段目) 段状遺構 S X 69の東約10mに位置する。周壁溝と思われる小規模な溝を検出した。ゆるく「L」字状に屈曲することから竪穴式住居跡の周壁溝と判断した。遺物は出土しなかった。

段状遺構 S X 108～110(図版第17) 尾根の稜線に近い地点で検出した。周壁は直線的で、規模の小さい段状遺構もしくは竪穴式住居跡と考えられる。S X 108は周壁のみ検出した。北東辺長3.1m、南東辺残存長0.6mを測る。北東辺が「く」の字状に屈曲することから、平面形は隅丸方形ではなく多角形の可能性もある。S X 109は長さ1.7mの溝を検出したが、北西側が大きく攪乱されているため、規模は不明である。溝の南約0.6mのところ検出された炭は S X 109に伴うものである可能性がある。S X 110は小規模な溝と柱穴を検出したが、平面形や規模を知ることができなかった。なお、いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

段状遺構 S X 112(図版第18) 段状遺構 S X 110などの南西約3mに位置する。遺構の北西部に第1次調査の際の試掘トレンチがある。周壁は、等高線と平行して直線状を呈する。検出長8.7m、深さ0.35～0.4m、造成面の残存幅1.0m弱を測る。周壁に沿って2条の溝や小規模な柱穴が存在する。2条の溝は竪穴式住居跡の周壁溝の可能性が高い。遺物は出土しなかったが、第1次調査の試掘トレンチから出土した甕 B (253)が S X 112に伴うものである可能性が高い。

段状遺構 S X 126(図版第19) 溝 S D 15の南、竪穴式住居跡 S B 32・33の西に位置する。西に向かって傾斜する丘陵斜面で検出した。平面形は不整形であるが、これは比較的早い時期に周壁や遺構そのものが崩れて形状が変形したためと考えられる。直線的な溝が北寄りに1条認められ



第9図 竪穴式住居跡S B140、土坑S K141実測図

る。この溝は周壁に接しないことや検出長がやや長いことから、段状遺構に伴う雨落ち溝のような性格を考えることができる。造成面はほとんど遺存しておらず、柱穴などの住居や建物に関連する遺構は検出しなかった。埋土下層から広口壺A、長頸壺、甕A、高杯A・B、器台Aなどが出土した(379~415)。

土坑S K141(第9図) 竪穴式住居跡S B140の南に隣接する。平面形は楕円形を呈する。長軸長2.5m、短軸長1.8m、深さ0.9mを測る。長軸の方位がS B140の周壁溝と一致するが、関連するものであるかどうか不明である。

柱穴S P133(図版第19) 段状遺構S X126の北側に近接する。直径0.4m、深さ0.9mを測る。壺または鉢の底部が出土した(418)。

(伊賀高弘・筒井崇史)

第3節 平成11年度の調査

1. 北地区の試掘調査(14~21トレンチ)

3トレンチの北辺で弥生土器が出土したことをうけて、3トレンチよりも北へのびる丘陵上に試掘トレンチを設定した。

(1)14トレンチの調査(図版第23左・第10図)

3トレンチから北西に派生する尾根に設定した。長さ57m、幅3mを測る。遺構としては、溝1条を検出した。また、標高97~102mの地点では、現地表下約1.2mで、段状の地形を検出した。積極的に人為的な掘削の痕跡と判断するには至らなかったが、段状地形の直上の堆積土から甕A、高杯脚部などが出土した(597・600・603・609・616)。このほかにも、トレンチ内から弥生土器が出土した。

溝S D01(図版第23) 標高94~95mの地点で検出した。幅4.5m、尾根側の深さ1.5mを測り、

尾根切りの溝と考えられる。埋土から少量の弥生土器が出土した(509・510)。S D01は当初、方形台状墓の区画溝、あるいは木津城跡に関連する遺構と考えた。しかし、北西側に位置するマウンド状の高まりの調査によって、墳墓ではないことが判明し、弥生土器が出土することから高地性集落に関連する遺構と判断した。

また、北東側の丘陵斜面を拡張して関連する遺構の検出に努めた。その結果、S D01の北東側で、約45°の傾斜で幅2m程度の斜面の削り出しを確認した。この斜面では拳大から人頭大までの円礫の露頭を検出した。この斜面とS D01の関連については明らかにできなかった。

(2)15トレンチ(図版第24中央・第10図)

3トレンチから北東に派生する尾根に設定した。長さ70m、幅3mを測る。竪穴式住居跡3基、段状遺構1基、溝1条を検出した。堆積土からは弥生土器が出土した。

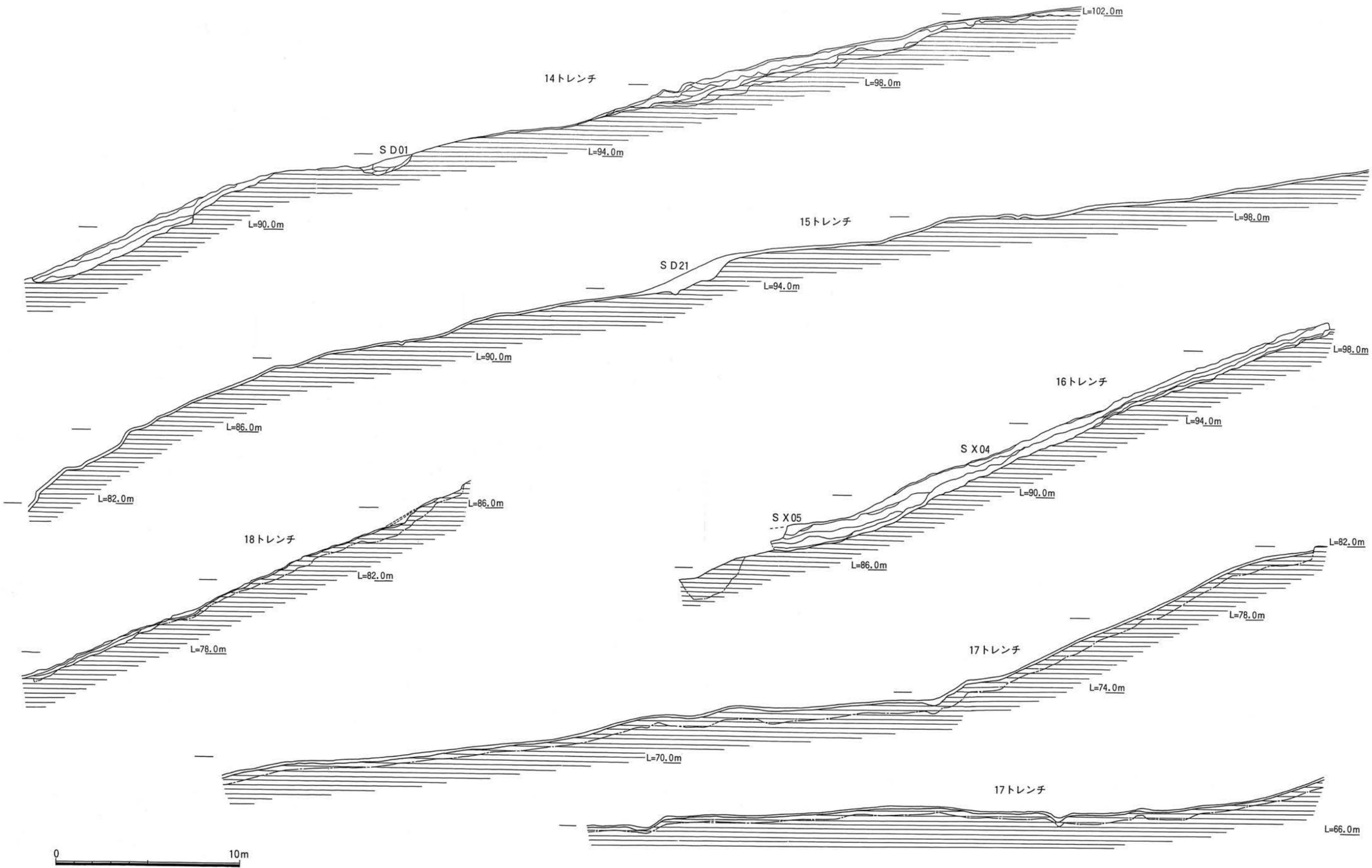
溝S D21(図版第21) 標高94~96mの地点で検出した。丘陵尾根を削り出して、比高差約3mの崖状地形を作り出し、その北側にS D21を掘削する。S D21は、地山を掘り込んでおり、幅2.0~3.3m、深さ0.35~0.5mを測る。崖状地形の崖面には、14トレンチS D01の北側斜面で検出したのと同じような拳大から人頭大までの円礫の露頭を確認した。S D21の北側には若干の盛土を行っている。S D21は、その検出状況や出土遺物が弥生土器に限られることから、高地性集落に関連する遺構と判断し、14トレンチで検出した溝S D01と一連のものと考えられる。

竪穴式住居跡S H03(図版第22上段) S D21の上方、標高約97mの地点で検出した。周壁と床面の一部を検出したが、周壁溝はみられなかった。周壁はほぼ直角に屈曲することから、平面形は隅丸方形と考えられる。南東辺残存長2.5m、南西辺残存長1.2m、深さ0.3mを測る。丘陵高位側を掘削して、床面を造成する。床面残存幅2.3m、床面残存長7.6mを測る。周壁のコーナー付近に直径0.2mの柱穴を検出した。また、住居の中央、南壁寄り直径0.5m、深さ0.4mを測る二段構造の土坑と、ここから北西に向かってのびる幅0.25mの溝を検出した。床面直上で鉢B(511)のほか、弥生土器小片が出土した。

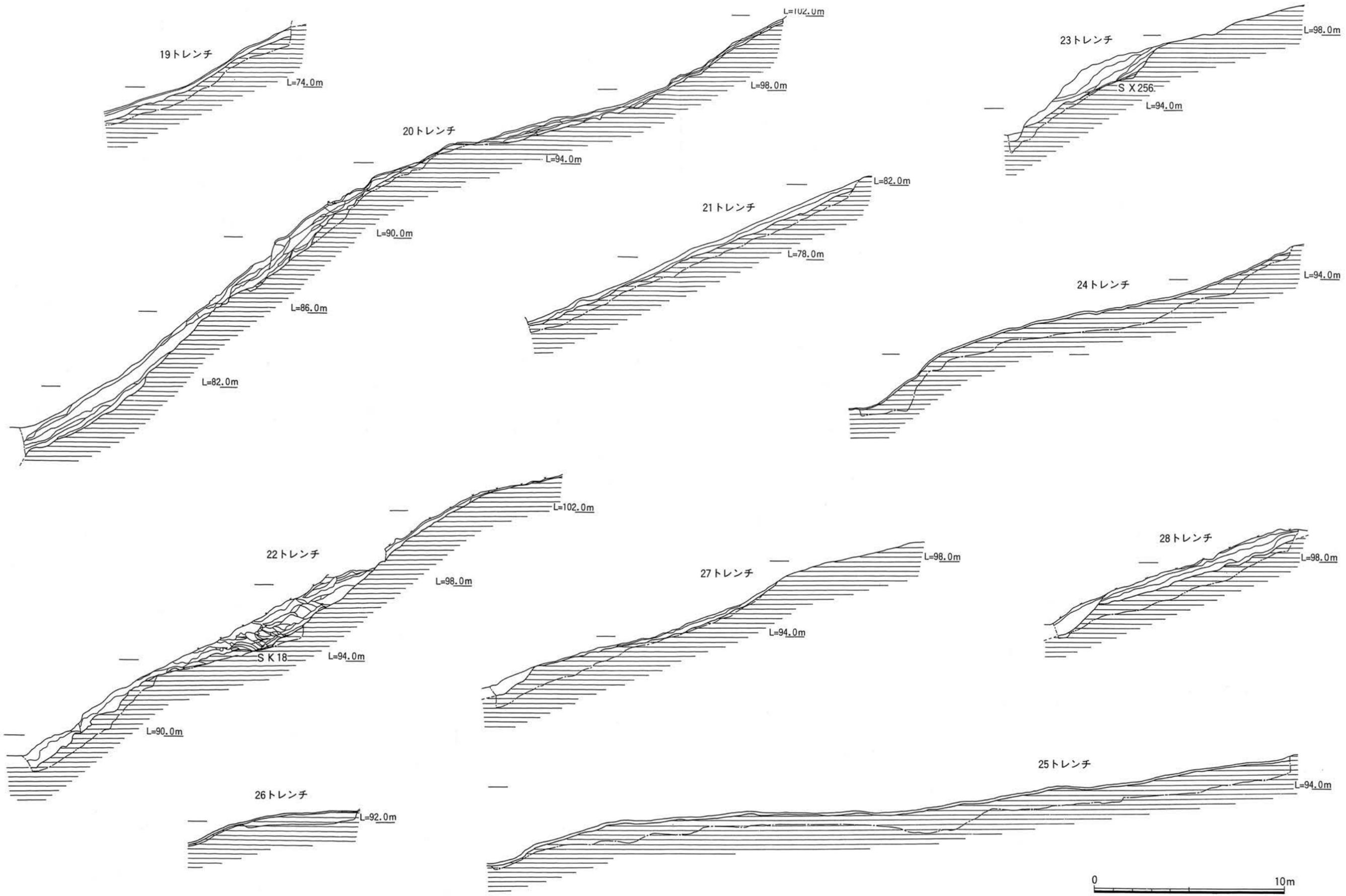
竪穴式住居跡S H06・07(図版第22下段) トレンチ南端の標高99~100mの地点で検出した。3トレンチ北端で検出した落ち込みS X06は、これらの住居跡の掘り込みと考えられる。S H06は東半が調査区外にのびるが、直径3.0m程度の小規模な住居跡である。幅0.2m、深さ0.4mを測る周壁溝を伴う。周壁溝から底部片が出土した(513)。S H07は、S H06によって東辺を削平されているが、3トレンチで検出した部分を含めると、南辺長5.0m、床面残存幅1.9m、深さ0.2mを測る。S H07は周壁溝を伴わない。両住居跡とも主柱穴は検出しなかった。

また、両住居跡の下方に位置する15・16トレンチの分岐点付近で段状を呈する地形から弥生土器がややまとまって出土した(497~501)。この段状地形は人為的な遺構とは認められなかった(図版第24)。

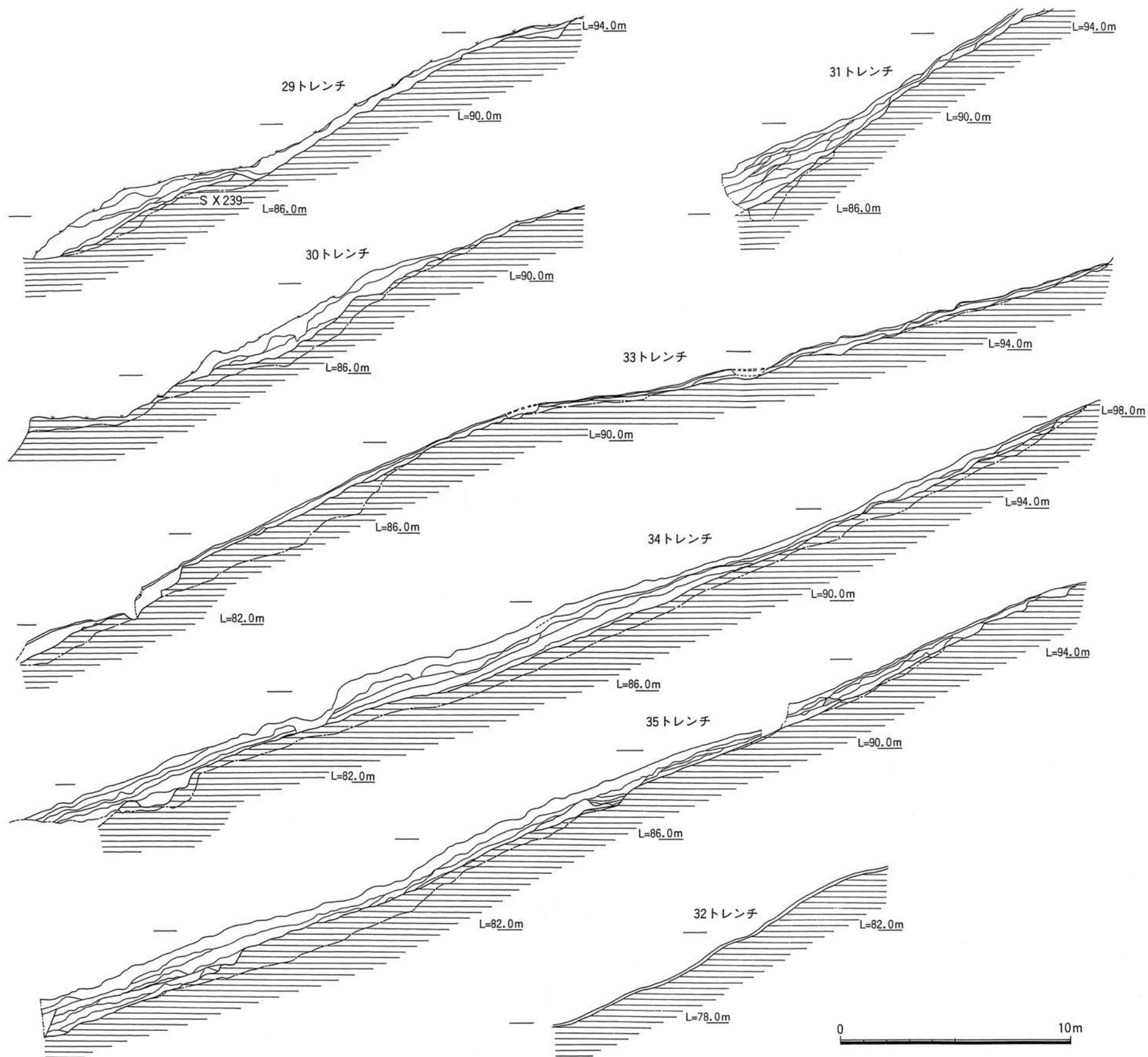
段状遺構S X12(図版第21下段) 溝S D21の北約9m、標高91~92m付近で検出した。S X12は、丘陵高位側を掘削しており、南東辺検出長4.5m、床面残存幅1.0m、深さ0.7mを測る。埋土から器種不明(高杯か)の弥生土器などが出土した(512)。なお、S X12が検出された標高が後



第10図 14~18トレンチ土層断面図



第11図 19~28トレンチ土層断面図



第12図 29～35トレンチ土層断面図

述する16トレンチ土器溜まり S X 04やB地区平坦面 S X 238が検出された標高とほぼ同じである点は注意される。

(3)16トレンチ(図版第24左・第10図)

14トレンチと15トレンチの間の谷部に設定した。長さ35m、幅2mを測る。土器溜まり2か所を検出した。なお、16トレンチでは、土器溜まり S X 05よりも北へ試掘トレンチを延長して遺構などの検出に努めたが、明確な遺構は検出しなかった。

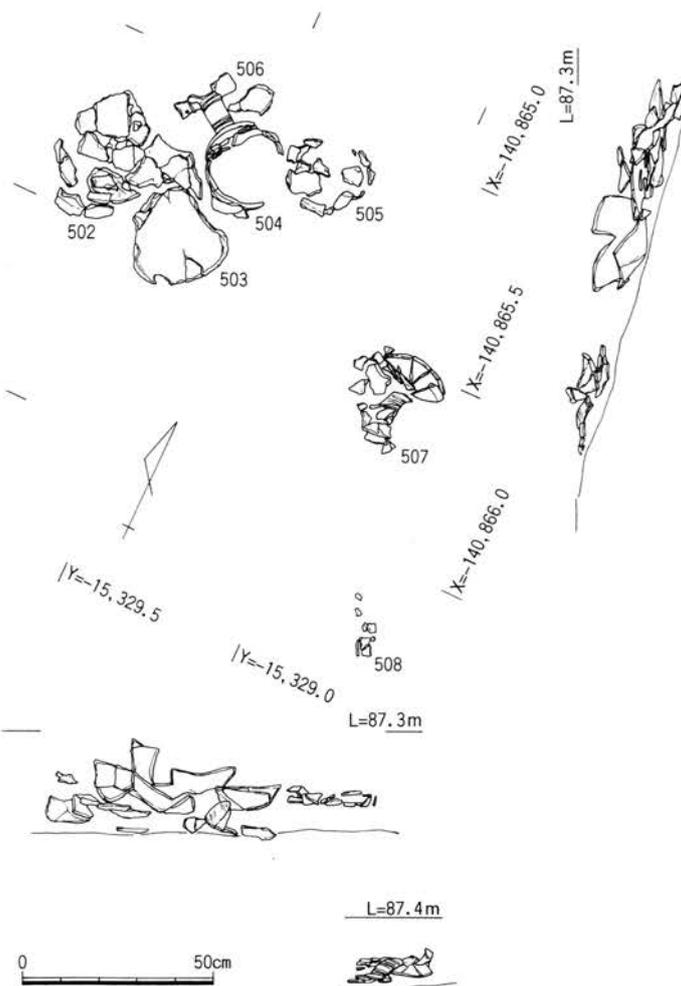
土器供献遺構 S X 05(第13図) 標高87m付近で検出した。壺3点、甕2点、高杯2点を配置した土器供献遺構である。土器の集積を確認した時点で、調査区を拡張して掘形の検出に努めたが、確認できなかった。したがって、これらの土器群はベースである礫層上に直接置かれたものと判断される。土器群は、東西1.5m、南北1.0mの範囲に並べて置かれていた。土器の周りからは、拳大から人頭大の河原石を検出したが、S X 05のベースが礫層であるため、意図的に並べられたものかどうか、判断できなかった。

土器は、西側で短頸壺(502)、広口壺A(503)が出土した。中央では、甕A(504)をのせたまま倒れた状態の高杯B(506)が出土した。506も、その上の504も口縁部を南東に向けて倒れていた。

504の東側には甕A(505)が口縁部を北西に向けて倒れていた。接合する破片が南東側の高杯B(507)の近くでも出土した。南東で出土した507は、基底部がこれらの甕より少し高い位置にあり、北に向かって倒れていた。507の南側で広口壺B(508)が出土した。

以上の土器のほかに、これらの土器が埋没していく過程では、上方から流れ込んだと思われる土器が出土した(514~523)。

土器溜まり S X 04 標高91~92m付近で検出した。当初、S X 05と同様の土器供献遺構の可能性を想定したが、完形品がほとんどみられないことや出土点数が非常に多いことなどから、より上位に位置する住居などから転落または廃棄された土器群が堆積したものと考えられる。この出土状況は、後



第13図 土器供献遺構 S X 05遺物出土状況図

述する平坦面 S X 238・240の遺物出土状況に類似する。また、S X 04を検出した標高が S X 238とほぼ同一である点も注意される。S X 04では S X 238のような明瞭な遺構を検出することはできなかったが、広口壺 A・B・C・F、甕 A、鉢 B、高杯 A・B・D、器台 A、底部、脚部などが出土した(524~540)。

(4)17トレンチ(図版第25左・第10図)

15トレンチからさらに北にのびる尾根の稜線上に設定した。長さ110m、幅3mを測る。標高71mの地点で直径1.8mの円形を呈する土坑 S K 14と、短辺1.7m、長辺3.0m以上の掘形を持つ土坑 S K 15を検出した。S K 15の長辺は調査区外にのびる。どちらの土坑からも遺物が出土していないため時期は不明である。このほか、地境溝などを検出した。しかし、弥生時代の集落遺跡の存在を示すような遺構・遺物は検出しておらず、弥生時代の高地性集落の範囲外と考えられる。

(5)18トレンチ(図版第23中央・第10図)

14トレンチの北側で、現地表面において傾斜のゆるやかな地形が認められたため設定した。長さ24m、幅3mを測る。標高は76~87mを測る。段状の地形を検出したものの、出土遺物がなく詳細は不明である。弥生時代の高地性集落の範囲外の可能性が高い。

(6)19トレンチ(図版第23右・第11図)

14・18トレンチの北西で、現地表面において傾斜のゆるやかな地形が認められたため設定した。長さ10m、幅2.5mを測る。標高は74~82mを測る。18トレンチ同様、段状の地形を検出したものの、出土遺物がなく詳細は不明である。弥生時代の高地性集落の範囲外の可能性が高い。

(7)20トレンチ(図版第25右・第11図)

3トレンチ中央やや北寄りから西に向かって傾斜する丘陵斜面に設定した。長さ40m、幅2mを測る。標高78~102mを測る。標高96~97mの段状を呈する平坦な地形で、尾根側からの転落と考えられる弥生土器片と、近世の丸瓦片やカンテキ(1392)が出土した。また、標高93~95mで拳大の円礫を露頭する地山を検出した。この状況は、14トレンチ S D 01や15トレンチ S D 21の状況に類似する。

(8)21トレンチ(図版第24右・第11図)

15トレンチを設定した尾根から派生する小さな尾根状の地形が確認されたため設定した。長さ18m、幅3mを測る。調査の結果、包含層中より須恵器破片が出土したが、明確な遺構は検出なかった。

2. 南地区の試掘調査(22~35トレンチ)

平成9・10年度調査区の周囲に22~35トレンチの14か所を設定した。これらのトレンチでは、人為的な崖面の削り出し上端を検出した。これらは集落域の区画に関わる可能性が高いと考えられる。22トレンチは木津城跡のすぐ南、主尾根の西側斜面に設定した。23~27トレンチは、1トレンチを設定した西へのびる尾根の延長部とその南北両側斜面に設定した。29~35トレンチは主尾根の東側斜面に設定した。

(1)22トレンチ(図版第26左上・第11図)

11トレンチの西側斜面に設定されていたトレンチをさらに西へ延長したものである。長さ23m、幅5～8mを測る標高95m付近で、段状の平坦な地形と幅3.1m、深さ0.6mを測る断面「U」字形の土坑SK18を検出した。この平坦地形の東側は崖状地形SX90として確認していたが、西側でも崖状地形を検出した。SK18は、当初、集落域を区画する溝(環壕)の可能性を考えたが、第5次調査で南側を調査した結果、遺構の続きは検出されなかったため、土坑と判断するにいたった(図版第35上段)。SK18の上面には厚い盛土がなされていた。盛土の状況は、崖面側でブロック単位で礫質土と粘質土を交互に積み、土手状に盛土したのち、山側に向かって土砂を上へ上へと積み上げる。土手の上面までの盛土が終了すると、以上の作業を繰り返して土砂の流失を防いでいる。この上面には、焼土層SX91が検出されており、一連の遺構の可能性が高い。さらに、SX91の尾根側には、幅約0.8mで曲輪状の平坦面が木津城跡の堀切の底へとつながる。SK18の西側で検出した崖状地形(上端の標高は94m)は、下端を検出していないものの、14トレンチで検出したSD01ほかの状況に類似しており、人頭大の礫の露頭が認められる。

(2)23トレンチ(図版第26右上・第11図)

主尾根から西へのびる支尾根の北側斜面に設定した。長さ16m、幅3～4mを測る。標高96～97mの地点で現地表から約1.5m掘削した段状遺構SX256を検出した。第5次調査で西側を面的に調査したが、遺構の続きは検出されなかった。遺構の東側は調査区外にのびる。SX256の北側は崖状地形になっており、その上端の標高は95.5m付近である。下端は未確認である。遺物は中・近世の遺物が出土した。

(3)24トレンチ(図版第27中央・第11図)

23トレンチの西側、支尾根の北側斜面に設定した。長さ23m、幅4mを測る。標高91～92.5mにかけて傾斜がややゆるい平坦な地形を確認した。この地形の北側で崖状地形を確認した。標高89mから下方に向かって急激に傾斜し、崖面となる。崖面では、拳大から人頭大までの円礫の露頭を認めた。崖状地形の下端は未確認である。

(4)25・26トレンチ(図版第27左・第11図)

25トレンチは主尾根から西へのびる支尾根上に設定した1トレンチのさらに西側に設定した。長さ46m、幅3～4mを測る。26トレンチは25トレンチから分岐する小さな尾根上に設定した。長さ8m、幅3mを測る。両トレンチは表土直下で地山となり、また遺構・遺物ともに検出しなかったため、弥生時代の集落域の範囲外である可能性が高い。

(5)27トレンチ(図版第26右下・第11図)

主尾根から西へのびる支尾根の南側斜面に設定した。長さ19m、幅3～4mを測る。標高99m付近で現地表から約0.3m掘削した段状遺構SX251(第3次調査ではSX19)を検出した。SX251は第5次調査でも調査を行ったので詳細は後述する。また、トレンチ南端で検出した崖状地形(上端の標高は92m)の堆積土からは、広口壺A・C、器台、底部、ミニチュア土器などが出土した(620～623・626～630・632)。

(6)28トレンチ(図版第26左下・第11図)

27トレンチの東側に位置する。長さ13m、幅4mを測る。ベースである灰色砂質土を断ち割っている。27トレンチ同様、南端で崖状地形を検出した(上端の標高は94.5m)。第5次調査では27トレンチと28トレンチの間で段状遺構を複数確認した(E地区)。

(7)29トレンチ(図版第32・第12図)

長さ23m、幅4mを測る。調査トレンチのすぐ上方では、11トレンチ竪穴式住居跡S B61・71を検出した。調査地の最上部と標高87m付近で幅1.5~2.0mの平坦面状の地形(第4次調査の平坦面S X239)を検出しており、その上下では、岩盤の露頭する崖面の削り出しを検出した。

(8)30トレンチ(図版第32・第12図)

29トレンチの南側に位置する。主尾根の東側斜面に設定した。長さ23m、幅4mを測る。平面的に顕著な遺構を検出することはできなかった。

(9)31・32トレンチ(図版第27・第12図)

30トレンチの南側に位置する。31トレンチは長さ15m、幅3mを測る。32トレンチは長さ15m、幅3mを測る。31トレンチでは、標高87~95mで岩盤の露頭する崖面の削り出しを検出した。32トレンチでは、竹やぶの開墾に伴うと考えられる地形の改変を認めたのみである。

(10)33トレンチ(図版第28・第12図) 31・32トレンチの南側に位置する。長さ48m、幅3mを測る。調査地最上部の標高92~97mまではなだらかな斜面を呈し、標高91~92mで段状地形となる。以下の標高83~91mで岩盤の露頭する急峻な崖面となり、その裾部で幅1.5~2.0mの段状地形を検出した。

(11)34トレンチ(図版第28・第12図)

33トレンチの南に位置する。標高82~97mまではなだらかな斜面を呈し、標高82m以下は、崩落による土砂の流失が認められる。調査地最上部の標高97m付近で、幅約0.5m、深さ約0.3mを測る溝S D237(第3次調査ではS D16)を検出した。

(12)35トレンチ(図版第28・第12図)

34トレンチの南側に位置する。長さ45m、幅4mを測る。木津城山遺跡の調査中もっとも南に設定した調査区である。標高77~97mまでを調査したが、竹やぶの開墾による地形の改変を確認したのみである。

丘陵主尾根の東側斜面に設定した29~35トレンチでは、ベースあるいは地山(大阪層群)を掘り抜いて断面観察を行ったが、標高85~90m付近で岩盤の露頭する崖面の削り出しと、その裾部で幅1.5~2.0mのテラスを検出したのは、33トレンチまでである。防御的な機能を有すると考えられる環壕にともなう崖面の削り出しを可能にするのは岩盤の基盤のみであるため集落の範囲としては、南端は34トレンチ以北が想定される。

(戸原和人・筒井崇史)

第4節 平成12年度の調査

1. A地区の調査

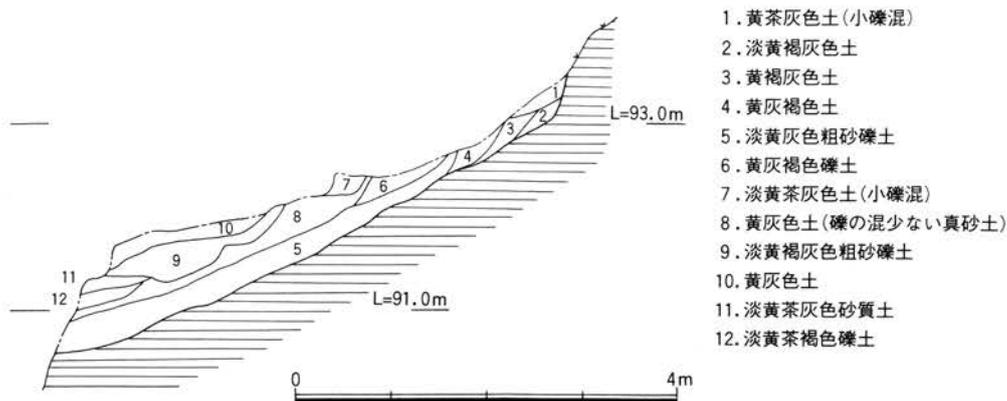
A地区は、11トレンチの北東に位置する。調査区の南東側は近世以降のため池(S G 245)の造成によって、丘陵斜面が削平されている。調査区の南半部は本来、谷状地形と考えられ、比較的厚い堆積土が認められた。これに対し北半部は東へのびる支尾根の南側斜面に当たるため、概ね表土直下が地山となる。

検出した遺構としては竪穴式住居跡2基、段状遺構6基、土器溜まり1か所などがある。なお、A地区では遺構に伴う遺物はほとんどなく、大半は谷状地形の堆積土から出土した。遺物の取り上げは第20図に示したような地区割りで行った。これらの多くは出土位置や出土標高を記録していないが、概ね標高90～91mの範囲から出土した。また4区以東では、遺物の出土量は極端に少なくなり、ほとんど出土しない。主要なものとしては広口壺A・B・C、長頸壺、直口壺、無頸壺A・B、甕A、鉢、高杯A・Dなどがある(666～809)。^(注13)

竪穴式住居跡 S B 201(図版第29上段) 調査区の南西端で、丘陵高位側の周壁溝と小規模な柱穴2基を検出した。周壁溝のみが遺存し、床面はすでに失われている。周壁溝は、検出長5.5m、検出幅0.2～0.4m、深さ0.3mを測る。平面形は、周壁溝が「く」の字状にゆるく屈曲するため、隅丸方形または多角形の可能性がある。なお、遺物は出土しなかった。

ところで、S B 201の東側に自然地形とはやや異なる落ち込みを確認した。この落ち込みは、長さ3.5m、幅3m、深さ0.3m前後を測る。落ち込みの埋土には、粒径の比較的大きな黄灰色粗砂礫土が堆積し、その上に礫を含まない黄灰色系の真砂土が堆積する。後者はS B 201も被覆している。以上は図版第29上段のc-c'断面付近の状況であるが、ここでは土層図を作成していないので、S B 201とS B 202の間に、調査当初に設定した土層観察用セクションの土層図を第14図に示した。土層の堆積状況は概ねc-c'と同じである。この落ち込みのもっとも東寄りでは土器溜まりS X 242を検出した。また、落ち込みの埋土からも多数の弥生土器が出土した。これらの土器は包含層(1区)として取り上げた。この落ち込み出土の弥生土器は、S B 201など、より高位の西側に立地する遺構からの転落あるいは廃棄によると考えられる。

竪穴式住居跡 S B 202(図版第29中段) 竪穴式住居跡S B 201の北に接して検出した。S B 201



第14図 A地区土層断面図

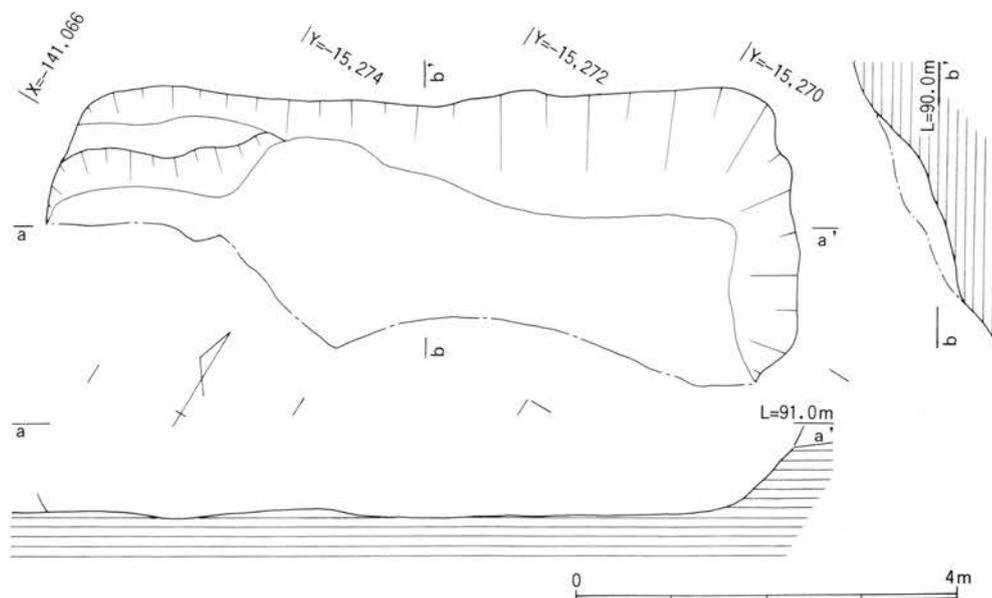
と同様、丘陵高位側の周壁溝の一部が遺存する。周壁溝は、検出長3.7m、検出幅0.25m、深さ0.1mを測る。周壁溝が弧状を呈することから、平面形は円形と考えられる。復原径4.6mを測る。S B 201とS B 202は、ほぼ同じ標高に営まれており、復原すると両者は重複するが、S B 202からも遺物は出土しなかったため、その先後関係は不明である。

段状遺構 S X 205・207～209・244(図版第29下段・図版第30) いずれも東へのびる支尾根の南側斜面で検出した。これらは、その立面・平面の形状が不整形であることや遺物が出土しなかったことから、積極的に住居跡と断定することは困難であった。しかし、非常に硬い岩盤層を穿っており、自然地形とは考えにくいことから、人為的な加工痕跡と考え、段状遺構と判断した。いずれの段状遺構も丘陵高位側を掘り下げて平坦面を造成している。

土器溜まり S X 242(図版第29上段) 竪穴式住居跡 S B 201の東側で検出した落ち込みのもっとも東寄りであり、弥生土器がややまとまって出土した。ただし、落ち込みなどから出土した遺物と厳密に区別できないため、16トレンチの土器供献遺構 S X 05のように意図的に土器が供献されたものではないと考えられる。これらも落ち込み出土の弥生土器と同様、上方からの転落や廃棄による可能性が高い。長頸壺、広口壺E、高杯脚部などが出土した(636～650)。

(伊賀高弘・筒井崇史)

段状遺構 S X 248(第15図) 竪穴式住居跡 S B 202の東約2mに位置する。平面形は必ずしも明確ではないが、検出状況から隅丸方形を呈すると考えられる。北西辺長7.3m、北東辺残存長2.9m、深さ0.3mを測る。下端は不明瞭で、底面は水平ではない。上記の段状遺構群とは異なり、埋土から広口壺B、甕A、底部、高杯脚部などが出土した(651～665)。ところで、S X 248をはじめ、土器溜まり S X 242、包含層など、A地区出土の弥生土器が標高90～91m付近に集中して出土している点は注意される。この標高は、後述するB地区平坦面 S X 238とほぼ同一であり、遺構としては明瞭に検出できなかったが、S X 238のような平坦面が存在した可能性をこれらの



第15図 段状遺構 S X 248実測図

遺物は示していると考えられる。

平坦面 S X 241 調査区の東端、段状遺構 S X 207の南で検出した。検出長7.5m、幅2.5～4.0mを測る。平坦面の標高はおよそ87mである。後述する B 地区平坦面 S X 239とほぼ同じ標高であることから、一連のものと考えられる。平坦面の西端は、ため池 S G 245によって削平されている。また、東側は調査区外にのびる。

(筒井崇史)

2. B地区の調査

B地区は、A地区の南側、29トレンチと30トレンチの間を面的に調査したもので、標高85～97mを測る丘陵斜面に立地する。調査区の西端は8・9・11・12の各トレンチと一部重複する。29・30トレンチは主尾根から東へのびる支尾根の稜線上に位置し、B地区は両者に挟まれた谷状地形にあたる。このため堆積土が厚く堆積していた。

竪穴式住居跡 S B 211(図版第31上段) 竪穴式住居跡 S B 76の北東にほぼ接して位置する。平面形は西辺の中央がやや突出するので、多角形の可能性がある。多角形とすれば西側の2辺が遺存していることになる。西辺長2.5m、北西辺長2.5m、深さ0.45mを測る。周壁溝や柱穴が一部残存していたことから竪穴式住居跡と考えられる。S B 211の東側は平坦面 S X 240によって削平されたと考えられる。遺物は出土しなかった。

竪穴式住居跡 S B 213・215(図版第31上段) 竪穴式住居跡 S B 76の北、竪穴式住居跡 S B 211の西で検出した。いずれも、丘陵高位側の周壁溝の一部が遺存するに過ぎない。両住居跡とも周壁溝から復原される平面形は方形と考えられる。S B 213は西辺長3.8m、南辺残存長1.4m、深さ0.2～0.3mを測る。S B 215は西辺残存長2.5m、南辺残存長0.7m、深さ0.05～0.1mを測る。後世の削平によって、床面は全く遺存しない。両住居跡は、位置をわずかにずらしていることから建て替えられたものと考えられるが、遺物が出土しなかったため、その先後関係は不明である。また、この周辺で検出した住居跡を復原すると、いずれの住居跡も何らかの重複関係があることから、各住居跡は時間差をもって存在したと考えられる。検出状況が良好ではないことや、S B 75・76を除いて遺物がほとんど出土しないことから、造営順序などは不明である。

溝 S D 212(図版第31上段) 竪穴式住居跡 S B 211と S B 215の間で検出した。S D 212は、「L」字形を呈し、住居跡の周壁溝の可能性もあるが、周壁の立ち上がりは認められなかった。西辺残存長1.2m、幅0.1～0.2m、深さ0.1～0.2mを測る。埋土から器台Aが出土した(914)。

溝 S D 223・231(図版第31下段) 竪穴式住居跡 S B 213の北約4mで、いずれも等高線に沿って検出した。S D 223は途切れるが、検出長2.4m、幅0.15～0.25m、深さ0.1～0.2mを測る。S D 231も途切れるが、検出長3.2m、幅0.1～0.2m、深さ0.1～0.2mを測る。S D 231は周壁状の浅い落ち込みを伴う。不明な点が多いが、住居跡の周壁溝の残欠である可能性が高い。

(伊賀高弘・筒井崇史)

段状遺構 S X 243(図版第32・第16図) B地区南端で検出した。丘陵高位側を掘り込む。平面形は、周壁の東辺と北辺が直角であることから方形と考えられるが、南辺は不明瞭で、明確な掘

形は確認できなかった。西辺長5m以上、北辺残存長2m、深さ0.6mを測る。土層の堆積状況を第16図セクションEに示した。出土遺物は全くなかったため時期は不明であるが、弥生時代の高地性集落に伴う可能性が高いと考えられる。

平坦面S X 238～240(図版第32・第16図) 竪穴式住居跡S B 211よりも東(下方)で、丘陵斜面を加工して造られた平坦に削り出された遺構を3か所確認した。これらは、上述の段状遺構と比べて長大であることや、その構築目的が急峻な丘陵斜面の造成にあると考えられることから、段状遺構とは区別する。以下、この遺構については平坦面という名称を使用する。各平坦面が造成された標高は、S X 238が91m付近、S X 239が87m付近、S X 240が94m付近である。

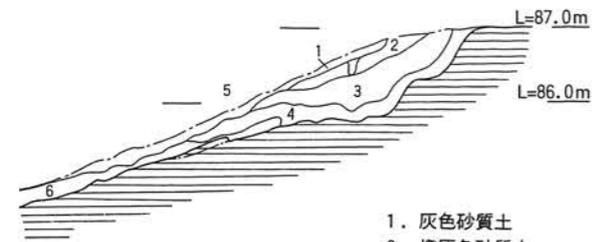
まず、土層の観察結果について述べる(第16図)。丘陵斜面の土層の堆積状況を確認するため、セクションAからセクションEまでの5つの土層観察用セクションを設定した。A・Bは斜面の堆積状況を、C・Dは平坦面S X 239の状況を、Eは段状遺構S X 243の状況を、それぞれ確認するためのものである。S X 240の状況は、セクションAにおいて確認したのみである。表土を重機で掘削した後、やや砂礫が多く混じる灰黄色土ないし灰褐色土(15層)を除去して検出した。堆積状況からは、後述するS X 238・239との先後関係は明らかでない。なお、S X 240は地山を削り出して造られている。

S X 238は、セクションA付近では堆積土の上面に造られていた。土層断面の観察によれば、平坦面の底面は浅い「U」字状を呈し、埋土は3層に細分される(22～24層)。S X 238は丘陵高位側の大部分は地山を掘り込んで造られているが、セクションA付近では堆積土(25～29層)を掘り込んでいる。一方、セクションBの土層断面の観察によれば、平坦面は、丘陵高位側の地山を掘り込んでやや水平となる逆台形状を呈する。埋土は1層(40層)だけであるが、丘陵低位側で堆積土(41・42層)をベースとしている状況が確認できた。

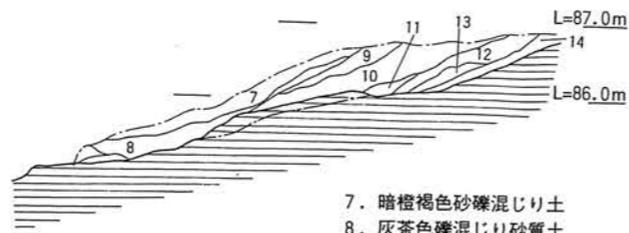
S X 239は、セクションA・Bの断面観察によれば、いずれもS X 238を構築している堆積土によって埋められていることが確認できた(33・34・38・41・43層)。ただし、セクションA付近では、S X 239が削平されており、平坦面の状況は不明である。また、セクションB・Cでは、丘陵低位側がわずかに高くなって溝状を呈することを確認した。

S X 238とS X 239の先後関係は、まずS X 239が造られ、これが埋没したのちにS X 238がつくられたと考えられる。また、平坦面の構築目的であるが、各平坦面間の傾斜角度が、およそ35°前後を測るのに対して、遺構が検出されている丘陵斜面の傾斜角度は20°前後を測り、各平坦面間の斜面が相当の急傾斜であることがわかる。平坦面は、このような急傾斜の斜面を人為的に削り出すことを目的とした行為の結果、副次的に造られたと考えられる。

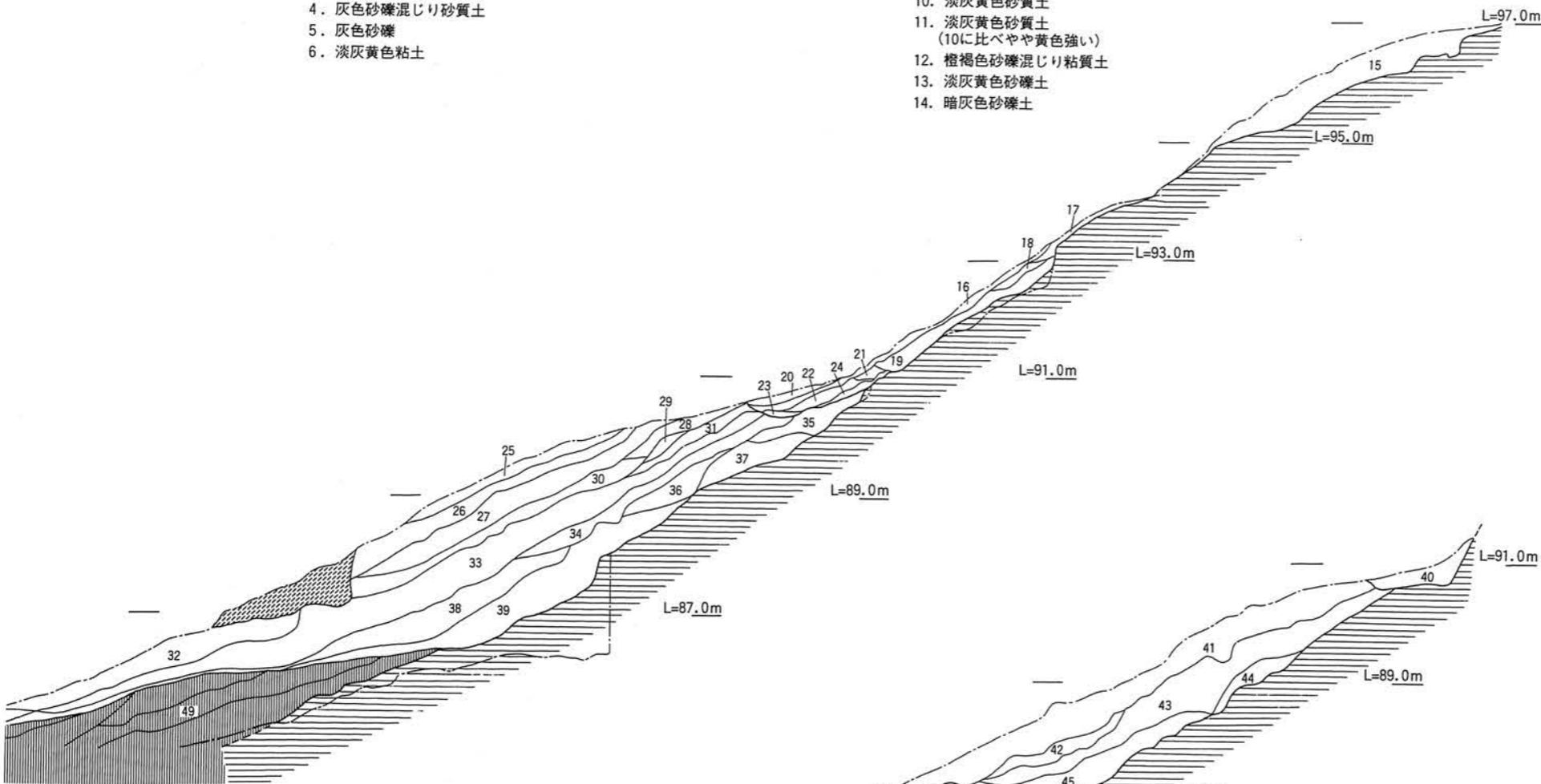
次に各平坦面の形状・規模・遺物の出土状況などについて述べる。S X 240は、検出長21mを測り、セクションAよりも北側では幅0.4～1m、南側では幅0.8～1.8mを測る。平坦面は、やや下方に向かってゆるやかに傾斜している。S X 240は、西側(上方)で竪穴式住居跡S B 76・213・215などを検出したのに対し、その東側(下方)には明確な住居跡などを検出していないことから、居住域と丘陵斜面を区画する遺構と考えられる。明確にS X 240出土といえる遺物は少な



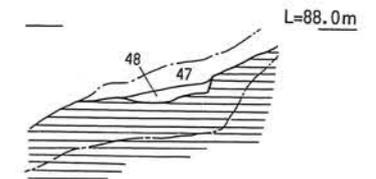
1. 灰色砂質土
2. 橙灰色砂質土
3. 橙褐色粘質土
4. 灰色砂礫混じり砂質土
5. 灰色砂礫
6. 淡灰黄色粘土



7. 暗橙褐色砂礫混じり土
8. 灰茶色礫混じり砂質土
9. 暗茶灰色砂質土
10. 淡灰黄色砂質土
11. 淡灰黄色砂質土 (10に比べやや黄色強い)
12. 橙褐色砂礫混じり粘質土
13. 淡灰黄色砂礫土
14. 暗灰色砂礫土



40. 灰色砂礫混じり砂質土
41. 黄灰色砂礫混じり砂質土
42. 黄灰色砂礫土 (礫が少ない)
43. 黄灰色砂礫土 (礫が多い)
44. 灰黄色砂礫土
45. 暗灰色砂礫 (小礫多数、平坦面 S X 239埋土)
46. 茶褐色砂礫混じり粘質土



47. 淡茶褐色砂礫混じり砂質土
48. 灰色砂礫混じり砂質土 (S X 239埋土)

15. 灰黄色砂礫混じり土
16. 淡茶褐色土層 (直径 3cm未満やや粗砂礫)
17. 淡黄褐色粘(質)土(粒子細かく硬質粘土)
18. 淡黄茶灰色粘質土(直径10cm未満の礫混じり)
19. 黄茶褐色土(西よりに直径20cm未満の礫混じり)
20. 褐灰色土
21. 茶褐色粗砂土
22. 黄茶灰色砂質土
23. 淡灰色土
24. 淡褐灰色粗砂質土
25. 淡黄茶灰色細砂質土
26. 黄灰褐色土
27. 黄茶灰色土
28. 黄灰色土
29. 黄茶灰色土(暗茶褐色土斑状に混じる)
30. 黄褐色土
31. 黄茶灰色土層
32. 淡褐灰土(礫少し混直径10cm未満) → 水田開発に伴う造成土
33. 茶灰土(暗茶灰色斑混、やや小礫含む)
34. 茶灰土(暗茶灰色斑混、礫が混入しない)
35. 灰褐粗砂礫土(地山の岩盤が崩れた土) (明黄褐酸化土混、礫多く混入直径10cm未満)
36. 淡黄灰土(11層の変異層、ただし斑は少ない)
37. (暗)灰混礫土(直径10cm未満)
38. 灰茶色小礫混じり砂質土(平坦面 S X 239埋土)
39. (褐)灰土(礫混直径 5cm未満)(平坦面 S X 239埋土)
49. 弥生時代の遺構基盤層



第16図 B地区土層断面図

いが、S X 240の上面の堆積土やその周辺から広口壺A・B・C、直口壺、高杯B・C、鉢B、底部、高杯脚部、蓋などが出土した(915～962)。

S X 238は、おもにセクションAの北側で検出され、検出長12.5m、幅0.8～1.5mを測る。S X 238は前述のように溝状を呈し、多数の弥生土器が出土した。また、S X 238のベースとなっている堆積土(25～29層)からも弥生土器が出土した。これらは、S X 238に接する付近で多く出土したが、下方に向かうにつれて遺物の出土量は減少し、S X 239付近ではほとんど出土しなかった。このことは、平坦面S X 238構築以前にも、この付近に遺物が集中して堆積しやすい状況であったと考えられる。以上のような状況に対して、調査中は、S X 238が平坦面状を呈することは認識していたものの、土層断面に見られるような溝状を呈するとは考えていなかったため、遺構から出土した遺物と、S X 238造成以前の堆積土の遺物とを区別することなく取り上げている。このため、S X 238周辺から出土した遺物は非常に多数にのぼるものの、層位的にはやや混乱した資料となっている。ただ、土器様相としては大きな違いはないと思われる。

S X 238埋土ならびにその直下の堆積土から、広口壺A・B・C、長頸壺、直口壺、甕A・C、鉢A・B、高杯B・C、器台A・B、ミニチュア土器などのほか、鋸歯文を有する土器片などが出土した(810～913)。このうち、S X 238埋土から出土遺物として、セクションAの22層から863・874・892、セクションBの40層から845がある。なお、S X 238の底面に密着するように出土した遺物はない。また、S X 238直下の堆積土から確実に出土したものが若干ある(1056～1060)。このほか、S X 238とS X 240の間の斜面からも若干の遺物が出土した(963～982)。

S X 239は、セクションAの部分ではすでに削平されていたが、その北側と南側で、それぞれ検出した。南側の平坦面は、掘り込み部分を確認したものの、明確な平坦面は検出していない。また、南半部は段状遺構S X 243と重複する。北側の平坦面は、工事用道路によって攪乱され、2分されているが、総検出長22m、幅0.8～2.5mを測る。また、平坦面を造成した際に、西側に位置する丘陵斜面の末端を長さ6.8mにわたって急角度(約80°)で掘り込んでいる状況を確認した(図版第106・(6))。掘り込みの深さは約0.2mである。S X 239は、S X 238・240とは異なり、平坦面の幅が非常に広い。S X 239を埋めている堆積土からは広口壺A、直口壺、高杯B、器台A、底部、高杯脚部などが出土した(983～1025)が、明らかにS X 239に伴う遺物は出土しなかった。また、S X 239の東側(下方)でも少量の遺物が出土した(1026～1029)。

各平坦面や斜面の堆積土から出土した遺物は、いずれも上方からの転落や廃棄によるものと考えられる。

3. C地区の調査

C地区は、B地区の南約40mに位置し、標高91～100mを測る丘陵斜面に立地する。C地区は33・34トレンチの一部を拡張したもので、北東部は10トレンチに接する。竪穴式住居跡2基、溝1条を検出した。

竪穴式住居跡S B 235(図版第33上段) C地区の南端で検出した。丘陵低位側を失うが、周壁

溝がほぼ直角に屈曲することから平面形は方形と考えられる。西辺長4.4m、北辺残存長0.85m、床面残存幅1.3m、深さ0.2mを測る。丘陵高位側の崩落や攪乱が著しいため遺存状態は悪い。周壁溝を検出したが、支柱穴はすでに流失した部分に存在していたと考えられる。遺物は、周壁溝から出土したものもあるが、大部分は埋土から出土した。これらの遺物は遺構に伴うものではなく、上方からの転落や廃棄によるものと考えられる。直口壺、無頸壺A、甕A・B、鉢B、器台A、底部、高杯脚部などのほか、線刻を有する土器片が出土した(1071~1102)。

竪穴式住居跡 S B 236(図版第33下段) C地区の北半部で検出した。丘陵低位側を失うが、丘陵斜面に立地する住居跡には珍しく、3つのコーナーを確認することができた。平面形は、西隅がやや鈍角(約110°)に開くことから多角形の可能性を考えたが、南隅がほぼ直角、北隅もやや開き気味ながらもほぼ直角であることから、ややいびつな方形を呈すると考えられる。南西辺長4.1m、北西辺長3.75m、深さ1.3mを測る。周壁溝は、住居内を全周する。柱穴は大小多数検出したが、支柱穴と考えられるものを特定することはできなかった。住居跡のほぼ中央に土坑があり、南東辺の中央付近にも周壁に接して土坑を検出した(P-2)。両土坑とも貯蔵穴と考えられる。また、周壁に沿って、直径0.15m、深さ0.1m程度の小規模な柱穴を複数検出したが、補助支柱と考えられる。遺物は、P-2から出土した甕A(1106)を除いて、いずれも埋土から出土した。これらの遺物は、住居跡の南隅ないし南西辺から北ないし北東に向かって流れ込んだような状況で出土した。このことから、遺物の大半は、住居跡の廃絶後に自然流入、あるいは一括投棄されたものと考えられる。ただし、出土遺物の接合状況が芳しくないため、意図的な投棄行為ではないと考えられる。広口壺A・B・C、甕A・B破片、器台A、底部、高杯脚部などのほか、微小な突帯を有する土器片が出土した(1103~1146)。

溝 S D 237 竪穴式住居跡 S B 235の北にほぼ接して検出したもので、34トレンチでその一部を検出していた(第3次調査のS D 16)。検出長16m、幅2m、深さ0.7~0.8mを測る。主軸はほぼ南北方向で、それぞれの方向にさらにのびるようであるが、確認できなかった。埋土から須恵器や弥生土器の破片が出土した(1147・1148・1377)。

(筒井崇史)

第5節 平成13年度の調査

1. D地区の調査

D地区は、8・11トレンチの西側、22トレンチの南側に設定した。調査区の南端は、主尾根から西へのびる支尾根の付け根付近である。標高90~100mの丘陵斜面に立地する。このうち標高94m以上は全面的な調査を行ったが、それ以下については造成工事に関わる部分での調査にとどまった。なお、調査区の中央やや北寄りでは、調査以前に丘陵斜面が地滑りを起こしたような状況が確認された。

D地区では、溝状遺構 S X 262を検出したほかは、竪穴式住居跡などの遺構は確認されなかった。調査区の大半が、傾斜角度30~40°の急峻な斜面であり、調査区全体が崖状地形であったと

いえる。D地区の出土遺物は、いずれもこの崖状地形の堆積土から出土し、遺構に伴うものはなかった。遺物はおもに地滑り痕跡の南側、6トレンチの西側の斜面の堆積土から出土した。これらは、6トレンチで検出された崖状地形SX10出土土器と同じく、いずれも上方から転落したような状況にあり、まとまって出土するようなことはなかった。広口壺A・B・E、長頸壺、無頸壺、甕A・C、高杯B、器台などが出土した(1157～1190)。

溝状遺構 SX262(図版第35下段) SX262の南端は、地滑りと、それ以降に整えられたと考えられる道状遺構によって大きく削平される。また、北側に位置する22トレンチでは、SX262の延長部分は検出されていない。総検出長わずか3.2m、深さ0.8mである。SX262からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。ただ、SX262の標高(約94m)がB地区で検出した平坦面SX240とほぼ同じである点は注意される。

2. E地区の調査

E地区は、1・23・27・28の各トレンチによって挟まれた丘陵斜面に設定した。標高92～98mの丘陵斜面に立地する。E地区では、段状遺構4基を検出した。このうち、SX251・256はすでにその一部を検出していたものである。

段状遺構 SX251(図版第34上段) 27トレンチでその一部を検出していた(SX19)が、第5次調査でその全容を確認した。北辺長3.3m、床面残存長1.1mを測る。遺構の埋土から甕、器台、高杯脚部、鉢などが出土した(1191～1198)。このうち、1195・1196は第3次調査出土である。

段状遺構 SX252(図版第34中段) SX251の東にはほぼ接して検出した。遺構の東端は、28トレンチの調査時に削平されているため、全長は明らかでない。北辺残存長6.3m、床面残存幅1.4mを測る。平坦面上で溝を検出したが、その検出状況から竪穴式住居跡とは考えられず、段状遺構に伴う雨落ち溝の可能性がある。遺構はほぼ黄褐色粘質土によって埋められており、遺物はいずれもこの層から出土した。遺構のベースは灰色砂質土であるため、遺構の崩壊が激しい。遺物の大半は弥生土器(1199～1206)であるが、須恵器甕と思われる破片(1375)も同じ層から出土した。

段状遺構 SX253(図版第34下段) 調査区の南端で検出した。SX252同様、掘り込みとそれに伴う造成面、ならびに掘り込みに沿ってめぐる溝を検出した。北辺長7.3m、床面検出幅1.3m、深さ0.5mを測る。造成面はさらに南へのびる可能性もあるが、現地形では、すぐ南側が急峻な崖状地形であることから、これ以上調査区を拡張することができなかった。なお、27・28トレンチでは、トレンチ南端で崖状地形の上端を検出し、そこから弥生土器が出土している。したがってSX253は、この崖状地形のすぐ背後に営まれた可能性が高く、SX253の幅はもともとそれほど広くなかったと考えられる。遺構の埋土から広口壺A・B、直口壺、細頸壺、無頸壺A、甕A・C、高杯A・B・C、器台A・Bなどが出土した(1207～1292)。

段状遺構 SX256(図版第26) 第3次調査時にその大半を検出していた遺構である。第5次調査では23トレンチの西側を調査したが、延長部はほとんど検出されなかった。SX256の東半部は調査区外にのびる。SX256は掘り込みとそれに伴う造成面を検出したもので、溝は検出して

いない。南辺検出長3.3m、床面残存幅1.7mを測る。遺物は出土しなかった。

3. F地区の調査

F地区は、13トレンチの南側に設定した。標高90～94mの丘陵斜面に位置する。13トレンチに隣接することや尾根状に張り出した傾斜のゆるい斜面であることなどから、竪穴式住居跡などの遺構の存在が予想された。しかし、調査区の西側では表土直下で地山となったが、竪穴式住居跡などの遺構は検出されなかった。また、東側では谷状地形を検出し、堆積土から広口壺A・B、短頸壺、長頸壺、鉢B、甕A、器台A、高杯脚部などが出土した(1293～1352)。これらの弥生土器は、上方に位置する竪穴式住居跡群から廃棄されたり、転落したりしたものと考えられる。

(筒井崇史)

第3章 弥生時代の遺物

第1節 弥生土器

1. はじめに

木津城山遺跡から出土した遺物の95%以上が弥生土器である。そして、これらの弥生土器のほぼすべてが弥生時代後期に位置づけられる。今回の報告では、底部や口縁部などの遺存する小片についても図示するように努めた。これは、南山城地域における当該期の良好な資料がこれまでほとんど知られていなかったことから、可能な限り資料化することを目的としたためである。

以下では、出土した弥生土器の器種分類を行った上で、出土遺物の概要を述べる。

2. 器種分類

出土した弥生土器の器種分類にあたっては、あらかじめ、以下のような分類概念の規定を行う。

まず、器種分類における上位概念として「機能や用途、または形態による分類」を設定する。いわゆる「器種」に相当する。分類名称としては、機能や用途、もしくは形態上の特徴を表す一般的な名称を付ける。

下位の分類概念として「各器種における形態上もしくは製作技法上の差異による分類」を設定する。いわゆる「器形」に相当する。この分類概念は、時間軸上を変化していく、基本的には独立した「形式」と考える。分類名称は、A・B・C・……と、アルファベットを付ける。アルファベットは、基本的に、主体的、かつ相対的に古いものから付けることにした。

以下、器種分類の概要について述べる。なお、「器形」の分類の説明に加えて、各器形の細分についてもふれているが、本報告書では、詳細な検討は行っていない。

(1) 壺形土器

壺形土器は、機能や用途、形態によって、広口壺・長頸壺・短頸壺・直口壺・細頸壺・無頸壺の各器種に分類できる。また、これらのいずれにも分類できないが、壺と判断できるものもある。壺の分類は主として口縁部によっており、同じ器形分類でも体部の形状は異なる場合がある。体部の特徴としては、体部最大径が体部中位ないしそれよりも下半にあることが多い。また、底部はやや突出気味の平底であることが多い。

①**広口壺** 口縁部が大きく開く形状を呈する。体部の形状までわかる例は少ないが、扁球形ないし無花果形を呈する。広口壺は、口縁部の形状から以下のような器形に分類できる。

広口壺A やや外傾気味に直立する頸部から大きく外反する口縁部、もしくは頸部から大きく開く口縁部を有するもので、口縁端部に粘土帯を貼り付けて垂下する口縁帯を形成するもの。口縁帯の外面には、擬凹線、円形浮文など装飾に富むものが多い。口縁帯下垂部の貼り付け方法な

どによって、さらに細分できる。

広口壺B 直立気味の頸部に強く外反して大きく開く口縁部、もしくは頸部から大きく開く口縁部を有するもの。口縁部外面はほぼ無文である。口縁端部の形状からさらに細分できる。

広口壺C 受け口状口縁を有し、口縁部外面に列点文などを施すもの。いわゆる近江系と呼ばれるものである。なお、当遺跡出土資料では全形のうかがえるような資料がない。また、壺と甕の区別が困難なものについては、すすによって区別している場合がある。

広口壺D 直立気味の頸部に強く外反して大きく開く口縁部を有するもの。口径、または頸部径がほかの広口壺よりも小さいことから、小型品と考えられる。体部も含めた全形のうかがえるような資料は出土していない。

広口壺E 広口壺Aに類似するが、口縁帯が断面三角形を呈する下垂部ではなく、断面方形に近い突帯を呈するもの。出土例は少ないが、全形をうかがえる資料がある。

広口壺F 広口壺Bに類似するが、直立気味の頸部に口縁部がわずかに外反するもの。大型品と思われるが、当遺跡における出土例は1例だけである。

広口壺G 広口壺Aに類似するが、頸部が短く大きく外反する口縁部を有する。口縁部は斜め下方に下垂部を設ける。1例のみ確認した。

②**長頸壺** 無花果形ないし倒卵形の体部に、直線的ないしやや外反気味の長い頸部を有するもの。口頸部高が器高の1/3以上のもの。当遺跡では量的に非常に少なく、全形のうかがえる資料も2点程度である。

③**短頸壺** 無花果形ないし倒卵形の体部に、直線的ないしやや外反気味の頸部を有するもの。口頸部高が器高の1/3以下のもの。体部の法量に違いが認められる。

④**直口壺** 長頸壺や短頸壺の口縁部がやや外反気味を呈するのに対して、斜め上方に直線的にのびる口縁部を有するもの。口縁部は長頸壺や短頸壺に比べて開く。口縁部は無文である。

⑤**細頸壺** 口径が小さく、長い口頸部を有するもの。当遺跡での出土例はほとんどなく、全形のうかがえるような資料は出土していない。

⑥**無頸壺** 体部から直接口縁部に至るもの、もしくはごく短く直立する口縁部を有するもの。口縁部や体部の形状から以下のような器形に分類できる。いずれも、当遺跡での出土例は少なく、全形のうかがえるような資料は出土していない。

無頸壺A 球形ないし扁球形、あるいは算盤形の体部に短く直立する口縁部を有するもの。

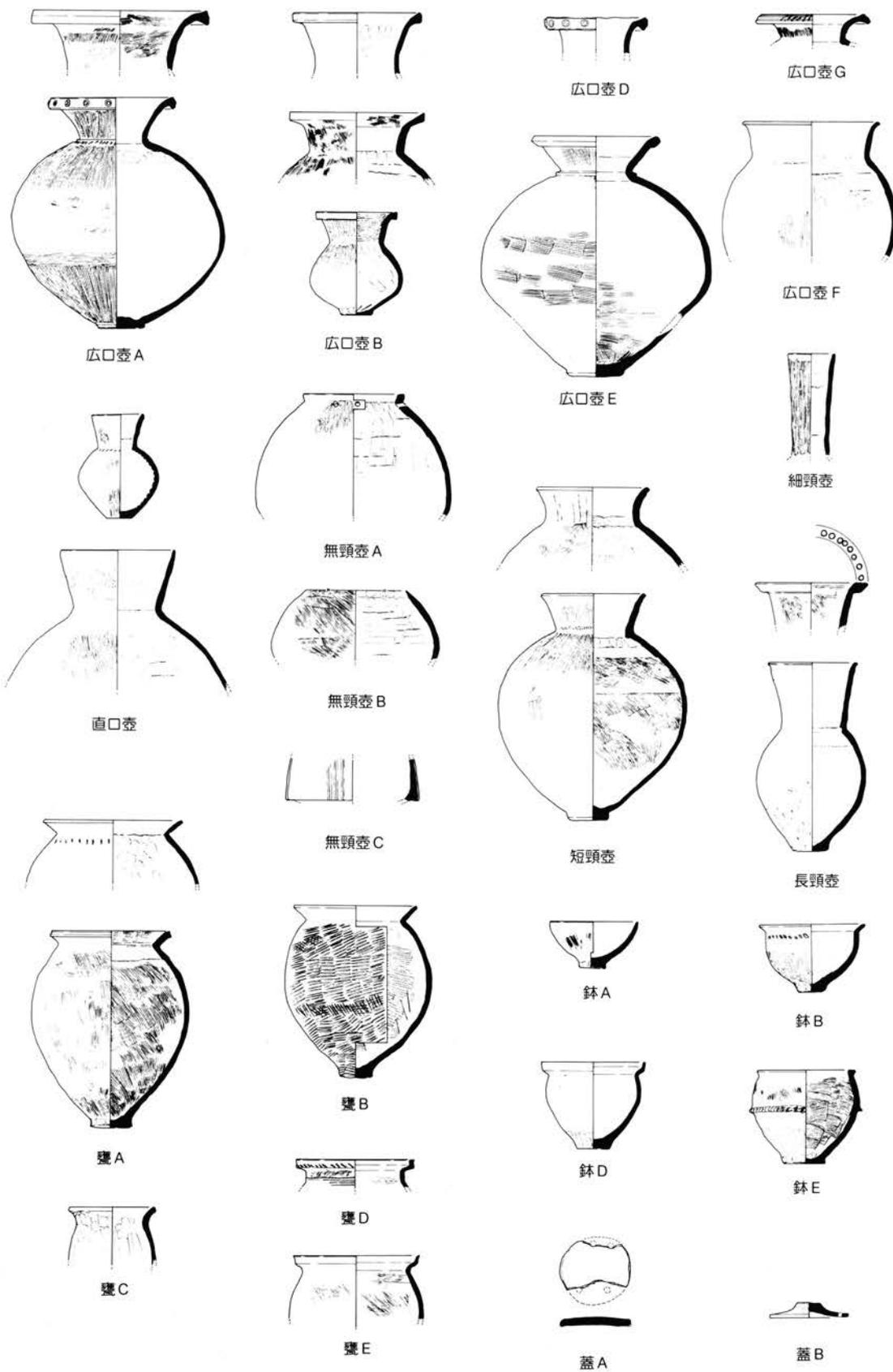
無頸壺B 球形ないし扁球形の体部のまま口縁部に至るもの。

無頸壺C 体部外面に縦方向の突帯を3条程度、一定の間隔で貼り付けるもの。全形や口縁部の形状は不明である。なお、脚台を有する可能性もあるが、当遺跡では確認できない。

(2) 甕形土器

甕形土器は、口縁部や体部の形状から以下のような器形に分類できる。また、以下の分類に該当しないものは単に甕とする。

甕A 「く」の字状に屈曲する口縁部に、倒卵形の体部で底部が平底を呈するもの。体部外面



第17図 弥生土器器種分類図(1)

はハケ調整を主体とし、一部ナデ調整を施す。体部内面はハケ調整ないしナデ調整を施す。底部は突出するものが多い。口縁端部の形状や口縁部の屈曲度、肩部の張りなどから、さらに細分できる。

甕B 甕Aに類似した器形であるが、体部外面にタタキ調整を施したもの。内面調整は甕Aと同じである。当遺跡出土例では確実に1点しかないが、底部や体部片にタタキ調整を確認できるものがあることから実数はもう少し多かったと考えられる。

甕C 小型で、粗雑な作りの甕を一括する。

甕D 受け口状口縁を有するもので、口縁部に列点文、肩部に波状文や直線文を施すもの。近江地域で通有に認められるいわゆる近江系甕である。全体の形状がわかる出土例はない。

甕E 受け口状口縁を有するもので、口縁部などに施文がみられないもの。1点のみ存在する。丹後地域をはじめとする北近畿地方にみられる器形に類似する。

(3)高杯形土器

高杯形土器は、杯部の形状から以下のような器形に分類できる。また、高杯の脚部についても、別に分類する。高杯の分類は、杯部と脚部の分類を組み合わせるべきと考えるが、煩雑さを避けるため、ここでは杯部の形状にもとづいて分類する。また、脚部と杯部の接合方法についても類型化する。これは同時に脚部の成形手法を反映していると考えられる。

①高杯の分類

高杯A 口縁部が直立ないし、わずかに外傾するもので、杯部が高杯Bに比べ深手のもの。外傾度によってさらに細分できる。

高杯B いわゆる皿状の杯部を有し、杯部が高杯Aに比べて浅いもの。杯口縁部の外反度と、杯底部と口縁部の長さの比の2つの要素を指標としてさらに細分できる。

高杯C 椀状の杯部を有するもの。杯部の口径と深さの比を指標としてさらに細分できる。

高杯D 杯部に段を有し、高杯A～Cに比べ装飾性をもつもの。杯部は多様な形態が認められるが、細分はせず、すべて一括する。なお、本分類には、藤田三郎氏によって結合形土器^(注14)と呼ばれるものも含むこととする。

高杯E 口縁部が短く外反するもの。口縁部はヨコナデによって整形され、端部に面をもつ。

②脚部の分類 脚部の形態から以下のような器形に分類できる。

脚部a 脚柱部が柱状を呈し、脚裾部が脚柱部から大きく屈曲して開くもの。中空である。

脚部b 脚柱部が柱状を呈し、脚裾部に段を有するもの。脚裾部にはさまざまな形状があるが、ここではこれ以上の細分は行わない。脚部a同様、中空である。

脚部c 「ハ」の字状に開き、そのまま脚端部に至るもの。中空のものの中実のものがある。

脚部d 「ハ」の字状に開き、脚裾部に段を有するもの。全形のわかる資料は少ないが、基本的には中空と考えられる。

脚部e 低脚の脚部を一括する。

③脚部と杯部の接合方法(脚部の成形方法)^(注15)

1類 脚頂部が開放されたまま、杯部が製作され、脚頂部に円盤を埋め込むことによって、杯底部を完成するもの(円盤充填法)。脚部a、b類に多くみられる。

2類 完成された脚部の上に杯部を載せるもの(接合法)。当遺跡ではあまり例をみない。

3類 閉塞された脚頂部に杯部が製作されるもの。脚頂部の上面を別の粘土が覆って杯底部を形成する(付加法)。脚部c・d類に多くみられる。

(4)器台形土器

器台形土器は、全体の形状や筒部の形状のわかる資料が少ないが、口縁部の形状から大きく2つの器形に分類できる。また、このほかにも器台と判断できるものがある。なお、小破片のものが多いため、器台ではないものや広口壺との区別が困難なものが含まれている可能性がある。

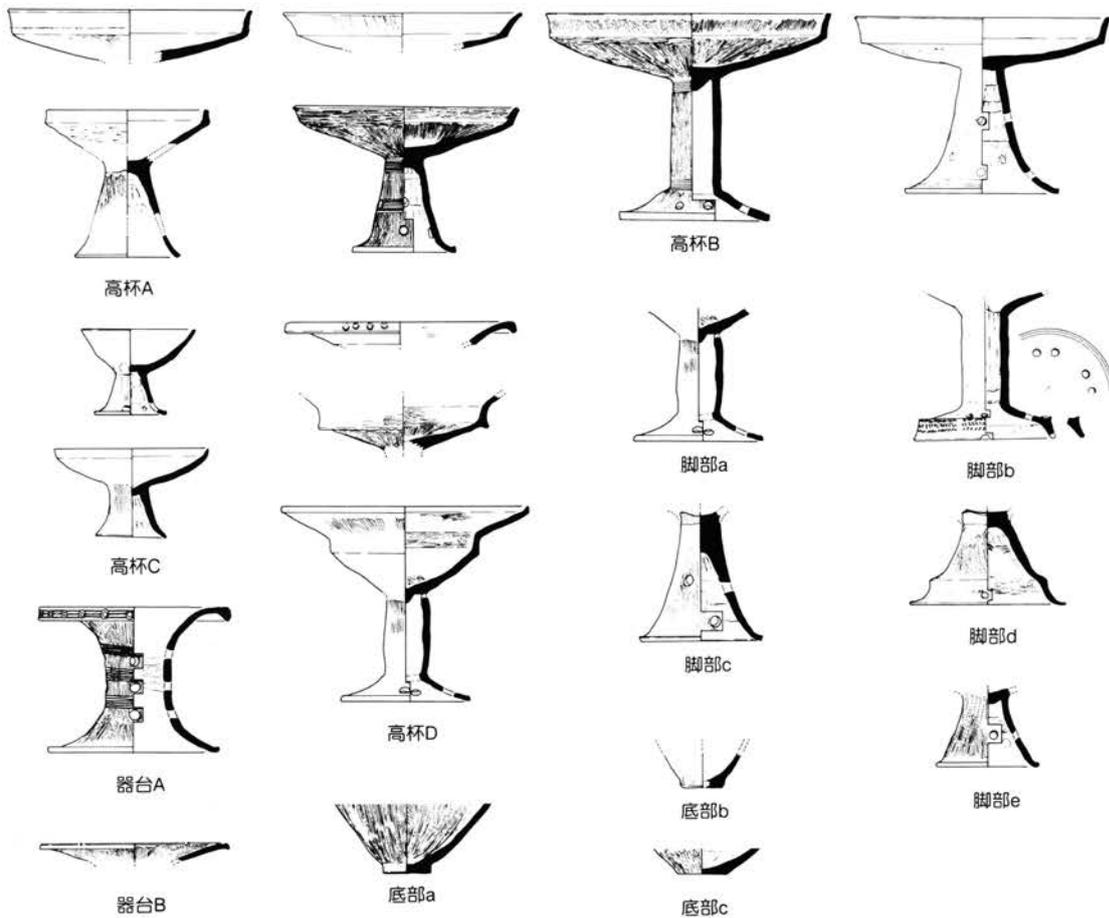
器台A 擬口縁端部下に粘土帯を貼り付けて垂下する口縁帯を有するもの。口縁帯に施される文様の種類は多様性に富む。口縁部の文様によって細分することもできるかもしれない。

器台B 口縁部がまっすぐ斜め上方にのび、口縁端部に粘土帯を付加しないもの。器台Aに比べ薄手であるが、筒部以下のわかる資料はない。

(5)鉢形土器

鉢形土器は、口縁部や体部の形状から以下のような器形に分類できる。

鉢A 底部から内湾気味にのびる体部を有するもの。口縁端部の形状からさらに細分できる。



第18図 弥生土器器種分類図(2)

鉢B 底部から内湾気味にのびる体部が頸部で大きく屈曲して口縁部に至るもの。外面の屈曲部はゆるやかであるが、内面の屈曲部がやや鋭い稜を有するもの。

鉢C 口縁部がやや直線的に開くもので、内外面の調整はやや粗雑である。底部までの全形のうかがえる資料はない。

鉢D 受け口状口縁を有するもの。形態などから北近畿系のものと考えられる。全形がわかる資料は1例のみである。

鉢E 体部最大径付近に列点を施した突帯を有するもの。1例のみ確認した。

(6)有孔鉢形土器

当遺跡では、全形のうかがえる資料がないため詳細は不明である。底径に対する孔径の比が器形を反映すると考えられるが、ここでは、有孔鉢形土器として一括する。出土数は少ない。

(7)蓋形土器

形態の違いから以下の2つに分類できる。当遺跡での出土例はほとんどない。

蓋A 笠形を呈するもの。全形をうかがえる資料があるが、出土数は少ない。

蓋B 扁平な形状を呈するもの。1例のみ確認した。

(8)底部

底部は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器の3器種に認められるが、ここではこれらに共通するものとして設定する。形態による分類のほか、外面の調整手法についても分類する。底部の形態から以下の3つに分類するが、これに該当しないものは、単に底部とする。

底部a 明瞭に突出した底部を有するもの。

底部b 突出気味の底部を有するもの。底部aとc底部の中間的な形態を呈する。

底部c 平底の底部から直ちに体部へと至るもので、突出部のないもの。

底部の調整手法は、以下の4つに分類する。

1類 ハケ調整ないしナデ調整のもの。

2類 ミガキ調整のもの。

3類 ケズリ調整のもの。

4類 その他の調整もしくは不明なもの。

3. 観察表について

弥生土器の観察表の項目・記載内容は以下の通りである。

①番号 図版に記載された土器の報告番号である。遺物写真図版の番号も同じである。

②実測・写真番号 上段は遺物実測番号である。複数ある場合は、接合しない複数の個体をそれぞれ実測したものである。下段は遺物写真の撮影番号である。なお、写真図版に掲載されていなくても、写真撮影した遺物についてはすべて記載した。

③器種 前項で示した器種・器形を記した。

④法量 口径・器高を記した。なお、口径の欄の()は底径を、器高の欄の*は残存高を表す。

⑤残存率 12を分母とする値を記した。測定か所は口縁部とし、口縁部が欠損する場合は底部で測定した。口縁部・底部とも欠損する場合はほかの部位での計測値、もしくは未記入(「-」)とした。また、今回の報告では残存率1/12未満、あるいは2/12程度の個体が多く存在する。これらの口径(もしくは底径)・傾きは推定の域を出ない。こうした個体は実測図の口縁部(または底部・脚部)の一部を破線とした。

⑥技法上の特徴 おもに土器の調整手法について記した。なお、当遺跡出土の弥生土器の多くは磨減が著しく、調整が不明である。調整を記入している場合でも全体のごく一部しか遺存していないことがある。

⑦胎土 混和剤として混ぜられる砂粒の含有量によって相対的に分類した。この場合、混和剤を構成する鉱物の種類についてはふれない。ただし、特徴的な事項については、本文の中でふれることにする。

密 砂粒を全く含まないか、ほとんど含まないもの。

やや粗 1mmないし2mm以下の砂粒を含むもの。

粗 1mmないし2mm以上の砂粒を比較的多く含むもの。

⑧色調 茶褐色・橙褐色・赤褐色・黄褐色・黄灰色・灰褐色の6色を基本とし、必要に応じて濃淡または明暗に分けた。

⑨備考 その他、文様、スカシ孔、すす・黒斑の有無など特徴的な事項を記した。

4. 出土土器の概要

個々の土器の詳細については観察表を参照されたい(付表14)。以下では、代表的な土器や特徴的な事項について記す。

2 トレンチ方形台状墓(1~4) 1は口縁部を欠損するが、受け口状を呈すると考えられる。底部は焼成後に穿孔するようであるが、底部の接合面で剥離した可能性もある。2は互いに接合しない破片からなるため、図上で復原した。杯底部外面にケズリ調整が施されるが、ほかの高杯には認められない。

3 トレンチ落ち込みS X 06(5~11)^(注16) 6は円形浮文に赤色顔料を塗布する。7は内外面とも調整が粗雑である。9は口縁部に歪みがある。また、脚部のスカシ孔は均等に割り付けられていない。

8 トレンチ竪穴式住居跡S B 09(12~23) 19は3とほぼ同形同大である。

9 トレンチ竪穴式住居跡S B 33(24・25) 24は中期的様相の強い土器で、一般的な後期の土器様相としては残らない。ただし、後期初頭の土器様相のなかに残ることがある。

9 トレンチ竪穴式住居跡S B 51(26) 26のみが出土した。

9 トレンチ竪穴式住居跡S B 52(27・28) 27・28が出土した。

1 トレンチ土坑S K 42(29~32) 31・32は、同一個体と思われる。

9 トレンチ竪穴式住居跡S B 32(33~54) 第1・2次両調査で遺物が出土しており、合わせて

報告する。34・38・39・47・49～51は第1次調査で出土したもので、その他は第2次調査で出土した。43は杯部が浅く皿状を呈するため高杯Bに分類したが、口縁部が短いことから、高杯Aに分類できるかもしれない。このような高杯Aと高杯Bの両者の特徴を有する器形は少なからずみられる。その特徴としては、口縁部が短いものの、口径が大きく皿状を呈するというものであるが、器形のわかる良好な資料がないため、原則として高杯Bに含めた。44は杯口縁部がやや強く外反する高杯Bである。

9 トレンチ段状遺構 S X 40(55～74) 55は体部内面に頸部を形成するために絞った痕跡がある。57は内外面とも調整痕を明瞭に残す。甕Cに分類したが、すすなどの使用痕跡は認められない。胎土も比較的密である。64・65はともに高杯Aであるが、口縁部の長さに違いがある。65は数少ない全形を知りうる資料で、脚部cである。杯部内面の中央に円盤充填が剥離したような痕跡があるが、脚部側まで貫通していないので接合3類と考えられる。

9 トレンチ土器溜まり S X 37(75～86) 75は頸部に2個1組と考えられるスカシ孔を施すが、全体で何組あったかは不明である。中期的様相の土器であるが、後期にも少量残るようである。77は口縁部の短い甕であるが、類例に乏しい。

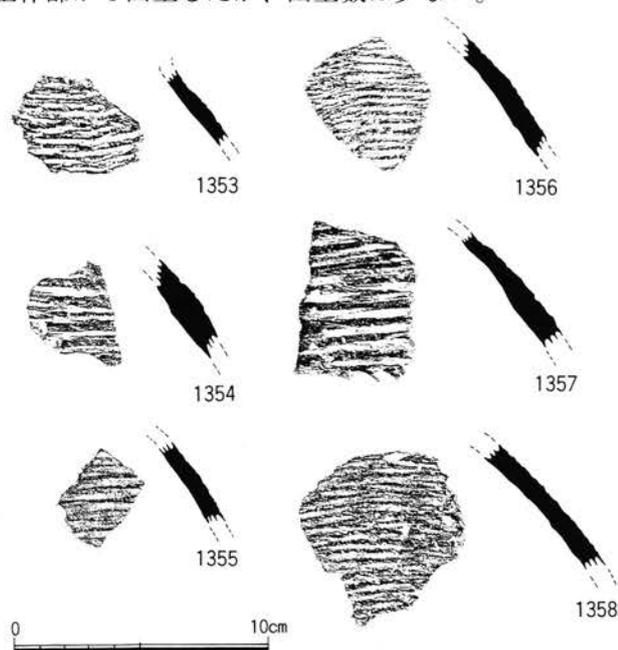
6 トレンチ崖状地形 S X 10(90～104) 第1・2次両調査で遺物が出土しており、合わせて報告する。92・94・101・103は第1次調査で出土したもので、その他は第2次調査で出土した。92は体部内面に頸部を絞った痕跡がある。93は内面に整形時のユビオサエ痕が明瞭に残ることから高杯の脚部の可能性もある。101は口縁部が長く、口径も大きい、杯口縁部がやや直立気味であることから高杯Aとした。65や後掲の176・177などが類例である。102はややまとまって出土した。杯部は、杯底部から直立した後に再び外上方へのびる口縁部を持ち、口縁端部をつまみ上げる。脚部は、脚部aの典型的な例である。103は脚部内面上半に螺旋状のナデ痕跡がみられる。

9 トレンチ溝 S D 15(105～243) 第1・2次両調査で非常に多数の土器が出土しており、合わせて報告する。出土した土器のうち105・106・111・115・121・126・131・133・135・139・140・142・144・145・151～153・155・156・159・169・173・175・179・181・184・185・199～201・203・206・208・215・218・219・223・236・237・241・242は第2次調査出土である。その他は第1次調査で出土した。105は磨減が激しく詳細は不明であるが、胎土などから106と同一個体の可能性がある。110・114は下垂部が剥落しており、接合状況がわかる。115は頸部に断面三角形の突帯を有するが、これは後期の中でも比較的古い様相である。123は、ほぼ完形品であるが、体部外面は焼成後に意図的に穿孔されている。また、体部内面に頸部を絞った痕跡がある。124は体部下半に最大径を有するが、上半部の長さがほかの壺体部の例に比べ長い。最大径よりも体部高の方が大きい例は124のみである。ほかの壺体部の場合、体部高が最大径と同じか、もしくは下回る例が圧倒的に多い。125は頸部内面に接合痕があり、体部の整形後に口縁部を付加したと考えられる。134は頸部の剥離面が明瞭にみられる。125同様、体部に口縁部を付加したものと考えられる。129・131・134・140・142・145は内外面ともユビオサエの痕跡が明瞭に残り、粗雑な作りの甕(または甕C)である。136と137は同一個体であるが接合しない。137は2次焼成

によって体部はやや紫色に、底部は赤色に変色する。146は口縁部が接合部で剥離しており、接合面にもハケ調整を確認できる。148のように体部下半全面にケズリ調整を施す例はほかにない。また、内面のほぼ全体に炭化物らしきものが付着する。165の底面は剥離していると考えられる。166は底端部がわずかに突出気味で高台状をなす。172～175は口縁部がやや長くのびており、高杯Bに分類できる。178～180は、口縁部は短い、口径がやや大きく皿状を呈するため高杯Bに分類する。ただし、178は高杯Aの可能性もある。176・177は高杯Aで101と同器形の高杯である。181は外面に沈線が1条みられる。当初は脚部bまたはdと考えたが、ほかの例などから高杯Dとした。182のような文様を施す高杯脚部の例はほかにない。183は角閃石が混入しており、中河内からの搬入品と考えられる。185は内面をケズリ調整で整形したような痕跡が認められる。190は杯部内面に小さな突起状のものがある。どのような形態になるのか不明である。195は脚頂部内面に粘土を充填したような痕跡がある。このような脚部は比較的多く、接合3類の1パターンと考えられる。198は脚頂部付近の器厚が薄いので、接合1類ないし2類と考えられる。205のような形態的特徴を有するものは、949の例から脚部bと考えられるが、脚裾部の施文にはさまざまなバリエーションがある。208は脚部の屈曲部付近で剥離しており、接合方法などを知る上で良好な資料である。217～219はやや小型の器台であるが、一般的な器台に比べ、装飾的、あるいは無文である。219は口縁端部を上下に拡張しており、ほかの器台とは異なる。226～231はスカシ孔の穿孔位置が全く共通しない。226はスカシ孔が上下2段あるが、上段は高さが一定でない。下段は横一列でほぼ同じ間隔で穿孔される。234は山陰地方の注口土器と思われる。畿内の後期の土器様相にはほとんどみられない。235は2次焼成による被熱のため器表面が著しく剥離する。240は75に比べると、体部から口縁部への立ち上がりかゆるやかである。241・242は外面に文様の見られる小片であるが、本来の器形は不明である。243の肩部の刺突文は押し引き状を呈する。

8 トレンチ片山4号墳(244～246) 周溝や主体部から出土したが、出土数は少ない。

第1次調査包含層(247～270) 各トレンチから出土したものである。248も93と同じく内面の調整が粗雑なため、高杯脚部の可能性がある。250は2次焼成による被熱のため、外面の一部が剥離する。253のような甕Bは、当遺跡では出土例がほとんどなく、全形を知りうる資料は本例1点のみである。ほかにもタタキ調整痕を有する土器片は認められるものの、全形をうかがえるようなものはない(第19図1353～1358)。262・263は、口縁部が短いものの、43や180に比べると強く外反しており、高杯Bに分類した。



第19図 タタキ調整痕拓影

10トレンチ竪穴式住居跡 S B 69ほか(271~296) 段状遺構 S X 69の造成面上で検出された住居跡から出土したもので、278が竪穴式住居跡 S B 82、289が竪穴式住居跡 S B 83から出土したほかは、S B 69ないし S X 69からの出土である。271は器台の可能性もある。272は体部内面に頸部を絞った痕跡がある。276は肩部に面を有するが、成形時の痕跡と思われる。277は器壁が厚い甕で、口縁部の成形をユビオサエで行う。278は頸部に明瞭な剝離痕があり、接合方法がわかる。275~279の甕はいずれも頸部が丸く、「く」の字状に屈曲しているとはいいがたい。287は底端部を指でつまんで整形する。292は段部分に列点文、脚端部に擬凹線状の文様を施す。293は、ほぼ全形の明らかな脚部 d である。208のように、段の部分に刺突文や列点文などがみられる資料もあるが、293は無文である。296は、内面の粘土接合部分を境に器壁の厚さが変わる。その部分で粘土の接合が行われたものと考えられる。

10トレンチ竪穴式住居跡 S B 68(297) 297が出土した。

10トレンチ竪穴式住居跡 S B 79(298・299) 299は口縁部の残りが悪いが、全形を知りうる高杯 C である。

10トレンチ土坑 S K 73(300~308) 300は頸部にハケ工具が強く当たった痕跡が明瞭に残る。301は類似した破片が比較的多く出土しており、類例に319・794・960などがある。303は底部をドーナツ底に作り、それをやや押しつぶしたような状態である。306は直径4mm程度のやや小さめのスカシ穴が多数穿孔される。

11トレンチ竪穴式住居跡 S B 75(308~315) 308は口縁端部外面に少量の粘土を貼り付けて垂下口縁を形成するが、裏込めの粘土は充填していない。広口壺 E の可能性がある。309は口縁端面に列点文を施す例で、当遺跡では、ほかに540などがある。310は口縁端部をややつまみ上げる。このような形態の高杯もあまり例を見ない。312は脚頂部内面に渦巻き状に粘土隆起が見られ、749などに類似する。接合 1 類の円盤充填の方法のバリエーションであろうか。314は脚部 b の脚端部と思われ、後掲の339とは胎土や器形から同一個体の可能性もある。また、高杯 D の杯部の可能性もあるが、屈曲部上面に列点文が施されることから脚部と判断した。

11トレンチ竪穴式住居跡 S B 76(316~342) 316は頸部の形状はわからないが、少量の粘土を張り付けて口縁帯を作る。308に類似するが、広口壺 E とした。320・321は同一個体と思われる。321の下端の破断部分で強く屈曲するようであるが、器形は不明である。外面に上から直線文・波状文・列点文を施す。列点文が屈曲部に相当する。322は、わずかに口縁端部をつまみあげる。323は頸部に接合痕があり、125と同じく体部の成形後に口縁部を付加したものと考えられる。326は底面にもみの圧痕がある。330は口縁部を受け口状に作り、外上方につまみ上げて端部に面を作る。339~341は高杯接合部で、いずれも脚部 c、接合 3 類と考えられる。340は脚部内面の接合痕から、粘土紐を輪積みしながら作られている可能性がある。また、脚部内面上方のユビオサエが螺旋状に回転している。杯底部は剝離した可能性がある。

11トレンチ土坑 S K 77(343) 343は体部外面に明瞭な砂粒の動きと工具痕があり、板状工具によってナデ調整もしくはケズリ調整を施したものと考えられる。

- 11トレンチ溝 S D 74(344) 344のみが出土した。
- 12トレンチ竪穴式住居跡 S B 60(345～351) 348は外面に剝離痕がある。底部作成後にその外周に粘土を貼り付けていたのであろうか。
- 12トレンチ竪穴式住居跡 S B 71(352～356) 356はスカシ孔が1段に4個ずつ施し、計3段ある。また、スカシ孔の各段の間に6条ずつの沈線が施される。口縁帯に3条の擬凹線と竹管を施した円形浮文がほぼ等間隔で貼り付けられる。
- 12トレンチ竪穴式住居跡 S B 61(357～363) 357は口縁部がやや内湾気味を呈する。358は外面調整にタタキ調整を施し、甕Bの底部と考えられる。底面はドーナツ状を呈する。253に比べ底部が突出しない点は注意される。362は非常に小型の高杯の脚部である。
- 12トレンチ段状遺構 S X 70(364) 364は広口壺Aの可能性もある。
- 13トレンチ竪穴式住居跡 S B 121(365～368) ミニチュア土器2点(367・368)のほか、小片2点出土した。
- 13トレンチ竪穴式住居跡 S B 122(375) 375のみが出土した。
- 13トレンチ竪穴式住居跡 S B 123(371～374) 比較的やや大きめの破片4点出土した。
- 13トレンチ竪穴式住居跡 S B 124(376～378) 377は口縁帯の下部が、外下方に斜めにのびる。一般的に口縁帯の面は鉛直方向に一致するが、このように斜め下方の例もある。当遺跡では若干出土例がある。378は頸部に突帯を有する。口縁部を欠損するため、全形は不明であるが、口縁部を垂下させる広口壺Aと考えられる。
- 13トレンチ竪穴式住居跡 S B 140(369・370) 370は口縁部外面に厚さ0.6cm程度の粘土紐を貼り付けることによって、垂下口縁ではなく突帯状を呈する口縁部を有し、その上面に竹管文を施す。当遺跡においてはほかに例のない器形である。
- 13トレンチ段状遺構 S X 126(379～415) 379・380は377と同様に口縁帯が斜め下方にのびるものである。385は円形浮文の間を上下から押さえて口縁部を整える。386は口縁端部をやや上方につまみ上げる。390は口縁端部を外方へ折り返して面を作るようである。404は口縁端部をやや外方につまみ出す。406の脚柱部の横断面形は円形ではなく若干の稜が認められる。411は調整から93や248とは逆に長頸壺などの口縁部となる可能性がある。414・415は胎土・色調が類似することから同一個体と判断した。この器台の色調は全面黒灰色を呈し、必ずしも黒斑とは言い切れない。ほかにこのような色調を呈するものはみられない。
- 13トレンチ土坑 S K 113(416・417) 416は肩部があまり張らない体部を有する。内外面に整形時のユビオサエ痕が明瞭に残る。
- 13トレンチ柱穴 S P 133(418) 418のみが出土した。
- 13トレンチ片山5号墳(419～425) 出土遺物のうち419・422・425は第2次調査で、その他は第1次調査で出土したものである。421の底部はドーナツ状の底部を押しつぶしたような形状を呈する。424は充填状況が明確ではないが、断面の接合痕から接合1類の可能性もある。425は脚頂部付近外面に明瞭な剝離痕があることから、ここから杯部が成形されたと考えられる。なお、

頂部も剥離痕が明瞭であり、円盤充填の痕跡(接合1類)である可能性が高い。

13トレンチ崖状遺構 S X 53(426~436) 遺物はいずれも第2次調査で出土したもので、第1次調査で出土した遺物はない。426は頸部外面に接合痕があり、体部整形後に口縁部が付加された例の1つと考えられる。429は広口壺Aとしたが、器台の可能性もある。430は口縁帯が強いヨコナデもしくは擬凹線の施文によって大きく内湾する。広口壺AやDの大半が面をなすことからみれば、やや異なった形態を呈するように思われる。433は口縁端部がユビオサエなどによりやや内湾気味を呈する。434は脚部上半が完全に中実であることやシボリ痕がみられないことから、棒状の粘土塊から脚部を成形した可能性がある。

第2次調査包含層(437~496) ここで報告する遺物は磨滅のため調整不明あるいは不明瞭なものが多い。また、小片が多い。442は肩部外面に櫛描文と波状文を交互に繰り返して施文する。文様の条数は、上の2つが6条ずつ、下の2つが条数不明である。443・444は頸部に突帯を有する。また、443は突帯の2面ともに小さな竹管文を細かく施す。444はやや内湾気味の口縁部に端部をやや内方に向けてつまみ上げている。450は頸部に明瞭な剥離痕を有する。453・455はあまり張らない肩部からゆるやかに外反する口縁部を有する。456は外面に縦方向の突帯がみられないが、体部の形態から無頸壺Cと考えられる。24と同一個体の可能性がある。457は体部中位に突帯を作り、ハケ工具で刻み目を施す。458の底部外面の接合痕は螺旋状に回っているようにみえる。476・477は180や43と同じように口縁部が短く、口径が大きい、口縁部が外傾することから高杯Bに分類した。478は杯部の接合、立ち上がり状況を見ると高杯接合部ではないかもしれない。480は接合3類であるが、杯部内面(脚頂部)が剥離している。482は円盤充填部が剥離するが、接合面にハケ調整が施される。483の内面上部は螺旋状にナデ調整を施す。485は203と同一個体の可能性がある。487は屈曲部に沈線を施すことやその器形から高杯Dの杯部の可能性もあるが、端部外面に波状文が施されることやスカシ孔があることから、脚部bの脚裾部と判断した。488は脚部aの脚裾部と考えられる。491は口径が非常に大きく、口縁部に付加される口縁帯の断面形も方形を呈するなど、一般的な器台Aとはやや異なる器形を呈する。後掲の1099が同器形の器台である。493は口縁部内面(上面)に竹管文と鋸歯文からなる文様を描く。また、口縁帯に大小2種の竹管文を施す。

15・16トレンチ分岐点付近(497~501) 497・498はほぼ同形同大で、調整なども類似した甕Cである。500は口縁部が短く、口縁部外面がやや肥厚したつくりである。501はどのような器形であるのか判断しにくい、広口壺の可能性もある。口縁端部外面に粘土を貼り付けるが、明瞭な突帯とはならない。その下部に凹線状のものが施される。

16トレンチ土器供献遺構 S X 05(502~508・514~523) 土器が並べられた状態で出土したもの(502~508)と、堆積土の掘削中に出土したもの(514~523)がある。

前者は、短頸壺(502)、広口壺A(503)、甕A(504・505)、高杯B(506・507)、広口壺B(508)の7点からなる。502は当遺跡出土の短頸壺の中では大型品に属する。体部内面の調整痕や接合痕などから502の製作方法は次のように復原できる。まず、体部中位まで連続的に製作した後、

体部上半部に粘土紐を1本ずつ積み上げて段階的に製作し、頸部まで完成させる。その後、口縁部を一気に製作したと考えられる。503は頸部に突帯を有し、その直下に刺突文を施す。外面はほぼすべてミガキ調整であるが、部位によって施文方向が違う。体部上半と下半はともに縦方向のミガキ調整であるが、中位付近は横方向のミガキ調整を施す。上半部は不明であるが、下半部では、縦方向のミガキ調整を横方向のミガキ調整が切っていることがわかる。503は内面の磨減が著しく製作方法などを検討することはできなかった。504・505は、ほぼ同器形の甕であるが、505が若干器高が高い。ともに口縁部から体部にかけての外面にすすが大量に付着する。また、両個体の製作方法は、ほぼ同一と考えられ、体部内面の調整痕から体部上半部までを連続的に作った後、肩部の粘土紐を追加してナデ調整を施す。このときの接合痕が明瞭に残る。さらに505の頸部内面の接合痕の存在から、これまでたびたび述べてきたように、完成した頸部に口縁部を付加して完成させると考えられる。この製作方法は502の場合と同じと考えられる。506は口縁部がわずかに外傾し、皿状の杯部であることから高杯Bとした。口縁部外面および脚底部外面に赤色顔料を塗布する。脚部は脚部aである。ほぼまっすぐの脚柱部と、脚裾部は強く屈曲した「ハ」の字状に開く。脚柱部の製作方法は、内面に凹凸がみられないことから、棒状のものに粘土を巻きつけて作った可能性がある。脚裾部に2個1組のスカシ孔を3組(計6個)を有する。接合1類である。507は杯部がやや深いものの、口縁部が外傾することから高杯Bとした。杯部外面の屈曲部はやや丸みをおびて鋭い稜とはならない。脚部は脚部cである。脚部にはスカシ孔を上下2段に60°ほどずれた位置に穿孔する。接合3類である。508は小型品であるが、ていねいなミガキ調整を施す。肩部があまり張らず、体部最大径が体部中位付近にある。

後者では、514は頸部に沈線を2条施すことから弥生時代前期の土器である可能性がある。520は508に類似した壺の底部である。523は口縁端部をややつまみ上げる。

14トレンチ溝S D01(509・510) 509・510が出土した。

15トレンチ竪穴式住居跡S H03(511) 511の口縁部の残存率は低いが、体部以下は完存する。鉢Bの全形がうかがえる資料である。

15トレンチ竪穴式住居跡S H06(513) 513は口縁部を欠損するが鉢Aの可能性がある。

15トレンチ段状遺構S X12(512) 器種不明の土器片が出土している。内面はやや内湾気味を呈する。高杯であろうか。このほかにも甕の破片や脚台などが出土した。

16トレンチ土器溜まりS X04(524～590) 524は広口壺の可能性がある破片で、501と同器形と考える。525は口縁端部外面に少量の粘土を貼り付けて斜め下方にのびる口縁部下垂部を形成する。527は390に類似した個体である。530は体部内面に頸部を絞った痕跡がある。531・532は頸部に突帯を有する。535は広口壺Cに分類したが、外面に施される文様がほかの例とは異なる。やや大きめのヘラ状工具を使用して、刺突文や直線文を施したものであろうか。536と537は胎土・色調から同一個体と思われる。540は口縁部端面に列点文を施す。542は口縁端面に太めの刻み目をやや間隔を広く開けて施す。544と545は胎土・色調などから同一個体と思われるが、復原法量は一致しない。もともとの個体に焼き歪みなどがあったのであろうか。544・545は大阪府大

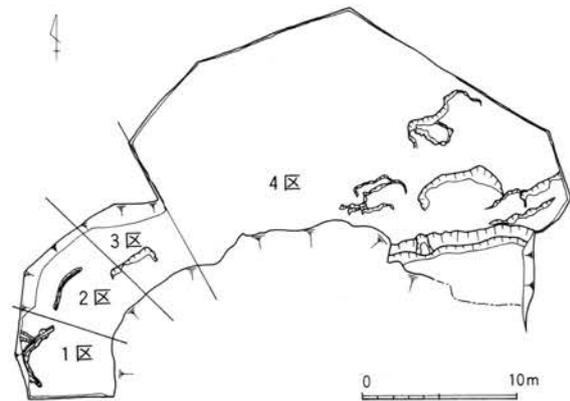
阪市長原遺跡S B01出土の広口壺(197)などに類似するが、当遺跡出土資料の方が一回り大きい。^(注17)546はほぼ全形の知りうる甕Aである。磨滅のため504・505のような製作方法の復原はできない。底部は504・505に比べ大きく厚い。また、頸部の屈曲もゆるい。547の体部外面の砂粒の動きが甚だしい。また、体部内面下半のケズリは横方向のち縦方向に施すようである。548は体部内面に肩部を絞った痕跡がある。551の胎土は相当に粗い。552は非常に高い突出底を呈する。573の杯口縁部は杯底部の擬口縁の上だけでなく、側面にも接合する。接合部はわずかに下垂させる。この点から573を高杯Dに分類できるかもしれない。579は杯部内面に化粧土が塗布されていたが、ほとんど落ちているようである。また、脚部を下から見ると脚部の接合痕が渦状に2か所確認できる。粘土板を丸めたり、脚部をねじったりした痕跡であろうか。588は523に形態的に類似するが、同一個体かどうか即断できない。590は口縁帯・口縁部内面に赤色顔料を塗布する。筒部上半と脚部外面に黒斑がある。外面に沈線が各5条、3段分施される。スカシ孔は上段に3個、下段に2個確認でき、本来は各4個ずつ穿孔されていたと推定される。

第3次調査包含層(591～635) 各トレンチの包含層から出土した土器を一括して掲載した。593は受け口状の口縁部が広口壺Cや甕Dに比べ、極端に短いものである。当遺跡では、ほかに例をみない。598は口縁部をややつまみ上げて面をなすが、595・599・600は外反気味の口縁部に端部をナデで面をなす。後者の例は、当遺跡出土の甕、特に甕Aでは例の多い端部の処理方法である。603の体部下半に砂粒の動きが認められるが、上から下へ向かうため、倒立させて施した可能性が高い。607は内面にすすのようなものが付着する。612は類例に乏しいが、弥生時代中期に盛行する水平口縁高杯の系譜につながるものであろうか。613は573と同様、杯部屈曲部がわずかに垂下する。615は径の小さなスカシ孔が施される。621は口縁端部をつまみ上げて口縁帯をなしており、粘土の付加は行わない。631は脚頂部に剥離痕がみられることから杯部を脚部の上に付加する接合2類と考えられる。633は柱状を呈する脚部から脚裾部が大きく開くものである。一般的な脚部cに比べ裾部の広がり大きい。

A地区土器溜まりS X 242(636～650)^(注18) 636は691と胎土・色調などが類似しており、同一個体かもしれない。639は非常に大型の壺である。磨滅が著しいため、詳細は不明であるが、広口長頸壺と考えられる。640は全形をうかがえる広口壺Eである。口縁端部外面に粘土紐を付加して突帯状をなす。また、頸部に突帯を有する。体部の形態は、肩部が大きく張り、体部中位よりも少し下に体部最大径がある。体部下半は直線的に底部へ至るようである。内外面とも磨滅などにより観察が十分でないが、製作方法としては体部最大径付近で一度休止し、その後、体部上半以上を製作したものであろうか。641は体部外面に円形の剥離痕跡がある。645の製作方法は、粘土紐を輪積みにした後、上部を絞り、下部を広げる。内面にナデ調整を施し、杯部形成後、円盤を充填し、脚部内面側から押さえる、と考えられる。646は、脚頂部にナデ調整、ハケ調整などをていねいに施していることや、内面にシボリ痕がみられないことから、645とは作り方が異なると考えられる。648は底部内面に粘土紐積み上げ時の痕跡がある。

A地区段状遺構S X 248(651~665) 652は当初、高杯脚部の可能性も考えたが、端部が厚く面状をなすことから、広口壺Bに分類した。655は磨滅が著しいが、ほぼ全形の復原が可能であった。大きさとしては504・505の半分程度であるが、口縁部のみの資料をみると同法量のものが多く存在することから、504・505のような大型品とともに655のような小型品が一般的に使用されていたのではないかと考えられる。

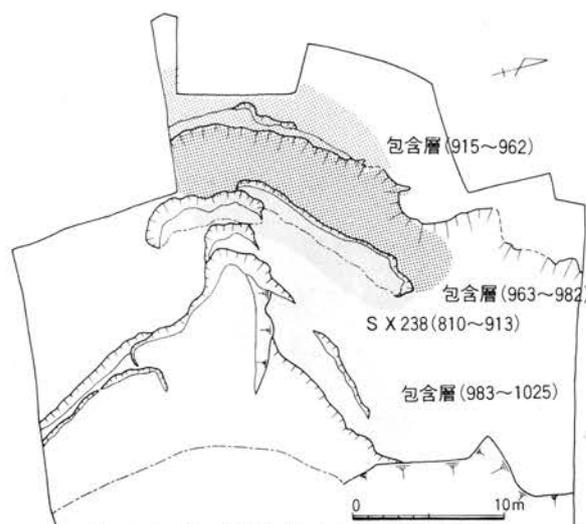
A地区包含層(666~809) 666は下垂部のやや長い口縁帯を有するが、ほかに類例がない。667は磨滅が著しいが、剥離状況から少量の粘土を付加して口縁帯を形成していたようである。675は639と胎土などが類似することから同一個体の可能性がある。676は頸部内面に沈線のような粗いハケを施す。また、頸部外面にも刺突文を施す例は珍しい。677は本来の形態が不明であるが、口縁部外面を肥厚させる。粘土を付加しているかどうか確認できなかった。広口壺の一種の可能性を考えている。678は全形をうかがえる短頸壺である。685は小型の無頸壺Aである。体部は算盤玉形を呈する。689は受け口状を呈する。甕Eと考えたが、小片のためほかの器種になる可能性もある。693は体部下半に最大径があり、また外面調整もややていねいなため、小型の壺の可能性もある。694は肩部に突起を貼り付ける。高さは7mmを測る。肩部の突起は外面調整のハケの前に付ける。695は内湾気味の口縁部を呈する。697は内傾する口縁部を有する。693~695・697は当遺跡ではほかに例をみない。699~701は口縁部が短いタイプである。705・707は口縁端部をややつまみ上げながら端面を整形する。707の肩部は張るが、705は張らないようである。711は器高(残存高)のわりに大きな底部を有する。722は底部の充填状況がわかる資料である。723の外面の工具痕はタタキ調整の可能性もある。723・725・729はドーナツ状の底部である。742は底部の突出が著しいが、類例に乏しく体部以上の形態は復原できない。743はドーナツ状の底部であるが、内面に接合痕がみられることから、粘土紐の輪台の上に底部を作っていると考えられる。744は絞り寄せて作られている。ミニチュア土器あるいは手づくね土器の底部であろうか。745は底面の周囲にヘラ状工具による面取り風に仕上げられる。747は鉢としたが、どのような器形か不明である。高杯の杯部の可能性もある。748は唐古・鍵遺跡第19次S D 204第8層出土の鉢(53)の口縁部外面の粘土が剥離した状態に類似する^(註19)。749は、ほぼ完形に復原できる資料である。脚部内面上部にみえる接合部に渦巻き状を呈する粘土塊がみられることから、杯部とは別に充填されたものと判断し、接合1類と考えた。杯部の形態は506に類似するが、より浅い。脚裾部はヨコナデにより段状をなす。752は口縁部を欠損するが、ほぼ直立すると考えられることから高杯Aに分類した。753は口縁端部をつまみ上げ、端部内面に凹線状のものがめぐる。756は高杯ではなく、甕Eなどの可能性もある。758は円盤充填の状況がわかる資料である。772は外面にねじった



第20図 A地区遺物取り上げ地区割り図

ようなひび割れがみられる。脚部を絞った際の痕跡かもしれない。773は脚部上部が中実であり、典型的な接合3類の資料である。内面上部にはシボリ痕状の痕跡があるが、絞って作られたものかどうか即断できない。774は脚部と杯部の別作りの資料と考えられる。数少ない2類の例である。775は脚部内面上部の状況から円筒状のものを芯にして成形したものか。776はスカシ孔のうち1個は貫通せず、内面に粘土塊が残る。781・782は脚部aの脚裾部と考えられる。789は全体に磨滅気味であるが、内面にミガキらしき痕跡が確認できることやその形態から高杯Dとした。790は本来の器形は不明であるが、脚部dの可能性はある。破断面は接合面である。791～796は小片のため本来どのような器形で、どの部位のものか不明な資料である。793・794は壺または甕の一部と考えられるが、ほかは全く不明である。793は刺突原体の木目が残る。797は杯部破断面付近に水平になるような屈曲があることから、いわゆる結合形土器であろうか。大阪府和泉観音寺山遺跡出土資料(第29図10)に類例がある^(注20)。798は器台かどうか不明であるが、端面は斜め下方に面をなし、端部を少しつまみ上げる。801は802と同一個体の可能性はある。802は筒部成形時の絞り痕跡がある。804は器台かどうか不明である。ほかの器種である可能性もある。808はスカシ孔の形状が部分的に直線的であることから円形ではないかもしれない。809は筒部成形時の絞り痕跡がある。

B地区平坦面 S X 238(810～913) 812は全体に化粧土を施すか。816は体部内面に肩部を絞った痕跡がかすかにみられる。また、外面に化粧土が部分的に遺存する。817は頸部が細いため細頸壺に分類したが、体部の形状や口縁部が開き気味であることから、長頸壺の可能性もある。818・819は小型の土器であるが、胎土は良好である。820は当遺跡ではあまり例を見ない直口壺である。後掲の989に比べ、口径は大きいが口縁部が短い。布留式の甕などに似たプロポーシオンを呈するが、出土層位、調整などからこの時期の直口壺と判断した。822は大型の広口壺Aである。体部最大径以下を失うため、底部の形状などは不明である。823から839まではさまざまな形態の甕Aと甕Cである。824は口縁部がほかのものよりも長く、特徴的である。また、「く」の字状の刺突文を施す。824・825・827・828・831～834・837は肩部があまり張らないもので、828



第21図 B地区遺物取り上げ地区割り図

や834のように口径と体部最大径がほぼ一致するものもある。831・834は口縁端部をややつまみ上げる。828は口縁端面に列点文を施す。839は頸部から体部上半にかけてのユビオサエ痕などは、肩部を絞った際の痕跡および整形時の痕跡と考えられる。832の体部内面下部の粘土接合痕はかなり明瞭である。分割成形の痕跡を示すものであろうか。840・842は口縁部外面にやや大きめの工具による刺突文を施す。852の内面調整は放射線状に板状工具痕がみられる。856はやや大

型の壺の底部である。545に類似した底部と考えられる。867・869はやや厚手の口縁部を有する高杯である。867は口縁部外面がやや肥厚気味であり、ほかに例をみない。869は口縁端部内面がヨコナデを施し端部をやや丸く仕上げる。870は口縁部が外反することから高杯Bとした。871は口径が小さく、杯部が深いことから高杯Aに分類した。また、口縁端部が明瞭な面をなす。接合3類と考えられる。872は接合3類の典型例の一つである。脚部下半以下を欠損するが、脚部cと推定される。口縁端部は尖り気味である。872より一回り小さいが、507と形態や接合方法が一致する。ただし、872には沈線がなく、またミガキの施す方向にも違いがあるため、互いに関係するものかどうか不明である。874の内面には粘土板を丸めて筒状にした時にできたシボリ痕がみられ、内面の凹凸が著しい。875の内面の状況も874とほぼ同様である。877は一枚の粘土板を丸めて筒状にしたときの接合痕が内外面ともに認められる。脚柱部の作り方を考える上で重要な資料である。885・886は脚部aの脚裾部と考えられる。890は、脚端部がわずかに屈曲しており、端部はつまみ上げたような形状を呈する。893は板状の口縁部を呈する器台Bよりもかなり厚く特徴的である。895・896は筒部内面にシボリ痕がみられる。896は筒部径がやや小さく細長い器台である。897はほとんど内湾しない高杯Cである。900はミガキがていねいに施され、胎土も精良な精製土器の一種である。901は頸部外面に成形時に絞った痕跡がある。909は肩部内面に頸部のシボリ痕跡がある。910・911は外面に鋸歯文を施した破片である。911はスカシ孔を確認できる。本来の器形は不明である。

B地区溝S D 212(914) 914はスカシ孔を施していない器台である。口縁部とは接合しない。

B地区包含層(915~1060) 915~962は平坦面S X 240およびその上面の堆積土から出土した土器群である。922は外面に接合痕があるが、本来の器形は不明である。923は口縁部内面に成形時のシボリ痕がある。926は外面に刺突文を施さない点で、ほかの広口壺Cとは異なるようである。938は底端部をつまみ出して高台状を呈する。941は明瞭なドーナツ状の底部を呈する。943は後期ではなく中期末頃の資料の可能性があるが、詳細は不明である。944は高杯Cであるが、9・264・299に比べると、口径に対して杯部は浅い。945も高杯Cと考えられるが、944よりもさらに杯部が浅い。949は柱状の脚部に装飾された段状の脚裾部を有する脚部bである。脚部bの完存例は本資料のみである。内外面とも磨滅が著しいが、ユビオサエ痕を確認することができる。脚裾部上面のスカシ孔は、本来、2個一組で4組、計8個あったと考えられる。脚端部に半円を呈するスカシ状のものがある。950は脚柱部が完存するため断面および内面調整は推定である。956は断面を見ると、斜め方向の接合線が複数見られる。このことから956は、まず粘土紐を螺旋状に巻き上げて棒状の粘土塊を作り、棒状工具などを利用して脚部を広げることによって作られていると考えられる。この棒状工具の痕跡を示すものとして脚部内面頂部直径3mm、深さ7mmの小さな孔がある。960は319などの体部片と同じ胎土・色調を呈する。962は3個の蓋孔を確認できるが、本来は4個と推定される。蓋Bは本例のみである。

963~982は平坦面S X 240と平坦面S X 238の間の斜面で出土した土器群である。963は口縁部の短い甕で、頸部内面が鋭く「く」の字状に屈曲する。964は972と同一個体の可能性がある。そ

の場合、655と同法量の個体と考えられる。973は杯部と脚部の明瞭な接合痕を確認できる資料で、接合3類と考えられる。975は脚部内面にシボリ痕がなく、接合1類ではないことから、棒状の粘土塊から脚部を成形したのと考えられる。978は杯部に多数のスカシ孔を1.6～2cm間隔で穿孔することから、器台の一種と考えるべき資料である。杯部と脚部は破損・磨滅が著しく、直接接合しない。類例に乏しいが、よく似たものとして、兵庫県表山遺跡段状特殊遺構出土の125がある。なお、杯部とした部分が脚部の可能性も類例が乏しいことから否定できない。^(注21)981は口縁端部をつまみ上げて受け口状を呈する。

983～1025は平坦面S X 238から平坦面S X 239にかけての斜面および平坦面S X 239の堆積土から出土した土器群である。985は頸部に突帯を有する。988は全体に外反気味の長頸壺の口縁部である。989は820とともに当遺跡ではあまり例を見ない直口壺である。989は口縁部が直線的で、体部は中位以下を欠損するが、やや肩部が張り、球形状を呈する。991は脚台付の甕と考えられる。992は長頸壺であるが、磨滅のため調整は不明である。体部下半にかすかにケズリ調整らしい痕跡を確認できる。996は底面がくぼむ。1009は底端部をつまみ出して高台状を呈する。1011は平坦面S X 238出土の908と同一個体ではないが、胎土が類似する。1014は脚頂部が杯部との接合面と考えられ、接合2類の数少ない例の1つである。1015は脚部内面上部に粘土板を丸めた時のシボリ痕がある。1017は脚部aの脚裾部と考えられる。1018は487などの例から脚部bの脚裾部の一部である可能性が高い。1021は器台脚部としたが、器台以外の器形の可能性もある。脚端部外面に綾杉文を施す。1024は小片からの復原であるため、大きさ・傾きは推定である。1025は器壁が薄く、胎土も粗いものであるが、本来の器形や天地は不明である。また、傾きも推定である。大型の壺または器台になる可能性がある。

1026～1029は平坦面S X 239よりも下方の堆積土中から出土したものである。1028は小型であるが、脚部dの可能性もある。

1030～1055はB地区のどの地点から出土したか不明なものである。1030は磨滅気味であるが、頸部外面に2条の沈線がある。頸部に沈線のある例はほとんどない。1032は全形の知りうる長頸壺である。口縁端部外面に凹線状のヨコナデを施す。体部下半はケズリ調整を加えるが、長頸壺の体部下半にケズリ調整を施す例は管見による限り、ほとんどない。より古い時期の調整手法が残ったものであろうか。頸部内面に明瞭な接合痕があり、また、肩部内面にも接合痕があることから、502・504・505に類似した製作方法が採られたのと考えられる。1038は口縁端面に列点文状の刻み目を施す。1043は杯部が深いことから高杯Aに分類した。杯底部中央がくぼむが、65のように剥離しているわけではない。接合痕などがみられないことから、その製作方法は復原できない。ただ、ほかの例に比べ、脚部から杯部にスムーズに移行していることから、これまで述べてきた接合方法、製作方法とは異なる方法である可能性が高い。つまり、脚部から杯部まで一気に製作し、最後に杯底部を閉塞する可能性がある。1044の外面の沈線は1条ずつ引き、途中で1条なくなる。また、脚部内面上部に接合痕が螺旋状にみられることから、芯となる素材に粘土紐を螺旋状に巻き付けたのと考えられる。1054はほかの器種になる可能性もある。

1056～1060は平坦面直下の堆積土から出土したものである。いずれも小片である。1057は口縁部が短く器壁も薄い。

C地区包含層(1061～1070) 1063は磨滅しているが、口縁部が長くのびた高杯Bと考えられる。1067は脚頂部に内面側から上へ向けてヘラ状工具で突いてできた穴がある。脚部内面の接合痕やその接合痕を境に調整痕跡が変わっていることから、上半部を絞って形を整えたあと、下半部を次ぎ足していくと考えられる。次の1068をはじめ、同じような製作方法の個体は比較的多い。1068は脚部の円盤充填部分で剥離した痕跡がある。また、スカシ孔がランダムに穿孔されるようである。1070は小さなスカシ孔を穿孔した脚部bである。

C地区竪穴式住居跡S B 235(1071～1102) 1073は肩部に施文を持つ直口壺である。1074は非常に大型の甕と考えられる。このような大法量のものはほかに例がない。1075は口縁端面に肩部と同様の刺突文を施す。1078はやや粗雑な体部であるが、外面に単位の明瞭なナデの痕跡がある。1087は口縁部が肥厚している。1088は749とほぼ同法量の高杯である。1089も749とほぼ同法量であるが、口縁部は1088よりも外反している点は注意される。1094は棒状の粘土塊から脚部を製作した可能性がある。1099は断面方形の下垂部を持つ器台で、類例に491がある。1100・1101は同一個体と思われるが接合しない。どちらもほぼ同じ部位と考えられる。1条の沈線を引いて区画線とし、その上半に斜線を、下半に格子文を施す。文様の意匠が具体的に何を表現したものか不明であるが、斜線が屋根部分を、格子文が壁部分を表現しているとすれば、家屋を表現したものと考えられる。1102は493と同じような文様を口縁部上面に描くが、口縁帯の形状や竹管文の相違から別個体である。

C地区竪穴式住居跡S B 236(1103～1146) 1103は頸部が非常に細くなる広口壺Aである。口縁帯は377や380のように斜め下方にのびる。1106は内外面とも器表面の剥離が著しいが、2次焼成が原因と考えられる。1107は口縁部がかすかに屈曲し、端部に面を作る。肩部はほとんど張らない。1109は数少ない甕Bの例である。235とは異なり、頸部から口縁部にかけてゆるく外反する。1110は134に形態や調整が非常に類似する甕である。1125は内面に螺旋状の接合痕があり、粘土紐の巻き上げ痕跡と考えられる。1130は脚部内面にヘラ状(棒状か)工具を回転させたような粘土のよじれがみられる。1135は493・1102と同様の文様構成を持つが、口縁帯の形状は493に類似する。1136は口縁端面に刻み目状の列点文を施す。1143はタタキ調整と刺突文を有する破片である。1144～1146は幅2mmの小さな突帯を貼り付けたものである。いずれも屈曲する部分に横方向の突帯を貼り付け、縦方向の突帯を3条ずつ貼り付ける。全形は不明であるが、無頸壺C、あるいは手焙り形土器の体部片の可能性はある。

D地区包含層(1157～1190) 1157は口縁端部外面に粘土紐を貼り付けて、断面方形の突帯状の口縁帯をなす。口縁帯外面には列点文を施す。1158は口縁部の貼り付けに先行し、擬口縁部外面にヨコナデを施す。1160は口縁部外面に粘土紐を貼り付け断面三角形の口縁帯を作るが、ほとんど垂下しない。1164は粘土紐の素地の違いに起因すると思われる、縞状の色調の違いがある。これによって粘土の積み上げ方法を知ることができる。また、体部内面に頸部のシボリ痕跡がある。

1177・1178は口縁部が外反し、長くなった高杯Bである。1180は口縁端部を欠損するが、高杯Dと考えられる。杯底部から口縁部に立ち上がる屈曲部を若干垂下させる。1181は脚頂部の断面観察が可能な資料である。1184は口縁端面に刺突文を施す。1185はほとんど垂下しない口縁部で断面は方形に近い。どちらも筒部の形状は不明である。

E 地区包含層(1149～1156) 1149の口縁帯の下垂部は粘土を折り曲げて作ったものか。1154は胎土・色調・焼成などから後掲の段状遺構 S X 251出土の1192・1198と同一個体の可能性がある。

E 地区段状遺構 S X 251(1191～1198) 1193は949に類似した脚部bの脚裾部である。

E 地区段状遺構 S X 252(1199～1206) 1199は口縁端部を折り返して面を作る。1204は脚部内面上部に円盤を充填したような痕跡がある。形態的には、339・340に類似する。1206はスカシ孔と列点文が部分的に残ることから、949・1193に類似した脚部bの脚裾部と考えられる。

E 地区段状遺構 S X 253(1207～1292) 1207は当遺跡で確実に確認できた細頸壺である。1214・1215は頸部に突帯を有する。1214は突帯刻み目を施す。1217の体部外面の粘土接合痕は、口縁部に対して斜行する。1216・1217は胎土・色調が似ており、セットと考えられる。1230の頸部内面の稜線は粘土巻き上げ痕の可能性が高い。1233は粘土接合痕が水平とはならない。粘土紐を螺旋状に積み上げた可能性がある。1236はナデなどによりほとんどみえないが、体部内面に頸部のシボリ痕がある。1237は甕Dに分類したが、ほかの例と異なり、口縁端部をつまみ上げてやや尖り気味で、外面の刺突文が施される明瞭な面がみられる。1243は体部上部と中部に接合面を一部確認できる。接合面の状況から、粘土紐を螺旋状に積み上げた可能性がある。1246は内外面の調整がミガキなので壺と判断されるが、外面にすずが付着する。1259の脚部は中実で、断面観察から粘土板を折り曲げて製作されたと考えられる。1260は内面に残る接合痕などから、粘土紐を巻き上げたのち、絞って成形すると考えられる。この時、内面にていねいな調整は施されないため、接合痕に重複してシボリ痕が認められる。1261は脚頂部に接合面がみられることから、接合2類と考えられる。脚部下部は斜めの折損痕跡があり、破断面を見ると粘土接合面のようにみえる。粘土紐の巻き上げ痕跡と考えられる。1264は上段のスカシ孔3個のうち2個が貫通しておらず、粘土が脚部内面に残る。1269と1270は胎土・色調などから同一個体と考えられる。1276は破断面の状況から、脚部bまたはdの可能性があると考えた。1277～1286はさまざまな形態の器台である。1279は口縁帯に竹管文とともにヘラ状工具による線刻がみられ、組紐のような意匠を作り出している。1284は1185に類似する資料である。1185は内面にミガキ調整がみられることから器台Bに分類した。1286はあまりほかに例を見ない器形の器台である。1289は内外面ともやや粗雑な仕上げである。

F 地区包含層(1293～1352) 1295・1296は胎土の特徴から河内産と思われる。1299の頸部に施された各文様は5ないし6条単位で構成され、同一の原体を使用と考えられる。1306は甕の口縁の可能性もあるが、その場合、器形が相当いびつになる。1309は受け口状を呈する甕であるが、口縁端部がやや幅広の面をなすことや、外面に受け部の明瞭な陵を有することなど、当遺跡ではほかに例のない器形の甕である。1311は外面剝離箇所気泡状の凹凸があるが、2次焼成による

ものであろうか。1212はやや粗雑な作りの鉢Cである。鉢Cの全形がわかる数少ない資料であるが、底部は1312のような形態以外も存在すると考えられる。1317は内面に底部成形時の粘土を寄せたシワがある。1333～1335はいずれも脚部bの脚裾部と考えられる。それぞれにさまざまな装飾が施される。これまでみてきた脚部bの脚裾部の形態は、2、3の類似した資料がある一方で、加飾の方法などはさまざまなものが多い。1337の製作方法は、粘土板状のものを丸めて脚柱部を作り、上部を絞り込んで「ハ」の字状脚柱部を作る。脚頂部をやや外方に向けつつナデ調整を施し、円盤充填部とする、と考えられる。

(筒井崇史)

第2節 弥生土器の検討

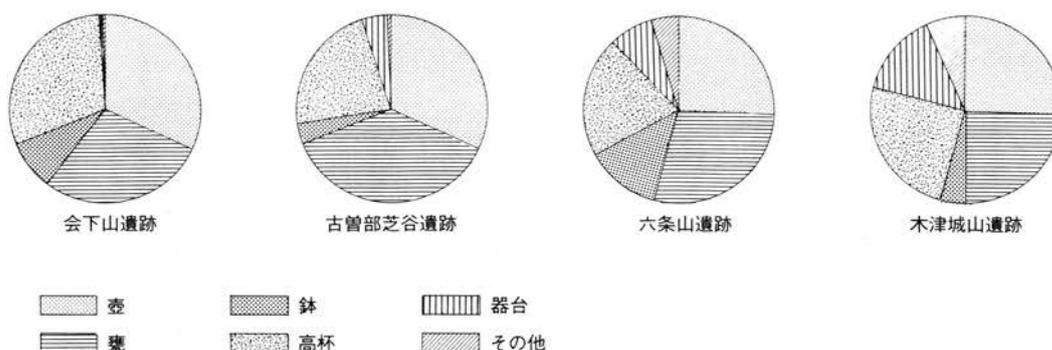
1. 出土土器の器種構成について

出土した弥生土器について、個々の個体の識別を可能な限り行った。なお、個体識別はおもに口縁部を対象として行い、底部と高杯脚部については別に取り扱った。

まず、主要な器種の内訳は、壺237点、甕221点、高杯143点、鉢44点、有孔鉢7点、器台131点、その他57点である。このほかに、底部361点、高杯脚部182点(脚端部のみの破片を除く)を数える。底部は壺・甕・鉢の3器種に共通のものとして、分類を設定したので、この3器種の合計数と比較してみると、壺・甕・鉢計502点に対して底部361点である。各器種には底部まで残存するもの

付表4 主要遺跡器種構成表

		壺	甕	鉢	高杯	器台	その他	合計
会下山遺跡 (後期)	個体数	243	215	63	232	5	2	760
	百分率	32.0%	28.3%	8.3%	30.5%	0.7%	0.3%	100.0%
古曾部・芝谷遺跡 (古曾部地区)	個体数	1555	1806	174	1100	213	31	4879
	百分率	31.9%	37.0%	3.6%	22.5%	4.4%	0.6%	100.0%
六条山遺跡	個体数	304	336	150	247	90	55	1182
	百分率	25.7%	28.4%	12.7%	20.9%	7.6%	4.7%	100.0%
木津城山遺跡	個体数	237	221	44	226	131	64	923
	百分率	25.7%	23.9%	4.8%	24.5%	14.2%	6.9%	100.0%



第22図 畿内弥生遺跡の器種構成グラフ

が37点あるので、各器種別の数値が実際の個体数に近いと考えられる。また、高杯の総点数143点に対して、脚部の点数は182点を数え、脚部からみた個体数の方が多い。さらに、口縁部から脚部まで遺存するものが11点、杯部と脚部の接合部分が33点の計44点があるので、この値を加えた226点が、高杯の実際の個体数に近いものとする。以上の点をふまえて、先の内訳を若干修正したものを付表4に示した。さらにグラフとして表したものが第22図右端である。

各器種の比率をみると、壺・甕・高杯はほぼ似たような数値を示す(25.7%・23.8%・24.5%)。鉢は概して少ない(4.8%)。器台はやや高率である(14.2%)。有孔鉢はその他に含めたが、確認点数はわずか7点である(0.8%)。

これを器種構成が明らかにされている兵庫県芦屋市会下山遺跡^(注23)、大阪府高槻市古曾部・芝谷遺跡^(注24)、奈良県奈良市六条山遺跡^(注25)と比較する。これらはいずれも高地性集落であり、当遺跡と遺跡の立地が同じ条件にある。平地の遺跡のデータがないためやや偏ってしまう可能性はあるが、少なくとも弥生時代後期の高地性集落における器種構成の概要を把握することができると考えられる(付表4・第21図)。

当遺跡以外の3遺跡の器種構成は壺が25～32%、甕が28～37%、高杯が20～30%、鉢が4～13%、器台が1～8%である。これを当遺跡と比較すると、壺・甕は、概ねほかの遺跡と同様の値を示すが、甕はやや少ない。高杯・鉢は古曾部・芝谷遺跡と会下山遺跡の中間値を示す。器台は高率であるが、これは小片なものやほかの器種・器形の可能性のあるものが含まれているためと考えられ、実際の個体数はもう少し少ないかもしれない。

以上から、当遺跡出土弥生土器の器種構成の特徴は、器台がやや高率であることを除けば、従来知られているものとはほぼ同じと言える。さらに、壺・甕・高杯がほぼ同率である点は、会下山遺跡の結果に類似する。

2. 器形別の構成とその特徴

次に、器種ごとの器形の内訳についてみるとともに、各器形の特徴についてまとめる。

①壺形土器(付表5) 数量的には広口壺が圧倒的に多く(48.1%)、ほかの器形はそれぞれが数

付表5 壺形土器個体数表

分類	広口壺							合計	その他
	A	B	C	D	E	F	G		
個体数	57	30	17	5	3	1	1	114	61
百分率	24.1%	12.7%	7.2%	2.1%	1.3%	0.4%	0.4%	48.1%	25.7%
	50.0%	26.3%	14.9%	4.4%	2.6%	0.9%	0.9%	100.0%	

分類	長頸壺	短頸壺	直口壺	細頸壺	無頸壺			合計
					A	B	C	
個体数	16	16	17	2	7	2	2	237
百分率	6.8%	6.8%	7.2%	0.8%	3.0%	0.8%	0.8%	100.0%

広口壺下段の百分率は、広口壺のみのデータである。

点ないし10数点といったところである。また、広口壺の内訳をみると、広口壺Aが50.0% (壺全体で24.1%、()内以下同じ)を占め、次いでBが26.3%(12.7%)、Cが14.9%(7.2%)と続き、D～Gは非常に少ない。このうち、広口壺Cは、いわゆる近江系の広口壺と考えられる。広口壺Eはあまり例を見ない器形で、640以外は広口壺Aの可能性もある。広口壺Fは1点しか確認していないが、他地域に類例がある。広口壺Gは肩部に三角形の突帯を有することから、古い様相をとどめている資料で、無頸壺Cなどとともに中期的様相を残したものとする。このほかにも、壺の器種構成上の特徴として、長頸壺の少なさがあげられる。全壺形土器のうち長頸壺の占める割合は、わずか6.8%である。他遺跡との比較を行えるようなデータは持ち合わせていないが、低い数値と考えられる。また、長頸壺は全形のうかがえる資料がわずか2～3点しかなく、ほかには口縁部や頸部の破片資料である。この中には口縁部外面に凹線状の痕跡を有するもの(116・680)もあって、古い様相を示すものと考えられる。さらに、体部の形態も注意される。長頸壺は、一般に、肩部が張って、体部が球形または扁球形に近い形状を呈するのに対して、当遺跡出土例では、肩部があまり張らず、体部最大径に対する体部高の比がやや大きい。また、1032は体部下半に明瞭なケズリ調整を加えており、992も磨滅するものの同様と考えられる。長頸壺で、体部下半にケズリ調整を施すものがどの程度存在するか不明であるが、管見による限り、他遺跡では例がほとんどない。

②甕形土器(付表6) 甕Aが圧倒的に多く(38.5%)、ほかは少量である。その他に分類したものも、口縁部が「く」の字状を呈するものが多く、甕Aあるいは甕Bに分類される可能性を残す。また、甕Bは全形のわかるものは1点のみ(235)で、もう1点は破片資料であることから、

付表6 甕形土器個体数表

分類	A	B	C	D	E	その他	合計
個体数	85	2	22	16	2	94	221
百分率	38.5%	0.9%	10.0%	7.2%	0.9%	42.5%	100.0%

付表7 底部個体数表

	個体数	百分率
a	116	29.1%
b	197	49.5%
c	64	16.1%
その他	21	5.3%
合計	398	100.0%

付表8 底部調整別個体数表

分類	底部 a				
	調整手法	1 類	2 類	3 類	4 類
個体数	77	5	1	6	89
百分率	86.5%	5.6%	1.1%	6.7%	100.0%
分類	底部 b				
	調整手法	1 類	2 類	3 類	4 類
個体数	139	6	2	17	164
百分率	84.8%	3.7%	1.2%	10.4%	100.0%
分類	底部 c				
	調整手法	1 類	2 類	3 類	4 類
個体数	29	0	9	10	48
百分率	60.4%	0.0%	18.8%	20.8%	100.0%

当遺跡においてはもともと少量しか存在しなかったと考えられる。このことは、当遺跡が外面調整にハケ調整を施す甕(甕A)を主体とし、タタキ調整を施す甕(甕B)が客体もしくは後出的であることを示していると考えられる。ただし、遺跡内における甕Bの存在個体数は、第19図に示したように体部破片資料が若干あり、実際の個体数はもう少し多かったと考えられる。甕Cは、甕Aの補完的な役割を果たすものであろうか。甕Cのような粗雑で小型の甕は、各地の遺跡で確認されているが、必ずしも甕Aの小型化したものとは言えない。そうした点で、甕Aの用途とは別の用途があったのかもしれない。甕Dは、いわゆる近江系甕と考えられる。広口壺Cとともに、全体の形状のうかがえるような資料は全く出土しなかった。また、胎土の点から、近江地域からの搬入品といえるものは未確認である。甕Eは1点のみ確認しており、同じく1点のみ確認した鉢Cとともに、北近畿方面の影響をうけたものであろう。

③底部(付表7) 表には底部のみ361点に、口縁部から底部まで残存する37点を加えている。底部bが最も多く(49.5%)、全体のほぼ半数を占める。次いで底部a(29.1%)、底部c(16.1%)の順となる。次に底部の分類ごとに外面調整の状況を示した(付表8)。この表からは、どの分類においても1類(ハケまたはナデ調整)が主体的調整であり、ついで2類(ミガキ調整)であることがわかる。しかし、c類では3類(ケズリ調整)もやや高率であることが確認できる。完形個体からみると、1類は、いずれの器種についてもあり得るが、2類は壺が多いと考えられる。一方、3類は、それほど多くないが、完形個体の例として、長頸壺(1032)があり、底部形態はbに近いがcと考えられる。このことから、底部cの3類については、特に長頸壺の可能性があるので

付表9 高杯形土器個体数表

分類	A	B	C	D	E	その他	合計
個体数	22	59	11	9	3	39	143
百分率	15.4%	41.3%	7.7%	6.3%	2.1%	27.3%	100.0%

付表10 高杯脚部個体数表

分類	a	b	a/b	c	d	e	合計
個体数	11	9	21	79	16	57	193
百分率	5.7%	4.7%	10.9%	40.9%	8.3%	29.5%	100.0%

付表11 高杯脚部接合方法個体数表

分類	脚部 a/b				分類	脚部 c			
	1類	2類	3類	合計		1類	2類	3類	合計
接合方法	1類	2類	3類	合計	接合方法	1類	2類	3類	合計
個体数	17	1	2	20	個体数	18	6	36	60
百分率	85.0%	5.0%	10.0%	100.0%	百分率	30.0%	10.0%	60.0%	100.0%
分類	脚部 e				分類	その他			
接合方法	1類	2類	3類	合計		接合方法	1類	2類	3類
個体数	5	1	21	27	個体数	10	5	16	31
百分率	18.5%	3.7%	77.8%	100.0%	百分率	32.3%	16.1%	51.6%	100.0%

ないかと考える。すでに述べたように、長頸壺そのものが量的に少ないのであるが、外面調整はやや特徴的であり、底部のみの資料にも同様の形態・調整を確認できるということは、そうした器形が少数ではあるが存在していたことを示していると考ええる。

④高杯形土器(付表9) 一般に、弥生時代後期の土器様相の中では、最も変化に富むと考えられている。各器形別の出土量をみると、高杯Bが多く(41.2%)、ついで高杯Aが続く(15.3%)。高杯C(7.6%)・高杯D(6.2%)も一定量存在し、高杯Eは非常に少ない(2.0%)。高杯A・高杯B・高杯Cは、前節でもふれたように、器形に若干の変化があり、時間差を反映していると考えられることから、第3項で改めて検討する。高杯Dは、当遺跡では互いに類似した器形を見いだすことは困難であるが、畿内各地にまで視野を広げてみると、類似した器形を確認することができる。また、高杯Eは全形のうかがえる資料が全くないため、その系譜などについては不明な点が多い。ただ、口縁端部に面を持つが、完全に内湾する943と何らかの関係があるとすれば、中期的な高杯の系譜を引く可能性はある。

⑤高杯脚部(付表10) 表は、脚部aから脚部eまでに分類可能なもの182点を対象とし、底部と同様、口縁部から脚部まで残存する11点を加えている。高杯の脚部は、大きく5つに分類できるが、数量的に最も多いのは脚部c(40.8%)であり、次いで脚部e(29.5%)と脚部a・脚部b(合計21.2%)である。脚部dはやや少ない(8.3%)。なお、脚部bかdの判断のつかないものについては、dに含めて数えている。全体からみた場合、柱状脚の比率が20%を超える点に注意したい。脚部から杯部の形態をみると、脚部aでは高杯B・高杯D各1点が確認できる。脚部cでは高杯Aが3点、高杯Bが2点確認できる。脚部b・脚部cは杯部のわかる例がない。脚部eはすべて高杯Cである。

次に、各器形における杯部との接合方法についてみる(付表11)。接合方法のわかる個体数は138点である。ただし、脚部dについては、接合方法がわかる例が1例(293、接合3類)しかないため省略した。これによれば、脚部aまたはb、つまり柱状脚では、85%が接合1類である。脚部cでは3類が多く(60%)、1類が次ぐ(30%)。脚部eも脚部cと同様の傾向を示す。なお、接合3類には、円盤充填を行って脚頂部を閉塞すると考えられるものがある。これらは、脚部内面にみられる円盤部を再度ナデ調整を施している。この閉塞は杯部接合以前になされていると考えられるため、ここでは3類に含めた。このため、接合1類と3類が区別しにくい場合がある。

付表12 器台形土器個体数表

分類	A	B	その他	合計
個体数	57	5	69	131
百分率	43.5%	3.8%	52.7%	100.0%

付表13 鉢形土器個体数表

分類	A	B	C	D	E	その他	合計
個体数	7	19	10	1	1	6	44
百分率	15.9%	43.2%	22.7%	2.3%	2.3%	13.6%	100.0%

⑥器台形土器 全形のうかがえる器台の個体数は少なく、器台と判断した小片が圧倒的に多い。器形別にみると、器台Aが多い(43.5%)が、器形不明の器台は半数を超える(52.7%)。これに対して、器台Bは少数しか確認できなかった(3.8%)。また、器台Aの中には、広口壺との区別が困難な小片があり、実際の個体はもう少し少ないと思われる。器台A・Bに分類されなかった器台にはさまざまなバリエーションがあり、この段階における器台の器形の豊富さを物語っている。また、器台の大きさも、大部分は口径15~20cm、器高14~18cmにおさまるようである(356・590・894など)が、これよりも小型と考えられるものも数多く確認した。

⑦鉢形土器 鉢A・鉢B・鉢Cはそれぞれ一定量ずつ存在する(順に15.8%・43.2%・22.7%)が、鉢D・鉢Eそれぞれ1点ずつ確認したのみである(ともに2.3%)。鉢Aはていねいな作りのものが多く、900などは精製品である。鉢Bはおもに中型品であり、ユビオサエなどもみられるが、比較的ていねいな作りである。相対的に数が多く、この時期の主体的な器形と考えられる。鉢Cは全形をうかがえるような資料がなく、鉢A・Bに比べやや粗雑な作りである。鉢Dは北近畿系と考えられるが、甕Eと同様、当遺跡での出土量はほとんどなく、当遺跡へどのようにして持ち込まれたかなどは不明である。鉢Eは体部に突帯を有し、無頸だが、口縁端部に面を持つもので、ほかに類例が乏しく、その出自や系譜は不明である。

3. 高杯の細分について

高杯A~Cは、前節でもふれたように、器形に若干の変化があり、この点で、時間差を反映していると考えられる。ここではこの点に留意しながら各器形の特徴をみていく。高杯Aは口縁部が短く口径が小さい一群(2・473など)と、口縁部がやや長く口径がやや大きい一群(65・101・177など)がある。前者の口縁部の長さは1.4~1.8cmを測り、後者の口縁部の長さは2.5~3.5cmを測る。全形のわかる資料で、脚部の形式を知ることができるものをみると、いずれも脚部cである。両者の時間的先後関係は不明である。

高杯Bは口縁部の外反度や長さによって細分でき、器形の特徴から、代表的な個体を示したの



第23図 高杯B分類案図

が第23図である。口縁部がやや短くほとんど外反しないもの(507・872など)、口縁部が短くわずかに外反するもの(506・749・1088など)、口縁部が外反するもの(44・99・1089など)、口縁部がやや長く外反するもの(405・572・1177・1178など)がある。以下、これらを順にa～d群と呼ぶ。高杯の時間的変遷が杯部の形状に反映されていると考え、これまでの研究成果を参照すると、a群→b群→c群→d群という変遷を考えることができる。ただし、土器の概要の項でもふれたように、高杯Aと高杯Bの間には、器形上、どちらに分類すべきか判断の困難な器形があり、これが絶対的な区分とは言えない。全形のわかる資料で脚部の形式を確認すると、506のみ脚部aで、ほかは脚部cである。

高杯Cは、口径が小さく杯部の深い一群(9・299など)と、口径が大きく杯部の浅い一群(1258など)とがある。両者の時間的先後関係は、前者が古く、後者が新しいと考えられる。脚部の形式は全形のわかる資料によればいずれも脚部eである。

以上、高杯の各器形の細分と時間的変化について述べたが、次に項を改めて、当遺跡における弥生土器の変遷について検討する。

4. 木津城山遺跡における弥生土器の変遷

当遺跡出土土器は、土器供献遺構S X 05出土土器(502～508)を除き、遺構埋土あるいは包含層から出土したものである。このため、良好な一括資料ならびに層位資料は存在しない。しかし、新しい時代の遺物をほとんど含まない出土状況から、集落の存続期間中に廃棄されたものが集積したと判断される。このことから、一定の時間幅を有するとしても、当遺跡出土土器そのものが、まとまった土器様相を示す可能性が高いと考える。本項では、以上の点をふまえて、先に検討した高杯の組成と器形の変化を指標として、主要な遺構出土遺物を取り上げ、当遺跡における土器様相の変遷について検討する。

(1) 高杯からみた主要遺構出土土器の概要

①方形台状墓出土土器 出土遺物の点数は少ないが、高杯A(2)・鉢A(3)が出土している。2は類例を見いだすにいが、杯部の形状は第2次調査包含層出土の473などに類似する。また、脚部cで、土器供献遺構S X 05出土の高杯B(507)や平坦面S X 238出土の高杯B(872)の脚部に形態的には類似する。3は竪穴式住居跡S B 09出土の鉢A(19)と同器形である。

②竪穴式住居跡S B 09出土土器 小片が多いが、脚部a(21)・脚部c(22)、鉢A(19)がある。22は土器供献遺構S X 05出土の高杯B(507)の脚部に類似する。また、19は方形台状墓出土の鉢A(3)と同器形である。

③竪穴式住居跡S B 32出土土器 小片が多いが、高杯は杯部・脚部ともやや多く出土している。高杯B(44)はc群に属するが、遺構の項でも述べたように、切り合い関係があり、これらすべてが、44と同時期のものとは考えられない。44はS B 32の下限を示すと考えられる。

④段状遺構S X 40出土土器 高杯Aを確認できる(64・65)が、高杯Bは見られない。積極的に様相の差異を示すようなものは少ないが、64に類似したものとして溝S D 15出土の179、655に類

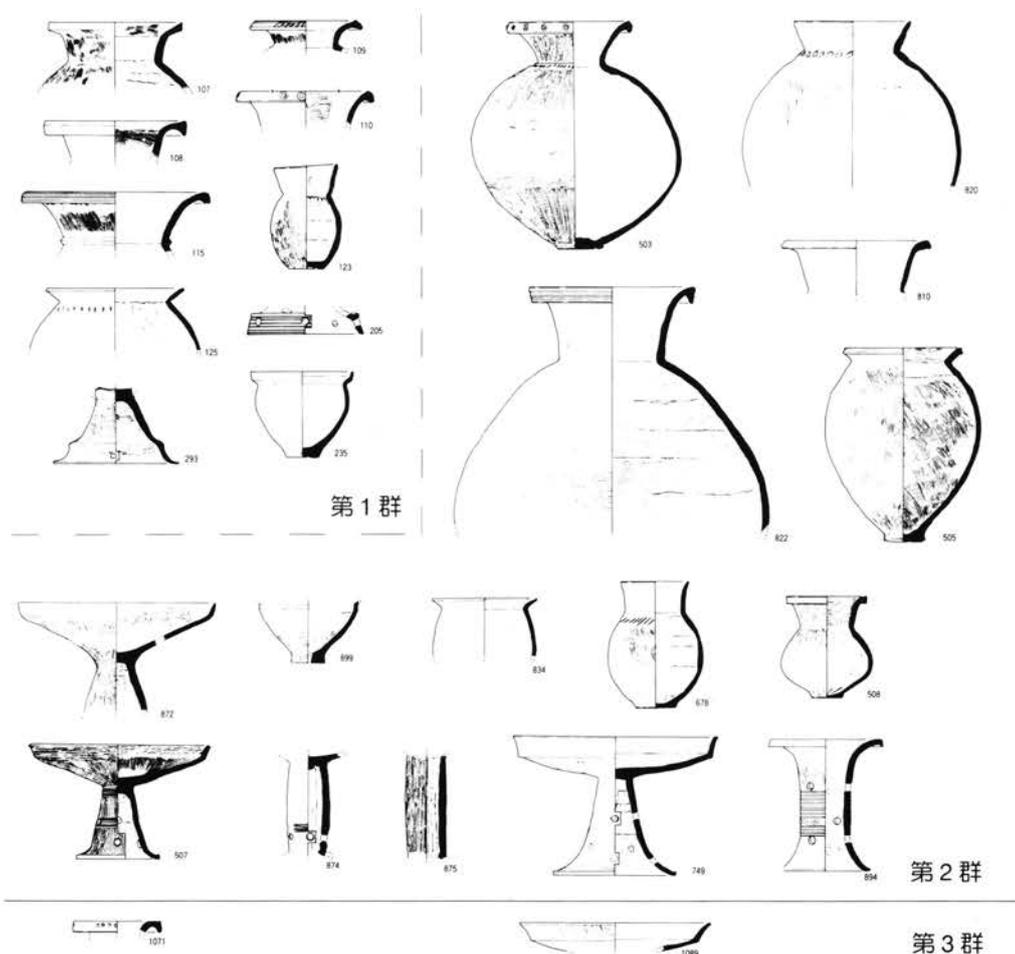
似したものとして同じく177などがある。

⑤溝S D 15出土土器 高杯は、高杯Bのb群が主体(172~175)で、高杯Aも一定量存在する(176~179)。高杯脚部では、脚部cが多いが、脚部a・b・dも存在し、特に脚部dが複数(206~208)確認できる点は注意される。また、広口壺G(109)・広口壺A(115)・長頸壺(116)・壺体部(124)・注口土器(234)など、やや古い様相を示す資料が含まれる。

⑥竪穴式住居跡S B 69出土土器 良好な高杯資料がないが、高杯Aを確認できる(288)。また、脚部に脚部bや脚部dがみられる(292・293)ことから、溝S D 15出土資料に近い内容を持つと考えられる。ただ、壺資料がほとんどない点は注意される。

⑦竪穴式住居跡S B 76出土土器 高杯は、高杯A(337)や高杯Bのb群(336)がそれぞれ確認できる。337は溝S D 15出土の高杯A(176・177)などに類似するが、端部の形状が若干異なる。脚部は、脚部a(342)・脚部c(339ほか)のほか、脚部bまたはdと思われるものがある(338)。

⑧土器供献遺構S X 05出土土器 当遺跡唯一の一括資料である。甕A(504・505)は、土器溜まりS X 04出土の甕A(546)に類似する。高杯B(506)はb群に分類できるが、脚部aで、ほかに例を確認できない。高杯B(507)はa群に分類でき、本出土資料から、高杯Bのa群とb群は時間的な同時性あるいは重なりを考えることができる。広口壺A(503)は頸部に突帯を有する。



第24図 木津城山遺跡出土土器変遷図

⑨土器溜まり S X 04出土土器 高杯は、高杯A (568～570)・脚部 a (584)・脚部 c (580・581など)があり、脚部 d は確認できない。高杯B は c 群ないし d 群があるが、混入と考えられる。壺には頸部に突帯を有するものがある(531・532)。また、広口壺 F (544)があり、他地域との併行関係を考える上で参考になる。

⑩A地区包含層出土土器 高杯は、高杯Bの b 群を主体とする(749・750・753～755)が、明確な高杯Aは確認できない。また、高杯Dが確認できる(789・797)。脚部は、脚部 c を主体とし(773・774・780など)、脚部 a または脚部 b を複数確認できる(763・765・781など)が、脚部 d は確認できない。壺では、頸部に突帯を有するものがある。

⑪平坦面 S X 238出土土器 高杯は、高杯Bの b 群を主体とし(865～868)、a 群(872)・c 群(870)も確認できる。高杯Aは確認できない。脚部は、脚部 a または脚部 b (874～877)・脚部 c (878・881・882)を主体とする。鉢Aにやや古相の精製土器が含まれる(900)。

⑫竪穴式住居跡 S B 235出土土器 高杯は、高杯Bの c 群が主体(1089～1891)で、高杯Cも杯部がやや浅くなったものを確認できる(1092)。高杯Aは確認できない。脚部は、脚部 c が主体と考えられる(1095・1096など)。ほかの器種は、大きく変化しているようには考えられない。

⑬段状遺構 S X 253出土土器 高杯は、高杯Bの c 群(1256・1257)や杯部の浅い高杯C (1258)が確認できる。脚部は、脚部 c ・脚部 e を主体とする。高杯Aや脚部 b の破片を確認できるが混入と考えられる。

(2)土器様相の細別とその概要

上記の主要遺構出土遺物について、高杯や高杯脚部の組成や器形の変化などから、大きく3群に分けることができる(第24図)。

第1群 高杯A・高杯B (b 群)を主体とし、脚部 d が一定量含まれる一群。壺にも古相のものを確認することができる。ほかの器種については、明確に新古の様相を確認することはできない。第1群資料としては、溝 S D 15、竪穴式住居跡 S B 69・76出土資料がある。

第2群 高杯B (b 群)を主体とするが、高杯Aや脚部 d をほとんど含まない一群。ただ、柱状脚(脚部 a ・脚部 b)は確実に存在する。また、ほかの器種については第1群同様、確認できない。第2群資料としては、土器供献遺構 S X 05・平坦面 S X 238、A地区包含層、竪穴式住居跡 S B 09などがある。

第3群 高杯B (c 群)が主体となる一群。高杯Cの杯部は浅いものが存在するほかは、高杯Aや脚部 a ・脚部 b ・脚部 d はほとんどみられない。しかし、ほかの器種については、第1群・第2群同様、明確ではない。第3群資料はあまり多くなく、竪穴式住居跡 S B 235、段状遺構 S X 253などに限られる。

高杯と脚部の組成や変化を指標に当遺跡出土土器を遺構ごとに分けた結果、大きく3群に分けられる。ただ、結論的にいえば、高杯Bの細分に比べ、各器種の形態の変化、あるいは器種構成の変化はそれほど顕著ではない。また、一括資料や層位資料の欠如も遺跡内における土器様相の変化をわかりにくくしている要因である。ここでは、高杯Bの型式変化や器種構成の変化を重視

すると、高杯B(b群)を主体とする第1群・第2群から高杯B(c群)を主体とする第3群へ、という変遷が確認できる。しかし、第1群と第2群については、先後関係に位置づけることができる可能性があるものの、両資料とも高杯B(b群)を含むという点において、現地では、積極的に先後関係は確認できない。ここで述べた土器様相の差違については、今後の検討課題としたい。

以上のことから、当遺跡における土器様相の時間的変遷は、第1群・第2群→第3群と捉え、前者を木津城山遺跡古相、後者を木津城山遺跡新相とする。したがって、当遺跡出土土器の大半は古相に位置づけられ、ごく一部が新相に位置づけられる。

5. 南山城地域における弥生時代後期の土器編年

最後に、当遺跡出土の弥生土器を含む、近年の新出資料を整理し、南山城地域における後期弥生土器の変遷について概観する。

さて、この地域における体系的な弥生土器編年は、先述のように森岡秀人氏によって明らかにされているが、南山城地域は資料数が十分ではなかった。しかし、第1章第2節で述べたように^(注26)1980年代後半以降、後期の遺跡の調査例が急増し、それに伴って新たな土器資料が蓄積された。

以下の作業では、森岡氏をはじめとする、これまでの先行研究によりながら、おもに器種・器形の構成、器形の型式変化といった点から各資料の時間的配列を行う。

まず、当遺跡出土資料は、上記に検討したように、3群に分かれるが、時間的変遷としては古相・新相に分けられる。このうち、木津城山遺跡古相は、皿状の高杯(高杯B)や柱状脚(脚部a・脚部b)の存在から森岡氏の編年(以下、森岡編年)のV-1様式に位置づけられる。一方、木津城山遺跡新相は、皿状高杯(高杯B)の外反度が強まってくる点などから、森岡編年のV-2様式に位置づけられる。

次に当遺跡出土資料の前後に位置づけられる資料をみていく。

まず、当遺跡古相土器群は森岡編年のV-1様式に位置づけられるものの、他地域との比較から、古相土器群に先行する土器群の存在が予想される。これは、後期でもっとも古い土器群に位置づけられるもので、当遺跡古相資料の中に、個体レベルではこの時期のものがあるかもしれないが、古相とした資料を積極的にこの段階に位置づけることには躊躇せざるを得ない。当遺跡出土資料以外では、この時期、あるいはもう少し古く位置づけられるものとして、やはり単独出土であるが、当遺跡に近接する木津町赤ヶ平遺跡S D19出土高杯16^(注27)がある。したがって、ここではその存在が予想されるとして、後期第1段階とする。森岡編年では、V-1様式のうち、相対的に古く位置づけられる資料と考えられる。

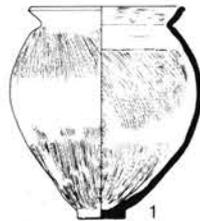
この最古段階の次の資料として、当遺跡古相資料が位置づけられる。これを後期第2段階とする。この段階の高杯Bの指標となるのはb群である。なお、この段階の資料は、当遺跡以外ではほとんど知られていない。森岡編年のV-1様式の大半に相当すると考えられる。

次に当遺跡新相資料と同じ様相を示すものとして、木津町燈籠寺遺跡(第6次調査竪穴式住居跡S H06)^(注28)、山城町堂ノ上遺跡・椿井天上山古墳下層遺跡出土資料などがある。これらの遺跡で^(注29)^(注30)

第1段階

該当資料なし

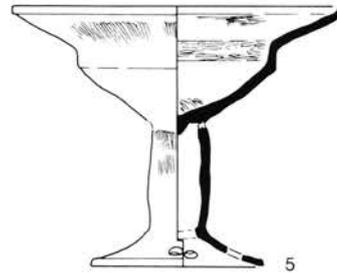
第2段階



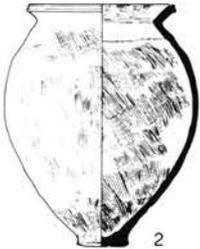
1



3



5



2



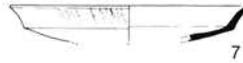
4

1~5 木津城山遺跡古相

第3段階



6



7

6・7 木津城山遺跡新相
8・10 燈籠寺遺跡
9・11・12 幣原遺跡

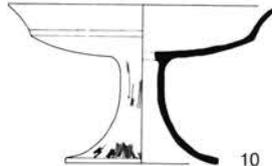
第4段階



8



9



10

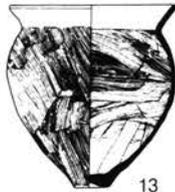


11

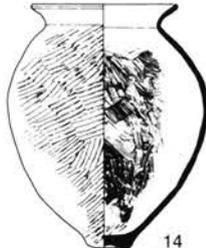


12

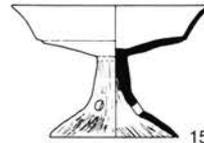
第5段階



13



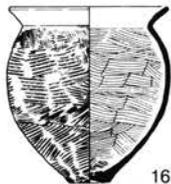
14



15

13~15 備前遺跡 S D01

第6段階



16



17

16~17 内里八丁遺跡 SD96224下層

第25図 南山城地域弥生土器編年試案

は、当遺跡の高杯Bのc群に類似する資料が出土している。甕は甕Aを主体とするようである。ただ、ほかの器種については、不明な点が多い。以上を後期第3段階とし、高杯・甕の特徴やその組成から森岡編年のV-2様式に相当すると考えられる。

次の段階の資料として木津町燈籠寺遺跡(第6次調査竪穴式住居跡S H03など)、八幡市幣原遺跡^(注32)出土資料がある。器形の上では後期第3段階とあまり変化しないものが多いが、高杯の杯部がd群であることから新しく位置づけた。甕は甕Bの比率が増加するようである。また、この段階になると、手焙り形土器が確認される。この資料を後期第4段階とする。森岡編年でも、幣原遺跡出土資料はV-3様式の標式資料の1つとされているので、概ね相当すると考えられる。

これに続く資料として、八幡市備前遺跡環壕S D01出土資料がある。ここでは当遺跡の高杯d群よりも口縁部が大きく外反した高杯を確認することができる。甕も甕A・甕Bの比率が逆転し、甕Bが過半を占めるようになる。この資料を後期第5段階とする。森岡編年のV-4様式に相当すると考えられる。

その次の資料として、八幡市内里八丁遺跡^(注34)NR96224下層、同上層、NR96222の層位資料群がある。このうち、備前遺跡環壕S D01出土資料に続くと考えられるのはNR96224下層出土資料である。この下層出土資料には河内産庄内甕が少量混じるが、主体となるのは後期の土器様相である。続くNR96224上層では、庄内甕が量的に増加するとともに、後期の甕の球胴化が進むとされる。さらにNR96222に至ると、布留式甕を含むようになる。ここでは、後期的土器様相が主体であるNR96224下層資料までを弥生時代後期の土器と考えたい。NR96224下層出土土器の様相は、在地の土器様相を維持しているが、すでに河内地域などでは庄内式土器を使用しはじめていとされる森岡氏のV-5様式の設定要件に一致すると考えられる。この段階を後期6段階とし、森岡編年のV-5様式に相当すると考えたい。また、NR96224上層出土資料を庄内式として独立させるべきか、弥生時代後期の内に収めるべきかは、山城地域における庄内式の存在形態に対する評価するによって異なってくると考えられる。ここでは詳細にふれる余裕はないが、庄内式が主体的に存在するのか、それとも客体的にしか存在しないのかは重要な視点であると考ええる。庄内式については機会を改めて検討することにした。

以上を主要な器種で表示すれば第25図ようになるが、個々の土器の検討については必ずしも十分ではないことを断っておきたい。

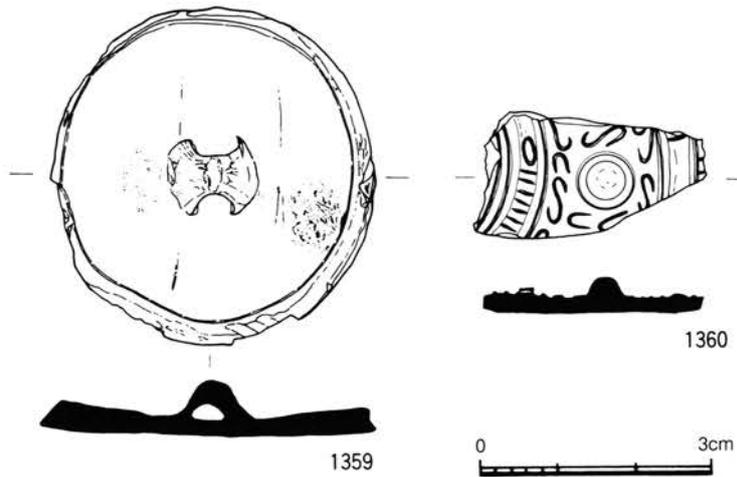
(筒井崇史)

第3節 その他の遺物

1. 鏡(第26図)

1359は竪穴式住居跡S B32から出土した。鏡背に文様を表現しない、いわゆる素文鏡である。直径4.4cmを測る。厚さは鈕付近が最も薄く(2.0mm)、縁部に向かって反りをもって徐々に厚みを増す(約3.5mm)。鈕は、基部の示す平面形はほぼ正円を呈するが、鈕孔側からみた側面観は、やや厚みのある板状品を逆「V」字形に折り曲げたような形態で、半球形をなさない。縁部の外斜

面は、調整が雑なため、直線状を呈するものの、部位によっては湯口がわかるほど乱れている。鏡面はていねいに研磨され光沢をもつが、鏡背は鋳離した状態のままで、鋳肌を研磨整形することなく、その表面は細かい凹凸が残る。鏡背の一部に赤色顔料が付着する。



第26図 鏡実測図

1360は方形台状墓2の埋葬施設S X 09から出土した。獣帯鏡

の破鏡である。遺存状態は概ね良好で鏡面は光沢を残す。鋳上がりも良好な状態で、鏡背の図文も錆化しておらず鮮明である。出土破鏡は鈕座部分の小片資料で、長軸3.0cm、短軸1.7cm、厚さ2.0mmを測る。破面は加工していない。鏡背文様は、鈕本体を欠くが、鈕座内帯と外帯が残る。鈕座内帯は、内方に内側2本、外側1本の小さな圏線をもつ有節重弧文を配し、その外縁に小乳をもつ乳文を配する。鈕座の文様構成は、乳間に芝草文や銘文の入る通常のものとは異なり、「U」「S」字状の渦文を地文として充填する。乳は先端に丸みをもつ半球形に近い断面を示し、円座を伴う。地文の渦文は細長く表現される。鈕座外帯は、内外両側に1本ずつの圏線を伴う突帯で、一部に帯を横断する線が認められることから、有節重弧文の可能性はある。四神瑞獣などを表した主文部を欠くので、細線式か浮彫式(半肉彫式)かにわかに判断しがたいが、有節重弧文の多用や扁平な渦文の形態は、同形式鏡群の新しい要素であり、A. D. 1世紀後半に出現する浮彫式獣帯鏡にもみられる意匠である。

2. 土製品(第27図)

1361は土器溜まりS X 37から出土した鐸形土製品である。遺存するのは鐸身の上半部で、鈕および鐸身下半部を欠く。鐸身の横断面は真円に近く、鐸身本体から短い鱗がユビオサエにより捻り出される。舞は板状の鈕基部から外下方に向かって匙面を設けてゆるく下降ぎみに傾斜する。舞孔は円形で舞中央に1孔穿たれている。鐸身は無文で型持孔も遺存部分には穿孔されていない。残存高5.1cmを測る。

1362は、竪穴式住居跡S B 124から出土した土玉である。一部を欠損するが、直径2.5cm、厚さ1.8cm、孔径0.5cmを測る。

(伊賀高弘・筒井崇史)

3. 石器(第28図)

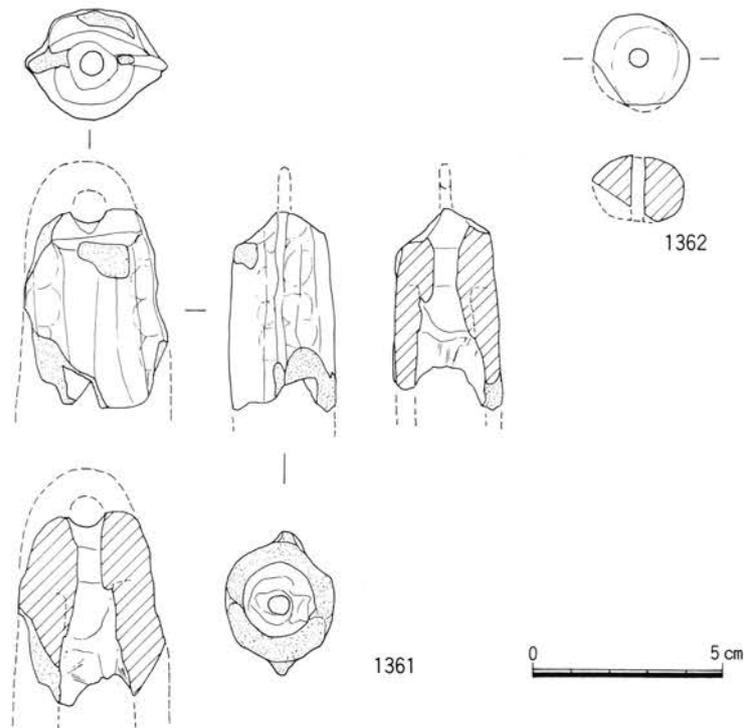
1363は横長剥片である。自然面を打面とする。剥片剥離時の衝撃によって左面左縁を折損した

と考えられる。先行剥離面は3面みられる。1面は打点と同一方向。ほかの2面は剥離面の状況から比較的大きい面であったことが推測できる。サヌカイト製である。

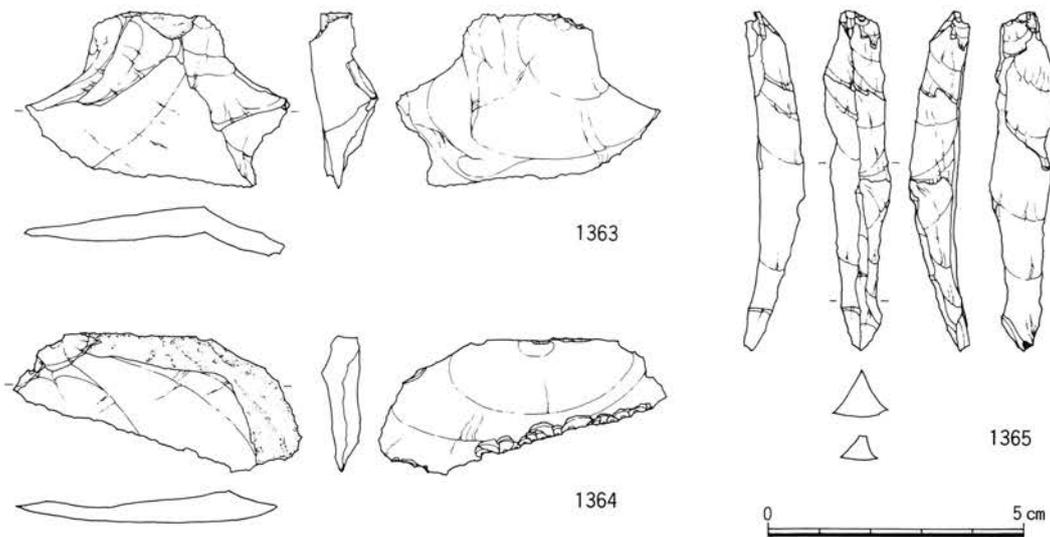
1364は二次加工のある剥片である。バルブの発達しない扁平な横長剥片を素材とする。素材の端部に背面側からの連続した二次加工を施す。サヌカイト製である。

1365は縦長剥片である。背面は同一方向からの打撃による剥離がみられ、断面は三角形状であることから、先行剥離痕によって生じた稜に沿って剥離したものと思われる。点状打面を呈しており、打点付近には同時剥離と思われる微細剥離がみられる。サヌカイト製である。

(山内基樹)



第27図 土製品実測図



第28図 石器実測図

第4章 古墳時代以降の遺構・遺物

第1節 片山古墳群

1. 検出遺構

(1) 片山1号墳

片山1号墳は、木津城跡の南約80mの、丘陵頂部に位置する円墳(古墳状隆起)で、過去に鉄鎌が出土したと伝える。調査は、長辺13m、短辺9mの矩形のトレンチを設けて実施した(片山1号墳トレンチ)。表土を剥ぐと、すぐに地山となる。調査の結果、土坑・溝などを検出したものの、古墳の存在を示す遺構・遺物は全く検出されなかった。したがって、片山1号墳は古墳でないことが明らかとなった。ただ、周辺に堆積した土量が丘陵頂部付近としてはやや多いことから、この頂部が、ある時期に削平された可能性もある。そのような人為的な造作が、木津城の普請に関連する可能性は、この地点が木津城の大手と推測されていることから十分考えられる。

(2) 片山3号墳(図版第36)

9トレンチで検出した。主尾根から東南東方向にのびる小規模な尾根状地形の南東斜面に位置する。墓域を区画する周溝SD17が、主体部SX16の背後の丘陵高位側のみ掘削される。周溝の平面形は、円弧を呈するようだが、周溝の軸線は直線的で約5mの辺長をもって2か所で鈍角に折れており、多角形状を呈する。墳丘は概ね円形を呈し、その規模は、周溝中軸線で計測するとおよそ直径12.0mを測る。周溝の断面形は、狭い平坦な溝底から両斜面が逆台形状に立ち上がるか、溝底の不明瞭な「U」字形を呈する。内部主体SX16は、開口部側を失うが、小規模な横穴系の埋葬施設とみられる。埋葬施設は、幅2.0mの箱形断面を呈する墓壙の内部に木棺をおさめる室(槨)を構築するものだが、すでに槨室を形成する材は全く遺存していなかった。しかし、裏込め土の内壁が垂直に立ち上がることや、墓壙の長側辺に沿って石材の抜き取り穴と思われる浅い土坑が接続するようにみられたことから、横穴式石室構造を採用していたと考えられる。ただし、抜き取り穴と思われる土坑には、炭や青白色粘土が堆積していたことから、木心粘土室(窯槨墳)とまでは言えないが、木材で槨室を構成する一種の木室墓の可能性が指摘できる。さらに、槨室内床面上には多量の炭が堆積していたことから、仮に木室墓とすれば火葬された可能性もある。槨室床面には礫敷はみられない。また、槨室中軸線に沿って幅0.25m、深さ0.12~0.15mの直線的な排水溝が掘られ、内部に小礫を充填する。出土遺物は、混入品である弥生土器片以外全くない。

(3) 片山4号墳(図版第37)

8トレンチで検出した。3号墳の北北東約32m、主尾根稜線からやや東に下った丘陵斜面に位置する。墓域を画する周溝SD18が丘陵高位側にのみ掘削されるが、その北東半部は谷状地形S

X20に削平されて遺存しない。周溝の平面形は、その主軸線が直線的で、主体部の北西側で直角に折れる形態を示し、それに区画された墳丘も方形とみられる(一辺10.0m)。周溝の断面形は逆台形を基本とする(幅約3.0m)。内部主体S X19は、南南東に開口する小規模な横穴式石室である。墓壙は幅2.8m、最大の深さ1.6mを測る長方形を呈する。石材は、墓壙壁のすぐ内側に掘られた幅0.7mほどの溝状のくぼみに据え付けられるが、ほとんど抜き取られ、わずかに西側壁の基底石が2石、原位置を留めるにすぎない。石室は石材の抜き取り穴の配列より、東側壁が屈折する片袖式と考えられる。ただし、玄門部での内方への張り出しはわずかである。石室は玄室幅1.3m、玄室長2.6m、羨道幅0.8m、羨道残存長2.0mを測る。唯一残存する側石は、一辺60cm、厚さ25cmを測る板石状の斑状花崗岩の自然石を用い、横口縦積みで構築する。

(4)片山5号墳(図版第38・39)

13トレンチで検出した。第1次調査で弥生時代の溝(環壕)と考えていたS D01が、第2次調査の結果、古墳の背後を区画する周溝であることが判明した。また、S D01で囲まれた内側には調査前から窪地が認められたが、調査の結果、主体部の痕跡であることが判明した。S D01は主体部の背後にめぐらされているが、主体部の東西両側に至ると不明瞭となり、その南側を崖状遺構S X53によって切られている。周溝の平面形は円弧を呈するようだが、北東側がやや角度をもって屈折していることから、各辺がやや丸味をもった方形と考えられる(一辺約15m)。断面形は、東端付近で、下縁幅の極端に狭い「V」字形を呈し、幅3.0m、最大の深さ1.0mを測る。内部主体は横穴式石室であるが、後世に2度にわたる大規模な破壊を受けて、石室を構築する石材はほとんど残っていない。玄室床面には、川原石の小礫と花崗岩の板石が敷かれていたと考えられるが、調査時に遺存していたのは玄門付近だけである。玄室内の大半はこの敷石面より深く攪乱されており、床面は本来の形状を失う。わずかに東側壁の1石のみが遺存する。これは長軸95cm、短軸55cm、厚さ25cmの斑状花崗岩を横口縦積みして基底石としたものである。石室の入り口付近は玄室内敷石面とはほぼ同一レベルであるが、敷石はなく羨道部として玄室とは床構造が区別されていた可能性がある。石室の形式は、石材抜き取り穴などから無袖式の可能性が高い。石室の規模は石室残存長5.0m、玄室長3.7m、玄室幅1.35mを測る。玄門付近の床面直上から須恵器杯2点が正立した状態で出土した(1369・1370)。このほか、攪乱土などからも須恵器などが出土した(1366~1368・1371~1373)。また、S D01から弥生土器と須恵器が出土した。弥生土器には甕A・底部・高杯・脚部などがある(419~425)。須恵器は埋土上層から出土した壺がある(1374)。

(伊賀高弘)

2. 出土遺物(図版第74)

ここでは古墳出土遺物と、概ね同時期の遺物について報告する。

片山4号墳からは土師器杯(1381)、瓦器椀小片(1384)、鉄釘破片(1385)などが出土したが、明らかに古墳に関連する遺物はなかった。1381はやや浅めの杯である。口径10.8cmを測る。鉄釘は頭部を欠き、その形状はわからないが、断面は方形を呈し、古墳におさめられた木棺に使用され

た可能性がある。

片山5号墳の玄室内や周溝、攪乱土などから須恵器が出土した(1366~1379)。1366は蓋と考えられるが、ほかの遺物よりも古い時期のものである可能性がある。口径11.0cmを測る。1367は平底を呈することから杯と判断した。口径11.1cm、器高3.5cmを測る。1368は内面にかえりを有する蓋である。口径14.2cmを測る。1369~1373のいずれかとセットになると考えられる。1369~1373はほぼ同形の杯である。平底状の底部に、斜め上方に直線的に開く口縁部を有する。底部はいずれもヘラキリ後不調整である。口径13.2~14.8cm、器高3.6~3.8cmを測る。1374は直口壺である。口径12.0cm、復原高21.5cmを測る。以上の須恵器は1366を除いてほぼ同時期のものと考えられ、蓋がかえりを有することや、やや口径の大きい平底の杯などから、7世紀後葉から末葉に位置づけられる。

1375~1381は、片山5号墳などと同時期の遺物である。1380は土師器、それ以外は須恵器である。1375は甕または壺の口縁部で、E地区段状遺構S X 252埋土から出土した。口径15.6cmを測る。1376は甕の体部下半で13トレンチ出土である。1377は内面にかえりを有する蓋の破片で34トレンチ溝S D 237(S D 16)から出土した。口径10.0cmを測る。1378は1367に類似した杯の底部で、竪穴式住居跡S B 236埋土上層出土である。1379は甕の頸部から肩部にかけての破片で、C地区の出土である。1380はほぼ完形の杯で、8トレンチ竪穴式住居跡S B 09埋土出土である。口径10.8cm、器高3.9cmを測る。

(筒井崇史)

1387は13トレンチの遺物包含層から出土した。須恵質四注式陶棺の棺蓋隅部である。内面には短く形骸化した棺身受け部がみられる。棺蓋の稜や両側縁部は一定方向のケズリ調整を施して整形する。外面はケズリ調整をし、内面はナデ調整を主とする。また、粘土板接合面にハケ調整を施す。この陶棺が片山3~5号墳のいずれの古墳に伴うものかは不明である。残存長39.0cm、残存幅19.0cm、残存高13.0cmを測る。

(伊賀高弘)

第2節 その他

1. 検出遺構

第1次調査は、木津城跡に関連する遺構・遺物の広がりを確認することを目的として実施したものである。しかし、調査の結果、新たに弥生時代の高地性集落を確認するとともに、木津城跡に関連する遺構はほとんど検出されなかった。以後、第5次調査に至るまで、明らかに木津城跡と関連する遺構は検出していない。ただ、いくつかの遺構については、弥生時代の高地性集落や片山古墳群よりも新しく位置づけられると考えられる。以下、これらの遺構について報告する。

溝S D 01・02(4トレンチ、図版第5) 4トレンチの南端屈折部において検出した。両溝とも幅約2mの規模を有し、溝の心々間で測って約2.5mの間隔で平行に掘られている。溝の断面は「V」字形で斜丘陵低位側ほど深くなる。出土遺物はないが、尾根の稜線上から西側の谷へ斜め

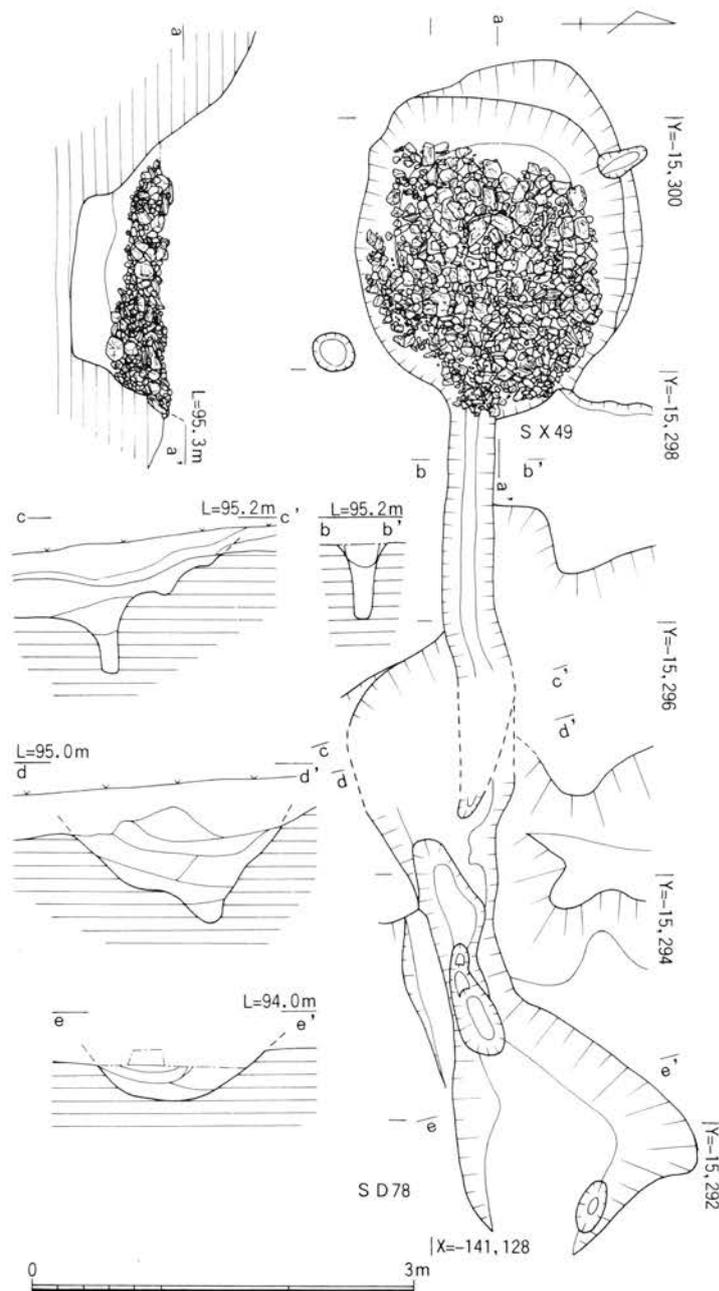
方向に下る通路(城道)の側溝の可能性はある。

谷状地形 S X 20(図版第1) 8トレンチの北端で検出した。主尾根の東側斜面を大きく開析し、東西方向に主軸をもつ。第1次調査で南側斜面を、第2次調査で北側斜面を検出した。検出長19m、幅15m前後を測り、横断面は底幅の狭い逆台形を示す。遺構内の堆積土は少なく、調査前から谷状に深く落ち込んでおり、ほかの城郭関連施設(堅堀・曲輪・土塁など)と同様に現地形にその形状をとどめていた。出土遺物は皆無である。斜面上縁は直線的で、その掘り込みの上縁の断面形も鋭く屈曲することから、人為的な掘削の可能性が高い。片山4号墳を切っており、ほかに例を見ないが、木津城跡に伴う大規模な堅堀状の開削の可能性はある。

崖状遺構 S X 53(図版第2・3) 9トレンチ・13トレンチで検出した。第1次調査で東側を、

第2次調査で西側を検出した。総検出長は74mを測る。主尾根から西へ延びる支尾根の稜線よりやや南側と、主尾根を東西方向に急角度で切り込んでいる(比高差約1~2m、傾斜角30~50°)。弥生時代の各遺構や片山5号墳を切っていることから、新しく位置づけられるが、弥生土器(426~436)以外の遺物は出土していない。このため遺構の時期は不明であるが、谷状地形 S X 20と同様、木津城跡に伴う何らかの防御を目的とした遺構の可能性もある。

焼土 S X 91(図版第26) 11トレンチ西側斜面で検出した。層位的には現在の地表の直下にある。S X 91の上面は、幅0.8m程度で等高線に平行する曲輪状遺構が北側の木津城跡の堀切の裾に向かってのびる。22トレンチ S K 18上の高さ約3.0mの人工的な盛土はこの曲輪状遺構の構築にかかわるものと考えられる。したがって S X 91は、木津城跡に関連する遺構の可能性はある。



第29図 礫充填土坑 S X 49、溝 S D 78実測図

礫充填土坑 S X 49(第29図) 9トレンチで検出した。片山3号墳の東約16mに位置する。平面形は、やや東西に長い楕円形を呈する。規模は長軸長2.8m、短軸長2.3mを測る。底部の平坦な逆台形状に掘り込んでいる。上層には厚さ0.3~0.5mにわたって自然礫(径3~30cm)が密に充填されていた。また、東方に向かって1条の直線的な溝(上縁幅0.4m、検出面からの深さ0.6m)がのびる。出土遺物がないので時期を特定できないが、天水を浄化する施設あるいは氷室かもしれない。

溝 S D 78(第29図) 12トレンチで検出した。第1次調査で検出した礫充填土坑 S X 49から東にのびる溝の延長部に当たる。S X 49に付随する溝にくらべて、溝幅が広がり、横断面形も浅い「U」字形となる。遺物は出土しなかった。

陣地遺構 S X 02・06(図版第5) 2トレンチで検出した。トレンチの中央と西端で、周囲に土塁をとまう同形同大の円形土坑を検出した。両者とも調査前から窪地として現地表に認められた。陣地遺構は、直径4.0m前後で、横断面形が逆台形を呈する深さ約1.0mの土坑を地山面に掘削し、その排土を周囲(とくに標高の低い西側)に土塁状に積み上げて周囲を画する。土坑底と同じ高さに掘削した溝を設け、陣地内の水抜きとする。平坦な土坑底には十文字状に溝を設けている。この遺構は、その構造や地元の方々の聞き取り調査から、第2次世界大戦中に構築された、高射砲もしくは機銃を据え付けた跡(砲台陣地)、あるいはサーチライトを設置した跡(監視所)と考えられる。

(伊賀高弘)

2. 出土遺物 (図版第74、第30・31図)

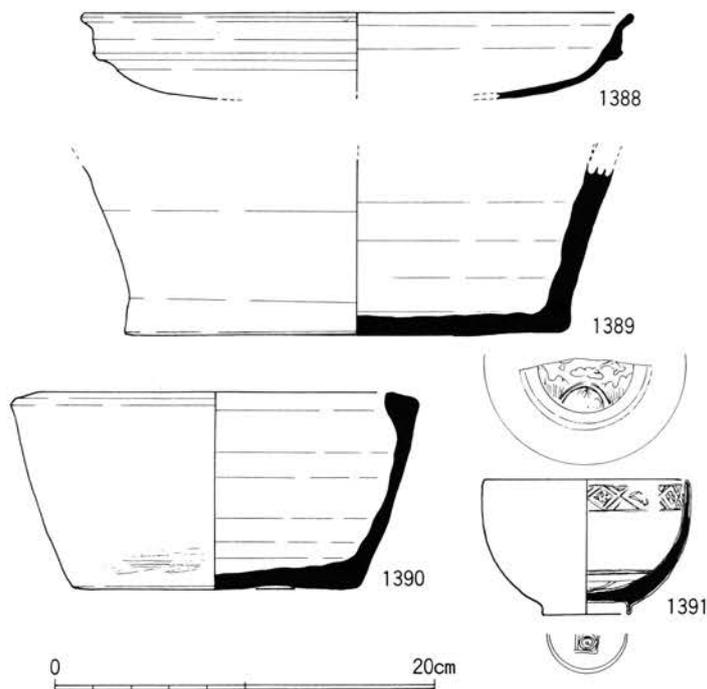
ここでは、中世以降に位置づけられる遺物について報告する。

1382・1383は土師皿である。ともに23トレンチ出土である。1382は口径8.0cm、器高1.2cm、1383は口径10.0cm、器高1.1cmを測る。

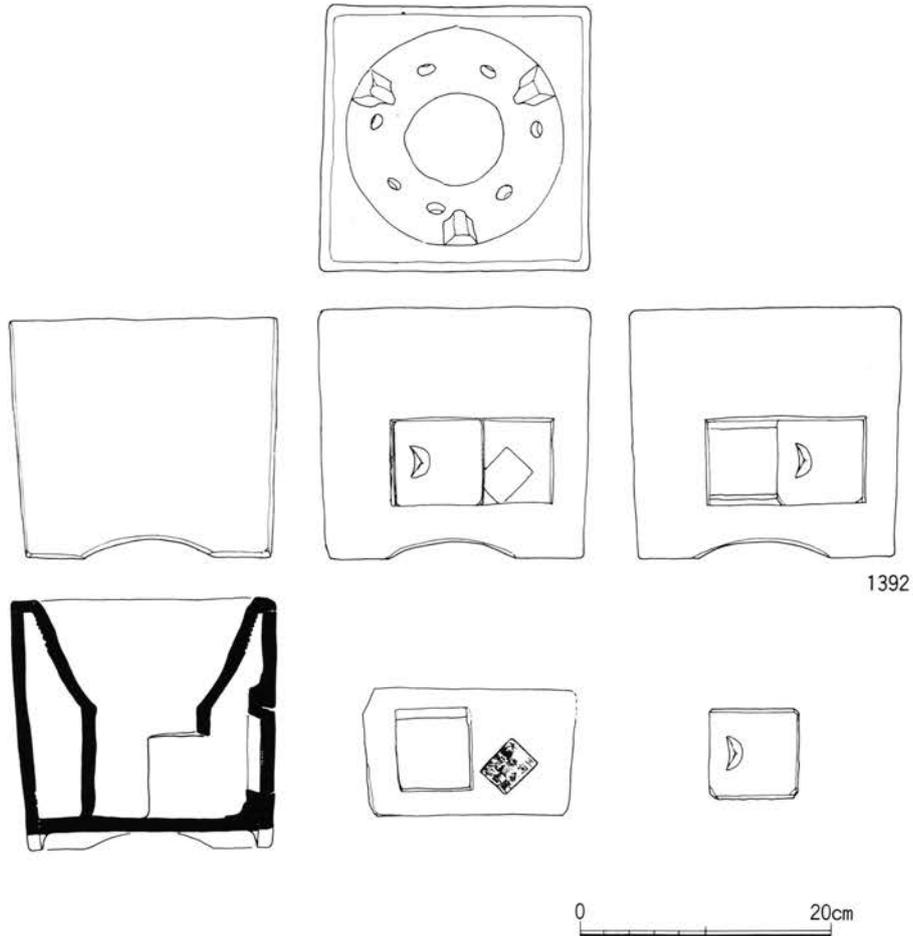
1384は瓦器碗の小片である。片山4号墳の主体部から出土しており、片山4号墳の主体部が破壊された時期を考える上で参考になるのではないかと考える。

1386は寛永通寶である。1トレンチ出土である。直径2.4cmを測る。

1388は焙烙である。23トレンチ出土である。口径18.5cm、残存高



第30図 出土遺物実測図(中世以降)



第31図 出土遺物実測図(近世以降)

4.6cmを測る。

1389は瓦質土器の鉢である。9トレンチ出土である。底径24.6cm、残存高9.0cmを測る。

1390は瓦質土器の火鉢である。口径18.3cm、器高10.4cmを測る。

1391は陶器で8トレンチ出土である。口径10.7cm、器高3.6cmを測る。

(筒井崇史)

1392はカンテキである。20トレンチ出土である。一辺20.5cm前後のほぼ立方体をなす。19世紀以降の製品と考えられ、呼気の窓の部分には、「三河名産 製造組合 大楠増太郎」の刻印が認められる。なお、第31図は、近年まで実際に使用されていた類似品によって一部復原的に実測したものであり、残存率は1/4程度である。

(戸原和人)

第5章 総括

木津城山遺跡は、当初、その存在が知られていなかった遺跡であるが、調査の進展に伴って、弥生時代後期前半の高地性集落であることが明らかになった。また、調査の過程で新たに片山3～5号墳が確認された。

ここでは、弥生時代の高地性集落の調査成果についてまとめ、本報告書の結びとしたい。

集落について 5次におよぶ調査の結果、竪穴式住居跡39基、段状遺構19基を検出した。調査を行った範囲が、後述する集落域の想定範囲の1/2程度であるから、本来はこの倍程度の住居が営まれていたと考えられる。また、段状遺構は必ずしも居住用とは限らないので、実際に住居として使用されたのは前者が大半を占めると考えられる。各住居跡などの遺構は、第3章第2節4項で明らかにしたように、少なくとも2段階の時期区分が可能である。ただ、出土土器そのものは3群に分けた。各遺構を出土土器群別に表示したのが第32図である。第3群の遺構はわずかしがなく、大部分は第1群または第2群である。また、出土土器の群別ができないもの、あるいは確認できないものも少なからずある。

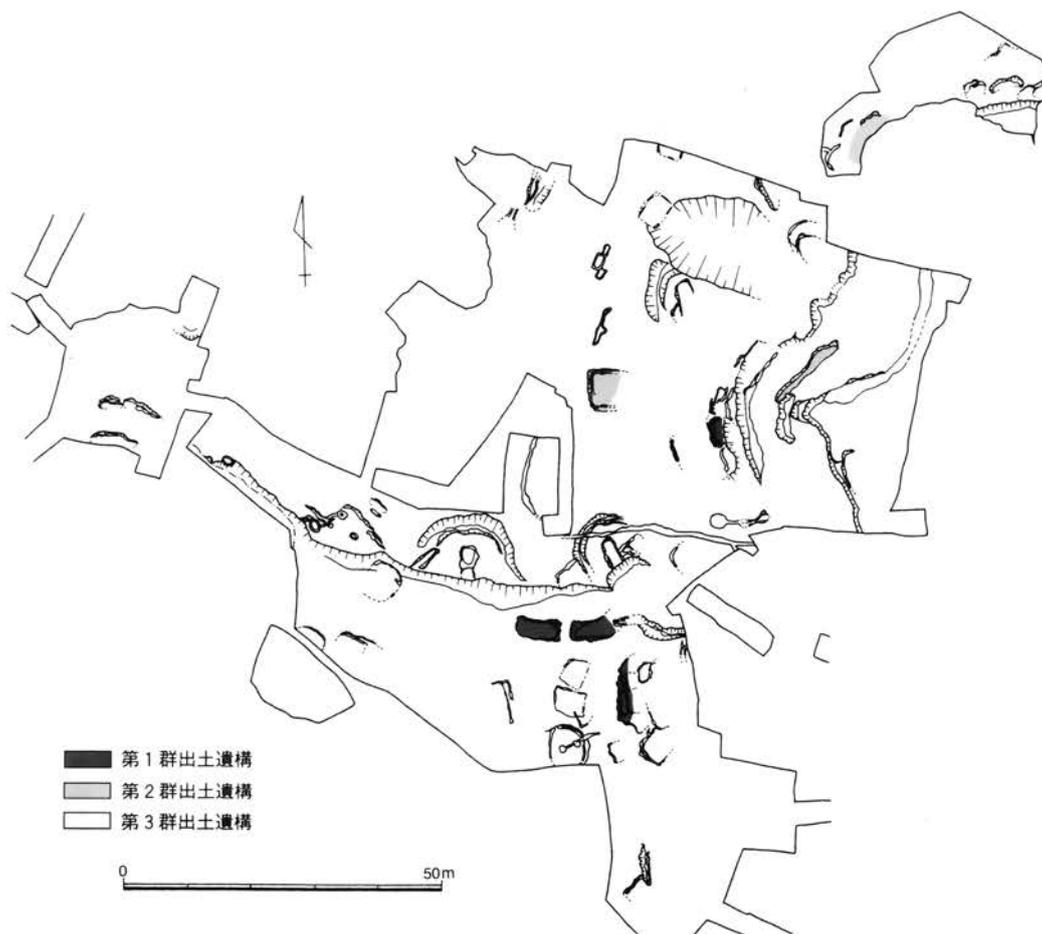
竪穴式住居跡は、出土土器の様相の違いのほか、重複し合うものもあるので、調査した範囲での、同時期に存在した住居跡の数は10基を越えることはないと考えられる。また、第32図にあるように南地区では、竪穴式住居跡と段状遺構の大半が丘陵の南側斜面および東側斜面に分布する。これは、丘陵の西側斜面がもともと急峻な斜面であったこととともに、住居の日当たりなど実際の生活環境が考慮されたためと考えられる。なお、当遺跡内では、掘立柱建物跡は未確認であるが、遺跡の中心部は、木津城跡として緑地保存されるため未調査であるが、この付近に存在した可能性がある。

集落を区画する遺構について 一連の調査では、集落域を区画すると考えられる遺構や土器が集中して出土する領域を確認した。これらを列举すると、北地区14・15トレンチで、尾根に対して直交するように掘削された溝S D01・21(ともに標高94m付近)を検出した。16トレンチでは、土器溜まりS X04(標高91m付近)と、土器供献遺構S X05(標高87m付近)を検出した。B地区でも、平坦面S X240(標高94m付近)、平坦面S X238(標高91m付近)、平坦面S X239(標高87m付近)をそれぞれ検出した。A地区でも平坦面S X241(標高87m付近)のほか、顕著な遺構は検出されなかったものの、標高91～92m付近で大量の土器が出土した。

このように北地区や南地区の東側斜面では標高94m付近、91m付近、87m付近のそれぞれに、平坦面などの遺構や弥生土器が集中して出土する領域が存在する。当遺跡では、環壕などの施設は検出されなかったが、ここで示したものが、そうした施設に変わるものであった可能性は高いと判断した。そして、ほぼ同じ標高に営まれた遺構を結ぶことによって、集落の範囲が示される

と考えた。また、15トレンチ段状遺構 S X12と A地区段状遺構 S X248は、ともに標高91m付近で検出されたものであるが、明瞭な遺構掘形を持たず、上記の遺構と一連のものと考えられる。このほか、1トレンチ西端でも、比高差4mを測る段差を検出した。ここでは尾根を切断するような溝は検出されなかったが、北地区 S D01・21などと同じく、集落域を区画する施設の一つである可能性が高い。なお、B地区での調査成果を参考にすると、標高87m付近の集落域を囲う遺構は、その後、標高91m付近に造り替えられたと考えられる。後者の場合、A地区包含層やB地区平坦面 S X238から第2群の遺物が多数出土したが、前者は適当な遺物がほとんどなく時期は不明確である。ただ、16トレンチ土器供献遺構 S X05が標高87m付近で検出されており、この土器群が前者の時期を表しているかもしれない。ただし、S X05出土土器群も第2群に位置づけられる資料であることから、土器様相の上では明確な時期差はなかった可能性が高い。

一方、当遺跡における竪穴式住居跡の分布をみると、いずれも、標高94mよりも高所、すなわち、先述の遺構や土器集中領域の内側に営まれており、これらが集落を区画する施設であることが改めて確認される。このことは、25・26トレンチやC地区・F地区において、標高95m付近までは遺構を確認できるが、それよりも下方では平坦な地形が続くにもかかわらず、住居跡などの顕著な遺構は検出されないという事実によってさらに補強される。



第32図 南地区主要遺構配置図

以上のような事実から、集落域は標高94mよりも高いところに営まれていたと考えられる。この標高94mを基準に集落の規模を示すと、南北320m、東西130mを測る(第33図)。一方、標高94m付近の遺構の外側には、まず標高87m付近に集落を区画する遺構が営まれたのち、標高91m付近に営まれたと考えられる。出土土器には明確な時間差を見出しにくいのが、91m付近からの土器の出土量が多いことから後者の方が長く存在した可能性がある。

方形台状墓について 木津城跡から北西にのびる尾根で、方形台状墓2基を確認したが、造成計画の変更などによって、部分的な調査にとどまっている。したがって詳細は不明であるが、一部を掘削した結果、

弥生土器と獣帯鏡の破鏡が出土した。遺構の立地から、これらが当遺跡に集落を営んだ人々の墓域と考えられる。このことは、出土した弥生土器が集落域で出土したものと大きな違いはないことから傍証される。また、方形台状墓そのものは、住居群の分布する主尾根から派生する支尾根上に営まれており、その点で、居住域とは区別されているが、集落に近接して墓域が営まれる点は注意される。

出土遺物で注目される獣帯鏡の破鏡については、埋葬施設への破鏡の副葬や、中国での製作からその入手経緯についての社会的・政治的背景など、重要な問題を提起するが、今回はその点について十分に議論することはできなかった。

弥生時代後期の土器について 木津城山遺跡出土の弥生土器は、第3章第2節4・5項で検討したように、後期前葉に位置づけられるものである。また、これまでたびたび述べてきたように、南山城地域のこの時期の土器様相はこれまでほとんど知られていなかったもので、この地域の弥生土器研究を進める上で重要な資料である。出土した弥生土器は、大きく3群に分けられる。こ



第33図 集落範囲想定図

のうち、第3群、すなわち新相資料は量的に少ない。一方、主体となる第1・2群、すなわち古相資料は、同時期の資料がないこともあって、南山城地域における弥生時代後期前葉の標式資料と評価することができる。さらに、第1群と第2群の存在から、古相資料はさらに新古に分かれる可能性もあるが、これについては今後の検討課題である。また、今回、資料数が少なかったため十分な検討を行うことはできなかったが、搬入品などの外来系土器の在り方や、周辺地域との交流については、今後の検討課題とする必要がある。

南山城地域の集落遺跡について 木津城山遺跡周辺の弥生時代後期の集落については、すでに第1章第2節1項で概観した。ここでは、第3章第2節5項で検討した土器編年に基づいて、南山城地域における集落の動向について、これまでの調査・研究成果によりながら検討を加える。

南山城地域に限らず、弥生時代後期前葉(後期1・2段階)に集落遺跡が中期後半にくらべて、著しく減少することは、現在、普遍的な事実として捉えられている。この中期末から後期前葉にかけては、環壕集落の解体・高地性集落の成立・遺跡数の減少といった現象が確認できるが、これらが、単一の要因で発生したのか、あるいは個別のさまざまな要因によって発生したのか、現在においても明確な解答は用意されていないように思う。たとえば、高地性集落の成立要因を軍事的緊張の増大によるとする意見が多いが、一方で環壕集落の解体や遺跡数の減少までも、それによって説明することは、不可能ではないとしても、困難とせざるを得ない。

したがって、木津城山遺跡が後期前葉(後期2段階)に、突発的に出現する契機は、現時点では不明といわざるを得ない。少なくとも南山城地域では、木津城山遺跡が出現する直前の状況も、木津城山遺跡が盛行する時期の状況も詳しいことは不明のままである。

しかし、後期中頃(後期3・4段階)には、減少した遺跡数が再び増加に転ずる。この状況は、木津町燈籠寺遺跡、山城町堂ノ上遺跡・椿井天上山古墳下層遺跡、京田辺市天神山遺跡、八幡市幣原遺跡などで新しい集落が成立することがわかっている。このうち、燈籠寺遺跡では木津城山遺跡に後出する土器資料を確認できることから、木津城山遺跡に継続する遺跡と考えることができる。しかし、ほかの遺跡は、近接する場所に前段階の集落を確認することはできない。この点においてこれらの集落を営んだ人々がどこから来たのか、という命題はこの時期の社会を考える上で重要な課題と思われる。また、燈籠寺遺跡や幣原遺跡などは、なお、丘陵上に立地しており、低地部に立地している遺跡はほとんどない。こうした状況は、後期後葉(後期5・6段階)になると、低地部に新しい集落が成立してくる。たとえば八幡市内里八丁遺跡や久御山町佐山遺跡などである。そして、少なくとも後期後葉に成立する集落は、その後、古墳時代前期あるいは中期まで継続して営まれるものが多い。

以上の点から後期の集落遺跡の動向をまとめると、中期末から後期前葉にかけて、その要因は不明であるが、集落数の減少がみられる。しかし、後期中頃になると、再び集落数が増加に転ずる。ただ、この段階ではまだ丘陵上に立地するものが多い。この点も、後期後葉になると、低地部に新たな集落が営まれるようになる。この段階に成立した集落は、その後、古墳時代前期になっても継続して営まれる。

こうした、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺跡の流れをみると、古墳時代前期の集落の多くはその発生を弥生時代後期のうちに持つと考えられる。しかし、こうした集落が発生する契機については、なお不明な点が多い。特に弥生時代中期末における拠点集落の解体以後、どのような集落の再編成がなされ、古墳時代へ向かう集落が発生するのか、なお検討の余地がある。今回の木津城山遺跡は、この再編成過程の前半段階に相当し、燈籠寺遺跡や幣原遺跡などが後半段階に相当すると考えられるが、これらの集落が短期間で姿を消すのは、集落の再編成過程でさまざまなことが起こったと考えられるのではないだろうか。

今回の検討では、南山城地域における集落の消長をみることで、後期の前半段階が、その前後の時期と比べ、相対的に、短期間な集落が多いことを確認した。中期の拠点集落と後期後半ないし末から始まる古墳時代の集落の間であって、まさに再編成の時期に当たると言える。

(筒井崇史)

注1 当調査研究センターが刊行した木津城山遺跡に関連する文献は以下の通りである。

- ①伊賀高弘・萩谷良太「木津地区所在遺跡平成9年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- ②伊賀高弘・萩谷良太「木津地区所在遺跡平成10年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- ③戸原和人・筒井崇史「木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第95冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- ④伊賀高弘「南山城地域の弥生高地性集落についての一試考」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- ⑤戸原和人・伊賀高弘・筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- ⑥筒井崇史「木津城山遺跡の発掘調査とその成果」(『京都府埋蔵文化財情報』第82号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- ⑦筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成13年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

注2 ここでいう、南山城地域とは、かつて京都盆地の中央部に存在した巨椋池よりも南側の、木津川両岸に広がる平野部とその背後の丘陵地帯を指すものとする。

注3 第1項の執筆に当たっては以下の文献を参照した。なお、各遺跡報告書に関しては割愛した。

- 石井清司編『京都府弥生土器集成』((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
 森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社) 1990
 伊藤敦史「山城地域における弥生集落の動向」(『みずほ』第32号 大和弥生の会) 2000
 森岡秀人「弥生集落の新動向(Ⅲ)」(『みずほ』第32号 大和弥生の会) 2000

注4 第2項の執筆に当たっては以下の文献を参照した。なお、各遺跡報告書に関しては割愛した。

- 木津町史編さん委員会『木津町史』本文編(木津町) 1991

注5 竪穴式住居跡の記号は、本来ならば、SBまたはSHのどちらかに統一されるべきであるが、混乱を避けるために、調査時の記号をそのまま利用することにする。

- 注6 崖状地形とは、丘陵斜面において、急な傾斜角度を有するが、人為的に削り出されたものと判断できないものをさす。これに対して崖状遺構とは、人為的に削り出されたものをさす。
- 注7 第2章では、特にことわらない限り、出土遺物はすべて弥生土器である。以下では、器種名のみを記すことにする。
- 注8 陣地遺構とは、土坑を掘削してその排土を周囲に盛り上げたものをさす。
- 注9 堅穴式住居跡とは、支柱穴・周壁溝・炉・貯蔵穴などの、平地の集落において一般的に見られる堅穴式住居跡と同様の構造を有するものをさす。
- 注10 段状遺構とは、傾斜地を等高線に沿って「L」字状にカットし、細長い一定の平坦面を築成するものや、堅穴式住居跡の特徴が認められない人為的の掘り込みをさす。ただし、遺構の完存する例が希少であるため、堅穴式住居跡との区別のつきにくい場合があり、担当者の推測に基づく例も多い。段状遺構は、これまで各地で調査事例があるものの、その用途などは不明な点が多い。
- 注11 原則として、遺構番号は重複しないはずであったが、段状遺構S X69と堅穴式住居跡S B69は重複している。これは、概要報告時に段状遺構S X69をS X68として報告しているが、68は別に堅穴式住居跡としてすでに番号を付与されていたため、混乱を避けるためにあえて番号の重複を選択した。
- 注12 第4次調査の概要報告(注1文献⑤)では、S B210として報告したものである。
- 注13 A地区包含層出土土器の出土地区は以下の通り。
4区：696・716・751・787
3区：666・682・694・695・704・710・717・733・752・760・778・807
2区：668～670・672・676～678・683～685・688・690・698・703・709・711・713・718・719・
721～723・727・731・732・736～738・741・745・746・750・754・757～759・761・763・
765・768・772・774・776・777・782～785・789～792・794・797～800・802・803・806・
808・809
出土地点不明：671・679・680・687・705・707・714・728・767・769・780・796・804
段状遺構S X248周辺：673・692・767・775・781
上記以外は1区出土。
- 注14 藤田三郎・松本洋明「大和地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編I 木耳社 1989) 184頁
- 注15 脚部と杯部の接合方法の類型化にあたっては六条山遺跡における脚部の分類を参照した。
寺澤薫ほか『六条山遺跡』(『奈良県文化財調査報告書』第34集 奈良県教育委員会) 1980
- 注16 5・6・9は、第1次調査の概要報告(注1文献①)では誤って方形台状墓出土として報告したが、ここで報告するように、3トレンチ落ち込みS X06出土が正しい。
- 注17 永島暉臣慎ほか『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告(改訂版)』((財)大阪市文化財協会) 1982
- 注18 第4次調査の概要報告(注1文献⑤)では、このほかに誤ってA地区包含層出土の678・802もS X242出土として報告した。
- 注19 藤田三郎「第19次発掘調査の概要」(『田原本町埋蔵文化財調査概要』2 田原本町教育委員会) 1984
- 注20 森浩一ほか『大阪府和泉観音寺山遺跡発掘調査報告書』(『同志社大学歴史資料館調査報告書』第2冊 同志社大学歴史資料館) 1999
- 注21 深江英憲ほか『表山遺跡・池ノ内群集墳』(『兵庫県文化財調査報告』第202冊 兵庫県教育委員会) 2000
- 注22 第4次調査の概要報告(注1文献⑤)では脚部として報告している。

- 注23 森岡秀人「会下山遺跡出土土器特論」(『増補版 会下山遺跡』 芦屋市教育委員会) 1985
- 注24 宮崎康雄ほか『古曾部・芝谷遺跡』(『高槻市遺跡調査報告書』第20冊 高槻市教育委員会) 1996
- 注25 寺澤薫ほか『六条山遺跡』(『奈良県文化財調査報告書』第34集 奈良県教育委員会) 1980
- 注26 森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社) 1990
- 注27 筒井崇史「平成13年度関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡発掘調査概要 (2)赤ヶ平遺跡(第2次)」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 注28 石井清司ほか「燈籠寺遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注29 野島永「堂ノ上遺跡・恭仁京推定地発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注30 島軒満『椿井天上山古墳 第2次』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第26集 山城町教育委員会) 2001
- 注31 注28に同じ。
- 注32 石井清司「八幡市幣原遺跡出土土器について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注33 河野一隆「一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注34 森下衛・柴暁彦『内里八丁遺跡Ⅱ』(『京都府遺跡調査報告書』第30冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

付表14 出土遺物観察表

番号	実測・写真番号	器種	法量		残存率	技法上の特徴	胎土	色調	備考
			口径	器高					
2 トレンチ 方形台状墓 1・2									
1	Y47 10H-7	広口壺C	—	*14.2	10/12	頸部外面ハケ/体部外面上半ハケのちナデ、下半ミガキ/頸部内面・体部内面ユビオサエ、ナデ	密	淡茶褐	区画溝SD03出土/残存率は肩部で計測/肩部に列点文・波状文・沈線
2	Y49	高杯A	16.4	*15.5	4/12	口縁部内外面ナデ/杯部内面ミガキか/杯部外面上半ケズリ、下半ナデか/脚部外面ミガキ/脚端部調整不明/脚部内面ナデ	密	橙褐	埋葬施設SX07出土/接合3類か/シボリ痕あり
3	Y50 10H-16	鉢A	11.2	6.2	2/12	内外面ともナデ/底部外面ユビオサエ	やや粗	茶褐	区画溝SD05出土
4	Y880	高杯脚部	—	*5.1	—	外面ミガキ(単位不明瞭)/内面ナデ、ユビオサエ	密	黒灰	区画溝SD05出土/スカシ孔上段1個、下段2個
3 トレンチ 落ち込みSX06									
5	Y46 10H-14	広口壺C	12.3	*3.5	5/12	内外面とも調整不明	密	淡黄褐	口縁部外面に黒斑/口縁部に刺突文
6	Y41 10H-28	壺体部	—	—	—	外面上半ハケ、下半ミガキ/内面ナデ	密	淡黄褐	波状文・直線文・円形浮文
7	Y881	甕体部	—	*12.1	—	外面ユビオサエ、ナデ、最大径以下ハケまたはナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	黒灰/黒褐	外面に黒斑/全体にいびつな形状
8	Y879	底部c	(4.8)	*5.8	2/12	内外面とも調整不明	粗	淡茶褐	
9	Y44 14I-27	高杯C	12.0	9.1	1/12未	杯部外面ナデか/杯部内面調整不明/脚部内外面ユビオサエ、ナデ	密	黄褐	接合1類/スカシ孔4個/杯部内面に黒斑/杯部内面底に赤色顔料か
10	Y43	高杯E	19.0	*2.1	1/12未	口唇部ハケか/口縁部ヨコナデ/口縁部内外面ミガキ	密	橙褐	
11	Y45	高杯脚部	(16.6)	*2.1	1/12未	脚端部ヨコナデ/脚部外面ハケまたはミガキ	密	灰褐	脚端部に刻み目
8 トレンチ 竪穴式住居跡SB09									
12	Y875	広口壺B	19.3	*4.0	1/12	内外面ともヨコナデか	密	茶褐	
13	Y229	甕D	—	*3.1	—	頸部内面ナデ/体部内面ユビオサエ/頸部外面ヨコナデ/体部外面ナデか	やや粗	橙褐	肩部に直線文・波状文/外面にすず
14	Y874	壺体部	—	*7.9	—	外面丁寧なナデ(ミガキか)/内面ナデ、ユビオサエ	密	黄褐	
15	Y260	蓋か	—	*1.8	—	外面ナデ、ユビオサエ/内面ナデ	やや粗	橙褐	
16	Y227	底部a	(5.7)	*2.8	3/12	外面ナデ、ケズリ/内面ハケ	密	黒灰	
17	Y876	底部b	(4.8)	*3.5	2/12	外面ハケ/内面ハケ、ユビオサエ	密	茶褐	
18	Y54	底部b	(3.6)	*2.6	12/12	外面ハケ/内面ナデ	やや粗	赤褐	内外面に黒斑
19	Y42 10H-15	鉢A	11.6	6.0	12/12	体部外面ナデ/底部外面ユビオサエ/体部内面ナデ	密	黄褐	口縁部に歪み/体部外面に黒斑
20	Y79	甕肩部	—	—	—	内面ナデ、ハケ/外面ナデ、ハケ	やや粗	橙褐	外面下方に黒斑
21	Y29 10H-24	脚部a/b	—	*8.4	—	内面ナデ/外面ミガキ	やや粗	橙褐	接合1類/シボリ痕あり/スカシ孔上段4個、下段3個
22	Y28	脚部c	—	*8.4	—	外面ミガキ/内面ナデ、ユビオサエ	密	橙褐	接合3類か/シボリ痕あり/沈線5条1組を3段
23	Y254	器台脚部	(26.0)	*2.6	3/12	脚部内面調整不明/脚部外面ナデ/脚端部ヨコナデ	やや粗	淡茶褐	沈線4条以上/脚端部に刻み目
9 トレンチ 竪穴式住居跡SB33									
24	Y67	無頸壺C	—	*5.4	—	体部外面調整不明/体部内面ナデ	粗	淡茶褐	

25	Y242	底部 a	(4.6)	*2.0	7/12	内外面ともナデ	やや粗	茶褐	内面に黒斑
----	------	------	-------	------	------	---------	-----	----	-------

9 トレンチ 竪穴式住居跡 S B51

26	Y508	広口壺 B	17.2	*7.9	2/12	外面調整不明/内面ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	
----	------	-------	------	------	------	----------------	-----	-----	--

9 トレンチ 竪穴式住居跡 S B52

27	Y228	広口壺 A	16.9	*3.4	2/12	内面・口縁帯調整不明/外面ナデ	粗	茶褐	
28	Y262	高杯杯部	—	*4.6	—	内面ミガキ/外面調整不明/脚部外面ミガキ	やや粗	茶褐	接合 3 類/シボリ痕あり

1 トレンチ 土坑 S K 42

29	Y19	底部 c	(5.4)	*3.3	3/12	内面・底面ナデ/外面ハケのちナデか	やや粗	淡茶褐/灰褐	外面に黒斑
30	Y259	底部 b	(5.2)	*2.1	12/12	内外面ともユビオサエ、ナデ/底面ナデ	粗	黄褐	底部全面・内面に黒斑
31	Y247-1	高杯 B	20.4	*2.6	1/12	口縁端部ナデ/口縁部内外面ハケのちナデ(ミガキ)	密	灰褐	
32	Y247-2	高杯杯部	—	*2.4	—	杯部内面ミガキ、ナデ/杯部外面ハケのちナデ(ミガキ)	密	灰褐	

9 トレンチ 竪穴式住居跡 S B32

33	Y641	広口壺 B	10.5	*2.3	2/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡茶褐	
34	Y231	器台 A	18.9	*1.3	1/12	口縁帯ヨコナデ/口縁部上面ユビオサエ、ナデ	密	灰褐	口縁部上面・口縁帯に竹管文
35	Y609	広口壺 A	24.0	*2.0	1/12	口縁帯ヨコナデか	粗	黄灰	
36	Y135	底部 a	(2.7)	*3.8	12/12	内面ナデ/外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰白	内外面に黒斑
37	Y90	底部 b	(5.2)	*3.3	5/12	内外面ともハケ、ユビオサエ	密	黄灰	内面に黒斑
38	Y3	底部 a	—	*3.9	—	外面ハケ、ユビオサエ/内面ユビオサエ	密	橙褐	外面に赤色顔料か
39	Y666	底部	—	*2.0	—	内外面ともユビオサエ、ナデ	密	黄灰	内面に黒斑
40	Y571	底部 a	(4.2)	*1.4	6/12	内外面ともナデ	密	黒灰	
41	Y583	底部 a	(4.1)	*2.0	11/12	内外面ともナデ	密	淡黄褐	
42	Y584	底部 a	(5.2)	*3.2	12/12	外面ユビオサエ・ナデ/内面調整不明	粗	黄灰	
43	Y599	高杯 B	22.6	*2.1	1/12未	外面調整不明/内面ヨコナデか、一部ユビオサエ	やや粗	橙褐	
44	Y633	高杯 B	20.2	*4.6	2.5/12	口縁部外面ヨコナデ/口縁部内面・杯部内外面調整不明	やや粗	淡黄褐	残存率は杯屈曲部で計測
45	Y655	高杯杯部	—	*1.3	—	内外面とも調整不明	やや粗	黄灰	接合 1 類
46	Y140	脚部 c/e	—	*4.5	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	淡黄褐	接合 1 類/沈線 7 条
47	Y1	脚部 c	—	*9.3	—	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	接合 3 類/シボリ痕あり/沈線上段 3 条、下段 4 条
48	Y639	高杯脚部	—	*5.9	—	内面ナデ/外面ナデまたはユビオサエ	やや粗	橙褐	接合 1 類か/シボリ痕あり
49	Y2	脚部 a/b	—	*8.3	—	内面ナデ、ユビオサエ/外面ミガキ	やや粗	淡黄褐	接合 1 類/シボリ痕あり/スカシ孔 4 個
50	Y237	脚部 c/e	—	*5.4	—	外面ミガキ(単位不明瞭)/内面ナデ、ユビオサエ	密	淡黄褐/黄灰	接合 3 類か/シボリ痕あり
51	Y30	脚部 c	—	*7.6	—	内面ユビオサエ/外面ハケ	密	灰褐	接合 1 類/シボリ痕あり
52	Y598	脚部 c	—	*6.4	—	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	接合 3 類/シボリ痕あり
53	Y843	高杯脚部	(16.8)	*3.7	1/12	内外面とも調整不明	密	灰褐	
54	Y580	高杯脚部	(13.0)	*2.2	2/12	内面ナデ/外面ナデか/脚端部ヨコナデ	やや粗	黒灰	内外面に黒斑/全体にやや歪む

9 トレンチ 段状遺構 S X 40

55	Y63 10H-12	直口壺	6.5	13.4	完形	外面ミガキか/内面ナデ	密	橙褐	肩部に列点文/体部外面下半に黒斑/体部外面上半に赤色顔料か
56	Y220	広口壺C	12.0	*2.5	—	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	
57	Y52 Y68 14I-20	甕C	10.8	*7.6	7/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ユビオサエ、ナデ/体部内面ナデ	密	橙褐	口縁部に歪み
58	Y234	甕A	18.6	*2.9	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ/体部内面ハケ、ナデ	やや粗	暗茶褐	頸部に刺突文か
59	Y239	甕頸部	—	*4.2	1/12	体部内面ナデ/体部外面ナデか(一部ハケか)、ユビオサエ	やや粗	橙褐	残存率は頸部で計測/口縁部外面にすず
60	Y57	底部b	(5.2)	*3.4	12/12	内面ナデ/外面ハケ/底面ナデ	やや粗	橙褐	
61	Y56	底部a	(4.8)	*2.9	12/12	内面ナデ/外面ハケ/底面ナデ	やや粗	茶褐	
62	Y37	鉢B	15.4	*6.2	3/12	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	やや大きい砂粒を含む
63	Y232	有孔鉢	(3.2)	*3.1	4/12	外面ナデ、ユビオサエ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐/灰褐	
64	Y53	高杯A	22.6	*3.9	2/12	口縁部内外面ともヨコナデか/杯部内外面とも調整不明	やや粗	赤褐	内面に黒斑
65	Y59 10H-2	高杯A	20.6	19.9	1/12強	口縁部ヨコナデ/杯部内外面・脚部外面ミガキ/脚部ヨコナデ/脚部内面一部ハケ	密	淡黄褐	接合3類/シボり痕あり/スカシ孔4個/外面に赤色顔料か
66	Y805	高杯接合	—	*2.2	—	外面ミガキ/内面調整不明	やや粗	茶褐	接合1類
67	Y233	脚部a	—	*6.9	—	内面ナデ、ユビオサエ/外面ミガキ	密	暗茶褐/橙褐	外面・内面下半に黒斑/沈線14条以上
68	Y249	脚部e	—	*8.4	—	内面ナデ、ユビオサエ/外面ミガキ(単位不明)/脚部ヨコナデ	密	橙褐	接合しない2片から復原/接合3類/沈線2条
69	Y258	脚部c/e	(12.8)	*3.2	2/12	内面ユビオサエ、ナデか/外面ミガキ/脚部ヨコナデ	密	茶褐/暗茶褐	沈線2条
70	Y235	脚部c	—	*6.9	—	内面ユビオサエ、ナデ/外面ユビオサエのちミガキ(単位不明)	やや粗	橙褐	接合3類/スカシ孔3個
71	Y255	高杯脚部	—	*4.0	—	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	接合3類
72	Y85	高杯脚部	(14.6)	*1.5	1/12	脚部ヨコナデ/外面ミガキ	密	橙褐	脚部に刻み目
73	Y244	脚部b	—	*3.4	—	内面ヨコナデか/突帯ヨコナデ/外面ナデか、ユビオサエ	密	黄褐	内面に黒斑
74	Y58	器台脚部	(14.8)	*9.6	4/12弱	内面ナデ/脚部ヨコナデ/外面ミガキ	密	橙褐	スカシ孔1個

9 トレンチ 土器溜まり S X 37

75	Y65 10H-18	無頸壺A	13.0	*15.7	4/12	体部内面ユビオサエ、ナデ/口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ミガキ	やや粗	淡黄褐	頸部にスカシ孔2個
76	Y222	甕A	15.2	*3.5	3.5/12	口縁部内面・体部内外面調整不明/口縁部外面ヨコナデ	粗	橙褐	口縁部外面に赤色顔料か
77	Y224	甕	12.2	*3.3	2/12	内外面とも調整不明(内面ユビオサエ)	やや粗	橙褐	残存率は頸部で計測/体部外面にすず
78	Y238	甕頸部	—	*3.8	—	体部内面ハケ(ナデか)/頸部外面ユビオサエ/体部外面ハケのちナデか/口縁部内外面調整不明	やや粗	橙褐	
79	Y268	甕体部	—	*16.0	—	内面ナデ、ユビオサエ/外面タタキのちナデ	密	橙褐/灰褐	外面に黒斑
80	Y241	底部b	(4.5)	*3.0	12/12	内面・底面ナデ/外面ミガキ、ユビオサエ	密	淡黄褐	底面・内面に黒斑
81	Y226	底部a	(6.0)	*3.4	12/12	内面ハケ、ナデ/底面ケズリ/外面ミガキ、ユビオサエ	やや粗	橙褐/灰褐	

82	Y236	底部 b	(3.1)	*2.2	7/12	内面・底面ナデ/外面タタキ、ユビオサエ	密	淡茶褐	外面に黒斑
83	Y223	底部 a	(5.6)	*2.6	3/12	内外面調整不明/底面ナデ	やや粗	茶褐	
84	Y243	底部 c	(5.4)	*3.1	12/12	内面・底面ナデ/外面ケズリ、ユビオサエ	密	暗橙褐/橙褐	内面に黒斑
85	Y55	底部 c	(5.4)	*2.5	12/12	内面ナデ/外面・底面ケズリのちナデ	粗	橙褐	
86	Y225	底部 b/c	(5.2)	*5.0	12/12	内面ユビオサエ/底面ナデ/外面下半ケズリ、上半ナデ	粗	淡茶褐	
87	Y218	脚部 c	—	*8.5	—	杯部内面ナデかまたはミガキ/脚部外面ミガキ/脚部内面ナデ	密	橙褐	接合 3 類/シボリ痕あり
88	Y219	脚部 c	(11.7)	*4.5	4.5/12	内面ユビオサエ、ナデ/脚端部ヨコナデ/外面ハケ	やや粗	茶褐	シボリ痕あり/スカシ 2 個確認
89	Y261	器台	16.6	*1.4	—	内外面ともヨコナデ/外面ユビオサエ	密	淡橙褐	

9 トレンチ 崖状地形 S X 10

90	Y128	広口壺 B	17.3	*5.2	4/12	口縁部内外面ヨコナデか/頸部内面調整不明/頸部外面ミガキか	やや粗	橙褐	
91	Y129	広口壺 A	—	*5.9	小片	内外面とも調整不明(外面一部ナデ)	やや粗	橙褐	口縁帯に円形浮文
92	Y40	壺頸部	—	*11.7	—	口縁部内面ハケ/体部内面ナデ、ユビオサエ/外面ハケのちナデ(ミガキか)	やや粗	灰褐	肩部に波状文を 2 段
93	Y130	長頸壺	13.4	*11.5	3/12弱	内面ナデ、ユビオサエ/口縁部ヨコナデ/口縁部外面ミガキ	やや粗	橙褐/淡黄褐	外面に黒斑/外面に赤色顔料/高杯脚部の可能性あり
94	Y39 10H-20	甕体部	(3.7)	*14.3	12/12	体部内面ハケ/体部外面ハケ、ユビオサエ/底部外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	底部外面付近に黒斑
95	Y816	甕	14.2	*11.1	1/12	内外面とも調整不明(内面かすかにユビオサエ)	やや粗	橙褐/暗茶褐	
96	Y647	底部 b	(4.7)	*2.5	1/12	内面ハケ/外面ナデ/底面ユビオサエ、ナデ	密	黄褐	内外面・底面に黒斑
97	Y700	広口壺 C	—	*1.6	—	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	
98	Y698	鉢 B	10.5	*1.5	1/12未	内面調整不明/外面ヨコナデ	密	橙褐	
99	Y131 11L-6	高杯 B	29.0	*5.4	1/12強	口縁部ヨコナデ/口縁部外面ハケのちヨコナデ/口縁部内面ナデか/杯部内外面ミガキ	やや粗	橙褐	
100	Y869	高杯 B	25.8	*3.6	2/12弱	口縁部内外面ナデか/杯部内面ミガキ/杯部外面調整不明	密	橙褐	接合しない 3 片から復原
101	Y38	高杯 A	25.0	*5.5	2/12強	口縁部内外面ヨコナデ/杯部内面調整不明/杯部外面ミガキか	粗	黄褐	
102	Y126 11L-7	高杯 D	25.6	20.5	12/12	口縁部ヨコナデ/口縁部・杯部内外面ミガキ(杯部外面一部にナデ)/脚部外面ミガキか/脚部内面ナデか	やや粗	黄褐	接合 1 類
103	Y246	高杯脚部	—	*7.6	—	内面ナデ/外面ミガキ	やや粗	橙褐	接合 3 類/シボリ痕あり
104	Y697	高杯脚部	(12.0)	*3.0	1/12	内面ナデ、ユビオサエ/脚端部ヨコナデ/外面ナデか	やや粗	橙褐	

9 トレンチ 溝 S D 15

105	Y178	広口壺 B	12.6	*2.8	2.5/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	
106	Y184	広口壺 B	12.9	*2.4	2/12弱	口縁部内外面ともナデ/口縁部内面少し強めのナデ/外面ユビオサエ	やや粗	黄褐	
107	Y25 10H-5	広口壺 B	17.2	*8.6	4/12	口縁部外面ヨコナデ/口縁部内面ハケ/頸部、体部内面ユビオサエ、ナデ/頸部・体部外面ハケ	やや粗	淡茶褐	内面に黒斑か
108	Y7 10H-6	広口壺 A	18.0	*4.8	12/12	頸部内面ハケ/口縁部内面ヨコナデか/口縁部・頸部外面ナデか	やや粗	淡黄褐	
109	Y18	広口壺 G	13.0	*4.0	4/12	口縁部内面ナデ(口縁部付近ミガキか)/口縁部外面ナデ/頸部外面ハケ	密	淡黄褐	口縁帯に擬凹線 2 条・刺突文

110	Y591	広口壺A	16.4	*4.5	1/12未	口縁部内面ミガキ/口縁部ヨコナデ/頸部外面ミガキ	密	茶褐/暗茶褐	
111	Y559	広口壺A	18.9	*2.3	2.5/12	内面調整不明(ナデか)/外面ヨコナデ	やや粗	橙褐	
112	Y12	広口壺A	21.2	*3.4	2/12強	口縁部内面ナデ/口縁部外面ナデ/頸部外面ナデか	粗	橙褐	口縁部内面に竹管文2列、口縁部に竹管文
113	Y13	広口壺A	20.8	*2.4	2/12	口縁部内外面ミガキか(単位不明瞭)/口縁部ヨコナデか	やや粗	橙褐	口縁部に擬凹線5条、円形浮文
114	Y36 14I-6	広口壺A	22.0	*7.7	9/12	口縁部・頸部内面ハケ(一部ヨコナデ)/口縁部ヨコナデ/頸部外面上半ハケ、下半ハケのちナデ	密	黄褐	口縁部内面一部に黒斑
115	Y157	広口壺A	23.0	*7.9	4/12強	口縁部・頸部内面調整不明/頸部外面ハケ/頸部突帯ヨコナデか	粗	淡茶褐	口縁部に擬凹線5条
116	Y495	長頸壺	9.7	*7.4	1/12	口縁部内面ナデか/口縁部ヨコナデ/口縁部外面ハケ、中位付近にナデ	やや粗	黄褐	
117	Y804	短頸壺	10.5	*6.2	2/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内面ナデ/体部内面調整不明/口縁部外面ハケ/体部外面ナデか	やや粗	茶褐	接合しない2片から復原
118	Y613	広口壺C	14.0	*2.4	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	黒褐	
119	Y483	壺頸部	—	*4.1	—	外面上半調整不明、下半ハケ/内面ハケのちナデ	密	淡黄褐/橙褐	
120	Y588	壺肩部	—	*2.2	—	内面ナデ、ユビオサエ/外面調整不明	やや粗	淡橙褐/黄褐	外面一部に黒斑
121	Y637 Y677 Y817	壺頸部	—	*5.2	—	口縁部内面ナデか/体部内面ナデ/口縁部外面ミガキか/体部外面ナデか	やや粗	淡茶褐	
122	Y69	壺頸部	—	*6.2	—	内外面とも調整不明	やや粗	淡茶褐	
123	Y16 10H-13	短頸壺	8.0	13.8	完形	口縁部内外面ナデ(内面ユビオサエあり)/体部内面ナデ/体部外面ミガキ/底面ナデ	密	淡黄褐	外面に黒斑/外面にすず/底部外面に粘土を掻き取ったような痕跡
124	Y9 10H-4	壺体部	(5.1)	*26.2	12/12	体部内面ナデか/体部外面最大径以上ハケ、最大径以下ナデ	やや粗	茶褐	
125	Y21	甕A	17.5	*6.2	2/12	口縁部内外面ともヨコナデ/体部内面ナデ/体部外面ナデか	やや粗	黄褐	肩部に列点文
126	Y174	甕A	17.5	*5.0	1/12強	体部内面ナデ/口縁部内外面ともヨコナデ/体部外面ハケ	密	暗茶褐	口縁部外面にすず
127	Y293	甕A	15.6	*2.1	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内面ナデ	密	淡茶	
128	Y66	甕A	18.3	*5.4	2/12	体部内面ナデ、ユビオサエ/体部外面ナデ/口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	茶褐/淡茶褐	口縁部から体部外面にかけてすず
129	Y480	甕C	16.6	*3.8	1/12未	口縁部内面ナデ/口縁部外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	橙褐	口縁部外面にすず
130	Y482 Y825	甕A	15.6	*3.1	1/12未	口縁部内外面調整不明/体部内外面ナデ、ユビオサエ	密	橙褐	
131	Y180	甕C	16.1	*4.0	1/12未	口縁部・体部内面ナデ/口縁部・体部外面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡茶褐	口縁部外面にすず/口縁部は大きく歪む/口縁部内外面に黒斑
132	Y497	甕か	14.2	*2.3	1/12強	口縁部内外面ナデ	密	灰褐	焼け歪みあり/甕ではない可能性あり(天地逆か)
133	Y161	甕	13.0	*3.0	3/12	体部内面ユビオサエのちナデ/口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ユビオサエ、ナデ、一部ハケ	やや粗	灰褐	口縁部外面にすず/口縁部外部に刻み目/口縁部外面に黒斑
134	Y295	甕	18.0	*3.2	3/12	口縁部内外面ヨコナデ、ユビオサエ	やや粗	淡茶	
135	Y821	甕	13.8	*2.5	1/12	口縁部内面ユビオサエ、ナデ/口縁部・口縁部外面ヨコナデ	やや粗	茶褐	口縁部外面にすず
136	Y493	甕A	13.1	*5.8	2/12	体部内面ナデ/口縁部内外面ヨコナデ(外面先行してハケ)/体部外面ハケ	やや粗	茶褐	残存率は頸部で計測

出土遺物観察表

137	Y494	底部 b	(4.8)	*9.9	8/12	内面ナデ/外面ハケ	やや粗	茶褐	体部外面にすず/体部外面に黒斑
138	Y78	甕 D	14.0	*1.6	4/12	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	暗茶褐	口縁部に刺突文/外面全体にすず
139	Y159 11L-14	甕 D	15.1	*3.6	6/12	頸部内面ハケのちナデ/口縁部内外面ヨコナデ/頸部外面ハケ	やや粗	茶褐	口縁部に刺突文/頸部に沈線 4 条
140	Y690	甕 C	12.8	*6.7	1/12	体部内面ユビオサエ/口縁部内外面ヨコナデか/体部外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	暗橙褐	接合しない 2 片から復原/口縁部内外面に黒斑/体部外面にすず
141	Y612	甕体部	—	*5.8	—	内面ユビオサエ、ナデ/外面ハケ	やや粗	灰褐	外面にすず
142	Y523	甕体部	—	*7.7	—	内外面ユビオサエ、ナデ	密	淡黄褐	体部外面にすず
143	Y689	甕体部	—	*6.0	—	頸部内外面ともヨコナデか/体部内面ナデ/体部外面ハケか	密	淡茶褐/灰褐	体部外面に黒斑
144	Y565	甕体部	—	*8.8	1/12	内面ユビオサエ、ナデ/外面調整不明	やや粗	淡黄褐/黄褐	残存率は体部で計測/頸部に刺突文
145	Y575	甕 C か	16.5	*8.3	2/12	内外面ともユビオサエ	やや粗	灰褐	外面に黒斑か
146	Y84	甕体部	—	*6.5	—	内面ユビオサエ、ハケ/外面ハケ	密	橙褐	肩部に刺突文
147	Y865	甕体部	—	*14.3	—	内面ハケ、ユビオサエ/外面ハケ	密	茶褐	外面にすず
148	Y61	甕体部	(6.6)	*15.3	12/12	内面ナデ/外面ケズリのちナデ、ユビオサエ	粗	橙褐	底部外面 2 次焼成による被熱か/内面に黒斑か
149	Y278	底部 a	(5.8)	*4.8	5/12	内面ユビオサエ/外面ナデ	やや粗	淡黄褐	内面に黒斑
150	Y17	底部 a	(5.4)	*5.4	12/12	内面ハケ/外面タタキ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	
151	Y636	底部 b	(5.8)	*2.7	1/12	内面ハケ、ナデ/外面ハケ	粗	暗茶褐	内面に黒斑
152	Y169	底部 a	(5.7)	*4.7	12/12	内面ナデ/外面ユビオサエ、ナデ	やや粗	黄褐	内面に黒斑
153	Y170	底部 a	(7.0)	*3.9	12/12	内面調整不明/外面ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	底部外面に黒斑
154	Y273	底部 a	(4.1)	*4.0	12/12	内面ハケ、ナデ/外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	内外面・底面に黒斑
155	Y164	底部 b	(6.0)	*3.1	12/12	内面ハケのちナデ/外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	黄褐	内面に黒斑
156	Y163	底部 b	(7.1)	*3.2	12/12	内面ナデ/外面ユビオサエか	粗	茶褐	底面黒褐色
157	Y290	底部 a	(8.2)	*5.7	4/12強	内面調整不明/外面ユビオサエ	粗	黄褐	内面に黒斑か
158	Y509	底部 b	—	*2.6	—	内外面ともナデ	やや粗	淡茶褐	外面 2 次焼成による被熱
159	Y165	底部 a	(5.5)	*5.9	12/12	内面ナデ/外面ナデ、ユビオサエ	粗	黄褐	底面黒褐色
160	Y269	底部 a	(5.0)	*5.0	12/12	内面ナデ/外面ハケのちナデ、ユビオサエ	密	黒灰	外面に黒斑/底面 2 次焼成による被熱
161	Y277	底部 b	(3.8)	*2.8	2/12	内面ナデか/外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	内面に黒斑
162	Y611	底部	—	*4.9	—	内面ユビオサエ/外面ハケ、ユビオサエ	やや粗	橙褐/灰褐	
163	Y270	底部 b	(4.8)	*2.0	12/12	内面調整不明/外面ユビオサエ、ハケのちナデか/底面ナデ	密	淡黄褐	
164	Y272	底部 b	(5.2)	*2.0	5/12	内面調整不明/外面ナデ、ユビオサエ/底面ナデ	やや粗	橙褐	
165	Y530	底部	(4.0)	*1.7	5/12	内面ナデ/外面ハケのちナデ	やや粗	灰褐	底端部 2 次焼成による被熱
166	Y488	底部 a	(3.9)	*2.1	4/12	内面ナデ/外面ユビオサエ	密	灰褐/淡黄褐	
167	Y279	底部 a	(3.6)	*2.8	12/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	
168	Y498	底部 a	(4.7)	*2.4	3/12	内外面ともナデ	やや粗	淡黄褐	内外面・底面に黒斑
169	Y562	底部 a	(3.8)	*3.3	3/12強	内外面ともナデ	やや粗	黒褐	

170	Y271	底部 a	(3.8)	*2.5	12/12	内外面ナデ/底面ハケ	やや粗	淡橙褐	
171	Y281	底部 b	(4.0)	*2.7	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/内面ナデ	密	黄褐	外面に淡い黒斑
172	Y86	高杯 B	18.2	*4.0	1/12未	口縁部内面ハケのちナデ(ミガキか)/杯部内面ハケのちミガキ/口縁部外面ヨコナデ/杯部外面ナデ	密	淡黄褐	
173	Y564	高杯 B	21.0	*2.7	1/12	口縁部ヨコナデ/杯部内外面ミガキ	密	橙褐	
174	Y532	高杯 B	21.8	*2.2	1/12未	内外面ともヨコナデか(内面ミガキの可能性あり)	密	茶褐	外面に黒斑
175	Y214	高杯 B	19.0	*3.5	1/12強	内面ミガキ(一部ナデか)/口縁部ヨコナデ/外面ミガキ(単位不明瞭)	密	灰褐/橙褐	内面に赤色顔料か/外面一部に黒斑
176	Y11	高杯 A	19.7	*5.2	3/12	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	
177	Y31	高杯 A	22.0	*4.5	3/12弱	口縁部内外面ヨコナデ/杯部内外面ミガキ	密	淡橙褐	
178	Y830	高杯 B	21.0	*2.7	1/12未	口縁部内外面ヨコナデか	密	橙褐	
179	Y210	高杯 B	23.2	*2.8	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	
180	Y486	高杯 B	-	*2.6	1/12	杯部内外面調整不明(杯底部外面ハケ)	やや粗	橙褐	
181	Y672	高杯 D	21.3	*3.3	1/12未	内面調整不明(ナデか)/口縁部ヨコナデ/外面ミガキ	やや粗	橙褐	沈線 1 条
182	Y10 10H-26	脚部 e	(5.9)	*3.9	8/12	内外面ともナデ	やや粗	灰褐	接合 3 類か
183	Y6	脚部 e	(8.3)	*5.3	7/12	内面ユビオサエ/外面上半ナデ、ユビオサエ、下半ハケ/脚端部ナデ	密	暗茶褐	接合 3 類/シボリ痕あり
184	Y563	高杯接合	-	*4.8	-	内面ナデ/外面ミガキ	やや粗	黄褐	接合 3 類
185	Y162	脚部 a/b	-	*9.8	-	外面調整不明/内面ケズリか	粗	黄褐	接合 1 類/シボリ痕なし/スカシ孔 4 個
186	Y809	脚部 a/b	-	*8.6	-	外面調整不明/内面ナデ	やや粗	黄褐	接合 1 類/シボリ痕なし/スカシ孔 3 個
187	Y812	脚部 c	-	*9.5	-	内面ナデ、ユビオサエ/外面ミガキ	やや粗	橙褐	シボリ痕あり
188	Y620	脚部 c	-	*5.5	-	内面ナデ/外面ミガキか	密	橙褐	接合 3 類か
189	Y287	脚部 c	-	*6.1	-	内面ナデ、ユビオサエ/外面ミガキ	密	灰褐	接合 3 類
190	Y75	高杯脚部	-	*8.2	-	杯部・脚部内外面ともナデ	粗	黒灰	外面に黒斑
191	Y274	脚部 c か	-	*3.6	-	内面ユビオサエ/外面ナデか	やや粗	淡黄褐	接合 1 類か/シボリ痕あり
192	Y481	脚部 c/e	(8.1)	*2.9	1/12	内面ナデ/脚端部ヨコナデ/外面調整不明	密	橙褐	
193	Y20 10H-25	脚部 c	-	*6.8	-	内面ナデか/外面上半ハケ、下半ナデか(ミガキの可能性あり)	やや粗	黄褐	接合 3 類/シボリ痕あり/沈線 4 条/スカシ孔 6 個
194	Y288	脚部 c	-	*8.2	-	内面ナデ、ユビオサエ/外面ミガキか	粗	暗茶褐	接合 3 類か/シボリ痕あり/外面上半に黒斑
195	Y280	脚部 c	-	*5.1	-	内面ナデ、ユビオサエ/外面ミガキ	やや粗	橙褐	接合 3 類
196	Y276	脚部 c	-	*4.2	-	内外面とも調整不明	密	黒褐	接合 3 類/2 次焼成による炭化か
197	Y15 10H-11	脚部 c	-	*12.0	-	杯部外面ミガキ(幅広)/脚部外面ミガキ(単位不明瞭)/内面ユビオサエ、ナデか	密	黄褐	接合 3 類か/シボリ痕あり/スカシ孔 4 個/大きな砂粒がごく少量含まれる
198	Y23	脚部 c	(12.6)	*10.1	1/12強	脚端部ヨコナデ/脚部内面下半ナデ、上半ケズリのちナデ/外面ミガキ	密	淡灰褐	接合 1 類か/脚端部に刻み目
199	Y503	高杯脚部	(12.6)	*1.0	1/12	脚端部・内面ヨコナデ/外面ハケ、ユビオサエ	密	茶褐	内面にすず
200	Y522	高杯脚部	(12.4)	*1.5	2/12	脚端部ヨコナデ	密	灰褐	脚部内面にすず/脚端部に淡い黒斑

出土遺物観察表

201	Y568	高杯脚部	(13.5)	*1.6	2/12	内面ナデ/脚端部ヨコナデ/外面ミガキ	密	茶褐	
202	Y484	高杯脚部	(13.8)	*2.3	3/12	内外面ともナデ/脚端部ヨコナデ	密	灰褐	内外面に淡い黒斑/脚端部にすず
203	Y573	高杯脚部	(18.0)	*2.5	1/12	内面ナデ/外面ミガキか/脚端部ヨコナデ	密	灰褐	脚端部・内面にすず/485と同一個体か
204	Y506 Y814	脚部 b/d	—	*2.9	1/12	内面調整不明/外面ナデ、ハケ(ミガキの可能性もある)	やや粗	淡黄褐	
205	Y64 Y806 10H-27	脚部 b	(15.2)	*3.0	1/12強	内面調整不明/外面ミガキか	やや粗	橙褐	スカシ孔上下2段に計5個確認/脚裾部に擬凹線6条
206	Y198 Y645	脚部 d	(13.4)	*3.4	5/12	内外面調整不明(一部ナデ)/脚端部ヨコナデ	粗	淡黄褐	スカシ孔3個
207	Y27	脚部 d	(15.2)	*3.4	5/12	内外面とも調整不明	やや粗	暗茶褐	脚裾部屈曲部に刻み目
208	Y673	脚部 d	(16.7)	*5.5	1/12未	内面ハケ、ナデ、ユビオサエ/外面ハケ/脚端部ヨコナデ	密	黄灰	外面に刺突文/スカシ孔上段6個前後、下段8個前後
209	Y80	脚台	(4.3)	*3.3	1/12強	内外面ナデ/脚台ユビオサエ	やや粗	黄褐	
210	Y289	脚台	—	*2.7	—	脚台内面ナデ/接合部ユビオサエ/脚台外面ハケ	やや粗	淡茶褐	
211	Y491	手づくね土器	(2.3)	*1.9	12/12	内外面ともナデ	やや粗	黒灰	
212	Y489	手づくね土器か	—	*1.6	—	内面・底面ナデ/外面ユビオサエ、ナデ	密	灰褐	外面に黒斑
213	Y496	器台 A	27.7	*1.7	1/12未	内面調整不明/口縁帯ヨコナデ	密	橙褐	口縁帯に円形浮文/広口壺の可能性もある
214	Y70	器台 A	—	*2.1	—	口縁帯ヨコナデ	やや粗	淡黄褐	口縁帯に赤色顔料か
215	Y166	器台 A	22.0	*1.8	2/12	内面調整不明/外面ハケのちナデ/口縁帯ナデ	やや粗	淡茶褐	口縁部上面に綾杉文/口縁帯に擬凹線3条、円形浮文
216	Y510	器台 A	19.2	*1.3	1/12未	内面ヨコナデか/口縁帯ヨコナデ	密	橙褐	
217	Y76	器台 A	16.6	*1.1	1/12強	内面ミガキ/口縁帯ヨコナデ	密	橙褐	口縁帯に円形浮文/口縁帯下部に刻み目
218	Y567	器台 A	15.8	*1.5	1/12	内外面とも調整不明	密	橙褐	
219	Y160	器台	13.0	*1.5	3/12	口縁帯ナデか/内面ミガキか/外面ハケ	密	淡茶褐	口縁帯に波状文
220	Y815	器台か	—	*1.4	—	口縁帯ヨコナデ	やや粗	橙褐	口縁帯に擬凹線2条残存
221	Y14	器台 A	19.6	*1.9	2/12	内面ミガキ(単位不明瞭)/口縁帯ヨコナデ/外面ナデ	密	橙褐	口縁帯に円形浮文
222	Y82	器台 A	22.1	*1.8	2/12	内外面とも調整不明(ナデか)	やや粗	茶褐	広口壺の可能性もある
223	Y171	器台 A	18.0	*1.5	2/12	内面ナデ(ミガキか)/外面ナデ	やや粗	赤褐	口縁帯に竹管文(2個1組)
224	Y81	器台 A	21.4	*1.5	1/12未	外面ユビオサエ/内面調整不明	やや粗	橙褐	口縁帯・同上面に竹管文
225	Y72	器台 B	18.9	*1.9	2/12弱	内面ハケ/外面ナデ、ハケ	やや粗	黄褐	口縁端部に竹管文
226	Y24 10H-9	器台	(13.8)	*15.4	1/12	内面ユビオサエ、ナデ/外面ハケか(ミガキか)	粗	淡黄褐	スカシ孔上段3個、下段4個/沈線5条、下段6条/筒部完存
227	Y33 10H-19	器台	(23.0)	*13.9	4/12強	外面ミガキ/脚端部ヨコナデか/内面上半丁寧なナデ、下半ナデ	やや粗	淡黄褐	スカシ孔上段1個、下段2個/脚裾部外面に綾杉文
228	Y617	器台	—	*6.7	—	内面ナデ、ユビオサエ/外面調整不明	やや粗	赤褐	スカシ孔上段1個、下段2個/沈線7条
229	Y507	器台	—	*5.6	1/12強	内面ナデ、ユビオサエ/外面ハケ	やや粗	淡黄褐	スカシ孔上段2個、下段1個
230	Y504	器台脚部	(23.4)	*1.9	1/12	内面ヨコナデか/外面ハケのちナデ/脚端部ヨコナデ	やや粗	暗茶褐	

231	Y505	器台脚部	(21.2)	*4.2	2/12	内面ハケ、ナデ/外面ハケ/脚端部ヨコナデ	粗	黄褐	接合しない2片から復原/スカシ孔1個
232	Y26	ミチア土器	3.8	*5.7	4/12	内面ユビオサエ、ナデ/外面ナデ	密	黄褐	内面に赤色顔料か/外面に黒斑
233	Y275	手づくね土器か	(4.8)	*5.2	3/12弱	内面ナデ/外面上半調整不明、下半ナデ	やや粗	茶褐	
234	Y60 10H-23	注口土器	-	*2.8	2/12	注口部外面ナデまたはミガキ/頸部外面ハケ/体部内外面ナデ	密	橙褐/暗茶褐	注口部内面にシボリ痕
235	Y22 14I-12	鉢D	13.4	*11.3	6/12弱	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ	密	黄褐	外面に黒斑/外面2次焼成による被熱
236	Y850	鉢C	9.9	*2.5	2/12	体部内外面ナデ/口縁部ヨコナデ	やや粗	淡黄褐/黄褐	
237	Y863	鉢C	13.6	*6.6	4/12	口縁部ユビオサエ/体部内面ハケ、ナデ/体部外面ナデ	やや粗	淡黄褐	口縁部歪みあり
238	Y616	脚部dか	-	*1.9	-	内面ナデ/外面ヨコナデか	やや粗	淡黄褐	外面に刻み目
239	Y283	鉢B	15.4	*2.4	1/12未	口縁部外面・体部外面上半ヨコナデ/口縁部内面調整不明/体部内面ナデ	やや粗	橙褐/茶褐	口縁部外面にすず
240	Y282	無頸壺A	9.8	*7.5	2/12弱	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	橙褐	
241	Y194	体部片	-	*2.8	-	外面ハケのちナデか/内面ナデ	やや粗	淡茶褐	突帯の上に列点文
242	Y212	体部片	-	*3.9	-	外面ナデもしくはミガキ/内面ナデ	やや粗	暗茶褐	外面に波状文・沈線
243	Y35	壺肩部	-	*4.1	-	体部内面ユビオサエ、ナデ/頸部外面ヨコナデ/体部外面ナデ、ミガキ	やや粗	淡橙褐	外面に刺突文を2段/内外面に黒斑

8トレンチ 片山4号墳

244	Y71	甕A	23.2	*8.8	1/12	口縁部ヨコナデか/体部外面ハケ	やや粗	淡茶褐	
245	Y265	底部a	-	*2.0	-	外面ナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	明橙褐	内面に黒斑
246	Y264	脚部c	(9.8)	*9.3	2/12	内外面とも調整不明	粗	橙褐	接合しない2片から復原/接合3類/シボリ痕あり

第1次調査 包含層

247	Y4	直口壺	9.6	*6.1	5/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ/体部内面ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	8トレンチ出土/口縁部から肩部に黒斑
248	Y230	長頸壺	10.8	*6.2	1/12未	口縁部ヨコナデ/外面ハケのちナデか/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	9トレンチ出土/高杯脚部の可能性もある
249	Y826	甕A	16.5	*5.6	2/12弱	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ナデ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡茶褐	6トレンチ出土/残存率は頸部で計測/肩部に刺突文
250	Y8 10H-21	甕A	16.2	*9.7	4/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ/体部内面ハケのちナデ(一部ケズリのちナデか)	やや粗	黄褐	9トレンチ出土/肩部に刺突文(5つのみ)/外面に黒斑
251	Y818	甕A	14.0	*2.2	1/12未	外面ヨコナデ/内面調整不明	やや粗	淡茶褐	6トレンチ出土
252	Y657	甕A	13.8	*3.9	2/12	内外面とも調整不明	粗	淡黄褐	6トレンチ出土
253	Y51 10H-3	甕B	15.5	22.3	2/12	口縁部内外面ヨコナデか/体部外面タタキ/底面ナデ/体部内面粗いハケ、ナデ、ユビオサエ	やや粗	橙褐/灰褐	1トレンチ出土/体部内外面に黒斑/底部外面2次焼成による被熱
254	Y252	底部a	(3.6)	*2.7	12/12	外面ユビオサエか/底面ナデ/内面ナデか	やや粗	橙褐/灰褐	9トレンチ出土/外面2次焼成による被熱
255	Y291	底部a	(3.7)	*3.4	-	外面ナデ/内面ナデ	やや粗	黄褐	9トレンチ出土
256	Y250	底部a	(4.2)	*3.2	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	橙褐	7トレンチ出土
257	Y694	底部a	(5.0)	*2.9	12/12	内外面とも調整不明	粗	黄褐	6トレンチ出土
258	Y253	底部b	(6.2)	*2.8	1/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面ケズリのちナデ/内面調整不明(一部ナデ)	やや粗	暗茶褐	9トレンチ出土
259	Y670	底部b	(6.2)	*3.6	2/12	内外面とも調整不明	粗	橙褐	6トレンチ出土

260	Y251	底部 b	(5.4)	*2.8	—	外面ナデ、ユビオサエ/内面ナデ	やや粗	茶褐	9トレンチ出土
261	Y870	高杯B	19.8	*3.1	1/12未	口縁部外面ヨコナデ/口縁部内面調整不明/杯部内外面ミガキ	やや粗	淡茶褐	6トレンチ出土
262	Y245	高杯B	—	*2.4	1/12未	内外面ともミガキカ	密	茶褐	8トレンチ出土/外面に黒斑
263	Y531	高杯B	23.6	*2.0	1/12未	内外面ともヨコナデ	密	橙褐	9トレンチ出土
264	Y127 11L-11	高杯C	(8.6)	*9.6	9/12	杯部外面調整不明/脚部外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/杯部内面ナデか/脚部内面ナデ	やや粗	橙褐	6トレンチ出土/接合1類か/スカシ孔4個
265	Y5	脚部 c	—	*8.4	—	外面ミガキ/内面ナデ	密	灰褐	9トレンチ出土/接合3類/シボリ痕あり/沈線4条1組を5段
266	Y267	高杯接合	—	*3.8	12/12	杯部外面ナデ、ユビオサエ/杯部内面調整不明/脚部内外面ナデ	やや粗	灰褐	1トレンチ出土/残存率は結合部で計測/接合2類か/外面に黒斑
267	Y263	脚部 e	(11.6)	*2.6	—	外面ミガキ/脚端部内面ヨコナデ	密	橙褐	7トレンチ出土
268	Y77	器台B	19.0	*1.5	1.5/12	内面ミガキか/口縁部ヨコナデ/外面ミガキ	やや粗	橙褐	7トレンチ出土/口縁部下半に刻み目
269	Y671	脚部 c/e	(14.4)	*3.4	1/12	内面ナデ/脚端部ヨコナデ/外面ミガキ	やや粗	橙褐	1トレンチ出土/スカシ孔1個
270	Y62	脚台	(4.2)	*2.5	12/12	内面ハケ/外面ユビオサエ/底面ユビオサエのちナデ	やや粗	橙褐	7トレンチ出土

10トレンチ 竪穴式住居跡 S B69ほか

271	Y113	広口壺A	—	*2.3	小片	内面ミガキ/外面ユビオサエ、ナデ	やや粗	橙褐	口縁部に波状文・円形浮文(円形浮文は剥離)
272	Y106	広口壺C	—	*4.5	—	内面ナデ/外面ナデ、粗いハケ	やや粗	淡黄褐	口縁部に列点文
273	Y114	体部片	—	*2.2	—	内面ナデ/外面ナデ	密	橙褐	外面に波状文
274	Y849	甕か	14.0	*2.2	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	橙褐	
275	Y120	甕A	19.6	*10.3	1/12未	頸部内面ユビオサエ/体部内面ナデ/口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ	密	淡黄褐	肩部に列点文/外面にすず
276	Y842	甕A	16.1	*12.8	1/12未	口縁部内面調整不明/体部内面ユビオサエ、ナデ/口縁部外面ヨコナデ/頸部外面ナデ	やや粗	灰褐	体部外面最大径付近にすず/体部外面2次焼成による被熱
277	Y608	甕	26.3	*2.8	1/12強	内外面ユビオサエ(一部ヨコナデ)	やや粗	淡黄褐	
278	Y585	甕A	18.0	*3.4	2/12強	内面ヨコナデ/外面ユビオサエのちヨコナデ	やや粗	淡橙褐	口縁部外面にすず
279	Y601	甕A	17.2	*3.3	2/12	外面ヨコナデ/内面調整不明	やや粗	淡黄褐	口縁部外面にすず
280	Y652	鉢か	10.5	*1.3	1.5/12	体部内面ミガキか/口縁部ヨコナデ/体部外面ミガキ	やや粗	淡橙褐	
281	Y527	底部 c	(3.8)	*2.5	2/12	外面タタキのちナデ/底面・内面ナデ	密	黄褐	
282	Y878	底部 b	(4.2)	*2.5	3/12	外面ナデか/底面ナデ/内面ユビオサエ	やや粗	赤褐/淡橙褐	
283	Y93	底部 a	(3.9)	*3.1	12/12	外面ナデ/内面ハケかナデか	やや粗	淡茶褐	外面に淡い黒斑
284	Y597	底部 b	(5.5)	*2.2	2/12	外面ハケのちナデか/底面・内面ナデ	密	黒褐	内外面とも黒斑か
285	Y92	底部 b	(5.8)	*5.1	4/12	体部外面ハケ(一部ユビオサエ)/内面調整不明	密	淡黄褐	底面・内面に黒斑
286	Y533	底部 a	(6.1)	*3.0	4/12	外面ナデ/内面ハケ	やや粗	暗橙褐	内外面に黒斑/底面に溝状の凹みあり
287	Y96	底部 a	(5.8)	*8.6	12/12	体部内外面ナデ、ユビオサエ/底面ケズリのちユビオサエ、ナデ	やや粗	黄褐/暗黄褐	全体に歪んでいる
288	Y615	高杯A	22.8	*3.0	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ/杯部内外面ミガキ(単位不明瞭)	密	黄褐/淡黄褐	

289	Y578	高杯	—	*2.7	6/12	内外面ともミガキ(単位不明瞭)	やや粗	黄橙	
290	Y644	脚部 c	—	*11.4	—	外面ミガキか(上半ユビオサエ)/内面調整不明(下半ナデか)	やや粗	橙褐	接合1類か/スカシ孔3個
291	Y87 11L-18	脚部 e	(8.6)	*4.8	12/12	外面ハケ/脚端部ヨコナデか/内面ナデ	やや粗	茶褐	接合1類か/シボリ痕あり
292	Y110	脚部 b	(19.4)	*2.7	1/12強	外面ヨコナデ/内面ハケのちナデ	密	淡黄褐	スカシ孔1個/脚端部に擬凹線3条/脚裾部に刻み目
293	Y117 11L-10	脚部 d	(16.2)	*10.0	3/12	脚部外面ハケのちミガキ/脚裾部外面ハケのちナデ/脚部内面ハケのちナデ/脚裾部内面ハケ/脚端部ヨコナデか	やや粗	淡黄褐/黄褐	接合3類/スカシ孔3個
294	Y638	器台	(18.0)	*5.5	2/12弱	外面ユビオサエ、ハケ/脚端部ヨコナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡橙褐	
295	Y654	器台か	—	*5.2	—	外面ミガキか/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	黄褐/淡黄褐	シボリ痕あり/スカシ孔2個
296	Y115 Y118 Y123	器台	—	*6.8	—	内外面ともナデか	密	淡黄褐	接合しない破片から復原/スカシ孔計4個

10トレンチ 竪穴式住居跡 S B68

297	Y699	広口壺 B	13.4	*3.4	1/12	内外面とも調整不明(外面ナデか)	やや粗	橙褐	
-----	------	-------	------	------	------	------------------	-----	----	--

10トレンチ 竪穴式住居跡 S B79

298	Y119	甕頭部か	—	—	—	外面ナデ/内面上半ヨコナデ、下半調整不明	やや粗	淡茶褐	
299	Y94 11L-12	高杯 C	11.8 (5.2)	9.1	1.5/12	口縁端部ヨコナデ/杯部内外面ナデ/脚部外面ナデ(ミガキか)/脚端部ヨコナデ/脚部内面ユビオサエのちナデ	密	黄褐	接合3類/杯部外面に黒斑/脚部は完存

10トレンチ 土坑 S K73

300	Y116	甕 C	13.8	*9.1	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ/体部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	黄褐	外面下半にすず
301	Y873	壺肩部	—	—	—	外面ナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡黄褐	外面に波状文・直線文/外面に化粧土か
302	Y121	鉢 B	15.0	*2.8	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ユビオサエ、ナデ/体部内面ケズリか	やや粗	灰褐	
303	Y582	底部 b	(3.4)	*2.4	5/12	内外面・底面ナデ	やや粗	黒灰	内外面とも部分的に黒斑
304	Y594	底部 a	(5.0)	*3.5	9/12	内外面ともナデ	やや粗	淡橙褐	外面に黒斑
305	Y696	底部 b	(6.0)	*2.6	9/12	外面ハケ/底面・内面ナデ	粗	明橙褐	
306	Y95 11L-19	脚部 c	—	*6.2	—	外面ミガキ(先行してハケか)/内面ナデ	やや粗	橙褐	接合3類/沈線5条/スカシ孔上段7個、下段9個
307	Y811	器台 A	19.6	*1.5	2/12	口縁帯ヨコナデか	やや粗	赤褐	口縁帯に擬凹線4条/外面に黒斑

12トレンチ 竪穴式住居跡 S B75

308	Y626	広口壺 A	16.4	*6.4	3/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部内外面ハケ	密	黄灰	
309	Y89	甕 A	14.8	*3.8	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ナデか/体部内面ケズリか	やや粗	暗茶褐	口縁端部に列点文/肩部に列点文/口縁部外面にすず
310	Y625	高杯 A	20.0	*2.5	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	
311	Y635	高杯杯部	—	*1.7	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	
312	Y136	脚部 c	—	*7.9	—	外面ハケ/内面ナデか	やや粗	淡黄褐	接合1類/シボリ痕なし/沈線2条/スカシ孔3個
313	Y88 11L-17	脚部 c/e	(10.7)	*8.2	1/12未	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐	接合1類/スカシ孔3個/シボリ痕なし
314	Y99	脚部 b/d	(9.2)	*3.2	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	茶褐	脚部に列点文状の文様

出土遺物観察表

315	Y91	器台脚部	(14.4)	*9.3	3/12	外面上半ミガキ、下半ハケ／脚端部ヨコナデ／内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	暗茶褐	スカシ孔上段2個、下段2個／脚端部に黒斑
-----	-----	------	--------	------	------	---------------------------------	-----	-----	----------------------

12トレンチ 竪穴式住居跡S B76

316	Y622	広口壺E	15.9	*1.4	—	口縁帯ヨコナデ／口縁部内外面ナデ	やや粗	黄褐	口縁部に擬凹線2条／口縁部に赤色顔料
317	Y621	壺肩部	—	*4.5	—	頸部外面ヨコナデ／頸部内面ナデ／体部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	黄褐	
318	Y628	壺頸部	—	*5.5	—	口縁部・体部外面丁寧なナデ／口縁部内面ナデ／体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡橙褐	
319	Y660	体部片	—	—	—	外面ミガキか／内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡橙褐	外面に波状文・直線文
320	Y124	体部片	—	—	—	外面ハケのちナデ／内面ナデ	やや粗	淡橙褐	
321	Y125	体部片	—	—	—	外面ハケのちナデ／内面ナデ	やや粗	淡橙褐	
322	Y623	甕A	16.7	*3.2	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	淡黄褐	口縁部外面にすず
323	Y748	甕A	18.8	*4.2	2/12	口縁部内外面ヨコナデ／体部内外面ハケ	やや粗	灰褐	残存率は頸部で計測
324	Y885	甕C	11.5	*2.3	2/12	内外面とも調整不明(口縁部内面ユビオサエ)	やや粗	淡橙褐	頸部外面にすず
325	Y631	底部b	(6.8)	*3.7	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	外面2次焼成による被熱か／底面に黒斑
326	Y98	底部b	(5.7)	*3.1	3/12	外面ナデ／内面ハケ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	
327	Y883	底部b	(5.4)	*1.2	4/12	内面調整不明／外面ナデか	やや粗	橙褐	内外面に黒斑
328	Y650	底部a	(4.0)	*2.3	12/12	内外面ともナデ	やや粗	淡茶褐	
329	Y593	底部	(3.0)	*4.1	12/12	内外面ともナデ	やや粗	淡黄茶	
330	Y97 Y624 11L-13	甕E	16.4	*8.3	1/12強	口縁部内外面ヨコナデ／体部内外面ハケ	密	橙褐	体部外面上半から頸部にかけてすず
331	Y1205	鉢か	15.3	*2.1	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	黄褐	外面に黒斑
332	Y1210	器台A	11.2	*1.6	1/12	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	広口壺Dの可能性あり
333	Y103	高杯脚部	(14.8)	*1.4	1/12	内外面ヨコナデか	やや粗	淡橙褐	脚端部に刻み目、脚部外面に列点文2列
334	Y886 Y1350	高杯E	21.1	*1.9	1.5/12	内外面とも調整不明(ナデか)	やや粗	橙褐	
335	Y630	高杯B	21.6	*2.1	1/12	口縁部調整不明／外面ナデ(ミガキか)／内面調整不明	やや粗	橙褐	
336	Y1203	高杯B	22.0	*2.1	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	
337	Y884	高杯A	24.5	*3.6	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ／杯部外面ミガキ／杯底部内面ナデまたはミガキか	やや粗	橙褐	
338	Y434	脚部b/d	(19.2)	*4.8	1/12	脚部外面ナデ／脚部内面上半ハケのちナデ、下半ナデ／脚端部ヨコナデ	やや粗	橙褐	スカシ孔2個／脚部中位に黒斑
339	Y101	高杯接合	—	*6.2	—	杯部内面調整不明／杯部・脚部外面ミガキ／脚部内面ユビオサエ	やや粗	橙褐	接合3類／実測部ほぼ完形
340	Y100	高杯接合	—	*6.4	—	杯部外面ハケのちミガキ／脚部外面ハケ／脚部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	橙褐	接合3類／スカシ孔1個／実測部ほぼ完形
341	Y629	高杯接合	—	*4.7	—	杯部・脚部外面ナデ(ミガキか)／脚部内面ナデ	密	黒灰	接合3類／沈線5条／実測部ほぼ完形／外面に黒斑か
342	Y882	脚部a/b	—	*6.7	6/12	外面ミガキか(上部にハケらしき痕)／内面ナデ	やや粗	赤褐	接合1類／残存率は脚部で計測

12トレンチ 土坑S K77

343	Y827	肩部	—	—	—	外面板ナデ／内面ナデ、粗いハケ	密	灰褐	肩部に刺突文
-----	------	----	---	---	---	-----------------	---	----	--------

12トレンチ 溝 S D74

344	Y840	甕A	13.0	*2.2	2/12弱	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	
-----	------	----	------	------	-------	-----------	-----	-----	--

11トレンチ 竪穴式住居跡 S B60

345	Y521	甕体部	—	*11.8	9/12	頸部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ、ナデ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	残存率は体部で計測/外面に黒斑
346	Y661	体部片	—	—	—	外面ハケのちナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡橙褐	外面に直線文・波状文
347	Y524	底部 b	(5.2)	*5.9	4/12	外面ハケのちナデか/内面ナデ	やや粗	橙褐	
348	Y877	底部 b	(5.1)	*1.5	12/12	外面ユビオサエ/底面ナデ	やや粗	赤褐	底部外面2次焼成による被熱、劣化/内面に黒斑
349	Y525	底部 b	(4.6)	*3.0	4/12	内外面ともナデ	密	灰褐	底部の破断面は接合面
350	Y581	底部 b	(4.1)	*3.3	6/12	外面上半ナデ、下半ユビオサエ/底面ナデ/内面ナデ	密	灰褐	外面に黒斑
351	Y640	脚部 e	(9.6)	*2.5	1/12強	外面ハケ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	橙褐	

11トレンチ 竪穴式住居跡 S B71

352	Y858	不明	—	—	—	口縁端部ヨコナデ/外面ハケのちナデ/内面ナデ	やや粗	淡茶褐	外面に黒斑
353	Y112	底部 b	(3.8)	*3.4	12/12	内外面ともユビオサエ、ナデ	やや粗	橙褐	
354	Y104 11L-16	底部 b	(3.5)	*6.3	12/12	内外面ともユビオサエのちナデ	やや粗	橙褐	器形が歪む/内面に黒斑
355	Y866	高杯杯部	—	—	—	内外面とも調整不明(外面ハケか)	やや粗	淡茶褐	外面に黒斑
356	Y122 11L-8	器台 A	19.8 (17.8)	15.3	3/12	外面ミガキ/内面調整不明(中位ナデ)	密	淡黄褐	本文参照

11トレンチ 竪穴式住居跡 S B61

357	Y683	甕C	12.6	*7.1	3.5/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	暗灰褐	口縁部に歪みあり/体部外面中央に黒斑
358	Y102	底部 c	(4.9)	*3.0	12/12	外面タタキ/底面ナデ/内面ハケ、ナデ	密	灰褐	底部2次焼成による被熱
359	Y643	底部 a	(7.0)	*3.9	5/12	内外面ナデ、ユビオサエ/底面調整不明	粗	茶褐	底面の剥離は2次焼成によるか/内面に黒斑
360	Y833	底部	—	*3.5	2/12	内外面ともナデか	やや粗	暗茶褐	内面に黒斑か
361	Y105	甕体部	(6.0)	*13.6	12/12	内外面ともナデ、ユビオサエ/底面ナデ	やや粗	淡黄褐	内面に黒斑
362	Y535	脚部 e	(6.2)	*3.9	5/12	外面調整不明(ナデか)/脚端部ヨコナデ/内面ユビオサエ	密	黒灰	シボリ痕あり/内面に黒斑
363	Y526	器台 A	16.3	*1.6	2/12	口縁帯内外面ともナデ	密	茶褐	口縁帯に2個1組の竹管文(1単位分のみ確認)

11トレンチ 段状遺構 S X70

364	Y111	器台 A	20.0	*2.0	1/12	口縁帯ヨコナデ/口縁部内外面ミガキ	密	黄灰	口縁帯に円形浮文/口縁部下垂部剥離
-----	------	------	------	------	------	-------------------	---	----	-------------------

13トレンチ 竪穴式住居跡 S B121

365	Y674	甕	—	*3.3	—	内外面ともナデ/頸部内面ユビオサエ	やや粗	暗橙褐/茶褐	頸部外面にすず
366	Y829	脚台か	—	*2.0	—	外面ナデ、ユビオサエ/内面調整不明	やや粗	淡橙褐	
367	Y143 11L-20	ミチュア土器	5.6 (3.2)	5.0	12/12	内外面ともユビオサエ、ナデ	やや粗	黄褐/淡黄褐	
368	Y137 11L-21	ミチュア土器	—	*5.4	12/12	頸部外面ヨコナデか/体部外面ナデ、ユビオサエ/体部内面ナデ	密	黄褐	

出土遺物観察表

13トレンチ 竪穴式住居跡 S B 140

369	Y678	底部 c	(3.7)	*1.9	2/12	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	
370	Y187	長頸壺	14.7	*6.2	3/12強	口縁部突帯ヨコナデ/口縁部内外面ミガキ	密	茶褐	口縁突帯上面に竹管文

13トレンチ 竪穴式住居跡 S B 123

371	Y852	甕	24.2	*2.0	1/12	口縁部内外面ナデ	やや粗	橙褐	
372	Y167	底部 a	(4.7)	*5.1	11/12	外面上半ナデ、下半ユビオサエ/底面粗いナデ/内面ナデ	粗	黒褐	外面に黒斑
373	Y605	底部 c	(5.5)	*2.3	12/12	内外面ともナデ	粗	茶褐	
374	Y868	高杯接合	-	-	-	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	接合 1 類

13トレンチ 竪穴式住居跡 S B 122

375	Y658	底部 b	(3.7)	*1.9	4/12	内外面ナデ、ユビオサエ/底面ナデ	やや粗	黒褐	内外面とも全面に黒斑/底面にもみの圧痕か
-----	------	------	-------	------	------	------------------	-----	----	----------------------

13トレンチ 竪穴式住居跡 S B 124

376	Y675	器台筒部	-	*7.1	-	外面ミガキ/内面ナデ	密	灰褐	沈線上段 7 条、下段 6 条以上
377	Y634	広口壺 A	19.5	*6.1	1/12未	内外面とも調整不明	粗	橙褐	
378	Y139 11L-4	広口壺	-	*15.0	-	頸部外面ハケのちナデ/頸部突帯ヨコナデ/頸部内面・体部内外面調整不明	やや粗	淡茶褐	

13トレンチ 段状遺構 S X 126

379	Y185	広口壺 A	20.6	*1.4	1/12	内外面ともナデ	密	黄褐	
380	Y177 Y576	広口壺 A	20.1	*3.0	1/12強	内外面ともナデか	粗	橙褐	
381	Y604	広口壺 A	14.2	*2.1	1/13強	内面調整不明/口縁部ヨコナデ	やや粗	橙褐	広口壺 D の可能性あり
382	Y556	広口壺 A	17.4	*2.0	2/12	口縁部ヨコナデか/内面上半ヨコナデか、下半ナデか	やや粗	黄褐	
383	Y651	広口壺 A	16.3	*2.2	1/12	内外面とも調整不明	やや粗	黄褐	
384	Y183	広口壺 A	17.1	*1.5	1/12強	内外面ともヨコナデ	やや粗	黄褐	口縁部に刺突文(上下 2 段)
385	Y158	広口壺 D	12.9	*4.6	4/12	口縁部ヨコナデ/頸部外面ユビオサエのちナデ/頸部内面ナデ	やや粗	黄褐	口縁部に円形浮文
386	Y172	広口壺 A	16.7	*4.7	3/12	口縁部ヨコナデ/頸部外面調整不明(下半ハケか)/頸部内面上半ナデ、下半ユビオサエのちナデ	やや粗	淡茶褐	
387	Y156 11L-5	広口壺 A	23.0	*12.9	6/12	口縁部ヨコナデ/頸部・体部外面ハケ/頸部内面ハケ/体部内面ナデ	やや粗	黄褐	
388	Y148	壺頸部	-	*6.4	-	頸部・体部外面ナデ/突帯ヨコナデ/体部内面ユビオサエのちナデ	やや粗	橙褐	
389	Y871	壺頸部	-	*6.2	-	頸部内外面・体部内面調整不明/体部外面ハケ	やや粗	淡茶褐	頸部に沈線 4 条、肩部に波状文・沈線 4 条
390	Y682	短頸壺か	12.6	*2.6	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	
391	Y642	壺頸部	-	*5.1	-	内面調整不明/外面ミガキか	やや粗	淡橙褐	外面に黒斑
392	Y848	壺か	12.8	*2.6	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	淡橙褐	
393	Y176	甕 A	20.0	*3.1	1/12強	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	淡茶褐	口縁部外面にすず(少量)
394	Y186	甕 A	14.0	*2.7	1.5/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ナデか/体部内面ナデまたはケズリか	やや粗	橙褐	
395	Y192	甕	13.4	*2.7	1.5/12	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	暗茶褐	外面に若干すず
396	Y856	甕 D か	-	*1.5	-	口縁部内外面ヨコナデ(またはナデ)	やや粗	黄褐	
397	Y168	底部 a	(7.2)	*3.4	12/12	内外面ナデ、ユビオサエ(一部タタキか)/底面ナデ	粗	茶褐	内面にすず

398	Y691	底部 b	(7.0)	*2.5	3/12	外面ナデ/内面調整不明	密	淡黄褐	
399	Y205	底部 b	(5.0)	*2.6	6/12	外面ナデ/底面ユビオサエ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	ドーナツ底状を呈する
400	Y861	底部 c	(5.0)	*3.3	1/12強	内外面ともナデ、ユビオサエ	やや粗	黄灰	外面に黒斑
401	Y692	底部 a	(6.0)	*4.1	2/12	内外面ともナデ、ユビオサエ	密	灰褐	ユビオサエを2段に施す
402	Y828	底部 b	(5.4)	*3.0	2/12強	外面ナデ、ユビオサエ(一部タタキカ)/内面ナデか	やや粗	茶褐	
403	Y190	高杯 A	22.2	*3.0	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	
404	Y209	高杯 B	23.2	*2.5	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	灰褐	
405	Y191	高杯 B	22.5	*4.6	2/12強	口縁部ヨコナデ/杯部外面ミガキか/杯部内面ミガキ	やや粗	淡黄褐	残存率は杯部屈曲部で計測
406	Y211	脚部 a/b	—	*7.3	—	内外面ナデ(内面未調整か)	やや粗	黄橙	接合1類
407	Y859	脚部 c	—	*4.8	1/12	外面ミガキ/内面ユビオサエ	密	橙褐	接合1または2類
408	Y193	脚部 c	—	*4.0	—	外面調整不明/内面ナデか	密	淡黄褐	接合3類/シボリ痕あり
409	Y860	高杯脚部	(10.0)	*1.3	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	橙褐	
410	Y569	高杯脚部	(10.6)	*2.1	1/12	内外面ナデ/脚端部ヨコナデ	密	黄褐	外面に黒斑
411	Y844	高杯脚部	(11.4)	*3.2	2/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	茶褐	外面2次焼成による被熱か
412	Y862	器台か	11.6	*1.3	1/12強	内外面とも調整不明	密	橙褐	
413	Y182	器台 A	18.4	*2.0	1/12強	口縁部ヨコナデか/口縁部内面ミガキ	やや粗	橙褐	口縁部に擬凹線5条(最下段途中で消失)、円形浮文
414	Y150	器台 A	21.6	*1.7	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	黒灰	
415	Y206 Y803 Y802	器台	(15.7)	13.0 (復原)	1/12未	筒部内外面ナデ/脚端部ヨコナデ	やや粗	黒灰	接合しない3片から復原/スカシ孔2片で計2個

13トレンチ 土坑 S K 113

416	Y684	甕 A	16.4	*12.0	5/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡橙褐	肩部に刺突文/体部外面にすず
417	Y845	甕か	13.9	*2.9	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部外面ハケ、ナデ/頸部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	外面に黒斑/焼け歪みあり

13トレンチ 柱穴 S P 133

418	Y558	底部 c	(4.2)	*4.5	3/12	内外面ともナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	内面に黒斑
-----	------	------	-------	------	------	---------------	-----	-----	-------

13トレンチ 片山 5号墳

419	Y149	甕 A	17.7	*7.0	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面調整不明/体部内面ユビオサエ、ナデ	粗	淡黄褐	体部外面中位にヘラ状工具による傷
420	Y240	底部 b	(6.2)	*4.6	10/12	外面上半ナデまたはミガキか/外面下半・底面・内面ナデ、ユビオサエ	粗	黄褐	内面に黒斑
421	Y257	底部 b	(3.8)	*2.5	12/12	内外面ともナデ、ユビオサエ/底面ナデ	密	淡黄褐	
422	Y668	底部 b	(4.8)	*3.3	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/内面ナデ	密	灰褐	
423	Y248	底部 a	(2.1)	*2.5	7/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面ナデ	やや粗	暗灰	底端部は指でつまむためいびつな形状を呈する
424	Y266	高杯接合	—	*4.7	3/12	杯部・脚部外面ミガキ/杯部内面ミガキ	やや粗	橙褐	接合1類/残存率は接合部で計測
425	Y596	脚部 c	—	*6.6	—	外面ミガキ/内面ナデ	密	橙褐	接合1類か/シボリ痕あり

13トレンチ 崖状遺構 S X 53

426	Y147	甕 A	15.6	*3.6	1/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ナデか/体部内面ユビオサエ	やや粗	灰褐	肩部に刺突文
427	Y175 Y557	甕	10.8	*4.0	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ナデ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	

出土遺物観察表

428	Y822	広口壺D	11.2	*1.4	1/12	内外面ともヨコナデ	密	茶褐	
429	Y155	広口壺A	20.4	*2.5	2/12弱	内外面ともナデまたはミガキ	やや粗	黄褐	口縁帯に竹管文
430	Y179	広口壺D	14.0	*3.2	2.5/12	口縁帯ヨコナデ/口縁部外面ナデ/口縁部内面上半ヨコナデ、下半ナデ	やや粗	淡茶褐	口縁帯に擬凹線を7ないし8条
431	Y204	直口壺か	10.8	*4.0	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部外面ハケ	やや粗	茶褐	
432	Y669	底部b	(4.8)	*3.3	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	密	茶褐	外面に黒斑
433	Y199	鉢C	12.8	*4.2	2/12弱	内外面ともヨコナデか/口縁部内面ユビオサエ	やや粗	黄灰/淡橙褐	
434	Y153	脚部e	(9.0)	*8.2	1/12	脚部外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/脚部内面ユビオサエ、ナデ	粗	茶褐	接合3類/シボリ痕なし
435	Y154	器台A	20.6	*1.6	3.5/12	口縁帯ヨコナデ/口縁部外面ナデ/内面調整不明	やや粗	淡茶褐	口縁帯に沈線2条、円形浮文(大半が剥離)
436	Y810	器台筒部	-	*4.3	-	外面調整不明/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐	沈線上段6条、下段1条以上/スカシ孔1個

第2次調査 包含層(備考欄:トレンチ名の記載のないものは13トレンチ出土)

437	Y847	広口壺B	15.0	*1.8	1/12	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	
438	Y517 Y656 Y566	広口壺A	18.5	*1.8	2/12	外面ヨコナデ/内面調整不明	やや粗	淡橙褐	
439	Y574	広口壺A	18.0	*2.6	1/12	外面ミガキか/口縁帯ヨコナデ/内面ナデ	粗	橙褐	口縁部内外面にすず
440	Y151	広口壺A	20.4	*5.1	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	口縁帯に円形浮文
441	Y839	広口壺C	-	*2.3	-	内外面ともヨコナデか	やや粗	黄褐	口縁部に列点文か
442	Y189	壺頸部	-	*4.5	4/12	頸部外面ハケ/体部外面調整不明/頸部内面・体部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	茶褐	残存率は頸部で計測/肩部外面に櫛状文・波状文/内面に黒斑
443	Y188	壺頸部	-	*1.5	2/12	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	残存率は頸部で計測/突帯に竹管文2段/肩部に沈線4条以上
444	Y649	壺頸部	-	*4.6	-	内外面とも調整不明	粗	黄褐	
445	Y632	壺頸部	-	*6.6	-	内外面とも調整不明	粗	橙褐	11トレンチ出土
446	Y864	甕A	14.8	*2.4	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	
447	Y823	甕	15.0	*1.7	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	淡黄褐	12トレンチ出土/外面にすず/外面に淡い黒斑
448	Y808	甕A	20.0	*3.1	1/12未	口縁部外面ヨコナデ/体部内外面ナデ/口縁部内面調整不明	やや粗	淡橙褐	外面にすず
449	Y586	甕A	11.0	*5.1	1/12未	口縁部ナデか/外面調整不明(ナデか)/内面ナデ	やや粗	黄褐	
450	Y841	甕	15.4	*2.1	1/12	口縁部・口縁部内面ヨコナデ/口縁部外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐	外面にすず付着
451	Y819	甕A	16.4	*2.2	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	橙褐	12トレンチ出土
452	Y851	甕A	15.0	*2.4	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	淡黄褐	11トレンチ出土
453	Y181	甕	20.0	*3.4	1/12未	口縁部ナデ/口縁部外面ハケ(一部ハケのちナデ)/内面ハケ、ナデ	やや粗	橙褐	
454	Y108	甕C	11.6	*4.8	4/12	外面ナデ、ユビオサエ/内面調整不明	密	淡黄褐	10トレンチ出土
455	Y109	甕	21.0	*6.0	1/12強	口縁部内外面やや強めのヨコナデ/体部内面ナデ	密	淡黄褐	10トレンチ出土/口縁部に刻み目
456	Y107	無頸壺C	-	*5.6	1/12	外面調整不明/内面上半少し強めのナデ/内面下半ナデか	粗	橙褐色	10トレンチ出土/残存率は体部屈曲部で計測
457	Y132 11L-15	鉢E	12.4	12.1	5/12	口縁部ヨコナデ/体部外面上半ハケ、下半ナデ/底部外面ナデ、ユビオサエ/体部内面ハケ、ユビオサエ	粗	灰褐	突帯下にすずらしきもの付着/突帯付近・内面に黒斑

458	Y145	底部 c	(5.0)	*5.1	12/12	体部外面ケズリ/底部外面ユビオサエ/ 底面ナデ/体部内面ハケのちナデ	やや粗	橙褐/淡 茶褐	底部外面の接合痕は螺旋状 に回っているようにみえる
459	Y499	底部 b	(6.0)	*4.6	12/12	内外面ともナデ	やや粗	灰褐/淡 黄褐	12トレンチ出土/底面に凹 み/外面に黒斑
460	Y595	底部 b	(6.0)	*3.1	3/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面ナデ/内面 ナデ、ハケ	粗	橙褐	外面に黒斑
461	Y500	底部 c	(6.4)	*3.3	2/12	外面調整不明/内面ナデか	粗	灰褐	内面に黒斑
462	Y648	底部 c	(5.5)	*1.6	12/12	外面ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	灰褐	底部2次焼成による被熱
463	Y560	底部 c	(6.1)	*2.5	4/12	外面ユビオサエ、ナデ/内面ナデ	密	淡橙褐	12トレンチ出土
464	Y561	底部 b	(5.6)	*3.5	3/12強	外面ナデ/内面調整不明	やや粗	灰褐	内外面に黒斑
465	Y144	底部 a	(4.3)	*3.0	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/内面ナデ	やや粗	橙褐	内外面に黒斑
466	Y695	底部 b	(3.5)	*2.1	12/12	外面ナデ(ケズリか)/底面・内面ナデ	やや粗	淡茶褐	外面に黒斑
467	Y518	底部 c	(4.0)	*2.4	4/12	内外面ともナデ	やや粗	赤褐	外面2次焼成による被熱
468	Y502	底部 b	(2.7)	*3.4	12/12	内外面ともナデ	密	灰褐	
469	Y659	底部 b	(4.4)	*2.0	4/12	外面ユビオサエ/底面ナデ/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	11トレンチ出土/内面に黒 斑
470	Y519	底部 c	(3.5)	*2.3	12/12	内外面ともナデか	やや粗	淡黄褐	外面2次焼成による被熱
471	Y627	底部 b	(4.3)	*3.2	6/12	内外面ともナデ	やや粗	灰褐	12トレンチ出土/外面にす すか/底面にヘラ状工具に よる沈線1条
472	Y501	底部 b	(7.1)	*5.6	5/12	外面ミガキか/底面ナデ/内面ハケ	やや粗	黄褐	内面に黒斑
473	Y215	高杯A	17.4	*4.2	1/12	口縁端部ヨコナデ/杯部内外面ミガキ/ 屈曲部ヨコナデ	密	淡橙褐	
474	Y676	高杯杯部	—	*2.0	—	口縁部内外面ヨコナデ/杯部内外面ハケ	やや粗	茶褐	内面に黒斑か
475	Y607	高杯杯部	—	*3.0	1/12未	内外面ともミガキ	密	淡黄褐	
476	Y216	高杯B	27.0	*2.6	1/12未	口縁端部ヨコナデ/口縁部・杯部内外面 ミガキ	密	淡黄褐	
477	Y592	高杯B	26.0	*2.8	1/12強	内外面とも調整不明(杯部外面ミガキか)	やや粗	橙褐/淡 橙褐	外面に化粧土
478	Y606	高杯接合	—	*3.8	12/12	接合部外面ミガキまたはハケ/脚部外面 調整不明/脚部内面ナデ	やや粗	赤褐	10トレンチ出土/接合3類 か/残存率は接合部で計測
479	Y577	高杯脚部	—	*4.1	6/12	脚部外面ミガキか/脚部内面ナデ	やや粗	橙褐	接合2類
480	Y512	脚部 c	—	*4.8	6/12	外面調整不明(ナデか)/内面ナデ	やや粗	橙褐	残存率は接合部で計測/接 合3類
481	Y513	脚部 c	—	*6.2	—	外面調整不明/内面ナデか	やや粗	淡茶褐	接合3類/沈線3条
482	Y838	脚部 a/b	—	*8.6	—	外面ミガキ/脚部内面上半ハケ、ナデ、 下半ケズリ	やや粗	橙褐	
483	Y133	脚部 c	—	*10.5	—	外面ミガキか/内面ナデ	やや粗	橙褐	接合3類か/スカシ孔2個 /脚部外面に黒斑
484	Y681	高杯脚部	(14.0)	*2.0	1/12未	内外面ともヨコナデ	密	橙褐	
485	Y570	高杯脚部	(13.1)	*1.1	1/12	外面ヨコナデ/内面上半ナデ、下半ヨコ ナデ	密	黒灰	内面にすす
486	Y687	脚部 b/d	(16.0)	*2.5	1/12未	内外面ともヨコナデか	密	淡黄褐	
487	Y134 11L-9	脚部 b	(11.0)	*4.2	1/12	内外面ともヨコナデか	密	橙褐	
488	Y146	脚部 a	(17.3)	*4.9	3/12	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ユビ オサエ、粗いハケ、ナデ	密	淡黄褐	内外面ともすす
489	Y579	器台脚部	(16.9)	*2.4	1/12強	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	密	黒褐	外面に黒斑

出土遺物観察表

490	Y685	器台A	21.6	*1.8	1/12未	内外面とも調整不明(口縁帯ヨコナデか)	粗	橙褐	口縁帯に円形浮文(2個確認)
491	Y152	器台A	31.8	*1.4	1/12強	口縁部内面ケズリか/口縁帯ヨコナデ/口縁部外面ミガキか	やや粗	茶褐	口縁帯に竹管文
492	Y529	器台A	20.8	*2.1	1/12	口縁部内外面調整不明	やや粗	橙褐	口縁部内面(上面)に波状文
493	Y142	器台A	—	*3.5	—	口縁部内面ミガキ/口縁帯ヨコナデ/口縁部外面ハケ	やや粗	灰褐	本文参照
494	Y664	手づくね土器	(1.3)	*1.2	12/12	底部外面ユビオサエ、ナデ/底部内面ナデ	やや粗	淡黄褐	11トレンチ出土/外面一部に黒斑
495	Y663	不明	—	—	—	内外面ともヨコナデ	密	橙褐	上面に波状文
496	Y515	小型壺か	—	*4.3	3/12	体部内外面ともナデ	密	暗茶褐	残存率は体部で計測

15・16トレンチ 分岐点付近

497	Y747	甕	13.0	*7.4	4.5/12	口縁部内外面ヨコナデ、ユビオサエ/体部内外面ナデ	やや粗	淡橙褐	体部外面にすず/口縁部の歪み大きい
498	Y740	甕	—	*5.6	2/12弱	口縁部内外面ヨコナデ/体部内面ナデ、ユビオサエ/体部外面ナデ	やや粗	黄褐	残存率は頸部で計測
499	Y749	甕	—	*7.8	1.5/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内面ユビオサエ、ナデ/体部外面ハケ	密	黄褐	残存率は頸部で計測
500	Y762	甕	14.8	*8.3	2.5/12	口縁部内外面ヨコナデか/体部内面ナデ、ユビオサエ/体部外面ハケ	粗	淡茶褐	残存率は頸部で計測/体部外面にすず
501	Y739	広口壺か	32.6	*4.0	1.5/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内面ナデ/口縁部外面ハケのちナデ	やや粗	灰褐	類似した個体に524がある

16トレンチ 土器供献遺構 S X05

502	Y305 12E-2	短頸壺	12.7 (5.3)	29.5	ほぼ 完存	口縁部・口縁部内面ヨコナデ/口縁部外面ミガキか/体部上半ミガキ、下半調整不明/底部外面ナデ/肩部内面ナデ、ユビオサエ/体部内面ハケ/底部内面調整不明	やや粗	黄褐	体部外面に黒斑
503	Y333 12E-1	広口壺A	15.6 (5.8)	30.0	ほぼ 完存	口縁部ヨコナデ/頸部外面・体部外面ミガキ/底部外面ナデ/口縁部・体部内面調整不明(肩部にユビオサエ)	やや粗	橙褐	口縁帯に円形浮文/頸部直下に刺突文
504	Y306 12E-5	甕A	15.8 (5.0)	22.5	ほぼ 完存	口縁部・口縁部外面ヨコナデ/体部外面ハケのちナデ/底部外面ナデ/口縁部内面ハケのちヨコナデ/肩部内面ナデ/体部内面ハケ	やや粗	橙褐/淡 橙褐	口縁部・体部外面にすず
505	Y307 12E-3	甕A	16.2 (5.4)	25.3	ほぼ 完存	口縁部・口縁部外面ヨコナデ/体部外面ハケのちナデ/底部外面ナデ、ユビオサエ/口縁部内面ハケのちナデ/肩部内面ナデ/体部内面ハケ	やや粗	橙褐/淡 橙褐	口縁部・体部外面にすず
506	Y334 12E-6	高杯B	29.6 (15.5)	21.8	ほぼ 完存	口縁部ヨコナデ/杯部内外面・脚柱部・脚柱部外面ミガキ/杯屈曲部内面ヨコナデ/脚柱部内面ナデか/脚柱部内面ナデ/脚端部ヨコナデ	やや粗	淡橙褐	沈線上部・下部に各3条/スキャン5個(本来は2個1組、計3組6個)
507	Y311 12E-7	高杯B	23.0 (10.9)	15.2	ほぼ 完存	口縁部ヨコナデ/杯部内外面・脚部外面ミガキ/脚部内面ナデ/脚端部ヨコナデ	やや粗	橙褐	沈線上段・下段各6条/スキャン孔上段・下段各3個/シボリ痕あり
508	Y330 12E-11	広口壺B	10.4 (4.2)	13.3	ほぼ 完存	口縁部内外面ヨコナデ/頸部内外面・体部外面上半ミガキ/体部外面下半ナデまたはミガキか/底部外面ユビオサエ、ナデ/体部内面ナデ	やや粗	赤褐	

16トレンチ 溝SD01

509	Y768	長頸壺	10.1	*4.4	1/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡橙褐	
510	Y301	ミニチュア土器	(2.9)	*3.2	12/12	体部外面ユビオサエ、ナデ/体部内面ナデ	密	淡黄褐	

16トレンチ 竪穴式住居跡 S H03

511	Y310 12E-12	鉢B	13.7	8.9	1.5/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面上半ナデ、下半ミガキ/底部外面ユビオサエ/体部内面ナデ	やや粗	淡赤褐/ 黄褐	体部外面に黒斑/体部外面にすず/頸部に刺突文
-----	----------------	----	------	-----	--------	--	-----	------------	------------------------

16トレンチ 段状遺構 S X12

512	Y328	不明	18.2	*2.2	—	内外面とも調整不明	粗	橙褐	高杯の可能性あり
-----	------	----	------	------	---	-----------	---	----	----------

16トレンチ 竪穴式住居跡 S H06

513	Y350	鉢Aか	(5.0)	*7.2	6/12弱	体部内外面ナデ/底部外面ユビオサエ/底面ナデ	やや粗	灰褐	底面・内面に黒斑
-----	------	-----	-------	------	-------	------------------------	-----	----	----------

16トレンチ 土器供獻遺構 S X05

514	Y767	甕	12.3	*3.0	1/12未	口縁部内外面ナデ/頸部外面ハケか/頸部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	橙褐	頸部に沈線2条
515	Y716	甕C	11.8	*2.7	2/12弱	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ、一部ユビオサエ	やや粗	黒灰	口縁端部にすず
516	Y763	甕か	8.4	*2.0	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ、ユビオサエ	密	黄褐	
517	Y320	鉢C	11.2	*4.1	1.5/12	内外面ともナデか	やや粗	橙褐	
518	Y707	底部b	(5.1)	*2.8	9/12	外面ミガキ/底面・内面ナデ	粗	橙褐	内面に黒斑
519	Y708	底部b	(5.6)	*3.2	12/12	外面ナデ/底面ナデ/内面調整不明	粗	橙褐	
520	Y759	底部a	(4.7)	*2.0	12/12	外面ナデ、ミガキ/底面ナデ/内面調整不明	やや粗	淡茶褐	内面に黒斑
521	Y797	脚部eか	(9.5)	*1.3	1.5/12	脚端部・外面ヨコナデ/内面ナデ	密	橙褐	スカシ1個
522	Y727	脚部cか	—	*5.9	10/12	外面ミガキか/内面ナデ	やや粗	橙褐	接合1類/シボリ痕あり/残存率は接合部で計測
523	Y793	器台A	20.0	*1.4	1/12未	口縁部内面ナデまたはミガキか/口縁帯調整不明/口縁部外面ナデ	密	淡黄褐	口縁帯に擬凹線2条か

16トレンチ 土器溜まり S X04

524	Y733	広口壺か	30.0	*3.3	1/12未	口唇部ヨコナデ/口縁部外面上半ヨコナデ、下半ミガキか/口縁部内面ナデ	密	灰褐	外面に凹線1条/類似した個体に501がある
525	Y322 14I-17	広口壺A	17.5	*9.4	4/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部外面ハケ/頸部内面上半ハケ、下半ナデ	やや粗	淡黄褐	頸部内面に黒斑
526	Y324 12E-8	広口壺A	23.8	5.0	9/12強	口縁部ヨコナデ/口縁部内面・頸部内外面ミガキ	やや粗	黄褐	外面一部に黒斑
527	Y717	短頸壺	12.6	*4.7	1.5/12	口縁部内外面ヨコナデか/頸部内外面ナデ	やや粗	黄褐	
528	Y753	壺頸部	—	*11.6	4.5/12	頸部内外面ともハケ、ユビオサエ	やや粗	橙褐	頸部内面に黒斑/残存率は頸部で計測
529	Y331	広口壺B	14.4	*6.0	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部内面ハケ/頸部外面ミガキ(単位明瞭)	やや粗	橙褐	
530	Y313 14I-18	広口壺B	11.6	*5.6	4/12	口縁部内外面ナデ/頸部内外面ハケのちナデ/体部外面ハケ/体部内面ユビオサエ、ケズリ	粗	淡黄褐	
531	Y720	壺頸部	—	*5.8	4/12	頸部・体部内外面ナデ/突帯ヨコナデ	やや粗	灰褐	残存率は突帯で計測
532	Y780	壺頸部	—	*6.7	—	内外面ともナデ	やや粗	橙褐	
533	Y788	体部片	—	—	—	内外面ともナデ(内面一部ハケか)	密	橙褐	刺突文
534	Y787	体部片	—	—	—	内外面ともナデ	密	橙褐	刺突文または列点文
535	Y317 12E-10	広口壺C	11.8	*7.3	1/12未	口縁部外面調整不明/口縁部内面ヨコナデ/体部外面ミガキか/体部内面ナデ	やや粗	淡橙褐	口縁部に刺突文、肩部に刺突文・直線文
536	Y790	広口壺C	14.2	*1.4	—	内外面ともナデ(ヨコナデか)	密	橙褐	口縁部外面に波状文

537	Y791	壺体部	—	*3.1	—	外面ナデ(下半ハケのちナデか)/内面ナデ	やや粗	橙褐	肩部に波状文
538	Y349	壺体部	—	*7.7	—	外面ミガキ/内面ナデ(ケズリのちナデか)	やや粗	黄褐	肩部に波状文
539	Y342	甕	12.3	*4.4	2/12弱	口縁端部ヨコナデ/口縁部内外面ハケのちナデ/体部外面ハケ/体部内面ナデ	やや粗	灰褐	頸部外面に刺突文
540	Y309	甕	12.6	*4.5	11/12	口縁部外面ヨコナデ/体部外面ハケのちナデ/口縁部内面ハケのちナデ/体部内面ナデ	密	橙褐	口縁端面に列点文/肩部に刺突文/頸部に沈線か
541	Y800	甕	14.2	*1.7	1/12未	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ハケのちヨコナデ/口縁部内面ナデ	やや粗	暗灰褐	口縁部外面にすず/口縁端部はややつまみ上げ
542	Y323	甕	19.0	*1.5	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	橙褐	口縁端面に列点文
543	Y794	甕	20.0	*1.8	1/12未	外面ヨコナデ/内面ヨコナデか	やや粗	橙褐	
544	Y751 14I-5	広口壺F	17.0	*17.5	1.5/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部・体部外面上半ミガキまたはナデ/体部外面下半ミガキ/体部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡黄褐	
545	Y752	底部b	(7.3)	*18.8	12/12	体部外面ミガキ/底面ナデ/体部内面調整不明(部分的にハケか)	やや粗	淡黄褐	
546	Y335 12E-4	甕A	17.2 (6.7)	25.3	11/12	口縁部外面ヨコナデ/体部外面ハケ/底部外面ナデ/口縁部内面・体部内面上半・底部内面調整不明/体部内面下半ハケ	やや粗	橙褐	口縁部・体部外面にすず/底部付近2次焼成による被熱か
547	Y332	甕体部	—	*7.4	—	頸部外面ヨコナデ/体部内外面ナデ、ケズリ	やや粗	淡黄褐/ 灰褐	外面に黒斑
548	Y348	甕体部	—	*9.7	—	外面ハケ/内面ナデ	やや粗	茶褐/暗 茶褐	
549	Y336	底部a	(7.0)	*9.0	—	内外面ともナデ、ユビオサエ	やや粗	淡茶褐	
550	Y316	底部a	(6.0)	*7.6	11/12	体部外面ハケのちナデ/底部外面ユビオサエ/底面・体部内面ナデ	やや粗	灰褐/暗 茶褐	
551	Y721	底部c	(3.1)	*2.8	12/12	外面ケズリ/底面・内面ナデ	粗	黒灰	外面に黒斑か
552	Y319	底部a	(5.1)	*3.0	12/12	外面ミガキ、ナデ/底面ミガキ/内面ナデ	やや粗	淡黄褐/ 灰褐	底部外面に黒斑
553	Y710	底部a	(4.1)	*1.3	11/12弱	外面タタキ、ナデ/底面ナデ/内面ナデ	密	淡茶褐	
554	Y703	底部a	(4.2)	*2.7	7/12	内外面ともナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	外面に黒斑
555	Y719	底部b	(5.0)	*2.4	12/12	内外面ともナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	内外面に黒斑
556	Y714	底部b	(4.4)	*2.1	4/12	体部外面ユビオサエのちナデ/底面粗いナデか/内面ナデ	やや粗	茶褐/淡 茶褐	
557	Y723	底部b	(4.2)	*2.4	3/12	内外面ナデ	密	黒灰	内面に黒斑
558	Y704	底部b	(5.2)	*1.7	7.5/12	内外面ナデ/底面未調整か	やや粗	橙褐	外面2次焼成による被熱か/内面に黒斑
559	Y782	底部b	(3.2)	*2.8	6/12	外面調整不明/内面ナデ	やや粗	淡黄褐	
560	Y701	底部b	(7.1)	*3.0	12/12	内外面ともナデ/底面丁寧なナデ	やや粗	橙褐	
561	Y702	底部b	(7.4)	*3.2	4/12強	外面ナデ、ユビオサエ/底面丁寧なナデ/内面ナデか	密	灰褐/暗 灰褐	底面に黒斑
562	Y713	底部b	(5.2)	*3.4	5/12	内外面ともナデ	粗	灰褐	底面・内面に黒斑
563	Y376	底部c	(4.0)	*5.7	9/12	外面ハケ/底面ナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐/ 橙褐	外面に黒斑
564	Y318	脚台	(4.0)	*2.6	5/12	内外面ともナデ	やや粗	淡橙褐	鉢の脚台か
565	Y300	脚台	(8.7)	*5.0	4/12	体部外面ナデ/脚台内外面ナデ、ユビオサエ/体部内面ハケのちナデ	粗	灰褐	内面に黒斑

566	Y765	鉢B	15.4	*4.6	1/12未	口縁端部調整不明瞭/口縁部内外面・体部外面ナデ、ユビオサエ/体部内面ハケのちナデ	やや粗	淡黄褐	
567	Y718	鉢C	17.2	*5.7	1/12	口縁端部ヨコナデ/体部内外面ともナデ	やや粗	黄褐	
568	Y734 Y785	高杯A	23.3	*3.7	2/12	口縁部外面ヨコナデか/口縁部内面・杯部内外面ミガキ	やや粗	橙褐	杯底部内外面に化粧土が部分的に残る
569	Y314	高杯A	23.4	*3.7	1.5/12	内外面ともミガキか	やや粗	黄褐	口縁部外面に黒斑
570	Y735	高杯Aか	22.0	*2.3	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	淡茶褐	
571	Y764	高杯Bか	27.2	*2.3	1/12強	口縁端部・杯部内面ヨコナデ/杯部外面ハケのちヨコナデ	やや粗	橙褐	
572	Y742	高杯B	21.8	*5.2	4/12	口縁端部ヨコナデ/杯部内外面ミガキ	密	淡黄褐	破片に歪みあり
573	Y327	高杯B/D	19.0	*3.0	1/12	口縁端部ヨコナデ/杯部内外面ミガキ(単位不明瞭)/杯屈曲部外面ヨコナデ	密	淡黄褐	
574	Y736	高杯D	21.8	*2.4	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	黄褐	沈線1条
575	Y778	高杯円盤	—	—	—	ナデか	密	橙褐	
576	Y732 14I-38	高杯杯部	—	*3.9	10/12	外面ミガキ/内面ミガキ	やや粗	淡茶褐	接合1類/残存率は接合部で計測
577	Y743	高杯杯部	—	*4.2	5/12弱	外面上半ハケか、下半ミガキ/内面ミガキか	やや粗	淡黄褐	接合1類/残存率は接合部で計測
578	Y777	高杯脚部	—	*5.2	3/12	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	橙褐	接合3類/残存率は接合部で計測
579	Y726	高杯脚部	—	*5.6	—	脚部外面上半ハケのちナデか、下半ナデか/脚部内面ナデ	やや粗	橙褐/淡黄褐	接合3類/実測部は完存
580	Y725	脚部c	—	*9.7	—	外面ミガキか/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	橙褐	接合3類/スカシ孔3個/接合部はほぼ完存
581	Y337	脚部c	(13.6)	*4.0	1/12強	外面ミガキまたはナデ/脚端部ヨコナデ/脚部内面ハケのちナデ	やや粗	淡橙褐	スカシ孔1個
582	Y798	高杯脚部	(15.6)	*2.4	1/12未	脚端部ヨコナデ/外面ミガキか/内面ナデ	やや粗	橙褐	
583	Y757	高杯脚部	(12.6)	*1.4	3/12	脚端部・内面ヨコナデ/外面ハケ	やや粗	橙褐	
584	Y729	脚部a	—	*15.0	—	外面ハケのち丁寧なナデ/内面不調整か	やや粗	橙褐/淡黄褐	接合1類
585	Y728	脚部c	—	*11.9	—	外面ハケのちミガキ/内面不調整か	密	灰褐	接合1類か
586	Y304	有孔鉢	(4.6)	*5.3	12/12	内外面ともナデ	やや粗	茶褐	
587	Y325	器台A	28.0	*2.0	1/12	口縁部帯上半ヨコナデ、下半ナデ/口縁部内面ヨコナデ	やや粗	橙褐	口縁部に綾杉文
588	Y326	器台A	20.3	*1.7	1/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内面ミガキ	密	淡橙褐	口縁部に擬凹線3条
589	Y351	器台筒部	17.6	*5.3	—	外面ハケ/内面ナデ	やや粗	橙褐	沈線4条
590	Y329	器台A	17.2	14.5	7/12	口縁部・口縁部内面ヨコナデ/筒部外面ミガキ、ナデ/脚端部ヨコナデ/頸部内面ミガキ/筒部内面ナデ、ユビオサエ/脚部内面ハケ	やや粗	淡黄褐	本文参照

北地区包含層

591	Y761	直口壺	10.4	*4.3	2/12強	口縁端部ヨコナデ/頸部外面ハケ/頸部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	灰褐	16トレンチ出土/口縁部内外面に黒斑
592	Y338	壺体部	—	*2.4	—	内外面ともナデ	やや粗	淡茶褐	14トレンチ出土/内外面に黒斑/頸部に列点文
593	Y737	甕	18.2	*2.0	1/12未	口縁端部強いヨコナデ/口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	淡黄褐	外面にすず
594	Y758	広口壺C	13.8	*2.0	1/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部外面ハケ	やや粗	淡黒灰	15トレンチ出土/口縁部に列点文

出土遺物観察表

595	Y321	甕A	16.0	*5.8	1/12強	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ナデ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	16トレンチ出土/肩部に刺突文
596	Y799	甕か	13.5	*1.5	1/12	外面ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	黒灰	15トレンチ出土/内外面に黒斑
597	Y312	短頸壺か	10.3	*5.2	3/12弱	口縁部内外面ヨコナデ/頸部・体部内外面ナデ	密	暗灰	14トレンチ出土/内外面に黒斑
598	Y774	甕A	14.0	*1.8	1/12未	内外面ともヨコナデ	密	橙褐	16トレンチ出土/外面にすず
599	Y766	甕A	18.4	*2.4	1/12未	内外面ともヨコナデ(内面ユビオサエ)	密	灰褐	15・16トレンチ出土/外面に黒斑/外面にすず
600	Y746	甕A	20.8	*3.2	1/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	
601	Y786	底部b	(5.2)	*3.7	9/12	内外面ともナデ、ユビオサエ	やや粗	暗茶褐	15・16トレンチ出土/外面に黒斑
602	Y705	底部b	(6.0)	*3.8	2.5/12	外面ナデ、ユビオサエ/内面ナデ	やや粗	淡黄褐	15トレンチ出土/内面に黒斑
603	Y302	底部c	(5.9)	*5.3	2/12	内外面ともナデ/底面ケズリか	やや粗	暗灰褐	14トレンチ出土
604	Y760	底部b	(6.6)	*4.0	4/12強	内外面とも調整不明(ナデか)	粗	茶褐	16トレンチ出土
605	Y722	底部b	(4.5)	*3.0	3/12	外面・底面ナデ/内面ナデか	やや粗	黄褐	15トレンチ出土
606	Y756	底部c	(3.8)	*3.0	3/12弱	外面ナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡橙褐	内外面に黒斑
607	Y755	底部b	(4.3)	*2.0	6/12	外面・底面ナデ、ユビオサエ/内面ナデか	粗	灰褐	外面にすず/底面2次焼成による被熱か
608	Y779	底部	(3.2)	*1.4	10/12	内外面ともナデ/外面ユビオサエ	やや粗	黄褐	ドーナツ状の底部
609	Y711	底部b	(4.7)	*2.8	3/12弱	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	密	橙褐/黄褐	底面2次焼成による被熱か
610	Y712	底部b	(5.0)	*1.7	9/12	外面ユビオサエか/底面ナデ/内面調整不明	粗	赤褐色	16トレンチ出土
611	Y781	脚台	(4.0)	*2.7	—	外面ナデ/底面ナデか/内面ナデ	密	淡灰黄	15トレンチ出土
612	Y784	高杯	18.0	*1.7	2/12	口縁部ヨコナデ/内外面ナデ	密	灰褐	16トレンチ出土
613	Y339	高杯B/D	18.8	*2.5	1/12	口縁部調整不明/杯部外面ナデまたはミガキ/杯部内面調整不明	やや粗	橙褐	14トレンチ出土
614	Y771	高杯B	22.0	*2.5	2/12	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	15・16トレンチ出土
615	Y731	脚部a/b	—	*7.0	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	橙褐	接合1類か/16トレンチ出土/スカシ孔5個
616	Y303	脚部e	—	*6.3	12/12	杯部・脚部外面ミガキ/脚部内面ナデ	やや粗	橙褐	14トレンチ出土/残存率は接合部で計測/接合3類/スカシ孔4個
617	Y730	脚部c	—	*4.8	6/12	脚部外面ミガキ/杯部内面ハケのちナデ/脚部内面ナデ	やや粗	茶褐	16トレンチ出土/残存率は結合部で計測/接合1類か/スカシ孔1個
618	Y792	高杯脚部	(16.0)	*2.5	1/12	脚部外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/脚部内面ナデ	やや粗	橙褐	16トレンチ出土/器台脚部の可能性もある
619	Y770	器台A	20.8	*1.4	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	橙褐	15トレンチ出土/口縁部に擬凹線2条

南地区包含層

620	Y772	広口壺A	15.2	*1.6	1/12	口縁部ヨコナデ/口縁部外面ナデ/内面ナデ	やや粗	濃橙褐	27トレンチ出土/口縁部に擬凹線2条
621	Y347	器台	24.0	*1.9	1/12	口縁部ヨコナデ/内外面ともミガキ	密	黒灰	27トレンチ出土/口縁部に擬凹線7条・竹管文
622	Y744	甕D	16.6	*1.9	1/12強	口縁部内外面ヨコナデ/頸部外面ナデ/頸部内面ハケ	やや粗	黄褐	27トレンチ出土/外面にすず/口縁部に刺突文
623	Y343	鉢B	18.0	*6.5	3.5/12	口縁部ヨコナデ/体部外面ハケ/体部内面ハケか	やや粗	赤褐	27トレンチ出土

624	Y706	底部 b	(4.5)	*4.1	12/12	外面ハケのちナデ、ユビオサエ/底面ナデ/内面ナデ	やや粗	淡茶褐	31トレンチ出土
625	Y724	底部 b	(4.4)	*2.7	3/12	外面調整不明/底面ナデ/内面ナデか	粗	淡茶褐	31トレンチ出土
626	Y346	底部 b	(7.4)	*5.3	4.5/12	内面ケズリ、ユビオサエ/外面ハケのちケズリ/底面ナデ	粗	灰褐	27トレンチ出土
627	Y345	底部 c	(4.0)	*5.1	12/12	内面・外面上半ナデ/外面下半ケズリ/底面ケズリ(ケズリのちナデか)	粗	黄褐/淡橙褐	27トレンチ出土
628	Y352	底部	(4.0)	*4.0	12/12	内面・外面ナデ/底面ユビオサエ、ナデ	密	灰褐	27トレンチ出土/底面に指紋の痕
629	Y340	ミナツト土器	3.2	*2.7	10/12	内外面ともナデ、ユビオサエ	密	橙褐	27トレンチ出土/外面に黒斑/頸部外面に赤色顔料
630	Y745	高杯 A	20.4	*3.7	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	27トレンチ出土
631	Y769	高杯脚部	—	*3.8	—	内面ナデ/外面ナデか	やや粗	橙褐	22トレンチ出土/接合2類か
632	Y344	高杯脚部	(14.4)	*2.2	2/12弱	内外面ヨコナデ(外面一部にミガキ)	やや粗	橙褐	27トレンチ出土
633	Y750	脚部 c	—	*7.7	—	脚部内面ナデ/外面ミガキ	やや粗	明赤褐	22トレンチ出土
634	Y773	器台 A	20.8	*1.8	1/12未	口縁帯ヨコナデ/口縁部内面調整不明	やや粗	赤褐	31トレンチ出土/口縁帯に擬凹線1条か
635	Y783	器台 A	15.8	*1.7	1/12未	口縁帯ヨコナデか/口縁部内面ナデ	やや粗	黒灰	31トレンチ出土/口縁帯に擬凹線2条

A地区 土器溜まり S X 242

636	Y380 141-9	広口壺 A	16.7	*6.1	5/12	口縁帯・口縁部内面ヨコナデ/頸部外面ハケのちナデ/頸部内面ハケ	やや粗	茶褐	口縁帯に竹管文
637	Y431	広口壺 B	14.9	*4.7	2/12弱	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ナデ、ユビオサエ/口縁部内面調整不明	やや粗	茶褐	
638	Y399	長頸壺	11.8	*12.7	2/12強	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ハケ/口縁部内面上半ハケ、下半ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐	
639	Y892	広口長頸壺	21.6	*16.0	5/12強	口縁端部ヨコナデか/口縁部外面ナデまたはミガキか/口縁部内面調整不明	粗	淡黄褐/灰褐	
640	Y361 13D-15	広口壺 E	15.4	*31.3	11/12強	口縁端部ヨコナデ/頸部外面ハケ/突帯ナデ/体部外面上半ハケのちナデか/体部中位ハケ、下半ナデか/頸部内面調整不明/体部内面上半ナデか、下半ハケ、ユビオサエ	やや粗	黄褐	口縁付近やや橙色
641	Y893	壺	(5.6)	*18.3	12/12	体部外面ハケ底面ナデ/体部内面上半ユビオサエ、ナデ、下半ハケ、ユビオサエ	やや粗	橙茶/黒灰	
642	Y895	高杯 C	17.4	*7.4	8/12	杯部外面調整不明/杯部内面ナデか	密	茶黄	接合1類/残存率は結合部で計測
643	Y424	脚部 c	—	*10.1	—	外面ユビオサエ、ナデ/内面ナデか	やや粗	淡黄褐	接合3類/スカシ孔上段5個、下段5個
644	Y429	脚部 c	—	*8.8	—	杯部・脚部外面ミガキ/杯部内面ナデか/脚部内面上半不調整、下半ハケ	やや粗	暗茶褐	接合1類/シボリ痕あり/スカシ孔3個
645	Y1107	脚部 c	—	*6.5	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	淡黄褐	接合1類か/シボリ痕あり/スカシ孔3個
646	Y1105	脚部 c	—	*8.0	—	外面ミガキ/内面ナデ	密	灰褐	接合1類/スカシ孔1個/沈線1条
647	Y373	底部 b	(5.8)	*3.5	12/12	外面調整不明(かすかにユビオサエ)/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	底部外面・底面に黒斑/底面に葉脈の圧痕
648	Y407	底部 b	(5.7)	*4.4	12/12	内面調整不明/外面ユビオサエ/底面ナデ	やや粗	淡黄褐	
649	Y888	底部 b	(4.0)	*2.3	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	淡橙褐	

出土遺物観察表

650	Y401	脚台	(5.1)	*4.1	12/12	体部外面ナデ/脚台外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/体部内面・脚台内面ナデ	密	淡黄褐	脚台の胎土はやや粗
-----	------	----	-------	------	-------	------------------------------------	---	-----	-----------

A地区 段状遺構 S X 248

651	Y462	広口壺か	—	—	—	口縁帯ヨコナデか	密	橙褐	口縁帯に擬凹線1条以上、円形浮文
652	Y900	広口壺B	14.2	*3.0	2/12	口縁部ヨコナデ/口縁部外面ユビオサエ、ナデ/口縁部内面ナデ	密	黒灰	内外面全体に黒斑
653	Y905	甕	10.6	*3.4	2/12弱	外面ヨコナデ/内面調整不明	やや粗	暗茶褐	外面にすず
654	Y450	底部 a	(6.0)	*5.3	12/12	内外面ともナデ/底面調整不明	やや粗	橙褐/黒灰	外面にすず/底部外面に黒斑
655	Y449	甕A	15.0	*17.0	2/12弱	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ、ユビオサエ/底部外面ユビオサエ	やや粗	橙褐	底部外面に黒斑か/体部外面すず
656	Y894	体部	—	*9.1	—	外面ハケ/内面ナデ	やや粗	橙褐	内面に黒斑か
657	Y468	底部	(4.7)	*2.1	12/12	内外面ともナデ/外面ユビオサエ	やや粗	淡茶褐	内面に黒斑
658	Y898	底部 a	(4.4)	*2.2	2/12	内外面ともナデ	やや粗	淡茶褐	底部の破断面は接合面
659	Y459	底部 a	(5.7)	*2.8	6/12強	内外面ともナデ/外面ユビオサエ	密	淡茶褐	内面・底面黒斑か
660	Y461	底部 a	(5.4)	*4.8	1.5/12	外面ハケのちナデ、ユビオサエ/内面ナデ	やや粗	茶褐	
661	Y945	底部 a	(5.2)	*3.5	8/12	外面ハケ、ユビオサエ/内面ナデ	やや粗	淡黄褐/橙褐	
662	Y460	底部 a	(5.1)	*3.6	12/12弱	内外面ともナデ/底部外面ユビオサエ/底面ハケ	粗	暗茶褐/灰褐	底部外面に黒斑
663	Y899	底部 b	(5.2)	*2.0	5/12弱	外面ナデ、ユビオサエ/内面ナデ	やや粗	茶褐	内外面とも黒斑
664	Y897	底部 a	(4.6)	*1.4	3/12	内外面ともナデ	やや粗	茶褐	内外面2次焼成による被熱か/ドーナツ状底部
665	Y470	高杯脚部	(13.6)	*4.4	2/12強	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	黄灰	接合しない2片から復原

A地区 包含層

666	Y400	広口壺A	19.4	*3.5	2/12強	口縁帯・口縁部内面ヨコナデ/頸部外面ハケ/頸部内面ナデ、ハケ	やや粗	淡黄褐	口縁帯に擬凹線3条/外面に赤色顔料
667	Y996	広口壺A	17.2	*8.6	3.5/12	口縁部内外面調整不明/頸部内面ナデ/突帯ヨコナデか	粗	淡黄褐	剥離のため口縁帯の形状不明
668	Y1147	広口壺A	15.0	*3.2	2/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	外面に淡い黒斑
669	Y386	広口壺A	15.7	*1.6	1.5/12	口縁帯ヨコナデか/口縁部内面ナデか	やや粗	淡黄褐	口縁帯に擬凹線2条
670	Y412 Y1191	広口壺A	21.6	*2.6	1/12	口縁帯・口縁部内面ヨコナデ	やや粗	暗茶褐	口縁帯に竹管文
671	Y1177	広口壺A	10.2	*0.9	1/12	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	
672	Y1158	直口壺	14.1	*4.1	1/12	内外面ともヨコナデ	粗	淡茶褐	
673	Y451	直口壺	14.0	*6.0	2/12強	内外面とも調整不明	粗	茶褐	口縁外面に黒斑
674	Y385	広口壺B	14.4	*5.0	5/12強	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ナデか/体部内面調整不明	密	淡黄褐	口縁部内外面に赤色顔料か
675	Y997	壺頸部	—	*6.7	—	外面調整不明/頸部突帯ヨコナデか/体部外面ナデか/頸部・体部内面ナデ	粗	淡黄褐	接合しない2片から復原
676	Y392	広口壺C	13.8	*3.1	1.5/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部内面ハケか	やや粗	淡茶褐	口縁部に列点文/頸部に刺突文/沈線
677	Y1016	広口壺か	26.0	*3.4	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	茶褐	
678	Y374 13D-12	短頸壺	8.9	17.5	3/12弱	口縁部外面ナデ/体部外面上半ハケ、下半調整不明/底部外面ユビオサエ/口縁部内面ナデか/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	肩部に刺突文/体部外面にすず/体部外面に黒斑/底部外面2次焼成による被熱か

679	Y891	短頸壺か	10.0	*4.7	2/12弱	口縁部外面上半ヨコナデ、下半ハケ／頸部外面ヨコナデ／口縁部内面ナデか	やや粗	灰褐	外面にすず／外面に赤色顔料か
680	Y390	長頸壺	9.1	*6.1	2/12弱	口縁端部ヨコナデ／口縁部外面ナデ／口縁部内面ナデ、ユビオサエ	密	橙褐	口縁部外面上半に凹線か／内面に淡い黒斑
681	Y1170	長頸壺	8.5	*5.8	1/12強	口縁端部ヨコナデ／口縁部外面ナデ／口縁部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐/橙褐	
682	Y1027	壺頸部	—	*5.8	10/12	外面ミガキ、ユビオサエ／内面ナデ	やや粗	黄灰	頸部に沈線状のもの
683	Y1157	短頸壺	10.5	*3.2	1/12弱	内外面ともヨコナデ	やや粗	茶褐	
684	Y1153	広口壺B	10.0	*1.9	1/12	外面ヨコナデ／内面調整不明	やや粗	淡橙褐	高杯脚部の可能性あり
685	Y368	無頸壺A	6.4	*4.3	1/12	外面ナデか／内面ユビオサエのちナデ	やや粗	黒灰	
686	Y1135	無頸壺A	12.0	*3.4	1/12強	口縁部内外面ヨコナデ／体部外面ナデ／体部内面ナデか	粗	淡黄褐	
687	Y1196	無頸壺A	14.2	*2.7	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ／体部内外面ナデ	やや粗	淡橙褐	
688	Y1180	無頸壺B	13.0	*8.2	1/12	口縁部・体部外面ハケ／口縁部内面ナデ／体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐/暗茶褐	
689	Y991	甕Eか	15.6	*1.7	1/12	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	橙褐	
690	Y1187	壺体部	(6.0)	*10.4	2/12	体部外面ハケ、ユビオサエ／底部外面・体部内面ナデ	やや粗	茶褐/暗茶褐	外面に黒斑
691	Y378	壺体部	(5.0)	*20.1	12/12	頸部外面ヨコナデ／体部外面ハケ／体部内面・底部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐	肩部外面に竹管文3個／底部ドーナツ状
692	Y902	壺体部	—	*15.3	—	外面ミガキ／内面上半ハケのちミガキか、下半ハケのちナデか	やや粗	淡茶褐/黒灰	外面下半に黒斑
693	Y370 14I-21	甕C	10.6	*6.8	4/12	口縁部内外面ヨコナデ／体部内外面ユビオサエ、ナデ／頸部内面丁寧なナデ	やや粗	淡黄褐	小型壺の可能性もある
694	Y371 Y394	甕	—	*8.4	1.5/12	体部外面ハケのちナデ／体部内面ユビオサエ、ナデ／突起ナデ	やや粗	茶褐	残存率は頸部で計測／突起は1個のみ確認
695	Y1004	甕	21.0	*5.3	2/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	
696	Y367	甕D	—	*8.1	—	口縁部・頸部内外面ヨコナデ／体部内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	口縁部に刺突文、頸部に波状文、肩部に直線文・刺突文
697	Y1126	壺	8.6	*4.1	1/12	口縁部外面ヨコナデ／体部外面調整不明／口縁部内面ナデか／体部内面ユビオサエ	やや粗	橙褐	
698	Y1154	甕頸部	—	*3.2	2/12	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	外面にすずか
699	Y1125	甕か	9.5	*1.7	1/12	口縁部外面ヨコナデ／体部内外面ナデ／口縁部内面調整不明	やや粗	茶褐	口縁端部に刻み目
700	Y1136	甕C	12.6	*2.6	1/12強	外面ナデ、ユビオサエ／内面ヨコナデ	やや粗	淡橙褐	
701	Y393 Y994	甕C	13.6	*3.9	1.5/12	口縁部内外面ナデ／体部外面ナデ／体部内面上半ハケ、下半ナデ	やや粗	黄灰	肩部に刺突文
702	Y988	甕	14.0	*2.8	2/12	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	
703	Y1026	甕	15.0	*2.7	1/12	外面ヨコナデ／内面ナデ	密	黒灰	外面にすず／内面に黒斑
704	Y775	甕	12.8	*4.6	1/12未	口縁部・体部外面ナデか／口縁部内面調整不明／体部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡赤褐	外面2次焼成による被熱
705	Y1195	甕A	15.6	*3.5	1/12	口縁部内外面ヨコナデ／体部外面ハケのちナデ／体部内面ナデ	密	淡黄褐	口縁部外面にすずか
706	Y1127	甕	13.3	*1.9	1/12	口縁端部・口縁部内面ヨコナデか／口縁部外面ハケのちヨコナデ	やや粗	淡茶褐	口縁部外面に刻み目
707	Y995	甕A	16.0	*3.9	1/12未	口縁端面やや強めのヨコナデ／口縁部外面ヨコナデ／体部内外面ナデ	やや粗	橙褐	肩部に刺突文
708	Y409 Y1112	甕A	21.4	*7.0	5/12	口縁部内外面ヨコナデ(内面ハケか)／体部外面ハケ／体部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	橙褐	

出土遺物観察表

709	Y388	甕A	14.5	*7.7	2/12	口縁部外面ヨコナデ/体部外面ハケ/口縁部・体部内面ナデ、ユビオサエ	粗	茶褐	
710	Y1003	甕体部	—	*11.0	5.5/12弱	体部外面上半ハケまたはナデ、下半調整不明/体部内面ユビオサエ、強めのナデ	やや粗	橙褐	残存率は頸部で計測/肩部外面にすず/体部外面上半に黒斑/体部外面下半に2次焼成による被熱
711	Y375 14I-11	甕体部	(6.0)	*14.2	5/12	体部外面ハケ/底部外面ヨコナデ/底面ナデ/体部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	茶褐	残存率は体部最大径で計測
712	Y989	底部a	(5.6)	*8.4	3.5/12	体部外面ミガキカ/底部(外面ユビオサエのちナデ/体部内面ナデ	やや粗	黄褐	
713	Y1019	底部a	—	*7.9	—	外面上半ナデ、下半ハケのちナデ/体部内面ナデか	粗	淡黄褐	体部外面下半に黒斑
714	Y1189	底部a	(6.8)	*2.2	8/12	内外面とも調整不明	やや粗	暗橙褐	
715	Y983	底部b	(5.2)	*3.1	8/12	内外面とも調整不明	粗	橙褐	
716	Y1173	底部a	(4.8)	*3.9	12/12	内外面とも調整不明	やや粗	黄灰	
717	Y1007	底部a	(5.6)	*2.4	4/12	外面ナデ/内面調整不明(ナデか)	やや粗	淡茶褐	底部外面に淡い黒斑
718	Y1146	底部a	(4.8)	*3.1	6/12弱	外面ユビオサエ、ナデ/内面調整不明	やや粗	茶褐/淡赤灰	外面にすず(淡い方は黒斑か)
719	Y1152	底部c	(4.4)	*4.1	2/12強	内外面とも調整不明/底面ナデ	粗	茶褐	外面2次焼成による被熱か
720	Y408	底部c	(5.8)	*5.0	12/12	体部外面板ナデか/底部外面・底面ナデ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	
721	Y1150	底部b	(5.1)	*3.9	6/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面・内面ナデ	やや粗	茶褐	外面2次焼成による被熱/内面に黒斑
722	Y1138	底部b	(4.8)	*2.9	4/12	体部外面ハケか/内面ナデか	やや粗	赤褐	内面に黒斑/外面2次焼成による被熱
723	Y1012	底部b	(5.2)	*2.1	11/12	内外面ともナデ、ユビオサエ	やや粗	黒灰	
724	Y984	底部a	(4.0)	*3.4	12/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面・内面ナデ	やや粗	淡茶褐	
725	Y403	底部a	(5.4)	*4.7	5/12強	体部外面丁寧なナデ/底部外面ユビオサエ/底面ナデ/体部内面調整不明	やや粗	灰褐	
726	Y982	底部b	(5.0)	*3.6	11/12	内外面ともナデ	やや粗	淡茶褐	
727	Y391	底部a	(5.2)	*3.2	12/12	外面ハケ、ナデ/底面・内面ナデ	やや粗	淡茶褐	
728	Y890	底部a	(5.4)	*2.0	8/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	黄褐	外面に淡い黒斑/内面に黒斑
729	Y986	底部c	(3.7)	*3.3	12/12	外面ケズリのちナデ/底面・内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	黒灰	内面・底面に黒斑
730	Y985	底部b	(5.4)	*3.8	11/12	体部内外面ナデ/底部外面ユビオサエ	粗	淡茶褐	
731	Y1149	底部a	(6.3)	*4.0	12/12	内外面・底面ナデ	やや粗	淡茶褐	底面にモミの圧痕/内外面に黒斑
732	Y1014	底部b	(5.5~5.0)	*3.9	12/12	内外面とも調整不明/底面ナデ	粗	淡橙褐	形状はいびつ
733	Y1002	底部b	(6.0)	*2.5	12/12	外面ユビオサエか/底面ナデか/内面調整不明	やや粗	灰褐	内面に黒斑
734	Y1151	底部b	(4.5)	*2.6	12/12	内外面ともナデ	やや粗	淡茶褐	内外面に黒斑
735	Y1121	底部b	(5.2)	*2.2	5/12弱	外面ナデ、ユビオサエ/底面ケズリか/内面ナデ	やや粗	灰褐	底端部2次焼成による被熱か/内面に黒斑
736	Y1013	底部b	(4.5)	*2.0	11/12	外面ユビオサエ/底面・内面調整不明	やや粗	灰褐	
737	Y1145	底部b	(4.2)	*2.0	12/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面・内面ナデ	やや粗	黄灰	外面に黒斑
738	Y1155	底部b	(5.0)	*2.0	6/12	内外面ともユビオサエ、ナデ	やや粗	茶褐	全体にややいびつ
739	Y981	底部c	(3.9)	*2.2	8/12	外面ケズリ、一部ユビオサエ/内面強いユビオサエ	密	茶褐	底部の平面形は多角形

740	Y1119	底部	(3.1)	*1.6	12/12	外面ヨコナデか/底面ユビオサエ、ナデ /内面調整不明	やや粗	淡黄褐	
741	Y406	底部 c	(4.3)	*5.5	8/12弱	外面ハケ/底面ナデ/内面上半ナデ、下 半粗いハケ	密	淡橙褐	
742	Y980	底部 a	(3.6)	*4.3	5/12	内外面ともユビオサエ、ナデ	やや粗	淡橙褐	
743	Y1116	底部 a	(5.8~ 6.3)	*1.5	12/12	内外面ともナデ(内面のナデは螺旋状に めぐる)	やや粗	橙褐/茶 灰	
744	Y1122	底部	(3.6)	*1.7	12/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	
745	Y1001	有孔鉢	(3.0)	*7.2	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面調整不明/ 内面ユビオサエ	やや粗	赤褐	底部内面に黒斑
746	Y1141	鉢C	13.7	*4.4	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ナデ/ 体部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	茶褐	
747	Y987	鉢か	28.0	*6.8	1.5/12	口縁部ヨコナデ/体部外面ハケ/体部 内面調整不明(ナデか)	粗	茶褐	
748	Y369	鉢	23.0	*4.8	2/12	口縁部内外面ユビオサエ/体部外面ユビ オサエのちナデ/体部内面粗いナデ	やや粗	黒灰	
749	Y355 13D-4	高杯B	26.6 (16.0)	18.3	1.5/12	口縁部外面調整不明/杯屈曲部外面ヨコ ナデ/口縁部内面・杯部内外面・脚部外 面ミガキ/脚部ヨコナデ/脚部内面ナ デ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	接合1類
750	Y433	高杯B	23.6	*3.3	1.5/12	内外面ともヨコナデ(内面ミガキか)	やや粗	茶褐	外面に赤色顔料
751	Y384 Y1164	高杯B	26.4	*3.6	1/12	口縁部内外面ヨコナデ/杯部外面ナデか /杯部内面ナデ(ミガキか)	密	橙褐	
752	Y1005	高杯Aか	-	*3.6	-	口縁部内外面ヨコナデ/杯部内外面ミガ キ	やや粗	淡茶褐/ 茶褐	
753	Y1110	高杯B	18.0	*2.5	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	淡黄褐	
754	Y1109	高杯B	18.6	*3.0	1/12未	口縁部ヨコナデ/口縁部外面ヨコナデ か/口縁部内面調整不明	やや粗	淡茶褐	
755	Y1129 Y1134	高杯B	20.4	*3.2	1.5/12	内外面ともミガキ(単位不明瞭)	やや粗	淡茶褐	
756	Y1111	高杯か	18.8	*1.7	1/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	
757	Y1021	高杯杯部	-	*1.6	-	外面上半ナデ、下半ミガキ/内面ミガ キ、上半ミガキのちナデ	やや粗	淡茶褐	
758	Y1168	高杯接合	-	*2.5	-	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐/ 橙褐	接合1類
759	Y1137	脚部 a/b	-	*4.5	-	外面ミガキ/内面ナデ	密	淡橙褐	接合3類/沈線3条
760	Y1009	脚部 c/e	-	*4.3	-	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	接合3類/沈線5条か/ス カシ孔1個
761	Y1011	脚部 a/b	-	*2.8	-	外面ミガキ/内面ナデか	やや粗	茶褐	沈線3条/スカシ孔2個
762	Y1120	脚部 c/e	-	*4.1	-	外面調整不明/内面ナデ	やや粗	橙褐/淡 黄褐	接合3類
763	Y1160	脚部 a/b	-	*7.8	-	外面ミガキ/内面調整確認不可能	やや粗	茶褐/淡 黄褐	接合3類か/沈線4条
764	Y1113	高杯接合	-	*3.7	-	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	橙褐	接合3類
765	Y904 Y1161	脚部 a/b	-	*9.2	-	外面ミガキ/内面未調整か	やや粗	淡灰	シボリ痕か/スカシ孔2個
766	Y1106	脚部 c	-	*7.0	-	外面ミガキか/内面ナデ	やや粗	黄褐/淡 黄褐	接合3類か/シボリ痕なし /スカシ孔2個
767	Y1183	脚部 a/b	-	*4.5	-	外面ミガキ/内面調整不明	やや粗	橙褐	接合1類
768	Y1169	脚部 c/e	-	*3.7	-	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	接合3類/シボリ痕あり
769	Y1184	脚部 c	-	*5.0	-	外面調整不明/内面ナデ	やや粗	灰褐	接合3類

出土遺物観察表

770	Y1108	脚部 a/b	—	*6.4	—	内外面とも調整不明	密	橙褐	接合1類
771	Y1118	高杯脚部	—	*2.2	12/12	外面ナデか/内面ナデ	やや粗	橙褐	接合3類か
772	Y1162	脚部 e	—	*4.7	—	外面調整不明/内面未調整か	やや粗	淡茶褐	接合3類/シボり痕あり/ スカシ孔1個
773	Y415 14I-24	脚部 c	(12.6)	*13.4	2/12弱	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面丁寧なナデ	やや粗	茶褐	接合3類/スカシ孔上段3個、下段1個/脚部外面に黒斑
774	Y1166	脚部 c	—	*8.6	—	杯部外面ミガキか/脚部内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	接合2類/杯部内面に赤色顔料か/シボり痕なし
775	Y903	脚部 e	—	*3.3	—	脚部外面ユビオサエ、ナデ/脚部内面ユビオサエのちナデ	密	赤褐	接合部1類か/外面に赤色顔料
776	Y1181	脚部 e	—	*2.5	—	外面ミガキ/内面未調整か	やや粗	淡茶褐	スカシ孔2個/沈線1条
777	Y402	脚部 e	(9.7)	*4.2	2/12	外面ナデ/内面ハケのちナデ、ユビオサエ	やや粗	淡茶褐	接合3類か
778	Y1008	脚部 e	(9.4)	*3.1	1/12	内外面ともナデ/脚端部ヨコナデ	やや粗	橙褐	
779	Y1131	脚部 c/e	—	*4.7	—	外面ナデか/内面ナデか	やや粗	橙褐	スカシ孔2個
780	Y1179	脚部 c/e	—	*5.4	—	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	
781	Y901	脚部 a	(15.0)	*1.8	1/12強	内外面とも調整不明(内面ナデまたはヨコナデか)	やや粗	淡橙褐	
782	Y1133	脚部 a か	(16.6)	*2.2	2/12	外面調整不明/脚端部ヨコナデか/内面ナデか	やや粗	赤褐	高杯脚部ではないかもしれない
783	Y1022	高杯脚部	(15.4)	*1.0	1/12	内外面ともヨコナデか	やや粗	橙褐	
784	Y1176	高杯脚部	(15.6)	*2.1	1/12	外面ミガキか/脚端部・内面ヨコナデ	やや粗	淡茶褐	
785	Y404 Y1128	高杯脚部	(14.2)	*2.3	1.5/12	外面ミガキか(単位不明瞭)/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	密	淡茶褐	内面に黒斑
786	Y993	高杯脚部	(13.2)	*2.4	2/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	茶褐	外面に黒斑/スカシ孔2個
787	Y1175	脚部 e 類	(7.8)	*5.8	2/12	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	黄褐/淡黄褐	接合1類か/脚部上部の破断面は接合面か
788	Y1114	高杯脚部	(9.8)	*2.1	1/12	外面ナデ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	橙褐	鉢等の脚台の可能性あり
789	Y387	高杯D	—	*3.3	2.5/12	外面上半ミガキ、下半ハケのちナデ/内面ナデ(一部ミガキか)	密	淡茶褐/茶褐	残存率は杯屈曲部で計測
790	Y1017	脚部 d か	(15.7)	*1.8	1/12強	内外面ともヨコナデ	やや粗	橙褐	
791	Y1188	不明	—	—	—	外面ハケのちナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡茶褐	外面に突帯
792	Y395	不明	—	—	—	外面ハケのちナデ/内面調整不明	やや粗	橙褐	外面に櫛描直線文・竹管文
793	Y992	体部片	—	—	—	外面ハケ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡茶褐	外面に刺突文
794	Y377	体部片	—	—	—	外面調整不明/内面ユビオサエのちナデ	やや粗	灰褐	外面に波状文・直線文
795	Y1124	不明	—	—	—	突起ヨコナデ/外面ミガキ/内面ナデ	密	茶褐	外面に突起/外面に黒斑
796	Y1178	不明	—	*3.0	—	内外面ともナデ	やや粗	淡黄褐	外面下部に突帯
797	Y1156	高杯D	24.0	*2.4	1/12	外面調整不明/内面ハケか	やや粗	淡黄褐	口縁帯に竹管文
798	Y1171	器台か	25.0	*1.1	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	黄灰	口縁端部に擬凹線・円形浮文(剝離痕のみ)
799	Y1018 Y1020	器台A	14.3	*2.0	1/12	内外面とも調整不明	密	黄褐	口縁部外面に黒斑/口縁帯に擬凹線2条
800	Y1142	器台A	15.8	*1.3	2/12	口縁部外面調整不明/内面ミガキか	密	淡茶褐	口縁帯下部欠損/口縁帯に波状文
801	Y381	器台A	19.9	*1.7	1/12強	口縁部ヨコナデ/口縁部内面ミガキ	密	黄褐	口縁帯に擬凹線4条

802	Y382 13D-7	器台	(11.5)	*16.3	2.5/12	口縁部内外面ナデ/筒部外面ハケ/脚端部ヨコナデ/筒部内面ユビオサエ、ナデか	やや粗	黄褐色	スカシ孔上段4個、下段5個
803	Y1143	器台筒部	-	*7.2	-	外面調整不明/内面ナデか	やや粗	淡橙褐	外面下部に黒斑/外面に沈線・列点文
804	Y1193	不明	(7.0)	*4.6	2/12強	外面ミガキか/脚端部ヨコナデか/内面ナデ	密	淡茶褐	
805	Y1159	器台	(12.8)	*8.2	1/12未	内外面とも調整不明	密	赤褐	スカシ孔上段2個、下段1個
806	Y432	器台	(16.1)	*3.8	1.5/12	外面ミガキか/内面ナデ、ユビオサエ/脚端部ヨコナデ	やや粗	淡茶褐	
807	Y1006	器台か	(12.6)	*4.8	-	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	密	淡橙褐	スカシ孔1個/高杯脚部の可能性あり
808	Y1010	器台	-	*10.2	-	内外面ともナデか	粗	淡橙褐	沈線5条/スカシ孔3段各1個ずつ確認
809	Y396 14I-26	器台	(14.6)	*12.9	1.5/12	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	密	淡茶	スカシ孔上段3個、下段2個

B地区 平坦面S X 238

810	Y437 14I-7	広口壺B	18.7	*6.9	7/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡茶	
811	Y1235	広口壺A	18.8	*3.1	2/12強	内外面ともヨコナデ	やや粗	黄灰	口縁部に擬凹線2条か
812	Y1277	広口壺か	18.0	*1.6	2/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面ナデ	やや粗	橙褐	口縁部外面に擬凹線2条、円形浮文(1点のみ確認)/内面に黒斑
813	Y1292	短頸壺	13.4	*5.5	1/12	口縁部ヨコナデ/口縁部・体部内外面ナデ	やや粗	暗茶褐/茶褐	
814	Y1245	壺頸部	-	*6.2	1/12	外面上半ミガキ、下半ナデ(ヨコナデか)/内面ナデ、ユビオサエ	密	淡橙褐	
815	Y1317	壺頸部	-	*3.5	2/12弱	外面ナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡橙褐	残存率は頸部で計測
816	Y1289 14I-14	細頸壺	-	*12.6	-	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	肩部内面に黒斑
817	Y1221	長頸壺	(6.2)	*24.1	2/12	口縁部内外面・体部内外面調整不明/底部外面ユビオサエ、ナデ	やや粗	茶褐	接合しない3片から復原/頸部の破断面は接合面か/体部外面に黒斑
818	Y1212	広口壺D	9.3	*1.5	2/12	外面ヨコナデ/内面ナデか	密	黄灰	口縁部外面に円形浮文/口縁部外面に赤色顔料/口縁部内面に波状文か
819	Y1262	ミチア土器	8.2	*1.5	1/12	内外面ともヨコナデ	密	淡橙褐	口縁部に刻み目
820	Y421 13D-2	直口壺	15.2	*21.4	12/12	口縁部内外面ナデ/体部内外面ナデ、ユビオサエ、ミガキ	粗	淡橙褐/灰褐	肩部に刺突文/体部外面に黒斑
821	Y1507	短頸壺か	10.8	*3.1	1/12強	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面ナデ、ユビオサエ	密	淡橙褐	
822	Y436 13D-1	広口壺A	22.0	*32.0	5/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面調整不明/体部外面ハケ/体部内面ユビオサエ、ハケ	粗	淡茶褐	口縁部に擬凹線2条/口縁部外面に赤色顔料を塗布/体部内面に黒斑
823	Y1298	甕A	16.0	*3.2	1/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐/淡茶褐	
824	Y1504	甕A	16.1	*5.3	1/12	内外面とも調整不明(体部内面ナデ)	やや粗	橙褐	頸部外面に逆「く」の字状の刺突文
825	Y1238	甕A	20.0	*7.5	2/12	内外面とも調整不明	粗	淡橙褐	頸部外面に刺突文
826	Y1311	甕A	22.2	*6.9	3.5/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡茶褐	頸部外面にすず
827	Y1258	甕A	25.2	*5.2	1.5/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面ナデ、ユビオサエ/体部内外面ナデ	粗	黄褐	頸部に刺突文/外面に化粧土か

出土遺物観察表

828	Y1259	甕A	13.6	*7.7	6/12	口縁部内外面ヨコナデか/体部外面ハケ/体部内面ナデ	やや粗	茶褐	肩部に刺突文/口縁部外面にすす/体部外面に黒斑/体部外面2次焼成による被熱
829	Y1237	甕A	16.6	*4.1	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ	やや粗	茶褐	口縁部外面にすす/口縁部内面に黒斑
830	Y1304 Y1244	甕A	11.2	*10.7	1/12強	口縁部・頸部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ	密	淡黄褐	口縁部外面・体部外面にすす
831	Y428	甕A	18.8	*5.4	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケのちナデ、ユビオサエ/体部内面ユビオサエ、ナデ	密	暗茶褐	
832	Y1199	甕A	11.2	*7.6	3/12	口縁部内外面ナデ、ユビオサエ/体部外面上半ハケ、下半ケズリか/体部内面ナデ、ユビオサエ	粗	橙褐	直接接合しない個体で実測/外面全体にすす
833	Y1254 Y1257	甕A	12.0	*7.9	1/12	口縁部調整不明/口縁部外面ヨコナデ/体部外面ナデ、ユビオサエ/口縁部・体部内面調整不明	粗	橙褐	口縁部外面・体部外面下半にすす/肩部に刺突文
834	Y1303	甕A	13.8	*7.6	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ	密	黒灰/灰褐	口縁部外面にすす/外面に黒斑か
835	Y1247	甕A	13.2	*4.0	2/12弱	頸部外面ヨコナデ/肩部外面ナデ	やや粗	淡黄褐	残存率は頸部で計測/外面にすす
836	Y1283	甕C	11.8	*6.0	2/12	口縁部調整不明/口縁部外面ヨコナデ/体部外面ナデ、ユビオサエ	密	橙褐	内外面に黒斑
837	Y418 13D-3	甕A	15.5	*15.3	11/12強	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ/体部内面調整不明	密	淡橙褐	体部中位以下には本来すすが全面に付着
838	Y1515	甕体部	—	*5.3	2.5/12	体部外面ナデ/体部内面ハケのちナデ、ユビオサエ	やや粗	淡茶褐	残存率は頸部で計測/外面全体にすす/肩部に刺突文・内面に黒斑
839	Y1503	甕A	—	*9.7	—	口縁部内外面ヨコナデか/体部内外面ナデ	やや粗	茶褐/淡茶褐	外面全体にすす
840	Y1308	甕D	10.8	*2.7	1.5/12	内外面ともヨコナデか	やや粗	茶褐	口縁部に列点文、頸部に刺突文
841	Y1481	甕D	13.0	*2.4	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	灰褐	頸部外面にすす
842	Y1313	甕D	17.6	*2.5	2.5/12	内外面ともヨコナデか	粗	淡橙褐/黄褐	口縁部に刺突文/口縁部内面に薄い黒斑
843	Y1312	甕	26.8	*3.4	1.5/12	内外面ともヨコナデか	粗	黒灰	
844	Y1501	甕	11.4	*2.3	1/12強	内外面ともヨコナデ	やや粗	暗茶褐	外面にすす
845	Y1206	底部a	—	*4.1	—	外面ミガキ/内面調整不明	やや粗	淡茶褐	内面に黒斑か
846	Y1261	底部c	(5.0)	*4.8	3/12	外面ナデ、ユビオサエ/内面ナデ	やや粗	橙褐	外面上半にすす/内面上部に炭化物が付着か/内面に黒斑
847	Y1232 Y1286	底部c	(5.6)	*5.2	2/12	外面ケズリ/底面・内面調整不明	粗	黒褐	外面に黒斑か
848	Y1273	底部a	(6.6)	*4.2	2/12	外面ナデ、ユビオサエ/内面調整不明	やや粗	黒褐/淡茶褐	
849	Y1249	底部b	(6.5)	*4.1	6/12	内外面ともナデ、ユビオサエ	密	黄褐	底部の形状は楕円形を呈する/外面に黒斑
850	Y1250	底部a	(8.2)	*5.2	12/12弱	内外面とも調整不明/底部外面ユビオサエ	粗	灰褐/淡黄褐	内面に炭化物が付着か/底部の形状は楕円形を呈する
851	Y1230	底部b	(4.6)	*6.0	1/12	外面ハケ/内面ナデ	やや粗	暗茶褐/灰褐	外面にすす付着/底部破断面は接合面
852	Y1227	底部b	(4.6)	*5.3	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	黄灰	
853	Y1233 Y1342	底部b	(4.8)	*2.7	6/12	内外面ともナデ	やや粗	淡橙褐	

854	Y1543	底部 c	(4.6)	*2.6	3/12強	外面ナデか/底・内面ナデ	やや粗	橙褐/淡茶褐	
855	Y1255	底部 b	(4.6)	*2.6	4/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面ナデまたはケズリ/内面ナデか	やや粗	黒褐	外面に黒斑/底面凹凸著しい
856	Y1483	壺体部	—	*6.5	—	外面ミガキ/内面ハケ	やや粗	淡茶褐	
857	Y1228	底部 b	(6.2)	*3.3	12/12	内外面ともナデ	粗	橙褐	外面2次焼成による被熱
858	Y1224	底部 b	(5.2)	*2.2	2/12	内外面とも調整不明/底部外面ユビオサエ	やや粗	黒褐	外面に黒斑
859	Y1248	底部 b	(7.0)	*2.2	7/12	外面ハケのちナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	暗茶褐	
860	Y1225	底部 b	(4.6)	*2.5	12/12	外面・底面ナデ/内面ユビオサエ	やや粗	黄灰	
861	Y1319	底部 b	(2.8)	*2.4	12/12	内外面ともナデ	やや粗	淡橙褐	外面下半に黒斑
862	Y1236	底部 b	(3.6)	*4.0	3/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	
863	Y1209	底部 b	(5.8)	*3.2	11/12強	外面ユビオサエ、ナデ/底面・内面ハケ	粗	灰褐/黄褐	
864	Y1229	底部 b	(3.1)	*3.7	12/12	外面ミガキまたはナデ、ハケ/内面ハケのちナデ	密	淡橙褐	
865	Y1269	高杯 B	20.6	*2.9	1/12弱	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	外面に黒斑
866	Y1260	高杯 B	20.6	*2.3	1/12	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	
867	Y1299	高杯	22.1	*3.2	2/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	灰褐/淡橙褐	外面に黒斑か/広口壺の可能性もある
868	Y1316	高杯 B	21.0	*2.7	1/12未	内面調整不明/外面ヨコナデまたはミガキか	やや粗	淡橙褐	
869	Y1512	高杯 B	26.4	*1.4	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	
870	Y1226-1 141-2	高杯 B	29.8	*3.7	8/12	口縁端部・杯部内面調整不明/杯部外面ミガキ	密	赤褐	外面に黒斑/杯底部外面に化粧土か/杯部内外面2次焼成による被熱か
871	Y426	高杯 A	14.4	*6.9	1/12未	口縁端部ヨコナデ/口縁部内外面ミガキ/杯部内外面・脚部内面ナデ	密	灰褐	接合3類/シボリ痕あり
872	Y440 141-37	高杯 B	25.8	*14.2	2/12	口縁端部ナデ/口縁部内外面・杯部内外面・脚部外面ミガキ/脚部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	暗茶褐/茶褐	接合3類/シボリ痕あり/内外面に黒斑
873	Y1310	高杯 C	16.6	*6.0	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ/杯部内外面ミガキ(単位不明瞭)	やや粗	淡橙褐	
874	Y1200	脚部 a/b	—	*13.5	—	外面ミガキ/内面不調整か	密	淡黄褐	接合1類/シボリ痕あり/沈線5条/スカシ孔5個
875	Y1271	脚部 a/b	—	*14.0	12/12	外面ミガキ/内面不調整	密	橙褐	接合1類か/シボリ痕あり/内面に黒斑
876	Y1297	脚部 a/b	—	*8.4	6/12	外面調整不明/内面ナデ	密	淡茶褐/茶褐	接合2類か/沈線計5条/スカシ孔上段3個、下段1個
877	Y1226-2	脚部 a/b	—	*5.5	—	脚部外面ミガキ/脚部内面ナデ	密	橙褐	接合1類/スカシ孔4個/2次焼成による被熱か
878	Y1276	高杯脚部	—	*9.4	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	接合3類か/スカシ孔7個
879	Y1296	脚部 e	(8.2)	*2.8	—	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	密	黄灰	外面・脚端部内面に黒斑
880	Y1278	脚部 e	—	*3.4	—	外面ミガキ/内面不調整	密	淡茶褐	接合3類か/シボリ痕あり/外面に黒斑
881	Y435 13D-9	脚部 c	(10.8)	*13.0	4/12	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	接合3類か/スカシ孔4段4個計16個/シボリ痕あり
882	Y1291 141-25	脚部 c	—	*12.8	—	接合部外面ハケ/脚部内外面ナデ/脚端部ヨコナデ	やや粗	橙褐	接合3類/スカシ孔上段4個、下段1個/シボリ痕あり
883	Y1284	高杯脚部	(15.2)	*2.2	1/12	内外面とも調整不明	粗	淡橙褐	

884	Y1252	高杯脚部	(15.9)	*4.0	2/12弱	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	灰褐	
885	Y1201	脚部 a	(11.8)	*1.5	1.5/12	外面ナデまたはミガキか/脚端部・内面ヨコナデ	やや粗	橙褐	スカシ孔 2 個
886	Y1265	脚部 a	(15.0)	*3.1	2/12	内外面ともナデか/脚端部ヨコナデか	粗	淡茶褐	
887	Y441	脚部 e	(6.3)	*5.5	12/12弱	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	接合 3 類/スカシ孔上段 4 個、下段 4 個(完存)
888	Y1253	脚部 e か	—	*5.2	—	外面ミガキか(単位不明)/内面ナデ	やや粗	暗茶褐	シボリ痕あり
889	Y1263	脚部 e か	(11.0)	*5.1	1/12未	外面ハケまたはミガキか/内面ナデ	やや粗	淡黄褐	スカシ孔 1 個
890	Y1279	高杯脚部か	(9.0)	*7.8	1/12	外面ハケまたはミガキか/脚端部ヨコナデ/内面ハケのちナデ	やや粗	淡橙褐	内外面に黒斑
891	Y1324	器台 A	16.0	*1.5	1/12強	内外面ともヨコナデ	やや粗	茶褐	口縁帯に円形浮文
892	Y1213	器台 A	20.0	*2.0	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	
893	Y1290	器台 B	18.2	*1.3	1/12未	口縁端部ヨコナデ/外面ナデか/内面ミガキか	やや粗	淡橙褐	
894	Y411 13D-6	器台	14.6 (11.8)	17.3	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/筒部外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/筒部内面ナデ、一部ハケか	やや粗	淡橙褐	スカシ孔上段 3 個、中段 3 個、下段 2 個/沈線上段 8 条、下段 4 条
895	Y1320	器台筒部	—	*7.0	—	外面ナデか(ミガキの可能性あり)/内面ナデ	やや粗	橙褐	スカシ孔 1 個/沈線 3 条、斜線 3 条、沈線 4 条
896	Y1363	器台筒部	—	*9.5	—	外面ナデまたはミガキか/内面ナデか	やや粗	淡赤褐	スカシ孔上段 2 個、下段 1 個
897	Y1264	高杯 C	15.8	*4.7	1.5/12	口縁端部ヨコナデ/外面ミガキ/内面調整不明	やや粗	淡橙褐	内面に黒斑
898	Y1348	鉢か	(3.6)	*5.1	5/12	外面ナデ(ハケのちナデか)/底面・内面ナデ	やや粗	淡橙褐	
899	Y414 13D-13	鉢 A	(4.3)	*8.1	12/12	口縁部外面ヨコナデ/体部内外面ナデ、ユビオサエ(内面一部ハケか)/底部外面ケズリのちナデ(ミガキか)	やや粗	淡茶褐	底部外面 2 次焼成による被熱か/口縁部外面・体部外面上半にすず
900	Y425	鉢 A	8.8	*8.0	4/12	口縁部外面ヨコナデ/体部外面ミガキ/底面ナデ/口縁部・体部内面ナデ	やや粗	橙褐	ミガキが丁寧に施される精製土器の一種
901	Y1325	鉢 B	18.0	*4.2	2/12弱	口縁部外面ユビオサエ、ナデ/体部外面ハケのちナデ/口縁部内面ヨコナデ/体部内面ナデ	やや粗	橙褐	外面全体・口縁部内面に黒斑/体部外面下半にすずか
902	Y427	鉢 B	17.8	*6.4	4/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ	密	灰褐	
903	Y1243	高杯 E	21.6	*5.2	1/12未	口縁部端部ヨコナデ/杯部内外面ミガキ	やや粗	灰褐	内外面に黒斑
904	Y422	鉢 B か	22.7	*7.8	8/12強	内外面とも調整不明(口縁部外面ナデ、ユビオサエ)	やや粗	暗茶褐	
905	Y1294	壺体部	—	—	—	外面ミガキ/内面ナデ、ユビオサエ	粗	黒褐/暗茶褐	波状文 6 条
906	Y1240	壺体部	—	—	—	外面ハケ、ナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	茶褐/黒褐	直線文 4 条・弧状の文様
907	Y419	ミニア土器	6.3	*10.5	3.5/12	内外面ともナデ、ユビオサエ	やや粗	淡赤褐	底部の残存率は 12/12
908	Y1280	ミニア土器	(2.9)	*3.6+ *3.2	—	内外面ともナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	口縁内外面・体部下外面に黒斑
909	Y417 13D-15	手づくね土器	(3.4)	*6.6	—	体部内外面ナデ、ユビオサエ	密	淡橙褐	底部の形状は楕円形を呈する/内外面に淡い黒斑
910	Y389 13D-19	不明	—	—	—	内外面とも調整不明	密	茶褐/暗茶褐	
911	Y379 13D-19	不明	—	—	—	内外面とも調整不明	密	橙褐	スカシあり
912	Y1144	有孔鉢	(4.2)	*1.2	5/12	底部外面ナデ	やや粗	淡橙褐	外面に黒斑

913	Y1204	不明	-	-	-	外面ナデか/突帯ヨコナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡茶褐	突帯部あり
-----	-------	----	---	---	---	-------------------------	-----	-----	-------

B地区 溝S D212

914	Y473 13D-8	器台A	(16.0)	12.3	7/12	口縁部ヨコナデ/筒部外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/口縁部・筒部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	橙褐	残存率は底部で計測/口縁部に擬凹線2条/脚端部付近の外面に工具痕
-----	---------------	-----	--------	------	------	--	-----	----	----------------------------------

B地区 包含層

915	Y1357	広口壺B	16.8	*6.0	1/12	外面調整不明/内面ナデまたはミガキ	粗	淡赤褐	
916	Y1361	広口壺B	14.8	*2.8	2/12	口縁部ヨコナデか/口縁部外面上半ユビオサエ、下半ハケ/口縁部内面ナデか	やや粗	橙褐	
917	Y1356	広口壺B	13.4	*5.0	1/12弱	口縁部ヨコナデ/口縁部外面ナデ/口縁部内面調整不明	粗	橙褐	内面に黒斑
918	Y1369	広口壺か	14.0	*2.6	1/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡茶褐	
919	Y1362	広口壺B	18.6	*4.8	1/12	口縁部調整不明/口縁部内外面ミガキ	やや粗	黄褐/淡橙褐	口縁部内面に拙ない波状文か
920	Y1340	広口壺A	23.8	*2.0	1.5/12	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	器台の可能性あり
921	Y1368	直口壺	9.9	*4.6	4/12	外面ミガキか/内面ナデか	やや粗	淡橙褐	
922	Y1345	不明	-	*3.5	-	内外面ともナデ	やや粗	黄褐	
923	Y1370	直口壺	9.8	*4.9	1/12弱	口縁部ヨコナデ/口縁部外面ハケ/口縁部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐/淡橙褐	口縁部外面に黒斑/口縁外面に化粧土か
924	Y1336	短頸壺	10.9	*3.1	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	淡橙褐	口縁部外面にすず
925	Y439	甕D	15.2	*3.1	2/12強	口縁部内外面ヨコナデ/口唇部強いヨコナデ/頸部内外面ハケ	やや粗	暗茶褐	外面にすず
926	Y1314	広口壺C	22.6	*1.9	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	灰褐	
927	Y1331	底部 a	(6.9)	*6.2	10/12	体部内外面ハケ/底部外面ユビオサエ、/底部丁寧なナデ/底部内面調整不明	粗	茶褐/灰褐	外面に淡い黒斑
928	Y1339	底部 b	(7.2)	*3.5	3/12	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐/黄褐	
929	Y1351	底部 b	(7.3)	*2.5	3/12弱	内外面ともナデ	やや粗	黄褐	外面黒斑か
930	Y1337	底部 b	(5.2)	*3.1	3/12	内外面ともナデ/底面ケズリのちナデ	やや粗	茶褐	底面にケズりに伴う若干の凹凸あり
931	Y1334	底部 b	(4.9)	*3.3	12/12	内外面ともナデ	やや粗	茶褐	外面に淡い黒斑
932	Y1359	底部 b	(5.5)	*3.9	4/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面調整不明	やや粗	淡茶褐	
933	Y1338	底部 a	(6.6)	*3.5	12/12	内外面ともナデ/底面ケズリのちナデ	やや粗	黄褐	底面にケズりに伴う若干の凹凸あり/底面に黒斑
934	Y1353	底部 c	(4.4)	*3.0	1.5/12	内外面ともハケ/底端部外面ナデ	やや粗	黒灰	外面2次焼成による被熱か/内面に炭化物が付着か
935	Y353	ミチュア土器	(2.6)	*2.6	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	黄灰	
936	Y1328	底部 b	(5.4)	*1.8	6/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	橙褐/黄褐	外面2次焼成による被熱か
937	Y1352	底部 c	(4.0)	*1.9	2/12強	外面ケズリか/底面・内面ナデ	やや粗	灰褐	外面2次焼成による被熱か
938	Y1323	底部	(4.3)	*2.1	12/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面・内面ナデ	やや粗	淡黄褐	
939	Y1329	底部 a	(6.5)	*4.2	4/12	体部外面ハケ(ミガキか)/底部外面・底面・体部内面ナデ	やや粗	淡黄褐	外面に淡い黒斑/内面に黒斑
940	Y1330	底部 b	(5.9)	*1.9	2/12	内外面ともナデ/底面調整不明	やや粗	赤褐	外面2次焼成による被熱か
941	Y405	底部	(3.5)	*2.1	9/12強	外面ミガキ/底面・内面ナデ	密	淡橙褐	

942	Y1371	高杯B	28.8	*3.7	1/12未	口縁端部調整不明/杯部内外面ミガキ	やや粗	橙褐	
943	Y1346	高杯	26.6	*6.0	1.5/12	口縁端部ヨコナデ/杯部外面ミガキ/杯部内面上半ナデ、下半ミガキ	やや粗	茶褐	
944	Y1344	高杯C	15.6	*5.5	1/12	口縁端部ヨコナデか/杯部外面ミガキ/杯部内面ナデ	密	黄灰/灰褐	口縁部内面に黒斑
945	Y362	高杯C	17.4	*3.3	1.5/12	口縁端部内外面ヨコナデ/杯部内外面ナデ	やや粗	淡橙褐	
946	Y430	脚部c	—	*7.3	—	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	接合2類か/シボリ痕あり
947	Y1321	脚部e	—	*4.0	12/12	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	接合3類
948	Y1367	高杯接合	—	*2.4	—	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	接合1類
949	Y366 14I-22	脚部b	(15.2)	*15.4	5/12	脚柱部内外面調整不明(成形時のユビオサエ、ナデ)/脚裾部内外面調整不明/脚端部ヨコナデ	やや粗	茶褐	接合1類/接合しない2片から復原/シボリ痕あり/スカシ孔5個
950	Y1366	脚部a/b	—	*13.0	12/12	外面ミガキか/内面不調整(一部ナデ)	やや粗	橙褐	接合1類/シボリ痕あり/沈線上段2条、下段3条/脚柱部外面に黒斑
951	Y1335	脚部c	—	*8.8	12/12	外面ミガキ/内面ナデ	密	暗茶褐	接合1類/スカシ孔4個
952	Y1486	脚部c	—	*7.8	—	外面ハケのちナデか/脚部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	橙褐	シボリ痕あり/スカシ孔1個
953	Y1364	脚部c	—	*10.6	—	外面ミガキか/脚内面上半不調整、下半ナデ	やや粗	橙褐	接合3類/シボリ痕あり/沈線上段5条、下段4条/スカシ孔上段6個、下段7個
954	Y1322	脚部c/e	—	*3.8	—	外面ミガキか/内面ナデ	やや粗	暗茶褐	接合3類か/沈線4条
955	Y1360	脚部e	(7.4)	*6.8	1/12未	外面ミガキ/脚端部調整不明/内面ナデ	やや粗	茶褐	接合3類/シボリ痕あり/スカシ孔計6個
956	Y1333	脚部e	(4.6)	*4.8	4/12	内外面ともナデ/脚端部ヨコナデ	やや粗	淡橙褐	外面に黒斑
957	Y1358	高杯脚部	(12.0)	*1.8	1/12	外面ミガキ/脚端部・内面ヨコナデ	密	淡茶褐	
958	Y1354	高杯脚部	(13.8)	*1.2	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	淡茶褐	
959	Y1538	鉢B	13.6	*5.9	1/12未	口縁部内外面ヨコナデか/体部内外面ナデ	やや粗	淡茶褐/黄褐	口縁部外面にすず/口縁部外面に黒斑
960	Y1349	壺肩部	—	—	—	外面ナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡茶褐	外面に波状文・直線文
961	Y359	有孔鉢	(1.3)	*3.1	12/12	内外面ともナデ	やや粗	橙褐	
962	Y360 13D-18	蓋B	9.1	1.0	—	両面ともナデ	やや粗	茶褐	外面に黒斑/両面とも2次焼成による被熱か/紐通し孔3個
963	Y1510	甕	13.0	*3.6	1/12未	口縁端部ヨコナデ/口縁部・体部内外面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡橙褐	
964	Y410 14I-8	甕A	14.6	*8.3	10/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ハケのちナデ/体部外面ケズリのちナデ/口縁部内面ハケ/体部内面ナデ、ユビオサエ	密	淡茶褐	外面にすず/口縁端面に擬凹線2条
965	Y1513	広口壺B	17.2	*1.4	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	暗茶褐	
966	Y1509	広口壺C	18.8	*2.0	2/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	
967	Y1251	広口壺C	17.6	*4.1	1/12未	口縁部外面・体部内外面調整不明/口縁部内面ヨコナデ	やや粗	灰褐	
968	Y1491 Y1516	広口壺C	13.7	*4.8	1/12未	口縁部ヨコナデ/体部内外面ナデ	やや粗	茶褐	
969	Y1518	底部c	(4.0)	*3.3	2/12	外面ナデ/底面・内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	暗茶褐/黄灰	
970	Y1519	底部c	(3.8)	*2.6	6/12強	外面ハケ/底面ナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	茶褐	外面に淡い黒斑/内面に黒斑c外面2次焼成による比熱

971	Y1505	底部 b	(5.0)	*5.2	11/12強	外面・底面ナデ/内面ユビオサエのちナデ	やや粗	橙褐	底部ドーナツ状を呈する
972	Y410	底部 b	(4.4)	*4.2	12/12	外面ケズリのちナデ/底面ナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	黄褐	外面・底面に黒斑
973	Y397 Y398 14I-23	脚部 c	(13.8)	*12.2	4/12強	杯部内外面・脚部外面ミガキ/脚部内面ユビオサエ、ナデ/脚端部ヨコナデ	密	淡茶褐	接合3類尾/杯部内面に黒斑/シボリ痕あり/スカシ孔2個
974	Y1511	高杯円盤	—	*1.5	12/12	調整不明	やや粗	橙褐	剝離痕あり
975	Y1302	脚部 c/e	—	*7.4	12/12	外面ミガキ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡橙褐	接合3類か
976	Y1343	高杯脚部	(10.2)	*2.7	1/12強	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	
977	Y1506	高杯脚部	—	*4.8	—	外面ミガキか/内面上半ナデ、半ユビオサエのちナデ	やや粗	茶褐	接合3類/スカシ孔上段6個、下段1個
978	Y416	高杯D	17.0	*15.2	5.5/12	内外面とも調整不明	やや粗	黄灰	接合2類か/杯部外面に黒斑/脚部スカシ孔上段5個、下段5個
979	Y420	手づくね土器	(2.9)	*5.7	6/12	内外面ともユビオサエ、ナデ	やや粗	灰褐	底部外面に黒斑
980	Y479	鉢B	9.7	*4.9	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ナデ/体部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	黒灰	内面に黒斑
981	Y1318	器台	10.2	*1.3	1/12強	口縁端部ヨコナデ/口縁部内外面ナデ	密	茶褐	接合しない2片から復原/口縁部に円形浮文(剝離痕)
982	Y1341	器台筒部	—	*4.5	1/12	内外面ともナデ(外面上半調整不明)	やや粗	淡黄褐	残存率は筒部で計測/沈線6条/外面に列点文/スカシ孔1個
983	Y372	広口壺A	30.0	*2.7	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	口縁部上面に黒斑か/口縁部に綾杉文
984	Y1460	広口壺A	24.2	*8.6	2/12	口縁部ヨコナデ/口縁部外面ミガキ/内面調整不明	やや粗	茶褐	
985	Y1495	壺頸部	—	*10.3	8/12	内外面とも調整不明/突帯ヨコナデ	やや粗	茶褐	肩部に刺突文
986	Y1355	広口壺B	11.9	*2.8	1/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部内外面ナデ	やや粗	橙褐	
987	Y1300	直口壺	11.2	*4.8	1/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐/淡黄褐	
988	Y1484	長頸壺	9.5	*8.6	4/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ハケのちミガキ/口縁部内面ナデ	やや粗	淡黄褐	
989	Y413 14I-4	直口壺	14.7	*18.0	2.5/12	口縁部外面ハケのちナデ/頸部外面ヨコナデ/体部外面ハケのちミガキ/口縁部・体部内面ナデ	やや粗	黄褐	
990	Y365 13D-14	壺体部	(3.6)	*9.5	12/12	体部外面上半ハケ、下半ナデか/底面・体部内面・底部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡茶褐/黄褐	底部外面2次焼成による被熱か/体部外面にすず
991	Y363 14I-13	脚台付き甕	—	*10.2	—	体部外面上半ハケのちナデ、下半ユビオサエ/脚台外面ナデ/体部内面ハケのちナデ/脚台内面ナデ、ユビオサエ	密	淡橙褐	体部外面にすず(下半部のすずは薄い)
992	Y354 13D-10	長頸壺	(4.4)	*25.9	12/12	口縁部外面・体部外面調整不明(下半ケズリか)/口縁部内面調整不明/体部内面ナデ	粗	淡茶褐	体部外面にすず(一部のみ遺存)
993	Y1474	体部	—	*19.1	—	内外面ともナデか	やや粗	茶褐	体部内面下半に薄い黒斑
994	Y1485	甕C	11.8	*4.3	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ/頸部・体部内面ナデ	やや粗	橙褐/灰褐	体部上部外面にすず
995	Y1475	甕	—	*4.1	1/12	頸部外面ヨコナデか/体部外面ナデ/頸部・体部内面ナデ	やや粗	淡茶褐	残存率は頸部で計測
996	Y1461	底部 a	(6.2)	*4.7	12/12	体部外面ナデ、ユビオサエ/底面ナデ/体部内面ハケ、ナデ	粗	茶褐/淡茶褐	外面に黒斑
997	Y1497	底部 a	(7.4)	*3.3	6/12弱	外面・底面ナデ/内面ナデか	やや粗	茶褐	

出土遺物観察表

998	Y1468	底部 a	(5.4)	*4.1	2/12	体部外面ミガキか/底部外面ユビオサエ/底面ナデ/体部内面調整不明	やや粗	淡茶褐	内面に黒斑か
999	Y1327	底部 b	(4.8)	*4.9	10/12	内外面ともハケのちナデ、ユビオサエ/底面ナデ	やや粗	暗茶褐/茶褐	
1000	Y1499	底部 b	(3.6)	*4.0	1/12未	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	黒灰	底部外面・内面に黒斑
1001	Y1479	脚台	(4.6)	*3.5	12/12	外面上半ナデか、下半ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	暗茶褐	内面に黒斑
1002	Y1465	底部 c	(4.0)	*4.0	3/12	外面ケズリ/底面・内面ナデ	やや粗	淡茶褐	外面全面に黒斑
1003	Y1466	底部 b	(5.7)	*3.8	12/12	内外面ともナデ、ユビオサエ/底面ナデ	やや粗	橙褐	内面に黒斑
1004	Y1496	底部 b	(6.0)	*2.2	3/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	暗茶褐	底部の破断面は接合面
1005	Y1498	底部 b	(5.9)	*2.3	12/12	外面ナデか/内面ナデ	粗	灰褐	内面に黒斑
1006	Y1464	底部 a	(5.7)	*2.5	5/12	外面ナデ/内面調整不明	やや粗	茶褐	内面に黒斑
1007	Y1463	底部 b	(3.0)	*1.2	6/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面・内面ナデ	やや粗	赤褐/茶褐	底部外面 2 次焼成による被熱か
1008	Y1482	底部 c	(4.0)	*1.2	6/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡灰黄	
1009	Y1467	底部	(4.0)	*2.0	7/12	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐/淡黄褐	底部外面 2 次焼成による被熱/外面にすず
1010	Y1347	ミフア土器	3.6	*2.3	1/12	内外面とも調整不明	やや粗	橙褐	
1011	Y1281	ミフア土器	(2.7)	*2.4	5/12	外面ユビオサエ、ナデ/内面ナデ	やや粗	黒灰	外面に黒斑か
1012	Y1372	高杯 B	23.7	*2.8	1/12強	口縁部内外面ヨコナデか(ミガキの可能性あり)/杯部内外面ミガキ	やや粗	淡橙褐	口縁部外面に黒斑
1013	Y1490	高杯接合	—	*2.1	—	外面ミガキ/内面調整不明	やや粗	橙褐	接合 1 類
1014	Y1476	脚部 c	—	*6.4	2/12	外面調整不明/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡橙褐	接合 2 類か
1015	Y1471	脚部 a	—	*5.7	—	外面ミガキ/内面上半不調整、下半ナデ	やや粗	灰褐	接合 1 類か/シボリ痕あり/内面に黒斑
1016	Y1470	脚部 e	(8.2)	*5.7	11/12	内外面ともナデか/脚端部ヨコナデ	密	茶褐	接合 3 類
1017	Y1473	脚部 a	(16.6)	*2.8	2/12弱	内外面ともナデか/脚端部ヨコナデ	やや粗	茶褐	スカシ孔 2 個
1018	Y1542	脚部 b/d	—	*2.1	—	外面ミガキか/内面調整不明	やや粗	淡橙褐	沈線 2 条
1019	Y1508	体部片	—	—	—	外面ナデか/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	外面に黒斑/外面に刺突文
1020	Y1469	鉢 B か	—	*2.5	1/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ	やや粗	淡茶褐	
1021	Y364	器台脚部	(14.3)	*4.0	2/12弱	内外面ともナデ	密	灰褐	脚端部外面に綾杉文
1022	Y1214	器台脚部	(14.6)	*3.0	1/12強	内外面ともナデか/脚端部ヨコナデ	やや粗	淡橙褐	外面全体に黒斑
1023	Y358 14I-34	器台	(13.2)	*10.3	3/12強	筒部・脚部内外面ナデか/脚端部ヨコナデ	やや粗	黄褐	スカシ孔 3 個
1024	Y1492	器台 A	34.0	*16.9	1/12未	口縁帯・口縁部内外面・筒部外面調整不明/筒部内面ナデ	粗	淡橙褐	スカシ孔 1 個
1025	Y1477	不明	—	*5.7	1/12未	内外面とも調整不明	粗	黄灰	天地不明
1026	Y1478	高杯 B	—	*2.9	1/12	内外面調整不明(杯部内面ヨコナデか)	やや粗	淡橙褐/黄褐	残存率は杯屈曲部で計測
1027	Y978	底部	(3.2)	*1.8	6/12	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	底部に 2 次焼成による被熱
1028	Y1480	高杯脚部	(10.8)	*1.7	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	
1029	Y1472	脚部 e	(9.5)	*8.1	1/12未	内外面ともナデか/脚端部ヨコナデ	やや粗	黄灰	接合 3 類/スカシ孔 2 個
1030	Y438 14I-16	広口壺 A	20.2	*8.9	4/12	口縁帯ヨコナデ/口縁部外面ハケ/口縁部内面・頸部内外面調整不明	粗	淡茶褐	口縁帯に波状文/頸部外面に押し引き状の沈線 2 条

1031	Y1514	広口壺 Bか	14.4	*5.2	3/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデか	やや粗	淡橙褐	
1032	Y356 13D-11	長頸壺	11.5 (4.4)	24.2	5/12弱	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面・体部外面上半ナデ、ユビオサエ、下半ケズリ/底面ナデ、ケズリか/口縁部内面・体部内面ナデ	やや粗	橙褐/黄褐	口縁部・体部内外面に黒斑/体部外面部分的にすず
1033	Y1529	甕C	14.0	*5.7	1/12	口縁部外面調整不明/体部内外面ナデ/口縁部内面ヨコナデ	粗	淡橙褐/灰褐	
1034	Y1502	甕C	11.3	*3.2	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケか/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	橙褐	内外面に黒斑/口縁部外面にすず
1035	Y1500	甕Aか	13.7	*2.2	1/12強	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	淡橙褐	頸部外面にすず
1036	Y1527	甕A	13.8	*2.4	4/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ	密	淡黄褐	外面に黒斑
1037	Y1535	甕A	15.6	*3.2	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	淡橙褐	口縁部外面に黒斑
1038	Y1488	甕	17.1	*1.9	2/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ナデか/口縁部内面調整不明	やや粗	淡橙褐	口縁部外面にすず/口縁端部に刻み目
1039	Y1528	底部a	(4.9)	*1.6	12/12	内外面ともナデ	やや粗	淡橙褐	
1040	Y1517	底部a	(4.9)	*2.2	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/内面ナデか	やや粗	灰褐	外面に黒斑
1041	Y1301	底部b	(5.7)	*2.3	12/12	内外面ともナデ	やや粗	灰褐	内外面に黒斑
1042	Y1520	高杯	22.8	*3.2	4/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部内外面調整不明	やや粗	橙褐	外面に黒斑
1043	Y357 13D-5	高杯A	23.2 (12.4)	16.9	4/12	口縁端部ヨコナデ/杯部内外面・脚部外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/脚部内面ナデ	密	淡黄褐	スカシ孔4個
1044	Y1540	脚部a/b	—	*7.6	—	外面ミガキか/内面ナデか	やや粗	淡黄褐	接合1類/沈線7条ないし8条/スカシ孔3個/シボり痕あり/外面に黒斑
1045	Y1524	高杯脚部	—	*5.9	—	脚部外面ミガキ、ユビオサエ/脚部内面ナデ	やや粗	橙褐	接合3類か
1046	Y1523	脚部c	—	*8.4	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	淡橙褐/茶褐	接合1類か/シボり痕あり/スカシ孔2個
1047	Y1525	脚部c	—	*8.2	—	外面ハケ(ミガキか)/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	接合3類か/シボり痕あり/スカシ孔3個
1048	Y1532	高杯接合	—	*2.3	—	内外面とも調整不明	やや粗	暗茶褐	接合1類
1049	Y1533	高杯円盤	—	*2.0	—	ナデ	やや粗	淡橙褐	
1050	Y1487	高杯脚部	(13.8)	*2.1	3/12	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ(脚端面は強めのヨコナデ)/内面ナデ	やや粗	橙褐	スカシ孔1個
1051	Y1534	鉢	15.6	*5.0	1/12強	口縁端部・口縁部外面ヨコナデ/体部外面ナデか/口縁部・体部内面ナデか	密	灰褐	
1052	Y1531	器台A	22.8	*1.8	1/12強	口縁部調整不明	やや粗	茶褐	口縁部に黒斑/口縁部に竹管文2個
1053	Y1537	器台筒部	—	*7.3	—	外面ナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡茶褐	外面に沈線6条(不明瞭)
1054	Y1539	器台脚部	(11.6)	*4.9	2/12	外面ハケ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	
1055	Y1522	器台脚部か	(17.8)	*6.1	1/12強	外面ハケのちナデか/脚端部調整不明/内面ユビオサエのちナデ	やや粗	淡橙褐	スカシ孔2個
1056	Y1217	甕	13.2	*3.0	1.5/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡赤褐/黒灰	内外面に淡い黒斑/外面にすずか
1057	Y1219	甕	14.4	*2.7	1.5/12強	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ユビオサエ、ナデ	密	淡橙褐	口縁端面に刻み目/肩部に列点文
1058	Y1216	甕A	12.5	*4.5	1.5/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	肩部外面に淡い黒斑
1059	Y1215	底部c	(4.6)	*2.9	9/12弱	外面ケズリか/底面ナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	暗茶褐	外面に淡い黒斑/外面に2次焼成による赤変
1060	Y1220	脚部cか	—	*5.8	—	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	接合3類

C地区 包含層

1061	Y465	広口壺A	23.0	*4.3	2/12	口縁部・口縁部内面調整不明	粗	茶褐	口縁部に竹管文、擬凹線1条
1062	Y922	広口壺A	15.5	*1.4	1/12未	口縁部ヨコナデ	やや粗	暗茶褐	
1063	Y1381	高杯B	20.0	*3.4	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	
1064	Y1375	底部a	(5.6)	*2.7	6/12	内外面ナデ/底面ユビオサエ、ナデ	やや粗	橙褐	内外面に黒斑
1065	Y1373	底部a	(5.8)	*2.3	12/12	内外面ともナデ	やや粗	淡橙褐/灰褐	外面に黒斑
1066	Y474	底部a	(6.8)	*3.3	11/12	外面タタキのちナデ/内面板ナデ	やや粗	茶褐	
1067	Y1377	脚部c	—	*6.7	—	外面ミガキ/内面不調整ないし軽いナデか	密	茶褐	接合3類/シボリ痕あり/沈線上位9条、下段3条以上
1068	Y477	脚部c	(13.1)	*8.5	3/12弱	外面ミガキ/内面上半ナデ、中位ハケ、下半ナデ、ユビオサエ	密	淡橙褐	接合1類か/スカシ孔上位2個、下段3個
1069	Y1379	脚部e	—	*5.8	—	外面ミガキ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡橙褐	接合3類/シボリ痕あり
1070	Y464	脚部b	(14.6)	*3.3	2/12	外面上部ミガキか、下部ナデ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡茶褐	スカシ孔上位1個、下部2個/外面に赤色塗料

C地区 竪穴式住居跡S B235

1071	Y910	広口壺D	11.2	*1.6	3/12	口縁部・口縁部内面ヨコナデか/頸部外面調整不明	やや粗	黄褐	口縁部に竹管文
1072	Y931	無頸壺A	11.4	*4.4	1/12未	内外面とも調整不明(外面ユビオサエ)	やや粗	黄褐	
1073	Y445 Y929	直口壺	—	*10.1	12/12	口縁部外面ミガキ/口縁部内面・体部内外面調整不明(内面ユビオサエあり)	やや粗	黄褐	残存率は頸部で計測/肩部外面に黒斑/肩部に直線文・波状文
1074	Y926	甕	33.0	*15.5	1/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ナデ/体部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	灰褐	体部外面全体に黒斑/体部外面下半にすず
1075	Y918	甕A	14.0	*15.8	3/12	口縁部・口縁部外面ヨコナデ/体部外面ハケ(下半ハケのちナデか)/口縁部内面ハケのちナデ/体部内面ナデ	やや粗	淡橙褐	接合しない口縁部と体部から復原/口縁部・肩部に刺突文/体部外面に黒斑/体部外面にすず
1076	Y934	甕A	18.0	*4.5	1/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部内外面調整不明	やや粗	黄褐	外面にすず
1077	Y930	甕C	10.8	*3.5	1/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケのちナデ/体部内面ナデ	密	淡茶褐	頸部外面にすず
1078	Y916	甕体部	—	*7.9	2/12	外面ハケのちナデ/内面ユビオサエのちナデ	やや粗	灰褐	残存率は体部最大径で計測/外面に黒斑/外面2次焼成による被熱
1079	Y917	底部b	(4.6)	*2.6	10/12	外面ミガキか/底面ナデ/内面ユビオサエ	やや粗	黄灰	底面2次焼成による被熱か
1080	Y914	底部b	(6.8)	*2.2	2/12	外面ユビオサエ/底面調整不明/内面ナデか	やや粗	黒灰	底部外面2次焼成による被熱か/外面に黒斑
1081	Y907	底部b	(6.0)	*2.6	3/12	内外面ともユビオサエ、ナデか/底面ナデか	やや粗	橙褐/淡茶褐	
1082	Y478	底部b	(5.0)	*3.4	12/12	外面ナデ/内面ハケ、ナデ	やや粗	黄灰/灰褐	底面に黒斑
1083	Y909	底部b	(3.6)	*3.3	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	茶褐	
1084	Y906	底部b	(3.5)	*1.7	8/12	内外面・底面ユビオサエ、ナデ	やや粗	黒灰	内外面とも黒斑か
1085	Y915	底部c	(4.4)	*1.6	4/12弱	内外面とも調整不明(内面ナデか)	やや粗	淡橙褐	底面2次焼成による被熱か
1086	Y912	底部c	(2.7)	*2.3	2/12	外面調整不明/内面ナデ	やや粗	茶褐	外面2次焼成による被熱/内面に黒斑
1087	Y920	鉢B	15.1	*4.0	2/12強	口縁部・口縁部内面・体部内面調整不明/口縁部外面ハケか/頸部外面ユビオサエ/体部外面ハケ	やや粗	淡茶褐	頸部外面にすずか

1088	Y452	高杯B	25.3	*5.0	2.5/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部内外面・杯部内面ミガキ/杯部外面調整不明	やや粗	橙褐	杯口縁部、粘土接合面で剥離
1089	Y448	高杯B	25.0	*2.6	1/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部・杯部外面ミガキ/杯屈曲部外面ヨコナデ/口縁部・杯部内面調整不明	やや粗	橙褐	
1090	Y932	高杯B	19.6	*2.7	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	黒褐	内外面とも黒斑
1091	Y923	高杯B	17.2	*3.2	2/12弱	内外面とも調整不明	やや粗	灰黄	残存率は杯屈曲部で計測
1092	Y443	高杯Cか	18.2	*3.8	1/12	口縁端部ナデ/杯部内外面ハケ	やや粗	灰黄	
1093	Y911	不明	—	*2.7	—	内外面とも調整不明	粗	茶褐	甕の脚台の可能性もある
1094	Y919	脚部 c/e	—	*5.0	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	黄褐	接合2類
1095	Y933	脚部 c	—	*11.6	—	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	スカシ孔2個
1096	Y913	高杯脚部	(14.6)	*3.0	1/12	外面ハケのちナデ/脚端部ヨコナデ(内面強いヨコナデ)/内面ナデ	やや粗	黄褐	
1097	Y927	高杯脚部	(12.9)	*3.0	3/12強	外面ハケのちミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	スカシ孔2個/内面に黒斑
1098	Y447	脚台	(7.5)	*4.9	3/12	体部外面・脚台外面ハケ/脚台接合部外面ハケのちナデ/脚台端部ナデ/体部内面・脚台部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	暗茶褐	脚台内外面に黒斑
1099	Y466	器台	23.2	*1.4	2/12	口縁部外面ナデ、一部ユビオサエ/口縁部内面ナデ(ミガキの可能性あり)	やや粗	橙褐	口縁部に竹管文
1100	Y463	体部片	—	—	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	黄褐	外面に斜格子文・直線文
1101	Y444 13D-17	体部片	—	—	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	黄褐	外面に斜格子文・直線文
1102	Y442 13D-16	器台A	29.7	*4.2	1/12	口縁部・口縁部内面ヨコナデ/口縁部外面ハケのちミガキ/頸部内面ミガキ、ユビオサエ	やや粗	灰褐	口縁部に竹管文(2個確認)/口縁部上面に竹管文と放射線状文様

C地区 竪穴式住居跡S B236

1103	Y941	広口壺A	17.0	*8.8	2/12強	口縁部ヨコナデ/口縁部・頸部内面ユビオサエ、ナデ/頸部外面ハケ	やや粗	黄褐	口縁部に淡い黒斑
1104	Y456	広口壺A	18.8	*3.7	1/12強	口縁部ナデ/口縁部外面ハケ(下半ハケのちナデか)/口縁部内面ハケ	やや粗	淡茶褐	内面に黒斑
1105	Y472 14I-29	広口壺A	17.4	*6.8	2/12	口縁部・口縁部内面ヨコナデ/頸部外面ミガキ/頸部内面調整不明(ナデか)	やや粗	黄褐	口縁部に擬凹線2条、円形浮文
1106	Y471	甕A	15.0	*14.5	4/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ハケのちヨコナデ/体部外面・口縁部内面ハケ、一部ナデ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	灰褐/淡茶褐	外面にすす/外面2次焼成による被熱
1107	Y457	甕A	26.0	*6.0	1/12未	口縁端部・口縁部外面ヨコナデ/頸部体部外面ハケのちナデ/口縁部内面ハケ/体部内面ハケのちナデ	やや粗	淡茶褐	
1108	Y963	甕D	13.2	*2.9	2/12	口縁部内外面ともヨコナデ/頸部内外面ともナデ	やや粗	淡茶褐	口縁部に刺突文/外面にすす
1109	Y953	甕B	14.0	*5.4	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面タタキのちナデ/体部内面ナデ	やや粗	淡黄褐	口縁部外面にすす
1110	Y469 14I-10	甕A	16.0	*4.4	12/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部内外面ナデ、ユビオサエ	密	黄褐	
1111	Y973	甕A	14.8	*3.1	1/12未	口縁端部・口縁部内面ヨコナデ/口縁部外面ハケ/体部内外面ナデ	やや粗	淡橙褐	
1112	Y977	底部 b	(4.2)	*3.7	5/12弱	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	黒灰	
1113	Y936	底部 a	(5.0)	*2.2	8.5/12	外面・底面ユビオサエ、ナデ/内面強いナデ	やや粗	暗茶褐	
1114	Y943	底部 c	(4.2)	*1.8	2/12	外面ナデ/内面ユビオサエ、ナデ	密	灰褐	内面に黒斑
1115	Y959	底部 b	(5.2)	*3.0	6/12	外面ハケ、ユビオサエ、ナデ/底面ナデ/内面調整不明	やや粗	暗茶褐	底面に黒斑

出土遺物観察表

1116	Y937	底部 b	(5.4)	*2.9	4/12	外面ナデ/底面ユビオサエ、ナデ/内面調整不明	やや粗	茶褐	
1117	Y962	底部 b	(4.4)	*1.1	3/12	外面ハケ/底面ナデ/内面調整不明	やや粗	淡橙褐	外面に淡い黒斑/外面2次焼成による被熱か
1118	Y938	底部 b	(4.6)	*2.1	3/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	橙褐	
1119	Y961	底部 c	(6.2)	*3.4	3/12	外面ハケ/底面・内面ナデ	やや粗	淡茶褐	
1120	Y940	底部 b	(4.6)	*2.1	11/12	内外面ともユビオサエ、ナデ/底面ユビオサエ	やや粗	淡茶褐	
1121	Y950	底部 b	(2.2)	*1.7	12/12	内外面ともナデ	やや粗	淡橙褐	
1122	Y935	底部 b	(4.2)	*2.0	12/12	外面ハケのちナデ、ユビオサエ/底面ナデ/内面ナデ、ユビオサエ	密	淡黄褐	
1123	Y944	底部 c	(5.2)	*2.5	3/12	外面ハケ/底面ナデ/内面ナデか	やや粗	淡茶褐	
1124	Y968	底部 c	(3.6)	*1.2	9/12	内外面とも調整不明/底面ユビオサエ、ナデ	やや粗	赤褐	内面に黒斑
1125	Y952	底部 a	(3.6)	*2.6	9/12	外面ユビオサエ、ナデ/内面ユビオサエ	やや粗	灰褐	内外面に黒斑
1126	Y960	底部 c	(7.2)	*6.6	3/12弱	外面ナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡茶褐	
1127	Y972	ミナチア土器	8.6	*1.5	1.5/12	内外面ともヨコナデ	密	灰褐	
1128	Y957	鉢 B	11.4	*1.5	1/12未	内外面ともヨコナデ	密	灰褐	口縁端部に刻み目
1129	Y475	脚部 c	—	*6.6	—	外面ミガキか/内面ユビオサエ	やや粗	淡橙褐	接合2類か/シボリ痕あり/沈線4条
1130	Y949	脚部 c	—	*4.4	—	内外面とも調整不明	やや粗	黄灰	接合3類か
1131	Y476	高杯 c/e	—	*7.7	—	外面ミガキまたはハケか/内面ナデ	やや粗	橙褐/黄褐	接合3類/シボリ痕あり/スカシ孔4個
1132	Y458	脚部 e	—	*4.6	—	外面ミガキまたはハケ/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	
1133	Y954	脚部 e	(7.2)	*3.1	1/12	外面ミガキか/内面ハケのちナデ/脚端部調整不明	やや粗	淡茶褐	
1134	Y942	器台 A	16.6	*1.6	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	口縁帯に円形浮文
1135	Y939	器台 A	28.4	*2.2	1/12	口縁帯・口縁部内外面調整不明/口縁部下垂部強いヨコナデ	やや粗	淡茶褐	口縁部上面に放射線状の文様・竹管文/口縁部に竹管文
1136	Y975	器台 B	25.0	*2.3	1/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面ミガキか	やや粗	黄褐	口縁端面に列点文
1137	Y974	高杯脚部	(18.0)	*1.1	1/12	内外面とも調整不明(ヨコナデか)	やや粗	橙褐	脚端部に刻み目あり
1138	Y966	鉢 C	10.2	*2.8	1/12未	口縁部・体部内面ヨコナデ/体部外面ミガキか	密	淡黄褐	
1139	Y965	鉢 C	12.2	*2.8	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	暗茶褐/茶褐	
1140	Y969	有孔鉢	(3.6)	*2.1	5/12強	外面ユビオサエのちナデ/底面・内面ナデ	粗	淡茶褐	内外面に黒斑/底面に直径約1.8cmの穿孔
1141	Y970	有孔鉢	(4.2)	*3.3	9/12	外面タタキのちナデか/底面ナデ/内面調整不明(ナデか)	やや粗	橙褐/黄褐	底面に直径約1.4cmの穿孔
1142	Y955	体部片	—	—	—	外面ナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	暗茶褐	外面に直線文・列点文
1143	Y958	体部片	—	—	—	外面タタキ/内面ユビオサエ、ナデ	密	灰褐	
1144	Y453	不明	—	—	—	内外面ともナデ	密	橙褐	
1145	Y455	不明	—	—	—	内外面ともナデ	密	淡茶褐	
1146	Y454	不明	—	—	—	内外面ともナデ	密	淡茶褐	

C地区 溝 S D 237

1147	Y776	高杯接合	—	*3.8	—	外面調整不明/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	接合1類か
1148	Y1380	脚部 c か	—	*4.2	—	外面調整不明/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	シボリ痕あり

E地区 包含層

1149	Y1457	器台Aか	13.6	*1.0	1/12未	口縁帯ヨコナデ/口縁部内面ヨコナデか	やや粗	橙褐	口縁帯に波状文
1150	Y1440	底部a	(6.3)	*5.5	7/12弱	体部外面ハケのちナデ/底部外面ユビオサエ/底面ケズリのちナデか/体部内面ナデ	やや粗	黄褐	
1151	Y550 Y1430	脚部c	(11.0)	*7.5	3/12	外面ミガキ(下半ハケか)/脚端部ヨコナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐	シボリ痕あり
1152	Y1448	脚部c	—	*4.4	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	茶褐	スカシ孔2個
1153	Y1458	高杯脚部	(13.0)	*1.2	1/12未	脚端部・外面ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	橙褐	
1154	Y1037	器台筒部	—	*6.8	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	橙褐	沈線5条/スカシ孔1個/脚部外面下部に黒斑
1155	Y1453	高杯B	23.7	*2.0	1/12未	口縁端部ヨコナデか/口縁部外面ヨコナデか/口縁部内面ナデか	やや粗	淡茶褐	
1156	Y1038	高杯B	16.9	*2.5	1/12未	内外面ともヨコナデ	やや粗	黒灰	

D地区 包含層

1157	Y1444	広口壺E	20.5	*5.5	3/12	口縁帯・頸部外面ヨコナデ/口縁部内面・頸部内面ナデか	やや粗	茶褐	口縁帯に列点文
1158	Y1452	広口壺A	20.0	*3.8	2/12	内外面とも調整不明	粗	淡黄褐	
1159	Y546 Y547 14I-1	器台A	28.0	*2.2	2/12	口縁帯ヨコナデ/頸部外面ミガキ/口縁部内面上半ヨコナデ、ユビオサエ、下半ミガキ	やや粗	淡茶褐	口縁帯に擬凹線3条、円形浮文/口縁はややいびつ/口縁帯に黒斑
1160	Y540	広口壺A	20.0	*6.4	2/12	口縁帯ヨコナデ/頸部外面ナデ、ユビオサエ/口縁部内面ヨコナデか/頸部内面調整不明	やや粗	淡橙褐	口縁帯に竹管文
1161	Y1427	広口壺A	14.9	*7.7	1.5/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	口縁帯剥離
1162	Y1433	広口壺B	10.4	*3.1	2/12	口縁部内外面・頸部外面ヨコナデ/頸部内面ナデ	やや粗	淡橙褐	
1163	Y1426	無頸壺A	11.2	*7.7	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	
1164	Y1421	甕C	11.4	*7.3	5/12	外面調整不明/口縁部・体部内面ユビオサエ	やや粗	橙褐	外面に黒斑
1165	Y1454	直口壺	13.2	*9.2	1/12強	外面ナデか/内面調整不明	粗	茶褐	
1166	Y1432	壺頸部	—	*6.6	—	内外面とも調整不明	やや粗	淡茶褐	
1167	Y1422	直口壺	9.2	*5.3	2/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部内外面ナデ、ユビオサエ	やや粗	橙褐	頸部外面のハケ痕跡は調整ではない可能性が高い
1168	Y1420	甕A	20.8	*4.8	2/12	口縁部端部・体部外面・口縁部内面調整不明/口縁部外面ヨコナデ/体部内面ユビオサエ、ナデ	粗	灰褐/淡茶褐	
1169	Y1431	底部b	(4.8)	*3.9	12/12	内外面とも調整不明	粗	淡茶褐	
1170	Y1450	底部b	(5.1)	*2.9	12/12	内外面とも調整不明	粗	淡橙褐	
1171	Y1438	底部b	(5.5)	*2.9	2/12	外面調整不明/内面ナデか	粗	茶褐/淡茶褐	底部破断面は接合面/外面2次焼成による被熱か
1172	Y1451	底部b	(5.7)	*2.6	12/12	内外面とも調整不明	やや粗	暗茶褐	
1173	Y1429	底部b	(4.3)	*2.5	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面調整不明/内面ナデ	やや粗	淡茶褐	内面に黒斑
1174	Y1439	底部b	(4.4)	*3.1	5/12	内外面ともユビオサエ、ナデ/底面ナデ	やや粗	灰褐	内面に黒斑/底面形は隅丸方形か(かなりいびつ)
1175	Y549	脚台	(4.9)	*5.6	12/12弱	体部外面調整不明/脚台外面ユビオサエ/脚台内面ナデ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	
1176	Y1445	高杯B	24.4	*3.3	1/12未	外面調整不明/内面ヨコナデか	やや粗	淡橙褐	

出土遺物観察表

1177	Y1442	高杯B	27.0	*6.1	3/12	口縁端部・杯口縁部外面ヨコナデ(下半強めのヨコナデ)/杯部外面ナデまたはミガキか/杯部内面ミガキか	やや粗	淡黄褐/橙褐	外面に黒斑
1178	Y1443	高杯B	18.6	*5.2	5/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	残存率は杯屈折部で計測/杯部外面に黒斑
1179	Y1418	高杯Cか	13.0	*3.9	1/12	口縁端部ヨコナデ/杯部内外面ナデ、ミガキ	やや粗	灰褐	
1180	Y536 14I-3	高杯D	—	*5.7	6/12弱	杯部内外面ミガキ	やや粗	淡橙褐	杯部稜に刻み状の装飾
1181	Y1449	脚部c	—	*5.5	—	外面調整不明/内面ナデ	やや粗	橙褐	接合3類/シボリ痕あり
1182	Y1447	脚部c	—	*7.5	—	内外面とも調整不明	やや粗	淡茶褐	沈線1条/スカシ孔3個
1183	Y1434	高杯脚部	(11.0)	*2.9	1/12	脚部外面上半ハケのちナデ/脚端部ヨコナデ/脚部内面ナデ	やや粗	淡茶褐	スカシ孔1個
1184	Y1456	器台か	14.0	*2.2	1/12未	口縁端部ヨコナデ/外面ミガキ/内面ナデか(ミガキの可能性あり)	やや粗	淡茶褐	口縁外面に刻み目
1185	Y1441	器台	15.6	*2.0	2/12弱	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ユビオサエ、ナデ/口縁部内面ミガキか	やや粗	淡茶褐	破断面は接合面
1186	Y1459	器台A	15.9	*1.0	1/12未	口縁部外面ユビオサエ、ヨコナデ/内面ナデか	やや粗	淡茶褐	口縁部上面に竹管文
1187	Y1437	器台脚部	(16.4)	*5.1	10/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	脚端部に刻み目
1188	Y1436	器台脚部	(17.2)	*9.0	1/12強	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	スカシ孔1個
1189	Y1446	器台筒部	—	*8.3	—	外面調整不明/内面ナデ	やや粗	淡黄褐	スカシ孔2個/沈線6条
1190	Y538	甕D体部	—	—	—	外面ナデ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐	

E地区 段状遺構S X 251

1191	Y1044	甕A	10.0	*2.5	1/12	口縁部外面ナデ/口縁端部・口縁部内面ヨコナデ/頸部内面ナデ	やや粗	灰褐/橙褐	
1192	Y1029	器台筒部	—	*5.3	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	橙褐	沈線上段3条、下段5条/スカシ孔2個
1193	Y539 14I-40	脚部b	(17.0)	*3.6	2/12弱	脚部外面(上面)ミガキ/脚端部ヨコナデ/脚部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	橙褐	脚部外面上半に刺突文(4段)/スカシ孔脚部上部2個、下部2個
1194	Y1034	鉢B	14.2	*3.9	1/12	内外面とも調整不明(部分的にナデ)	粗	橙褐	
1195	Y741	底部b	(6.3)	*4.3	2/12	外面ハケのちナデ/底面ナデ/内面ハケ	やや粗	橙褐	内面に黒斑
1196	Y754	底部b	(5.0)	*3.0	3/12弱	外面ミガキ、ユビオサエ、ナデ/底面ナデ/内面ナデか	粗	橙褐	内面に黒斑
1197	Y1033	底部b	(5.2)	*2.4	12/12	外面ナデ/底面工具によるナデまたは浅いケズリ/内面ハケ	やや粗	黒灰/淡黄褐	
1198	Y1028	器台脚部	(10.4)	*4.7	2/12	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	橙褐	

E地区 段状遺構S X 252

1199	Y554	甕A	19.0	*6.3	1/12強	口縁端部・口縁部内外面ヨコナデか/体部外面ハケ/体部内面ナデ	やや粗	黒灰/暗茶褐	口縁端面に擬凹線3条/体部外面に黒斑
1200	Y1043	底部b	(5.2)	*2.9	10/12	外面ケズリ、ナデ/底面ケズリ(周囲ナデ)/内面ハケ	やや粗	淡橙褐	外面に黒斑/底面にナデ、小石の痕
1201	Y1042	底部b	(3.8)	*2.7	12/12	外面タタキ(一部ナデ)/底面丁寧なナデ(周囲にユビオサエ)/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	ドーナツ状の底部
1202	Y1040	高杯B	23.9	*2.7	1/12未	口縁端部・口縁部内面ヨコナデ/口縁部外面ミガキ	やや粗	淡橙褐	杯部外面に黒斑
1203	Y1039	高杯B	23.4	*2.8	1/12未	口縁端部・口縁部内面ヨコナデ/口縁部外面・杯部内外面ミガキ	やや粗	橙褐/黄褐	
1204	Y1035	脚部c	—	*8.3	—	杯部外面ハケ/脚部外面ミガキ/杯部内面ハケのちナデ/脚部内面ナデ	やや粗	茶褐	スカシ孔1個

1205	Y1036	高杯接合	—	*1.9	—	内外面ともミガキ	やや粗	淡橙褐	
1206	Y1045	脚部 b	(16.4)	*2.2	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	橙褐	スカシ孔1個/外面に刺突文

E地区 段状遺構 S X 253

1207	Y541 14I-15	細頸壺	6.1	*13.1	4.5/12	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ミガキ/ 頸部内面ナデ	やや粗	橙褐~黄 褐	
1208	Y1076	広口壺 A	19.0	*1.7	1/12未	口縁部・口縁部内面ヨコナデ	やや粗	茶褐	
1209	Y1077	広口壺 A	20.1	*1.7	1/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内面ヨコナデか	やや粗	淡黄褐	
1210	Y1384	広口壺 A	21.0	*2.7	1/12未	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	口縁部下垂部剥離
1211	Y1082	広口壺 A	13.8	*3.1	1/12	口縁部ヨコナデ/頸部外面ハケ/口縁部 内面ハケのちナデ/頸部内面ユビオサ エ、ナデ	密	灰褐	口縁部に円形浮文/外面に 黒斑
1212	Y1096	広口壺 A	11.0	*3.0	2/12	口縁部ヨコナデ、ユビオサエ/頸部外面 ハケ/口縁部内面強いナデ/頸部内面ナ デ	やや粗	黄褐	
1213	Y1091	広口壺 A	14.0	*1.6	1/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面調整不明	やや粗	橙褐	口縁部外面にすず
1214	Y1408	壺頸部	—	*6.7	—	頸部外面ミガキ/肩部突帯ヨコナデか/ 頸部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	黄褐/黒 灰	突帯面に列点文/内面に黒 斑か
1215	Y543	壺頸部	—	*5.1	1/12	頸部外面ミガキか/肩部突帯ヨコナデか /体部外面調整不明/頸部・体部内面ユ ビオサエ、ナデ	やや粗	橙褐	残存率は頸部で計測/内面 全面に黒斑
1216	Y1080 14I-39	蓋 A	10.2	*2.0	3/12弱	外面調整不明(部分的にミガキ)/端部ヨ コナデか/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	橙褐	
1217	Y1081	無頸壺 B	10.2	*4.8	1/12未	外面調整不明/内面ナデ	やや粗	橙褐	スカシ孔2個
1218	Y1385	直口壺か	9.8	*3.4	1/12	口縁部・口縁部外面ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	黒灰	
1219	Y1053	長頸壺か	12.0	*4.1	1/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部内外面ハケ のちナデ	やや粗	淡橙褐	高杯脚部の可能性あり
1220	Y1403	直口壺	8.0	*2.5	1/12	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	淡赤褐	
1221	Y1389	直口壺	9.6	*4.2	2.5/12	口縁部ヨコナデ/口縁部外面ハケ/口 縁部内面ハケのちヨコナデ	やや粗	黄褐	
1222	Y1063	長頸壺か	9.4	*5.0	4/12	口縁部ヨコナデ/口縁部上半ハケのち ヨコナデ、下半ハケ/頸部内面ナデ	やや粗	橙褐	
1223	Y1396	短頸壺	12.8	*4.7	1/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面ナデ	やや粗	淡橙褐	外面に淡い黒斑
1224	Y1075	広口壺 B	20.0	*3.4	1/12	口縁部ヨコナデ/口縁部外面ミガキ/ 口縁部内面ナデ	やや粗	灰褐	外面に淡い黒斑
1225	Y1400	甕 A か	20.0	*2.1	1/12未	口縁部・口縁部内面ヨコナデ/口縁部 外面ユビオサエ、ナデ/頸部外面ハケか	やや粗	橙褐	口縁部破断面は接合面
1226	Y1086	甕 C	11.8	*3.0	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ/頸部内外面ナデ	やや粗	淡茶褐	
1227	Y1088	甕 A	13.4	*3.7	2/12強	口縁部・口縁部外面ヨコナデ/頸部内 外面ナデ/口縁部内面ハケのちナデ	やや粗	黒褐	
1228	Y1383	甕 A か	18.0	*2.5	1/12未	口縁部、頸部内外面ヨコナデ/頸部内面 ハケか	やや粗	橙褐	
1229	Y1089	甕 A か	17.8	*1.7	1/12強	口縁部内外面ヨコナデ/頸部外面ユビオ サエ、ナデ	やや粗	黄褐	
1230	Y1058	甕	16.0	*4.3	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部外面ナデ、 ユビオサエか/頸部内面ナデ	やや粗	橙褐	
1231	Y1404	甕か	21.1	*4.5	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ/頸部内外面ハケ	やや粗	橙褐	口縁ややいびつ/口縁部外 面に黒斑

出土遺物観察表

1232	Y542	甕A	17.2	*7.9	1/12未	口縁端部ヨコナデ/口縁部内外面・体部内外面ハケ	やや粗	淡橙褐	口縁部外面・体部外面下半にすず
1233	Y1100	甕C	13.8	*3.8	2/12	口縁端部・口縁部内面ヨコナデ/口縁部・体部外面・体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	茶褐	
1234	Y1052	甕	13.0	*3.6	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケのちナデ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	黄褐/淡茶褐	
1235	Y1397	甕頸部	—	*3.5	—	頸部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ	やや粗	灰褐	
1236	Y1424	甕A	14.8	*4.7	2/12弱	口縁部内外面ヨコナデ/頸部・体部内外面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡黄褐	残存率は頸部で計測/口縁部外面・体部外面に黒斑
1237	Y553 14I-19	甕D	12.0	*4.7	5/12弱	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ナデ/体部外面ハケ/口縁部内面ユビオサエのちヨコナデ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	橙褐	口縁部外面に刻み目/頸部外面・体部外面にすず(ごくわずか)
1238	Y1395	甕D	12.2	*2.6	1/12	口縁部内外面ヨコナデ/頸部内外面調整不明	やや粗	淡黄褐	
1239	Y1051	甕D	15.6	*2.2	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	黄褐	口縁部外面に刺突文/外面ほぼ全面にすず付着
1240	Y1070	底部b	(6.4)	*3.5	3/12	内外面ユビオサエ、ナデ/底面ナデ	やや粗	淡茶褐	底部外面に黒斑
1241	Y1050	底部b	(6.4)	*4.2	3/12	体部外面タタキのちナデ/底部外面ナデ/底面ケズリのちナデか/内面ナデ	やや粗	淡茶褐	
1242	Y1090	底部a	(7.8)	*2.9	2/12強	内外面ともナデ/底面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡黄褐	外面に黒斑
1243	Y1419	底部b	(3.6)	*6.8	7/12	体部外面ハケ/底部外面・底面ユビオサエ、ナデ/内面ナデ	密	灰	外面に淡い黒斑/内面に黒斑
1244	Y1068	底部b	(6.0)	*2.9	4/12弱	外面ユビオサエ、ハケ/底面・内面ナデ	粗	淡茶褐	外面2次焼成による被熱/底部外面に黒斑
1245	Y1067	底部b	(5.6)	*3.0	3/12弱	外面ユビオサエ、ナデ/底面ケズリ/内面ナデ	やや粗	淡茶褐/茶褐	底部外面に黒斑
1246	Y1095	底部b	(3.6)	*2.8	6/12	内外面ともミガキ/底面ナデ	密	黄褐	外面にすず/外面に黒斑
1247	Y1046	底部b	(4.3)	*3.7	12/12	内外面ともナデ	密	淡黄褐	外面に黒斑
1248	Y1061	底部b	(4.8)	*3.0	5/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面ナデ/内面ナデ	やや粗	黄褐	内面に黒斑/2次焼成による被熱
1249	Y1048	底部b	(5.2)	*1.9	2/12	内外面ともナデ	やや粗	灰褐	2次焼成による被熱か
1250	Y1049	底部b	(4.8)	*1.9	9/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面ケズリのちナデか/内面ナデ	やや粗	橙褐	2次焼成による被熱
1251	Y1073	底部b	(4.5)	*2.1	4/12	内外面ともナデ/底面ナデ(やや粗雑)	やや粗	淡黄褐	
1252	Y1054	底部	(4.7)	*2.3	6/12強	外面ナデか/底面・内面調整不明	やや粗	淡茶褐	2次焼成による被熱か
1253	Y1069	底部b	(5.5)	*2.4	6/12	外面タタキのちナデ/底面ケズリのちナデ/内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	黒灰	底部の形状はややいびつ
1254	Y1055	底部b	(5.6)	*3.0	5/12強	内外面ともナデ	やや粗	淡橙褐	
1255	Y1057	高杯A	17.0	*2.7	1/12弱	口縁部内外面ヨコナデ/杯部内外面ナデか	やや粗	橙褐	
1256	Y1391	高杯B	20.0	*2.7	1/12未	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	淡黄褐	
1257	Y1413	高杯B	21.8	*2.0	1/12未	口縁部外面ヨコナデのちミガキ/口縁端部・口縁部内面ヨコナデ	やや粗	淡橙褐	
1258	Y551 Y552	高杯C	16.2 (7.4)	9.2	1/12強	口縁部内外面ヨコナデ/杯部内外面ナデ/脚部外面ミガキ/脚部端部ヨコナデ/脚部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡黄褐	杯部内面・脚部内面に黒斑/シボリ痕あり
1259	Y1098	高杯脚部	—	*7.1	—	杯部内外面ナデ/脚柱部外面ミガキ/脚裾部外面ナデか/脚裾部内面ナデ	やや粗	淡橙褐/灰褐	
1260	Y1386	脚部c	—	*6.5	—	外面ミガキ/内面ナデ	粗	淡橙褐	スカシ孔3個/シボリ痕あり/脚部外面上部にすず

1261	Y1405	脚部 c	—	*9.8	—	外面ミガキ/内面上半不調整、下半ナデ	やや粗	淡橙褐	シボリ痕あり
1262	Y1407	高杯脚部	—	*4.1	—	外面ナデか/内面ナデ	やや粗	淡黄褐	接合2類/シボリ痕あり
1263	Y1387	高杯脚部	—	*6.6	—	外面ユビオサエ、ナデ/内面ナデ、一部ハケか	密	黄褐/淡茶褐	接合2類か/シボリ痕あり
1264	Y1056	脚部 e	(8.3)	*7.2	2/12	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面不調整か	密	黄褐	シボリ痕あり/沈線3条/スカシ孔上段3個、下段1個
1265	Y1388	高杯脚部	—	*4.7	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	灰褐	接合1類/スカシ孔1個/外面に化粧土か
1266	Y1409	脚部 c	—	*7.2	—	外面ハケのちミガキ/内面ナデ	密	橙褐/暗茶褐	外面に黒斑
1267	Y1084	高杯脚部	(12.0)	*4.7	1/12未	外面ミガキ/脚端部調整不明/内面ナデ	密	淡黄褐/灰褐	
1268	Y1059	高杯脚部	(13.0)	*4.5	1.5/12	内外面ともハケ/脚端部ヨコナデ	密	淡橙褐	
1269	Y1079	高杯C	9.0	*3.4	1/12強	口縁端部ヨコナデ/口縁部外面ミガキ/口縁部内面ナデ	やや粗	灰褐	
1270	Y1094	脚部 e	(10.2)	*3.3	2/12	外面ミガキ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ、ユビオサエ	密	灰褐	
1271	Y1406	高杯脚部	—	*5.8	—	外面ミガキ/内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	淡橙褐	
1272	Y1097	脚部 e	(9.5)	*2.3	1/12強	外面ハケのちヨコナデ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	黄褐/淡茶褐	スカシ孔1個
1273	Y1412	高杯脚部	(8.4)	*3.4	1/12強	外面ハケか/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	密	黒灰	
1274	Y1402	脚部 e	(9.4)	*0.9	1/12	外面ミガキ/脚端部	密	淡茶褐	
1275	Y1062	高杯脚部	(12.0)	*2.3	1/12	外面ナデ/脚端部ヨコナデ/内面ハケのちナデ	やや粗	茶褐/暗茶褐	
1276	Y1401	脚部 b/d	(16.6)	*2.2	1/12	内外面ともヨコナデ	密	淡黄褐	
1277	Y1394	器台A	13.4	*2.2	1/12未	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面ミガキ	やや粗	淡橙褐	口縁部に擬凹線4条
1278	Y545	器台A	17.1	*2.3	1.5/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面ミガキ	やや粗	黄褐	口縁部に赤色顔料
1279	Y548	器台A	23.0	*2.0	1/12強	口縁部ユビオサエのちヨコナデ/口縁部外面ナデ/口縁部内面ナデか	粗	橙褐	口縁部にヘラ状工具による斜線、竹管文
1280	Y1393 Y1072	器台A	—	*1.3	2/12	内外面とも調整不明(下垂部ヨコナデ)	やや粗	橙褐	口縁部(下垂部)に円形浮文/広口壺の可能性もある
1281	Y1071	器台A	18.0	*1.8	2/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内外面ミガキ	やや粗	橙褐	
1282	Y1425	器台A	18.4	*2.1	1.5/12	口縁部ヨコナデ/口縁部内面調整不明/口縁部外面ハケのちミガキ	やや粗	淡茶褐	口縁部に波状文
1283	Y1099	器台A	15.0	*1.6	1/12	口縁部ヨコナデ/口縁部剥離面ハケ/口縁部内外面ミガキ	やや粗	灰褐	口縁部剥離/口縁部に波状文
1284	Y1074	器台	15.8	*1.4	1/12	口縁部ヨコナデか/口縁部下面ミガキ/口縁部内外面ミガキ	やや粗	灰褐	
1285	Y544	器台B	9.8	*1.9	1/12	口縁部ヨコナデ/内外面ミガキ(外面にユビオサエ)	密	茶褐	
1286	Y1065	器台	14.4	*1.4	1/12	内外面ともヨコナデ	やや粗	淡橙褐	口縁部面に円形浮文/口縁部面に黒斑
1287	Y1064	器台脚部	(16.2)	*2.9	1/12	脚端部ヨコナデ/外面調整不明/内面ナデ	やや粗	淡黄褐	脚部外面に綾杉文
1288	Y1415	器台脚部	(14.4)	*3.1	1/12	外面ミガキか/脚端部調整不明(ヨコナデか)/内面ナデ	やや粗	淡茶褐	スカシ孔1個
1289	Y555	脚台	(7.0)	*5.7	4/12強	体部外面ナデ、ユビオサエ、ケズリ/脚台外面ハケ、ユビオサエ/脚台端部ユビオサエ/体部内面・脚台内面ナデ	粗	橙褐/茶褐	外面上部に黒斑
1290	Y1417	鉢B	—	*4.2	—	頸部内外面ヨコナデ/体部内外面ナデ	やや粗	茶褐	体部外面に刺突文/体部外面にすず

1291	Y1083	鉢Aか	12.0	*3.5	2/12	内外面ユビオサエのちナデ	やや粗	淡橙褐	高杯Cの可能性もある
1292	Y1416	鉢Aか	12.6	*2.0	1/12強	口縁部ヨコナデ/外面強めのユビオサエ/内面ナデ	やや粗	茶褐/暗茶褐	口縁部内外面に赤色顔料/外面に黒斑/高杯Cの可能性あり

F地区 包含層

1293	Y1548 14I-30	広口壺A	18.5	*7.9	6/12	口縁部ヨコナデ/口縁部外面ハケのちミガキ/口縁部内面ナデ	粗	淡橙/黄褐	口縁部に擬凹線2ないし3条ある可能性あり
1294	Y1585	広口壺A	16.0	*1.7	2/12弱	口縁部・頸部外面ヨコナデ/内面調整不明	やや粗	淡橙褐	口縁部に擬凹線3条、円形浮文
1295	Y1582	広口壺A	20.2	*2.5	1/12	内外面とも調整不明	粗	暗茶褐	口縁部に擬凹線3条
1296	Y1549	広口壺A	27.6	*3.1	1.5/12	口縁部ヨコナデ/頸部外面ナデまたはハケ/口縁部内面ミガキ	やや粗	暗茶褐	口縁部に竹管文(3個で1組か)/口縁部内面に黒斑
1297	Y1546	広口壺B	14.8	*3.2	1/12	口縁部外面ナデ/口縁部内面ミガキまたはナデ	やや粗	黄褐	
1298	Y1551	広口壺B	16.8	*4.8	1/12	内外面ともナデ	やや粗	淡黄褐	
1299	Y1560	壺頸部	—	*2.8	—	頸部外面ヨコナデ/頸部内面・体部内外面ナデか	やや粗	橙茶	肩部に波状文・櫛描文
1300	Y1559	広口壺C	—	*1.9	—	口縁部外面ナデ/頸部外面ハケのちナデ/口縁部内面ヨコナデ/頸部内面ナデ	やや粗	淡橙褐	口縁部外面に刺突文
1301	Y1607	壺頸部	—	*6.9	2/12	口縁部外面ナデ(ミガキの可能性あり)/頸部外面ヨコナデか/口縁部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	黄褐	残存率は頸部で計測
1302	Y1596	壺体部か	—	*4.9	—	外面ナデ、ハケ/内面ユビオサエ、ナデ	粗	茶褐	体部外面上半2次焼成による被熱か
1303	Y1569	短頸壺	9.8	*5.8	1/12	口縁部内外面ヨコナデか/体部内外面ユビオサエ、ナデ	粗	黄褐	
1304	Y1579 14I-28	短頸壺	13.8	*9.4	3/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ/体部内面ナデ、ユビオサエ	やや粗	黄褐	内面に黒斑
1305	Y1583	蓋	—	*3.2	—	内外面ともナデ/つまみユビオサエ、ナデ	密	暗茶褐	
1306	Y1581	鉢B	11.6	*3.2	2/12弱	口縁部内外面ヨコナデか/体部外面ハケのちナデ/体部内面ナデ	やや粗	淡黄褐	
1307	Y1547	甕Aか	25.8	*2.6	1/12未	口縁部ヨコナデ/外面ハケ/内面ナデ	やや粗	淡橙褐	
1308	Y1558	甕A	26.6	*9.0	2/12弱	口縁部・口縁部内外面ヨコナデ/体部外面ハケ/体部外面ナデ、ユビオサエ	粗	淡茶褐	肩部に刺突文(ハケ工具を使用か)/体部の破断面は接合面
1309	Y1587	甕	25.6	*4.2	1/12	口縁部内面・外面上半ヨコナデ/口縁部外面下半ハケ	やや粗	暗茶褐/茶褐	接合しない2片から復原/頸部外面にすず
1310	Y1580	甕A	—	*3.1	—	内外面ともナデ	やや粗	茶褐	口縁部に刻み目/肩部面に刺突文
1311	Y1570	ミチア土器	6.9	*2.5	1/12	内外面とも調整不明	密	淡橙褐	頸部外面に黒斑
1312	Y1597 Y1598 14I-31	鉢	19.2	*9.8	2/12	口縁部内外面ヨコナデ/体部外面上半ハケ、下半ナデ、ユビオサエ/内面ナデ	やや粗	茶褐	
1313	Y1593	底部 a	(6.4)	*5.6		外面ハケ/底面・内面ナデ	粗	黄褐	
1314	Y1575	底部 c	(3.6)	*1.8	5/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面・内面ナデ	密	黄褐	
1315	Y1594	底部 b	(3.9)	*1.8	12/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面・内面ナデ	やや粗	黄褐	
1316	Y1576	底部 c	(3.7)	*2.7	3/12強	外面調整不明/内面ナデ	粗	黄褐	
1317	Y1564	底部 c	(5.2)	*2.4	12/12	内外面ともナデ	やや粗	淡黄褐	内面に黒斑

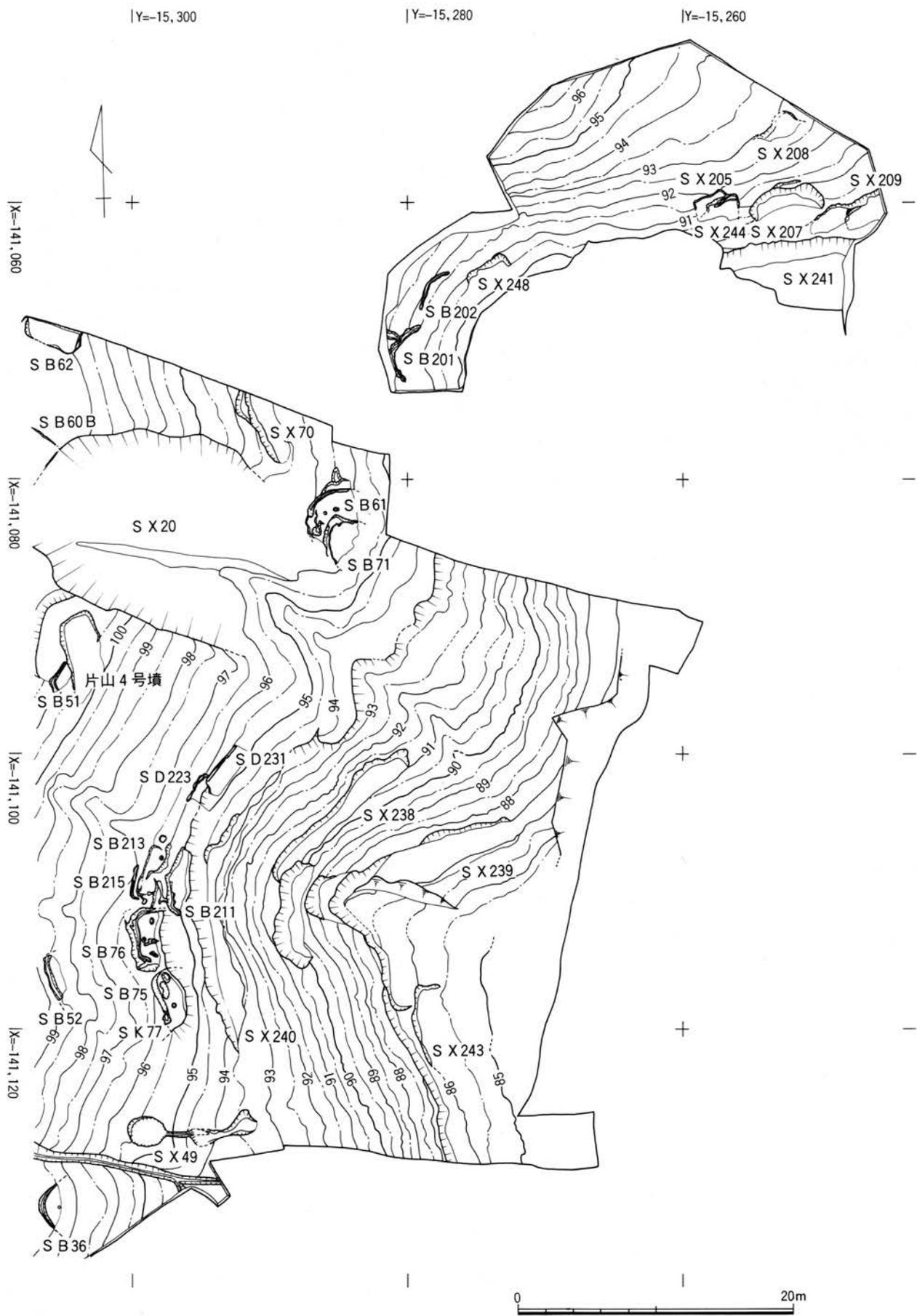
1318	Y1556	底部 c	(5.8)	*3.7	2/12	内外面ともナデ	やや粗	黄褐	
1319	Y1573	底部 c	(6.6)	*2.2	4/12	内外面ともナデ	粗	暗茶褐	底面にモミの圧痕か
1320	Y1552	底部 a	(5.8)	*3.3	3/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面・内面ナデ	やや粗	灰褐	外面に黒斑
1321	Y1571	底部 b	(6.2)	*3.8	12/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面ナデ/内面調整不明	粗	黒灰	外面に黒斑
1322	Y1554	底部 b	(5.6)	*3.6	6/12	体部外面ハケのちナデ/底部外面・底面ナデ、ユビオサエ/内面ナデ	やや粗	茶褐/淡橙褐	
1323	Y1544	底部 b	(6.8)	*2.8	3/12	内外面ともナデか	やや粗	黄褐	
1324	Y1553	底部 b	(8.4)	*2.6	3/12弱	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	黄褐/灰褐	
1325	Y1545	底部 b	(4.4)	*3.6	12/12	内外面ともナデ	やや粗	黄褐	
1326	Y1572	底部 a	(6.5)	*3.2	3/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面ナデか/内面調整不明	粗	茶褐/暗茶	底部の破断面は接合面
1327	Y1577	底部 a	(5.6)	*2.2	4/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面・内面ナデ	やや粗	黒灰	内外面に黒斑
1328	Y1586	脚台	(4.0)	*3.8	—	体部外面ハケ、ナデ/脚台内外面ナデ/体部内面ユビオサエ、ナデ	やや粗	淡橙褐	残存率は脚台端部欠損のため不明
1329	Y1555	底部 a	(5.6)	*2.4	12/12	外面ナデ、ユビオサエ/底面・内面ナデ	やや粗	灰褐/淡黄褐	外面に黒斑
1330	Y1562	底部 b	(5.4)	*2.3	5/12	内外面ともナデ	粗	赤褐	底面にモミの圧痕か
1331	Y1561	底部 b	(4.7)	*2.3	12/12	外面ナデ/内面ナデ、ユビオサエ	密	黄褐	
1332	Y1563	底部 b	(5.8)	*1.6	12/12	外面ユビオサエ、ナデ/底面丁寧なナデ/内面ユビオサエ	やや粗	暗茶褐/黒灰	外面に黒斑/底面にモミの圧痕か
1333	Y1584	脚部 b/d	(14.0)	*3.1	2/12弱	脚端部ヨコナデ	やや粗	橙褐	
1334	Y1603	脚部 b/d	(15.6)	*2.6	1/12	外面ナデ/脚端部ヨコナデ/内面ユビオサエのちナデ	やや粗	茶褐	小さな穿孔3個
1335	Y1604	脚部 b/d	(16.6)	*3.8	1/12強	外面・内面上半ナデ/脚端部・内面下半ヨコナデ	やや粗	淡黄褐	脚裾部に斜格子文・沈線3条/スカシ孔2個/脚裾屈曲部上面に綾杉文
1336	Y1565	脚部 a/b	—	*10.6	9/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡黄褐	沈線3条/残存率は脚柱部中央で計測
1337	Y1600 14I-36	脚部 c	—	*12.5	—	外面ミガキ/内面ナデ	やや粗	茶褐	接合1類/スカシ孔2個/シボリ痕あり
1338	Y1590	脚部 c	—	*10.1	—	外面ミガキ/脚底部内面ナデ、ヨコナデ	やや粗	黄褐	接合3類か/スカシ孔3個
1339	Y1599 14I-35	脚部 c	—	*10.3	—	杯部外面ナデか/脚部外面ハケか/脚部内面ナデ	やや粗	橙褐	接合1類/シボリ痕あり/沈線12条/スカシ3個
1340	Y1591	脚部 c	—	*5.0	—	内外面ともナデ	やや粗	淡黄褐	接合2類/シボリ痕なし
1341	Y1608	脚部 c/e	—	*6.8	—	外面ナデか/杯部内面ユビオサエ、ナデ/内面ナデ	やや粗	暗茶褐	接合3類/外面に黒斑
1342	Y1606	脚部 c	(12.1)	*5.7	2.5/12	外面調整不明/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	黄褐/茶褐	スカシ孔1個/脚部外面に黒斑
1343	Y1595	脚部 e	(10.4)	*6.7	2/12	外面ナデ、ユビオサエ/脚端部ヨコナデ/内面ナデ	やや粗	黄褐	内面に黒斑
1344	Y1574	器台 A	16.0	*2.1	1/12未	口縁帯ヨコナデか/内面調整不明	粗	橙褐	口縁帯に波状文か
1345	Y1588	器台 A	20.0	*2.2	1/12強	内外面とも調整不明	粗	淡茶褐	
1346	Y1550	器台 A	20.5	*1.6	1.5/12	内外面とも調整不明	やや粗	淡橙褐	口縁帯に竹管文(1個確認)
1347	Y1568	器台	21.0	*1.4	1/12未	口縁帯ヨコナデ/外面ハケ/内面ミガキ	やや粗	淡黄褐	磨滅のため2片から復原/口縁帯・口縁部内面波状文

出土遺物観察表

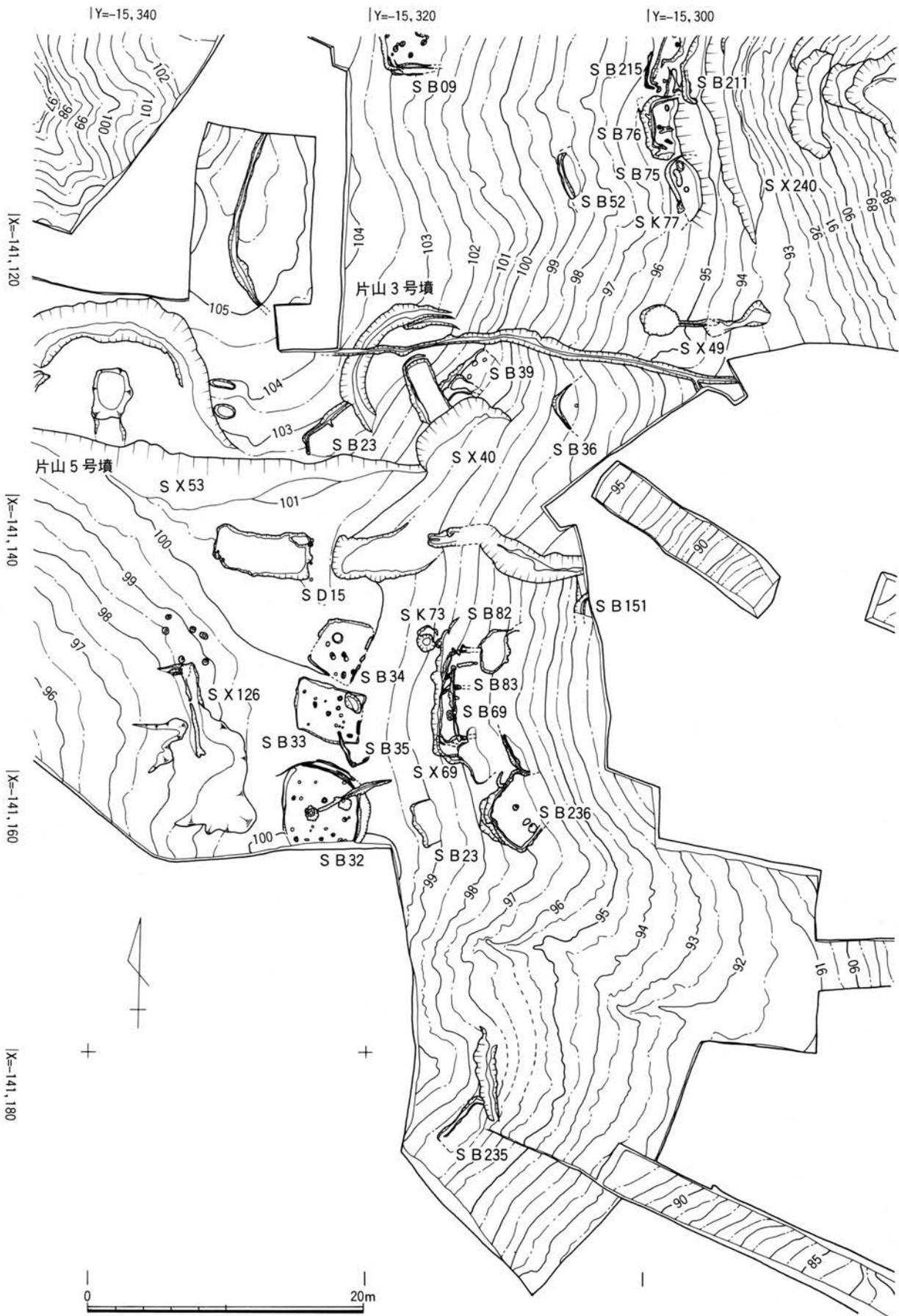
1348	Y1602	器台A	29.6	*2.6	1/12未	口縁帯調整不明／頸部外面ハケ／口縁部・頸部内面ミガキ	やや粗	灰褐	口縁帯に波状文・円形浮文
1349	Y1605	器台脚部	(12.8)	*3.3	9/12	外面ハケまたはミガキか／脚端部ヨコナデか／内面ナデ	やや粗	淡茶褐／茶褐	スカシ孔3個
1350	Y1601	器台筒部	—	*5.5	—	外面ミガキ／内面ナデ	密	灰褐	筒部に沈線5条
1351	Y1566 14I-33	器台	(13.2)	*12.1	12/12	外面ミガキ／脚端部ヨコナデ／内面ナデ、一部ケズリ	やや粗	黄褐	残存率は筒部で計測／スカシ孔3個／脚部上部の破断面は接合面／脚端部に黒斑
1352	Y1567	体部片	—	—	—	頸部外か面ヨコナデか／体部内外面ナデ	やや粗	淡橙褐／黒灰	肩部に直線文・波状文

圖

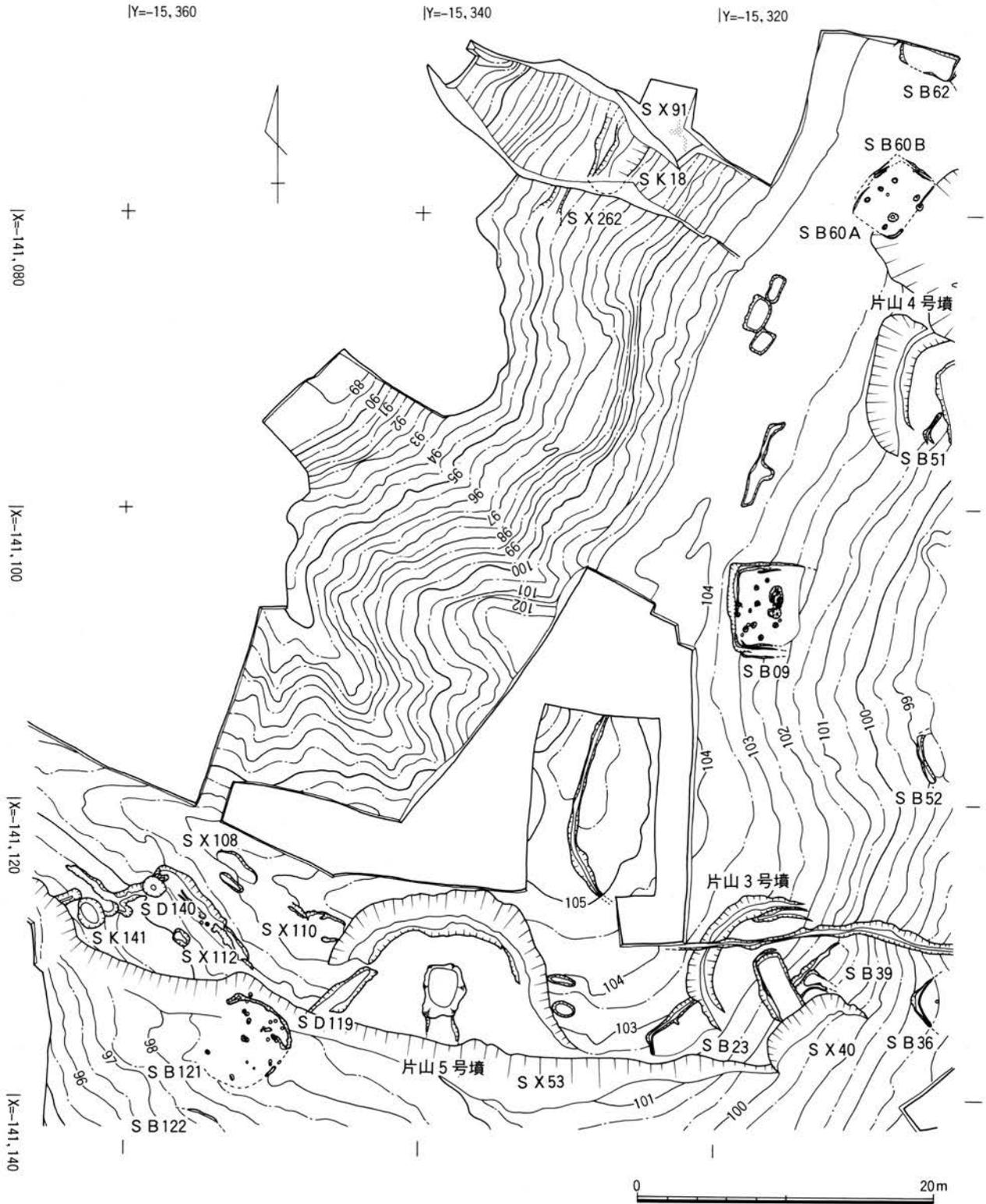
版



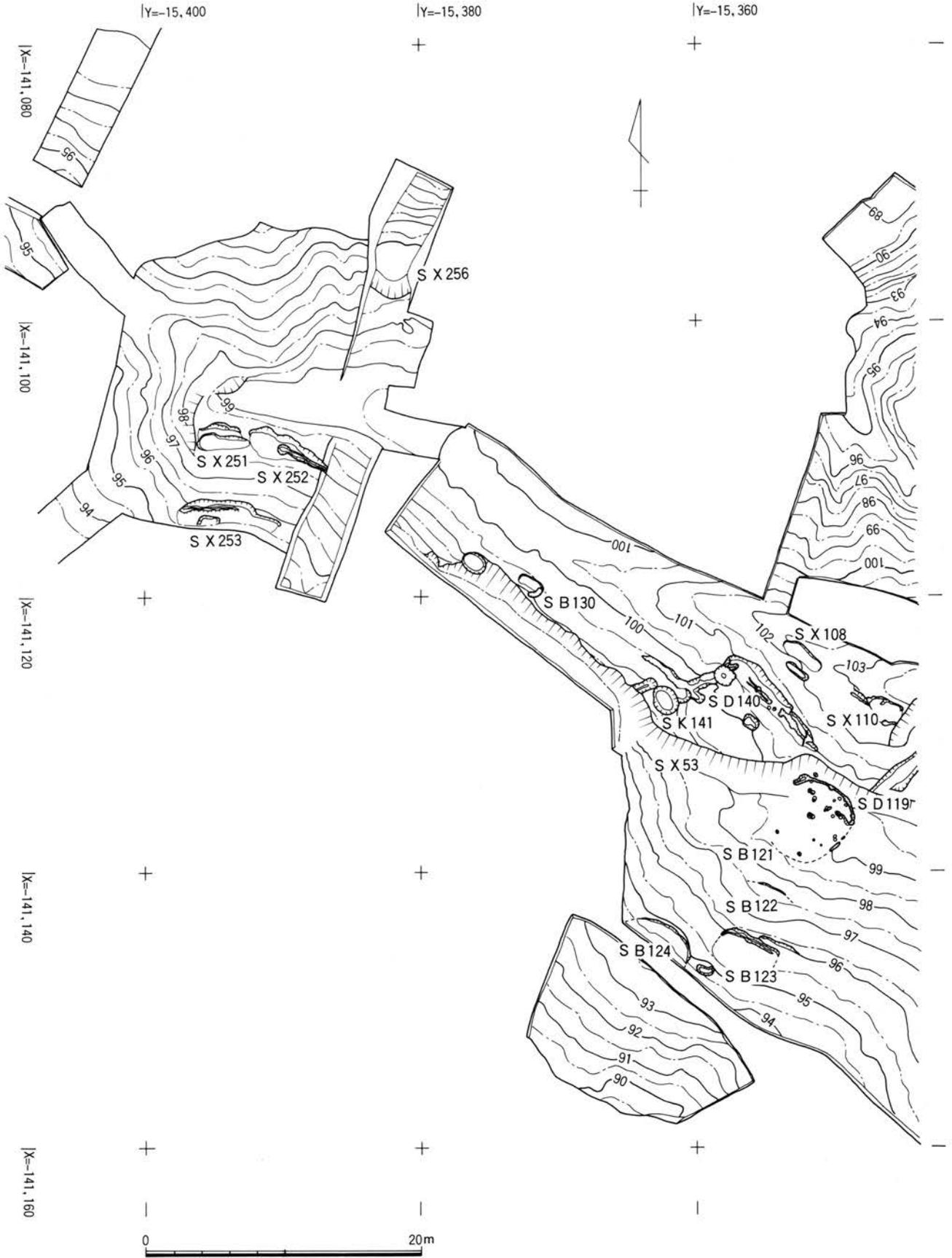
南地区遺構配置図(1)



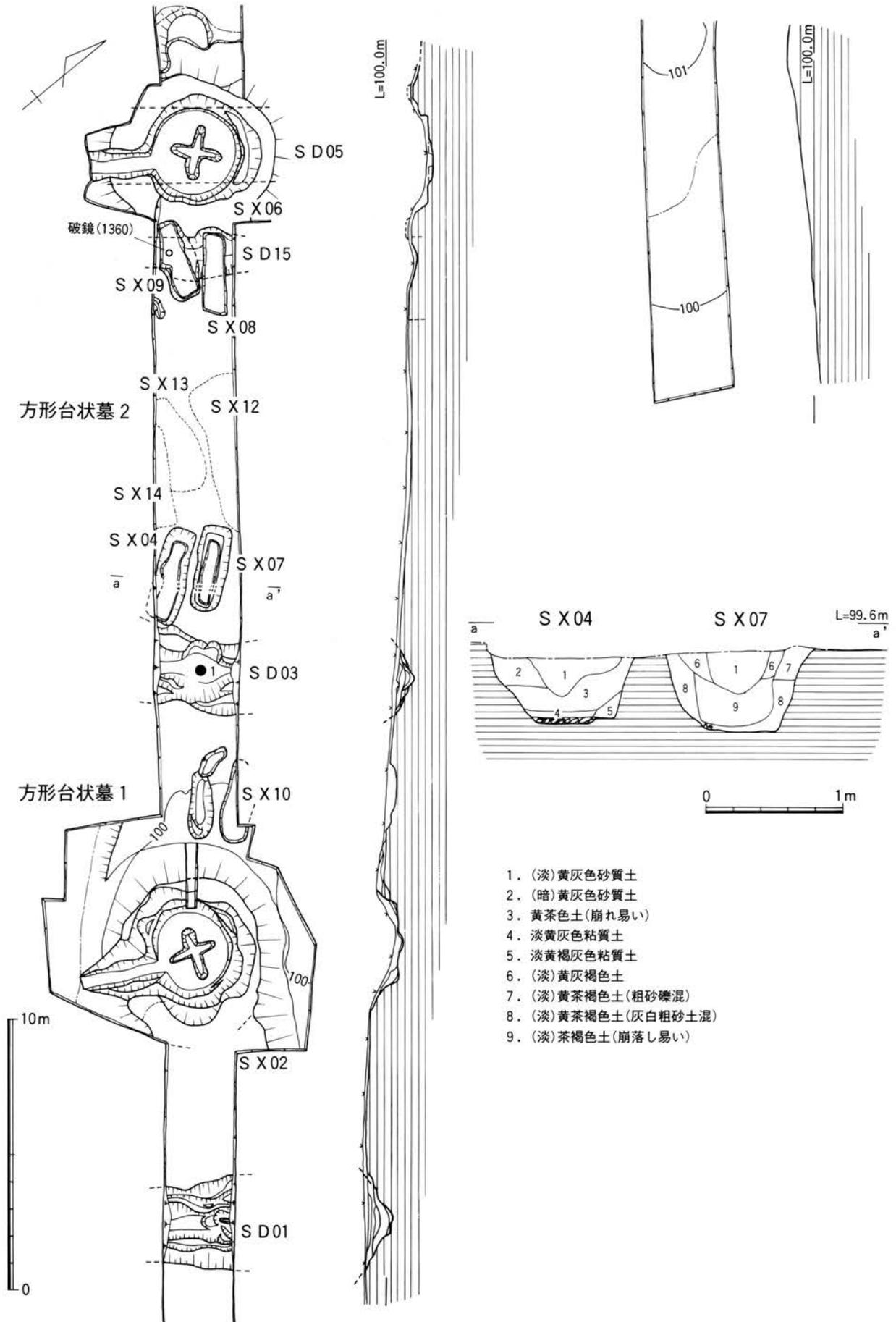
南地区遺構配置図(2)



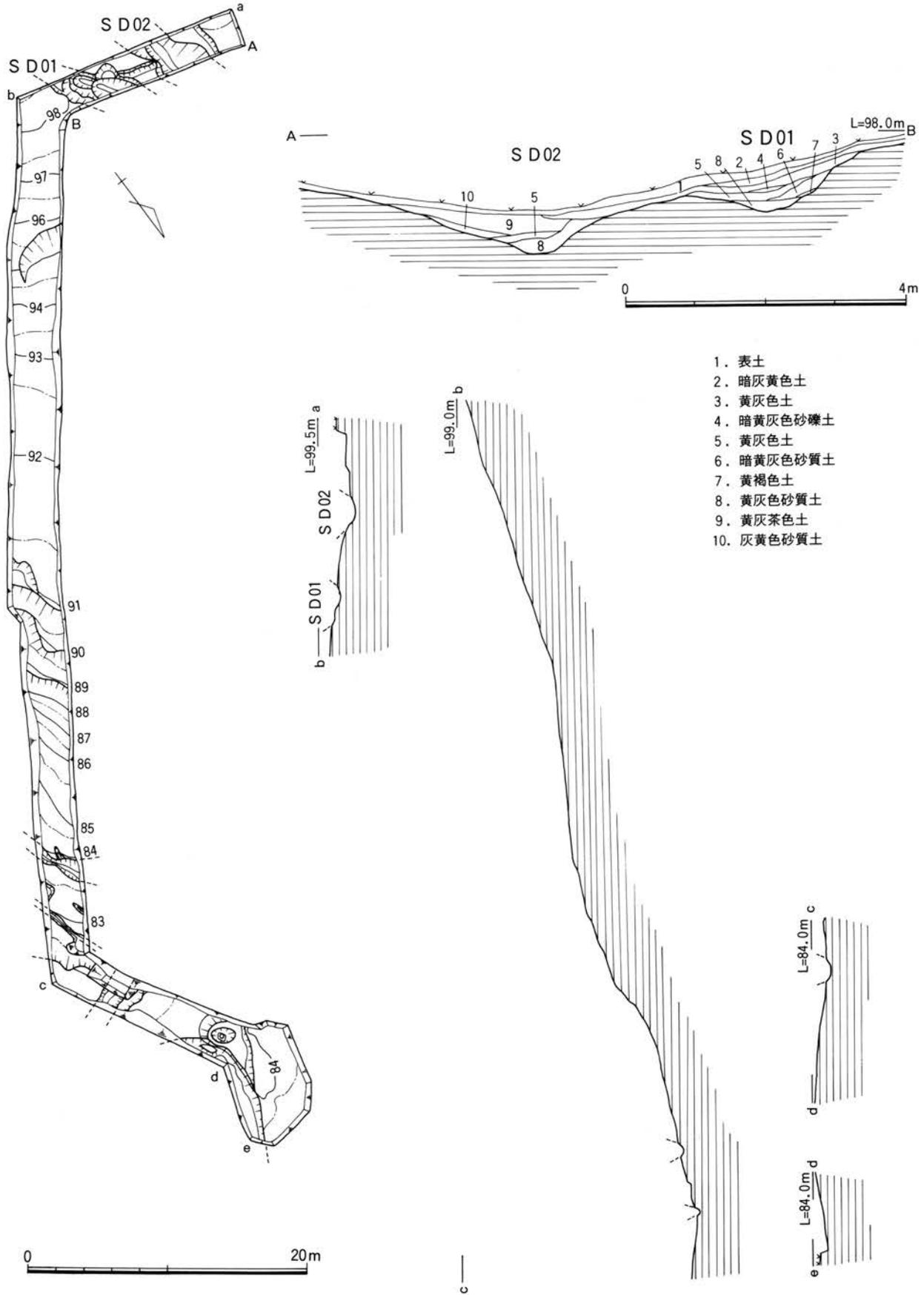
南地区遺構配置図(3)



南地区遺構配置図(4)

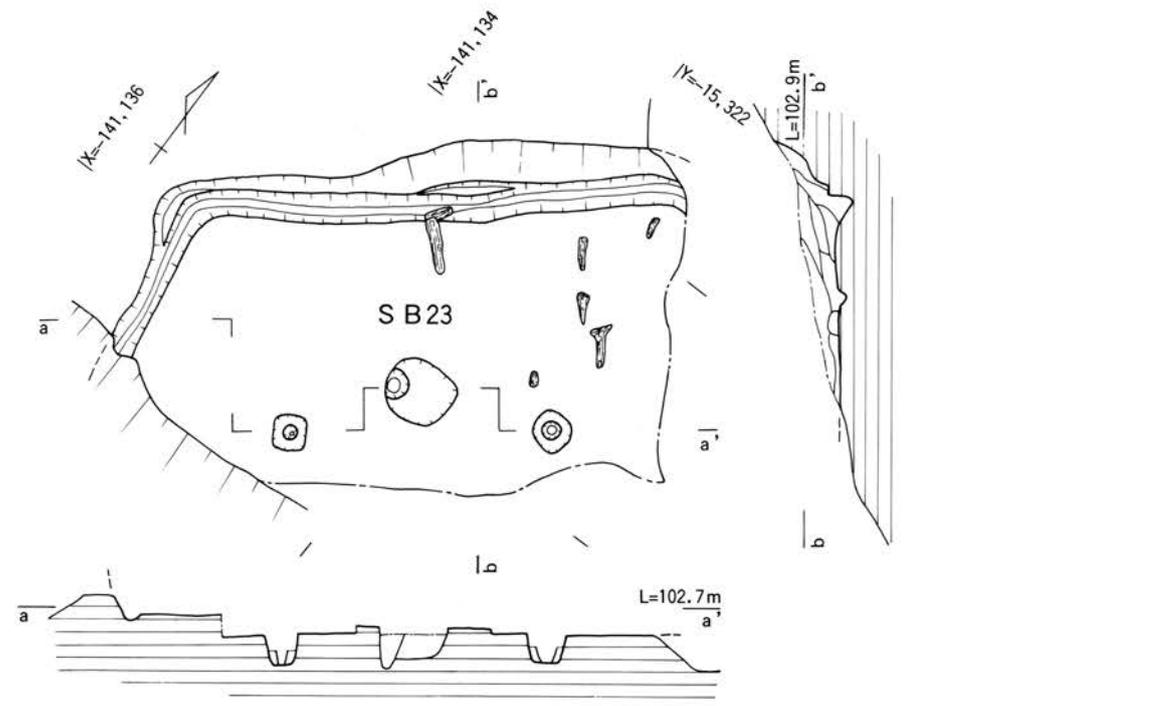
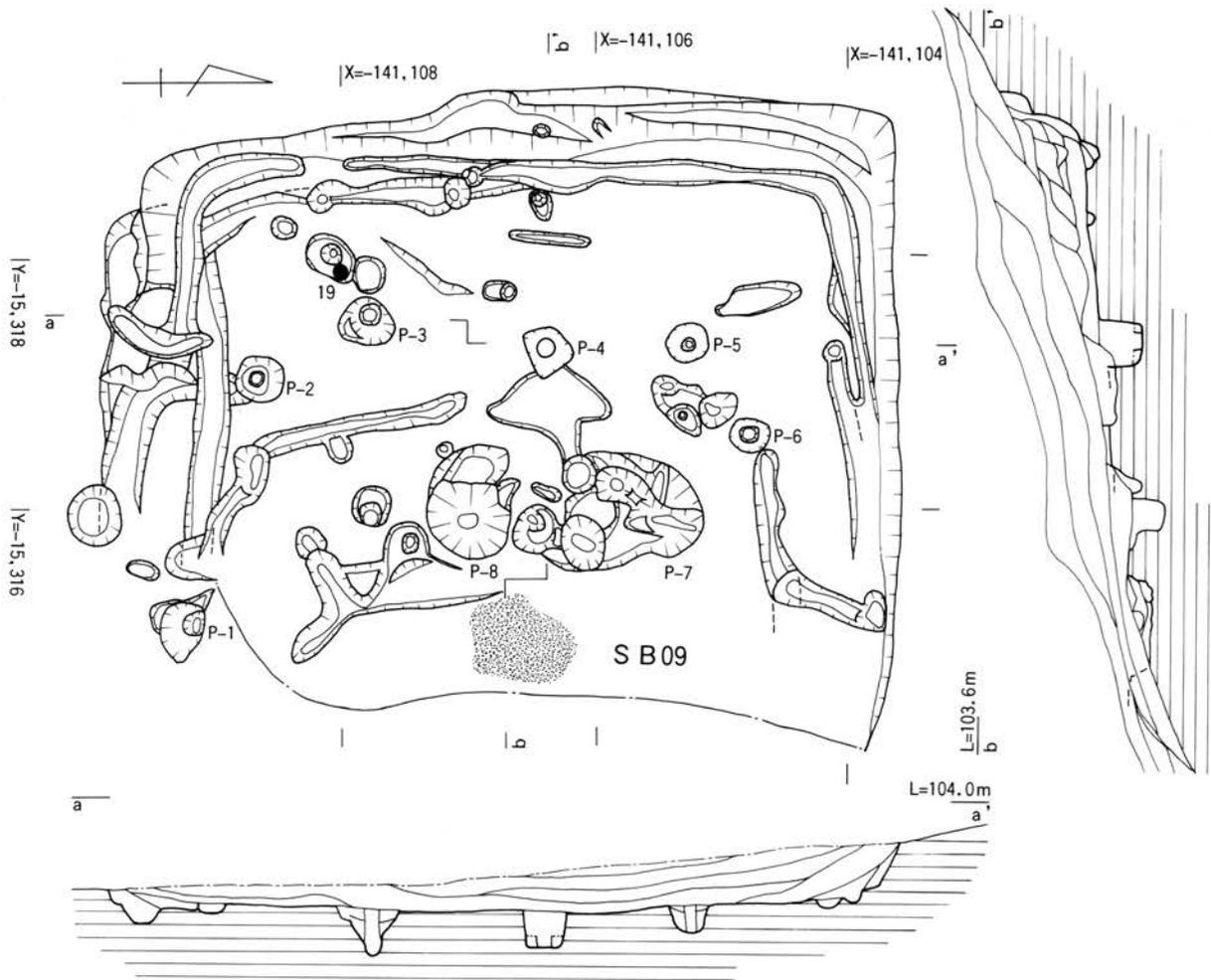


2トレンチ平面・断面図

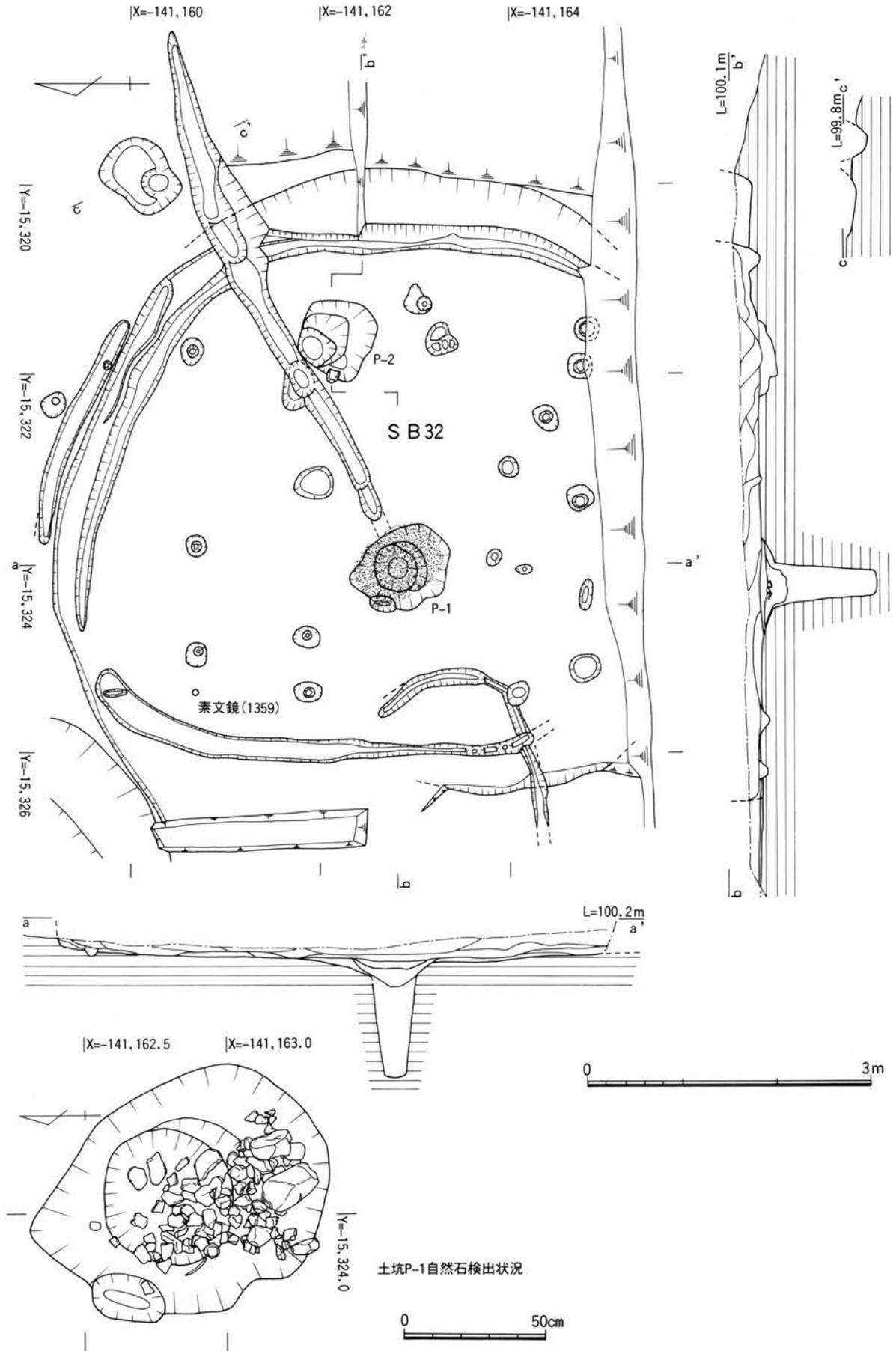


1. 表土
2. 暗灰黄色土
3. 黄灰色土
4. 暗黄灰色砂礫土
5. 黄灰色土
6. 暗黄灰色砂質土
7. 黄褐色土
8. 黄灰色砂質土
9. 黄灰茶色土
10. 灰黄色砂質土

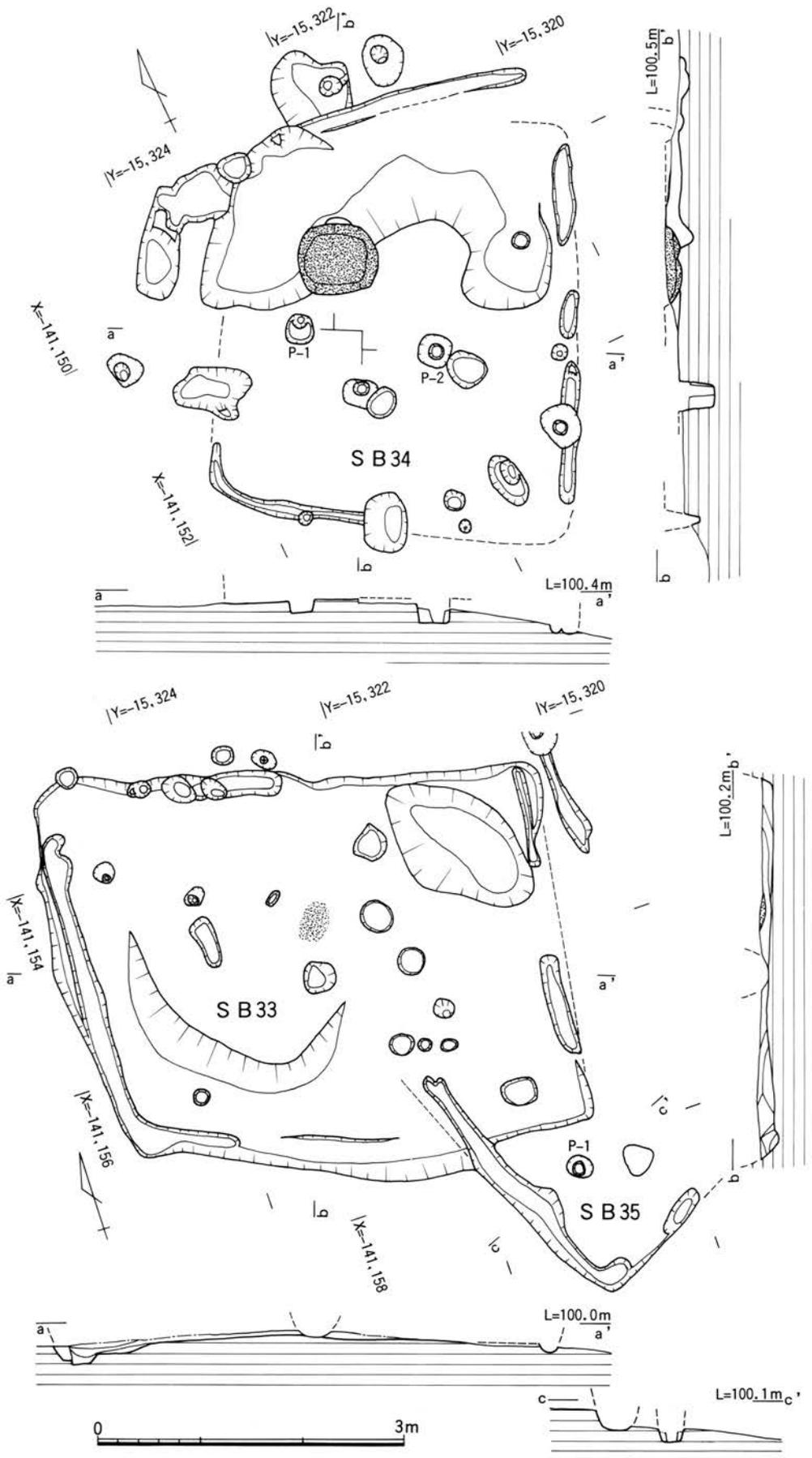
4 トレンチ平面・断面図



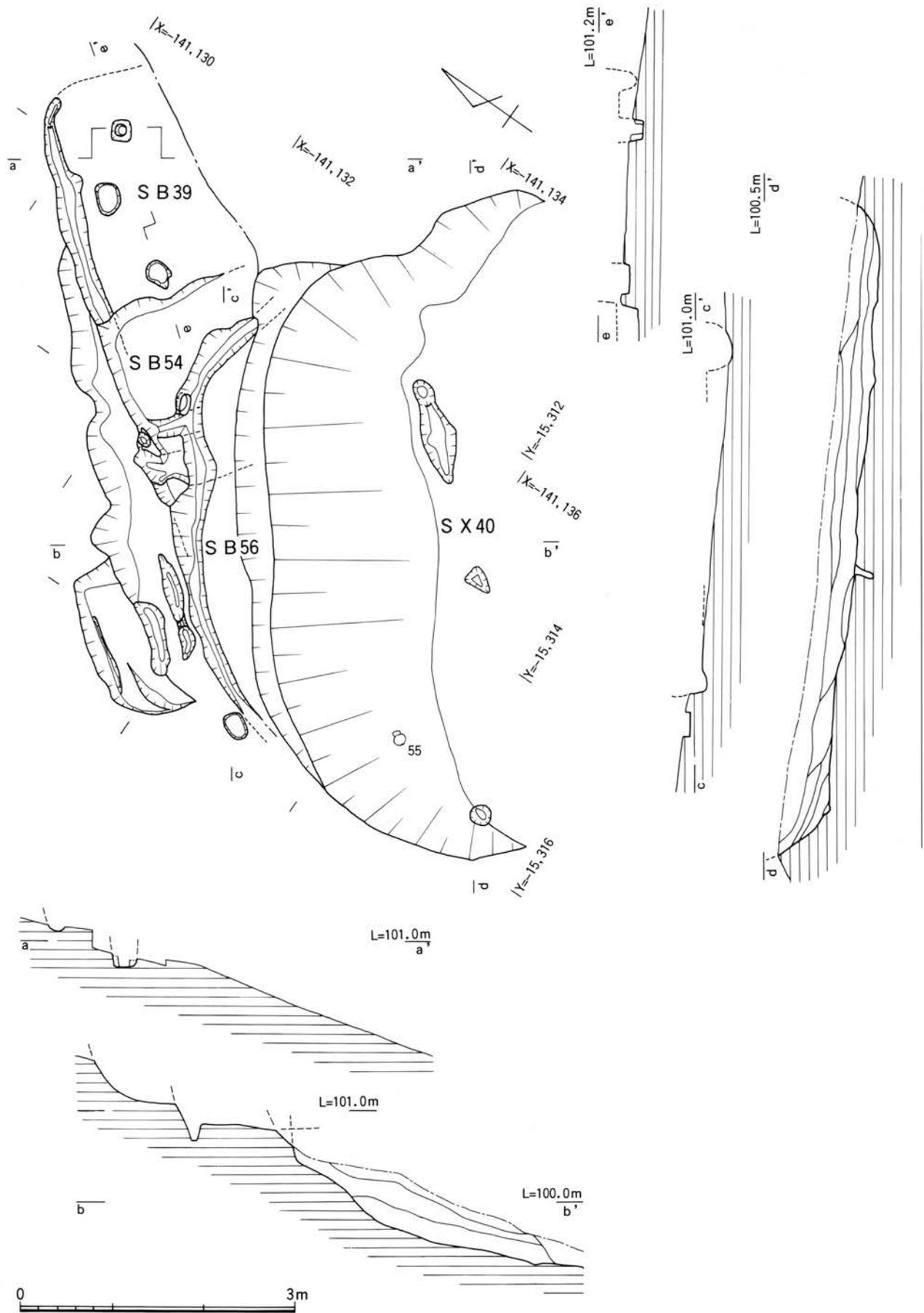
竪穴式住居跡SB09・23実測図



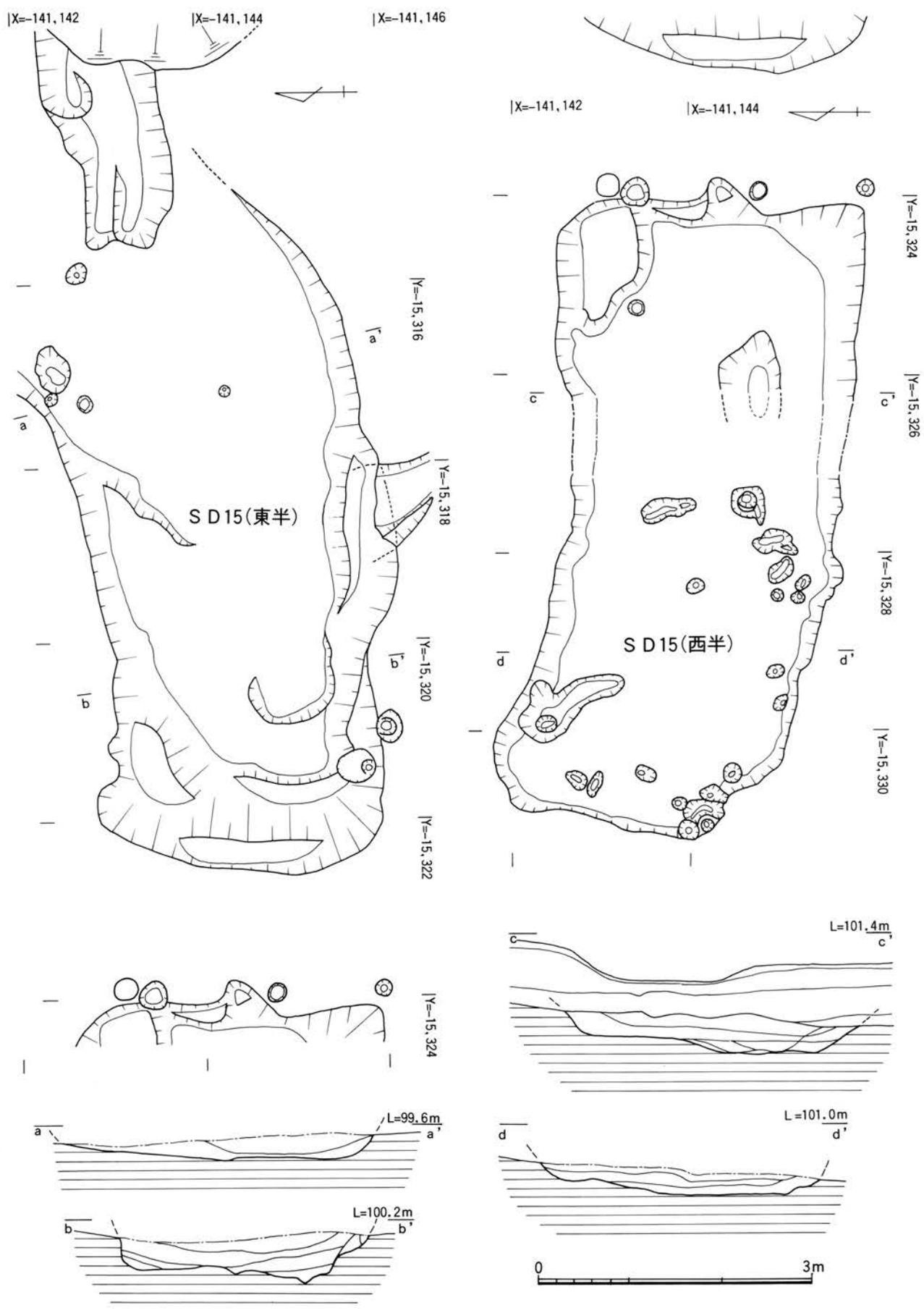
竪穴式住居跡 S B 32 実測図



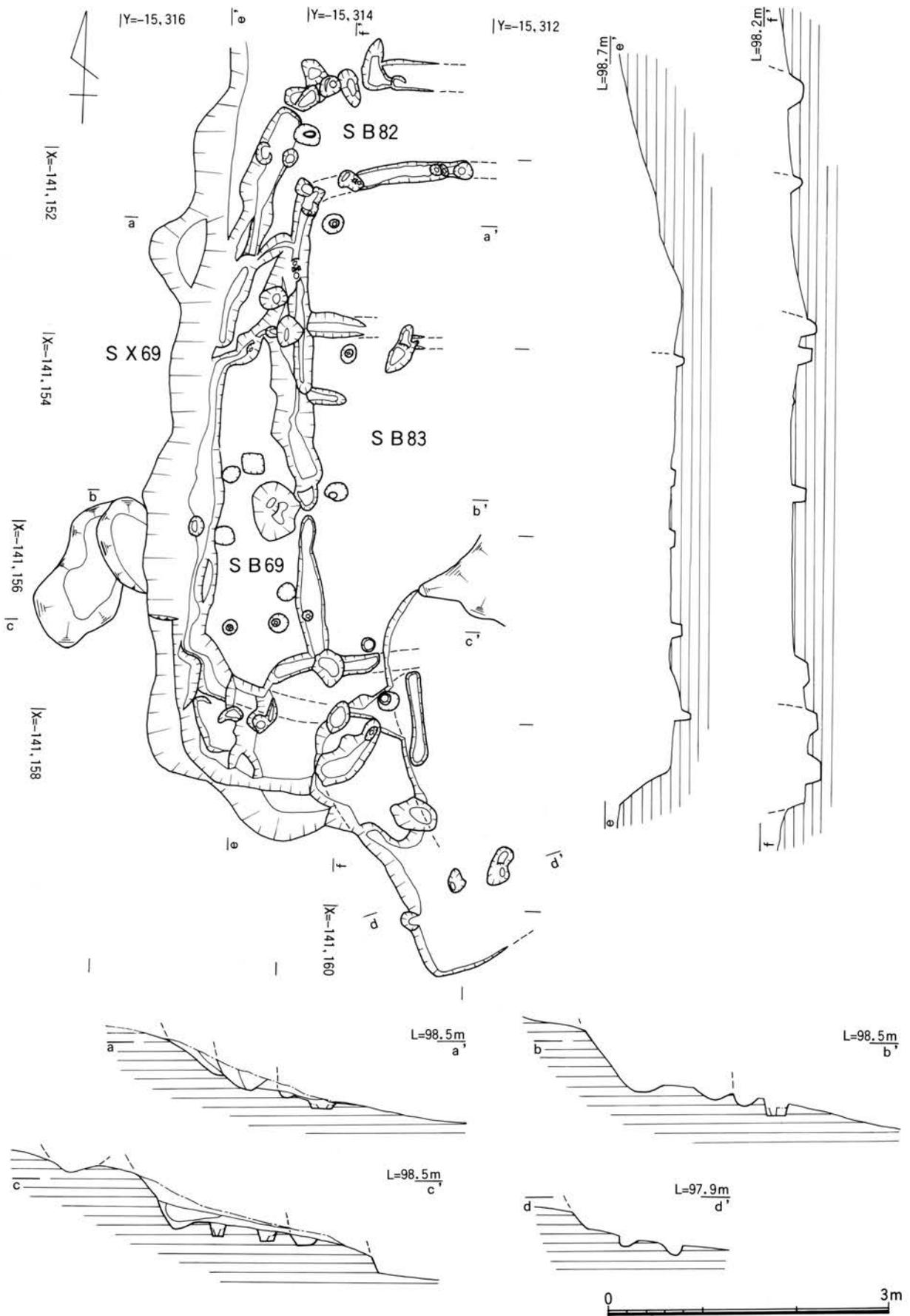
竖穴式住居跡S B 33~35実測図



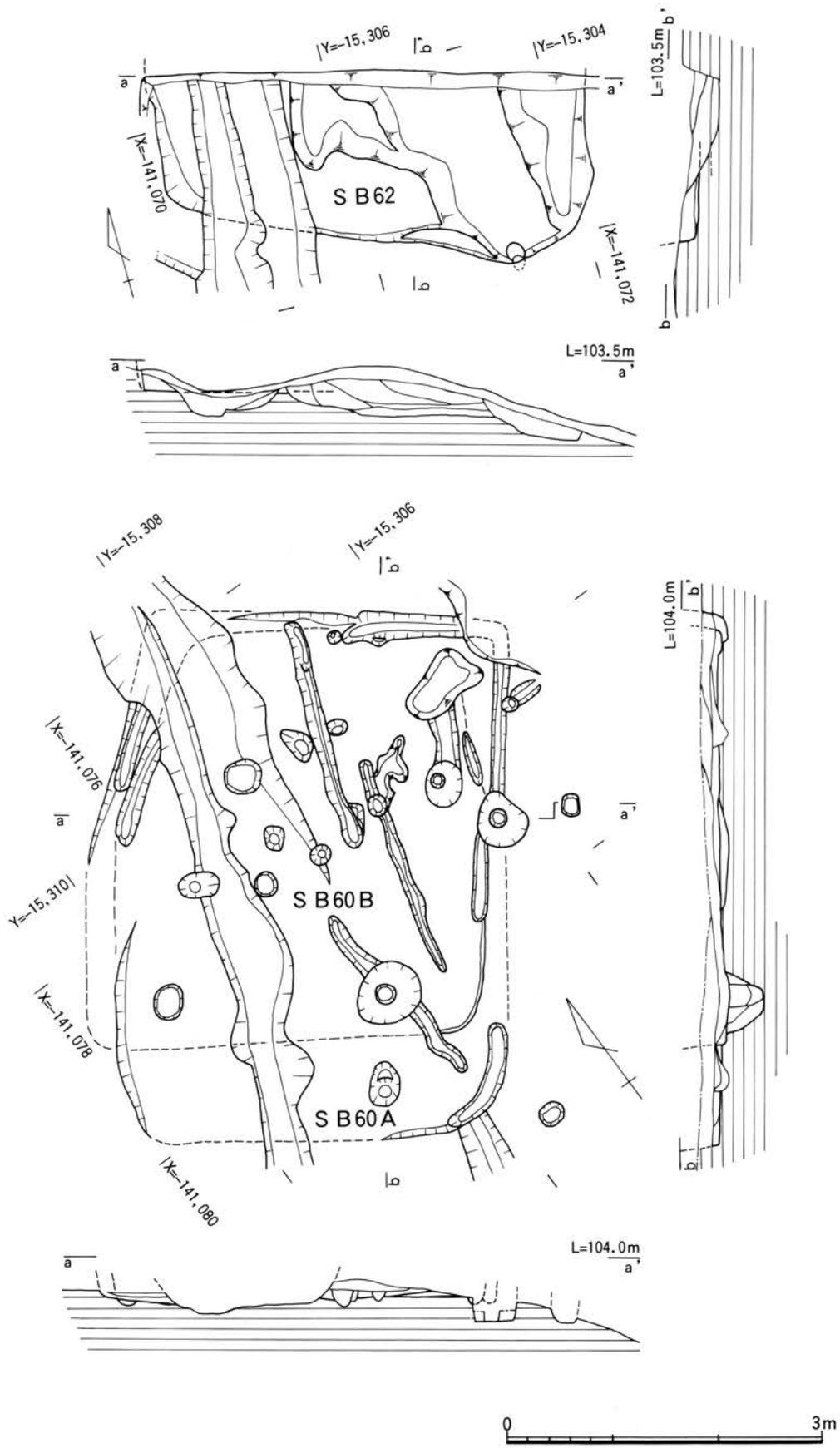
竖穴式住居跡 S B 39・54・56、段状遺構 S X 40実測図



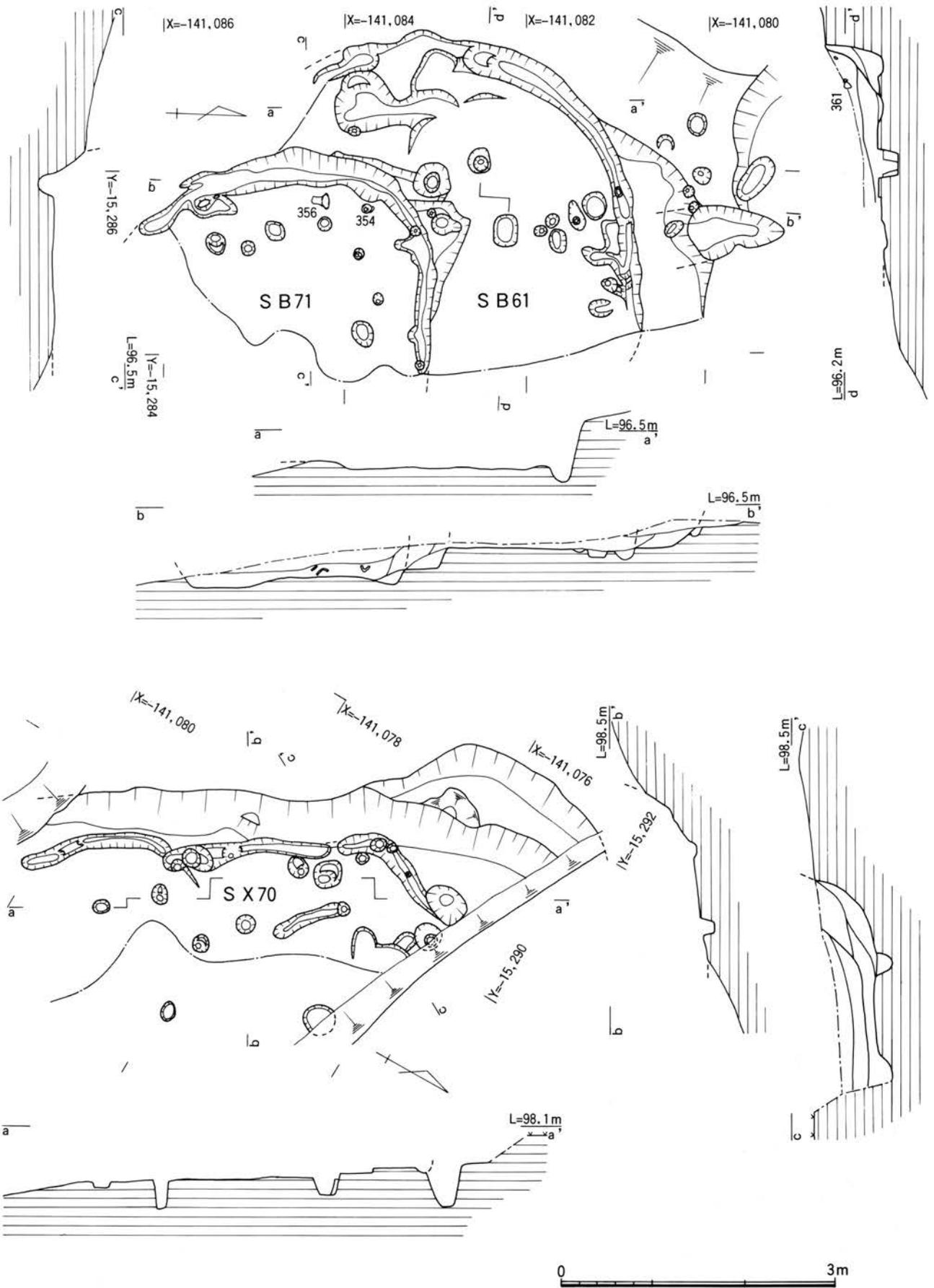
溝SD15実測図



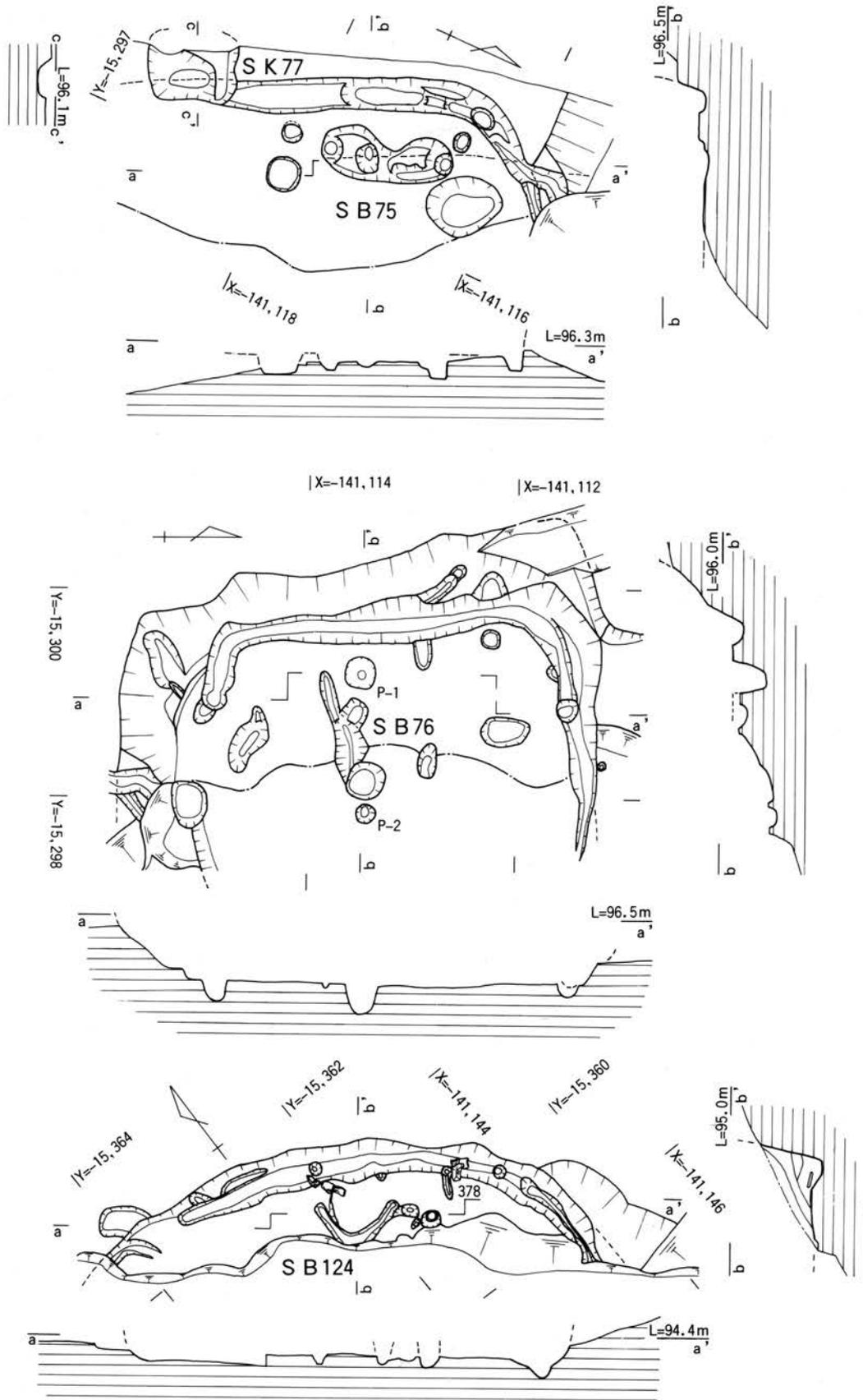
段状遺構 S X 69、竪穴式住居跡 S B 69・82・83実測図



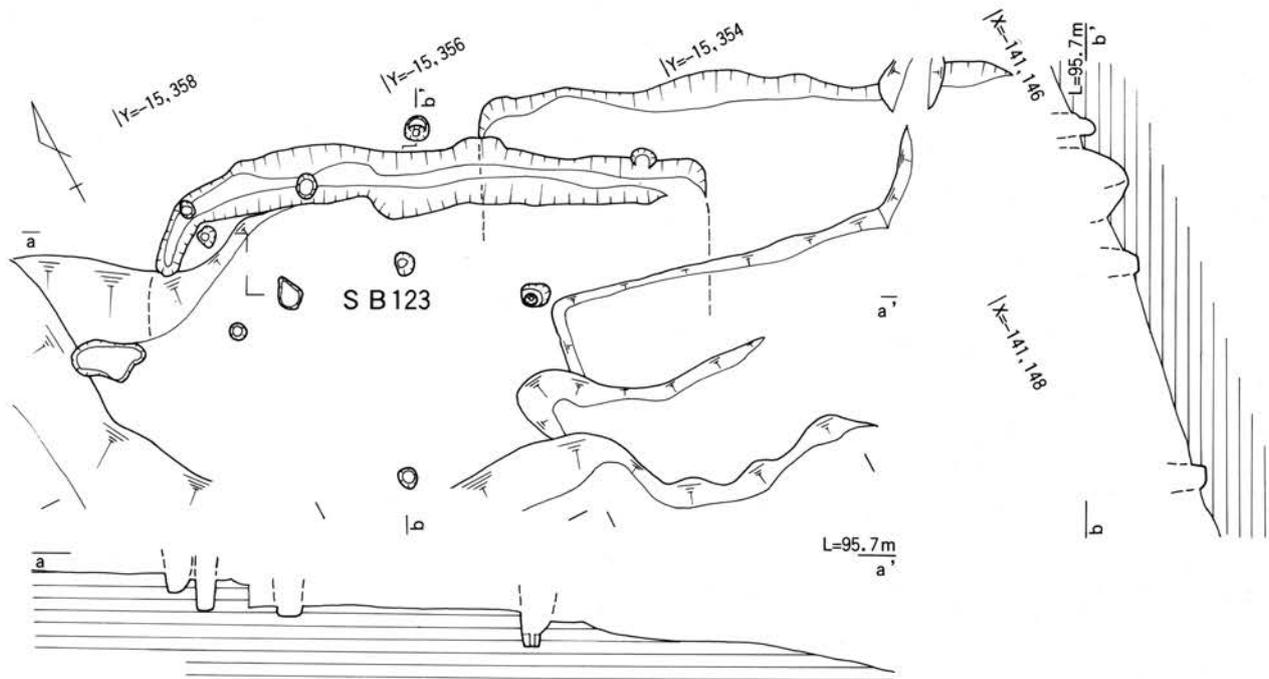
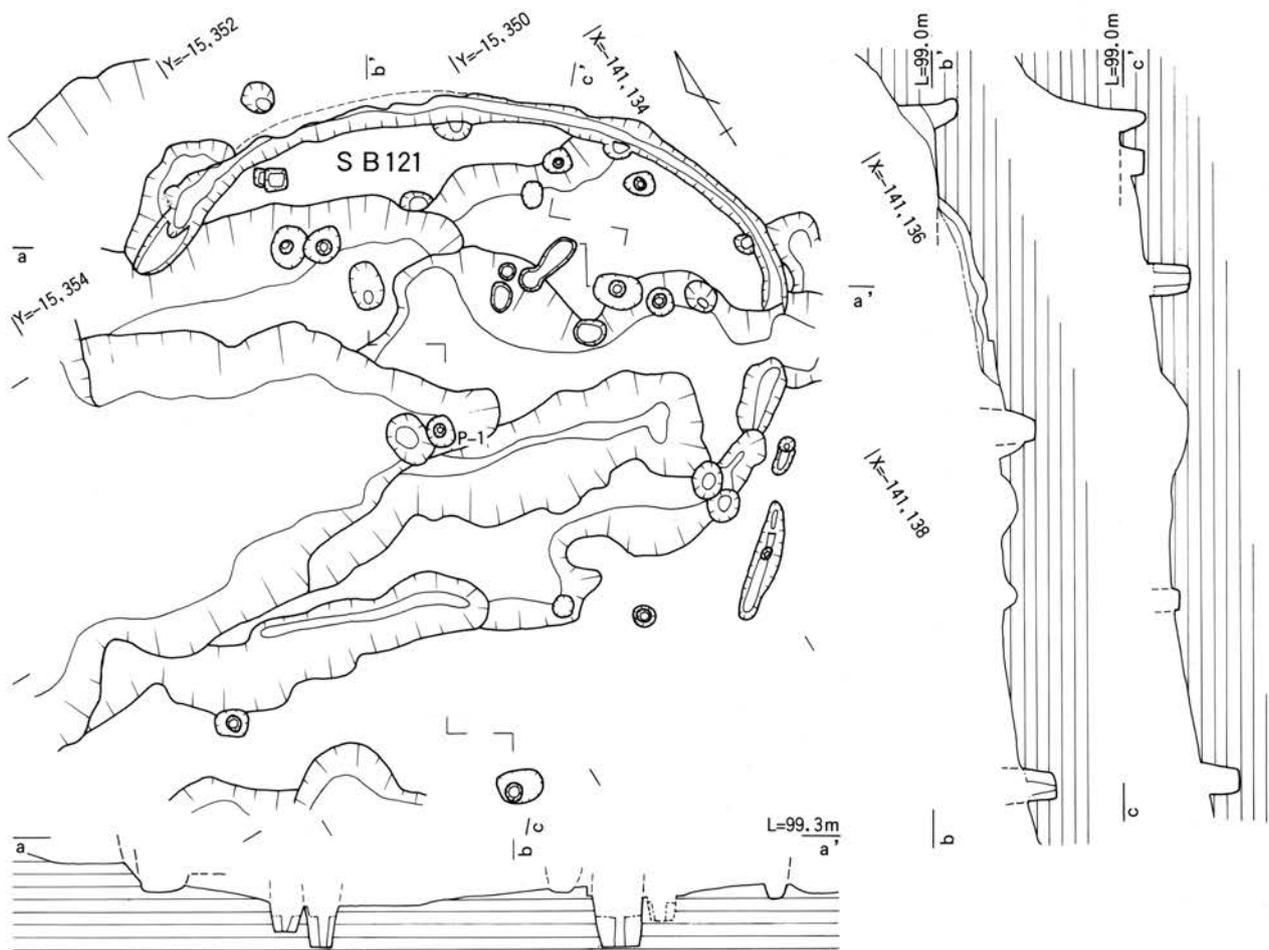
竖穴式住居跡S B 60・62実測図



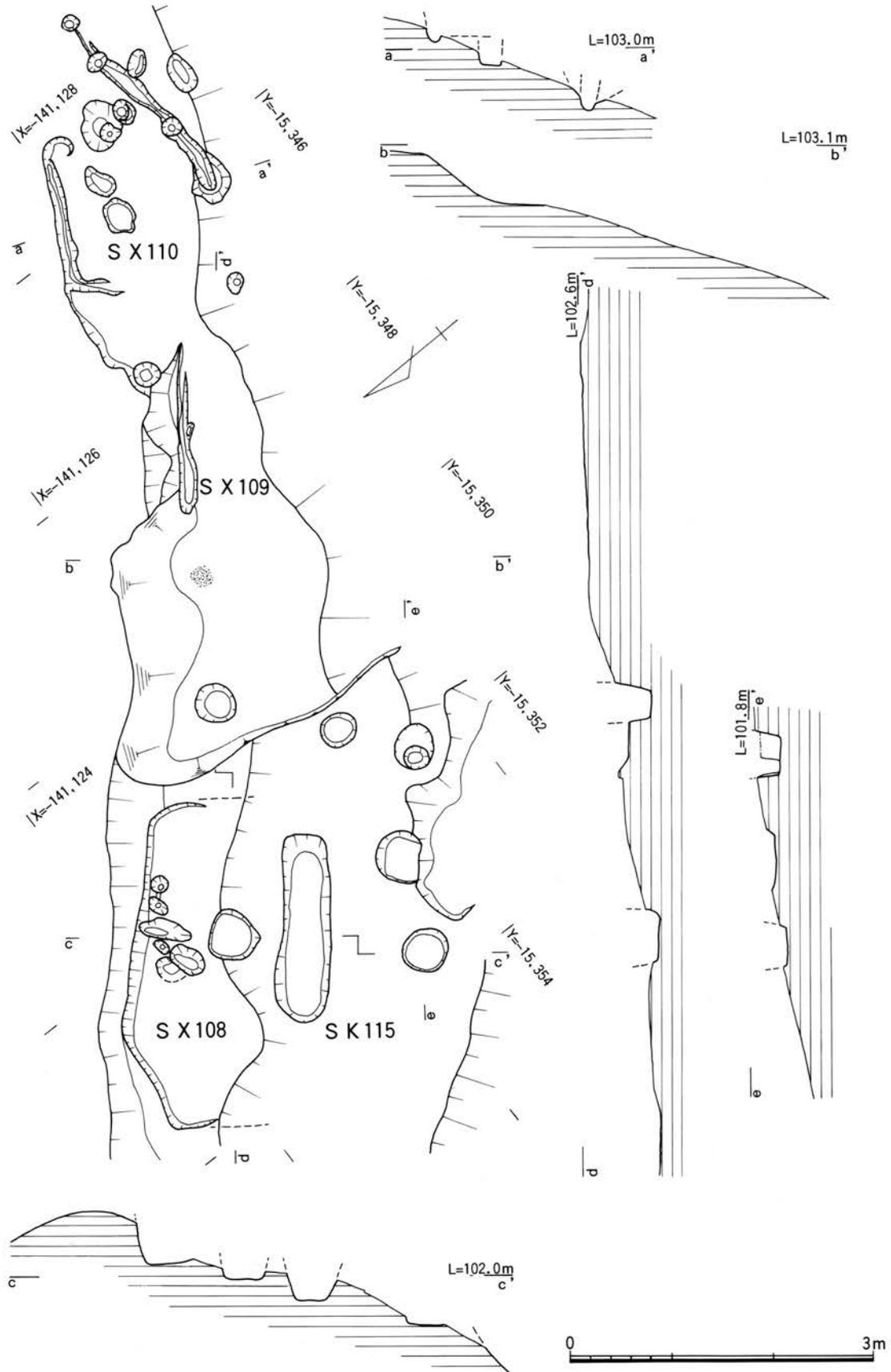
竖穴式住居跡SB61・71、段状遺構SX70実測図



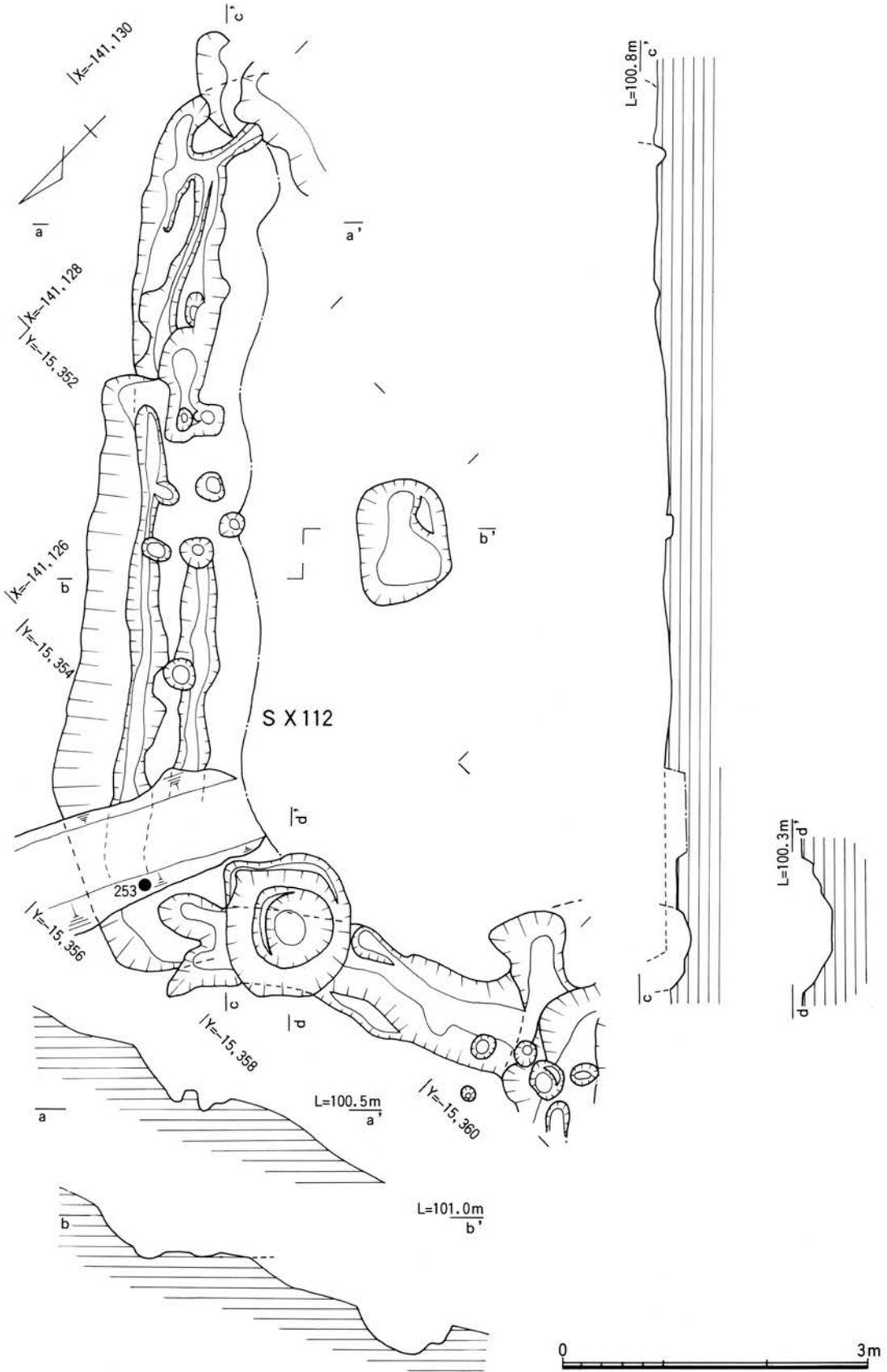
竖穴式住居跡 S B 75 · 76 · 124 実測図



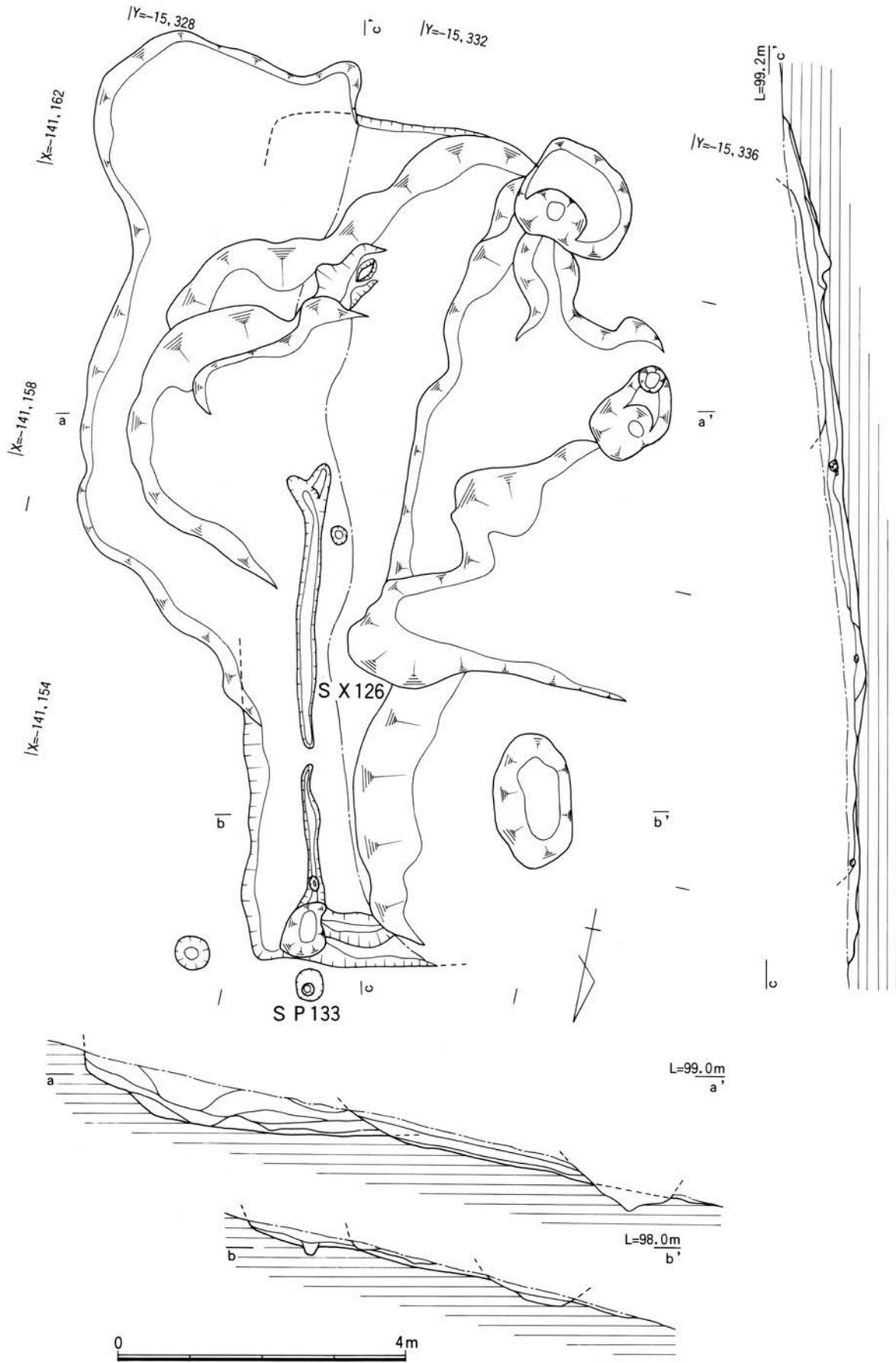
竪穴式住居跡S B121・123実測図



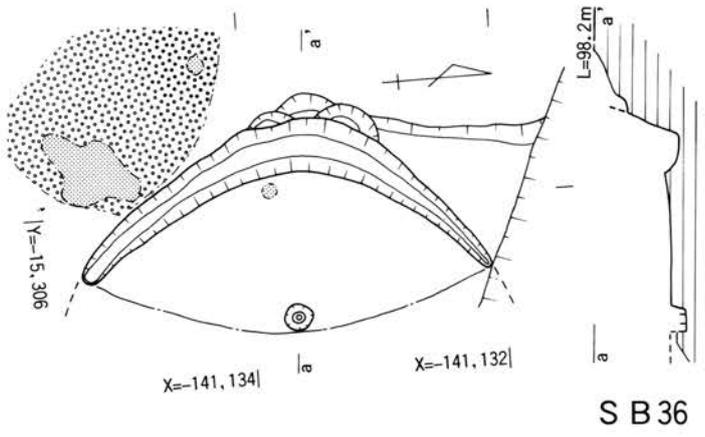
段状遺構 S X 108~110、土坑 S K 115 実測図



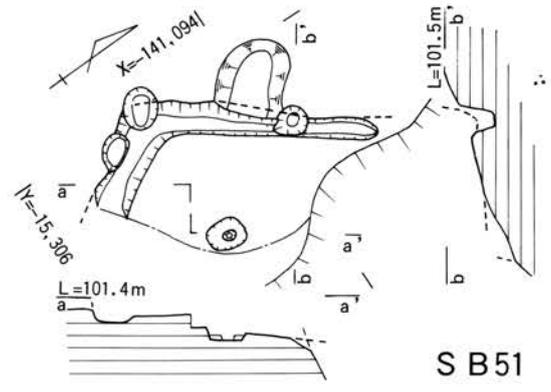
段状遺構 S X 112 実測図



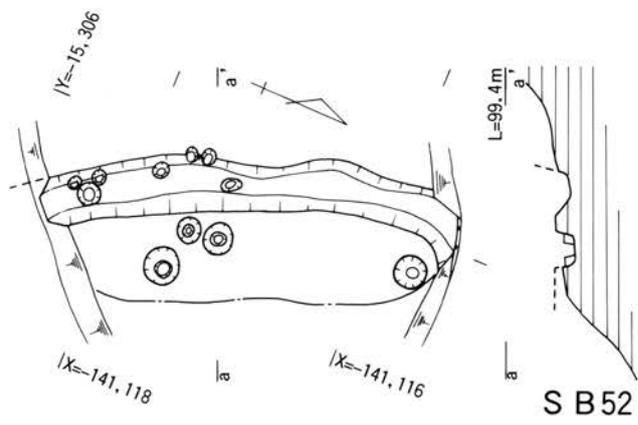
段状遺構 S X 126 実測図



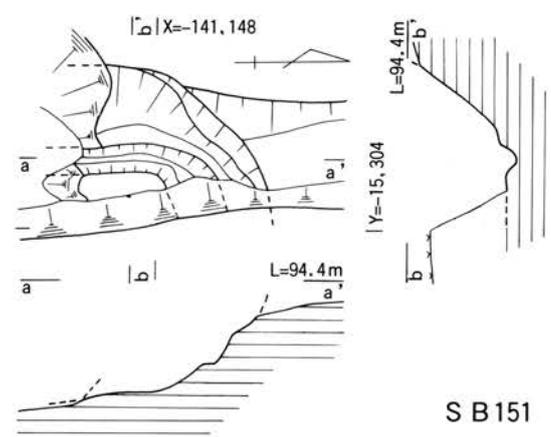
S B 36



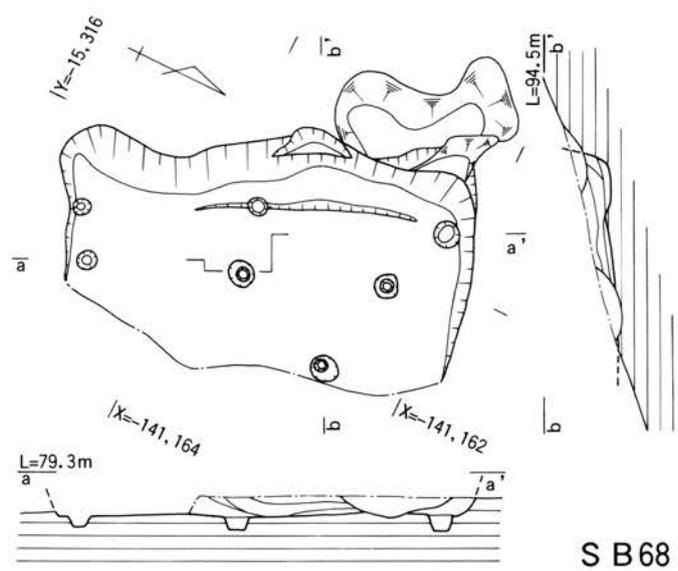
S B 51



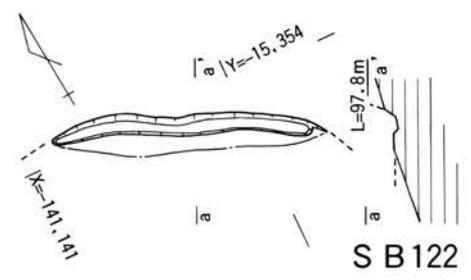
S B 52



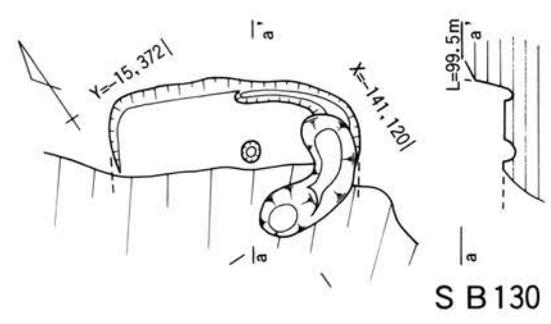
S B 151



S B 68

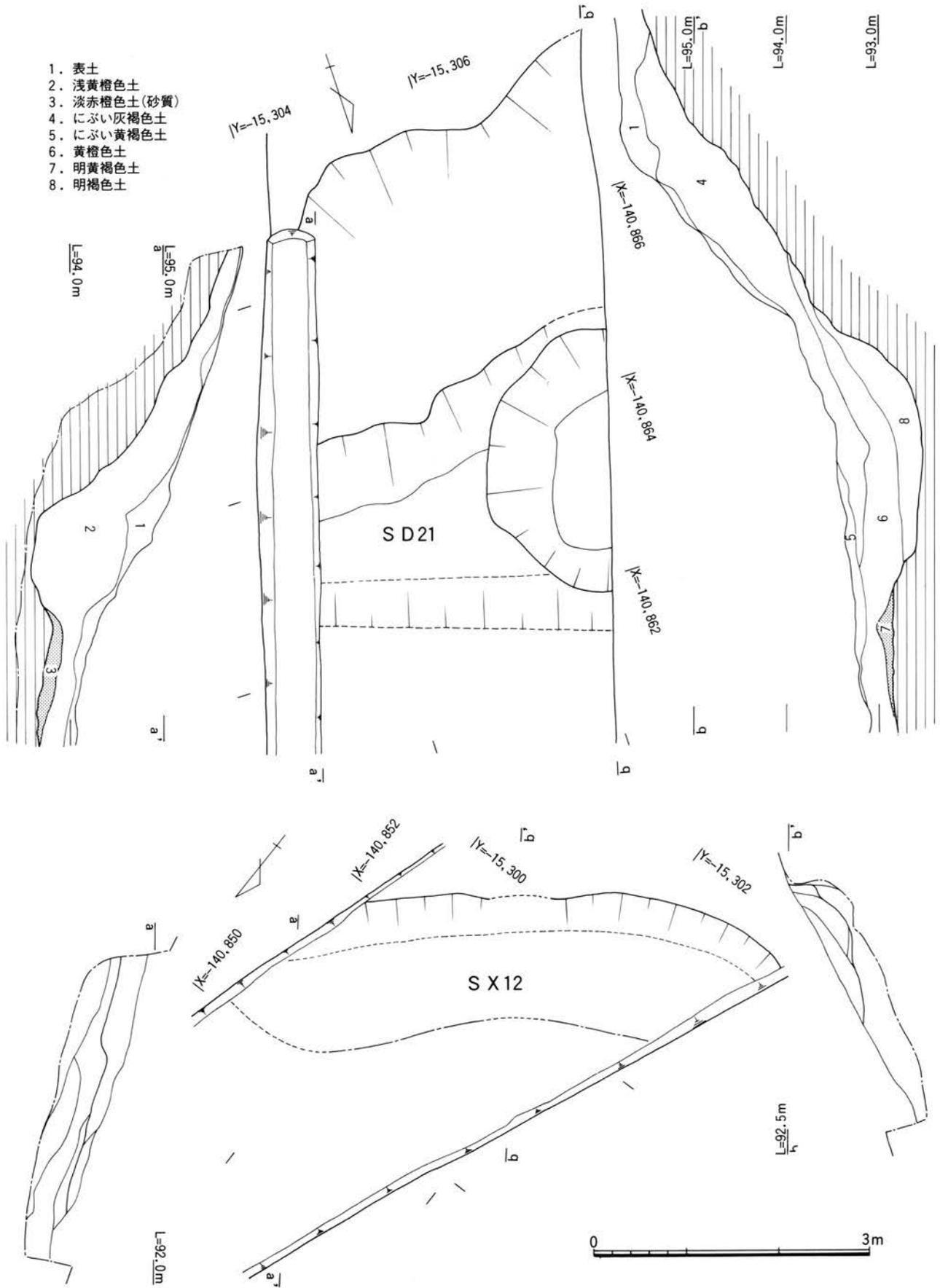


S B 122

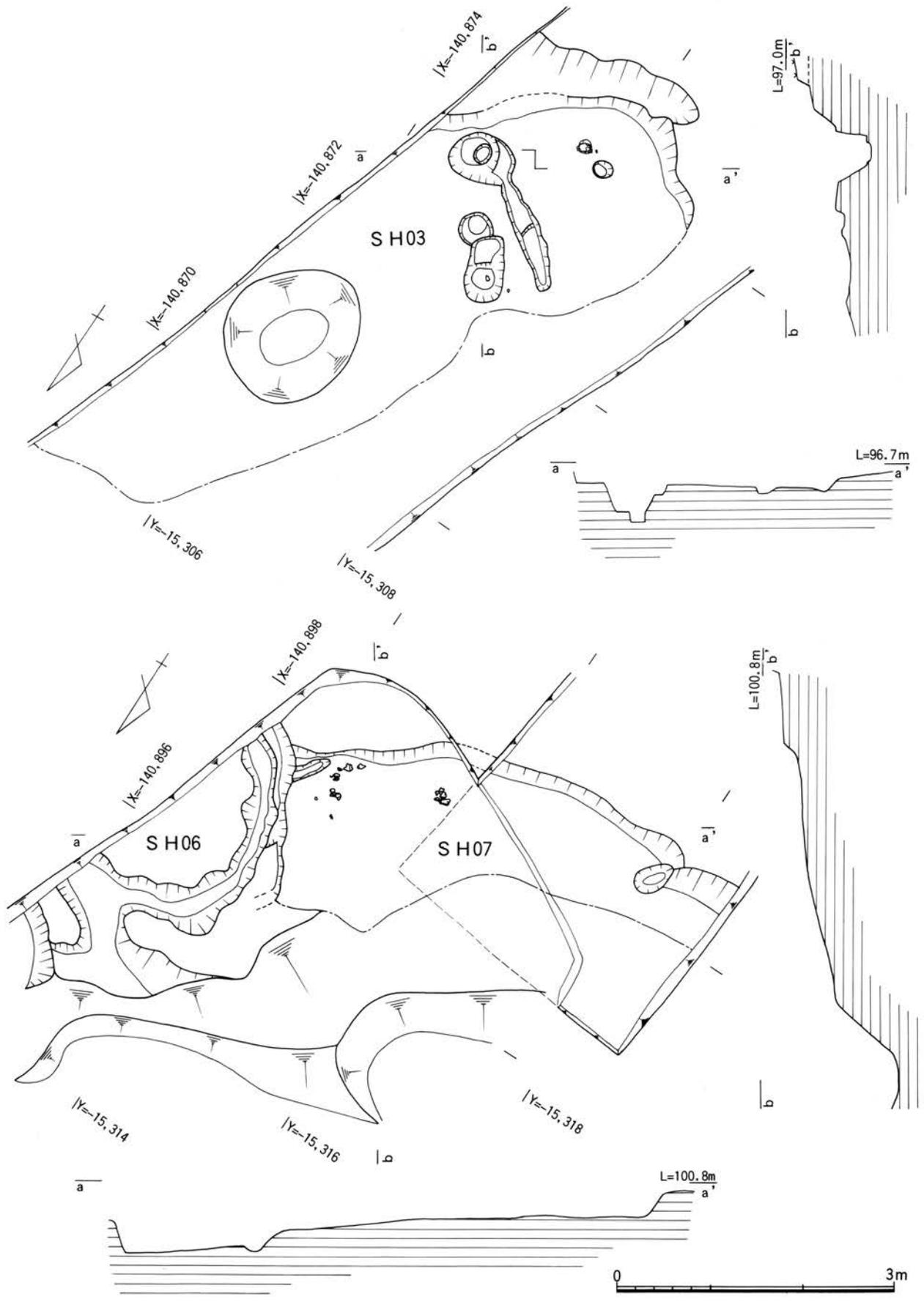


S B 130

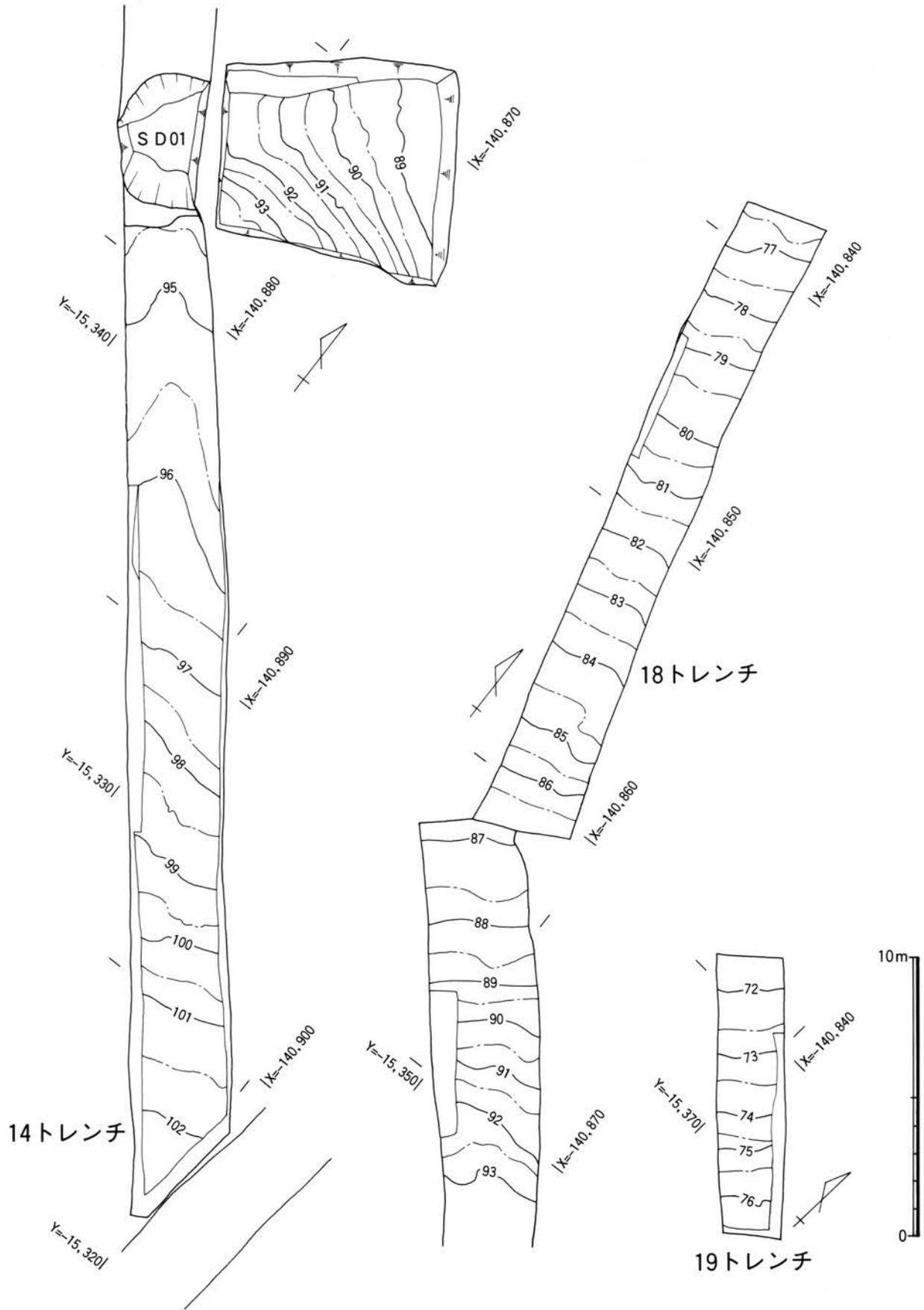




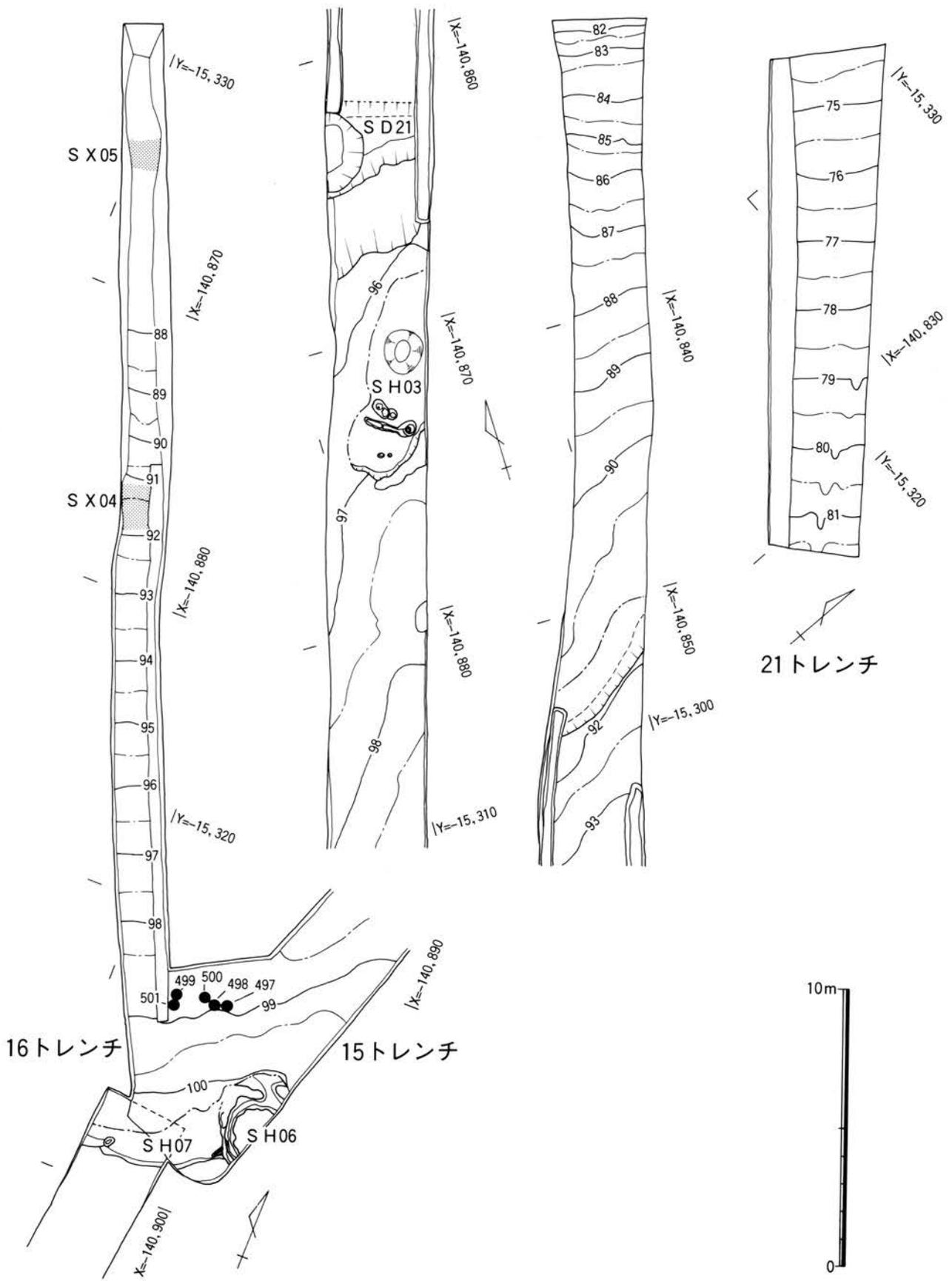
段状遺構S X12、溝S D21実測図



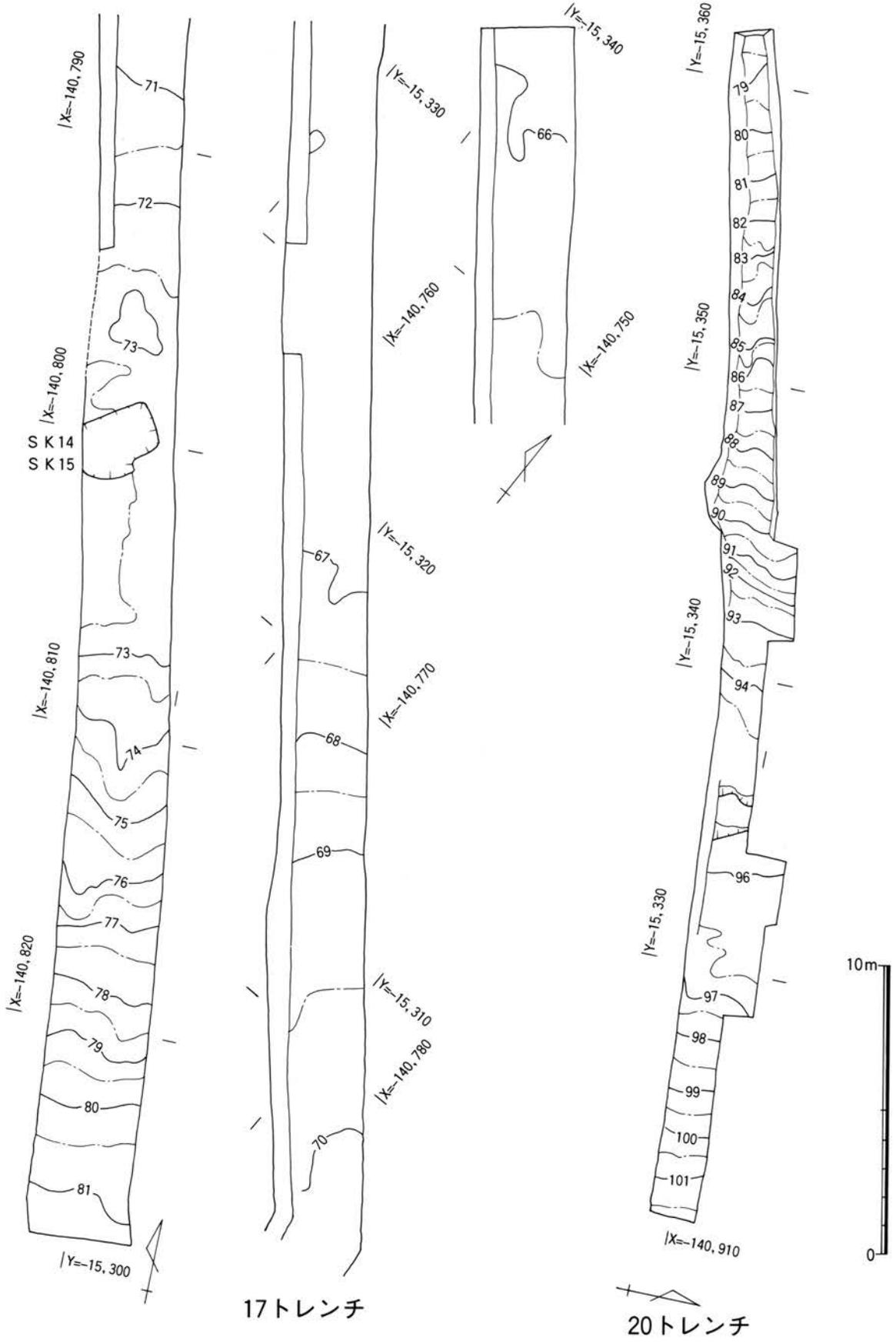
竖穴式住居跡 SH03・06・07実測図



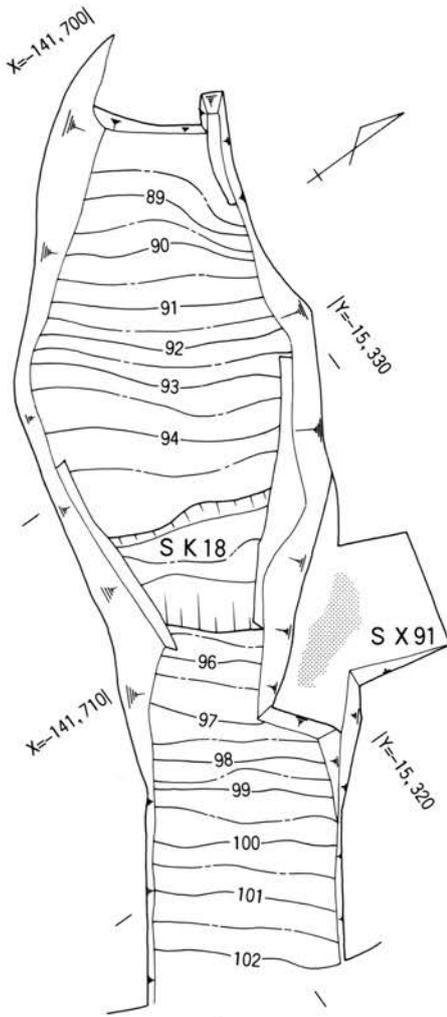
14・18・19トレンチ平面図



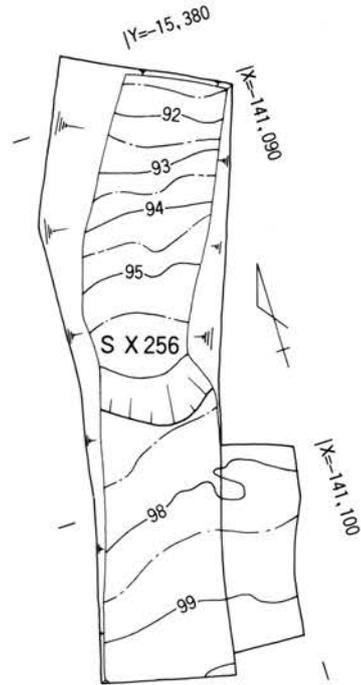
15・16・21トレンチ平面図



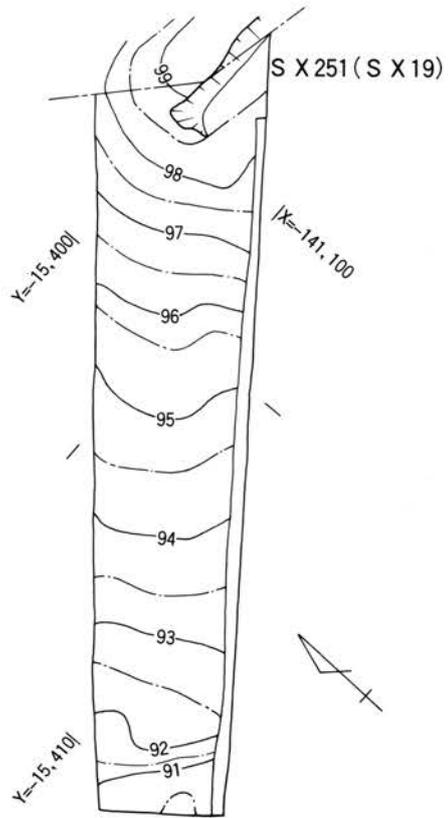
17・20トレンチ平面図



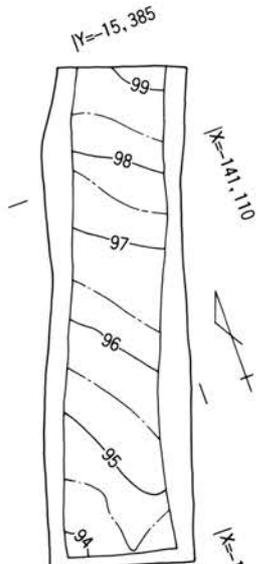
22トレンチ



23トレンチ

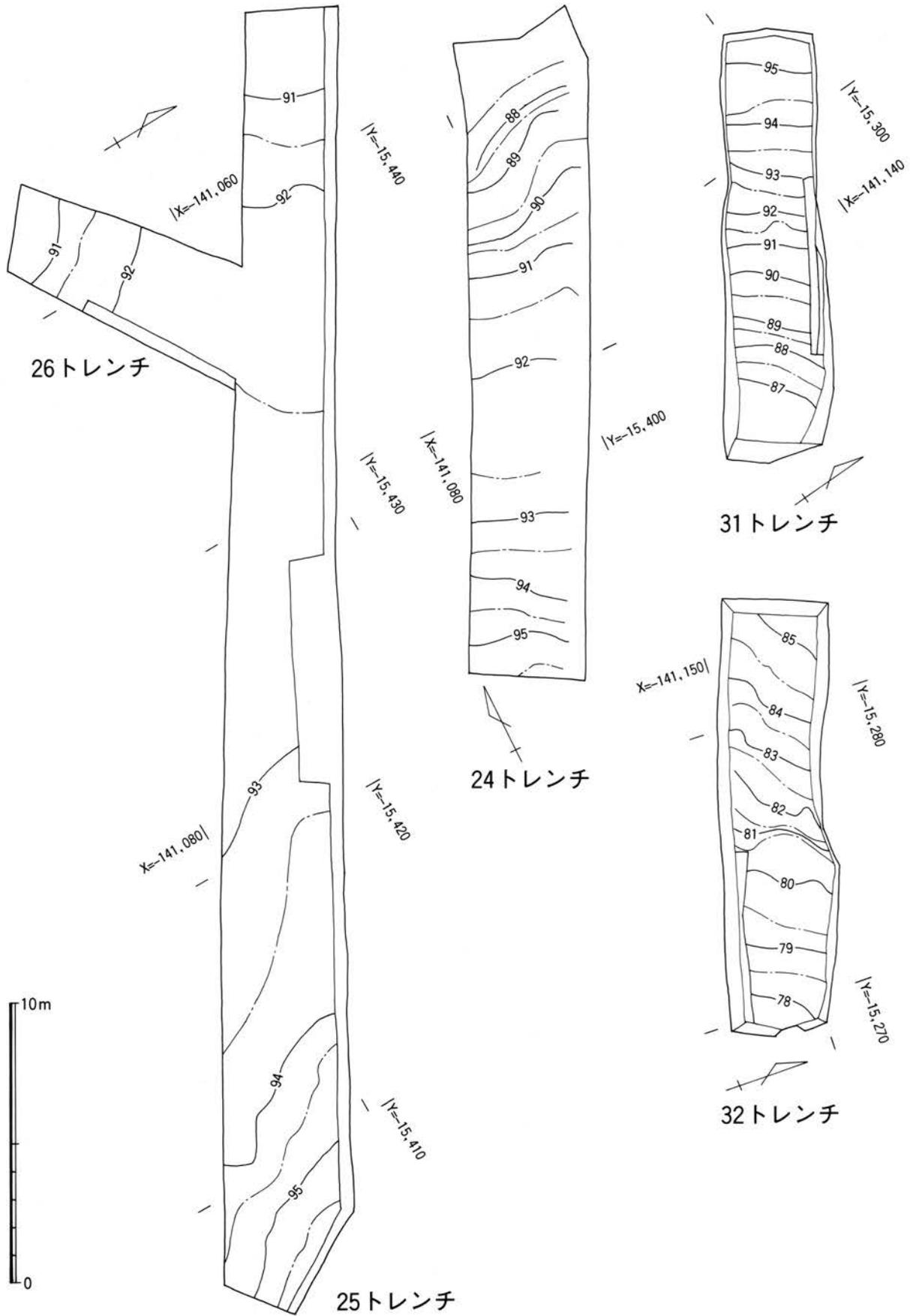


27トレンチ

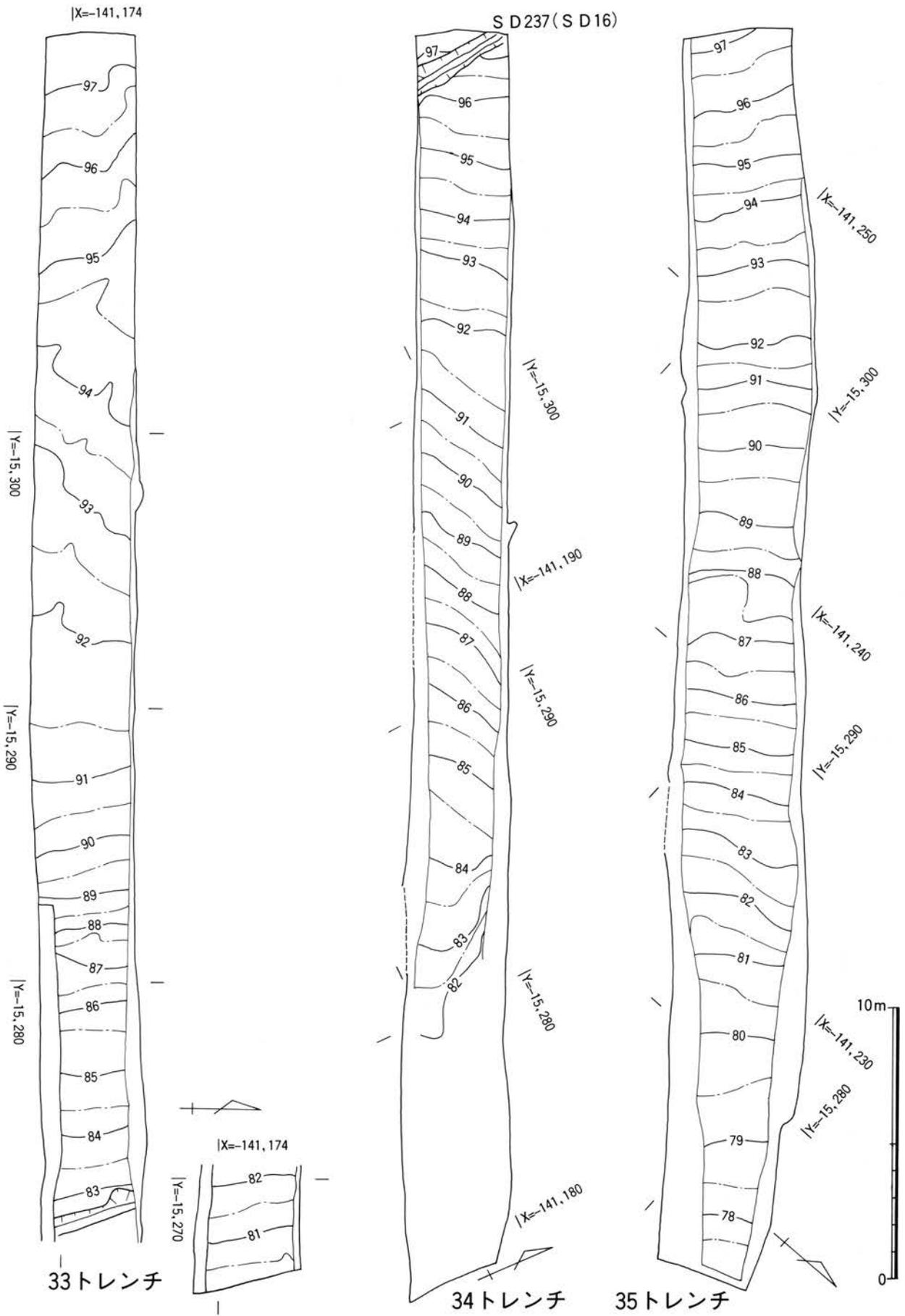


28トレンチ

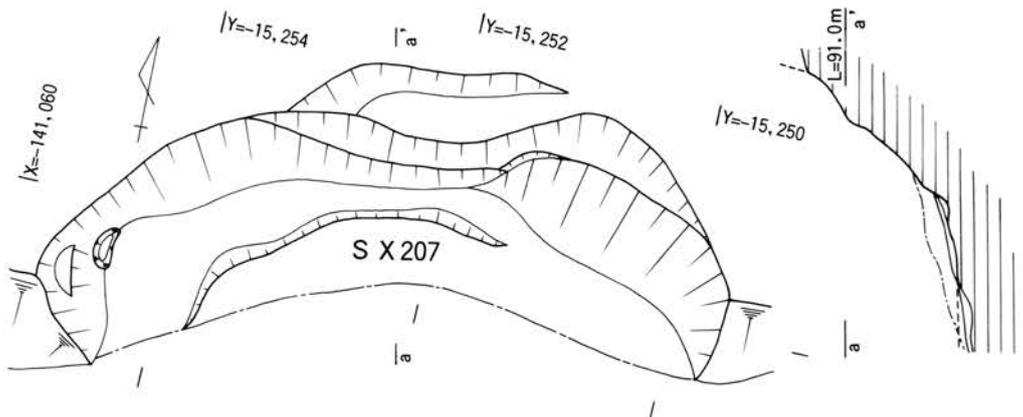
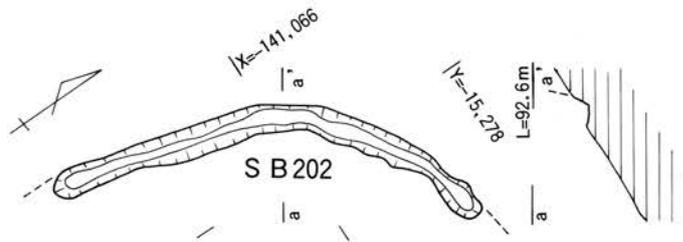
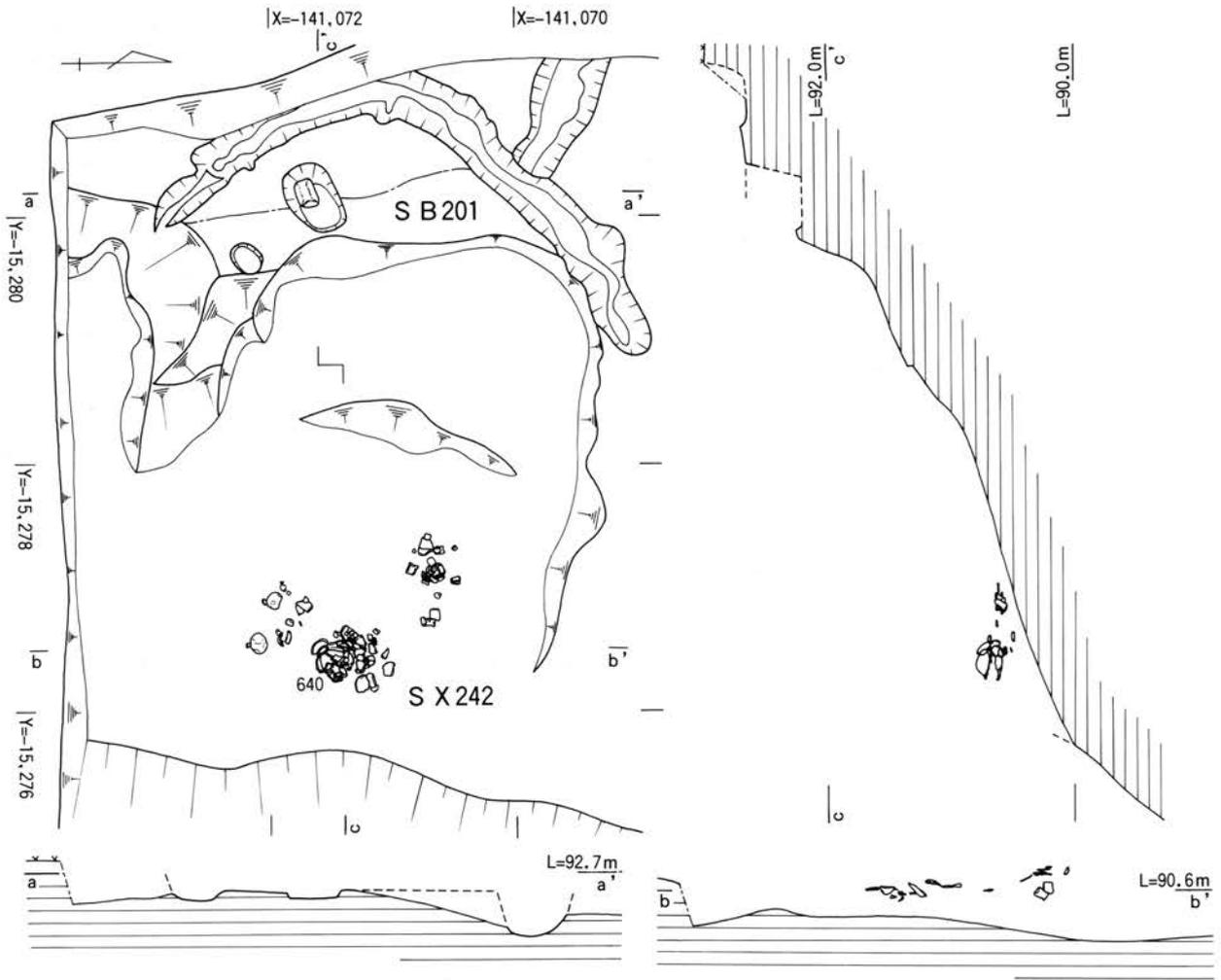




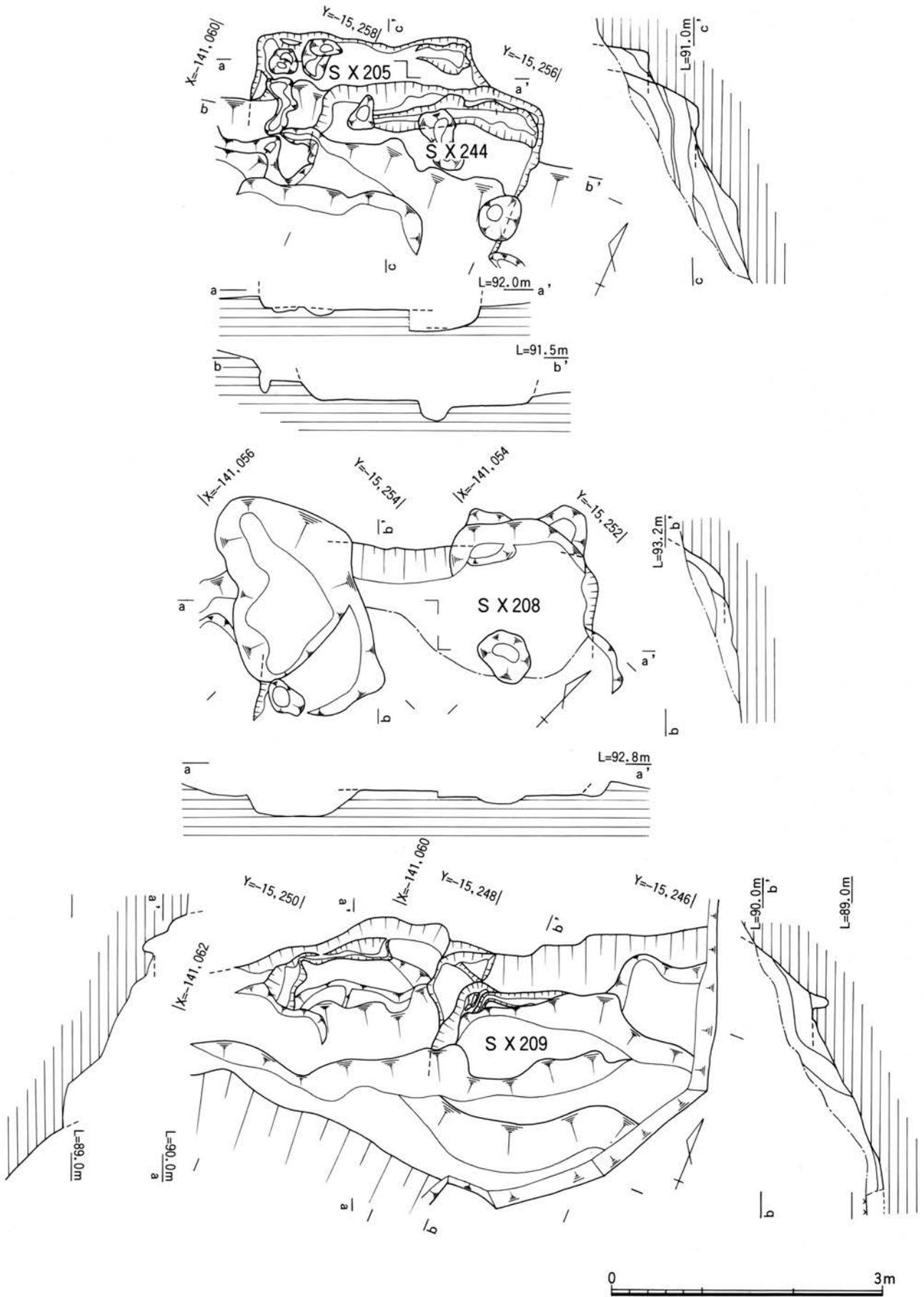
24~26・31・32トレンチ平面図



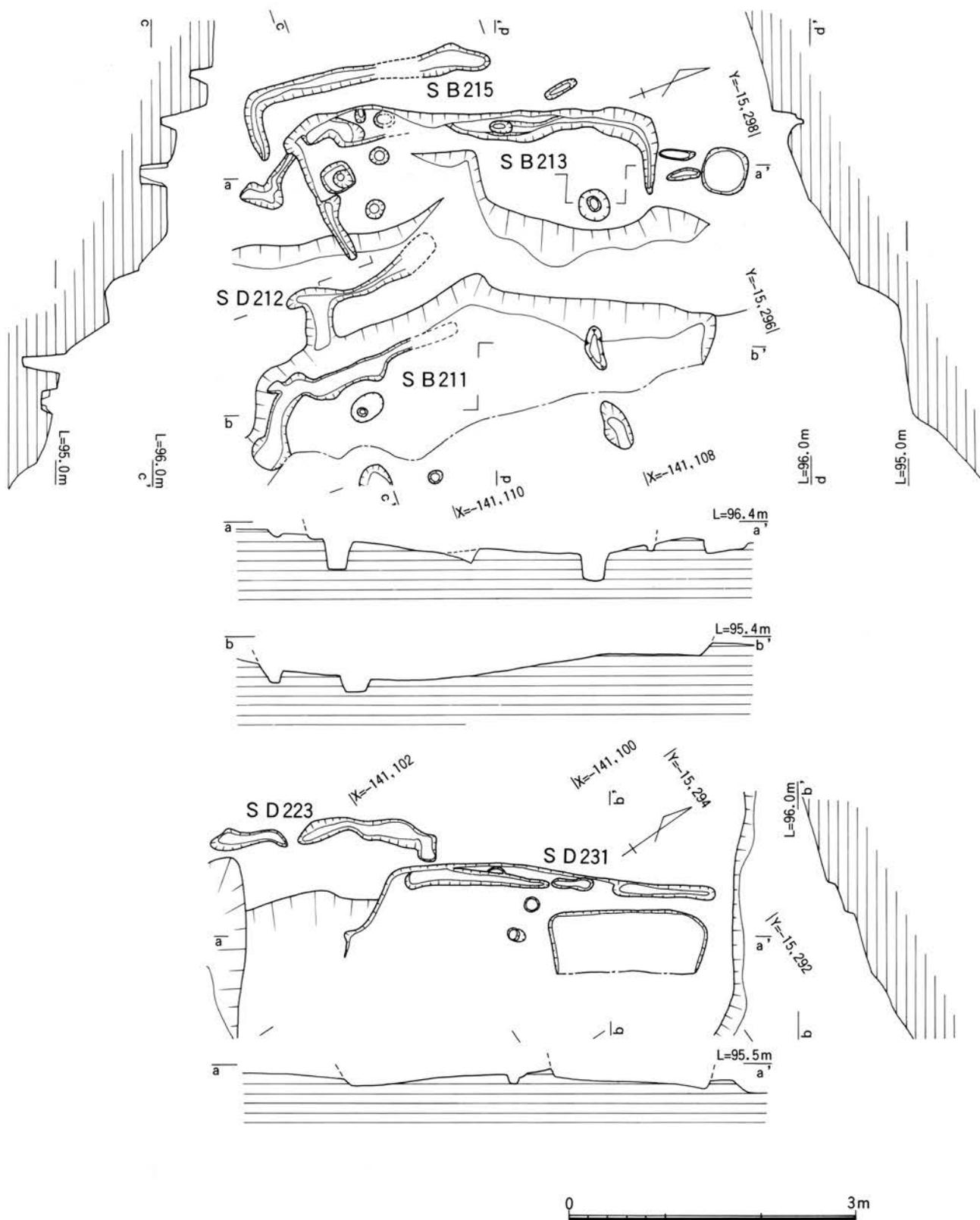
33~35トレンチ平面図



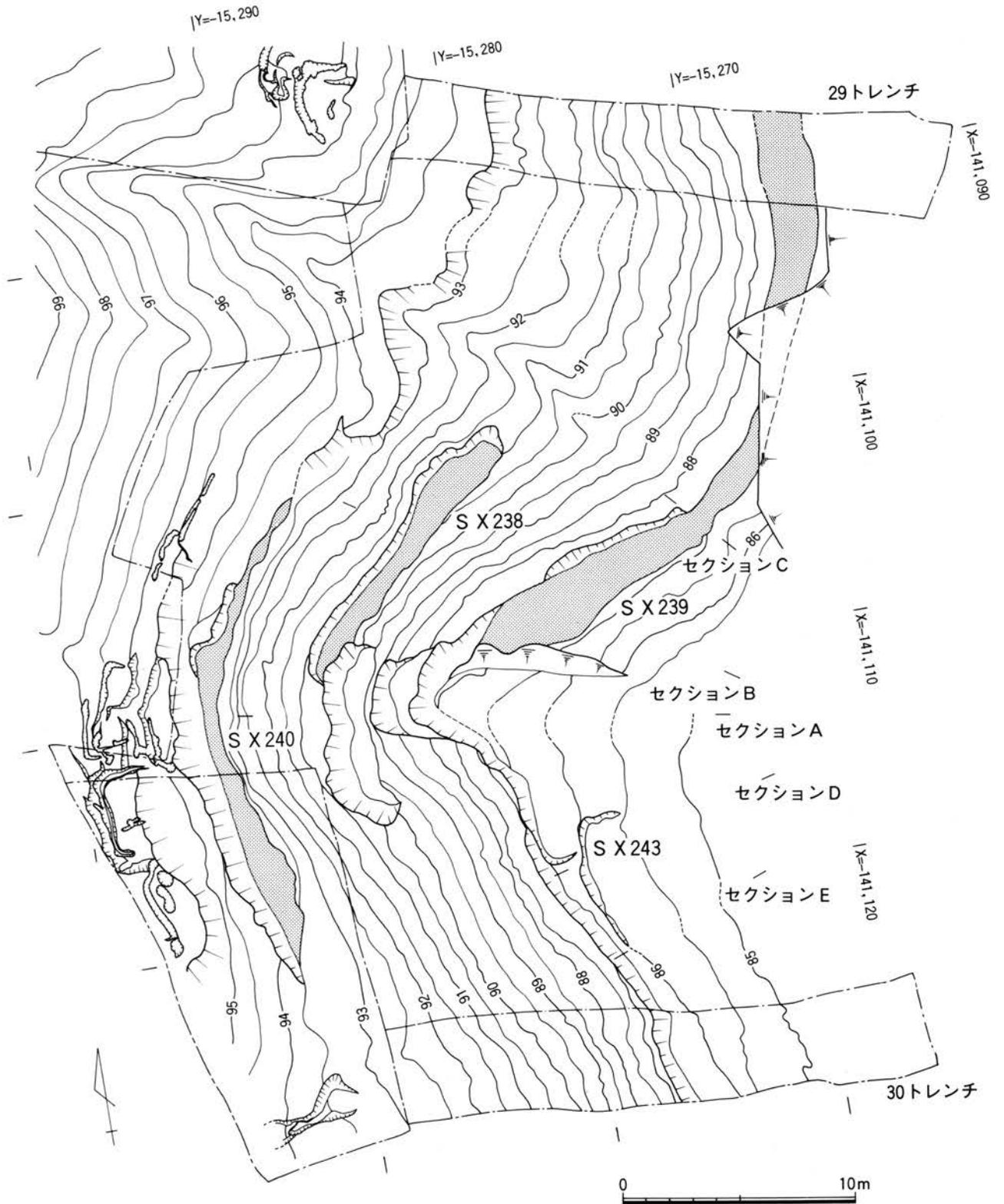
竖穴式住居跡 S B 201・202、段状遺構 S X 207 実測図



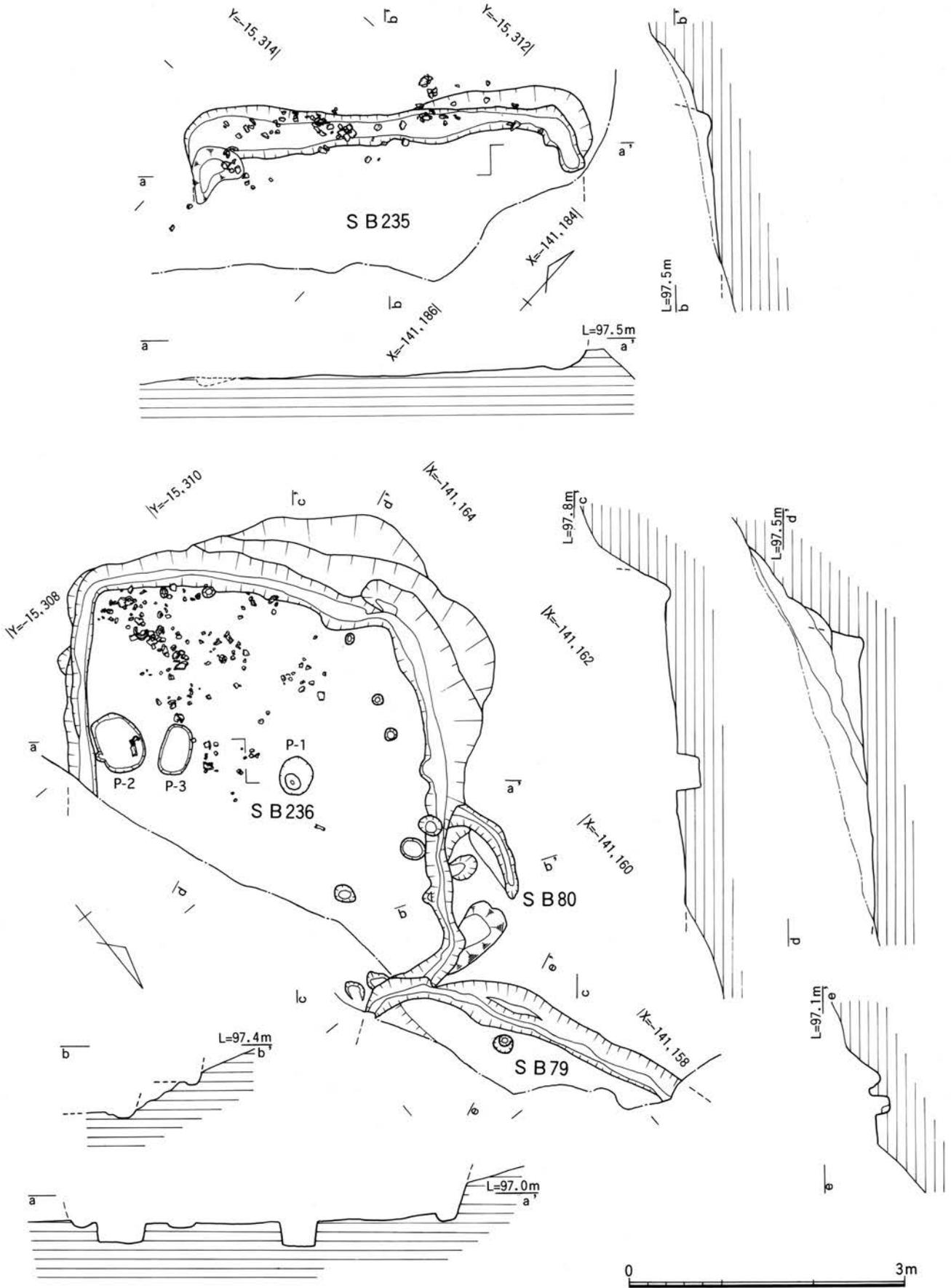
段状遺構 S X 205・208・209実測図



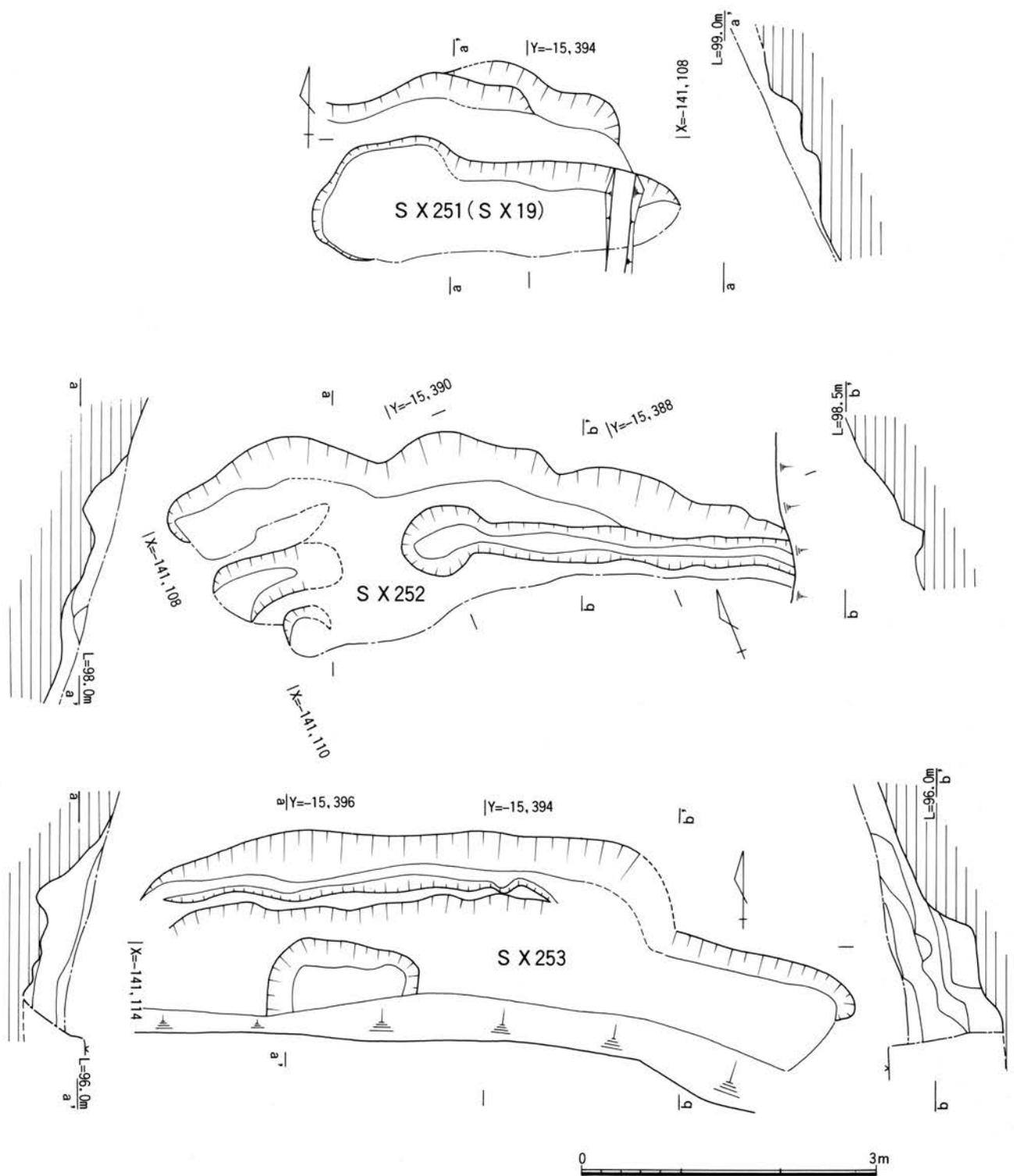
竖穴式住居跡S B 211・213・215、溝S D 212・223・231・244実測图



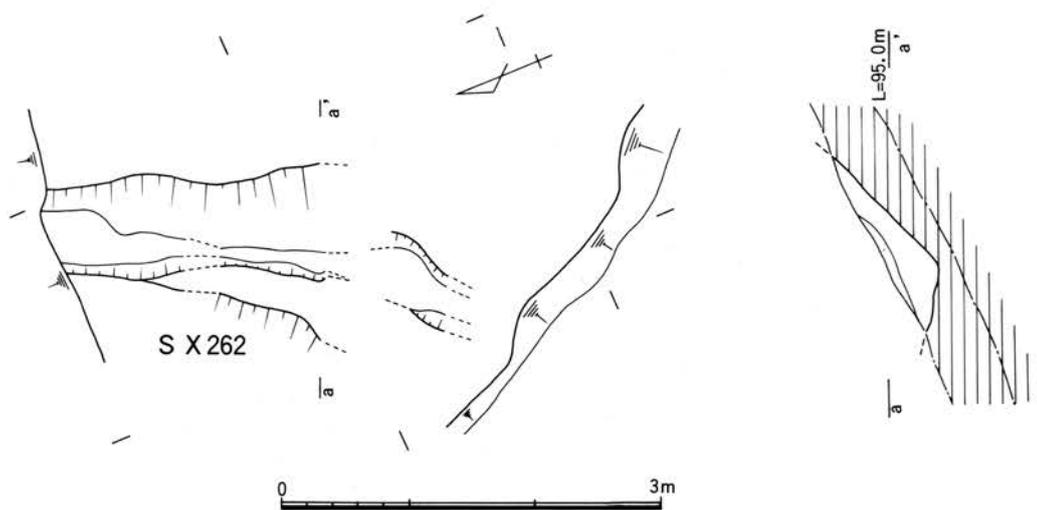
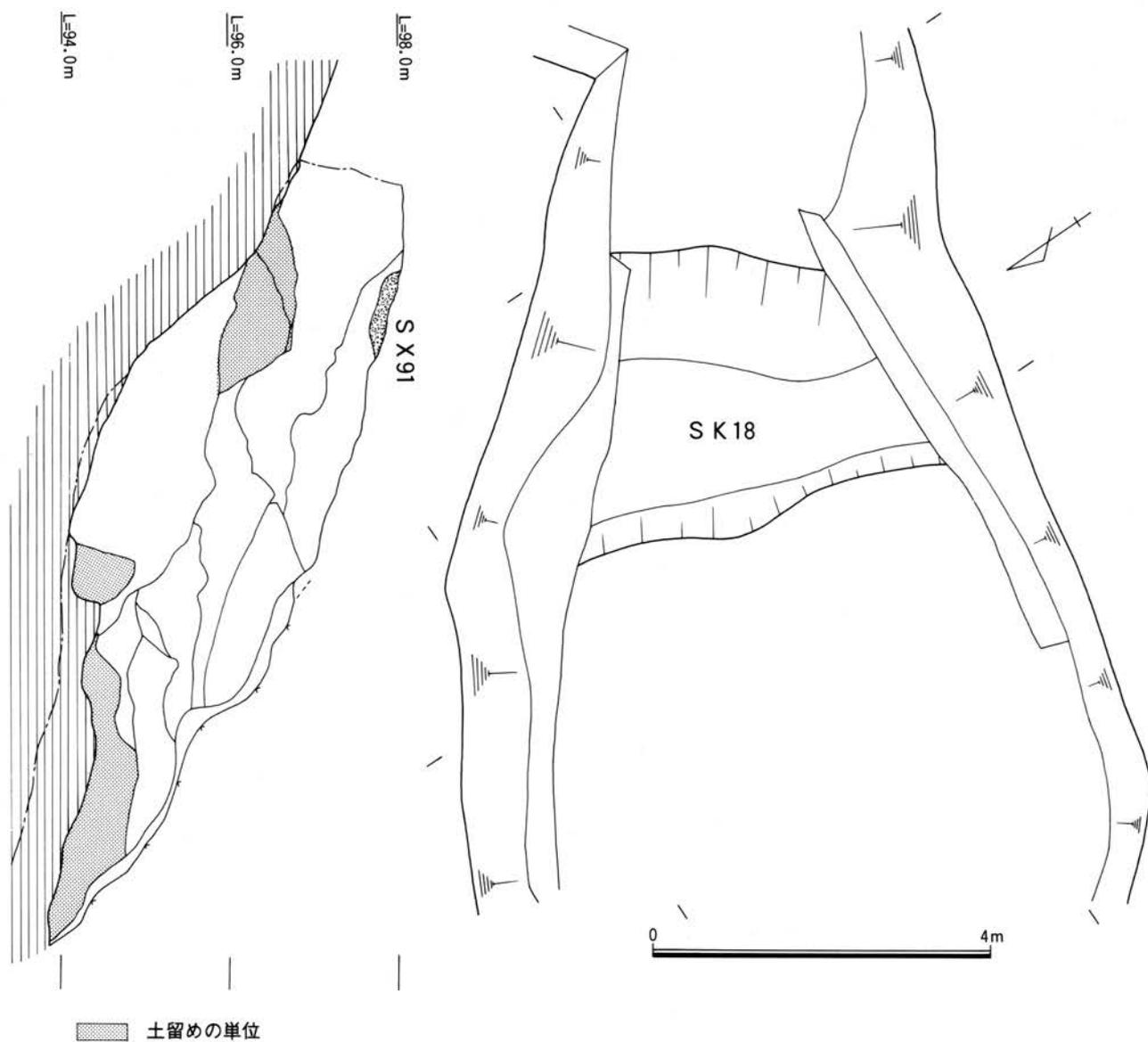
平坦面 S X 238~240 実測図



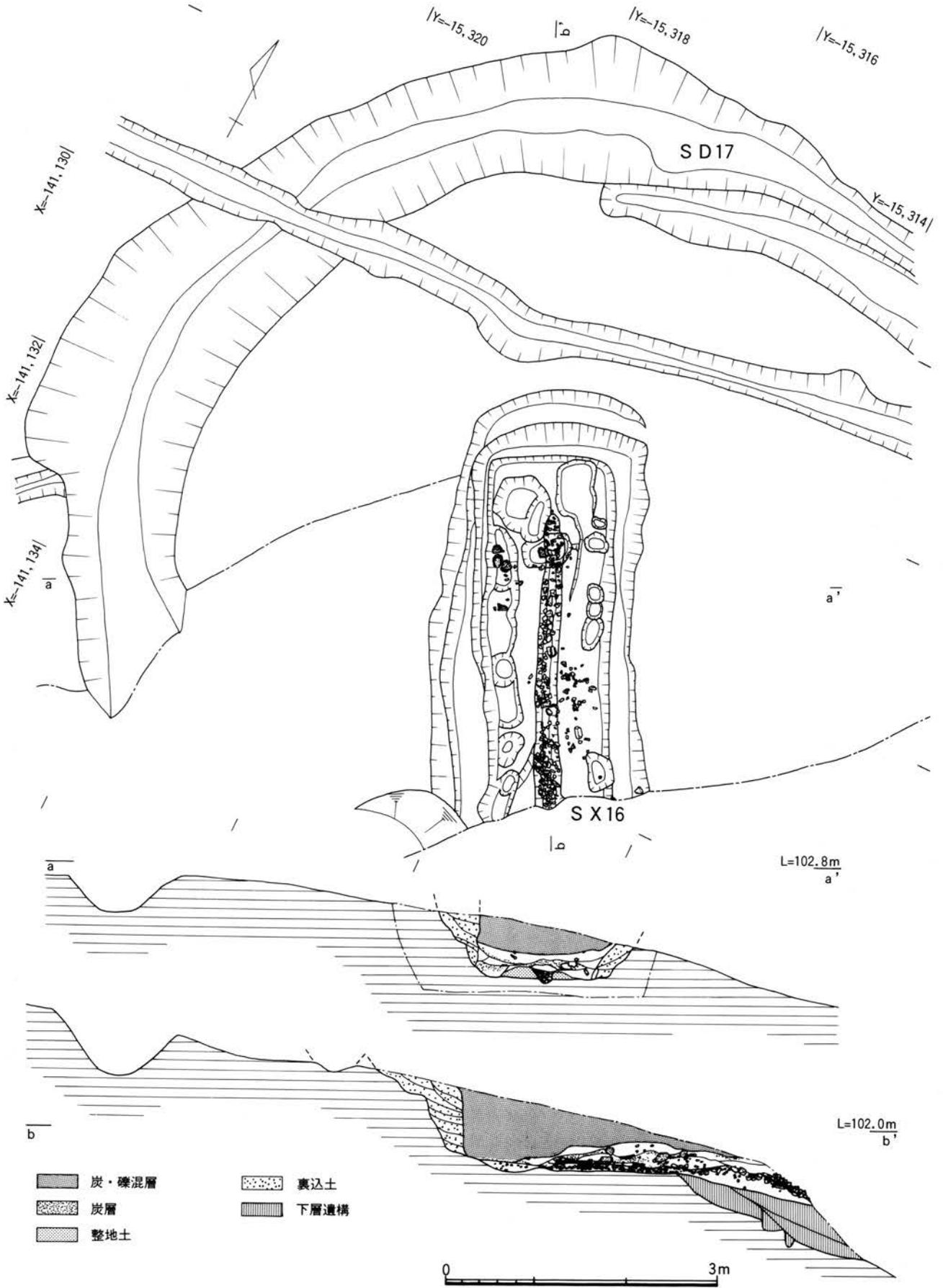
竪穴式住居跡 S B 79・80・235・236 実測図



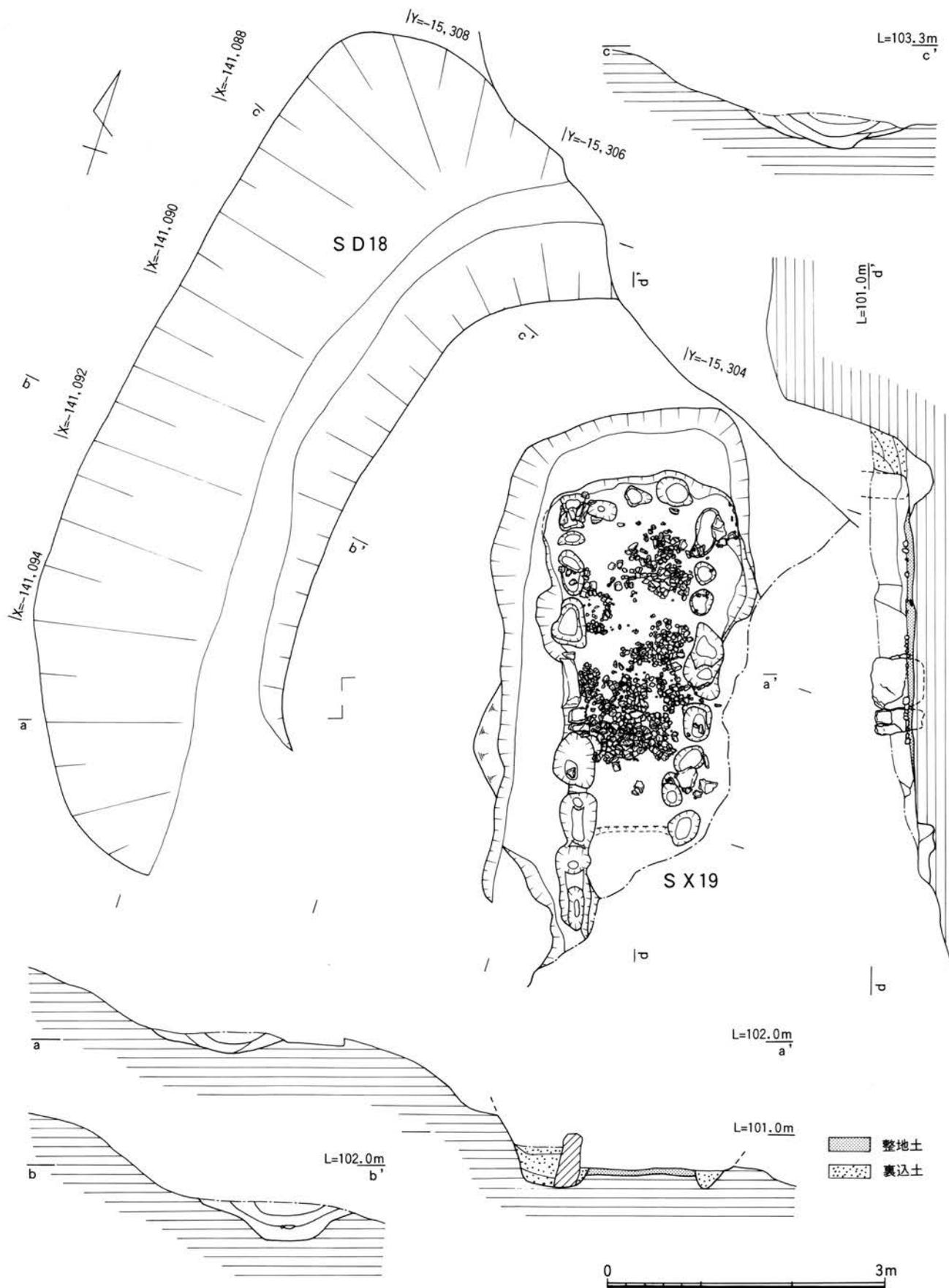
段状遺構 S X 251~253実測図



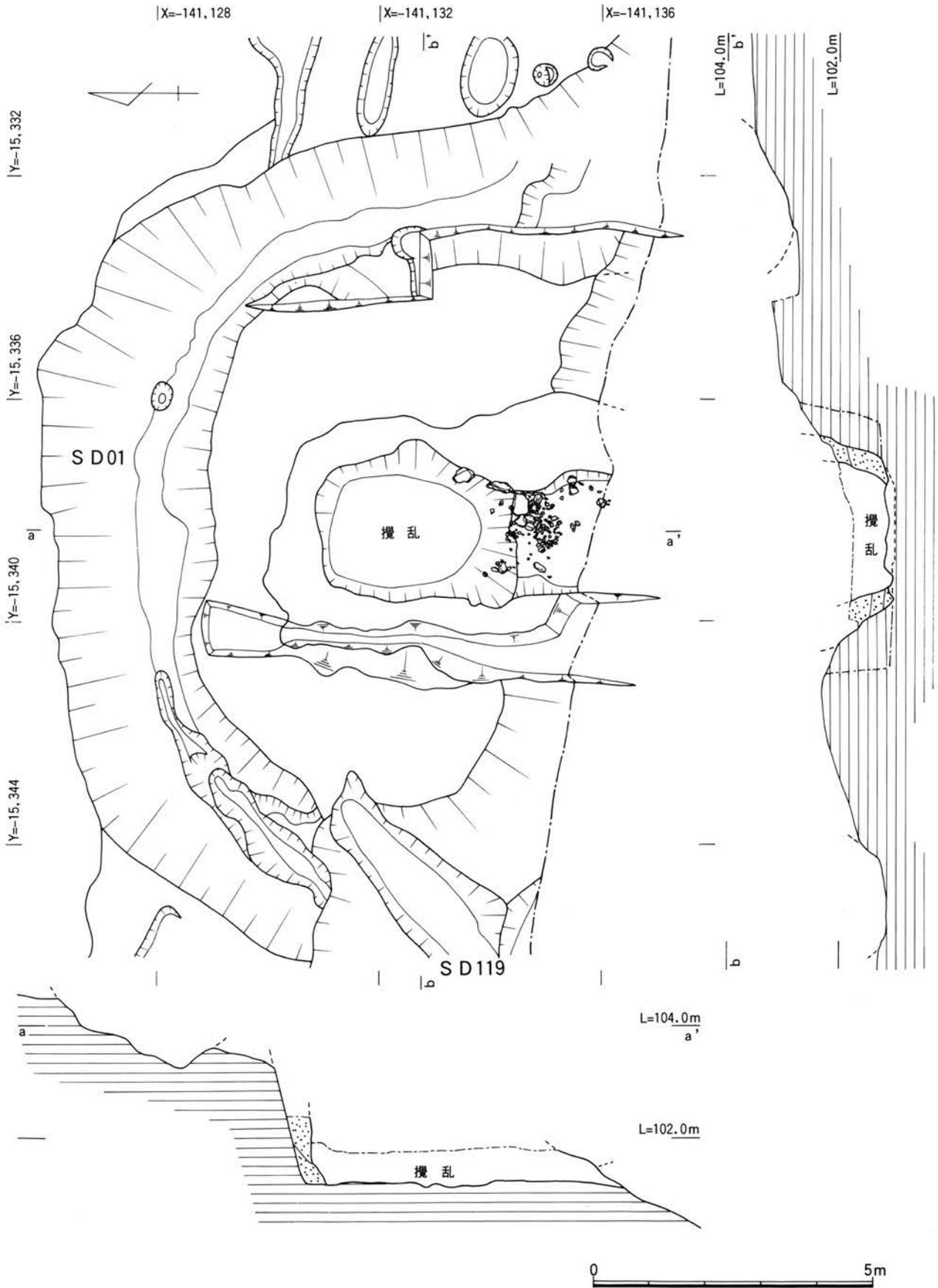
土坑S K 18、溝状遺構S X 262実測図



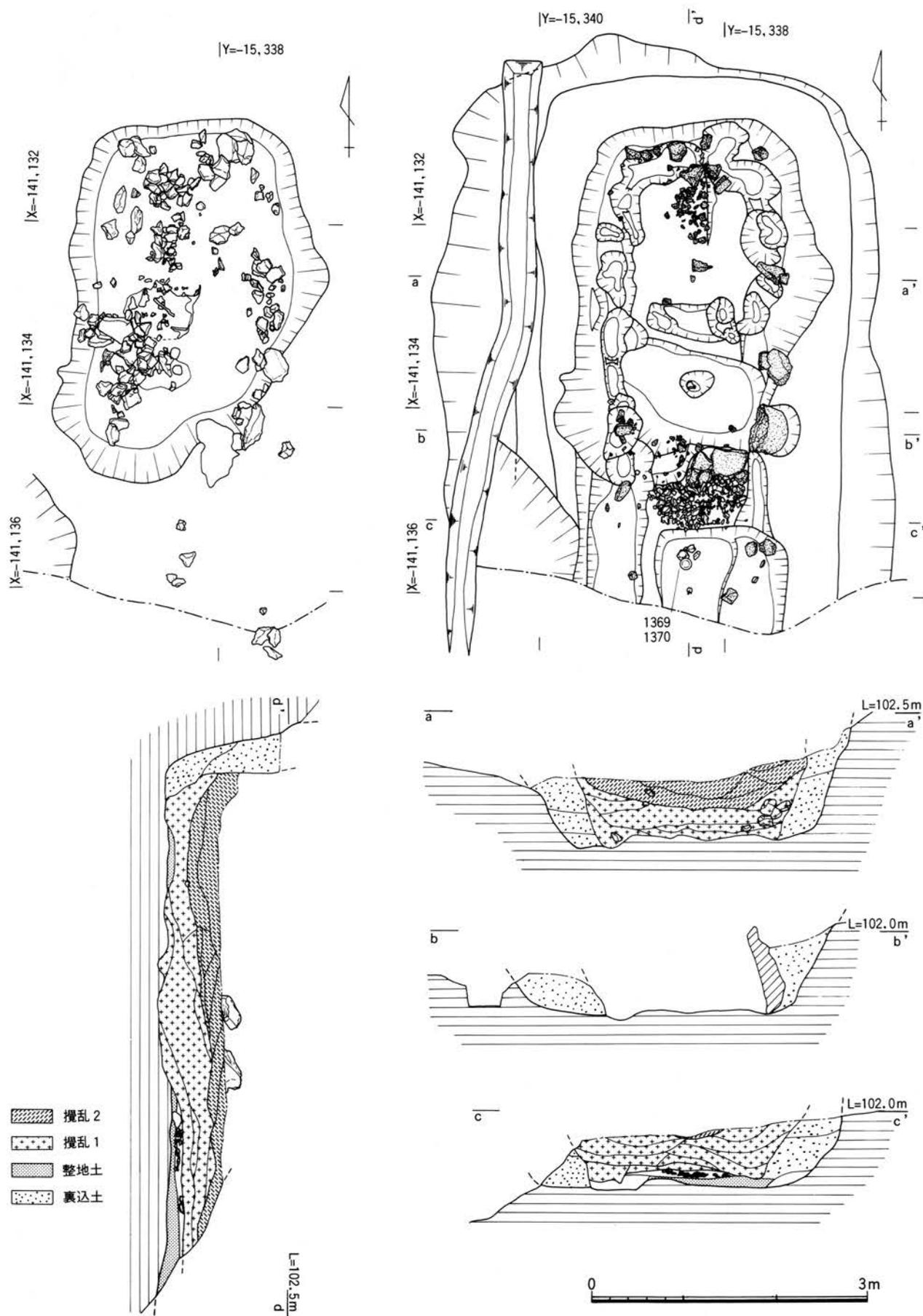
片山3号墳実測図



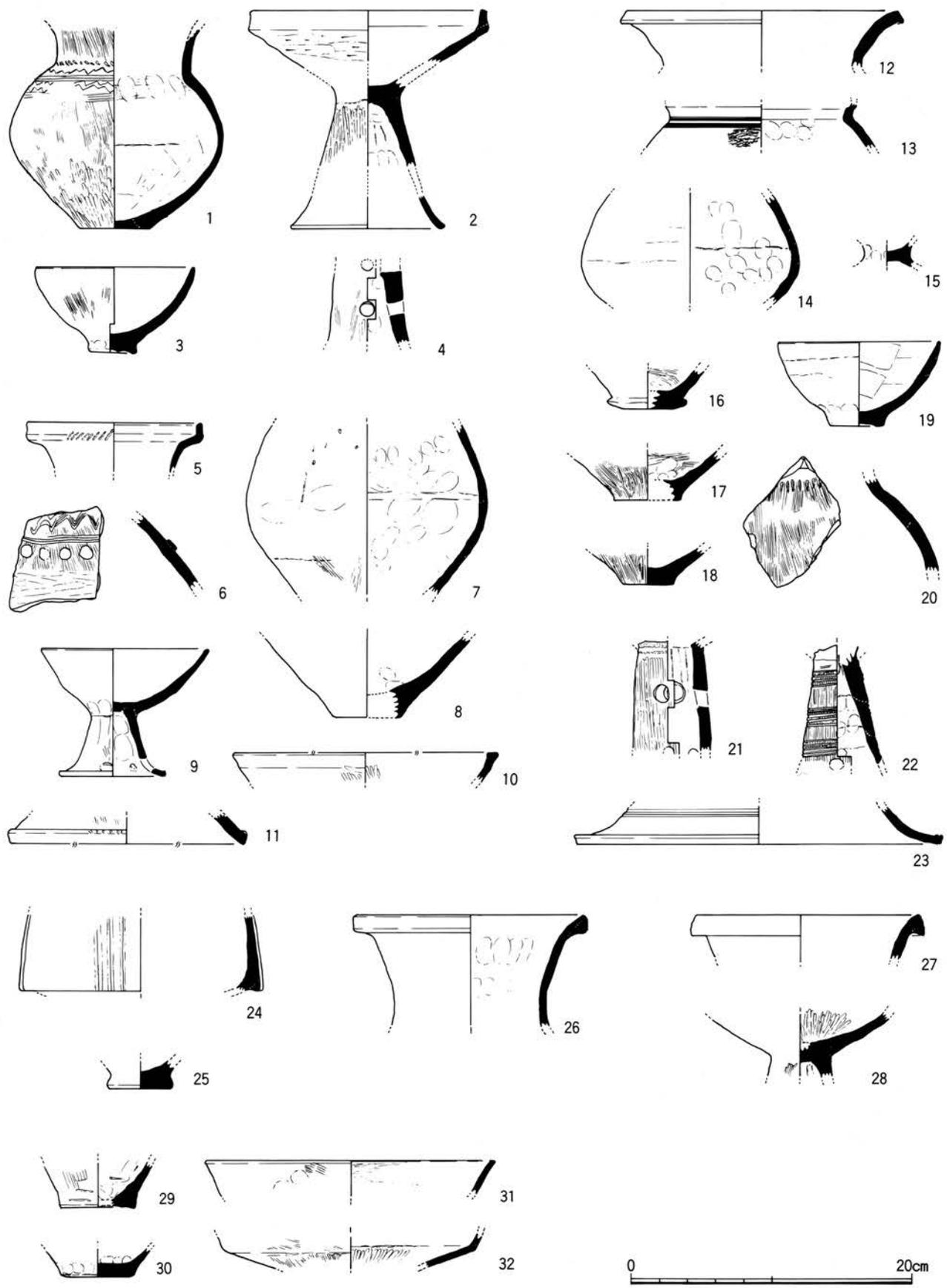
片山4号墳実測图



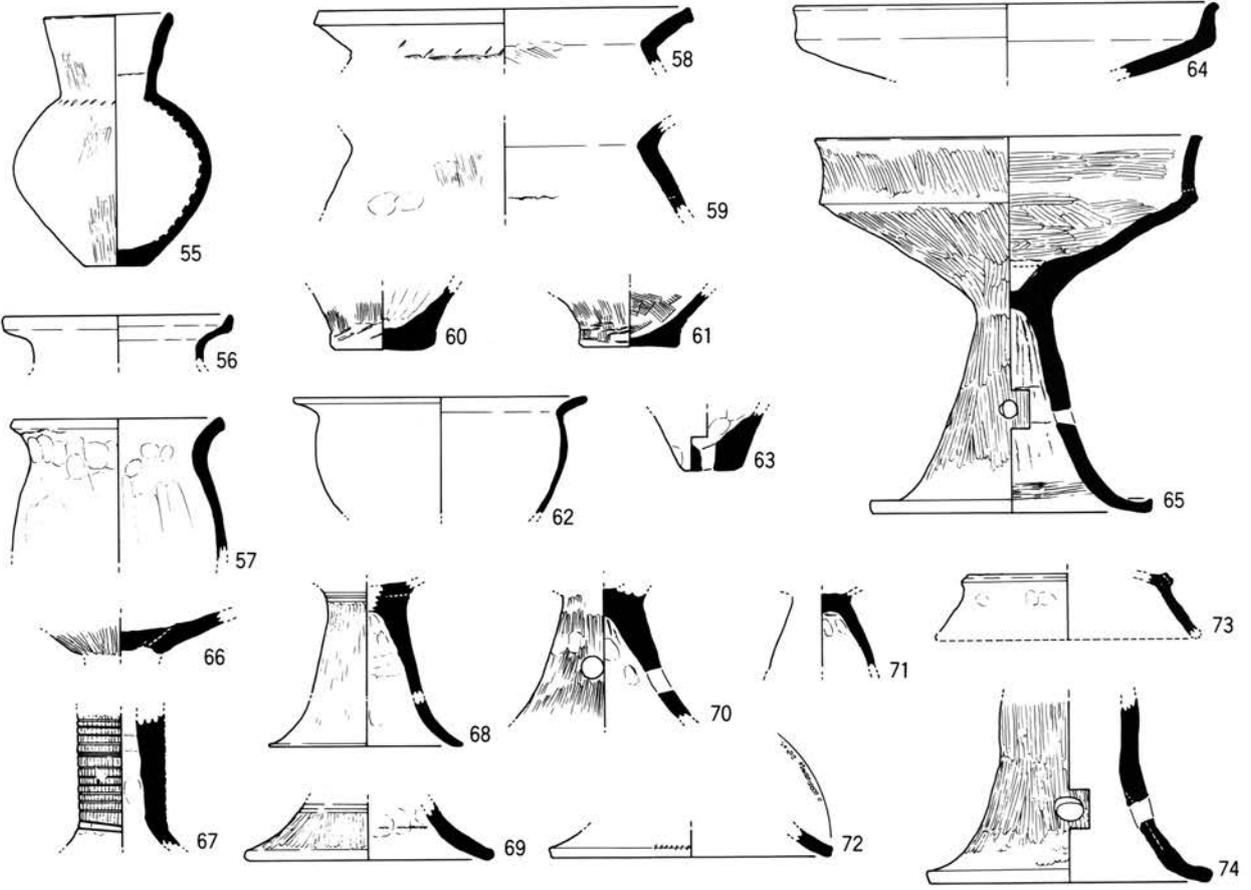
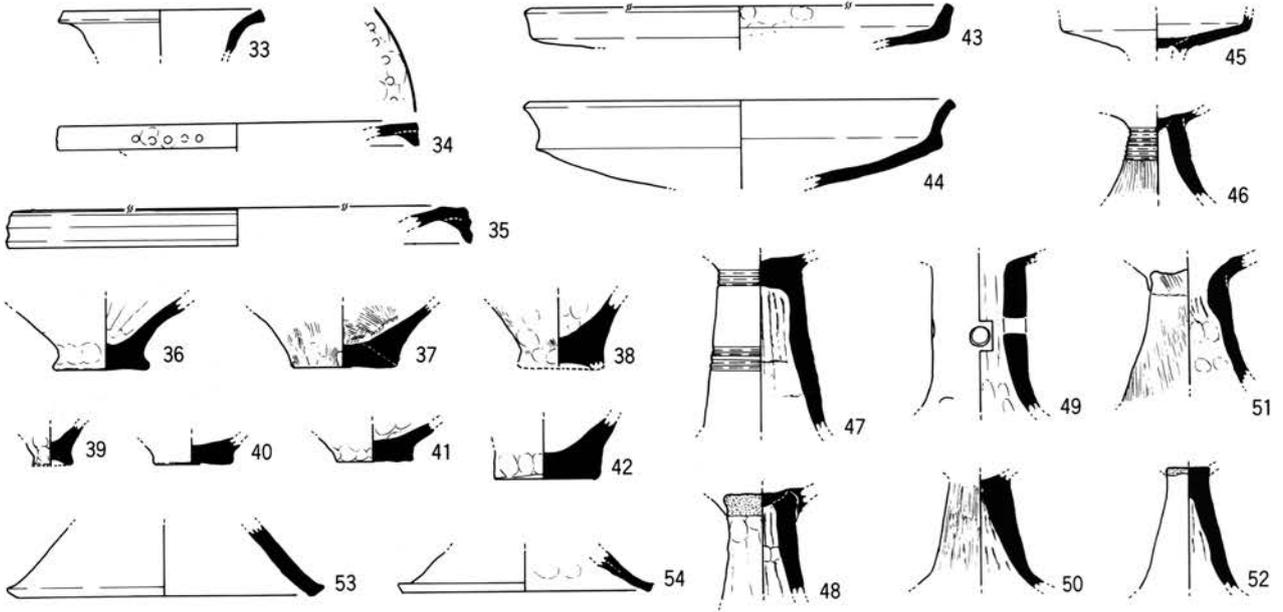
第2次調査 片山5号墳実測図



第2次調査 片山5号墳主体部実測図

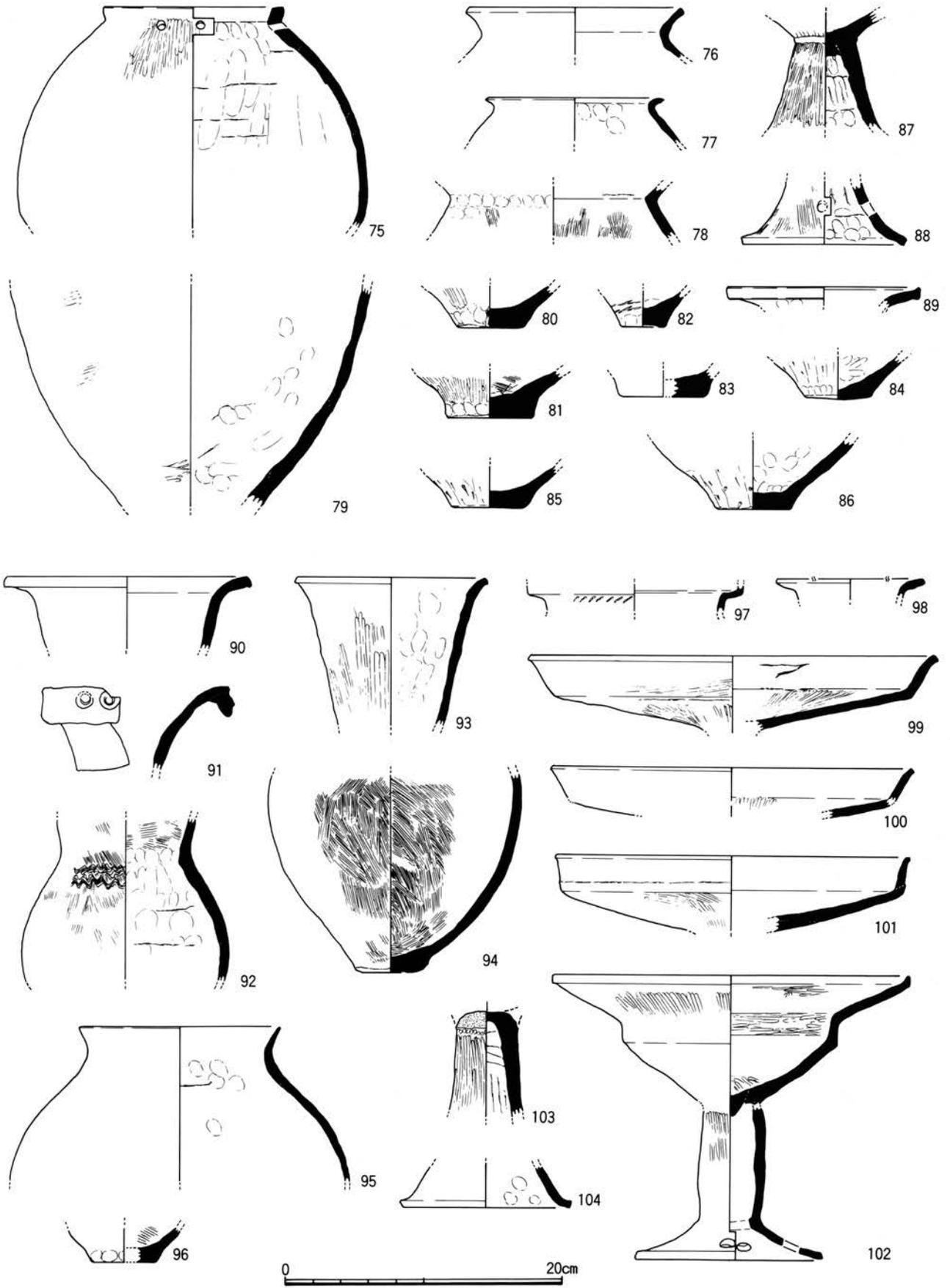


出土遺物実測図(1) 弥生土器

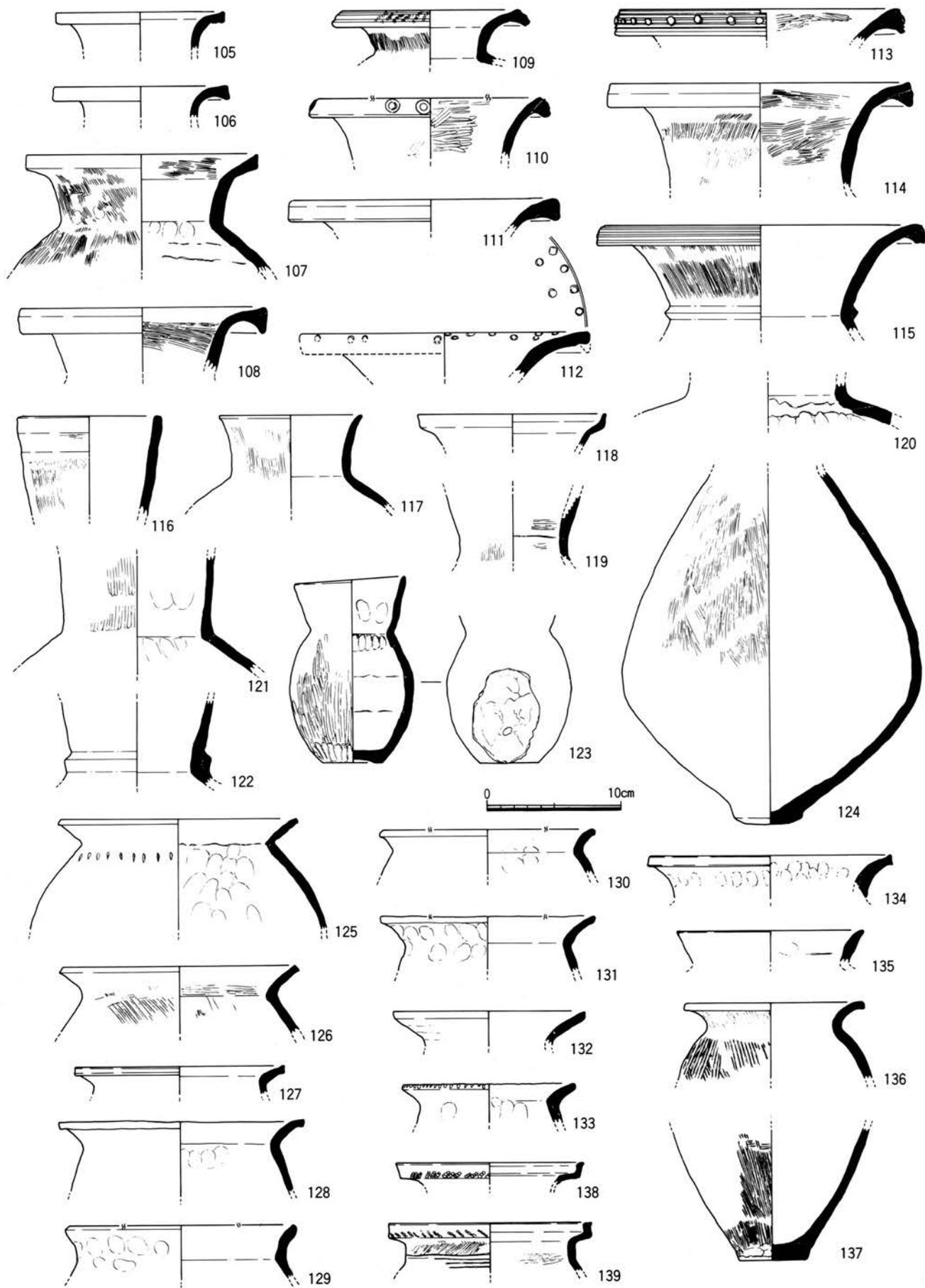


0 20cm

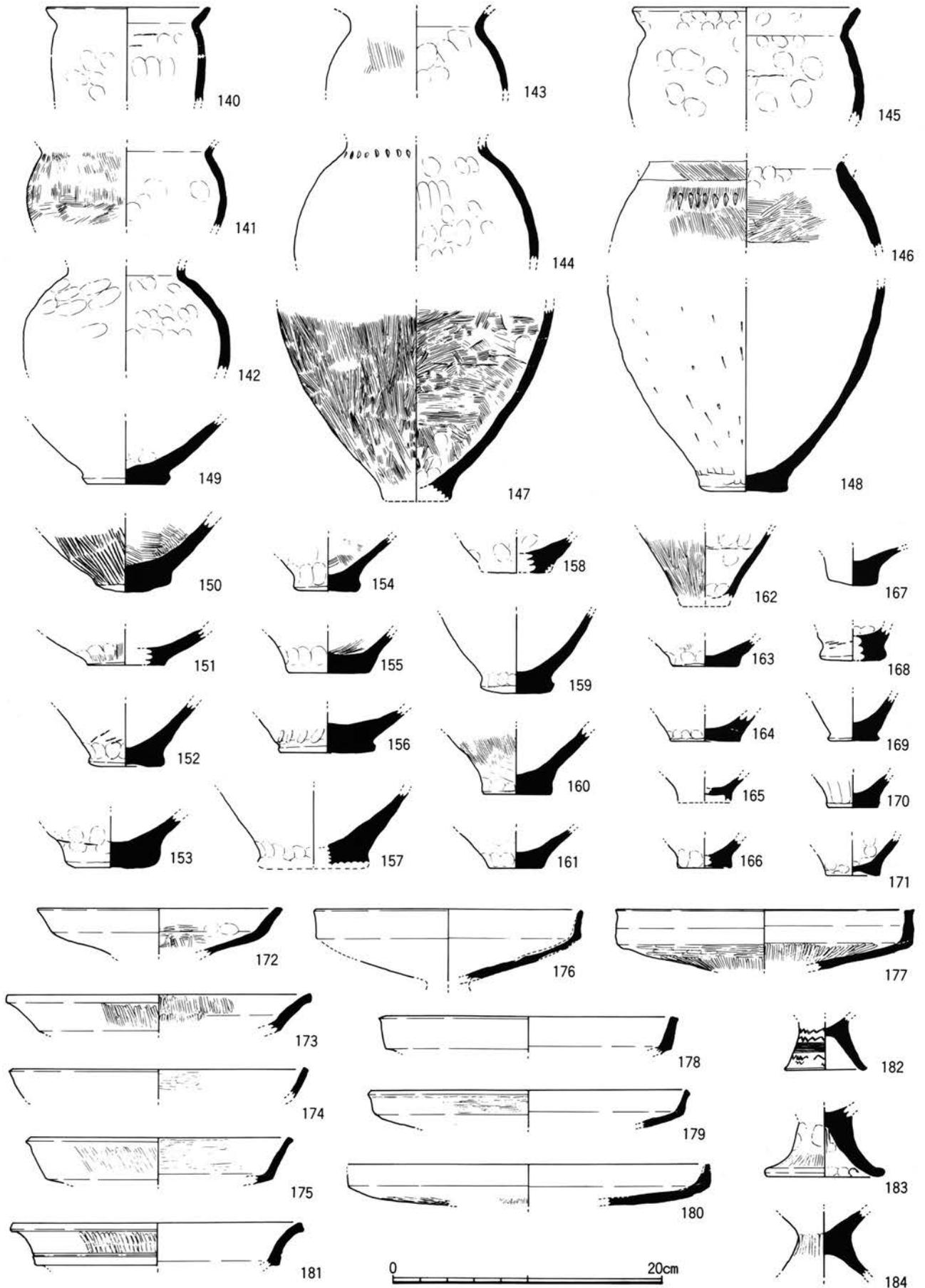
出土遺物実測図(2) 弥生土器



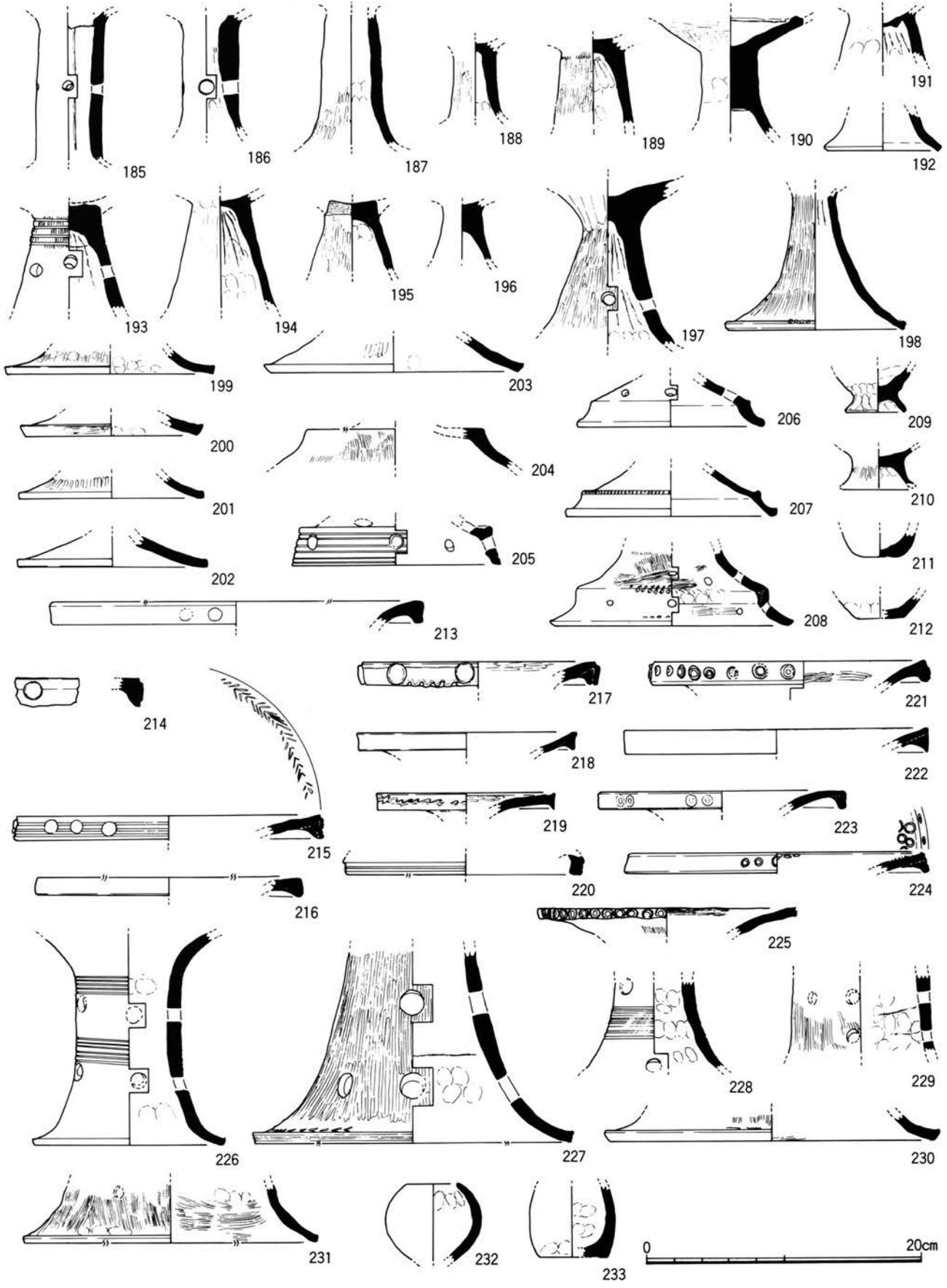
出土遺物実測図(3) 弥生土器



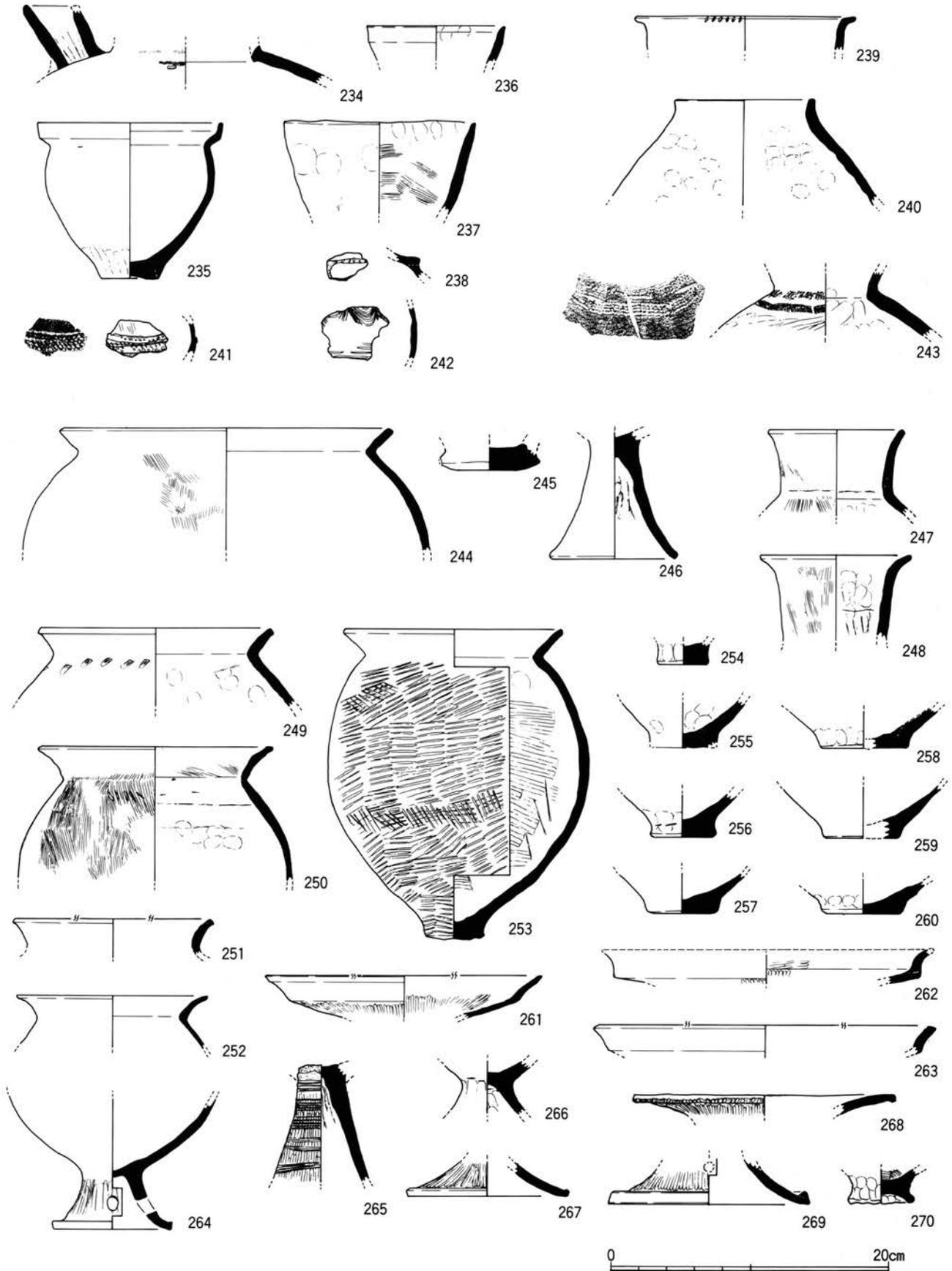
出土遺物実測図(4) 弥生土器



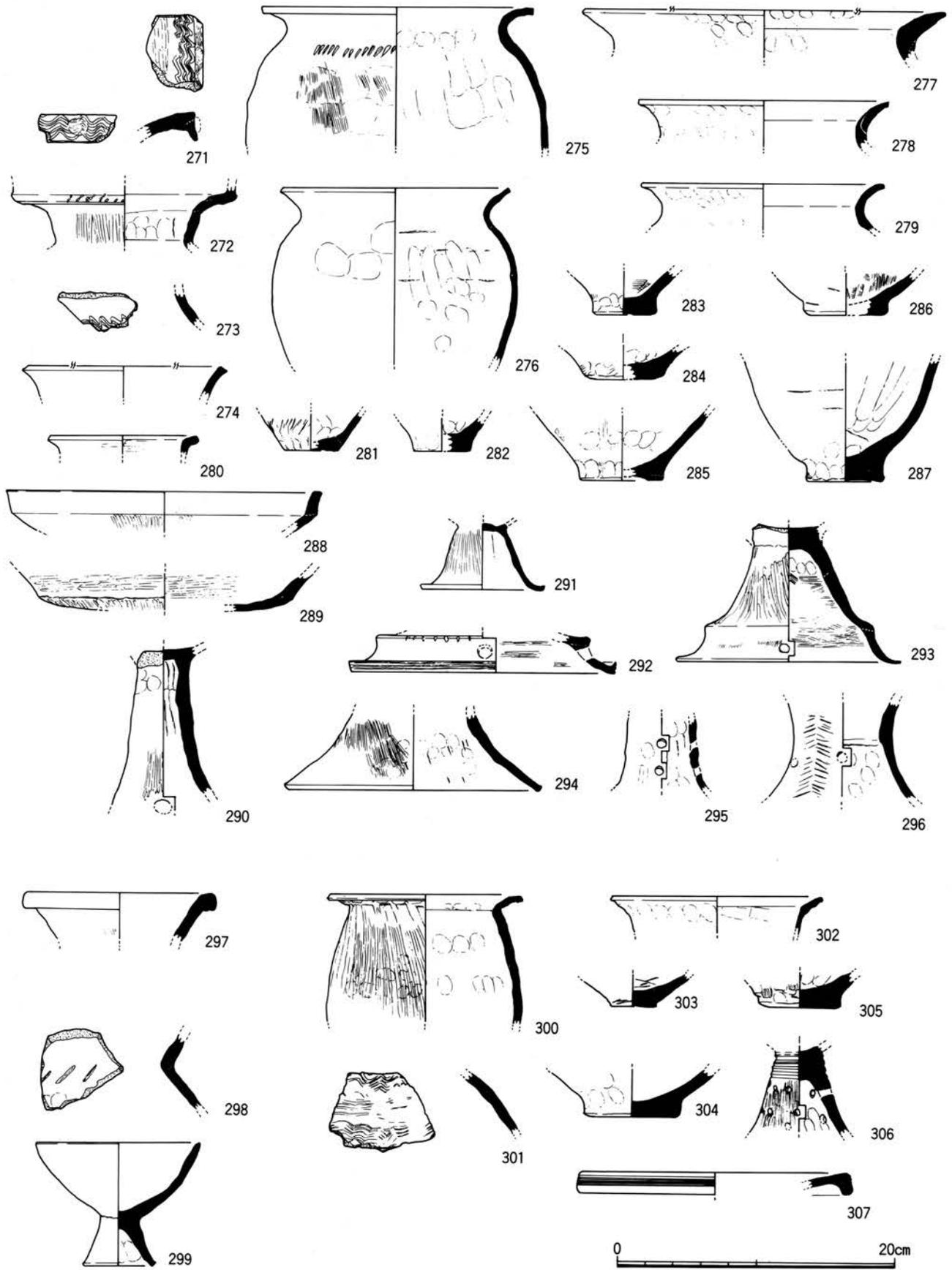
出土遺物実測図(5) 弥生土器



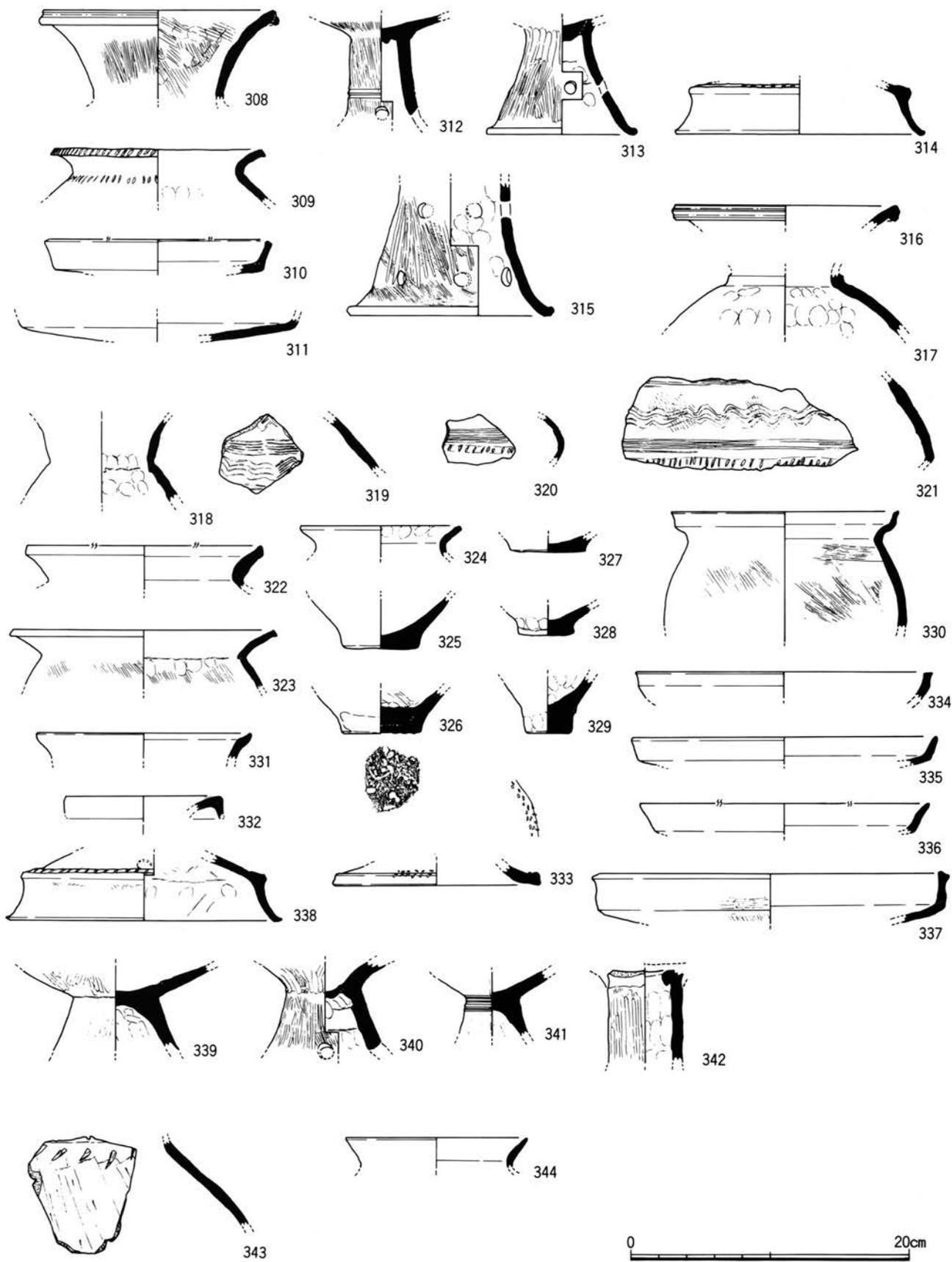
出土遺物実測図(6) 弥生土器



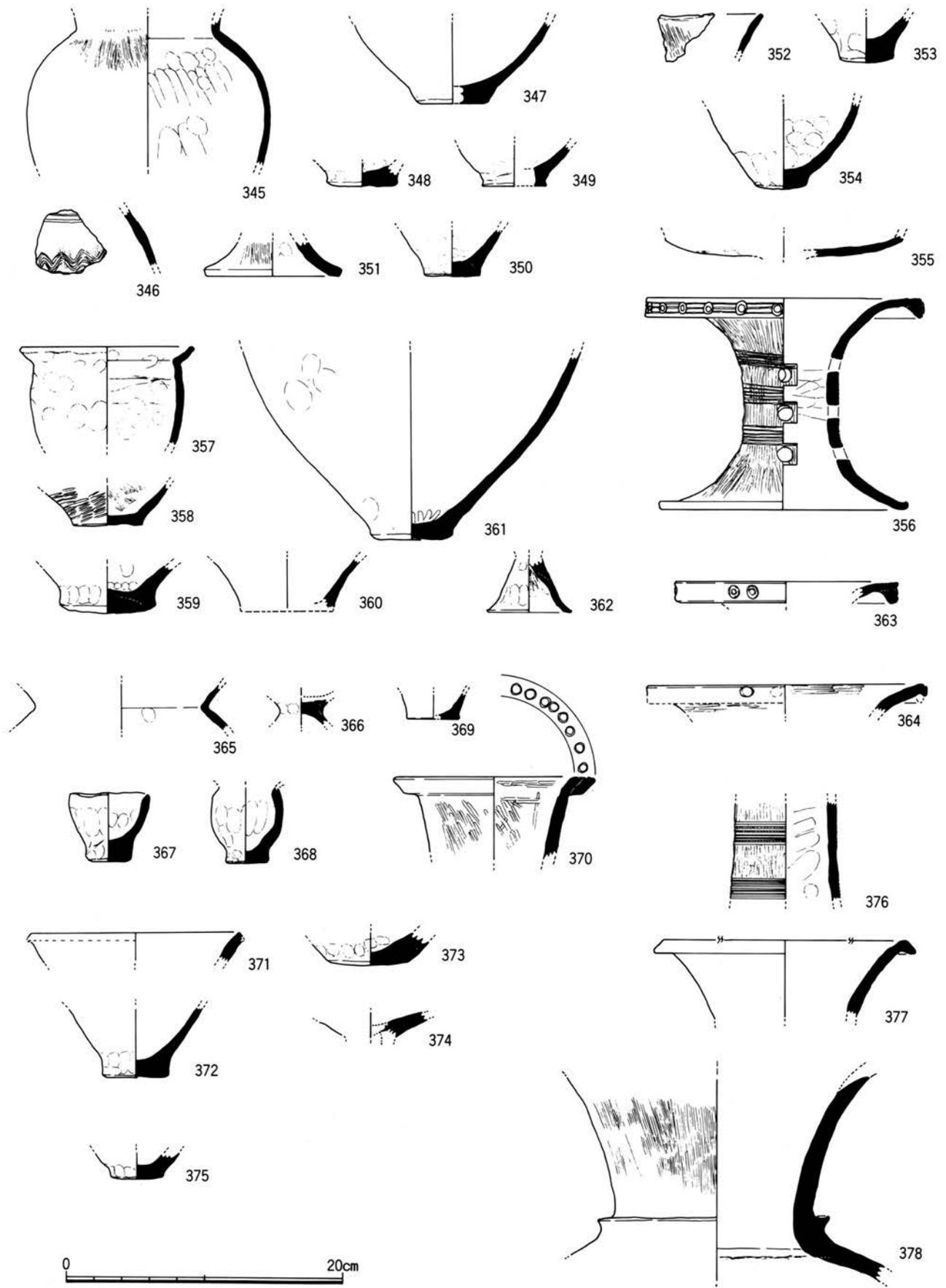
出土遺物実測図(7) 弥生土器



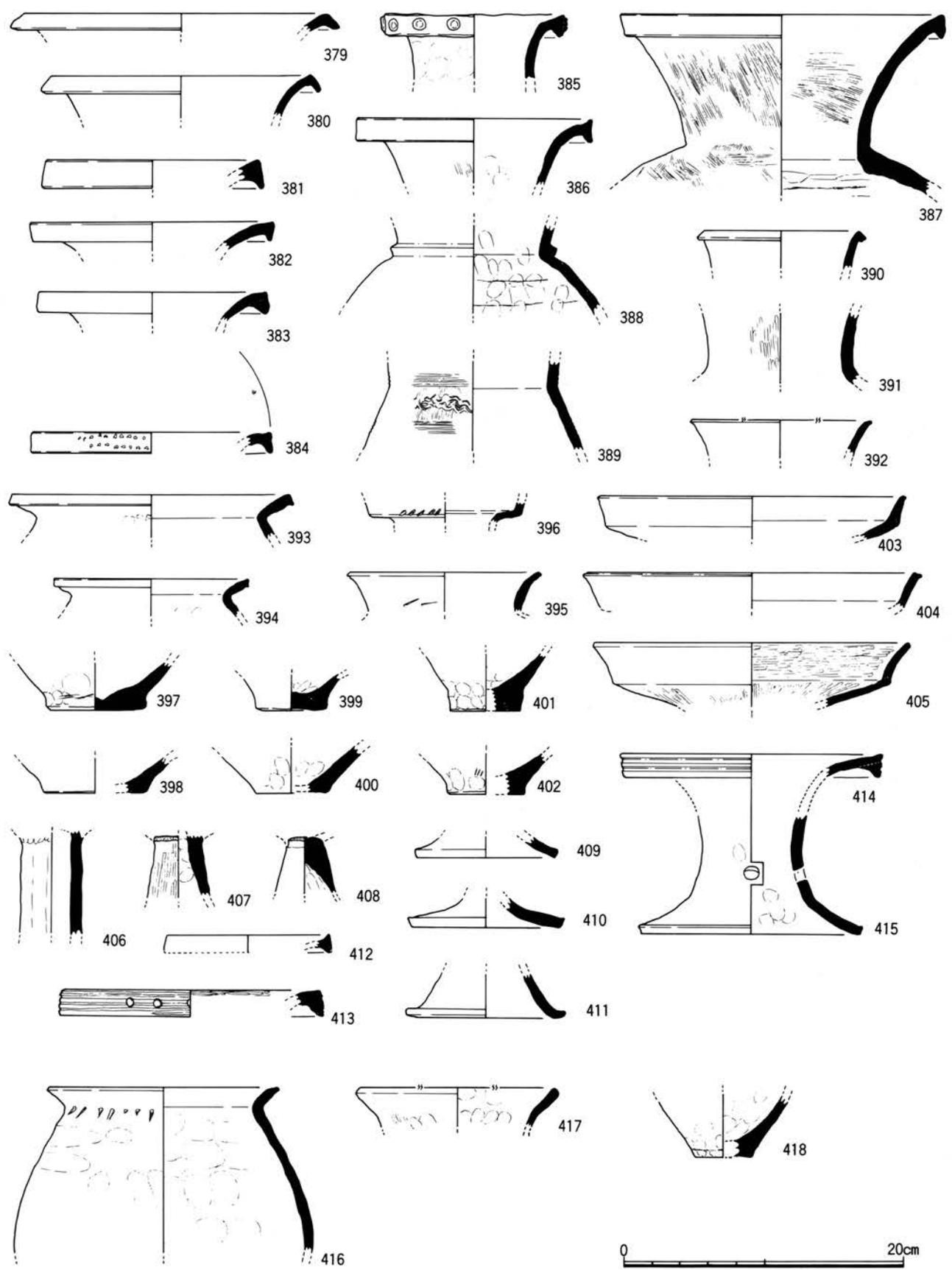
出土遺物実測図(8) 弥生土器



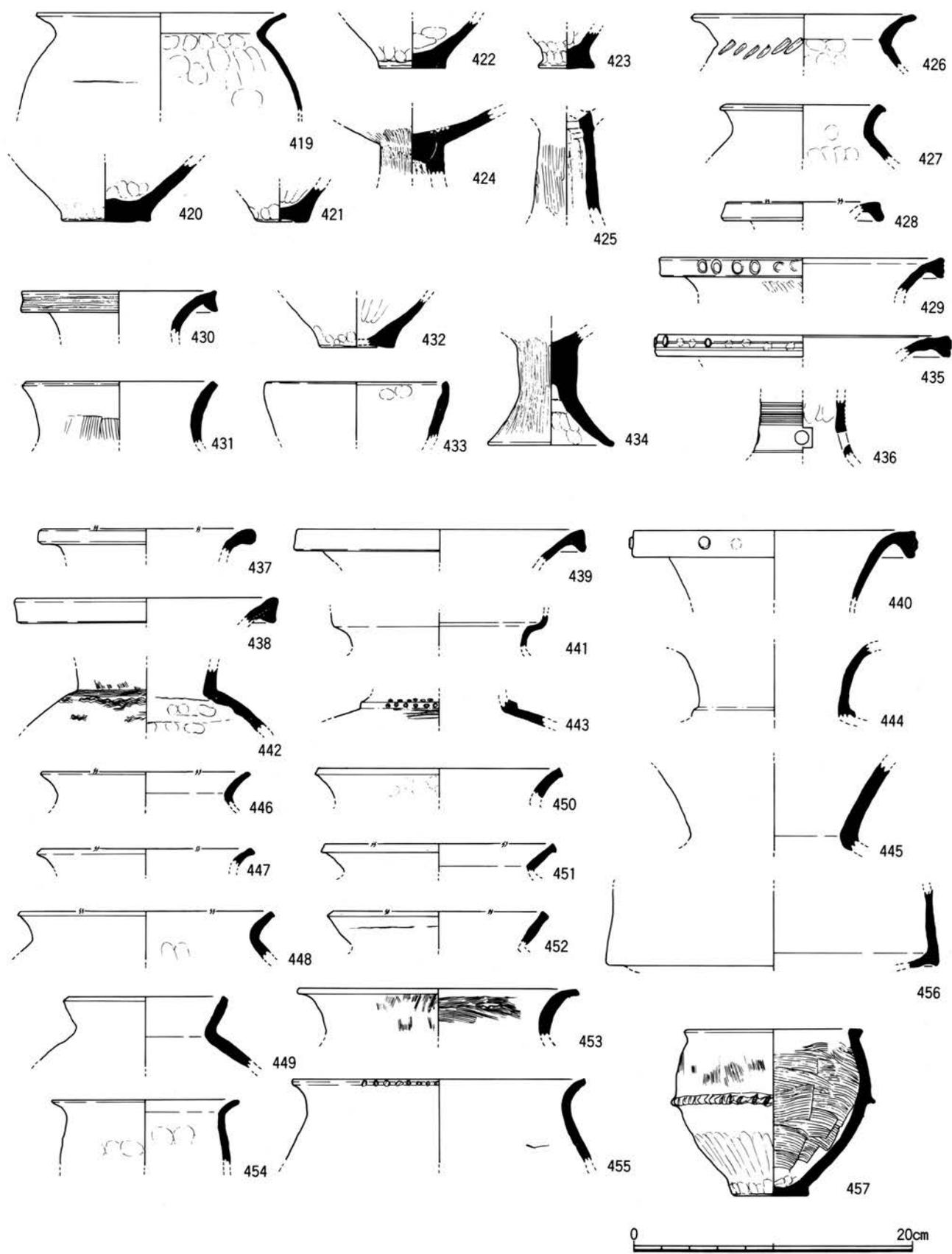
出土遺物実測図(9) 弥生土器



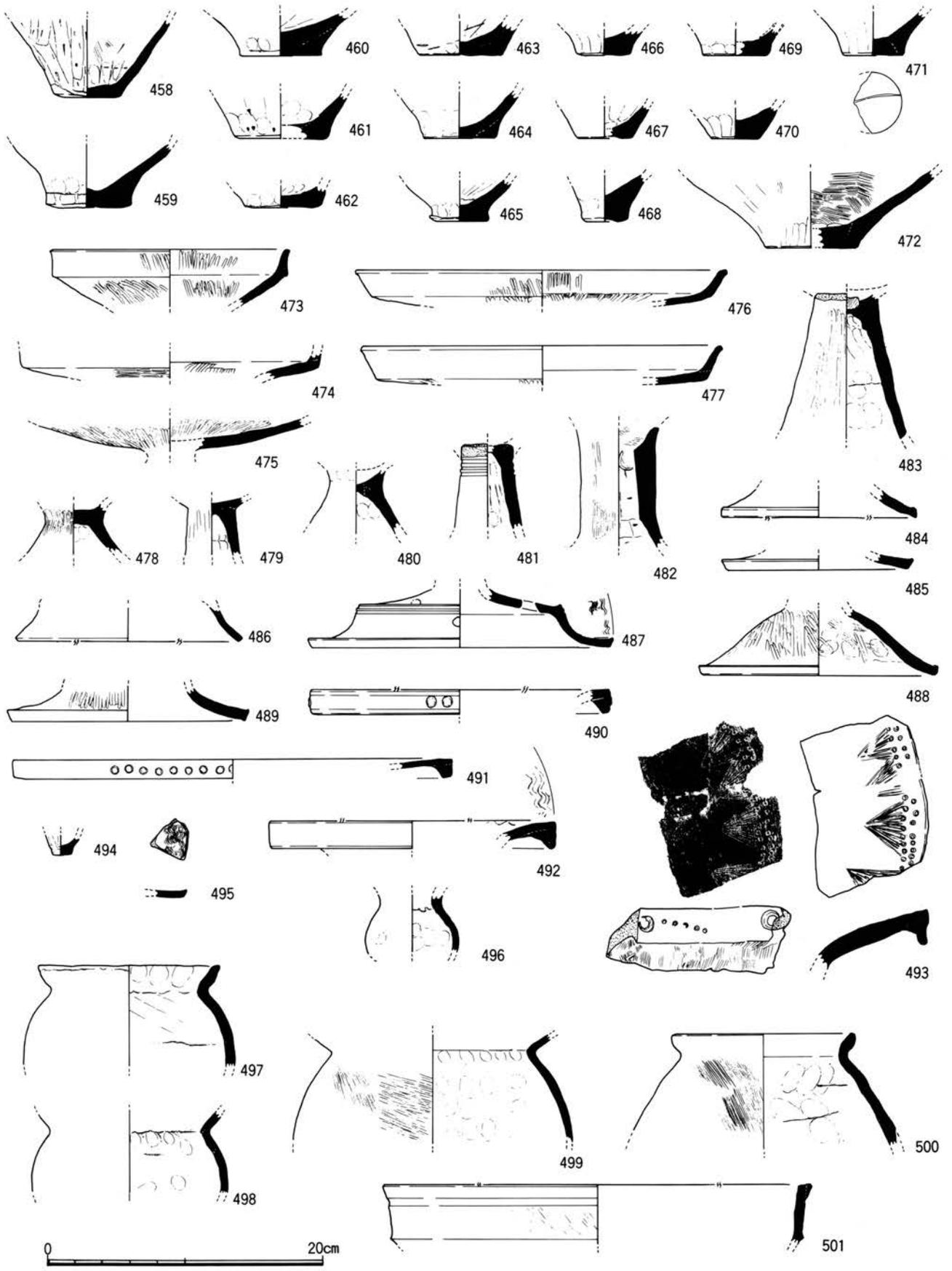
出土遺物実測図(10) 弥生土器



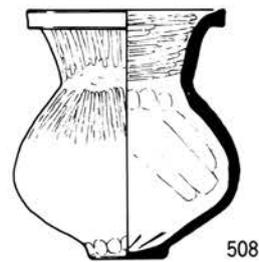
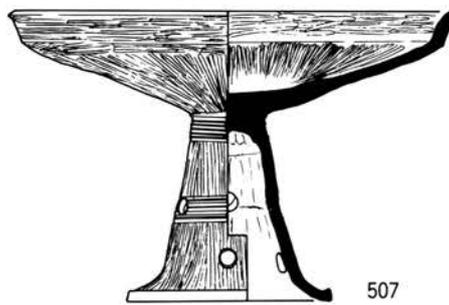
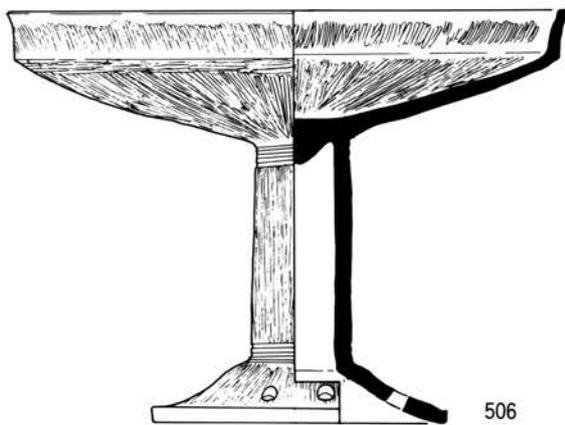
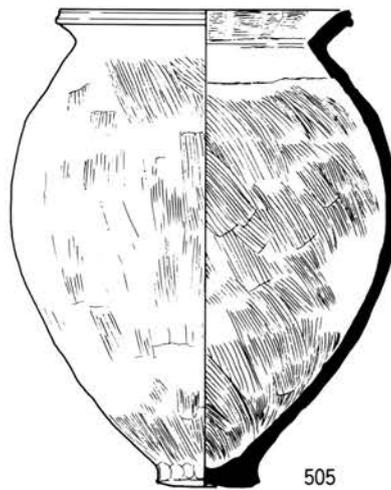
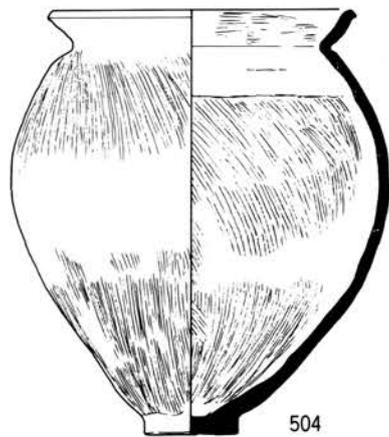
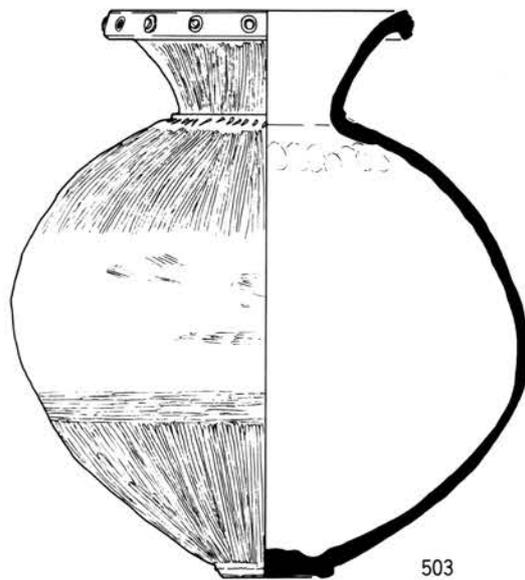
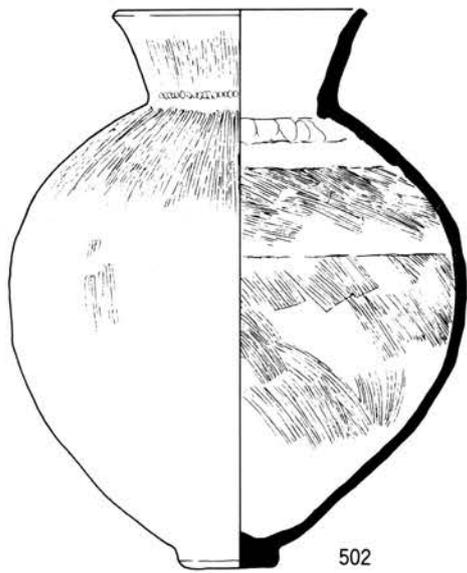
出土遺物実測図(1) 弥生土器



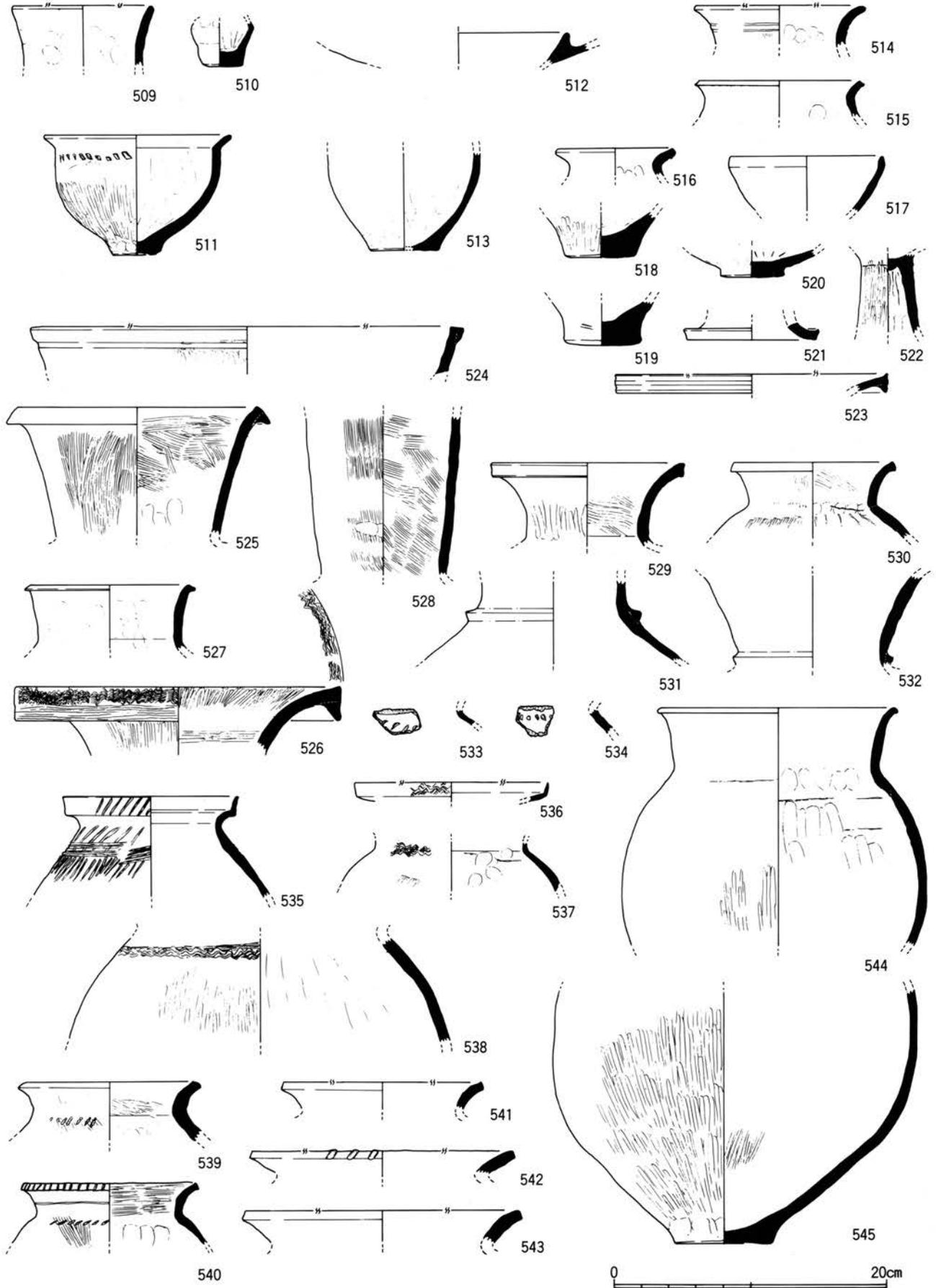
出土遺物実測図(12) 弥生土器



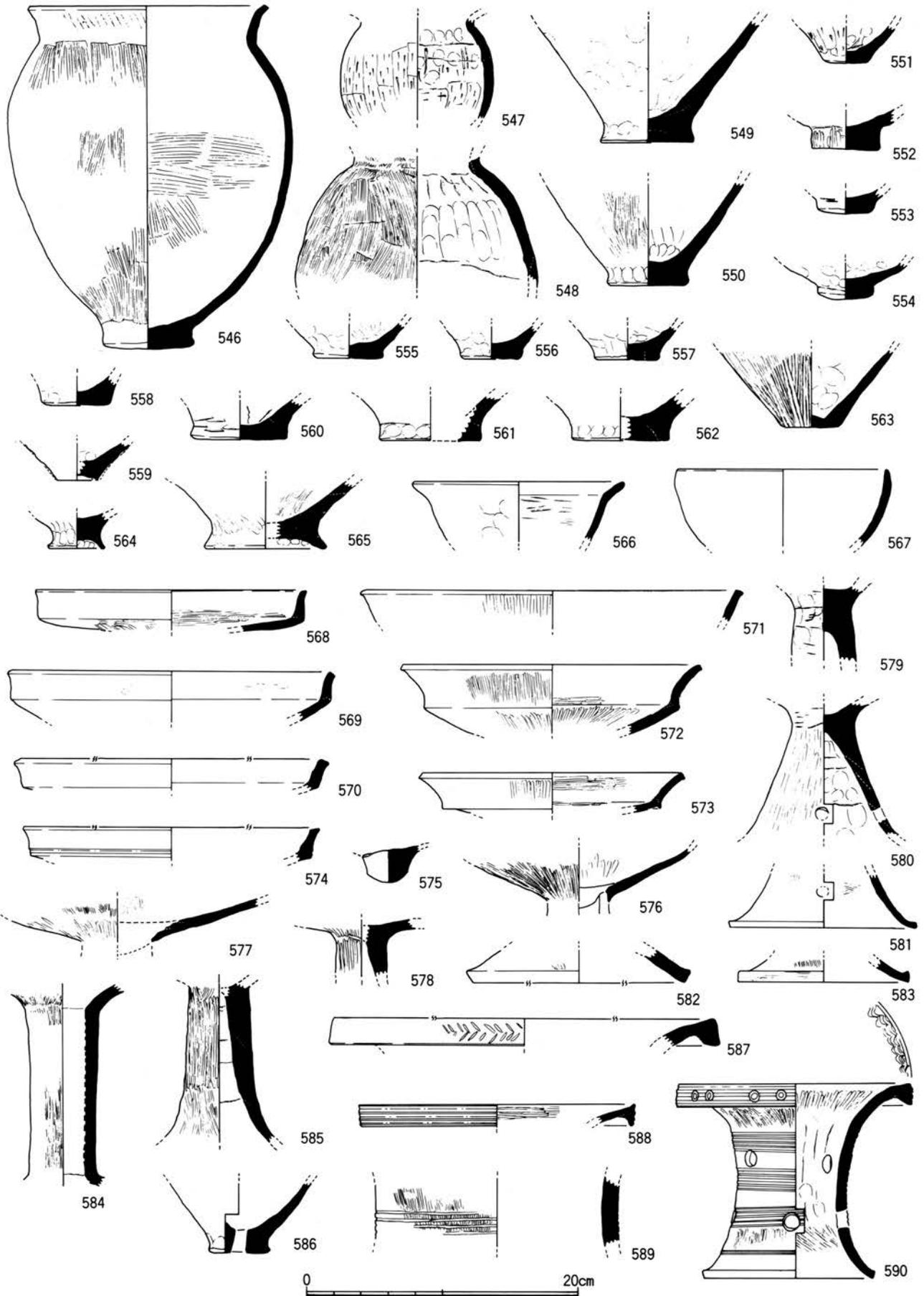
出土遺物実測図(13) 弥生土器



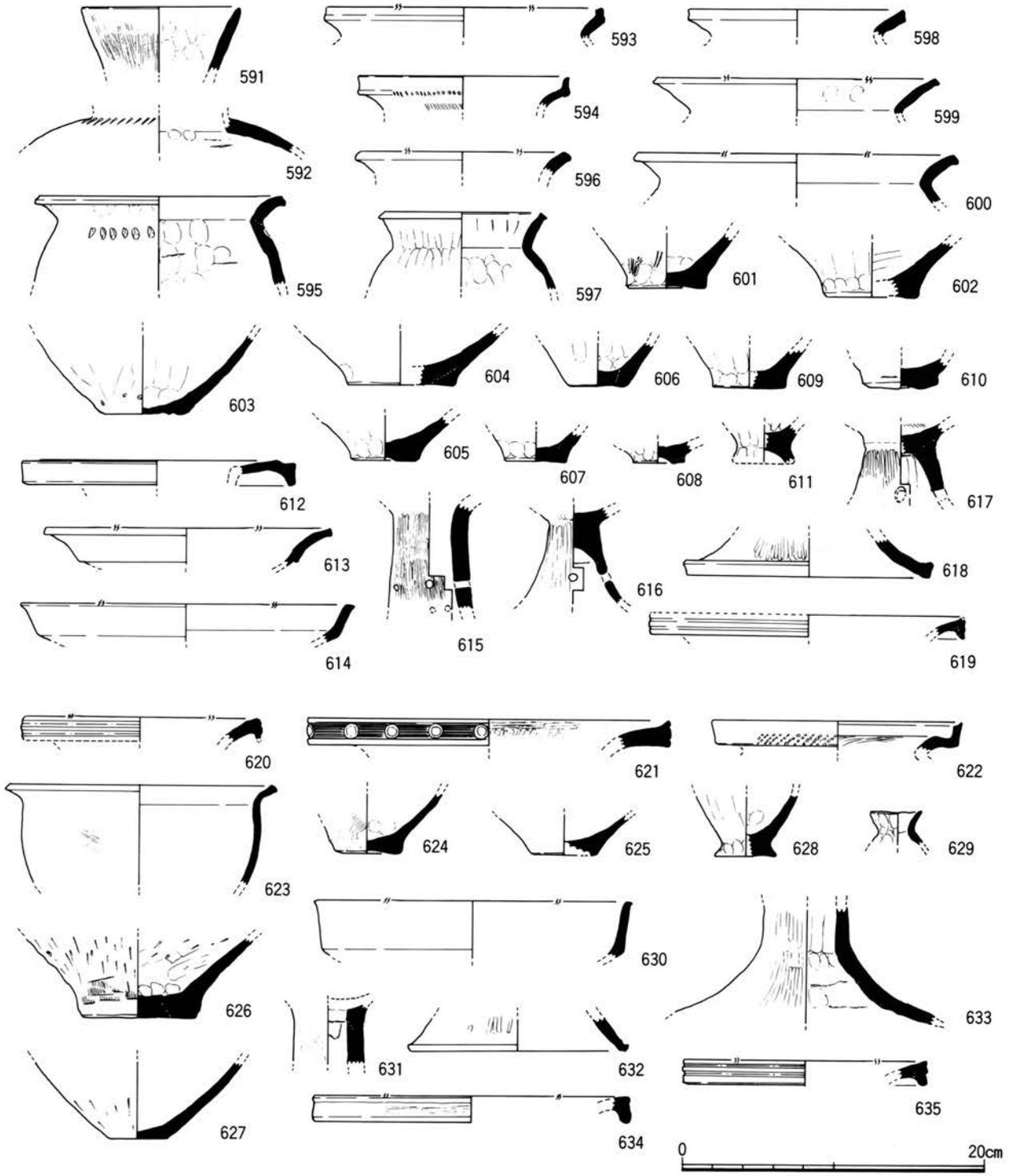
0 20cm

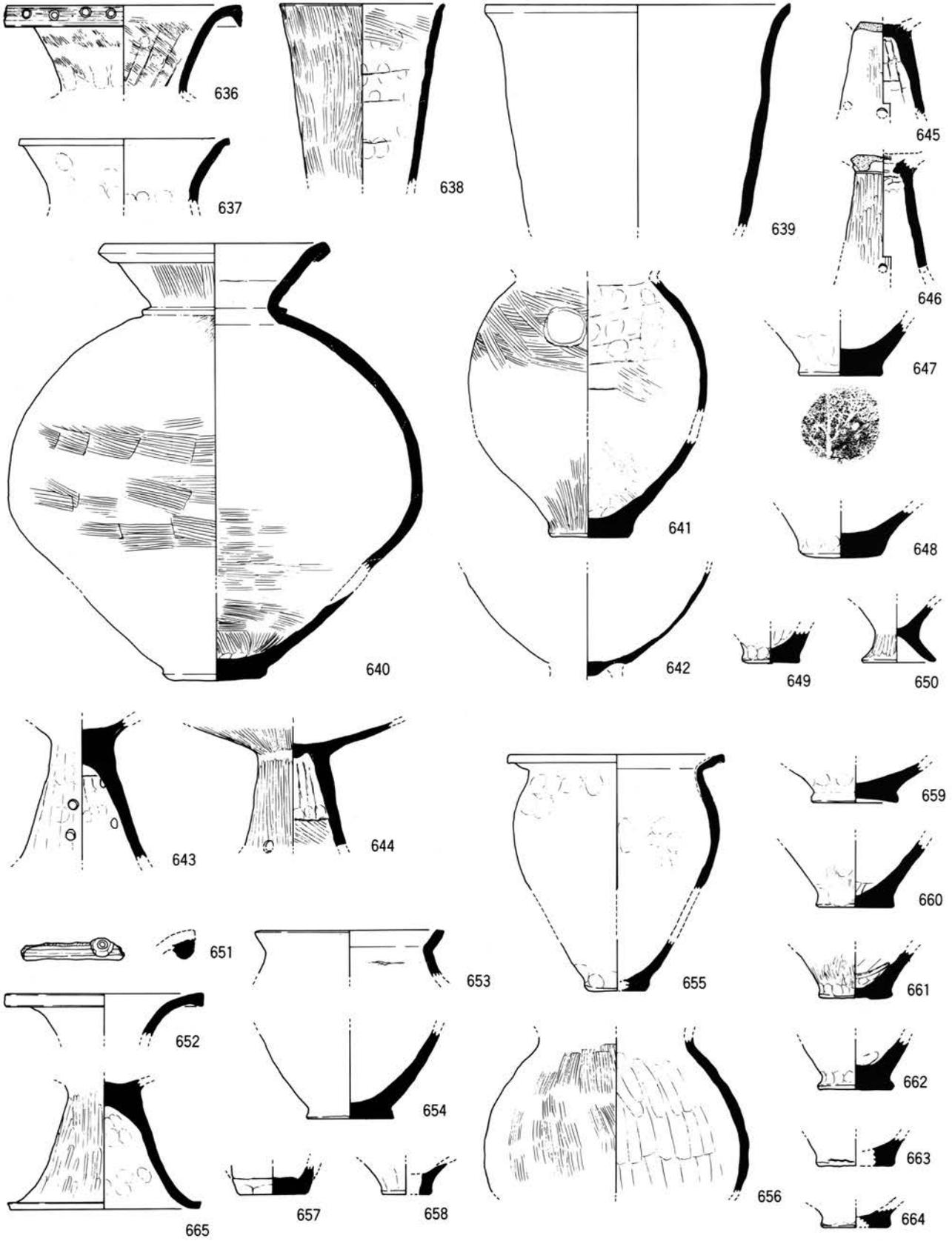


出土遺物実測図(15) 弥生土器

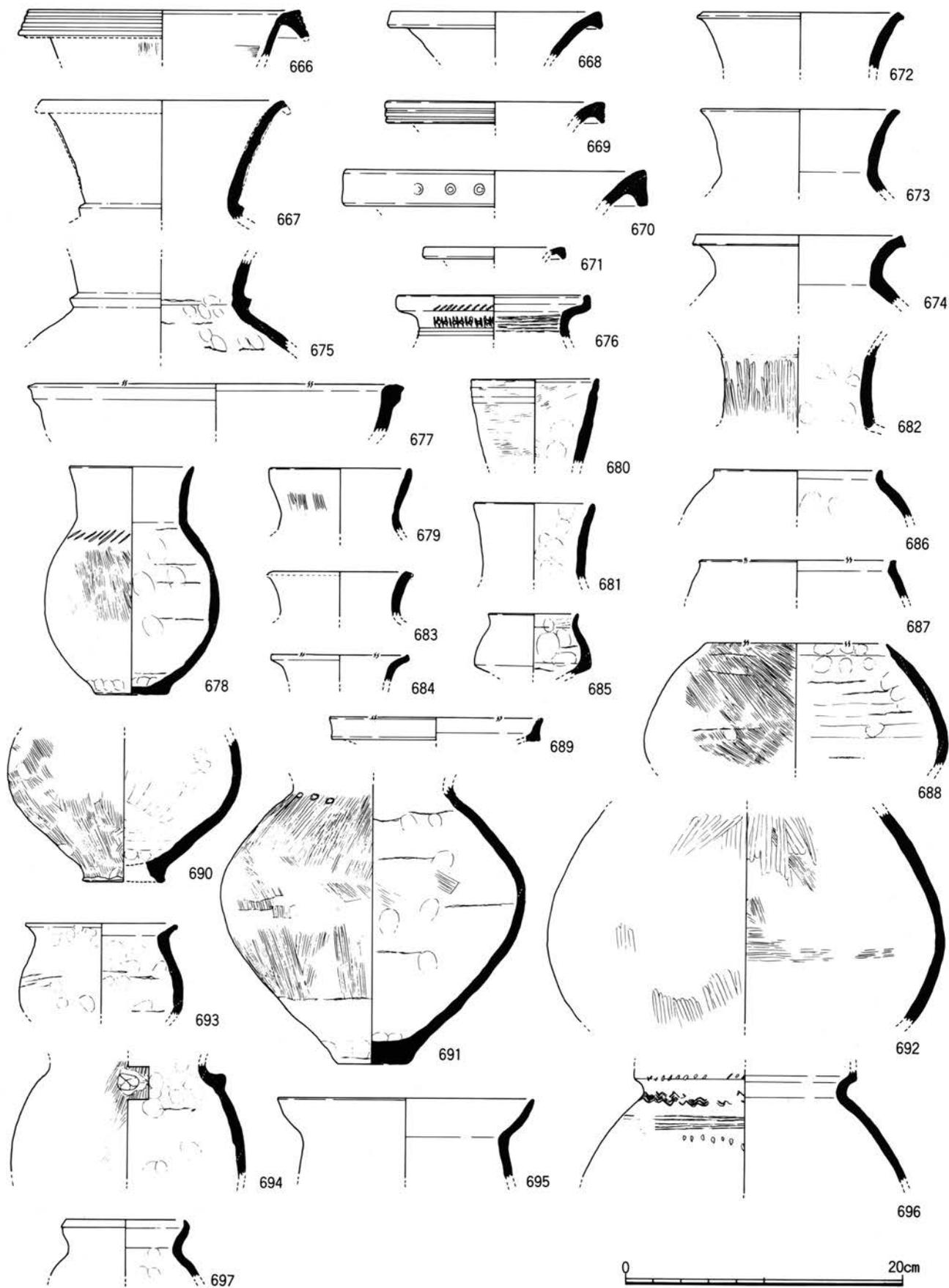


出土遺物実測図(16) 弥生土器

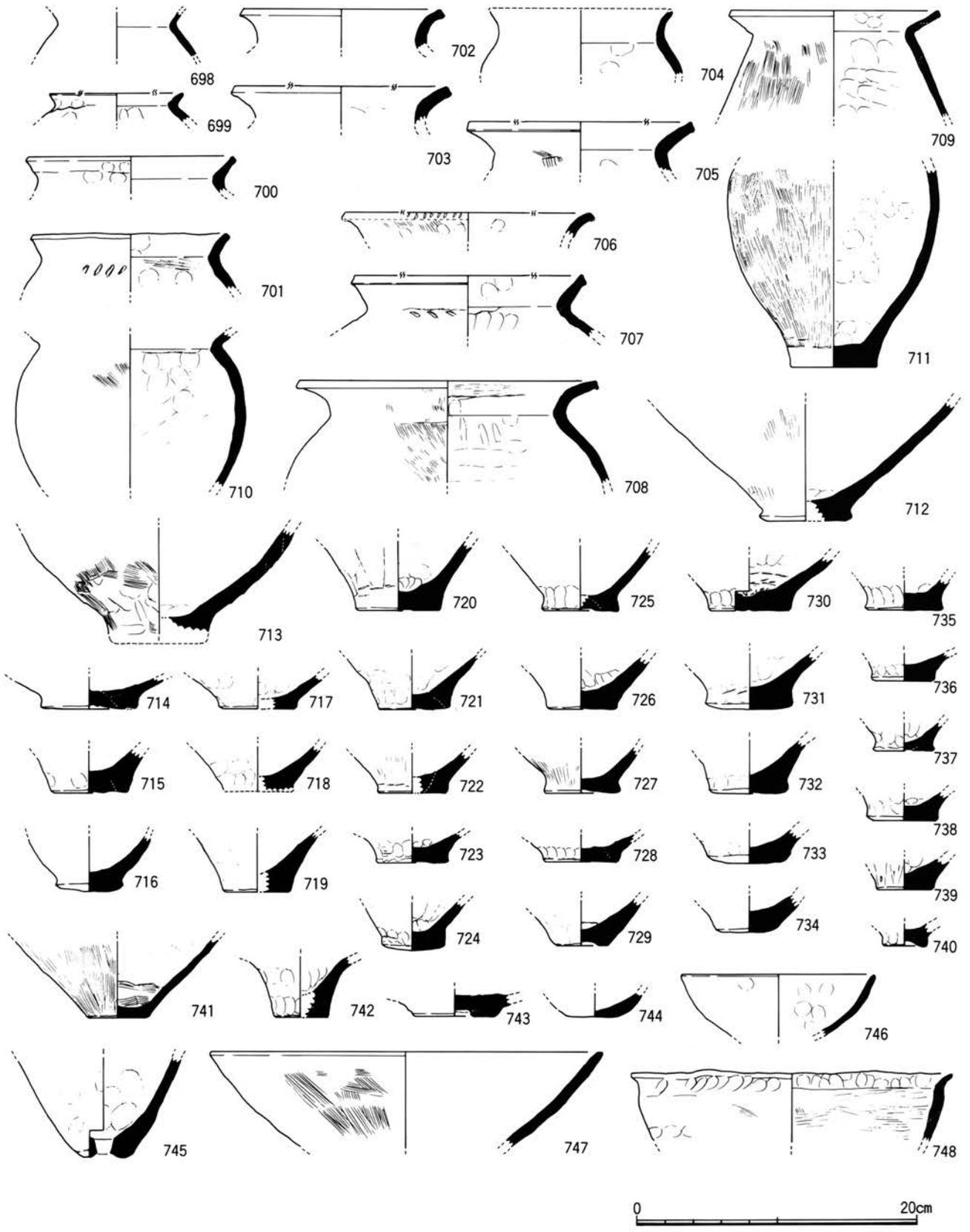




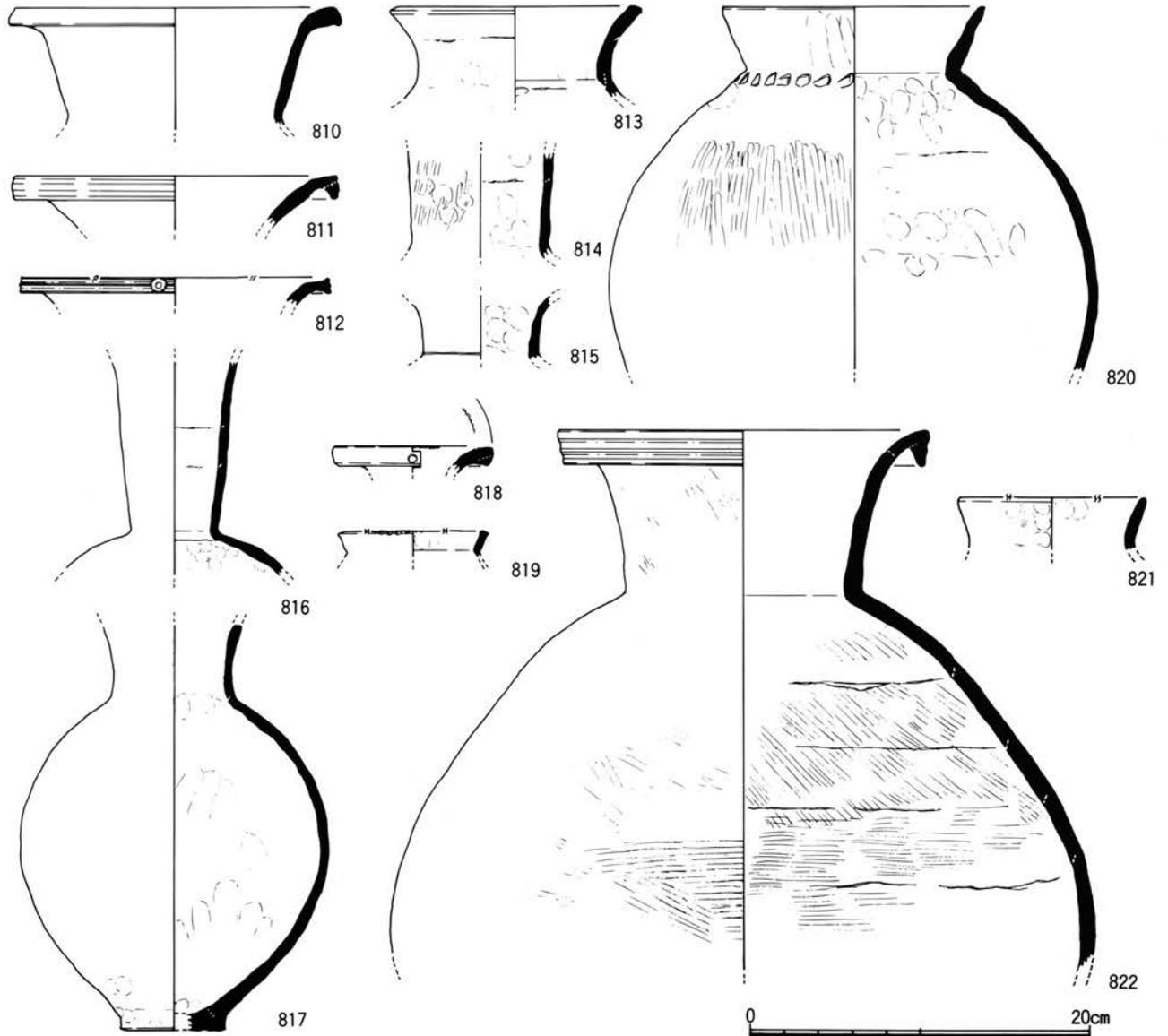
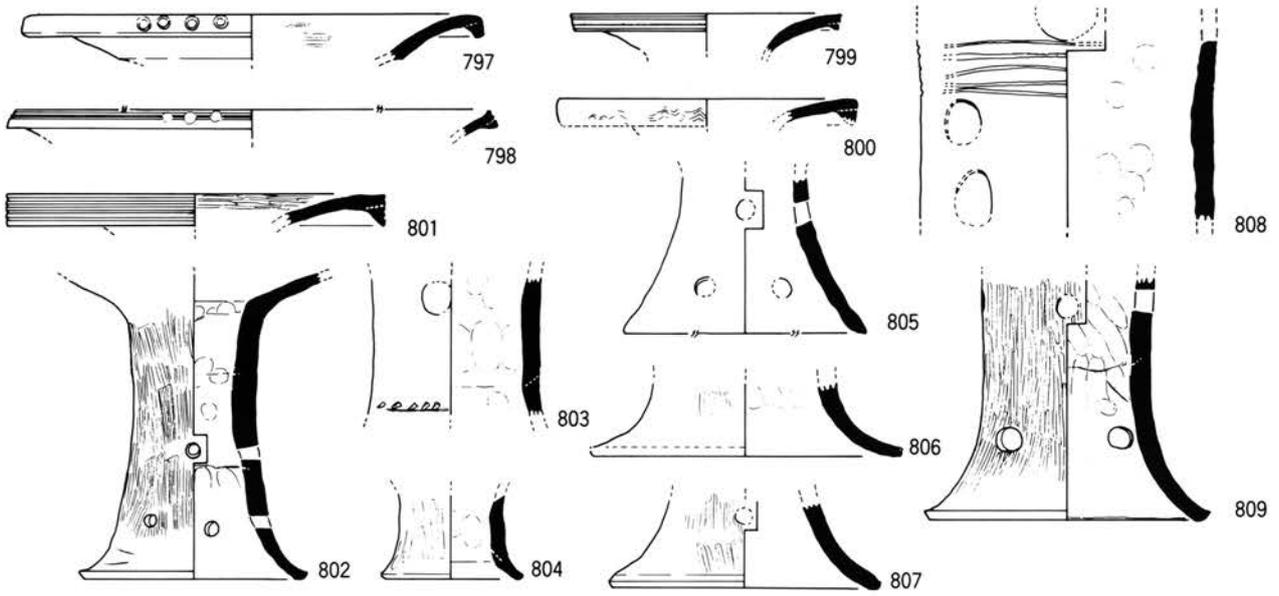
0 20cm



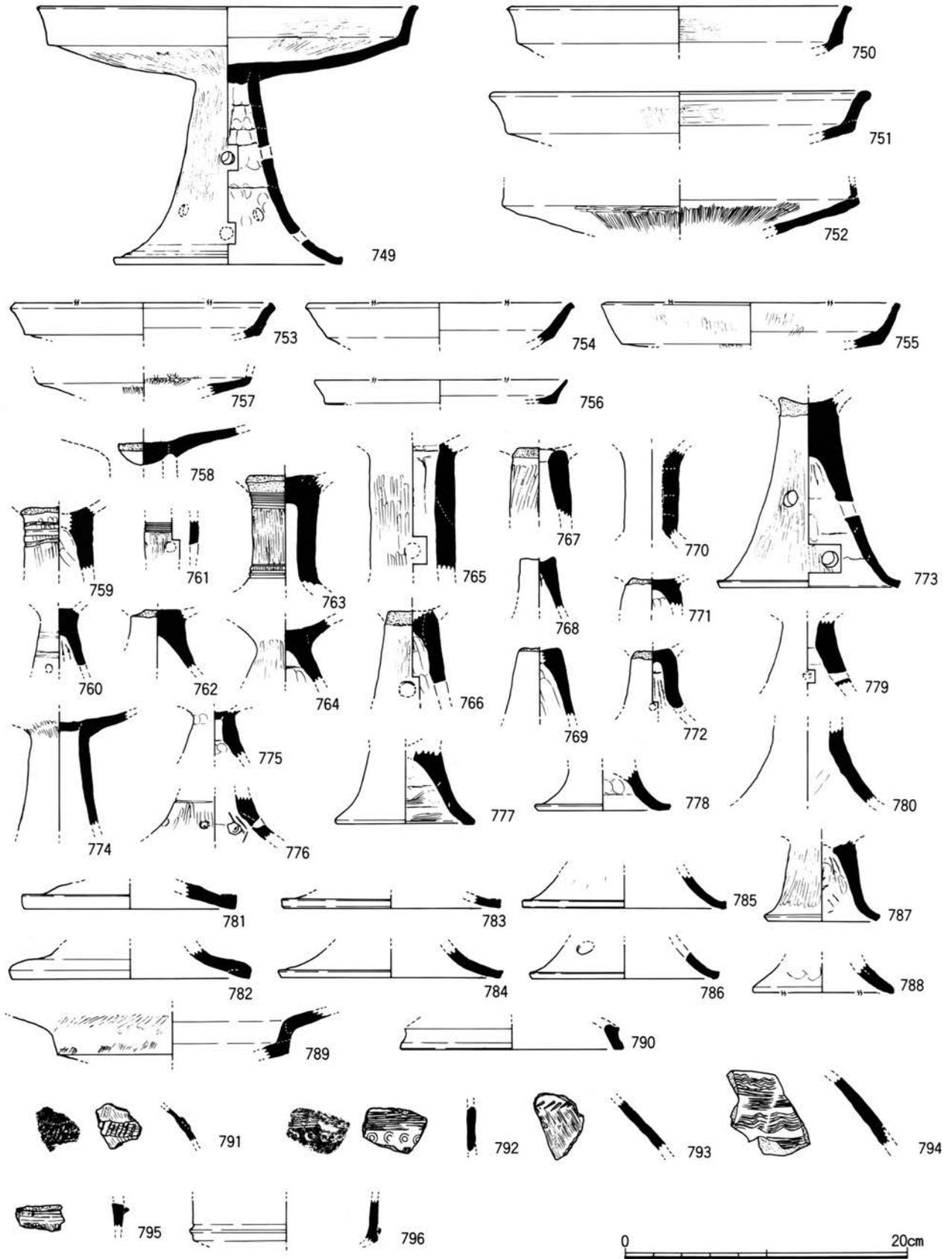
出土遺物実測図(19) 弥生土器



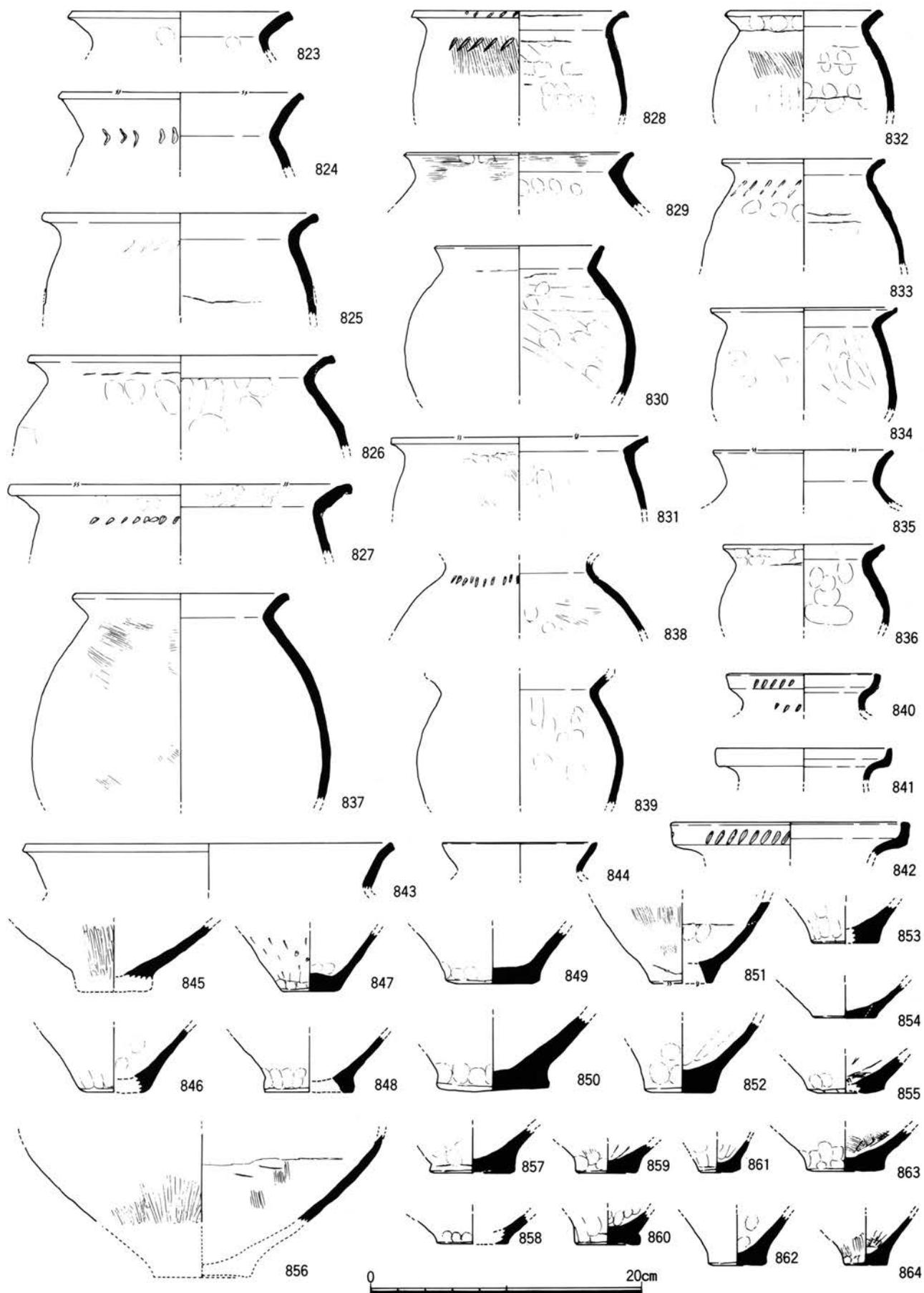
出土遺物実測図(20) 弥生土器



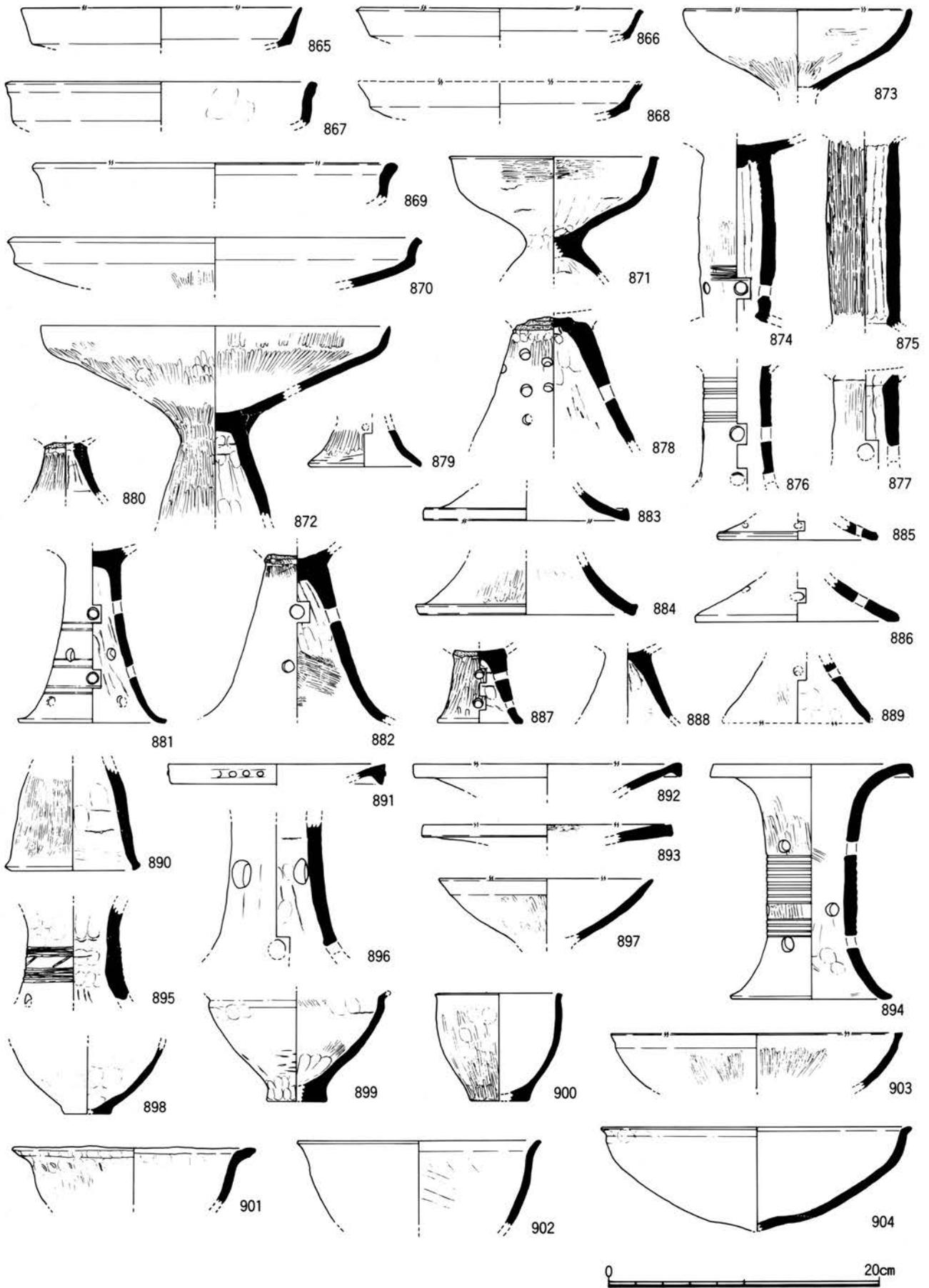
出土遺物実測図(2) 弥生土器



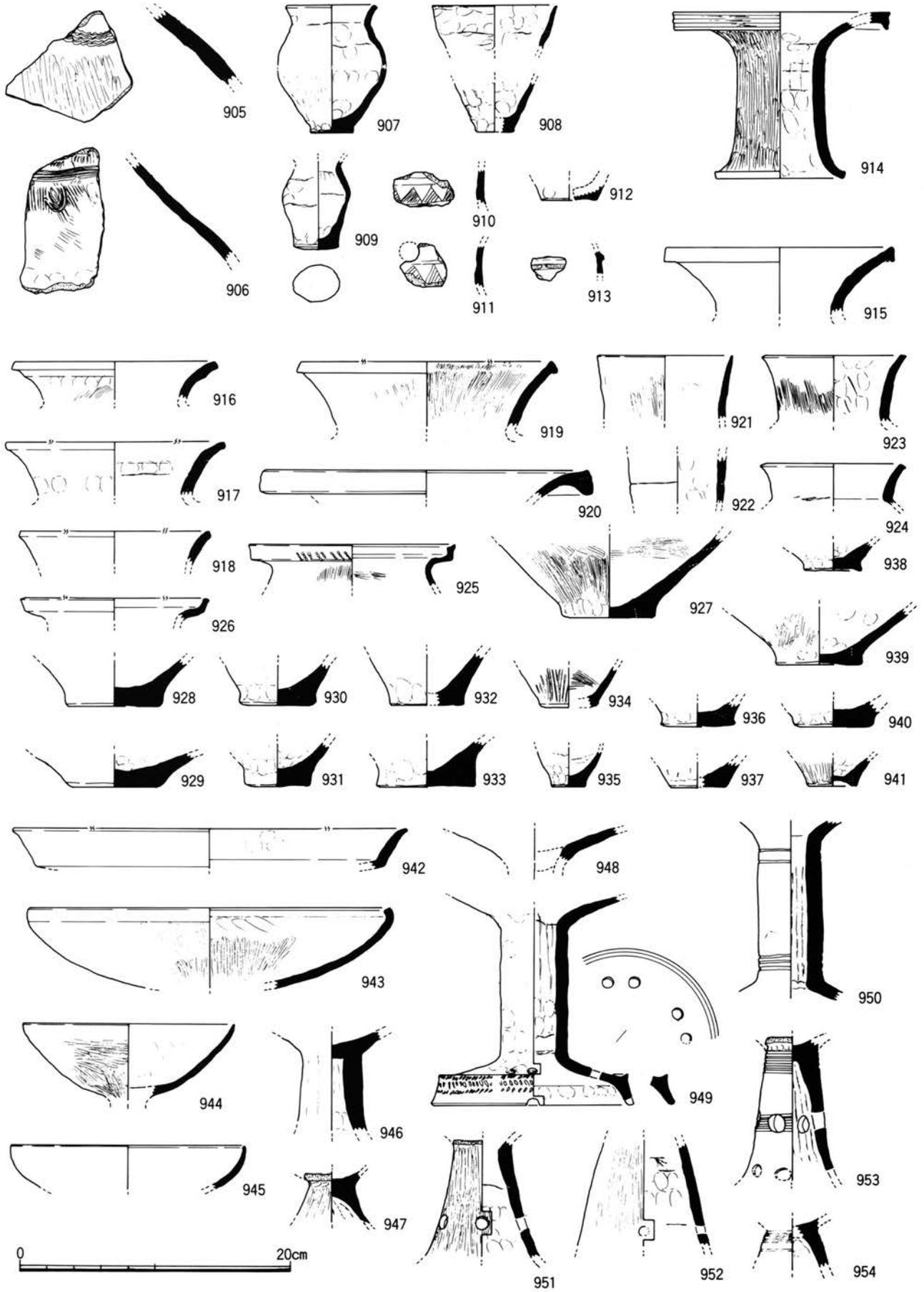
出土遺物実測図(2) 弥生土器



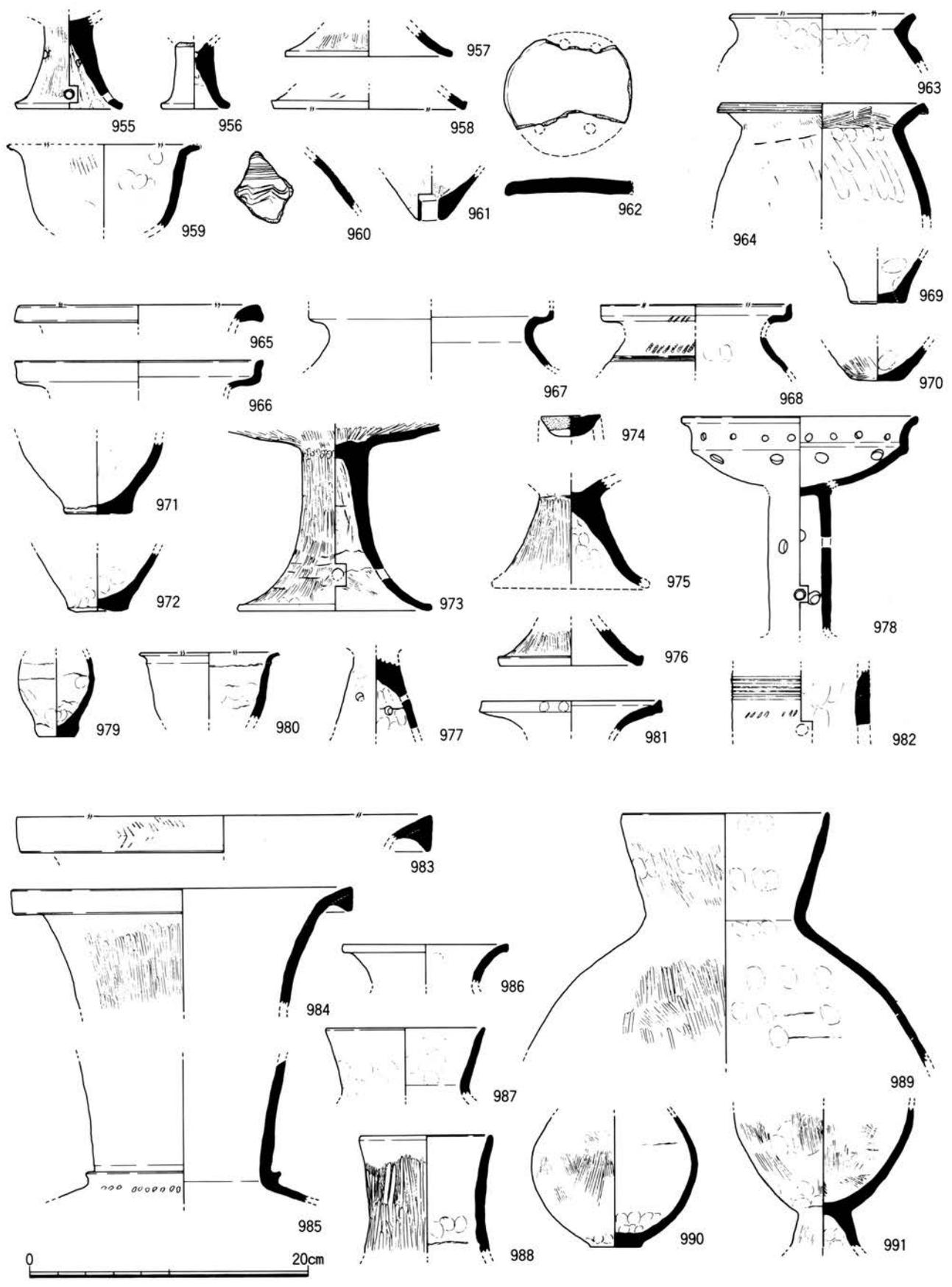
出土遺物実測図(3) 弥生土器



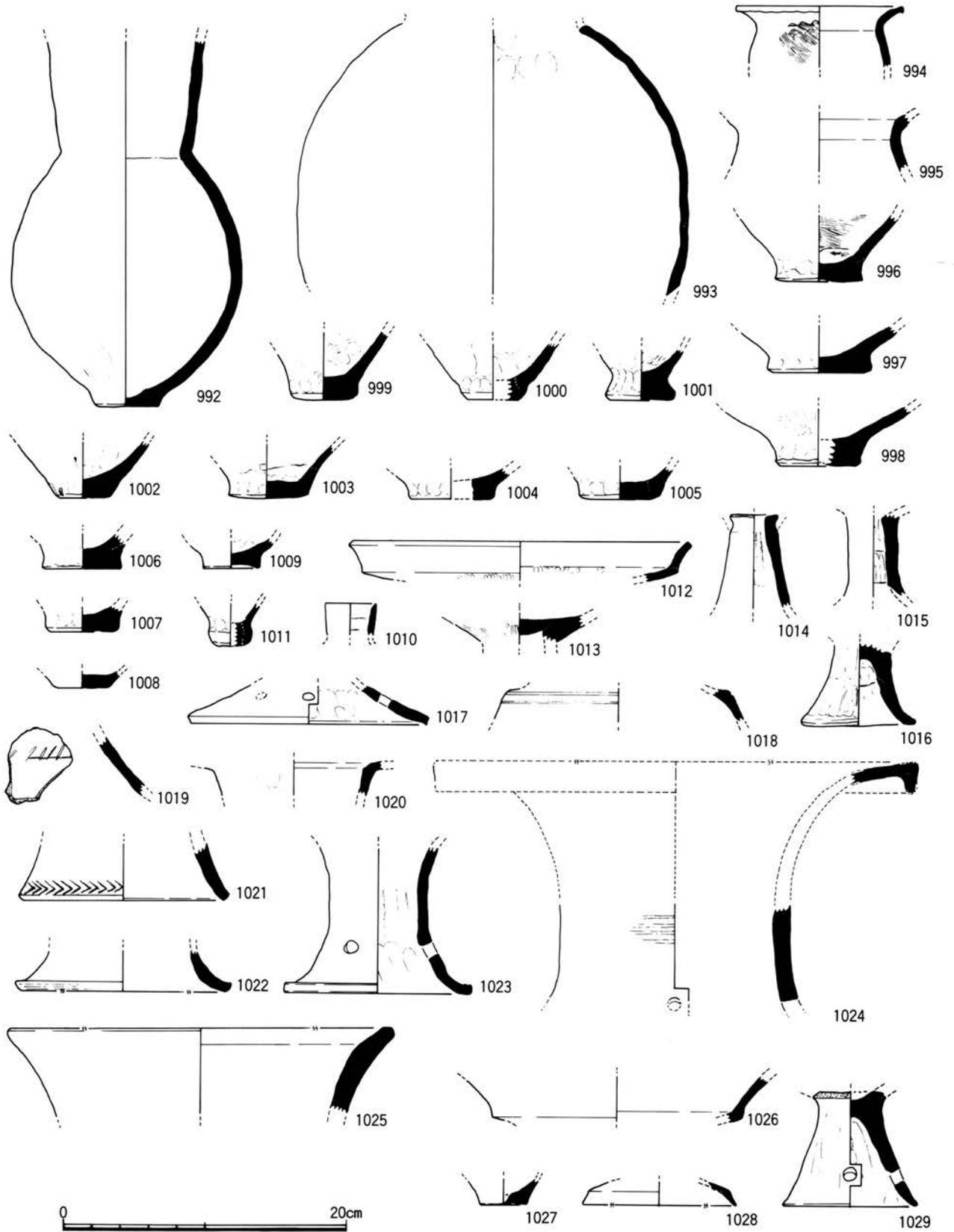
出土遺物実測図(24) 弥生土器

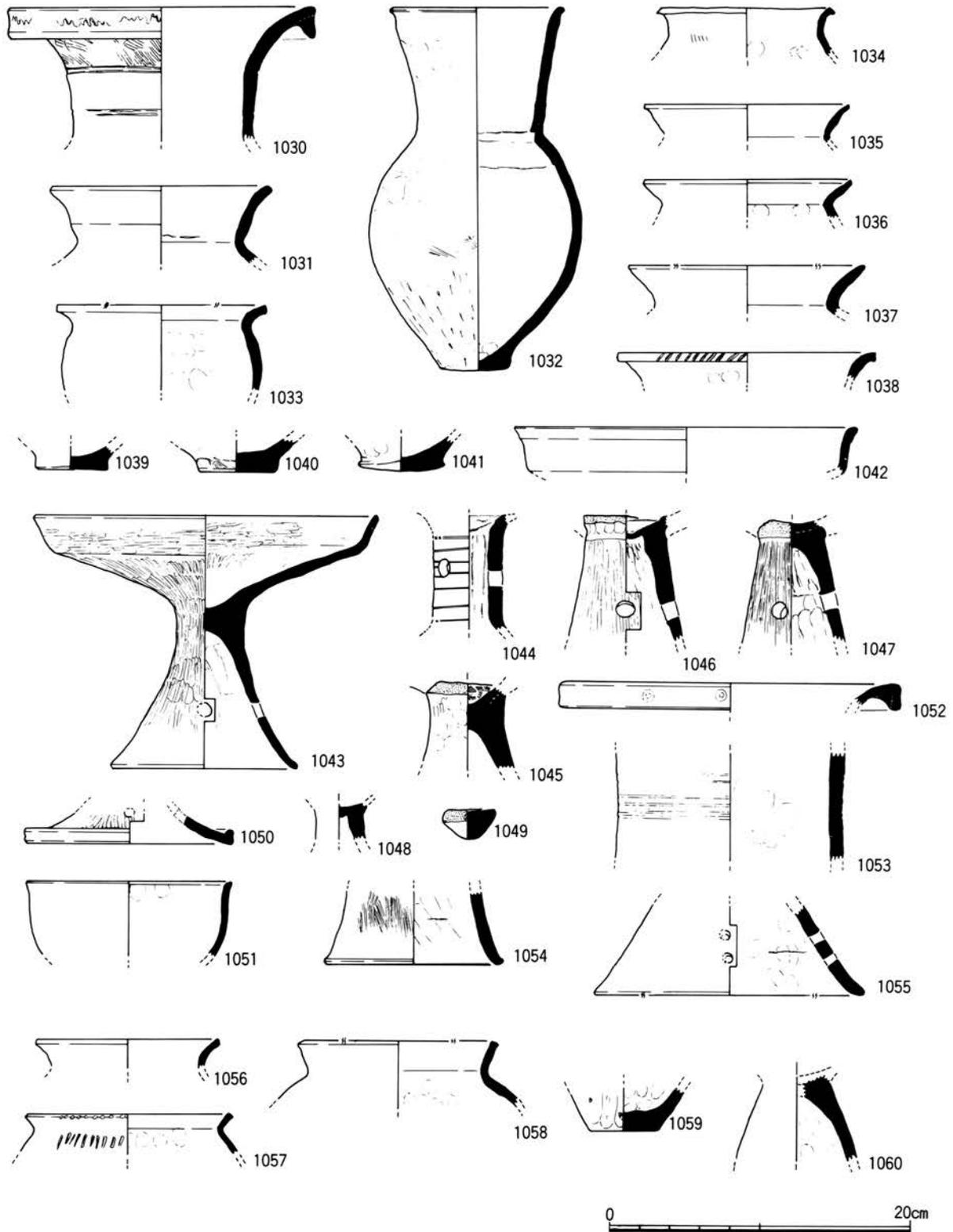


出土遺物実測図(四) 弥生土器

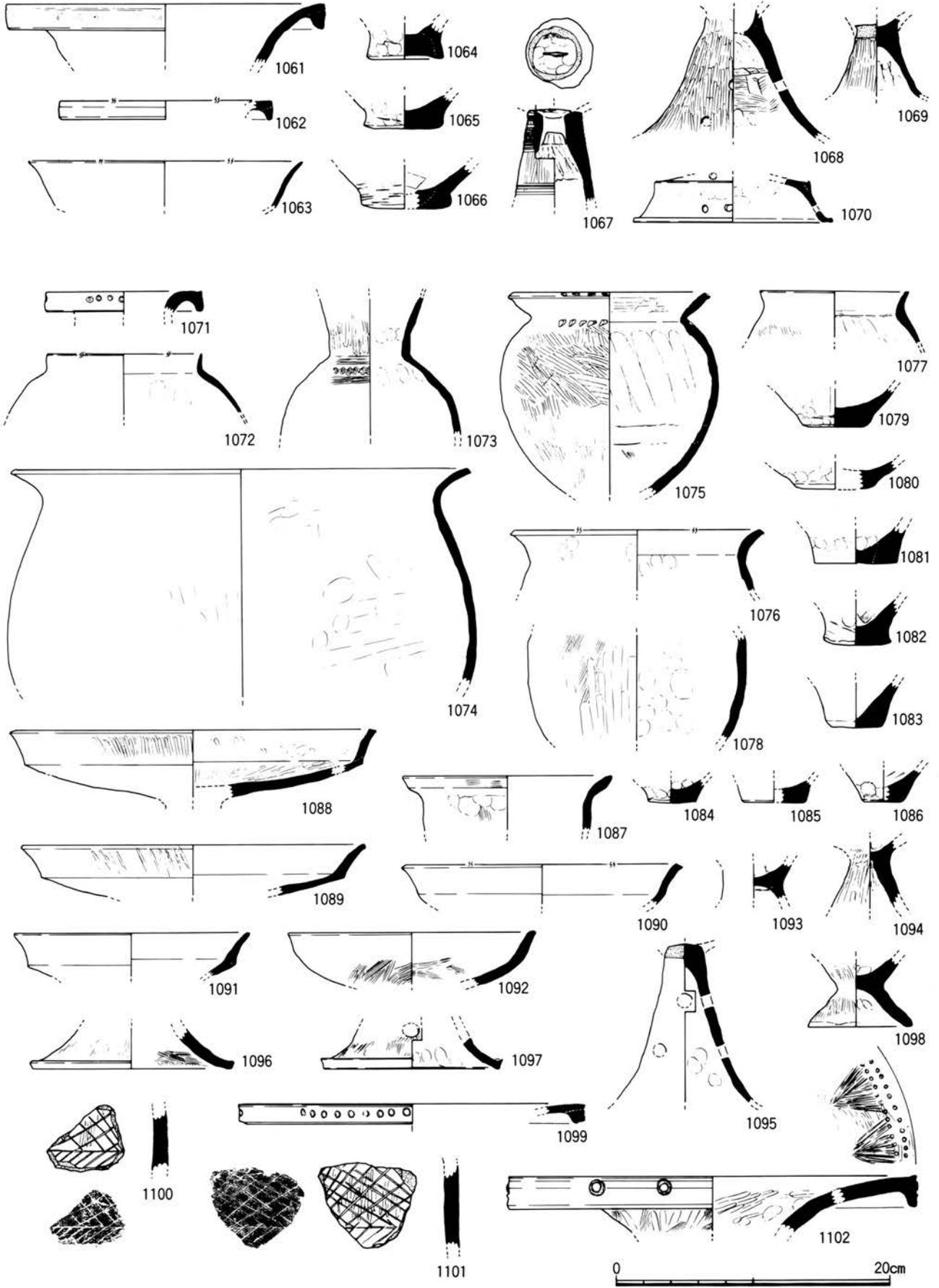


出土遺物実測図(26) 弥生土器

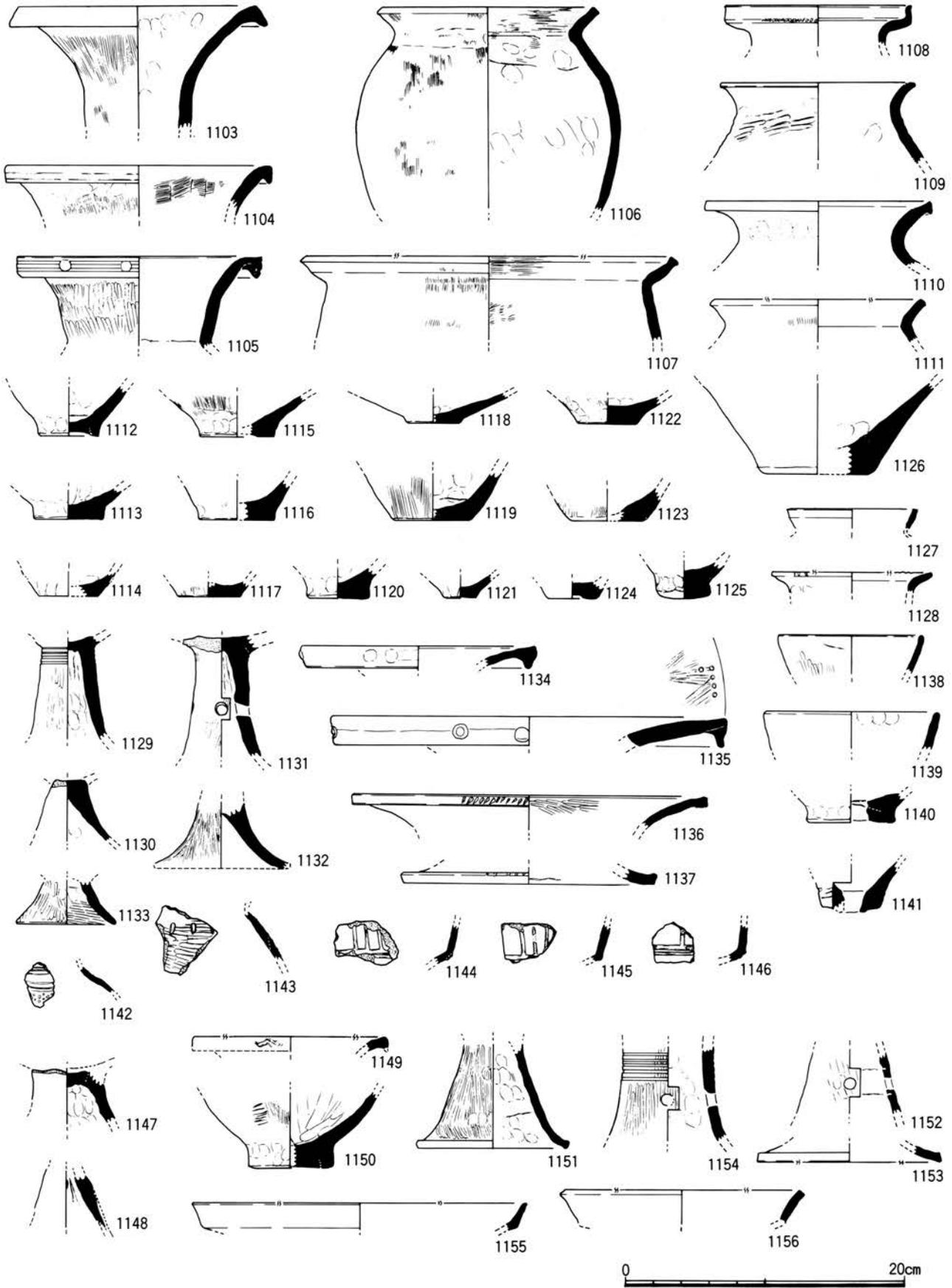




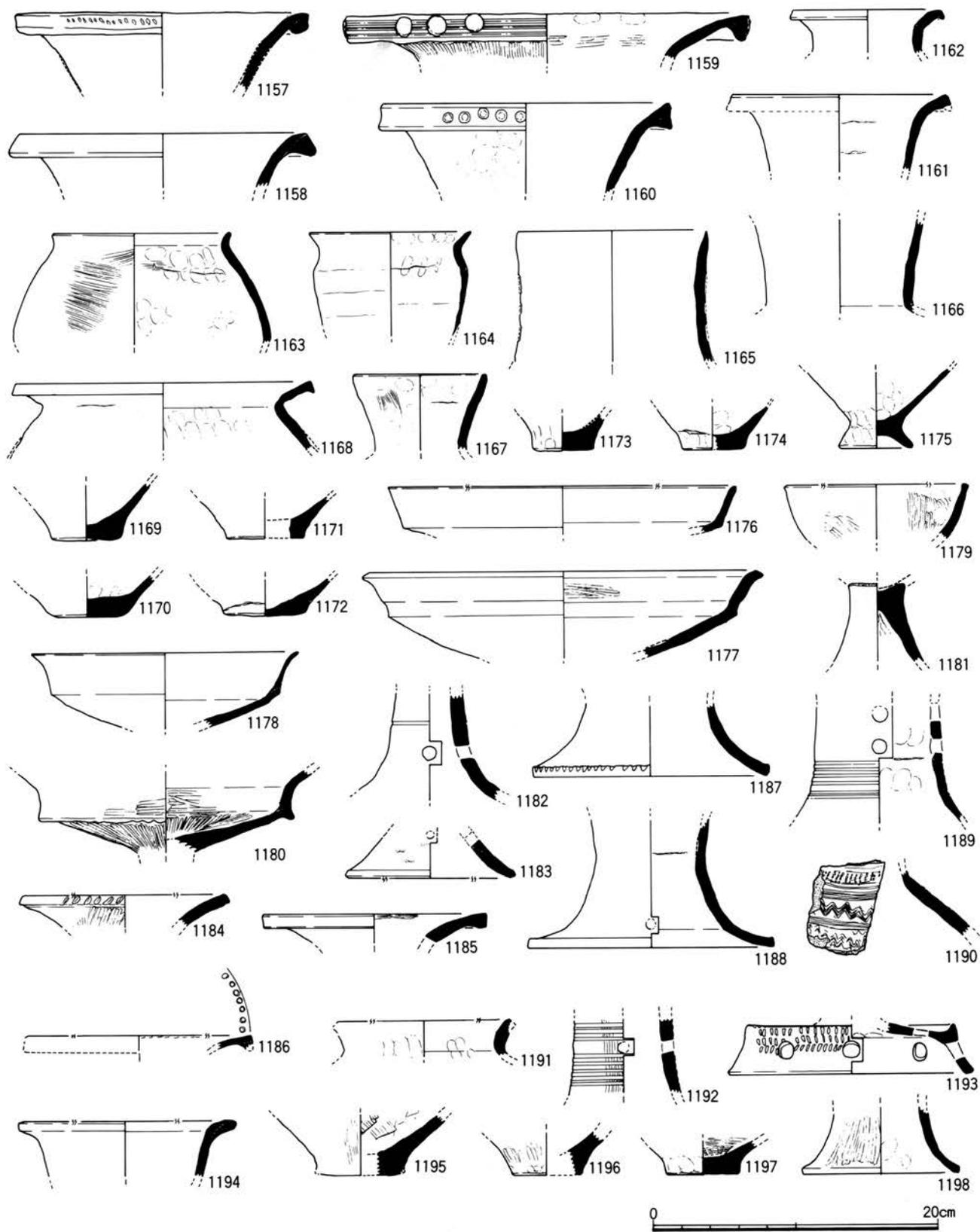
出土遺物実測図(28) 弥生土器



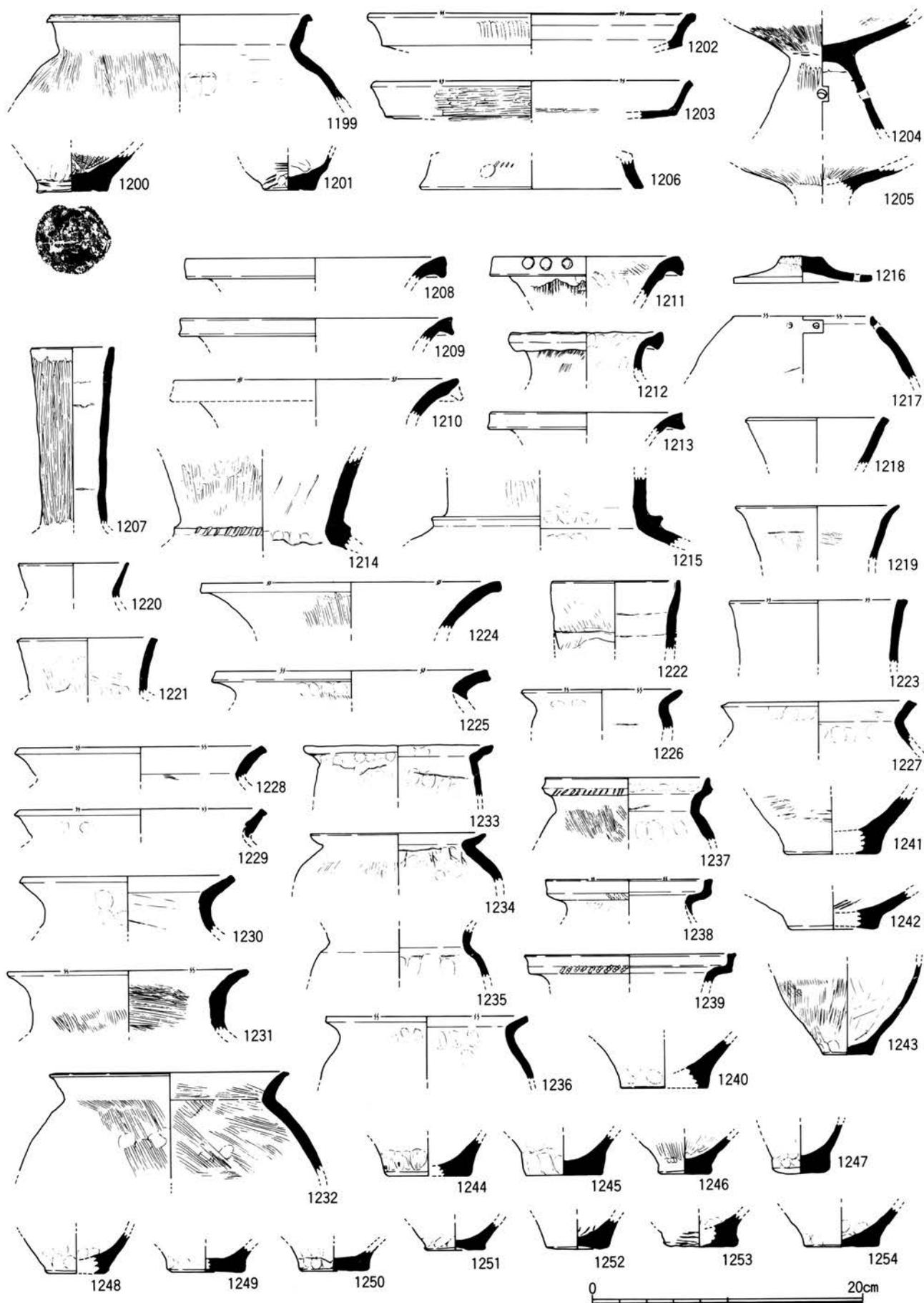
出土遺物実測図(29) 弥生土器



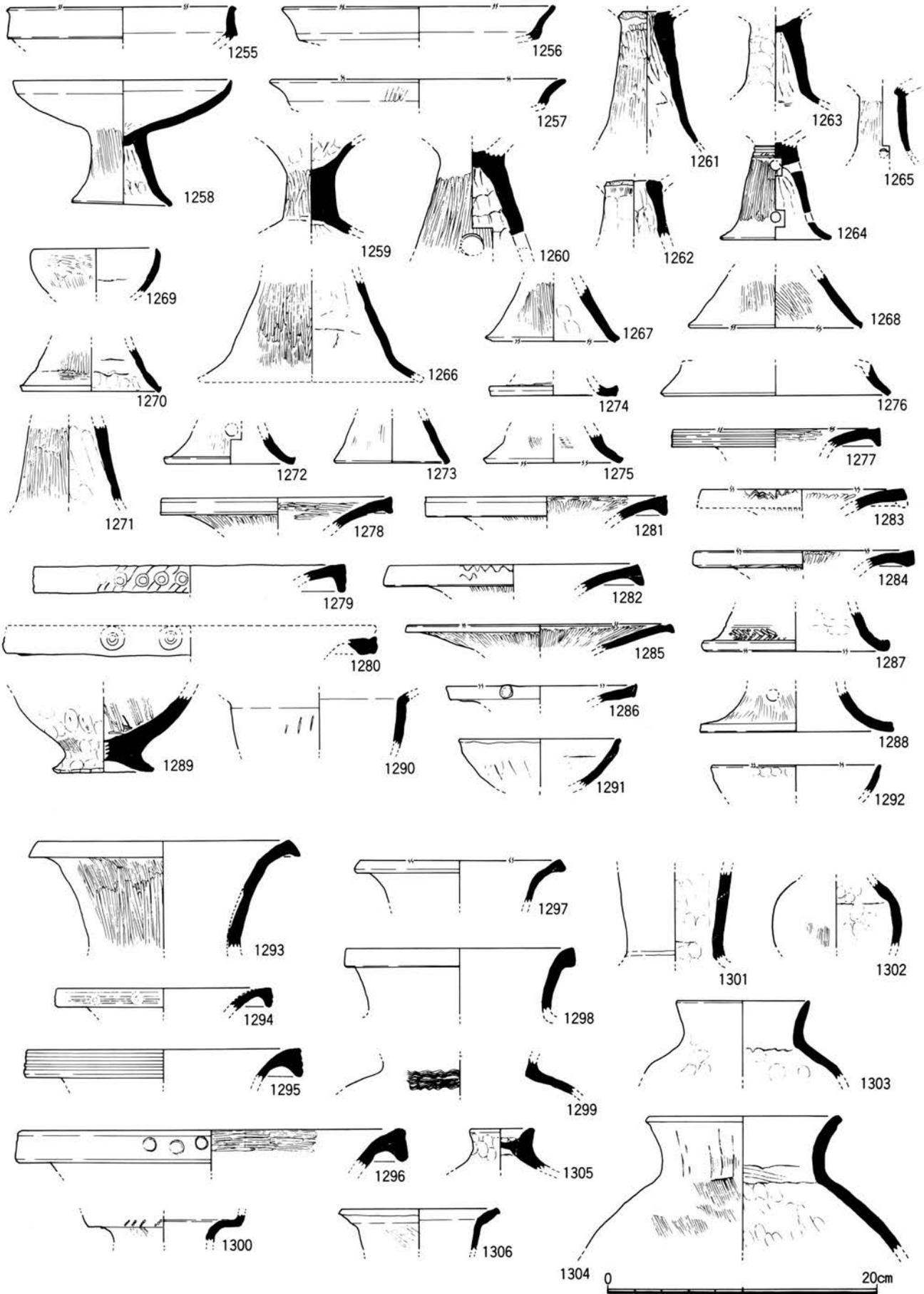
出土遺物実測図(30) 弥生土器



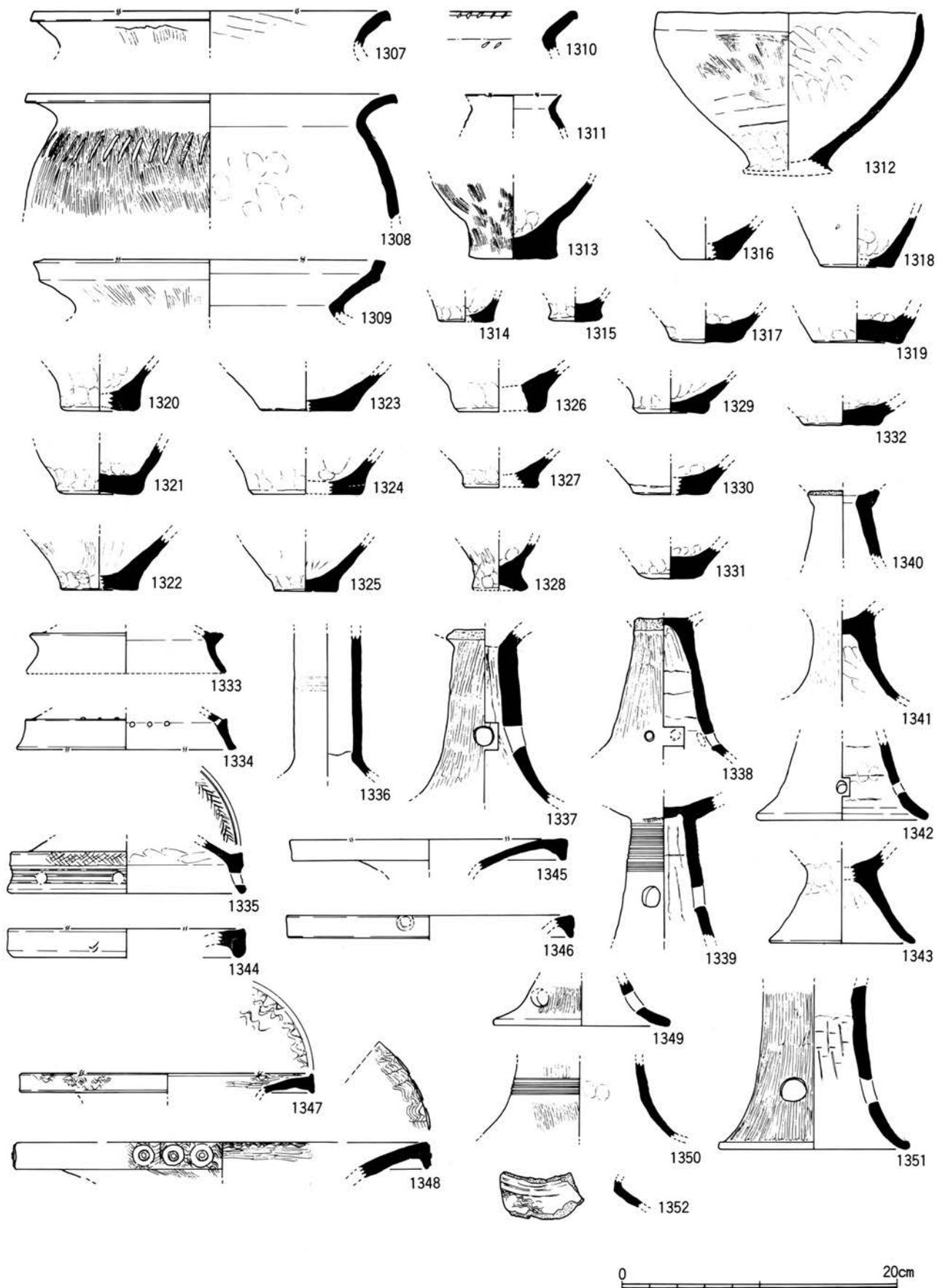
出土遺物実測図(31) 弥生土器



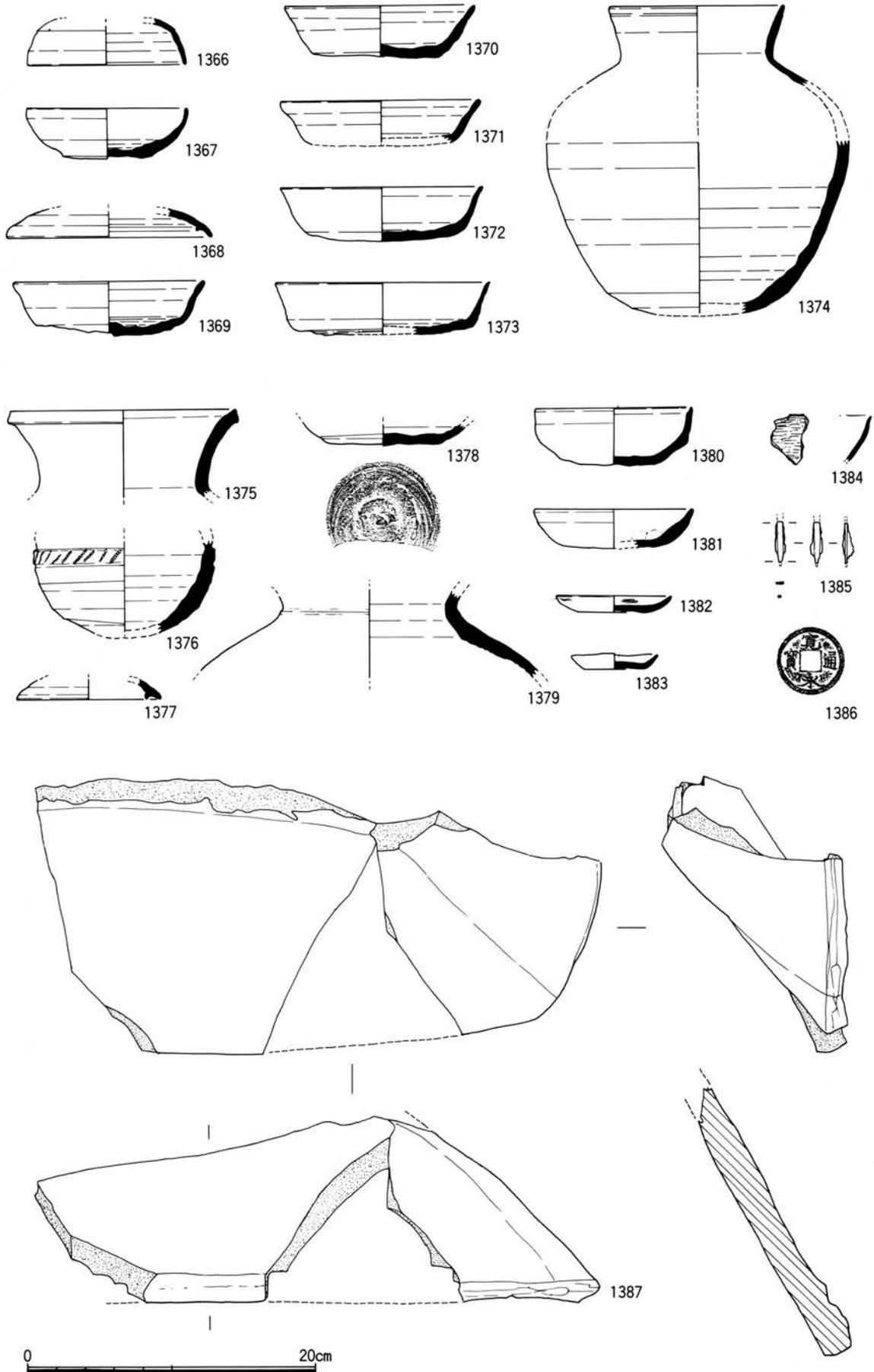
出土遺物実測図(32) 弥生土器



出土遺物実測図(33) 弥生土器



出土遺物実測図(34) 弥生土器



0 20cm

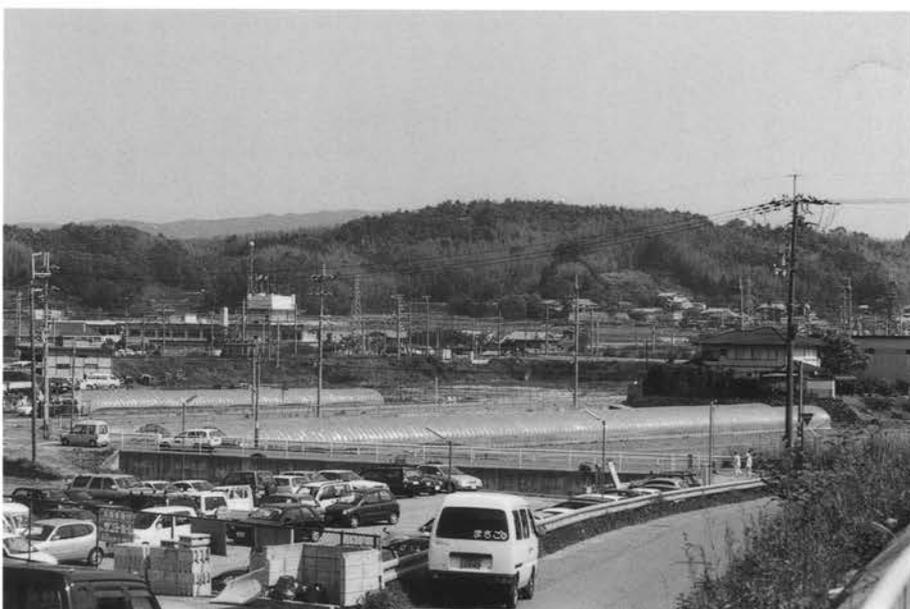
(1)調査地遠景(北西から)



(2)調査地遠景(西から)



(3)調査地遠景(北西から)





(1)第1次調査 調査地遠景(南東から)



(2)第1次調査 調査地全景(南から)



(1)第2次調査 調査地全景(東から)



(2)第2次調査 調査地全景(南東から)



(1)第4次調査 調査地全景(東から)



(2)第4次調査 調査地全景(北から)



(1)第5次調査 調査地全景(西から)



(2)第5次調査 調査地全景(北西から)



(1) 1 トレンチ全景(西から)



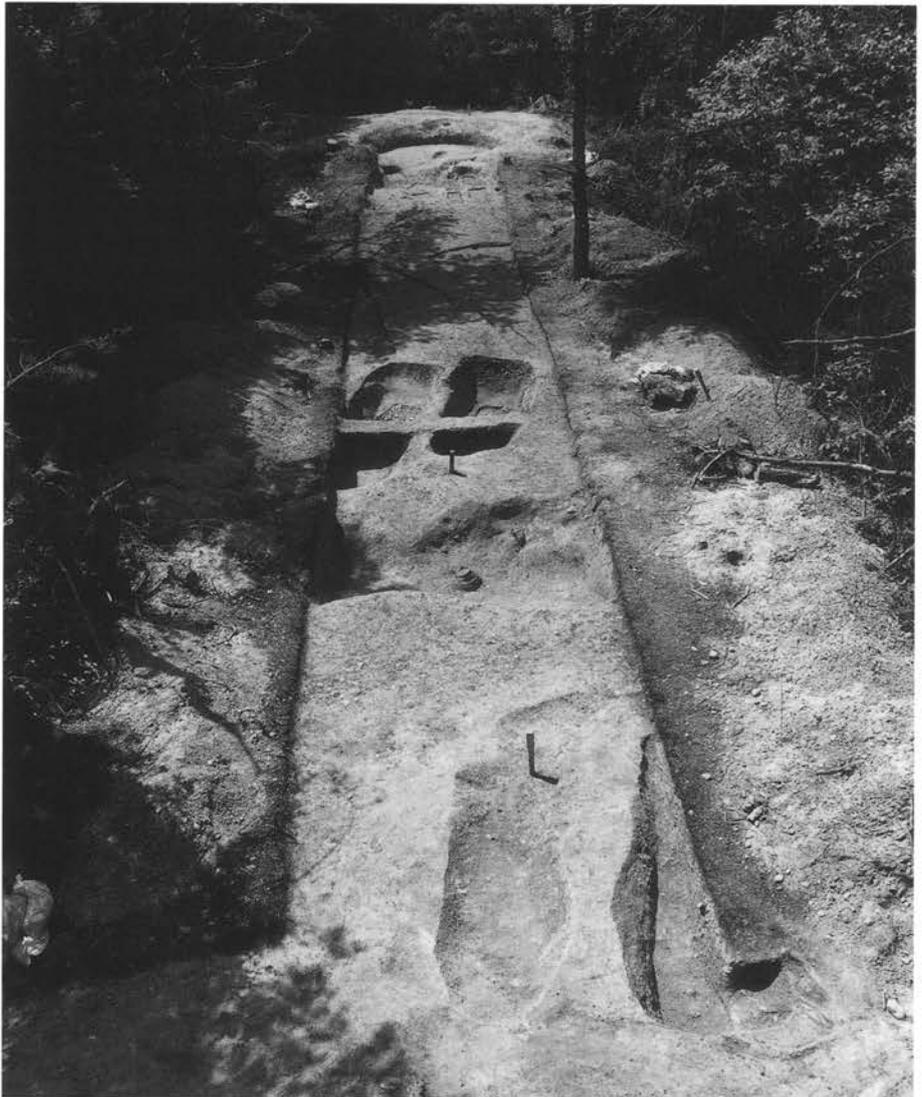
(2) 1 トレンチ全景(南西から)



(3) 1 トレンチ東端遺構検出状況
(南から)



(1) 2 トレンチ全景(北西から)



(2) 2 トレンチ方形台状墓 2
検出状況(南東から)



(1) 2 トレンチ区画溝 S D03 検出状況(北東から)



(2) 2 トレンチ埋葬施設 S X04・07 検出状況(北西から)



(3) 2 トレンチ埋葬施設 S X08・09 検出状況(南から)

(1) 3 トレンチ全景(南から)



(2) 4 トレンチ北半部全景
(南東から)



(3) 4 トレンチ南半部全景
(北東から)





(1) 8 トレンチ 竪穴式住居跡
S B09 検出状況(東から)



(2) 8 トレンチ 竪穴式住居跡
S B09 上層立石検出状況
(南から)



(3) 5 トレンチ 竪穴式住居跡
S B12 検出状況(北から)

(1) 9 トレンチ 竪穴式住居跡
S B 23、崖状地形 S X 53
検出状況(南東から)



(2) 9 トレンチ 竪穴式住居跡
S B 36 検出状況(東から)



(3) 9 トレンチ 土器溜まり
S X 37 遺物出土状況
(南から)





(1) 9 トレンチ 竪穴式住居跡
S B32検出状況
(中央ピット掘削前、北から)

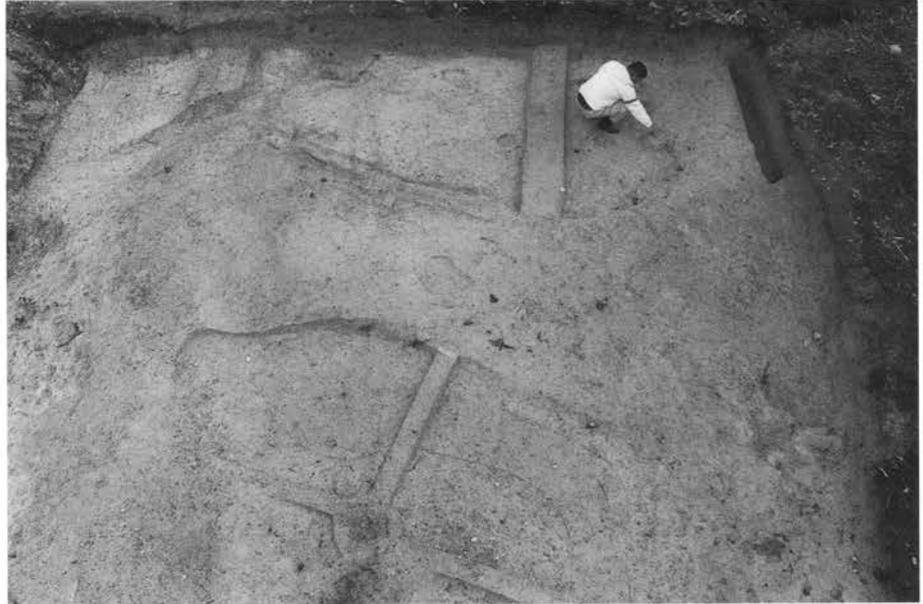


(2) 9 トレンチ 竪穴式住居跡
S B32検出状況
(中央ピット掘削後、北から)

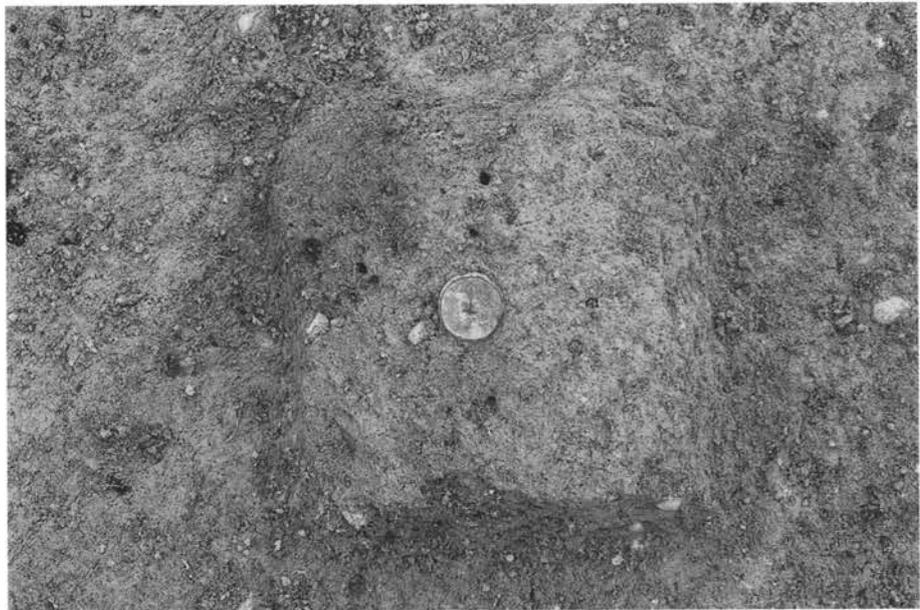


(3) 9 トレンチ 竪穴式住居跡
S B32中央ピット検出状況
(北から)

(1) 9 トレンチ 竪穴式住居跡
S B32 素文鏡出土位置
(北から)



(2) 9 トレンチ 竪穴式住居跡
S B32 素文鏡出土状況
(上が北)



(3) 9 トレンチ 竪穴式住居跡
S B33~35 検出状況
(北から)





(1) 9 トレンチ段状遺構 S X40
ほか検出状況(南東から)



(2) 9 トレンチ段状遺構 S X40
遺物出土状況
(南東から)



(3) 9 トレンチ竪穴式住居跡
S B52検出状況(北東から)



(1) 9 トレンチ溝 S D15 検出
状況(東から)



(2) 9 トレンチ溝 S D15 遺物
出土状況(南から)



(3) 13 トレンチ溝 S D15 遺物
出土状況(南から)



(1)10トレンチ全景(北東から)



(2)10トレンチ段状遺構 S X69
ほか検出状況(南から)



(3)10トレンチ段状遺構 S X69
ほか検出状況(東から)

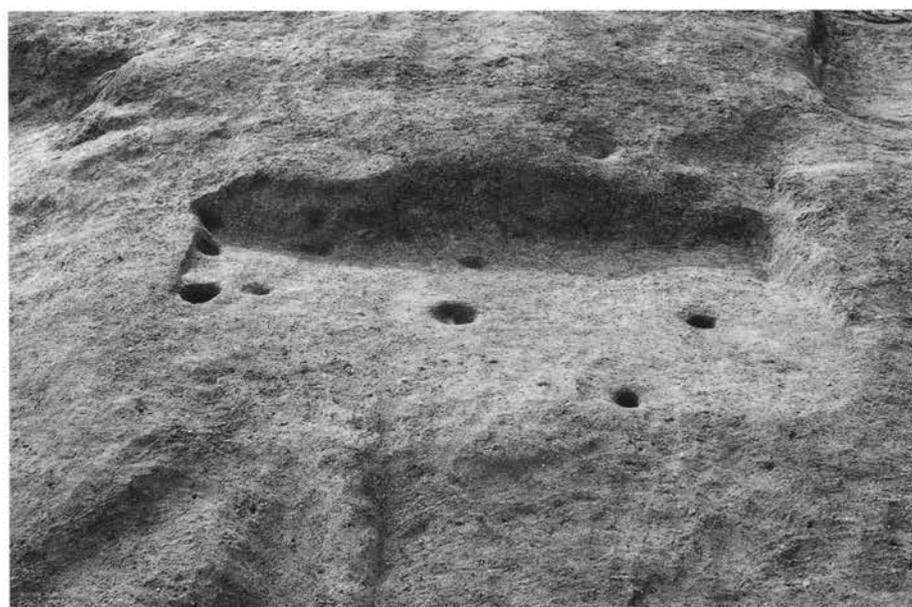
(1)10トレンチ竪穴式住居跡
S B69遺物出土状況
(東から)

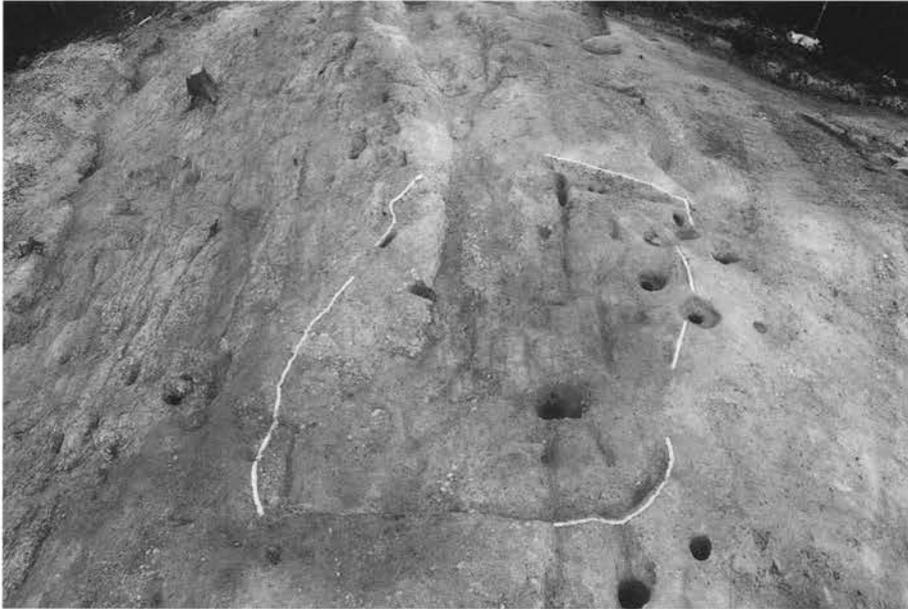


(2)10トレンチ竪穴式住居跡
S B69遺物出土状況
(東から)



(3)10トレンチ竪穴式住居跡
S B68検出状況(東から)





(1)11トレンチ堅穴式住居跡
S B60検出状況(南から)



(2)11トレンチ堅穴式住居跡
S B62検出状況(北から)



(3)11トレンチ段状遺構S X90
検出状況(南東から)



(1)11トレンチ堅穴式住居跡
S60・71検出状況(東から)



(2)11トレンチ堅穴式住居跡
S B61・71検出状況
(南から)



(3)11トレンチ段状遺構S X70
検出状況(東から)



(1)12トレンチ全景(北から)



(2)12トレンチ竪穴式住居跡
S B75検出状況(北から)



(3)12トレンチ竪穴式住居跡
S B76検出状況(西から)

(1)13トレンチ縦穴式住居跡
S B121検出状況(西から)

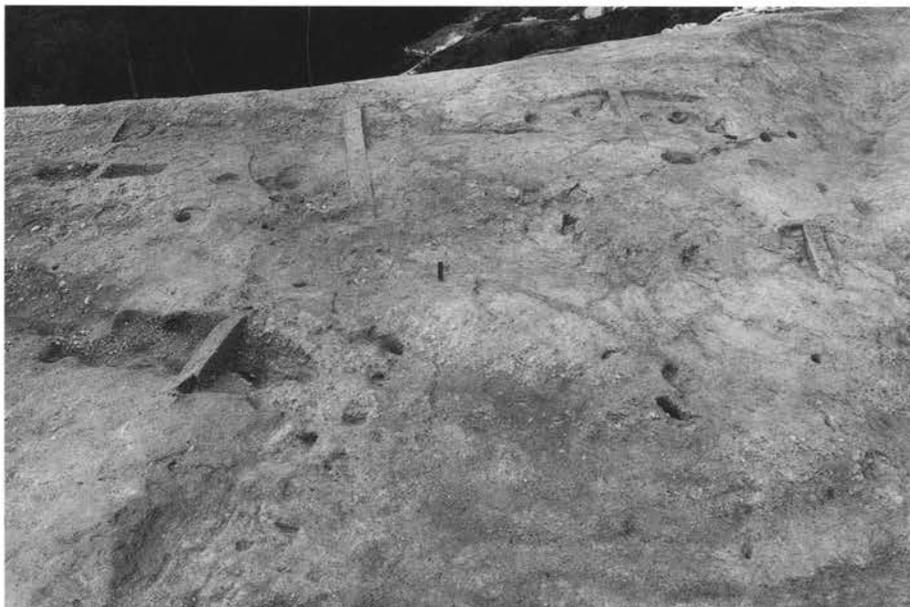


(2)13トレンチ縦穴式住居跡
S B123・124土層断面
(南東から)



(3)13トレンチ段状遺構S X126
検出状況(北から)





(1)13トレンチ段状遺構
S X 108~110検出状況
(南西から)



(2)13トレンチ段状遺構 S X 112
検出状況(西から)



(3)13トレンチ西端遺構検出状況
(東から)

(1)14トレンチ溝S D01検出
状況(南東から)



(2)14トレンチ拡張区全景
(北東から)



(3)15トレンチ溝S D21検出
状況(北から)





(1)15トレンチ竪穴式住居跡
S H03検出状況(北東から)



(2)15トレンチ竪穴式住居跡
S H06・07検出状況
(南から)



(3)15・16トレンチ分岐点付近
遺物出土状況(東から)

(1)16トレンチ土器供献遺構
S X05遺物出土状況
(北から)



(2)16トレンチ土器供献遺構
S X05遺物出土状況
(北西から)



(3)16トレンチ土器溜まり
S X04遺物出土状況
(東から)





(1)14トレンチ作業風景(南東から)



(2)15トレンチ調査前全景(南から)



(3)17トレンチ調査前全景(南から)



(4)20トレンチカンテキ出土状況(南から)



(5)22トレンチ土坑S K 18検出状況(北から)



(6)22トレンチ西側崖状地形検出状況(北から)



(7)25・26トレンチ全景(東から)



(8)24トレンチ全景(南から)



(1)23トレンチ全景(南から)



(2)29トレンチ全景(東から)



(3)30トレンチ全景(東から)



(4)31トレンチ全景(南東から)



(5)32トレンチ全景(南東から)



(6)33トレンチ全景(北東から)



(7)34トレンチ全景(北西から)



(8)35トレンチ全景(北東から)



(1) A地区全景(上が北)



(2) A地区竪穴式住居跡S B 201
検出状況(北から)



(3) A地区竪穴式住居跡S B 201・
202検出状況(東から)

(1) A地区土器溜まり S X 242
遺物出土状況(北から)



(2) A地区段状遺構 S X 205・
207・244検出状況(南から)



(3) A地区段状遺構 S X 248
検出状況(北東から)





(1)B 地区全景(上が西)



(2)B 地区平坦面 S X240ほか
検出状況(北から)



(3)B 地区竪穴式住居跡 S B213・
215検出状況(北から)

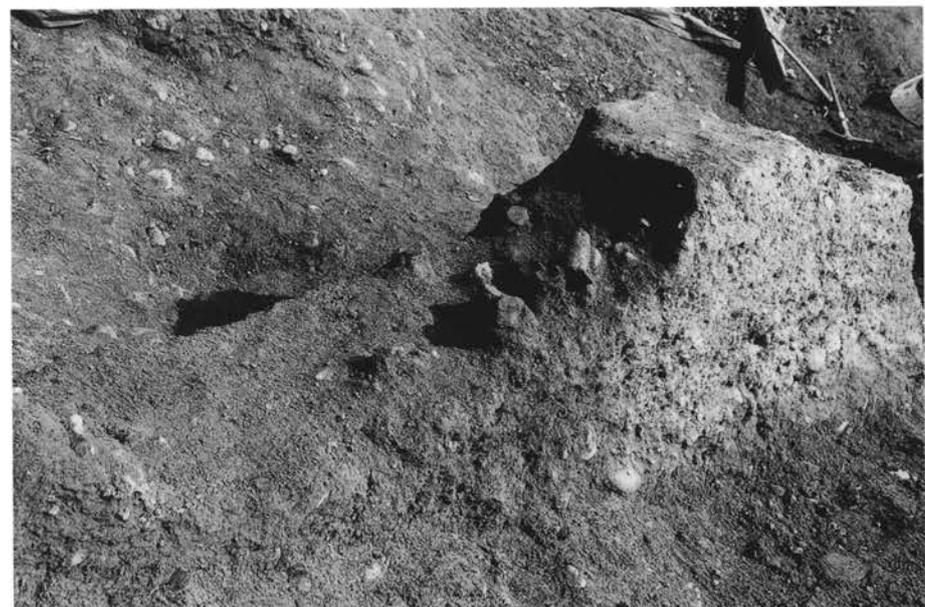
(1) B地区平坦面S X 238~240
全景(南西から)



(2) B地区平坦面S X 238検出
状況(南から)



(3) B地区平坦面S X(セクションA)
遺物出土状況(南西から)





(1) B地区平坦面S X 238~240全景(東から)



(2) B地区セクションA土層断面(北東から)



(3) B地区セクションB土層断面(南西から)



(4) B地区セクションB平坦面S X 238土層断面(南西から)



(5) B地区セクションC平坦面S X 239土層断面(南から)



(6) B地区平坦面239掘り込み上端(南西から)



(7) B地区セクションD土層断面(北から)



(8) B地区セクションE土層断面(北から)

(1) C地区全景(上が東)



(2) C地区全景(北から)



(3) C地区竪穴式住居跡S B235
検出状況(北から)





(1)C地区竪穴式住居跡 S B 236
遠景(北から)



(2)C地区竪穴式住居跡 S B 236
検出状況(北東から)



(3)C地区竪穴式住居跡 S B 236
遺物出土状況(北から)

(1)D地区全景(上が東)



(2)D地区全景(南西から)



(3)D地区溝状遺構 S X 262
検出状況(南西から)





(1)E地区全景(上が東)



(2)E地区段状遺構 S X 252検出
状況(東から)



(3)E地区段状遺構 S X 253検出
状況(東から)

(1) E地区段状遺構 S X 256
検出状況(北西から)



(2) F地区全景(北から)



(3) F地区作業風景(西から)





(1)片山3号墳全景(北西から)



(2)片山3号墳主体部検出状況
(南東から)



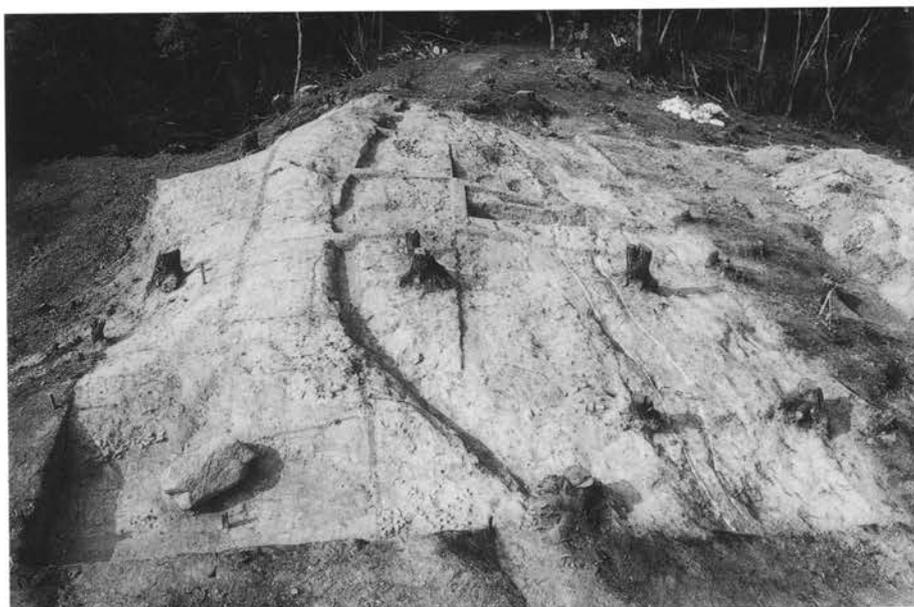
(3)片山3号墳主体部完掘状況
(南東から)



(1)片山4号墳全景(東から)



(2)片山4号墳主体部礎床断面
(西から)



(3)片山1号墳トレンチ全景
(南から)



(1)片山5号墳全景(南から)



(2)片山5号墳主体部全景
(南から)



(3)片山5号墳礫床検出状況
(西から)



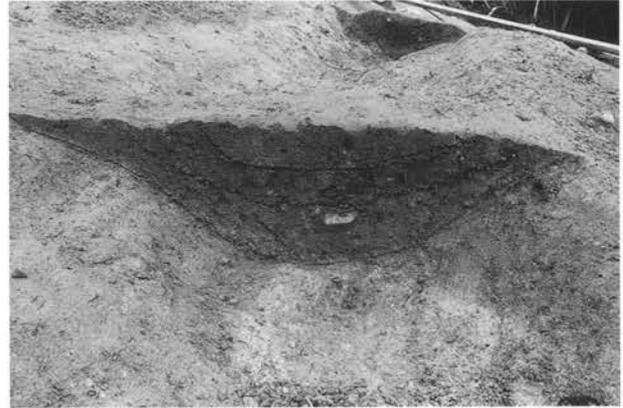
(1)片山3号墳周溝土層断面(南から)



(2)片山3号墳周溝土層断面(北東から)



(3)片山4号墳周溝土層断面(南西から)



(4)片山4号墳周溝土層断面(南から)



(5)片山5号墳周溝土層断面(東から)



(6)片山5号墳主体部石材散乱状況(西から)



(7)片山5号墳攪乱土中炭層検出状況(西から)



(8)片山5号墳遺物出土状況(西から)



(1)谷状地形 S X20検出状況
(東から)



(2)礫充填土坑 S X49検出状況
(北から)



(3)礫充填土坑 S X49土層断面
(北から)

(1) 11 トレンチ焼土 S X91 検出
状況(北から)



(2) 2 トレンチ陣地遺構 S X02
検出状況(北西から)



(3) 2 トレンチ陣地遺構 S X06
検出状況(南東から)





1



5



3



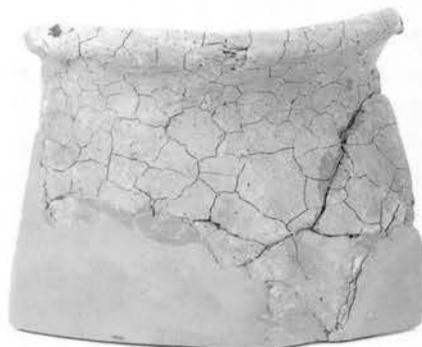
19



55



9



57



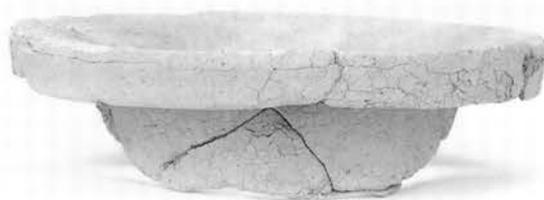
75



65



99



108



102



123



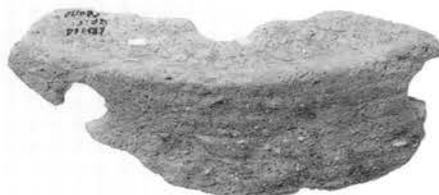
114



182



139



205



124



193



197



226



235



227



250



253



313



299



293



264



291



306



354



367

368



330



378



356



387



457



487



508



511



526



530



502



503



504



505



506



507

出土遺物(6)



525



544



535



576



546



590



636



693



640



678



711



749



802



773



870



810



809



816



820



837



822



872(脚部)



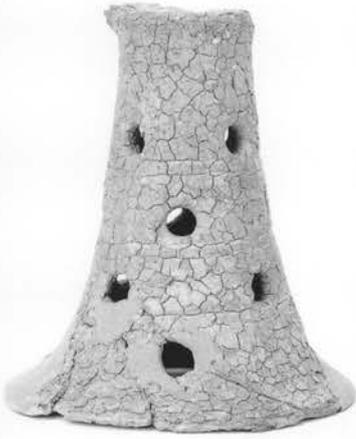
910



911



899



881



882



989



949



914



894



964



1159



962



978



991



990



973



1023



1030



1043



992



1032



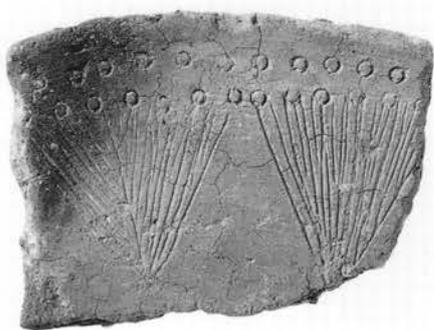
1207



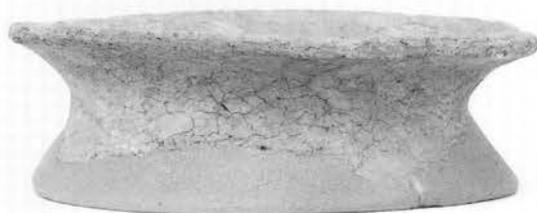
1101



1105



1102



1110



1237



1180



1216



1304



1312



1337



1351



1372



1380



1374



1362

報告書抄録

ふりがな	きづしろやまいせき							
書名	木津城山遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告書							
シリーズ番号	第32冊							
編著者名	伊野近富・戸原和人・伊賀高弘・筒井崇史							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone 075(933)3877				
発行年月日	西暦 2003 年 3 月 28 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
きづしろやまいせき	きょうとふそうらくぐんきづちようおおあざきづこあざかたやま							
木津城山遺跡	京都府相楽郡木津町大字木津小字片山	26362		34° 43' 43"	135° 49' 59"	19980617 ～ 20020925	10,400	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
木津城山遺跡	集落 古墳	弥生時代 古墳時代		竪穴式住居跡・段状遺構・平坦面・溝・方形台状墓 古墳		弥生土器・鏡・土製品 須恵器		

京都府遺跡調査報告書 第32冊

平成15年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)